神無の鳥

紫焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神無の鳥

【Ｎコード】
Ｎ７７２９Ｌ

【作者名】
紫焔

【あらすじ】
風を感じた瞬間に、全てが終わった。
激痛の中見たのは、冷徹な金の瞳。
そうして、意識は闇に沈み全ての感覚は閉ざされた。

第一話（前書き）

しょっぱなから物凄い痛い表現がありますので、ご注意ください。

第一話

ふわり、と風を感じた。
それと同時に胸を貫く熱く、冷たい感触。
「あっ……？」
思わず、声を零しながら胸を見降ろす。
豊かな胸の谷間から、鋭利に輝く諸刃の切っ先が覗いている。
認識すると同時に、激痛が全身を駆け抜ける。
あり得ない程の痛みに全身から冷えた汗が吹き出し、涙腺が壊れた様に涙が溢れだす。
何が起こっているかなんて、まったく理解できない。
「――――っ！　――――！」
必死で声を上げようとするが、出せない。
震えながら両手を持ち上げ、刃に触れて見ようとするがその前に後ろの人物は行動を起こす。
刃を支点に、体が持ち上げられる。
冷たい刃が肉を裂き、骨に触れる。
神経を直接触られたかのような激痛が再び駆け抜け、体がビクンと震える。
「%$？　@＊&%＃$」
刃の持ち主らしき男が、言葉を放ったのは聞こえた。
だが、意味を解する事が出来ない。
そんな事よりも、ざりざりと骨を傷つける刃の痛みに気が遠くなりそうだ。
この痛みで、理解した。
自分が何故か判らないが、殺される事を。
瞬間、喉をせり上がる熱い塊。
飲み下す事を選択する間もなく、口から音を立てて飛び出す。
手足の末端から痺れに似た冷たさを感じながら、虚ろに前を見る。

轟音を上げてぶつかり合いを繰り返す鎧を着た人間達と、人間の形をした何か。
そして酷く綺麗な、空の青。
不意に、視界が横にぶれる。
浮遊感と同時に何かに激突する感覚があったが、もう痛みは感じなかった。
胸に刺さっていた冷たい刃の感触は無く、今は虚ろな穴しか感じない。
痛みで意識を保ったまま、急速に迫りくる暗闇に抗い目を動かす。
自分を殺したモノを確認しようとする様に。
その気配に気が付いたのか、視線の先の人間が振り返る。
褐色の肌をし、耳が木の葉のように細長い男性であった。
全体的に痩身で、彼が手にしている大きな剣は到底振るえそうもない様に見える。
だがしかし、彼は片手で軽々と振り血を払っている。
闇の中に在れば、姿を見分けるのが不可能であろうと言う程に黒い鎧と服を身に付けている。
その髪もまた、黒。
夜闇に紛れる事を目的としている様な姿の彼の瞳は、唯一己の存在を主張する様な色だった。
冷徹に輝く、金の瞳。
何の感情も抱かせぬ色を浮かべながら、彼はゆっくりと歩み寄ってくる。
「&%&#@*……*+‥@&%$:;‥」
語りかけてくる声は聞こえるが、言葉の意味など分からないし答えるだけの力も気力もない。
既に死は決定的で、抗う事を許さぬ力で意識を闇へと導こうとしている。
だからこそ、声は出なくてもと唇を小さく動かした。

――――　かえりたい

自分の知る場所ではないと明確に分かったからこその、心からの呟き。

その後はもう、視界も意識も暗闇へと覆われてしまい何も判らなくなった。

第一話（後書き）

此方は、自身のサイトの方でも連載を開始した突発的な小説です。
プロットも何もありませんが、頑張って書き上げられたらいいなぁと思います。
私の厨二病が酷くなったせいで書きだした小説ですので、ダメそうでしたら何も言わずそっとブラウザバックしてくださると嬉しいです。
それとは別に、誤字脱字や文章のおかしな所など指摘していただけると大変嬉しいです。
では、楽しんで頂けると大変嬉しいです。

第二話

ふわり、と風を感じた。
幾度も幾度も頬を、顔を、体を撫でる風。
目覚める事を催促する様なその感触に、彼女は渋々と目を開ける。
とたん、目の前に広がるのは日を透かした梢だった。
光を遮り、風に揺れる様に葉の擦れる音が響く。
「綺麗……」
小さく呟くと、応えが返ってくる。
「うん、とても綺麗だね」
幼い子供の声音に、彼女はゆっくりと顔を横に向ける。
彼女のすぐ隣には、銀色の髪を短く刈った金色の目をした少年が座っていた。
少年は優しい笑顔を浮かべて、彼女を見降ろしている。
「ここ、どこ？」
彼女は少年に問いかけると、彼はほんの少しだけ困った様に眉根を寄せる。
「世界を支える、大樹の木陰」
少年の言葉に、彼女はふうんと頷く。
世界を支えると言われても、彼女は良く理解できない。
「日本じゃないの？」
取り敢えず、今一番聞きたい事を再び問いかける。
「うん」
少年は一つ頷いて、肯定する。
「……夢じゃ、無いの？」
彼女の三度の問いは、震えている。
「うん」
少年は、やはり困った様な表情を浮かべて頷く。
「嘘だ！」

彼女はその肯定を即座に否定する。
「だって、私生きてるじゃない！　あの時、あの黒髪金目の男に殺された筈なのに……こうして生きて、君と話してるじゃない！」
体を起こし、少年に詰め寄る彼女。
突然の彼女の行動に、少年は驚く様子も無くうんと頷く。
「ここは、死者の魂が集まる場所。世界を循環し、もう一度世界へと旅立つまでの時間を過ごす場所」
少年はそう言って、ほらと横を見るように促す。
彼女はその言葉に従い、視線を動かす。
少年が促した先には、大きな湖があった。
その湖の上を乱舞する、蛍の様な儚い光。
しかし、数は無数で眩しい位に見えた。
「あの湖は、祝福の泉とも知恵の泉とも呼ばれて居るんだ。その上を浮遊しているのは、この世界の全ての命」
少年は優しく、穏やかな声音で説明する。
「人間や亜人間、妖魔と呼ばれる物。そのありとあらゆる命がここに還り、再び世界へと旅立って行くんだ」
少年の言葉に、彼女はその厳かで神聖な光景に見惚れる。
様々な色を纏った光は美しく瞬き、何故か目頭が熱くなる。
「だけど、君だけはあの流れに乗る事は出来ないんだ」
静かに、少年は言葉を続ける。
彼女は弾かれた様に、少年を見る。
「君は、この世界の人間じゃない。それは、自分で分かっているよね？」
少年の問いに、彼女はゆっくりと瞬きをする。
朦朧とした意識の中で見た、中世の騎士が着ている様な鎧を纏った人々と、自身が知っている獣よりも二回りほど大きな獣。
人の姿をした、緑の肌をした何か。
そして何より、木の葉の様な耳をした黒髪金目の男性。
あんな人間は、彼女の知る世界では物語の中にしか存在しない。

しかし、あれは夢なのではないのかと言う気持ちが、彼女にあった。

「君は、死んだんだ。人間と亜人、妖魔達の戦争の真っただ中に出現してしまい、アールヴに殺されたんだ」

少年はハッキリと、彼女に死した時の情景を告げる。

「だって……それじゃ、如何して私はこうして私として君と話を出来るの？　死んでいるなら、光の玉になって無いとおかしいじゃない」

湖の上を乱舞する光を指しながら、彼女は少年に言い放つ。

「あの流れに乗れないから、君は君のままなんだ」

少年は彼女の言葉に、そう言葉を返す。

「え……？」

きょとん、と彼女は少年を見る。

「あの流れに乗る為には、自我の無い純粋な塊にならなくては駄目なんだ。普通は、死んだ時点でそうなる。だけど……君は君のままあの湖に流れ着き、僕が見つけてここに寝かせたんだ」

少年はそう言って、彼女に困った様に告げる。

「ごく稀に、君の様に異世界の人間が現れる事がある。その時もこうやって寝かせていたけれど、皆意識を取り戻す事も無くこの大樹に溶けていった」

彼女は、少年の言葉に大樹を見上げる。

この世界を支えていると言う立派な大樹は、変わらずに梢を鳴らしている。

「異世界人の知識や存在を吸収し、この世界を支える大樹は大きくなるんだ」

少年の一言に、彼女は思わず腰を浮かす。

それを見た彼は、くすりと笑う。

「大丈夫だよ。君は、大樹に溶ける事も無く目覚めたんだから」

少年の安心させる様な言葉に、彼女はほっとした表情を浮かべる。

「でも、大樹に溶けるか流れに乗った方がきっと幸せだと思う」

ゆっくりと、少年は呟く。
「流れに乗れず、大樹にも溶ける事が出来なかったという事は……君にとって喜ばしい事じゃないんだ」
少年の言葉に、えっと声を上げる彼女。
「如何言う事？」
彼女の問いに、少年は立ち上がる。
「右手を」
左手を差し伸べた少年は、彼女の右手を求める。
彼女は求められるまま自身の右手を彼の左手に重ねた瞬間、額に熱を感じた。
ジワリとした熱は、すぐさま燃えていると錯覚するような熱さになる。
眼を見開き、少年の左手をきつく握りしめ背を反らす。
額の熱は全身へと広がり、駆け巡る。
熱は徐々に痛みへと変化し、息をする事すら困難になる。
ただ、痛みだけが知覚する全てになり視界さえ歪み機能を果たさない。
不意に、少年の声が言葉を紡ぎ出す。
「君は、僕と同じ『神無の鳥』。神と世界の庇護を受けなければ生きていけない獣」
神と世界の違いは、不思議と理解できた。
神とは世界の最初に生まれた、力ある者だ。
彼らが空を作り大地を作り、形を整えた。
その後は世界の一角に己の居場所を作り、人の世界と切り離した事で神秘性を保っている存在。
人間や亜人達の信仰心を受けて、その力を増やしていく事が出来る者の総称。
世界とは、神も人も悪魔も全て受け入れ容認するモノ。
魂の流れを作り大樹に眠り、全ての意識を夢として見るモノ。
世界は混沌、神は秩序。

『神無の鳥』とは、力のある狭間のモノ。
世界に溶け切る事も出来ず、神になる事も出来ない存在。
「異世界人にして『神無の鳥』」
少年の言葉が響くと同時に、右手が解放されその場に崩れる様に体を横たえる彼女。
「信じたく、無い。けど……」
呟く彼女の隣に、少年は腰を降ろす。
「現実だよ」
優しく響く声は、無情に彼女の耳朶を打つ。
その言葉に肩を揺らし、彼女は唇を噛みしめる。
小さく体を震わせ、顔を伏せてしゃっくりを上げる。
すすり泣きを始めた彼女の頭を撫でながら、少年は魂の流れを見詰めている。
「君は、祝福と知識の湖から浮かんできた。だから、今僕が言った事全て。地上や神界、魔界がどんなものかも知っているよね」
少年の問いかけに、彼女は小さく頷く。
人が死ぬと、自我を洗い流す為に湖から浮かんでくる。
洗い流された自我は知識と成り湖を漂い、形を持った者へと吸収される。
「それで、君はどうするの？　僕の様に、ここでずっと魂が流れて行くのを見ている？　いつか、この大樹と溶けあえる事を信じて」
少年の言葉に、彼女は小さく頭を振る。
「ここは確かに綺麗だけど……静かすぎて嫌」
幼子の様な声音で、彼女告げる。
「それじゃあ、地上へ戻る？」
少年の問いに、彼女は口を閉ざす。
現在進行形で、地上は人と妖魔が小競り合いを繰り返していた。
しかも、人が妖魔と手を組み他国へと攻めこむ事もある。
人間の国同士でも戦を始める事もある程、群雄割拠な世界情勢。
何かの拍子で異世界へと落とされ、速攻で殺されてしまった事を

考えても行きたいとは思えない場所だ。
しかし魔界などはもっと酷い為、行って五体満足で居られる自信もない。
神界は神界で、『神無の鳥』が行けば良い様にこき使われる事が目に見えている。
それぐらいで在れば、かなり怖くて不自由な目に合わされると知っていても地上の方がまだマシなのかもしれない。
ここに居れば、少年と二人きりで魂の流れを眺めて時間が過ぎるだろう。
何の苦楽も無く、ただただ穏やかで静かな時間。
しかし、それは生きていると言えるのだろうか？　と彼女は思う。
だからこそ、彼女は選んだ。
「地上に、戻る」
本当は怖い。
でも、同族だと言う彼と共に自我が薄れるのを待つのは嫌だと感じるのだ。
それでは、死を待つだけの不治の病人と変わらない。
己がまだ生きていると思えるのであれば、少しでも良いから行動したいと思ったのだ。
「うん、わかった」
少年は嬉しそうに、どこか眩しいモノを見る様に笑う。
「それじゃ、最後に自己紹介するね」
彼女は、体を起こして立ち上がる。
真っ直ぐに、少年を見つめて口を開く。
「私は、志希。藤原志希」
彼女の言葉に少年はしばし考えた後、ふっと笑顔になり告げる。
「僕は、アルト。そう、アルト！」
とても嬉しそうなその表情に彼女、志希も笑顔で頷いた。

第二話（後書き）

この、アルト少年が中々名前を言わなかった理由はきちんとあるんですが、それを幕間として書くべきか悩んでおります。
あんまり長い話しじゃないと思うので……でも、書いた方が良いのかしら。

第三話（前書き）

いきなりですが、グロ注意。
また、世界設定を織り交ぜながらお話を構成しておりますのでうざったいかもしれませんが、スルーしてください。

第三話

互いに自己紹介をした後、アルトが志希を地上へと戻してくれた。
一人でも地上へと戻る事は出来るのだが、余計な力を使って疲れるよりはとアルトが送ってくれたのである。
そして、地上に戻った志希が最初に見た物は、血に塗れた自身の死体だった。
顔の肉や柔らかな部分は全て噛みちぎられ、肉と骨を露出させている。
虚ろな眼窩で虚空を睨み、仰向けに寝かされた腹に詰まっていた臓物と肉が引きずり出されていた。
見るからに、獰猛な肉食獣に食い荒らされた死体である。
自身が死に、世界の起源とも言える場所での『神無の鳥』への覚醒。
時間としては二時間も経っていないと言うのに、死した肉体は動物の糧となっていた。
志希はそんな自分の死体に対する悲しみと、あまりの凄惨さに胸が悪くなる。
ゆっくりと茜色に染まる空に気が付き、志希は小さく嘆息する。
魂の状態のまま世界を見て回る事も出来るが、肉を纏っていた方が何かと都合が良い。
魂魄のままだと、死霊術師に捕まる可能性もあるからだ。
無論、やすやすと捕まったりはしないだろうが、変な輩に目を付けられるのは勘弁願いたい。
まして、異世界人で『神無の鳥』などと言う珍しい種族である以上、用心するに越したことはない。
『神無の鳥』は混沌に溶けきらず、神にも成れない狭間のモノ。
しかし、人間や精霊達からすれば膨大な力を内包した存在には違いないのだ。

その力故に神々に庇護され、世界に庇護される存在。
『神無の鳥』である事を知った魂は、それぞれ自身の往く道を決めて来た。
アルトは世界の傍で魂の流れを見守り、異世界人と言う異物を直接大樹に与える役目。
それ以外のほとんどが神界へ行き、神々の末席に加えられるべく努力をしていたと言う。
実際に神としての地位を得た『神無の鳥』も居るが、地位を得た瞬間に狭間のモノではなくなる為、以降の情報は入ってこない。
そして、ほんの一握りは地上へと戻り、世界を歩いたらしい。
彼らの殆どは、『神無の鳥』の力を物に封じる事で、人として生きて死んだ。
その記憶は、全てあの湖にあった。
自分もそうするべきなのだろうかと、志希は考える。
だが、何れ封じるモノであろうとも、今の志希にとっては必要な力だ。
この世界の知識は全て、魂に浸み込んでいる。
以前の世界と同じくらい、意識をする事無く操る事も出来るだろう。
しかし、知識は知識。
きちんと使えるかどうかは全く分からず、それ以上にこの世界の人間として振舞えるかどうかが不安だ。
生き物を殺して生きて行く事が普通で、文明も中世くらいのこの世界。
志希がいた世界との違いは文明レベルと、目に見える奇跡があるかないかだ。
魔術師も、神官も、精霊使いも居る。
戦士や盗賊も交えた彼らが就く、冒険者と言う職業がある位だ。
その中に混じり、生きて行かねばならない事を考えると恐怖で足元から震えが上がってくる。

しかし、尻込みしている訳にはいかない。
放り出されて直ぐ、排除されてしまったこの世界。
元の世界に還りたいと望んでも、『藤原志希』と言う存在は死んでしまったのだ。
今からこの亡骸に魂を戻し、自身の力で肉体を再構成させてもそれは既に『藤原志希』ではない。
『神無の鳥の志希』であり、『日本の中小企業のＯＬ、藤原志希』ではないのだ。
魂が変質した今、在り方が既に変わっている。
なればこそ、『神無の鳥の志希』は新たな自分として、この世界を歩かなくてはならないのである。
志希はそっと、自身の右手を見る。
手の甲には翼を広げる鳥が描かれ、掌には紋章が刻まれている。
アルトと触れ合った時に走った激痛は、魂の変質が起きたからだ。
その証が、魂の状態である自分の体全てを変えてしまった。
おそらく、このまま体を再構成させても魂は戻らないだろう。
考えるとまた、溜め息が出てきそうになる。
ここで、魂魄の状態で憂鬱になっていても仕方が無いとは分かっているが、もう少し現実逃避をしたい衝動に駆られてくる。
だが、何時までもぼんやりしていると、今度は悪霊に襲われかねないので志希は自身の亡骸の頭に膝を着く。
眼窩から覗く赤黒い血に混じり、ちょっとだけ違う色が見えたが見なかった事にする。
考えると、色々と負ける気がしたからだ。
転生と言う手段に出られない自分の種族特性に腹を立てつつ眼を閉じて、かつての自分の額に魂の自分の額を重ねる。
そして、強く思い願う。

生きたい

行きたい

活きたい

往きたい

心の底から、イキタイと叫ぶ。

願いは力となり、力は本流となり周囲の魔力を集め始める。

土の精霊が、水の精霊が、火の精霊が、風の精霊が歓喜の声を上げて集う。

光の精霊が光を乱舞させ、闇の精霊が辺りを包む。

魔力と神力、精霊達が志希と志希の亡骸を包みゆっくりと解けていく。

同時に、志希は希薄だった自分と言う存在がしっかりと固まった様な感覚を覚えていた。

ゆっくりと深呼吸をして、確かめる。

魂魄の時には、地上の世界の匂いは全くしなかった。

今は土の匂い、緑の匂い。

そして、錆びた鉄の様な匂いがした。

思わず顔を顰めると、背中が石に当たる感触がした。

痛みを感じると同時に、自分が仰向けに横たわっている事に気がつく。

そう、獣に食い荒らされた亡骸と同じ様な格好をしていると言う事に。

志希はそれで、自分が肉を纏った事を確信して目を開ける。

眼に映る空の青はすっかり赤く染まり、ゆっくりと紺へと色を変えて行く所だ。

志希はゆっくりと起き上がり、自身の手を見る。

刻まれた『神無の鳥』の証は、やはりそのままだ。

志希は小さく嘆息して、最初に受けた傷を確認しようと自分の体

を見降ろす。
そこで、違和感を覚えた。
動物の爪で剥ぎ取られたらしい服は血に塗れ、既に服の機能を有していない。
それは仕方が無いと言えるが、その布地を押し上げている膨らみがやけに小さく感じるのだ。
恐る恐る自身の胸に手を持ってきて、自分で鷲掴みにする。
「ち、縮んだっ！？」
掌に余る程だった胸が、今では自分の手のひらよりちょっと大きい位のサイズになっている。
「う、うそぉ！？」
声を上げつつ、志希は立ち上がり自分の体をチェックする。
以前は全体的にぽっちゃり目だった身体が、やけに華奢になっている。
肉感的とは言い難い自分の体を確かめている最中、更に驚くべき事実が判明する。
髪の色が、やや青みがかった銀へと変化していたのだ。
流石に目の方まで確認する事は出来ないが、思わず膝と両手を着いてがっくりと項垂れる。
「割かし、自分の容姿は気に入ってたんだけどなぁ」
呟いてから、海より深い溜め息を吐く。
『神無の鳥』は、魂が変質する。
そのせいで体つきから髪の色まで変わったのであれば、顔や眼の色まで変わっている可能性が高い。
今の自分がどんな容姿をしているのかは分からないが、正直憂鬱である。
生まれた時から付き合っていた顔が、変わってしまうのだ。
あまり美人ではないけれど、自分と認識していたし気に入っていた。
しかし、何時までもここで落ち込んでいても仕方が無い。

何せ、これから夜が来るのだ。
この辺り一帯は戦場だったのだから、戦死者達の魂魄が彷徨い出てくるだろう。
それに釣られて悪霊や、リビングデッドまで出てきては困ってしまう。
請われれば魂の流れへと導く事は出来るだろうが、浄化まで出来るかは自信が無い。
取り敢えず、破れた上着を結んで胸を隠してから移動を始める。
死んだ時来ていた服がボロボロな上に血塗れだが、贅沢など言っていられない。
戦場には死人を漁る盗賊も出るのだ、女一人がこんな処に居る方がはるかに危険である。
妖魔にも人にも合わないように祈りつつ、志希は水辺を求めて歩き出した。

第三話（後書き）

外見が変わると言うのは、かなり大変なことだと思います。
幼いころから鏡を見て、自分の顔を知っていたらそれが顕著になると思うのですよ。
鏡を見ないで、自分の顔を知らなかったらその辺はスルーなんでしょうけど。
自分の顔や外見を好意的に受け入れている人にとっては、結構悲しいお話ですよね。

幕間（前書き）

特に読まなくても大丈夫な幕間。

幕間

少年は、久方ぶりに人と会話をした事に機嫌が良かった。
何年ぶりなのかすら思い出せない位、人と会っていない。
久方ぶりに会った同族、異世界からの『神無の鳥』。
自我を洗い流されない魂は強く、大樹の懐に抱かれて目覚める魂は更に大きな力を持つ。
凝縮された力を持つ魂は、『神無の鳥』と言う種族へと変質して往くべき道を定めるのだ。
大半は、神と共にある事を望んでいく。
しかし、極稀には地上に行く事を望む『神無の鳥』も居る。
久方ぶりに会った『神無の鳥』は、地上へ行く事を望んだ。
志希と言う名前の、本当は黒髪黒目だった女性。
『神無の鳥』として覚醒すると、その姿は今まで見た者達より小さくなっていた。
凝縮された力が、それほど大きいからこその現象なのだろう。
煌めく金の瞳は蜜のように甘い色で、青く輝く銀の髪が良く似合っていた。
右手に描かれた雌の『神無の鳥』の証は大きく、ハッキリと志希の存在を右手の甲に翼を広げ、その力の強さを掌に刻まれていた。
彼女の額にある『神無の鳥』のもう一つの証は光を反射し、鮮やかな虹色に輝く。
一瞬、つがいになって欲しいとお願いしようかと思ったほど、綺麗だった。
けれど、彼女は道を地上に見出している。
己は大樹の側で、何時か溶けあえる事を願って流れを見守る事を役目とした者。
だからそれを言い出す事はせず、志希を地上へと送り届けたのだ。
彼女の前の『神無の鳥』も、地上を選びこの地を去った。

彼の末裔と何時か出会う事もあるだろうと、少年は目を細める。
穏やかに、平穏なこの楽園で少年は想う。
志希と言う『神無の鳥』の行く道が、平穏である事を。
遥か遠い記憶の中から、自身の名前を思い出させてくれた彼女が幸せである様にと。
人や亜人、妖魔からも狙われる事が無い様に。
神々からの過多な干渉が無い様に、志希が思う通りの人生を歩く事を祈ってから目を閉じる。
湖が揺れる音と、大樹が鳴らす梢の音を聞きながらアルトと言う名前を持つ『神無の鳥』はひと時の微睡に身を委ねた。

幕間（後書き）

アルトくんからの視点で、短め。
ここからしばらく、志希さんの容姿とか特徴とかの描写がほぼ全く出てこないので、自分が忘れない為にアルトくんに語ってもらったと言う形です。
読まなくても、全く大丈夫。
しかも、この話って四話書いてから思い出したように挿入したので、短い事短い事。
それだけのお話、と言う感じです。

今回から、毎週日曜日に更新できるように努力をして行こうと思います。

第四話

水辺を求めて移動していると、風の精霊が案内してくれた。
何度も言うが、『神無の鳥』は世界と神の庇護を受けている。
それゆえか、精霊や神に属する存在は志希に好意的に接してくれていた。
邪神、悪神と呼ばれる類のモノであろうとも、『神無の鳥』には便宜を図ってくれるのである。
無論、お願いした場合は当然見返りも要求してくるので基本的には頼るつもりはない。
これはどんな神様であろうとも同じ事なので、基本対価を要求しない世界に属する者へのお願いの方が多くなるだろう。
精霊は世界に属するモノなので、純粋な好意で案内してくれていた。
どうやら志希の気持ちは周囲にだだ漏れらしく、歩いていると木から食べ物が落ちてきたりもする。
木の精霊がお腹をすかせ始めた志希への気遣いで、分けてくれたのだ。
赤く熟れたそれはリンゴで、志希はお礼を言ってから齧りつく。
その間も足は水辺を求め、確実に歩みを進めている。
リンゴを食べ終わったので地面を掘って埋め、そこから少し歩くと水の匂いとせせらぎの音が聞こえた。
風の精霊に礼を言って、志希は足早に水辺へと駆け寄る。
既に日が落ちて周囲は真っ暗なのだが、志希の目には昼間と同じくらい明るく見える。
それは、生き物や精霊達が発する魔力の輝きが視えているからだ。
いわゆる、精霊使いの特性として持っている【暗視】に近いものである。
種族の特徴として有しているのはアルフ、アールヴ、ドワーンだ。

もっとも、彼らには生き物が発する魔力の輝きではなく、いわゆる赤外線での暗視で暗闇を見る。

この、美しい命の輝きが見られないのは可愛そうだなどと思いつつ、志希は無事水辺に辿りつく。

小川が淡く輝き、水の精霊達が楽しげに顔を出し挨拶をする。

その彼らに、志希は問いかける。

「悪いんだけど、体洗って良いかな？　全身血塗れで、気持悪いの」

水の精霊達は歓迎するに飛びはね、了承の意を伝えてくる。

志希はほっと安堵の表情を浮かべ、服を脱いで小川に足を入れる。

少し冷たいが、震えが来るほどのものでもない。

志希はそのまま小川の真ん中へと進む。

丁度腿の付け根あたりまで水があり、体だけではなく頭も洗う事が出来そうな事に思わず笑みを浮かべる。

髪の色は変わっても、長さが変わらなかった事は僥倖だ。

異常に長かったら、洗うのも一苦労だっただろう。

襟足より少し長い位の髪は、纏めるのに丁度良い。

幸いな事に髪を纏めるのに使っていたヘアゴムは血で汚れただけなので、まだまだ使える。

髪を解き、深呼吸してから川の中に潜る。

ヘアゴムは手首に通して流されない様にしてから、頭をガシガシと両手で揉む様に擦る。

これでこびり付いているであろう血が洗い流せると信じて、息が苦しくなるまで繰り返す。

時折息継ぎをしつつ、志希は気が済むまで頭を洗う。

それが終われば、今度は体だ。

顔だけ水面に出し、水中で体を手でこすって汚れと血を洗い流す。

水の精霊にはえらい迷惑だろうと思うのだが、彼らは何故か大喜びで志希の手伝いをしてくれる。

どうやら『神無の鳥』が珍しく地上に現れた事が嬉しいのと、それに遭遇出来た事に喜んでいるらしい。

手伝ってくれるのであれば、有り難くそれを受け入れる。
水の精霊達の優しい慰撫する様な洗い方に、うっかり寝そうになる。
しかし、流石に水中で寝れば溺れてしまう。
志希は彼らにお礼を言って小川から上がり、はたと気がつく。
「身体、拭く物無いなぁ」
全身からぽたぽたと水を落としながら、志希はむっと唸る。
着ていた服は殆ど血塗れで、これで体を拭いてもまた汚れるだけである。
そもそも、着替えも体を拭く布も無い状態で体を洗った事自体が間違っている事に志希はようやっと気が付き、がっくりと膝と両手を着いて項垂れる。
「何やってんだよぉ……もぉ」
半泣きで呟きつつ、これからどうするべきかを考える。
これから徐々に夜も更け、空気が冷えてくる事は決定的だ。
濡れ鼠の全裸状態で、森の中をうろつく度胸は志希に無い。
選択肢は、一つしかない。
志希は半泣きで、血塗れの服を着る事にする。
その後は人がいる方向へと移動するのだが、用心しなくてはならない。
妖魔との戦争中である事を考えれば、彼らはピリピリしているだろう。
下手をしたら妖魔側の人間と思われる可能性もあるので、慎重に動かなくてはならないだろう。
もし戦闘中であれば、どさくさに紛れて服を無償で提供してもらおうと思っていたりもする。
無論、出来れば食料も欲しい。
だがしかし、今は森の中に居れば木の精霊から食べ物を分け与えてもらえるのだ。
人と接して傷つけられるよりは、森の精霊にお願いして分けても

らった方がまだ危険は少ないだろう。
ごそごそとズボンを穿き、深い溜め息を吐く。
下着もズボンも、殆ど布切れである。
太腿も脹脛も、下腹部の部分もボロボロで辛うじて隠せている程度だ。
あちこち布を結び、落ちないように補強してから歩き出す。
ちなみに、靴は気が付いた時からなかった。
髪を手櫛でまとめてからヘアゴムで一つにまとめ、志希は歩き出す。
濡れたまま服を着たので気持ち悪さが倍増しているが、今は構っていられない。
一刻も早く布と着替えを手に入れ、志希はもう一度体を洗いたい一心で移動を始めた。

第四話（後書き）

感想や評価をしていただければ、やる気が漲ります。
どうぞよろしくお願いいたします。

第五話

この世界は、人と亜人と妖魔が暮らす世界だ。
人と亜人は仲が良く、妖魔のごく一部とも交流を持っている。
だがしかし、大半の妖魔は邪悪で、弱い人間達を見下して襲いかかってくる。
人と交流を持っている妖魔を見下し、亜人や人を食料や玩具とみなしている者が殆どであった。
その代表格とも言えるのが、緑の肌と大きな牙を持つゴブリンと呼ばれる者達だ。
彼らの数は多く、部族ごとに長がいてそれらを取りまとめるのが王と呼ばれている。
部族の長とその一族はゴブリンと呼ばれるには大きな体をしており、ホブゴブリンと呼称が付けられている程だ。
王はホブゴブリンの三倍近い大きさで、かなり強いと言われている。
志希は脳内で、この世界の知識の確認をしていた。
主に、現実逃避の為に。
そうして精霊達に案内されるがまま歩いていたのだが、木の精霊に警告された。
悪意を持ったゴブリンがいるので、隠れた方が良いと。
志希はその言葉に従い、木に登り体を小さくしていた。
精霊達も志希の姿を隠す為目くらましをかけて、寄り添ってくれている。
暗闇の中、オレンジ色の光が遠くで揺らめくのが見えた。
それは見る見る近付いてきて、直ぐに松明の明かりだと判る様になる。
ほどなくして、十匹ほどの集団を組んだゴブリン達が音も無く志希が先程いた地面に姿をあらわす。

松明の明かりに照らされた彼らの顔は醜く歪み、見ているだけで志希の肌が泡立つ。
声を上げない様に息を詰め、じっと彼らを観察する。
ゴブリンと呼ばれる彼らは、成人男性の腰ぐらいの小ささしかない。
それ故ゴブリンと呼ばれるのだろうとは思うが、その濁った眼と涎を垂らして歩く姿は嫌悪感しか抱けない。
厭らしく笑い、楽しげに仲間たちと何か会話しているのが聞こえる。
〈臭う、臭うぞ！　血と、柔らかい肉の臭い！〉
〈ああ、旨そうな匂いだ！　子供、子供の臭い！〉
〈違う、違う。子供じゃない、女の臭いだ！〉
ぎゃあぎゃあとけたたましく、楽しそうにゴブリン達は騒ぎ立てる。
〈女、女！　人間の女！　脂肪がたっぷり乗った、旨そうな女！〉
〈探せ、探せ！　おれらの夕飯だ！　隊長に見つかる前に、俺らで喰っちまおうぜ！〉
ゴブリン達のその声に、志希は目眩を感じる。
彼らに見つかった場合、また殺されてしまう。
幾度殺されようとも、『神無の鳥』は蘇る。
だがしかし、殺された時の恐怖も痛みも全て魂に刻まれるのだ。
繰り返されれば、発狂しかねない程の現象。
しかも、この話の内容からすれば捕えられて調理されるのだ。
下手に生き返ろうものなら、延々と同じ事を繰り返される。
恐怖に悲鳴を上げかけるが、志希の感情を受け止めた風の精霊が慰撫する様に彼女の頬を撫でる。
ここで怯えて、下手に動けば見つかる。
想像した事が現実になるかもしれないと言う予感に、志希は息を詰めて木に体を押し付け、必死で無心になる。
下手な事をすれば命取りになると思い、取り敢えず知識の中のゴ

ブリンの項目を確認していたのである。
ゴブリン達はぎゃあぎゃあ声を掛け合いながら一生懸命探していたが、不意に断末魔の悲鳴が響き渡る。
〈なんだ!?　なんだ!?〉
このゴブリン達のリーダーらしいゴブリンが、驚いた声を上げる。
〈人間！　人間に襲われた！〉
ゴブリンの報告する声に、彼らは動揺する。
その隙が命取りだった。
鋭い音が鳴り、矢が報告していたゴブリンの首を貫く。
それと同時に、首を貫かれたゴブリンの頭上に魔力が収縮するのが見えた。
咄嗟に身を固くし、木にしがみ付く志希。
瞬間、物凄い熱と炎が巻き上がる。
体に纏っていた水気に着いてきていた水の精霊が、志希に水の膜を作り熱と炎から護る。
炎の精霊もまた、志希に傷を負わせまいと魔力で編まれた炎と熱を風の精霊と共に上空へと逃がす。
彼らのお陰で、志希は髪の一筋も傷を負っていない。
しかし、水気のみで膜を作った水の精霊は消えてしまい、志希は恐怖で震えながら涙を零す。
消滅したと言っても、死んでいる訳ではない。
水は蒸発して水蒸気となり、空で雲になり雨となって降り注ぐように精霊もまた巡回しているのだ。
世界の根底と同じ様に、流れている。
しかし、志希は助けてくれた彼らにお礼を言う事が出来ない事に、悲しくて涙を零す。
それを慰撫する様に風の精霊が撫で、さわさわと木の精霊が梢を鳴らして慰める。
志希は小さく頷いて、涙を拭いながらもゴブリン達を見る。
彼らは真黒に炭化し、過剰な力で焼き払われた事を示していた。

風の精霊達は志希の為に空気の流れを作って臭いを他へと流しているが、実際は凄い肉の焼ける臭いが立ち込めているだろう。
想像すると喉が鳴りそうになるが、志希は堪えて木に身を寄せて必死で気配を殺す。
何せ、ゴブリン達に矢を射て魔法を放った者がいるのだ。
相手がどんな人間か分からない以上、用心に用心を重ねた方が良い。
程なく、多数の足音が聞こえてきた。
風の精霊が囁く数は、五人。
人間二人とドワーン、アールヴにアルフが混じっているらしい。
「やつらのキャンプから随分離れた所に、ゴブリンか……」
そう呟きながら、光るハルバードと言う大きな武器を持ったドワーンが現れる。
ドワーンとは、戦士としての能力が高く、義に厚く信仰心も高い種族だ。
彼らは元々工夫や芸術家として生まれて来たと言われており、手先も器用で良い武器防具や細工物を作ると言われている。
今この場に居る彼は、金属の鎧を着ながらもその首には聖印が揺れている。
その様子を鑑みるに、神官戦士と言う者なのだろう。
「斥候かな？」
ドワーンの呟きに応える様に、彼の後ろに居たひょろっとした人間の男性がゴブリンの側に膝を着く。
人間とは、最も平凡な種族だと言われている。
特徴は無いが、器用である事が大きい。
そして何より、この世界で最も多いと言われている種族だ。
厚めの皮鎧に弓矢、そして腰には小剣を差している。
その様子から見るに、この男性はいわゆる盗賊だろうとあたりを付ける。
「多分、そうでしょうね。こんな雑魚だと分かっていたら殲滅する

のではなく、眠らせてから尋問した方がまだ情報が入ったでしょうね」

そう言いながら細長い杖を持ち、眼鏡をかけた人間の青年がドワーンの隣に並ぶ。

細長い杖の先には丸い水晶の様な者が嵌めこまれ、古語が刻まれている。

あれは魔術師が持つ魔法の発動体で、あれが無いと魔術を編むのが難しいと言われている。

見るからに軽装と言ったその格好は、どこからどう見ても魔術師である。

「まぁ、気にしなくて良いんじゃないかな。こんな雑魚に、大事な事を教えてるとは思えないし」

そう言うのは、最初に見た人間の青年と同じ様にやや厚めの皮鎧を着た細長い耳を持つ白い肌の青年。

アルフと言う魔力や精霊を扱う事に長けた種族で、身軽そうな皮鎧を着ている所を見ると精霊使いだろう。

腰からは刺突剣を下げ、戦えると言う事を現わしている。

そして最後に現れたのは、アルフと同じ細長い耳を持つ黒い髪に褐色の肌をしたアールヴだった。

痩身でありながら大きな剣を背負い、黒い金属鎧と服を身に纏った戦士と言った雰囲気だ。

アールヴは、アルフが突然変異を起こした種族と言われている。

魔法系統に長けたアルフと違い、アールヴは戦士としての能力が高くなった。

昔は堕ちたアルフとも言われ忌み嫌われていたが、今は普通の亜人として受け入れられている。

その姿を見た瞬間、志希は体を硬直させる。

思わず吸い込んだ息の音を聞きつけたのか、アールヴだけでは無くドワーン、そして盗賊風の男性まで志希の方を見る。

「出て来い。出てこなければ、撃つぞ」

盗賊風の男性は弓矢を構え、番える。
しかし、それを止めるのはアルフだ。
「駄目だ。風の精霊が護ってるから、弓矢の類は効果が無い」
男性が矢を番えた時から、風の精霊は志希の身を護るべく風を吹かせている。
「精霊使いか……道理で、姿が見えない筈だ」
ちっと舌打ちをして、盗賊は弓を降ろす。
「では、私の魔法で寝かせてしまいましょう。何か、知っているかもしれませんしね」
魔術師の青年はそう言い、発動体を揺らそうとするがそれを遮る様にドワーンが前に出る。
「止めとけ、相手は怯えてるだけじゃ」
そう言って、志希が身を寄せる木の上を見る。
「闇の精霊での目くらまし、かのぉ？　わしの瞳を持ってしても、見通す事ができん」
ドワーンの言葉に、アルフが頷く。
「ええ、そうですね。光の精霊をぶつければ見える様にはなると思いますが……精霊達が如何にも騒いでいて、少々時間がかかるやもしれません」
その言葉に舌打ちをして、盗賊の青年が口を開く。
「出て来いよ。こそこそ隠れやがって……」
イラついた言葉に、志希は小さく喉を鳴らす。
自分を殺した人間がいる事に、体の震えが止まらない。
だがしかし、今すぐ攻撃される事は無いと考えれば、恐怖を押し殺してでも言葉を返した方が良い。
時間が経てば経つほど、状況が悪化する。
それは確実だ。
意を決して、口を開く。
「こ……殺したり、しませんか？」
絞り出す様に、問いかける。

震えた声音に、彼らは驚いた表情を浮かべる。
しかし、直ぐに魔術師が立ち直った様に頷く。
「ええ、少なくとも今は貴方に危害を加えるつもりはありません」
魔術師の言葉に、志希は深呼吸をする。
「ありがとう、もう良いよ」
志希は自分を護る闇の精霊に、木の精霊に大丈夫だと告げる。
それだけで、闇の精霊達は姿を解き木の精霊の姿隠しの効力も解ける。
志希の姿がドワーンの持つハルバートの明かりに照らされ、見上げていた彼らは小さく息を呑む。
「何故、女性がこんな処に……」
驚いた様に、魔術師が呟く。
「いや、こりゃびっくりした」
思わず言うのは、盗賊である。
純粋に驚いた表情で、志希をマジマジと見ている。
志希はそんな彼らの視線に居心地の悪いものを感じつつ、見上げてくる彼らの顔一人一人を見る。
そして、やはりアールヴの男性の目と顔は志希が知っているものだった。
じっとアールヴの男性を見ていると、彼の仲間達が怪訝そうな表情を浮かべる。
アールヴの男性の隣に立つアルフの青年は、肘で彼をつつく。
志希がなぜ彼を見ているのかを問えと、指示を出しているのだろう。
多少嫌そうな表情をして、彼は口を開く。
「何故、俺を見る」
そう問いかけられた志希は、思わず答える。
「私を殺した人だから」
志希の即答に、彼は眉を潜め周囲の仲間は唖然とした表情を浮かべる。

「おい、お前マジか？」
表情を改めた、盗賊の青年がアールヴに問いかける。
「……昼間の戦闘で、敵の魔術師が不穏な動きをしていると伝令が来たから、斬り込んで邪魔しに行った。その時、召喚陣から出て来たらしい女は殺したがこんな成りでは無かったぞ」
アールヴは淡々と、答える。
「黒髪に黒い目、お前と同じだったな……カズヤ」
アールヴの答えに、カズヤと呼ばれた盗賊の青年は青褪める。
「ま、まて！　お前……召喚陣から出て来た女を殺したのか！？魔法使えるのかも、確認しねぇで！」
盗賊はそう詰ると、アールヴは頷く。
「敵陣で、敵の魔術師から召喚されていたからな」
敵陣の中の、敵の味方として呼ばれている者だ。
そうであれば、殺すのが常識である。
志希は成程、と頷く。
冷徹なあの眼は、任務だったからなのだろうと理解した。
むやみに人を殺す人ではないと理解した瞬間、志希の緊張は少しだけ解けたのである。
そんな志希を尻目に、カズヤと言う盗賊は怒鳴る。
「マジかよ！　オレと同郷の奴、殺してんじゃねぇよ！」
腰の小剣を抜こうと柄に手をかけ、アールヴを睨みつける。
殺気をぶつける彼に、アールヴは背中の大剣を抜こうとするが。
「そこまでだ、君達。彼女のお話、きちんと聞こうよ」
アルフがアールヴの青年の首元に刺突剣の切っ先を突きつけ、盗賊の方はドワーンがハルバートを向ける事で止めている。
「取り敢えず、場所を移してお話をした方が良いでしょうね」
魔術師はそう言って、志希を見上げてくる。
志希はこくりと頷き、するすると木から降りる。
「匿ってくれて、ありがとう」
志希は今まで登っていた木にお礼を言ってから、改めて五人の男

性の方を向く。
　すると、魔術師が自身の上着らしきローブを脱いで志希にかける。
「少々刺激が強い恰好ですので、これを着ていてください」
　魔術師の言葉に、志希の顔は真っ赤になる。
　改めて考えて見れば、確かにそうだ。
　殆ど布切れで、それを結ぶ事で服としての機能を何とか果たしている状態なのだから。
「ありがとうございます」
　ローブの前を握り、志希は改めて頭を下げてお礼を言うのであった。

第五話（後書き）

種族などに関しては、後々出てきますのでお気になさらず読み進めて頂けるとありがたいです。

第六話

ゴブリン達の焼死体があった場所から移動し、志希の知っている小川の上流らしき場所に辿りつく。
そこに乱立するテントの数から、どうやらここが人間側の陣なのだろうと推測できた。
志希は顔を隠す様にローブの帽子を被せられ、アルフの青年に手を引かれて歩く。
具合が悪い様に見せかける様に事前に言い含められていた為、志希はそれに従って俯いていた。
しばらく歩いた後、川縁に建てられたテントの中に案内される。
「お疲れ様。顔上げても良いよ」
アルフの青年の言葉で、志希は帽子を脱いで顔を上げる。
「明るい所で見ると改めて……凄いなぁ」
アルフの青年は、端正な顔を少しだけ緩めて呟く。
志希は何が凄いのかよくわからないので小首を傾げ、きょろきょろとテント内を見る。
テントはそこそこの大きさを持っており、六人入ってもまだ少し余裕がある。
その中で、盗賊のカズヤは自身の荷物をひっくり返して何か探している。
ドワーンの神官戦士はハルバートを置いて、首を回しながら口を開く。
「お嬢さんや、名前を聞いて良いかね？」
ドワーンの問いかけに、あっと声を上げる。
「そうですね、自己紹介まだでしたよね」
うんうん、と志希は頷いて頭を下げる。
「志希です。助けてくださって、ありがとうございます」
深々とした礼に、ドワーンは一瞬目を丸くしてから、笑う。

「何の、気にする事はない。ワシらは斥候が無いか見回りしていただけだからの」
そう言って、聖印を掲げてドワーンは名乗る。
「ワシは、戦女神ワキュリーを信仰する神官戦士、ベレントじゃ」
人好きのする笑顔で、ベレントは言う。
「私はライルです」
魔術師はそう言って、荷物をひっくり返しているカズヤの所へ行ってしまう。
「ボクはアルフのクルト、精霊使いだよ。カズヤ！　いい加減にして、自己紹介済ましちゃいなよ！」
クルトはカズヤに声をかけ、彼は憮然とした表情で頷く。
「オレは、高橋和也。この世界に来たのは七年前で、十五だった。カズヤって呼んでくれ。どうせ、もう戻れねぇし」
日本人として、カズヤは紹介する。
何処かやけの様な口調だが、それでも礼儀正しく感じる。
「おい、自己紹介ぐらい自分でしろよ」
アールヴの男性にそう声をかけて、カズヤは再び荷物を漁り始める。
アールヴはカズヤの言葉に何処かだるそうにしながら、志希を見て口を開く。
「イザーク」
たった一言、自身の名前を名乗る。
志希はイザークの瞳を、また真っ直ぐに見る。
彼の金の瞳は、アルトの金の瞳とはまた違う色合いだからだ。
アルトの色は、金ではあったが薄かった。
イザークの金の瞳は黄金の様で、アルトとはまた違った色合いだ。
「見つめ合ってんじゃねぇよ！　おい、シキだったな。あんた、これに着替えろ。俺の昔の服だけど、多分入るだろ。んで、胸潰しておけよ。ここは戦地だから、用心に越した事はねぇ」
カズヤはそう言いながら、志希に服を押し付けてくる。

「きちんとした話を聞きたいが、まずはあんたの身なりを整えるのが先だ」
カズヤの言葉に対する異論はないので、志希は受け取って頭を下げる。
「直ぐそこが川だから、そこでついでに体洗ってくると良い。イザーク、護衛代わりに着いていけよ」
カズヤの言葉に、志希が一瞬体を揺らす。
それを目にしたクルトが、志希の肩を叩く。
「ボクが行っても良いんだけど、襲われた時の人数が多いと役に立てないんだ。カズヤは盗賊だし、ベレントはこれからお祈りするから無理。ライルも荒事苦手だから……我慢、してもらって良いかな？」
クルトの言葉に、志希は頷く。
イザークは憮然としつつも、志希の護衛を得に嫌だとも言わずに黙って頷く。
口数が少ないのであろう彼に小首を傾げつつ、志希は再びローブの帽子を被って荷物を布で包み、イザークの先導で歩き出す。
小川に着いてから、イザークは見張りをする為に川に背を向けて座る。
そこから少し離れた所に着替えを置いて、志希はローブと服と言う名のぼろきれを脱いで川に入る。
先刻洗った事で、直ぐにでも汚れは落ちる。
水の精霊も手伝ってくれるので、体を洗うのは直ぐにでも終わった。
汚れを落としてから、カズヤが渡してくれた布で体を拭いて服を着替える。
手渡された物は全て男性用なので、少しぶかぶかである。
胸も潰す様に言われていたので、もう一枚渡されていた長い布で胸を潰して巻き、服を着る。
その上からライルに借りているローブを着て、身支度が出来たと

小さく息を吐く。
「あの、終わりました」
イザークに声をかけると、彼は岩から立ち上がり振り返る。
志希はイザークを見上げ、闇の中に浮かぶ金の瞳を見る。
イザークは志希の視線に怪訝そうな表情を浮かべ、口を開く。
「何故、そうやって俺を見る」
イザークの問いに、志希はきょとんとした表情を浮かべる。
「いえ、綺麗な眼の色だなって思って。私、今まで見た事無かったんですよ」
志希の答えに、イザークは更に怪訝そうな表情を浮かべる。
「お前の眼の色も、金だろう？」
イザークの問いに、志希は目を瞠る。
「……本当、ですか？」
震える声で問いかけると、イザークは頷く。
志希は手を震わせ、目元を抑える。
酷く驚いたその表情と反応に、イザークは小さく眉根を寄せて口を開く。
「テントに戻ったら、ライルかカズヤに手鏡を借りて見てみろ」
イザークの言葉に志希は青ざめながら頷き、ローブの帽子を被る。
やや大きめの靴を履いて、先程まで着ていたぼろ布を濡れた袋に包んで持つ。
志希のその動作を見ていたイザークは眼だけで促し、テントの方へと歩き出す。
イザークの後を着いて歩きながら、志希は必死で目眩を堪えていた。
まさかとは思っていたが、眼の色まで変わっていた事に驚く事しか出来ない。
しかし、良く考えて見れば同じ『神無の鳥』であったアルトの眼も金だったではないか。
『神無の鳥』の種族としての色の可能性もある事を考えれば、驚く

事ではないだろう。
そう考えはするが、元々黒目黒髪が基本の日本人である事を考えれば、どうしても違和感は拭えない。
髪の色眼の色と変わっているのなら、確実に顔まで変わっているだろう。
憂鬱な考えに思わずため息を零しかけ、ぐっと飲み込む。
今はそんな事よりも、これからの事である。
正直な気持ちを言ってしまえば、志希としては着替えも貰った事だしこのまま逃げ出してしまいたいのだ。
だがしかし、逃げ出せるかどうかは甚だ疑問である。
何せ、目の前に居るのは凄腕と言える様な雰囲気を醸し出すイザーク。
森に入って逃げても、カズヤやクルトの精霊使いとしての能力全開で追いかけられるような気がしてならない。
ベレントは全く気にしない気もするが、ライル辺りにも追いかけられそうで怖い。
下手に心証を悪くするより、大人しくして隙を衝いた方が良いだろうと結論を出してから、志希はなんだか悲しくなる。
助けてくれた上に、ずっと親切にしてくれている。
そう考えれば、もう少し信頼するべきなのだろう。
怖いのは、きっとこの世界に来てから直ぐ殺されたからだろう。
志希は小さく溜め息を零し、思わず口を閉ざす。
あまり溜め息を吐いていては、気分が悪いだろうと思ったからだ。
しかしイザークは全く気にする事無く、無言で歩いている。
その大きな背中を見て、気にして損をしたと志希は苦笑を零してついていく。
程なくイザーク達が使っているテントに到着し、志希はイザークと共に中に入るのであった。

第七話（前書き）

基本的に、「」で会話するのがこの世界の言葉です。
□は日本語で、その他の言語は適当に＞＜などを使って表現します。

第七話

テントの中に入ると奥の方に座るように促され、両脇をクルトとライルに挟まれた状態になる。
志希はがっちりと抑えられたその陣形に、逃げない様にと警戒しているのだろうと直ぐに気が付いた。
それはそうだろう。
正直、自分は怪しい。
怪しいがしかし、何故そんな人間を彼らは連れて帰ってきたのだろうと志希は不思議に思う。
思わずテントの中を見回すと、憮然としたカズヤと目が合う。
そこで、彼は口を開く。
「取り敢えず、水でも飲みながら話してくれ」
人数分の小さな器があり、その中には透明な液体がゆらゆらと揺れている。
中には水の精霊がいて、彼はタプンと液体を揺らす。
「はぁ、まぁ……取り敢えず、何からお話をすれば？」
志希は取り敢えず、何を聞きたいのを問う。
すると、イザークが口を開く。
「どこで俺が女を殺したのを見た？」
イザークの問いに、志希は小首を傾げる。
「人と妖魔がぶつかってるのが見えていた所。って言うか、私を背中から刺したのあなたじゃない」
志希の言葉に、イザークが片眉を上げる。
「大体にして、玄関出たら急に知らない場所で背中から心臓一突きされて殺されるんだよ？　信じられる！？」
イザークの表情を見ているうちに、志希の気持ちが高ぶってくる。
「刺されたと思ったら持ち上げられて、骨が刃に当たってすっごい痛かった！　その上木にぶつけられるし！」

志希の声が段々と大きくなり、クルトが慌てて小さく何事かを呟いている。
詰られているイザークは、驚いた表情を浮かべて志希を見ている。
「シキ、もう少し声を下げろ！」
カズヤが慌てて志希の肩に手を置き、落ち着けと声をかけてくる。
「死の瞬間を、明確に覚えているのかね？」
珍しそうに、ベレントが問いかけてくる。
「そりゃもう、痛かったもん！」
志希は勢い良くそう答え、水を一気に煽る。
「その後は、あんまり覚えて無い。気が付いたら血塗れの布切れになった服を着て、髪の色も目の色も変わってた。ついでに、体つきもまるっきりね」
志希は器を見つめながら、呟く様に言う。
「へ？」
間抜けな声を上げるのは、カズヤである。
「君は、最初からその姿だったのでは？」
ライルの問いかけに、志希は頭を振る。
「違うよ。気が付いたら胸は一回り小さくなってるわ、体は随分と細くなってるわでびっくりだよ。元々は黒目黒髪で、カズヤさんと同じ様な感じだったんですもん」
志希はそう言って、肩を竦める。
「眼の色が変わっているっていうのはイザークさんから聞いていたんですけど、顔まで変わっているのかどうかはわかりませんけどね」
志希の言葉に少し考える様に眉を寄せ、カズヤは自身のウェストポーチから手鏡を取り出す。
「これ、俺が罠解除する時に使う鏡だ。結構はっきり映るから、見てみろ」
カズヤの言葉に頷き、志希は小さな手鏡を覗き込む。
イザークに言われた通り、眼の色は金に変わっていた。
だが、アルトの様な薄い金ではなく、やや艶を消した様な濃いめ

の金色だった。
少し、イザークの眼色に似ている。
そして顔の方は、志希の予想に反してあまり変わっていなかった。
自分と認識できる顔で、志希は安堵する。
若干幼い感じになって見えるのは、おそらく『神無の鳥』として生まれたばかりだからだろう。
「あんまり……変わって無い」
物凄く安堵したように、志希は呟く。
「いやぁ、記憶にあるより若返っててびっくりした。カズヤさん、ありがとう」
志希は満面の笑みでカズヤに鏡を返し、カズヤは何とも言えない表情で志希を見ている。
この世界では、生き返る事は死体が損なわれていなければ出来る。
だがしかし、かなり高位の司祭が集まり、儀式を執り行わなければ蘇生の奇跡は使えない。
しかも、日数が経ち過ぎると儀式を執り行っても蘇生する確率が下がってしまうのだ。
どんな高位の冒険者であろうとも、司祭の伝手と大金が必要となる為、滅多に蘇生儀式は行われない。
「でも、シキが生き返ったって言うならそうだよね。君からは生きている人間の魔力が見えるし、何より……君の周りには精霊が多く集っている」
クルトはそう言って、水を飲む。
「私としては、シキさんの体を少し調べさせていただきたいですね。カズヤと同じ異界人だと言うのに、殺されて蘇生したと言うのはとても興味深い。姿形まで変わったと言うのも、とても気になる」
ライルはそう言いながら、志希をじろじろと見ている。
その視線に居心地の悪いものを感じて、志希は思わずライルから少し体を離す。
「ワシからは、疑う余地はないの。何せ神託が下っておる」

ベレントの一言に、皆一斉に彼を見る。
「シキなる娘、害す事ならず。だそうじゃ」
彼が落とした爆弾に、志希は頭を抱えたい衝動にかられる。
志希としては、『神無の鳥』である事は隠しておきたいのだ。
だからこそ、世界の根底においての出来事を話さずすっとばしたのだ。
だと言うのに、志希の思惑など無視して神々は口を出して来る。
正直、勘弁願いたい。
「戦女神がそんな神託するなんて……」
驚いた様に呟くのはクルトで、志希は本当に勘弁して欲しいと深い溜め息を吐く。
そこに、低い声音が響く。
「俺も、特に疑う余地はないな。シキと言ったか……俺がお前を殺したという情景、確かにその通りだ」
イザークは、金の瞳を真っ直ぐに志希に向ける。
「それで、お前は何を望んでいるんだ？」
イザークの問いに、志希は息を詰める。
望む事など、それほどない。
生きていたいと言う事と、この世界を見て回ってみたいと言う事。
「……もう帰れないから、この世界で生きたい。この世界を、見て歩きたい」
志希は何も誤魔化す事も無く、自身の気持ちを口にする。
「だって、もう『藤原志希』は死んでしまったから。だから、『志希』になってこの世界を本当の意味で知りたい」
子供の様な志希の言葉に、カズヤが腕を組む。
「藤原志希、って名前だったからシキか。まぁ、その辺は良いんだけどよ……シキは何で、この世界の言葉を話せるんだ？」
カズヤの懸念らしき問いかけに、志希はきょとんとした表情を浮かべる。
「オレがこの世界に来た時、魔法使いのじいさんに会うまで全く言

葉が通じなかったんだ。今はほら、勉強して覚えたからぺらぺらだけどよ。異世界人だって言うなら、その辺の謎を教えてくんねぇ？」

カズヤの真剣な問いかけに、志希は口を開く。

［この人達に教えないなら、話しても良いよ］

志希の言葉が、唐突に変わる。

今まで話していた言葉とは違う、カズヤが七年前から決して聞く事の出来なかった言語。

［マジで日本語かよ……］

カズヤもまた、日本語で応える。

クルトとライルは、いきなり違う言葉で話し始めた二人にぎょっとした表情を向ける。

「二人で、何の話をしているんですか？」

ライルの問いに、カズヤが難しい表情を浮かべて口を開く。

［こいつらは、信用ならねぇってことか？］

カズヤの問いに、志希は困った表情を浮かべる。

［信用ならないっていうか、今の時代の常識って言うか……そう言うのを知ってからじゃないと話せるか話せないか判断できない。でも、同じ国出身のカズヤさんだったら話しても良いかなって思ったのよ。だって、話を聞いてから判断して忠告してくれるでしょ？］

志希の思いがけない言葉に、カズヤはむぅっと眉を寄せる。

そこに。

［判断のしようが無いのであれば、話したくないと言えば良い］

と、イザークが二人と同じ言葉で口を挟んでくる。

志希とカズヤはぎょっとした表情で、イザークを見る。

［まさか、お前達が習得している言語だとは思わなかったが……我が家に伝わるこの剣に関する文献が、この言語を使用して書かれている。だから、俺はこの言語を操れると言うだけの話だ］

二人の驚いた表情にそう言い添えて、イザークは未だ背中に背負っている大剣を示す。

カズヤは成程、と言った表情を浮かべて頷く。

志希は志希で、渋面になる。
［……二人に話して、問題が無いって思うんだったら改めて話すよ］
そう言ってから、一つ深呼吸をして話し始める。
［死んだあと、何も分からないって言ったけどあれ嘘。私、死んでこの世界の根底ってところに流されたの。根底には世界を支える大樹と、魂が巡回する湖があった。そこの大樹で、『神無の鳥』の男の子にあって、その子と同じ『神無の鳥』として覚醒したの］
一気に話した言葉に、カズヤは眉間に皺を寄せる。
［なんだその……『神無の鳥』って］
カズヤの問いに、志希は憮然とした表情で応える。
［『神無の鳥』は、狭間の存在。精霊や人間より大きな力を持ち、世界に溶ける事も出来ず神になる事も出来ない中途半端な種族。魂の自我が洗い流される湖で自我を失わず、大樹に吸収される事無く目覚めた魂の事］
志希の説明に、カズヤは頭を抱える。
［うおぉ……混乱する！　神学者じゃねぇから、マジで想像出来ねぇよ！］
カズヤが身悶えする中、イザークは至って普通に志希の話に着いてくる。
［続きを］
しかも、続きを話せと促して来る。
志希は少し呆れた表情を浮かべてから、気を取り直して話を続ける。
［で、私がこの世界の言葉を理解しているのは、自我を洗い流す湖に浸かったから］
志希の簡潔な言葉に、カズヤはぽかんと口を開ける。
［そんな事で……？］
カズヤの呟きに、志希は頭を振る。
［そんな事、じゃないよ。あの湖は、自我を洗い流して知識として蓄える場所だった。そこに浸かって、自我を失わないでいたからこ

そ私はこうして言葉を話す事が出来ているんだから。まぁ、それ以前にあの湖に行ってる時点で本当は終わってるんだけどね」

死んで流れついた先の湖で知識を蓄えても、自我が洗い流されたら役に立たないのである。

「ちなみに、異世界人も湖に流されるんだけど……基本的に、魂の流れに乗れなくて大樹に吸収されるから」

志希はあっさりと、死後の話をしてカズヤを嫌な気持ちにさせる。

「……お前なぁ」

じっとりとした瞳で志希を睨んでから、カズヤは嘆息する。

そのカズヤを他所に、イザークは志希の話を吟味してから口を開く。

「今の話は、する必要が無い話しだろう。むしろ、ベレントにはせん方が身の為だ。神官達にとって、死後の魂は信仰する神の御許に召されると教えられているからな」

イザークの言葉に、志希はああと返事をする。

「それ、本当ですよ。ごく一部の神に気に入られた人間の魂のみ、英霊として神の苑へと召されるんです。ていの良い手駒として」

志希は辛辣に、神に召された魂の行く末を口にする。

「信仰してもらって、力を貰って尚且つ手駒にするあたり、神ってえげつないですよねぇ」

腕を組み、うんうんと頷く志希をカズヤは何とも言えない表情で見る。

「それはその通りだが、あまり言ってやるな」

そう宥めるのはイザークで、しかも志希の言葉にこっそりと同意している。

何やら奇妙な表情の変化を見せる三人に、ライルが憮然とした表情で口を開く。

「いい加減にしてください。あなた達だけで分かる言葉で、会話をされては困ります」

ライルの言葉に、クルトが激しく首肯する事で同意する。

「何か重要な話なら、ボク達に聞かせてくれても良いでしょう！？」
クルトの憤慨した言葉に、志希は困った表情を浮かべる。
「重要ってもんじゃないよ。シキがどんな所から来たのかって話で、オレと同じ国から来たって事を納得しただけの話だから」
カズヤはそう言って、腕を解いて手を振る。
「そんな所だ。特筆すべき話は、特にない」
イザークもそう言い添えて、自身の剣を背中から外して自身の寝床の直ぐ横に置く。
「取り敢えず、話は色々と聞けたんじゃろ？　それなら、今日はこの辺にして寝たらどうかのぉ。シキも生き返ったばかりと言う事じゃし、無理をすると体調を崩しかねん。蘇生後は、最低でも一週間は安静にしておかなくてはいけないからな」
ベレントの言葉に、成程と志希は頷く。
不満げな顔をしているのはライルとクルトだが、ベレントの言葉には一理ある。
「……分かった、そろそろ寝よう」
クルトもそう言って、志希を手招きする。
「毛布は人数分しかないから、シキには悪いけど今日はボクと一緒に寝て貰うよ」
クルトの突然の言葉に、志希が物凄く動揺する。
「い、いやっ！　恋人でもないのに、一緒になんか寝れないっ！」
志希は声を裏っかえして辞退するが、クルトは苦笑して頭を振る。
「大丈夫、変な事しないよ。アルフはいわゆる性欲って言うのが薄いから、人間とかより遥かに安心できるよ」
端正な顔に、優しい微笑みを浮かべてクルトは言う。
志希は真っ赤になりながら、小さく唸る。
色々と葛藤している姿に、イザークが口添えする。
「クルトは極端に異性にも同性にも興味が無い。何せ、とっくに枯れているからな」
イザークの言葉に、クルトの端正な笑顔が優しいものからどこか

迫力を湛えるモノになる。
「イザーク……君はボクをなんだと思っているんだい？」
クルトの問いかけに、イザークは喉を震わせて笑い志希を促す。
「既に千を越えた、古いアルフだ。お前より年上の子供も数人いる、気にする事無く布団にしろ」
イザークの言葉に志希は何とも言えない表情を浮かべ、困り果ててしまう。
「基本的に、オレと同郷の女の子は身持ちが堅いんだよ。まぁ、でも……実際、クルトなら大丈夫だろ」
毛布にくるまりながら、カズヤもイザークに加勢する。
「女装したら、確実に美人だからな。ちょっと痩せた女だと思って、くっついて寝ると良いよ」
カズヤの言葉も酷い訳なのだが、クルトは憮然としたまま志希を引っ張り抱き寄せる。
「ボクも、昼間の戦闘で魔法をかなり使ってるから疲れてるんだ。ベレントやライルもそうだから、さっさと寝ちゃおうね」
不機嫌そうに言われた志希はコクコクと頷き、身体を固くしながらクルトの腕を枕にする。
ライルの呟きと同時にテント内は暗くなり、静かになる。
しかし、志希の眼には生命力をあらわす魔力が見えている為、とても明るい。
その明かりを頼りに、じーっとクルトを見ている。
アルフと言う種族は、端正な顔立ちをしている。
髪の色も明るい色合いが多く、クルトは金の髪だ。
眼の色はエメラルドで、中性的な美貌を持っているの。
これで身なりを整え、白馬に乗って現れたらまさしく王子様だろう。
もっとも、イザーク曰く千歳を超えているらしいのでアルフとしてはかなりの年寄りである。
そんな事を考えていると、つらつらとこの世界の人間と亜人の特

徴が浮かんできた。
アールヴとアルフは、亜人の中で断トツの美形率を誇る。
と言うか、種族全体で美形しかいない。
アルフは儚い、如何にも妖精と言った美貌と容姿を持ち、精霊使いだけではなく魔術師としての能力が高い。
そもそも魔力が高いのだから、当たり前だ。
アールヴの場合は、どこか野性的で鋭利な美貌を持っている。
アルフとは正反対で、痩身でありながら筋肉でしっかりと覆われた肉体を持つ戦士としての適性が高い。
軽戦士や暗殺者と言った職業に向く上に、アルフと同じく魔法に対しての抵抗力が高いことも暗殺者としての適性が高いと言えるのだろう。
ドワーンはアールヴと比べると、重戦士に向いている。
大きな武器を振りまわし、アールヴよりも硬く頑強な肉体を誇っている。
また、手先が大変器用で美しい細工ものなど、そのほとんどが彼らの種族で作られていた。
冒険者になるドワーンの殆どが戦士ないし、神官を目指す事が多い。
人間はオールマイティで、能力としては特化している部分はない。
だがしかし、その繁殖力でこの世界を支配していると言っては過言ではない。
人間の次に多いのはドワーンで、アルフとアールヴはあまり数が増えない。
ドワーンは人間の三倍程の寿命を持つが、アルフとアールヴはほぼ不死と言われているからだ。
その理由は、老化が遅いと言われている。
アルフとアールヴの子供は人間と同じ速度で成長するが、青年期になると同時に老化が止まる。
その後、殺されるまでその姿を保ち続けるのだ。

人間とアルフの間に子供も生まれるが、ハーフアルフの寿命は親よりも短い。
それはハーフアールヴも同様なので、アルフとアールヴが元は同じ者だと言う証明である。
志希はそこまで脳内でさらっていると、欠伸が出た。
眼がしょぼしょぼしており、眠気に襲われ始めたのだ。
一日中目まぐるしく状況が変わったせいで興奮していたが、それなりに安心できる状況になったお陰で緊張の糸が切れた様だ。
志希は眠気に抗う事無く、クルトの細い体に身を寄せて目を閉じる。
安全だと本人も周りも太鼓判を押したのだから、それに甘える事にしたのであった。

第七話（後書き）

今回で、取り敢えず種族的説明は終わりです。
人間、ドワーンはまんま人間とドワーフです。
アルフはエルフで、アールヴはダークエルフを元にしております。
なんか、ひねりたかったんですよ……。

第八話

ゆさゆさと体を揺らされる感覚で、志希の意識は浮上する。
「んぅ？」
寝言に近い声で抗議の声を上げるが、耳元で囁く様に呼びかけられる。
「静かに起きて」
声はクルトで、志希は小さく頷いて体を起こす。
寝起きは悪い方ではないが、まだ寝足りなくて頭が重い。
「嬢ちゃん、しっかりと目を開けるんじゃ」
ベレントが小さな声をかけて来た事で気がつく。
何故か、皆酷く緊張している。
志希は取り敢えず掛けられていた毛布をたたみ、クルトに差し出す。
「ありがとう。シキはこのローブを着て帽子かぶって、周囲に顔を見せない様にして」
クルトの言葉にこくこくと頷き、毛布の代わりに手渡されたローブを身に纏い帽子を被る。
「……シキ、何か感じないか？」
カズヤが、酷く緊張した声で問いかけてくる。
何が起きているかは分からないが、取り敢えず異様なほど緊迫しているのは分かったので目を閉じて意識を澄ます。
周囲の気配を感じると言うよりも、大気に意識を乗せて辺りを探る。
すると、今いる所から右手の方から異様な気配を感じた。
それは敵意や悪意を纏った、強大な戦意を放っている。
そちらへと意識を集中すると、目蓋の裏にその光景が見えた。
ゴブリンだけではなくオークやホブゴブリン、オーガがめいめいに行軍していた。

ホブゴブリンのごく一部が精霊を従え、邪神の加護を使って奇跡を起こしているのが見える。
同時に、ゴブリンの中で黒い布切れを纏った者が居るのに気が付いた。
黒い布切れを纏ったゴブリンは、その手に短いながらも杖を持ち振っている。
杖が振られる度に、黒いゴブリンの前に積み重なっていた何かが体をよたよたと起こしていく。
それが何か理解した瞬間、志希の喉が鳴る。
「うぐっ！」
胃の方から酸っぱい塊がせり上がってきて、志希はとっさに口を覆って俯く。
「ぐっ、ぐぅ！」
必死に嘔吐するのを堪えようとするが、発作の様な反応が止まらない。
「おい、如何した！？」
カズヤが心配そうに声をかけるが、志希は返事をする事が出来ない。
「これに吐け」
イザークは素早く木桶を志希の前に置き、背中をさする。
それで志希は我慢できずに、そのまま木桶に吐き出す。
吐いても胃液しか出ないのだが、それでも志希は涙を零しながら吐き続ける。
「何か、感じましたか？」
ライルはそんな志希に、至って冷静に問いかける。
クルトは布を水袋の水で濡らし、何とか収まり始めている志希の口と手を拭っている。
「ここから右の遠くの方でゴブリンとホブゴブリン、それにオーガが集まってた」
ぜいぜいと息を切らしながら、志希は震える手でクルトから濡れ

た布を受け取る。
「ホブゴブリンには精霊使いと、暗黒神官がいて。ゴブリンには珍しい死霊魔術師が居て、今リビングデットを大量に作ってた」
志希の告げた言葉に、ライルとクルトが驚いた表情を浮かべる。
「そこまで詳しく、わかるものなのですか？」
ライルが問うのはクルト。
しかし、彼は頭を振って答える。
「普通、そこまで詳しい事は分からない筈だよ。シキは、随分と優秀な精霊使いの様だね」
驚いた様にクルトは言い、カズヤは何とも言えない表情を浮かべる。
「取り敢えず、進軍準備をしているって事じゃのぉ」
ベレントはそう言いながら、顎の髭を扱く。
「向こうに死霊魔術師が居ると言うのが、厄介ですね」
ライルはそう言いながら、考え込む様に目を伏せる。
「撤退時だな。昨日の昼間の戦闘も、指揮が悪くて戦死者がかなり出ている。それで、俺達の元仲間が襲ってくるっつー状況にもなって、士気ががた落ちするぞ」
カズヤは真剣な声音でぼやき、ぐるりと仲間を見回す。
「ワシとしては、もう少し戦場で戦いたいのじゃが……なぁ」
ベレントは困った様に、志希を見る。
何とか落ち着いた志希は、肩で息をしながら水を貰って口を漱いでいる。
どう見ても足手纏い以外の何物でもない彼女に、如何して良いものかと困っているのだ。
ライルもまた、困った表情で肩を竦める。
「傭兵としての期間は、今日の昼までです。その前に逃げだせば、違約金を払わなくてはならなくなりますよ？」
ライルの言葉に、それならとクルトが声を上げる。
「隊長にシキが感じたものを教えて、大隊長にお伺いを立てた方が

良いね。撤退するにも何をするにも、大隊長の判断が無いと規律が乱れる」

例え傭兵でも、その規律を守らなくてはならないのだ。

志希は青ざめたまま、クルトを見上げる。

「シキの名前は出さないから、安心して。君は色々と訳ありだから……隠しておいた方が、良いだろう？」

クルトは優しく笑んで、シキの頭を撫でてからライルとベレントを見る。

「なんじゃ、ワシまで行くのか」

ベレントは面倒くさげに言うと、ハルバートを持って立ち上がる。

「当たり前だろ？　戦女神の神官様なんだから。カズヤとイザークは、ここでシキと一緒に待っていて」

クルトはそう指示を出し、ライルとベレントを従えてテントを出て行く。

イザークは無言で志希が吐いた物が入った木桶を持って外へと行ってしまい、どこか憮然としたカズヤと志希が取り残される。

「……おはよう」

志希は取り敢えず、朝の挨拶をする。

その言葉に、カズヤは一瞬顔を歪めてから小さくおはようと返事をする。

後は気まずい沈黙だけが横たわり、志希は如何していいのか分からずカズヤをぼんやりと眺める。

すると。

「シキが精霊使いだっつうのは、最初の方で分かってたけどよ。なんつーか、こう……」

イラついた様な声音で、カズヤは呟く。

「納得いかねぇって言うか、如何してオレん時と違うのか……すげぇ腹立つっつうか、イラつく」

カズヤの言葉に、志希はきょとんとする。

「え？」

思いがけない事を言われたと、志希は思わず声を上げてしまう。
「シキに言っても仕方ねぇ事だとは思うんだけどよ……理不尽だって思っちまう」
ガリガリと頭を掻き、カズヤは深い溜め息を吐く。
「オレがこっちに来た時は十五で、なんも分からねぇ餓鬼だった。んで、暢気に俺は特別な奴なんだって、思ってたんだよ。冒険者として大成できるとか、ゲームと同じみたいな事を考えてた」
しかし、現実は非常だった。
「オレは、戦士としては致命的に体力が足りてねぇ。だから、諦めた。そんで、その次は精霊使いを目指して挫折して、魔術師にも挑戦したけど駄目だった」
そこまで一息に言ってから、カズヤは志希を見る。
歪んだ表情は、酷く哀しそうだ。
「努力しねぇで、精霊をあっさり使ってるシキが羨ましいって嫉妬しちまう」
苦しい声音で、カズヤは吐露する。
「オレが諦めたものをあっさり手に入れて、妬ましいって……バカみてぇだよな」
カズヤはそう言って、肩を落として俯く。
志希はそんな彼の前に移動し、じっと待つ。
「悪い、オレちょっと……」
志希を見ずに立ち上がろうとするカズヤの手を、ぐいっと引く。
「頭冷やして来るだけだから、離してくれ」
カズヤは必死で顔を背けながら言うが、志希は頭を振る。
「私は、カズヤさんは凄いと思うよ？」
志希の唐突な一言に、カズヤは思わず志希を見る。
「だって、ダメだったからって冒険者その物から逃げ出してないじゃない。生き物や、人を殺す事を覚悟して、実際その手にかけても逃げ出してないじゃない」
志希は真っ直ぐにカズヤを見上げ、告げる。

「現代の日本人って、安易に人を傷つけることなんてできないじゃない。特に、十五歳って言ったら多感な時期でしょう？」

思いがけない志希の言葉に、カズヤは目を丸くしてすとんと元の位置に腰を落としてしまう。

「最初は軽い気持ちだったのかもしれないけど、生きて行く為にこの道を選んだんだったら……凄い事だよ」

志希とカズヤの目線が同じになり、志希は安堵した表情を浮かべる。

「カズヤさんがイラつくのは、当たり前だよ。私はただ死んで、生き返っただけで言葉や知識を得て世界や神々から庇護されてる。努力なんてこれっぽっちもしてない」

カズヤは、志希の言葉にはっとした表情を浮かべる。

しかし、志希は気が付かずにカズヤの手を握って励ます様に笑いかける。

「だから、カズヤさんは凄いんだよ！」

志希の笑顔と言葉に、カズヤは何とも言えない表情を浮かべる。

励ましたつもりの志希は、カズヤのその表情に自分が何か失敗したのかと困惑してしまう。

「その励ましは、逆効果だろう」

と、いつの間にかテントに戻って来ていたイザークが言う。

「えっ！？」

志希は驚いた声を上げると、カズヤが深い溜め息を吐く。

「……死んで生き返る方が、オレの努力より遥かに大変だっつうの」

何せコネと大金が必要だ。

「バカ見てぇ、マジで」

カズヤは脱力した表情で苦笑して、呟く。

「え、えと……？」

志希は如何声をかけようかと悩んでいると、イザークが嘆息して声をかけてくる。

「シキ、一つ訊くが……成人しているのか？」

華奢な体と幼い顔立ちをしているが、全体的に志希は大人びている。
そのアンバランスさが気になり、イザークは問いかけたのだ。
「そうね……カズヤさんと同じか、一つ下かな」
志希の答えに、成程とイザークは頷く。
カズヤは、志希の答えに驚愕している。
「……その体形と顔で？」
思わず出たらしいカズヤの言葉に、志希は憮然とした表情を浮かべる。
「若返ってるって、言ってるでしょう」
志希の言葉に、そう言えばとカズヤは頷く。
「なんか……オレの嫉妬とかマジでバカみてぇだよなぁ。シキの方が、オレより遥かに大変じゃねぇか。なぁ？　イザーク」
カズヤはイザークに話を振り、彼はそうだなと頷く。
「どんな職種で在れ、いて困る事はない。特に、迷宮に潜る事を考えれば腕の良い盗賊は特に重宝する」
イザークの淡々とした言葉に、カズヤの頬が少し緩んでいる。
「そうだな。隣の芝生は青いって言うしな！」
盗賊と言う職業は居てくれた方が良いと言うイザークの言葉に、カズヤの機嫌がどうやら治ったらしい。
単純な男である。
志希はそんな事を思いつつ、イザークを見る。
志希の視線に気が付いたイザークは、志希を見返す。
マジマジと志希を観察するうちに、ふっと眉を潜めて志希の前髪に手を伸ばす。
「……カズヤ、手鏡を貸せ」
イザークはそう言いながら、志希の前髪を手で上げる。
志希は目を白黒させながら、黙ってイザークの様子をうかがっている。
「如何したんだ……って、なんだこれ」

カズヤはぎょっとした表情を浮かべ、腰に付けているポーチから素早く手鏡を取り出して志希に渡す。
「額、見てみると良いよ」
真剣な声音に、志希は慌てて額が見える様に鏡を調節して覗きこむ。
そして、目を丸くする。
「何これ……」
声を震わせながら、志希はイザークが露わにしている自身の額に手を伸ばす。
鏡に映る自分の額には、虹色に輝く宝石の様な物が埋まっていた。
宝石に指先が触れると同時に、志希はこれが何なのかを理解する。
「あ、これ証か」
成程、と呟きつつマジマジと鏡を覗き込んで宝石を指で撫でる。
アルトの額にもあったのだが、あまり気に留めていなかった。
「……随分早く、順応するなぁ」
呆れた声でカズヤが言い、イザークは志希の前髪から手を離す。
「んー、だって……何時までも驚いてたって仕方ないから。それに、昨日から色々あり過ぎてるんだもん。そろそろ順応しないと、生きていけないでしょ？」
志希のあっけらかんと言い返しながら、カズヤに手鏡を返す。
カズヤは志希の言い様に何とも言えない表情を浮かべつつ、手鏡を受け取りポーチに戻す。
志希はその間に、額の宝石を隠す様に前髪を降ろす。
イザークが気付くまで、パーティ内の人間は全く気が付いていなかった事を安堵しながら。
その志希の前に、イザークが布を差し出して来る。
「これを額に巻いて、前髪が邪魔にならない様にしろ」
ついでに、宝石を隠せ。
言葉の外にある意図を滲ませた声音に、志希は頷いて布を受け取る。

「ありがとう、イザークさん」
先程のやり取りで帽子が脱げてしまったので、志希は丁度良いとばかりに額に布を巻いて帽子をかぶり直す。
「しっかし、マジもんで大隊長はどうするつもりなんだろうな」
カズヤはそう言いながら、身支度をしていた。
弓を背負い、腰の小剣を確認してから、矢筒の中の矢の本数を数えてながら痛んでいる物が無いか見る。
「無謀な奴なら、ここで迎え撃つと言うだろう。無能なら、クルトの助言を一蹴する。有能な人間であれば……」
「撤退か、奇襲か……オレの勘は、撤退するべきって訴えてるけどな」
カズヤはイザークの言葉に呟き、荷物から紐を二本取り出す。
「シキ、靴がずれねぇようにこれできつく縛っておけ。どっちにしろ、ここから移動する事になる。足に合ってねぇ靴を履くからって、お前に合わせる事は出来ねぇからな」
カズヤはそう言って、志希に手渡す。
「分かった」
志希は素直に頷き、紐で靴と足を強引に縛りつける。
変な隙間が出来ない様に縛ってから、靴に慣らすようにテント内を歩き回る志希。
カズヤがそれを眺め、イザークが荷物の点検を始めると、外から声がかけられる。
「イザーク、カズヤ。準備はできてますか？」
ライルの問いかけに、カズヤが応と答える。
「大隊長は撤退を指示しました。傭兵の私達には既に報酬が支払われ、ここで契約が終了いたしました。各自、好きな様に逃げてくれだそうです」
大隊長は有能な人物だったらしいと、先程のイザークとカズヤの会話を思い出して志希はぼんやりと思う。
「了解。そんじゃ、行くぞシキ」

カズヤは志希に声をかけ、促す。
「え？」
思わずきょとんとした表情を浮かべる志希を、イザークが腕を掴んで引っ張る。
「見つけたのは俺達だ。面倒見るのも、当然だろう」
「それに、優秀な精霊使いですからね。道中、クルトと一緒に働いてもらいます」
イザークの言葉に続き、入口の布を上げているライルが言う。
「テントはどうすんだ？」
カズヤがライルの後ろに向かって問いかけると、かかと笑うベレントの声が聞こえる。
「手早くたたんで、持って帰るぞい。何せ、ワシが神殿から借り受けたものじゃからな」
ベレントの言葉に、若干うんざりした表情を浮かべるカズヤ。
「さっさと片付けて、移動を開始するぞ」
イザークは表情をあまり動かさず、淡々と言って動き出す。
カズヤも渋々と言った様子で動き出し、ベレントとイザークと協力して手早くテントをたたみしまい込む。
しまったテントが入った荷物は、ベレントが持つ荷物袋に仕舞われていく。
あまりの手際の良さと、荷物を軽々と持つベレントに志希はぽかんとした表情を浮かべて眺めてしまう。
その志希に、クルトが声をかけてくる。
「シキ、この辺りに敵が居ないか分かるかい？」
問いかけられたシキは目を閉じ、先程と同じく意識を広げる。
すると、先刻より近付きつつある敵意を感じて、目を開く。
「さっきより、近付いてきてる」
志希の言葉に頷き、クルトは皆に手で合図をする。
「それじゃ、出発するよ。シキは、疲れたらイザークかカズヤに声をかけて、背負ってもらってね」

クルトの一言にこくりと頷き、手を引かれるまま歩き出した。

第八話（後書き）

とりあえず、カズヤ君の不満と言うか嫉妬とかの話。
あまりにも境遇が違うのでまぁ、そういうの感じたりするんじゃないかと思うのですよね。
でも、冷静に考えたら志希ちゃんも良い境遇ではないと言うのを思い出すという罠でした。

第九話

現代の日本人のほとんどは、整備された道を歩いて生きている。
歩くよりも自転車や自動車、交通機関等を使って遠出する事の方が圧倒的に多いだろう。
しかし、この世界の道は整備されている事は殆どない。
人が歩き、馬が通る事で慣らされた物を道と呼び、そこを行き来するのが普通なのだ。
平坦な道を歩き慣れている現代人にとって、この道を歩くのはかなり辛い。
知識があろうとも、体験して知るのとは違うのだ。
息を切らしながら、志希は必死で足を動かす。
事前にカズヤが言っていた様に、彼らの歩く速度は緩まない。
この中で一番足が短いと言えるベレントですら、平然とした表情で一番足の長いイザークについていく。
カズヤはこの世界に来て、七年経っている。
イザークより小柄だが、息を切らしもせず着いていっている。
その姿に、なんと無くカズヤの嫉妬したい気持ちがわかった気がした。
飄々としたその姿には、一瞬だけ妬ましいものを感じてしまう。
だがしかし、実際の所は彼が身に付けた物の一つにしか過ぎないと悟るのであった。
志希は必死で足を動かし着いていくのだが、結局見かねたらしいイザークに抱えられて移動する事となってしまった。
その後は皆、殆ど無言で周囲を警戒しながらの道程となった。
森を出たのは、陣を出てから三日後の事だった。
出て少し離れた所に砦が立っており、ここが妖魔との最終防衛線だと教えられた。
一旦その砦に入り、クルトがライルとベレントを連れて何処かへ

行ってしまった。
カズヤはその間に街へと降りる補給の馬車があるかを兵士に聞き出しており、イザークは志希を椅子に座らせて足の手当てをしてくれた。
履き慣れない靴とそれを縛っていた紐のせいで、志希の足は靴ずれを起こしていたのである。
靴ずれに傷薬を塗ってから包帯をして、靴を履く。
その頃にはクルト達も戻ってきており、カズヤも補給の馬車に乗せてもらえるように交渉したと教えに来てくれた。
補給の馬車が直ぐにでも出ると言う事で志希達はそこから近くの町へと移動し、一泊してからすぐさま乗合馬車に乗って町を発つ。
どうやら、クルト達は砦で何かの書簡を受け取って来たらしく、それをこの国の首都に届けに行かなくてはならないそうだ。
急ぎと言う事で、乗合馬車の運賃や諸経費を前金で貰っていると言うのを教えられた。
乗合馬車を乗り継ぎながら首都についた時には、志希がこの世界に来てから十日ほど経過していた。
首都についてから、パーティはいったん解散してしまった。
「一度、宿に行くぞ」
イザークは志希にそう言い、カズヤを見る。
「そうだな。オレとイザークの荷物を預けたら、志希の服と靴を買ってやらねぇと」
カズヤの言葉に、志希はきょとんとした表情を浮かべる。
「え？」
思わず声を上げる志希に、カズヤは呆れた表情を浮かべる。
「シキの足に合った靴をかわねぇと、歩く時辛いだろ。服だって、俺が貸してる二着だけだしな」
女性としては、中々辛い事実である。
「でも、私お金無いよ？」
志希はカズヤにそう告げると、彼は苦笑する。

「道中、シキがクルトの代わりにずっと周囲を警戒してただろ。その御褒美って事で、クルトからお前の身の回りのもん買って来いって金もらってんだ」
「えぇ！？　それは、悪いよ！」
志希は思わず声を上げるが。
「クルトなりの親切だ。貰うのが悪いと言うのであれば、仕事をして返せばいい」
イザークはそう言って、志希の背を押して歩き出す。
「で、でも……」
戸惑った声を上げる志希に、カズヤが苦笑する。
「今無一文なんだから、有り難く受け取っておけって。気がすまねぇンだったら、イザークの言うとおり。稼いでかえしゃ良い」
カズヤの言葉に、志希は小さく唸ってから頷く。
「取り敢えず、オレ達が根城にしてる宿があるんだ。ギルドでも認定されてる場所だから、安全面は保証付きだぜ」
カズヤの言葉に、志希は一瞬考える素振りを見せてから、頷く。
「それは安心だね」
志希の言葉に、だろうとカズヤは頷く。
ギルドと言うのは通称で、本来は冒険者ギルドと言う。
冒険者たちの活動を支援し、補佐をする機関だ。
そも、冒険者と言うのは迷宮などに潜ったりする者達の総称だ。
しかし、近年は民間や貴族、国からの依頼を受けて活動するモノ達も冒険者と呼ばれている。
ギルドはそれらの依頼を取りまとめ、書類として形に残す機関である。
それぞれの国の首都や、大きな町には出張所が必ずある程広まっている物だ。
このギルドに登録する事によって、各国共通の冒険者証明証が発行される。
そして、この冒険者ギルドに認定される宿屋は様々な特典が付い

ている。
手数料込みでお金を預ける事が出来、ここではない他の認定された宿屋へ行ってもお金を引きだす事が出来る。
無論、その際には冒険者証明書が必要だが。
また、一つ一つの部屋は清潔な上に鍵が付いており、荷物の盗難等を心配しなくても良い様になっている。
その分、冒険者ギルドや宿屋で問題を起こせば部屋を借りる事も出来なくなる事がある。
一般の宿屋よりもギルド認定宿屋は値段も手ごろなのだが、それは冒険者にしか当てはまらない。
冒険者ではない人間も宿を借りる事は出来るのだが、冒険者よりも少々割高になってしまう。
志希はそれを思い出し、イザークとカズヤを見上げる。
「でも、私は冒険者じゃないよ？」
志希の言葉に、イザークは頷く。
「ならば、冒険者になれば良い」
あっさりとした返事に、志希はきょとんとした表情を浮かべてしまう。
「大体にして、世界を見て回りたいんだろ？　それなら、冒険者やってた方が都合良いに決まってんじゃねぇか」
カズヤは何言っているのだと言う様に、志希を見る。
「登録自体は直ぐに済む。終わってから、買い物に出ても支障はなかろう」
そこまで言ってから、イザークはふっと志希を見下ろす。
「それとも、止めておくか？」
静かな金の眼が、問いかけてくる。
「いえ、やります。だって、冒険者にならなくても結局は生きる為に何かしなくちゃいけないもの」
志希はそう答え、イザークはそうかと頷く。
金の眼に、若干満足そうな色が浮かんでいる。

どうやら、志希の答えに満足したようだ。
「話は決まったな」
イザークの言葉に、志希は何となく誘導された様な気持ちになるがまぁ良いかと頷く。
志希にとっては悪い事ではないし、世界を見て歩くと言う理由があるのなら冒険者である方が都合の良い事は確かなのである。
「んじゃ、宿に荷物置いてから行こうぜ」
カズヤの言葉に、イザークと志希は頷き歩き出した。

第九話（後書き）

と言うわけで、これから暫く世界観の説明を交えたお話をしていく予定です。
結構長いですが、楽しんでいただけたら幸いです。

第十話

イザークとカズヤの勧めで取り敢えず宿へと行き、二人が荷物を置いて身軽になってから冒険者ギルドへと向かった。

大きめの建物の看板には鷲の紋章が描かれており、その下に文字で冒険者ギルドと書かれていた。

この世界の識字率は低く、冒険者を目指して小さな村から来るものは文字が読み書きできない事が多い。

その為、冒険者ギルドの看板は文字だけではなく紋章が描かれているのだ。

もっとも、冒険者ギルドの紋章もそんなに有名ではないので、結局のところ人に聞いて到着する事の方が多いらしい。

その辺の話をカズヤとイザークから聞かされつつの移動だった為、道を憶え切れたのか少し自信が無い。

覚えていなければ、イザークなりカズヤなりにまた案内してもらえばいいやと志希は思い直して、先を歩くイザークの背中を追いかける。

カズヤもイザークも志希の歩調に合わせて歩いてくれているのだが、何時までも気を使わせるのも悪いと志希は思うのである。

この先の事を考えても、甘え倒す様な事ばかりしていては己の成長が見込めない。

ならば、多少無理をしてでも彼らに合わせる方が良いだろうと言う志希なりの考えであった。

ひょこひょこと足を引きずりながら志希は扉をくぐると、少し呆れた表情を浮かべたイザークとカズヤが志希を見る。

「え、何？」

志希は何故そんな表情をされなくてはならないのかと、思わず問いかける。

「いやぁ……なぁ」

カズヤは何とも言えない表情で
「言いたい事はあるが、先に登録を済ませた方が良いだろう」
イザークは若干棘のある声で、志希を促して受付へと歩いていく。
受付には、人当たりの良い笑顔を浮かべる女性が座っている。
「イザークさん、どの様な御用でしょうか？」
志希の直ぐ横に立つイザークに、女性は問いかけてくる。
「こいつの冒険者手続きに来た」
イザークは若干不愛想に答え、志希の背中を押す。
言われた女性は少し驚いた様に目を見開き、次いでにこっと微笑む。
「わたし、てっきりカズヤ君が連れて来たとばかり思っていたわ」
女性の言葉に、カズヤが若干苦い表情を浮かべる。
「オレ、いっつもそんな事してましたっけ？」
「してるじゃない！　道に迷った冒険者志望の子を案内する事、あなたが一番多いのよ？」
くすくすと女性が笑いながら、カズヤをからかう様に見る。
「からかうのは良いが、さっさと審査を済ませてくれ」
イザークの少し不機嫌な声音に、女性ははいはいと頷きながら志希に向き直る。
「それじゃ……名前と性別、種族を言いながらここに書いてくれる？」
女性は羊皮紙と羽根ペン、インク壺を示して言う。
志希は頷いて書きだそうとするが、むっと眉を潜める。
文字の読み書きは出来るのだが、実際するのは初めてだ。
しかし、それ以上に自分の種族と言うものをどう明記するかに困ったのだ。
志希のその迷いに気が付いたのか、イザークが志希の耳元に顔を近づけ、囁く。
「人間と明記しておけ。珍しい目の色や髪の色だとしても、それが一番無難だ」

イザークの低く、艶のある声が耳元で囁く事に、志希の膝が一瞬萎える。
「あっ、大丈夫!?」
受付の女性が心配そうに声をかけてくるのに、志希はコクコクと頷く。
「だ、大丈夫です」
志希がそう言うが、カズヤが椅子を持って来て志希を座らせる。
「疲れてるんだろ。椅子に座って、書いた方が楽だぞ」
カズヤの勧めに、志希は素直に頷き座るが、若干顔が赤い。
志希は恥ずかしいやら悔しいやらと言った心境だが、それを言った所でイザークの身体的特徴なのだから苦情を言うのは筋違いだ。
親切に助言してくれた事を思えば、文句を言うよりもお礼を言う方が適切と言うのもある。
なので、少々憮然としながらも羽根ペンで自身の名前と性別、種族を羊皮紙に書いていく。
受付の女性は志希の文字を書く少々ぎこちない手つきを見ていたが、羊皮紙に書いたその文字に安堵した様な笑顔を浮かべる。
「はい、合格よ。字の読み書き、どこかで習っていたのかしら?」
受付の女性の言葉に、志希は不思議そうな表情をしてから慌てて頷く。
「は、はい」
「そう、幸運ね。読み書きできなかったら、一月はそちらの学習に時間を取られて冒険者証を貰えないのよ」
彼女の言葉に頷きながら、志希はこの世界の常識を改めて思い出す。
読み書きができなければ、張り紙などを読む事が出来ないし書類にサインをする事も出来ない。
パーティを組んでいればリーダーがその辺りをやってくれるが、何時までも人に頼り切りにするのも良くないだろうと言う話で、冒険者志望の読み書きできない人間にそれらを教えると言う授業が組

まれる事となったのである。
この授業を受けてからでなければ、冒険者証を発行してもらえない。
依頼人との契約確認の際に文字が読めなければ、自分に不利な条項などが盛り込まれている事に気が付かず、騙されてしまう事もありえるのだ。
自分の身を護る為の手段の一つでもあるし、余計な騒動の種にならない様にという配慮もある。
心身ともに身を護るための手段の一つとして、存在するのであった。
「それじゃ、冒険者証の説明を始めるわね」
少々ぼんやりしている志希に、女性はそう声をかけてくる。
「あ、はい。お願いします」
いちいち自分で思い出すのが面倒くさかったので、志希はありがたく説明を聞く事にする。
「冒険者証は持ち主のランクを表していて、駆け出しは鉄の小さなプレートにあなたの名前や情報を書き込む事になるわ。書き込む情報はあなたが受けた依頼の達成率や犯罪歴、その他諸々よ」
女性の言葉に、志希は頷く。
「ランクを表すプレートは鉄、銅、銀、金、白金の順番に高くなるわ。ちなみに、白金ランクの冒険者は現在居ないわ。十年前くらいまでは居たんだけど、ある国の窮地を救った事に寄る功績で、そのある国の王様になったの。一緒にパーティを組んでいた仲間達は、それぞれ神殿や国の重鎮になったりしたんですって」
受付の女性の言葉に、志希は感心した表情を浮かべて頷く。
「あっと、ちょっと話が逸れたわね。それで、ランクを上げるにはある程度の依頼を受けてから、ギルドが出す昇進試験に合格すれば上がるわ。それで、ランクにあった仕事を斡旋するから、頑張ってランクを上げてね」
女性はにっこりと笑い、ごそごそと引き棚を漁り始める。

「それと、冒険者証であるプレートは唯一あなただけの物です。紛失したりした場合、それなりの手数料を頂いてから再発行する事になります。また、偽造などは出来ない様に加工されておりますので、失くした場合は直ぐにでもギルドの方に手続きに来てくださいね」

説明を続けながら女性は目当ての物を発見したらしく、いそいそと取り出してきた。

それは細かな文様がびっしりと刻まれた二枚の水晶の板で、一目で魔道具だと分かるものである。

更に引き戸から鉄の板を取り出して、一枚だけ置かれた水晶の板の上に置く。

その鉄の小さなプレートの上に羊皮紙を置き、更にその上にもう一枚の水晶の板を置く。

つまり、水晶の板で鉄のプレートと志希の名前が書かれた羊皮紙がサンドイッチされているのである。

「それじゃ、シキ・フジワラさんでしたね。この板の上に手を乗せてくれます？」

女性の言葉に志希は頷き、恐る恐る水晶の板の上に手を乗せる。

すると、水晶の板が発光して羊皮紙が燃え上がる。

志希は驚くが、熱さが伝わってこないので手を引くのを我慢してそのまま指示を待つ。

「ん、上手く出来ましたね。これで、シキさんの冒険者証は完成です」

志希に手を退ける様に指示してから、女性は水晶の板をはずして鉄のプレートを手に取る。

表面には何も見えていないのだが、志希が受け取ると鮮やかに文字が浮き出る。

「これは、シキさんが持つ事でしか証としての役に立ちません。シキさんが触れる事以外に情報を読む為には、ギルドにある魔道具を使う事でしか出来ません。ですので、悪用される事はありません」

志希は受付の女性の説明に、成程と何度も頷く。

「手続きは、これで終了です。では……これから先、どのようにして経験を積んでいくのかはあなた次第です。ランクに合わせた仕事をギルドは紹介していきます。ですが、一つ上のランクのお仕事も受けられますので、出来そうだと思いましたら受けて見るのも手です。ただし、失敗した場合はあなたの評価が下がりますので、きちんと自分の能力を見極めて依頼を受けてくださいね」

真剣な受付の女性の言葉に、志希ははいと返事をして頭を下げる。

「ご教授、ありがとうございます。出来るだけ、自分の力で出来る物からやってみます」

志希の真剣な声音に、女性はにこっと微笑む。

「はい。頑張ってください」

女性の励ましに志希は頷いて、椅子を立つ。

後ろで依頼を張りつけている木板を見ていたカズヤとイザークは振り返り、口を開く。

「終わったか」

「お疲れさん。取り敢えず、今日はこのまま着替えやら服やらを買いに行こうぜ」

イザークの確認の言葉に被せる様に、カズヤは早口に予定を告げてくる。

志希はきょとんとした表情を浮かべるが、カズヤはイザークと志希を急かしてギルドを出る。

その直後、カズヤが志希に向き直って口を開く。

「シキ、大人しく受付嬢の話なんか聞く必要ねぇンだぞ。その辺は、俺達の方でも説明出来るんだから」

カズヤの言葉に志希は戸惑った表情を浮かべると、イザークが苦笑する。

「先程、お前の受け付けをした女が居るだろう？　名はミラルダ言うのだが、新人相手に説明をするのが生きがいの様で、何時も話が長い」

イザークの説明に、志希は納得してしまう。

流れる様な説明は手慣れているのと同時に、ちゃっかり己の感想などまで言っていたからだ。
「ミラルダが相手だったけど、説明があれだけで済んだのは幸運だな。もし読み書きできなかったら、雑談交じりの説明を長々とされてたぞ」
カズヤの心底嫌そうな言葉に、苦笑してしまう。
「でも、それは仕方ない事でしょ？」
志希の言葉に、カズヤはそうだがと嫌そうに顔を顰める。
「まぁ、もう終わったんだから気にしないで。それより、服とか買いに行くんでしょ？」
志希の一言に、イザークが頷く。
「そうだな。一応、冒険者として必要な物も買い揃えておかねばなるまい」
そう言って、イザークはカズヤと志希を促して歩き出す。
先ほどよりも少しだけ歩く速度が遅いのは、志希の靴ずれを慮ってだろう。
無口で冷たい印象を受けるイザークが、意外と優しい事に気が付いた志希は小さく笑みを浮かべる。
自分を殺した男だが、無差別に人を害する人間ではない。
むしろ、他人に思いやりを抱ける人間である事に安堵する。
無論、自分を殺したという事実が消えるわけではないし、それに由来する複雑な感情はある。
だがそれでも、人間らしいイザークの一面は志希を酷く安心させるのだ。
そんな志希の心境に気がつく事もなく、イザークとカズヤはどこの靴屋に行くかを相談していた。

第十話（後書き）

説明が、長い長い。
とりあえず、この世界の識字率は低いという事にしました。
魔法があっても、文字を読み書きできる人は一般人には少ないと思ったのですよ。
そして、冒険者の識字率が高いのは本編で書きました通り、悪い依頼人に引っかからない様にという自衛です。
まぁ、冒険者ギルドができたのはきちんと理由があるので、後々明かしていけたらいいなと思います。

第十一話

靴屋から始まり、服屋から道具屋、武具屋を巡って宿屋に戻ってきた三人。

結構な荷物があったのだが、イザークが一人で軽々と持っている。

志希はカズヤに付き添われて、部屋を借りる手続きをしていた。

何でも人に頼り切るのではなく、自分で出来るようにしたいと言う志希の言葉を受けての事だ。

「部屋は二階だって」

志希は鍵を受け取り、カズヤを伴ってイザークに声をかける。

「オレらの隣にある小部屋を借りさせた。なんかあった時には、便利だろ」

カズヤの言葉にイザークは頷き、瞳で二人を促して階段を上る。

先頭に立って歩くイザークの後ろを志希はついていき、その後ろを歩くカズヤは志希に色々と宿の説明をする。

「飯食う時は、さっきの食堂兼酒場に行けば良いぞ。飯代は別で、料理を持ってきた時に金を払えば良い。もちろん、外の他の食堂で飯を食うのも可だ。依頼を受けて外に出る時は、鍵を返しておくんだぞ。あと、大きな街には大概公衆浴場があるんだ。もちろん、この街にもあるぜ」

カズヤの言葉に、志希は驚いた声を上げる。

「そうなんだ！　良いなぁ」

志希の言葉に、カズヤは苦笑する。

「まぁ、料金取られるけど入りに行こうぜ。十日も体拭くだけの生活だったろ？　砦でも頭を洗っただけだったしな」

カズヤの勧めに、志希は眉を潜める。

「でも……クルトさんに悪いし」

今日の買い物代も含めた当面の生活費を彼から借りている事を考え、志希は遠慮するべきだと呟く。

だがしかし、志希も女で現代日本人だ。疲れを癒す為に風呂に入って、さっぱりしたいという欲求がある。
「行くぞ。気になるなら、出世払いで俺が出してやる」
イザークが志希に言いながら、二階廊下の奥の部屋の扉を開く。
「そうそう。女の子なんだから、綺麗にした方が良いって」
カズヤは志希の背中を押して、部屋へと入る。
「基本一人用は高いんだけど、この部屋角にあって狭いから安くなってんだ。荷物置くのにちょっと苦労するかもしれねぇけど」
カズヤの説明に志希は成程と頷いていたが、イザークが荷物を床に降ろしたのに気がつき慌てて頭を下げる。
「イザークさん、ありがとうございました」
お礼を言う志希に、イザークはやや不機嫌そうな表情で口を開く。
「礼を言うより、それを止めてくれた方がありがたい」
イザークの突然の言葉に、志希は戸惑う。
そんな彼女の様子にカズヤは苦笑しつつ、頭を振る。
「オレらの事、さん付で呼ばなくて良いし敬語もいらねぇって事だよ」
カズヤの台詞に、志希は更に困惑してしまう。
色々とお世話になって、助けられているのだから当然のことだろうと思っているのだ。
「同じ冒険者の仲間だ。堅苦しくする必要はない」
イザークはそう言って、志希を見る。
「……わかり、分かった。ありがとうイザーク、カズヤ」
志希のお礼の言葉に、二人はうむと頷く。
「そんじゃ、シキも風呂入る準備して来いよ」
カズヤはイザークを連れて、早々に部屋を出て行く。
志希は気を使ってくれたカズヤに苦笑してから、荷物の一部を解いて着替えの下着と服を取り出す。
今日、二人が案内してくれた店では女性用の服と下着が売っていたのでかなり助かった。

明日になったら、カズヤからずっと借りっぱなしの服と下着を洗って彼に返そうと思いつつ着替えを袋に入れて部屋を出る。
部屋に鍵をかけてから酒場へと降りると、カズヤとイザークがカウンターの席に座って待っていた。
志希に気付いた二人は椅子を立ち、カウンターの向こうに二三声をかけてから志希を連れて宿を出る。
「んじゃ、行こうぜ」
志希は頷き、二人に並んで歩き出す。
そろそろ昼を回る時間で、比較的人が少ない街並みを見て歩く。
「シキ、珍しいのは分かるが前を見ろ」
イザークが見かねたのか、そう声をかけてくる。
「前をきちんと見て歩かないと、変なのにぶつかって絡まれるぞ」
カズヤは苦笑しながら注意してくれたので、志希は頷いて前を見る。
それでも見慣れない街並みは珍しくて、ついよそ見をしながら歩いてしまう。
本当に中世ヨーロッパ的な町並みは、現代日本人の志希にとっては珍しいとしか言いようがない。
この様な町並みを現代で見られるのは、文化遺産として街そのものを保護されている場所くらいだろう。
そんな古めかしい街並みを、やはり古めかしい服装を着た人々が歩いている。
今自分が着ている服も古めかしく、飾り気のない実用的な物だ。
おしゃれ等、冒険者や一般庶民にはほとんど縁のないものなのだろう。
そんな事を考えていると、カズヤがぐいっと志希を引っ張る。
「危なっかしいから、ここ歩けよ」
そう言いながらカズヤは、イザークと一緒に志希を挟んで歩く。
左右を男性に挟まれた志希は何となく威圧感を感じる訳なのだが、心配しての行動なのは理解しているので大人しく歩く。

「そうだ、シキ。首都やそれなりに大きい街は上下水道が完備されてるんだぜ。だから、中世の欧州みたいな街並みでも臭くないって訳だ」

と、カズヤが徐に言い出す。

「ああ、実際中世の頃のあっちって凄い不衛生だったらしいもんね」

志希はカズヤの言葉にうんうん、と頷く。

中世ヨーロッパには下水道など無く、糞尿垂れ流しで放置していたのである。

お陰で街全体に悪臭が立ち込め、物凄い不衛生であった。

無論、疫病が流行ったのもそのせいとも言える。

「そうそう。上下水道を広めた人には、マジで感謝だよな」

カズヤの言葉に、志希もうんうんと頷く。

「そう言えば、クルトから上下水道を作った人間は異世界人だったらしいと言う話を聞いたな」

イザークが思い出したように呟く。

「え、マジで！？」

カズヤが思わず問いかけるが、志希は普通に頷いているだけだ。

「クルトから聞いた話は、だ。詳しく聞きたいのなら、奴に聞いてみれば良い。それより、着いたぞ」

イザークの言葉に、志希は前を見る。

目の前には、冒険者ギルドよりも大きな石造りの建物があった。

扉を開いて中に入りながら、イザークは志希に言う。

「この時間帯は人が少ないからな、シキでも安心して入れるだろうが……あんまり目立つ様な入り方はするなよ」

イザークの言葉に、志希はコクコクと頷く。

言われて思い出したのは、額と右手にある『神無の鳥』の証。

「分かってる」

志希の返事に、イザークは若干不安そうだ。

「おっちゃん、男二人に女一人」

カズヤはさっさと受付に座る男の元へと行き、料金を支払ってい

る。
「あいよ。こっちが男二人の札とタオル、こっちが女一人分の札とタオルだ。使い方は、わかるか？」
男の問いかけに、カズヤは志希をよぶ。
「シキ、説明聞いとけ」
「あ、うん」
イザークと見つめ合っていても仕方が無いので、志希は大人しくカズヤに返事をして説明を聞きに行く。
「この札は、お前さんの荷物を入れるつづらの鍵を兼ねてるから失くすなよ。で、このタオルは風呂からあがって、体を拭くのに使うもんだ。こっちは、体を洗うのに使うとええ」
男の説明に、志希はふんふんと頷く。
「中には石鹸が常備してある。ただし、髪の手入れなどに使う香油は中にある売り場で購入する形だ。小さな瓶で販売してるから、一つで三回分ほどは使える。基本安い香油しかないからの、他の物が欲しければ自分で持ち込んでくれ」
これ以外には、湯船に入る前に体をお湯で流して欲しいとか、タオルを湯船に浮かべないで欲しいと言う日本では定番の注意事項を言われた。
また、どうやらお湯が出る蛇口があるらしく、そこで体を洗う様にとも言い添えられた。
それらの話を聞き終ってから、男女別の入り口から中へと入り、靴を札と同じ模様の箱に入れる。
どこからどう見ても、日本の銭湯その物の下駄箱に志希は何とも言えない表情を浮かべてしまう。
きっと、公衆浴場の元となった物を作った人は日本人だと思いつつ、志希は札と同じつづらを探して荷物を入れる。
周囲を見回せば、売り場に居る女性以外は人が全く居ない状態であった。
これからは、出来るだけこの時間帯にお風呂に入りに来る方が良

さそうだと悟る。
この時間帯を逃した場合は、深夜帯に来る事になるだろうと志希はひっそりと嘆息する。
普通に接してくれている人たちが居るからか、自身の姿が人と言う種族にとって珍しい種類である事を忘れていた。
街中でその視線を感じなかったのは、おそらく外套を頭から被っていたからだろう。
良く考えれば、物凄く不審者だ。
靴屋や服屋で感じていたなんと無く胡散臭いものを見る視線は、そのせいだったのだろうと今更気が付いた。
志希は小さく溜め息をつき、外套を脱ごうとして小さな金属音を耳にする。
いつの間にか、外套のポケットの中にお金が入っていたようだ。
取り出して見ると、銅貨が二枚。
丁度、香油を買う分のお金である。
「……カズヤかイザークが、気を利かせて入れてくれたのかな？」
思わず呟き、頬が緩んでしまう。
意外に世話を焼いてくれる二人に若干の申し訳なさと多大な感謝を抱きつつ、志希は銅貨二枚を握りしめて売り場に居る女性の元へと足を向けた。

第十二話

思う存分入浴を楽しんだ志希は、綺麗な服と下着に着替えて新しい靴を履く。
以前履いていた靴はもう一枚持ってきた袋に入れて、持って帰って洗うつもりだ。
外套の方も新しい物に変え、ライルから借りっぱなしの外套も後で一緒に洗濯だ。
額に巻いた布はやや色の濃い青で、下にある証の形が分からない様に少し工夫をした巻き方をしている。
その最中で、右手の証がどうやら誰の目にも留っていないらしい事に気が付いた。
良く考えれば、今までずっと右手を使った生活をしていたのに誰一人として指摘していないのだ。
そう思った時、無意識下に眠っていた知識が浮かびあがってきた。
眠っていた知識曰く、右手の証は『神無の鳥』にしか見えないらしい。
極稀にそれを見る事が出来る人間も居るが、その者は死後に『神無の鳥』として目覚める可能性が高い。
本当にごくごく稀な事らしいので隠さなくても良いような気がするが、既に指の無い皮手袋を買っている。
せっかくあるのだからと、志希は両手に手袋をはめる。
ゴムの跡を残すのは嫌なので、髪を丁寧に拭いた後は櫛で梳かすだけにして自然乾燥させる事にする。
帽子を被った方が良いか悩んだが、公衆浴場で売り場の女性に見られているのだ、隠すのも馬鹿らしい。
それでも、外套の帽子を何時でもかぶれる様にして志希は受付の所へ出る。
「おっ……おおう」

カズヤは志希に気が付いて振り返ったが、何故か変な声を上げて仰け反る。
イザークは何事も無かったように頷き、口を開く。
「香油代は足りたか？」
どうやら、イザークが外套のポケットに入れてくれたらしい。
「うん、ありがとう。でも、できれば一言欲しかったな」
志希の言葉にそうかとイザークは返事をして、カズヤと受付を見る。
「いや、驚いた。ハーフアルフか？」
男の問いかけに、志希は小首を傾げる。
「人間だよ、珍しい色だけど」
カズヤは慌てて男にそう言って、志希の所に駆け寄る。
「なんで帽子かぶってねぇンだよ」
「いやだって、何時までも被って隠すもんでもないでしょ。売り場の人にはバッチリ見られてるんだし」
志希の言葉は正論で、カズヤは思わず詰まる。
「そうだ、お風呂代と香油代は出世払いで良いかな？　何時までも、甘えっぱなしはないでしょ？」
志希の言葉にカズヤは肩を竦め、イザークは無言で頷く。
「それじゃ、宿に戻らない？　クルトさん達が戻ってるかもしれないし、お腹空いた」
志希の一言に、そう言えばとカズヤがお腹を押さえる。
「朝から何も食ってねぇな」
カズヤの言葉に志希は頷き、イザークを見上げる。
「そうだな」
イザークはあっさり同意したことで、三人は歩き出す。
帰り道を歩いている時、志希が余所見をしない様にとカズヤはしっかりとガードしつつ歩く。
イザークも、それと無く余所見をしそうな時には声をかけて注意を引きもどして歩かせていた。

志希はなんとなく、子供扱いされている様な気がするのだが文句を言うのも大人気ない。
大人しく二人に挟まれて、志希は宿への道を歩く。
その間終始無言だが、カズヤがちらちらと此方を見るのを感じていた。
何がそんなに気になるのかとは思うが、問いかけて藪蛇になるような事態は避けたいので黙って歩く。
そんな志希の様子に気が付いたのか、イザークが口を開く。
「どうやら、カズヤはシキが気になる様だな」
イザークの言葉に、志希は思わず彼を見上げる。
余計な事をと言う意思を込めて見れば、イザークは小さく笑う。
「シキが先程から気になっているのか、そわそわしているぞ」
イザークの指摘に、カズヤはああと声を上げる。
「悪い悪い。オレらみたいなあっさり顔だと、あんまりこの色似合わねぇんじゃねぇかと思ってたんだが……不思議と似合ってるんだよなぁ」
失礼なカズヤの言葉に志希は一瞬ムッとするが、自分が鏡を見た時の事を思い出して首を傾げる。
「そう言えば、そうだよねぇ」
藪蛇を恐れていたが、そうではない不思議な事を教えられて志希は思わず考え込む。
「『神無の鳥』と言うモノが銀髪金目であるのなら、それになった志希が似合わないという道理はなかろう」
イザークが日本語で、自身の見解を述べる。
大通りで話す内容ではないと判断したからなのであろうが、突然言葉が変わった事に一瞬驚いてしまう志希。
しかし、カズヤは特に動じた様子も見せずに成程と頷く。
「ああ、そりゃ確かにそうだ。日本人なのに黒髪黒目が似合わないとか、違和感を覚えるとかはねぇだろ。アジアのそういう人種でも、大概黒髪黒目が似合わないとかないからなぁ」

後からなったものであろうとも、種族として似合わない事はないと二人は納得している。

［その割に、私の顔ってあんまり変わってないと思うんだけどなぁ……］

志希の呟きに、ふむとイザークが唸る。

［それは、知らぬ間に志希自身の認識を変えられていたのではないのか？　それか、自分の顔だと認識する程度の変化なのか。肉体が変わっているのであれば、顔が変わっていてもおかしくはなかろう］

イザークの言葉に、志希は目眩を覚える。

「成程……それは、その通りだわ」

考えもつかなかったと、志希は思わず呟いてしまう。

「大丈夫か？」

カズヤは、顔色が悪くなった志希に問いかける。

「あ、うん。大丈夫。ちょっと、思いもよらない事言われたので目から鱗って感じなだけだから」

そう答えて、志希は歩きながら気を押さえようと胸に手を当てる。

彼女のその仕草に、イザークは不意に二人から離れる。

「おい、イザーク」

カズヤが驚いて声を上げるが、イザークは足早に道の端に露店を開いている果物屋へと向かって行く。

店主らしい女性と何か話をしてから、果物を三つほど手にして戻ってくる。

「プルの実だ、甘いぞ」

そう言いながら手渡してきた果物は、志希が森で木の精霊から貰ったリンゴと同じものだった。

「リンゴじゃないの？」

志希の思わず出た言葉に、カズヤが頷く。

「ああ、こっちではプルの実だ。知らねぇのか？」

カズヤの問いかけに、志希は頷きかけてああと声をかける。

「そうだ、うん。そうだよね」

志希は何度も頷き、納得した様子を見せている。
「経験が伴わない知識は、身に着くまでに時間がかかるって事かぁ」
志希は思わずと言った様にぼやき、小さく頭を振る。
その仕草に、イザークとカズヤは訝し気に志希を見る。
「気にしないで。それより、ありがとう」
志希はイザークに礼を言って、皮を袖で拭いてから齧り付く。
「甘い、美味しい」
口に広がる甘酸っぱさに思わず頬を緩める志希に、イザークは何処か安心したように眼を和ませて自身のプルの実に齧り付いた。

第十三話

宿に戻り、荷物を部屋に置いて酒場に降りると、丁度クルト達が戻ってきた。
イザークとカズヤ、志希の三人は部屋の少し隅の方で席を取り、食事を頼んで三人が荷物を置いてくるのを待つ。
少しして、服を着替えた三人が戻ってきて、それぞれ三人がけの椅子に座る。
「お疲れ様です」
志希は、何やら疲れた表情をしている三人に声をかける。
「ああ、ありがとう」
ベレントは志希の言葉に笑みを浮かべ、運ばれてきた酒に口をつける。
「全く、疲れましたよ。朝食もまだ取っていないのは此方も同じだと言うのに、何時間も待たせるんですよ？」
ライルは苛々と言い、クルトはまぁまぁと宥めながら三人を見る。
「イザークとカズヤは、ボクが頼んだ事をしてくれたみたいで良かった」
イザークは無言で頷き、カズヤは苦笑する。
「まぁ、な。何にも分からない場所で女の子を一人にするの、オレとしても嫌だったからさ」
カズヤの言葉にクルトは微笑み、それでと志希を見る。
「シキは、この先どうするつもりなんだい？」
いきなりの問いかけに、志希は一瞬驚いた表情を浮かべるが、直ぐに微笑む。
「取り敢えず、自分の出来る依頼をやるつもりです。私にできる事は少ないから、体力をつけつつクルトさんからお借りしているお金を返そうと思います」
当面の目的を口にした志希に、クルトは頷く。

「了解。シキが返したいって思っているのは理解したよ。それじゃ、その分のお金をイザークから取り立てるから、シキはイザークにお金を返してくれるかな？」

クルトの突然の言葉に、シキは唖然とした表情を浮かべる。

しかし、イザークは分かったと頷き席を立つ。

「ちょっ！？」

止めようと手を伸ばす志希だが、イザークはすたすたとカウンターの方へと行ってしまう。

動揺している志希に、ベレントがかかと笑う。

「あいつなりに、責任を感じておるんじゃよ。それに、ワシらとはいつまでも組んでいる事はできんしな」

ベレントの言葉に、志希はキョトンとした表情になる。

「え？　そうなの？」

志希の問いに、ライルが苦笑する。

「クルト達には、元々組んでいたメンバーが居るんだ。その人達のちょっとした事情で、数か月ほどパーティを離れてるんだよ」

カズヤはそう、志希に説明する。

「イザークとカズヤはクルトの紹介である分腕も立ちましたが……やはり、君達と合った仲間を見つけるべきなのだと思います。何時までも、私達が手を引ける訳でもありませんし」

ライルの説明に、カズヤは頷く。

「そうだな。このままでは、クルト達にただ甘える結果になる」

そう言うのは、お金を入れた革袋を持って戻ったイザークだ。

「クルト、納めてくれ。銀貨五十枚だ」

イザークの言葉に、志希は喉を鳴らす。

この世界の通貨は、銅貨、銀貨、金貨、白金貨と言う種類がある。

銅貨百枚で銀貨一枚に両替出来て、銀貨百枚で金貨に両替できる。

その上の白金貨はあまりにも高価過ぎる為、商人や貴族位しかお目にかかる事はないだろう。

また、庶民の一月の生活費は大体銀貨二枚だ。

それを考えれば、仕度金だと言われて渡された金額は目が飛び出るほど高額である事がわかる。
青褪めた志希に気が付いたライルは、苦笑する。
「身の丈にあった依頼を受けて行けば、割と早く返す事も出来るから安心なさい。何より、知られて居ない遺跡を発見して中の品物を持ちかえれば、銀貨五十枚はあっさり手に入るものですよ」
ライルの言葉に、カズヤも頷く。
「枯れた遺跡の中にも、もしかしたら隠し通路があるかもしれねぇって言うしな」
冒険者が憧れる職業の一つであると言うのは、この様な一攫千金の可能性があるからだ。
「遺跡関係は殆ど探索されつくされておるからなぁ。それよりも、手っ取り早いのであれば妖魔退治じゃろうて」
ベレントがそう言い添えて、もう一杯酒を頼んでいる。
「まぁ、それより食事が来たから食べようよ」
クルトはイザークから渡された革袋を懐に仕舞い、皆に声をかける。
給仕の女性が沢山のお皿を持って登場し、テーブルの上に置き始める。
何時の間にかクルト達も料理を頼んでいたらしく、テーブルの上に所狭しと並べられる料理。
色々と混乱していた志希は、それをぼんやりと眺める。
ぱっと見た感じはイタリア系の料理なのだが、ところどころに中華風の食べ物も混じって見える。
主食はパンらしく、やや堅そうな黒いパンが中央の籠に入っている。
「取り敢えず、腹がへってるとロクな事考えないからな」
と、カズヤはおもむろに肉を切り分けて志希の皿に置きだす。
「ほら、食え」
カズヤに言われて、志希はのろのろと食べ始める。

一緒に居る事は出来ないと言う言葉と、この先一人でイザークに借金を返す事を考えると酷く暗鬱とした気持ちになる。
「そうそう。カズヤとイザークは、この先どうするんじゃ？」
ベレントが不意に、二人に問いかける。
「この先ってなぁ……」
カズヤがうーんと首を傾げていると。
「俺は、暫くシキと組んでみようと思っている」
イザークはごくあっさりと、告げる。
「俺が一度殺したのだから、シキが独り立ちできるまで面倒見るのが筋だろう」
イザークの言葉に、シキは唖然とした表情で彼を見てから、慌てて声を上げる。
「ま、待って！　イザークがそう言う事したのって、私がその……アレされたからでしょ？　それだったら、普通に考えて仕方が無いと思うの！」
志希のお人好しと言っても過言ではない言葉に、ああとカズヤが頷く。
「まぁ、目ぇ離しとくのは怖いよなぁ」
カズヤの呟きに、イザークが頷く。
「変わった娘だのぉ。自分を殺した人間を気遣いなど、普通はせんじゃろうて」
ベレントはからからと笑い、酒の入ったジョッキを煽る。
「まぁ、納得したからといって普通は多少なりとも恨む筈なんですけどねぇ」
ライルも言いながら、パンにスープを浸して食べる。
「まぁ、その辺りは気にしなくても良いんじゃないかな？　少なくとも、シキはイザークとも普通に接しているみたいだしね」
クルトは安心だと言う表情で言い、志希は憮然とした表情を浮かべている。
「まぁ、三人で出来る依頼を受けてシキが慣れる事から始めるかぁ」

カズヤは仕方が無いとでも言う様に、これからの事を呟く。
「えっ……えぇ!?」
いつの間にかイザークとカズヤの二人とパーティを組む事になっている事に、志希は驚愕の声を上げる。
「それが良いだろうね。それに何より、シキは盗賊と戦士を探す必要が無いし、イザークとカズヤは新しく精霊使いを探す必要が無いから」
クルトはうんうんと頷き、二人にとっての利点を口にする。
「一人での依頼はあんまりないのですから、少人数でもパーティは組んでおいた方が良いですよ」
ライルはそう言って、志希を見る。
「実際、貴方と同じ言葉を話せる人間が傍に居る方が心強いでしょう?」
ライルの微笑みに、志希はこくりと頷く。
「私としては、貴方に非常に興味があります。ですが、生きている人を研究対象にするのは塔の学院では禁じられていますので、興味だけで留めておきますよ」
くすり、と貴族然とした笑みで、ライルは言う。
志希はその笑みに背筋を泡立たせ、思わず姿勢を正してしまう。
「あんまり怖がらせんなよなぁ」
カズヤは苦笑しながら言い、パンをちぎって口に入れる。
「おや。別に、怖がらせているつもりではありませんが」
ライルはそう言いながら、スープをスプーンに掬って飲む。
「そうじゃ、シキはこの街が初めてじゃろ。カズヤ達に、街の中を案内してもらってはどうじゃ? どうせ、こ奴らの事だから必要な所にしか連れて行っていないんじゃろうしな」
ベレントの言葉にイザークとカズヤは無言になり、志希はこくりと頷く。
「日用品やお風呂を優先したのは褒めてあげるけど、街の中の案内もきちんとしないと駄目だよ? 道だってきちんと覚えてないだろ

うしね」
　クルトはカズヤとイザークに言い聞かせてから、志希を見てにっこりと笑う。
「冒険者の荷物は少ない方が良いけど、女性は色々と必要な物が多いからきちんと買って持ち歩くんだよ？」
　クルトの言葉に、志希は一瞬考えてから顔を真っ赤にする。
「はっ……はい」
　耳まで赤くして頷く志希に、カズヤとイザークは不思議そうな表情を浮かべて彼女を見ている。
　そんな二人にライルはくすくすと笑うが特に何も言わず、ベレントも知らぬが花と言わんばかりに酒を煽っている。
「それじゃ、今日から君達は三人パーティだよ。無理をせず、自分達の身の丈にあった依頼をする事。あと……何か、どうしても解決できない事が出来たら、相談しに来ると良いよ」
　クルトはそう言って、にっこりと微笑む。
「ああ、その時は頼む」
　イザークはそう言って、スライスした肉を野菜に巻き付け食べる。
「イザークは偉そうだな、おい。まぁ、その時はよろしくお願いします」
「お願いします」
　カズヤと志希は礼儀正しく頭を下げて、クルトに謝意を示す。
「まぁ、堅苦しいのはこれ位にしておけ。飯がまずくなるぞ」
　ベレントがかんらかんらと笑い、二人に食事をする様に進める。
　志希とカズヤはその勧めに頷き、食事を再開するのであった。

第十三話（後書き）

あれよあれよという間に、イザークとカズヤの二人とパーティを組む事になっているのでありました。
また、今回で取り敢えずお金の価値などを語ってみました。
冒険者のランクに関してもちょっと書きましたよ～。
まぁ、基本的に同じくらいの人たちが組む方が実力差がつき過ぎないのでいいのではないかと普通に思ったので、この様に書きました。

まったりペースですが、皆さんもまったりと楽しんでくださると幸いです。

第十四話

この世界には、沢山の神が居る。
その神々を束ねているのは、法と光の神ヴァルディルである。
大きな剣を右手に持ち、左には法を示す天秤を持っている。
王族や貴族、司法関係者、また警邏隊や自警団などに信徒が多い神である。
この神の信徒は剣を好んで持ち、神殿から祝福された剣を下賜される事もある。
神を模ったと言う像は、白亜に輝き陽光を一身に受けている。
主神でもあるこの神の右隣りには、大きな鎌を左手に持ち、右手には稲穂を持った女性の像がある。
ゆったりとした着衣の像は、慈母の表情を浮かべている。
この像の女性こそ、大地と豊穣の女神エルシルである。
稲穂は豊穣の証だが、左手に持っている鎌は命の証である。
生き物とは、生と死を繰り返す存在だ。
鎌は命の循環を正しく導くと言う象徴であり、大地母神の神官戦士が持つ武器でもある。
大地の女神の像から左の主神像を超え、更に左を見れば、そこには鉄壁の防御と言わんばかりのがっちりとした鎧を着込んだ女性の像がいた。
その右手にはハルバートを掲げ、左手には大きな盾を持っている。
羽根のついた兜から流れ出る髪は長く、腰のあたりで三つ編みになっている。
勇ましい出で立ちのこの女神像は、処女神にして戦女神であるワキュリーだ。
主神と大地母神の間に生まれた女神とも言われているが、それは定かではない。
ワキュリーの信徒の多くは、神の像が持っているハルバートを好

んで使っている。
ワキュリーの隣に居るのは、どこかおっとりとした表情を浮かべた男性が針と石板を持つ知識の神であるクミルの像だ。
知識の探求や、発明家等が信奉する神である。
塔の学院と呼ばれる施設でも祀られ、学者や賢者達に敬われている。
俗に、魔術師の守護者とも呼ばれているのは、魔術師もまた知識欲が旺盛だからであろう。
この神の信者の多くは、手にしている刻印の針の延長で刺突武器であるレイピアをこの神固有の武器であると考えている。
知識の神像の隣で大きな槌を振り上げているのは、工芸と芸術の神であるリージアン像だ。
がっしりとした体躯と、短く刈った髪が酷く男らしく見える。
芸術家だけではなく鍛冶を生業にする者達も多く信奉し、祀っているのはやはりその大きな槌のせいだろう。
芸術家と言うのはとかく、気に入らない自身の作品を壊してしまいがちだ。
その際に役に立つのは槌である事が多い。
また、槌と言うのは鍛冶の際に用いられる事が多く、それ故に鍛冶職の者からも信仰を得られているのである。
ドワーンが最も多く信仰している神で、彼らにしては主神よりも身近な神なのである。
この神の神官たちは、ハンマーを好んで身に付けている。
その反対側に視線を転じれば、大地の女神の隣に鎮座ます神の像が見える。
福福とした笑顔を浮かべたその男性の像は、右手には鋤を持ち左手には大きな袋を持っている。
今まで西洋風で来ていたのに、何故かここに来て大黒様を見ている様な気分になってしまう。
この神様は、幸運と流通の神マービスである。

幸運と流通の神は、流れると言う事から水の神とも言われている。
主に信仰している者は、商人と船乗り達だ。
彼らは、実際に使う事はなくても海に出る際には銛を携え、陸を行く際には槍を携えて行く。
この六柱以外の神はあまり有名ではなく、力も弱い為に名前すらほとんど知られて居ないが、一柱だけ力を持った神がいる。
闇と悪徳の神ヴァンデルだ。
この神は人が悪徳と呼ぶものを奨励し、欲望のままに生きることこそが良い事であると唱えている。
法と光の神とは真逆の存在故に、悪神とも邪神とも呼ばれている存在だ。
この神を信仰する者の殆どは犯罪者や妖魔である。
その為、この神は妖魔の守護神とも呼ばれ、人々に忌み嫌われていた。
上記の神々以外は小神や亜神、名もなき神と呼ばれ力の殆どを失っていると言われている。
この世界の神々は、信仰を得なくては力を増す事が出来ない
信仰を得る為には奇跡を起こす必要があり、それを人に教える事で神聖魔法と言う形で確立しているのである。
神と言うのも大変な職業だと志希は思いつつ、街の中央広場にある神々の像を眺めていた。
「しかし、いっつも思うんだけどよ……幸運の神がどっかで見た事あるんだよなぁ」
首を傾げつつ呟くカズヤに、志希はあえて何も言わないでイザークを見上げる。
「次、どこ行くの？」
志希の問いに、イザークは少し考える素振りを見せてから頷く。
「塔の学院にでも行くか？」
イザークが出した施設の名前は、魔術師を多く輩出するが同時に知識の神の神官を最も多く輩出する学び舎である。

貴族だが相続順位が低い者や、素質を見込まれて奨学金で入学する魔術師見習いが多い。

魔術師として一人前になるには早くて五年、長くて十年と言われている。

入学に関しての年齢制限はないが、早ければ早いほどいいと言われているのはそのせいである。

一人前の魔術師となった者の殆どは塔の学院に残り、それぞれ研究を続けている。

残る理由としては、研究施設や図書館などが充実しているというものだ。

研究施設などを使用するには料金が必要となるのだが、資料などが不足していては十分な研究が出来ない事を考えれば、やはり学院に残る方が良いのである。

お金が無くなると追い出されたりするので、魔術師の殆どは研究費の為に貴族のパトロンを持ったり、冒険者を副業としてやっているのである。

ちなみに、辺境などにも魔術師は居るが、基本的に彼らは隠居している。

無論、自身の研究なども色々としているのだが、半ば道楽となっているのであまり進まなくても特に気にしない者が殆どである。

一般人には奇人、変人の類の集まりと言われているその場所は、志希の好奇心を大いにくすぐる。

「うん、見てみたい」

研究施設では、様々な魔道具が日々開発されている。

現在普及している魔道具はここで開発された物や、滅びた魔法文明の物を研究で原理を解明、解読し、実用化された物である。

また、武具に弱いながらも半永続的に魔法を付与する事も出来る場所でもある。

その値段は、最低価格が金貨一枚と大変高価だ。

「では、行くか。カズヤ」

イザークは志希に頷き、カズヤを呼んで移動を始める。
「お、移動か」
そう言いながら、カズヤはイザークと並ぶ。
「そうそうシキ、この公園から八方へ伸びる通りがあるだろ？　この道で一番大きいのが王城と門を繋ぐ道だ。それ以外の六つの大きい道は、神像を背にして歩くとそれぞれの神殿に辿りつけるようになってるんだぜ」
カズヤは思い出したように、中央公園と呼ばれる大きな広場から伸びる道の説明をしてくれる。
「へぇ、わかりやすいね」
志希は成程と感心すると、カズヤも同意する。
「オレもそう思う」
二人でうんうんと頷いていると、イザークが口を開く。
「シキ。この通りに小物店があるが、先に寄って行くか？」
イザークの突然の問いかけに、志希はああと声を上げる。
「そう、だね。うん……確かに、先に寄って行った方が良いと思うの」
志希はイザークの提案に乗ると、カズヤは面倒くさそうな表情を浮かべる。
「後にしようぜ」
カズヤは抗議をするが、イザークはさっさと歩き出している。
「面倒くさい事を先にした方が、絶対いいから」
志希の言葉に、カズヤは渋々頷きイザークの後を追う。
露店の合間にある店舗の扉を開き、イザークが一瞬の間の後に志希を促す。
何時もであれば先に入るイザークが、何故自分に道を譲るのか不思議に思いつつ店に足を踏み入れる志希。
そして、眼前に広がる光景を見て理解する。
薄いピンクでまとめられた、大変可愛らしい空間が広がっていた。
後ろのカズヤは仰け反っているが、イザークは至って無表情のま

ま口を開く。
「好きな物を選んで買ってくると良い。俺達は、外で待っている」
イザークの台詞に、志希は無言で頷く。
この愛らしい空間に男性が入りこむのは、とてつもない精神力を必要とするだろう。
しかも、志希が買い終るのを待たなくてはならない。
そんな拷問に似た時間を過ごす位なら、誰でも外で待つと言うだろう。
イザークが扉を閉め、外へと出て行くのを見送ってから志希は店内を物色し始める。
女性用の小物とクルトは言ったが、実は女性用品の事を指していたのだ。
イザークとカズヤが分からなかったのは、当然である。
むしろ、それを知っていたクルトにベレント、ライルの方が驚きだ。
恐らく、未だ会った事のない彼らのメンバーに女性がいるのだろう。
そう考えながら店内を見て回り、目的の物を探す。
どんなものなのかを脳内から検索しつつ目を走らせていると。
「何探しているの？」
と、声をかけられる。
「えっと……？」
志希は返事をしようとして、声の方向を見る。
そこには、前髪以外の髪を全て編み込み、後ろに流した髪を三つ編みしたややつり目の美女が立っていた。
優しい笑みを浮かべた彼女の胸元には、大地母神の聖印が揺れている。
「見つからないんでしょう？」
子供相手に話している様な口調で問われ、志希は一瞬ムッとする。
だが、相手は親切で声をかけて来ているので無為にするのも悪い

と思いなおす。
「えと、冒険者用の生理用品を探してるんです」
志希の言葉に、女性は驚いた表情を浮かべる。
「冒険者なの？」
物凄く驚いた声音で問われ、志希は憮然としながら頷く。
「そ、そっか。ごめんね……随分幼いのに、もう冒険者になってる事にびっくりしたの」
女性は子供に言い聞かせる様に言い、こっちだと手招きをする。
一体自分は何歳に見えているのかと突っ込みを入れたい気持ちになりながら、志希は後ろについていく。
どうせ此処だけの付き合いになるのだから、余計な事を言わずに案内されようと言う悟りに似た感情を抱いていた。
「ここよ。このお店はちょっと高いけど、良い物が置いてあるから色々と見比べると良いわよ」
ニコニコと笑いながら、女性は教えてくれる。
「そうなんですか。教えてくださって、ありがとうございます」
取り敢えずお礼を言いながら、棚をまじまじと見る。
基本的に、以前の世界にあった高分子吸収体などと言う物はない。むしろ、中世程度の科学レベルでそんなものがあったらびっくりどころの騒ぎではないだろう。
等と不毛な事を考えつつ、志希はハタと思い出す。
前に来た月の使者の時期を思い出さないと、何時月の使者が訪れるのかが分からないのだ。
じーっと棚を眺めながら、志希は必死になって思い出そうとしていると、思わず脱力してしまう情報が知識の海から浮かんでくる。
そう。『神無の鳥』には、月の物が無いのである。
そもそも、『神無の鳥』と言う種族は魂が変異を起こして成る者である。
なので、性交などは出来ても子供は出来ないのだ。
志希は一瞬目眩がしたが、直ぐに平静を装い可愛らしい布で出来

た巾着を手に取る。
良い香りがするのは、恐らく匂い袋も入っているからだろう。
「あら、良いのを選んだわね。使い方は、わかる？」
女性の問いかけにこくりと頷き、頭を下げる。
「教えてくださり、ありがとうございます。本当に助かりました」
実は物凄く無意味だった訳なのだが、志希が普通の人間と同じ様に振舞う為には必要なものなのだ。
なので、志希はひとまずはお礼を言う。
「良いのよ。それより、他に何か要り用な物はあるの？」
人の良さそうな笑みを浮かべて、女性は問いかけてくる。
「だ、大丈夫です」
ぐいぐいと押して来るような気迫を感じた志希は、取り敢えずそう言っておくが。
「良いのよ、遠慮しなくて。髪止めとかは？　冒険者なら、この先必要になるわよ？　あたしが見立ててあげるから、選んでみない？」
笑顔の女性は、どうやら志希の纏めていない髪が気になったようだ。
「髪を纏める紐はありますから、大丈夫です。それじゃ、本当にありがとうございました」
怖いものを感じた志希は、大慌てで店主の元へ行って品物の代金を払い、腰のポーチに仕舞って店を出る。
店の入り口の直ぐ横に居たイザークは、逃げる様に出て来た志希に少し驚いた表情を浮かべていたが、直ぐに何時もの表情に戻って志希に手を差し出す。
「カズヤは先に塔の学院に向かった」
イザークの言葉に、志希は一つ頷いて差し出された手を掴む。
あっさりと手を繋いだ事に、イザークは一瞬目を瞠ってから和ませ、口元に小さな笑みを刷く。
しかし、それは一瞬でしかなかった為、志希は気が付かずにイザークの隣を歩くのであった。

第十四話（後書き）

神様の説明。
ちなみに、幸運の神様のイメージがマジもんで大黒様です。
書いている時に閃いて、そのまま採用しました。
オチ担当的な感じですが、ご利益はきちんとありますよ！

第十五話

志希を待ち切れなかったカズヤは、塔の学院へと先に向かっていた。

イザークにはあまり良い顔をされなかったが、二人でぼんやり待つのはカズヤとしては良い気分ではないのだ。

何より、イザークと並んでいると物凄く女性の視線が気になるのである。

アールヴと言う種族自体が野性的な美しさを持っているのは知っているが、その中でもイザークは一際だとカズヤは思っている。

今まで幾度か、イザーク以外のアールヴと顔を合わせた事もある。

だが、イザークほどの存在感と美貌を持ったアールヴは見た事が無かった。

それ故、イザークと並んでいると見比べられている様な気持になってしまうのである。

もちろん、イザークとは仲の良い友人であり、仲間だ。

だがしかし、それとこれは別なのである。

平平凡凡な自身と、美丈夫なイザークと比べられてしまうのだけは勘弁して欲しいのだ。

小さく嘆息してから、カズヤは露店を見ようとして、気が付く。

露店の横にある小さな路地の奥で、眼鏡をかけて髪を上で纏めている魔術師のローブを着た女性があまり柄の良くない男達に囲まれているのに。

酷く困った様子で、カズヤはどうするかを考える。

もしかしたら、パーティ内での揉め事かもしれない。

そうであれば、部外者の人間が口を出すのは間違っているだろうと二の足を踏んでしまうのだ。

だがしかし、魔術師の女性は助けを求める様にちらちらと周囲を見るのを見てしまえば、カズヤはつい動いてしまう。

「おいおい、こんな処で女の子口説いてんのかよ」
カズヤはそう声をかけながら、路地の入口に立つ。
「てめぇには関係ないだろ、すっこんでろ」
一人が威嚇する様にカズヤの前に立ち、他の男達は女性の腕を掴んで奥へと行こうとする。
「い、いや！　助けて下さい！」
助けが来たのだと判断したらしい女性は、必死で男達から逃れようと身を捩る。
「うるせぇ！　黙って付いて来い！」
男達はイラついた様に女性に怒鳴りつけ、女性はびくっと体を震わせる。
カズヤはその様子に、口を開く。
「お前ら、冒険者か？　冒険者であれば、犯罪歴付くぞ」
カズヤの問いかけに、威嚇する男は鼻で笑う。
「てめぇの口を封じときゃ、そんな事もわかんねぇだろ？」
身構える男の言葉に、カズヤの片眉が上がる。
「てめぇ如きにやられる程、オレは弱くねぇよ！」
カズヤはそう言うなり、足払いを男の足にかける。
あまりにも速い動きに、男は避ける暇もなく地面に転がる。
そのままカズヤは男を飛び越し、女性の腕を掴む男の手を手刀で強打して強引に外す。
もう一人の男が驚いている隙に蹴りを喰らわせ女性を引っ張るが、その時には既に転がした男が起き上がって大通りへの道を塞いでいた。
気絶させる手間を惜しんだ結果、余計に危ない事態になってしまった。
舌打ちをしつつ女性を背後に庇い、身構えながらカズヤは口を開く。
「お前ら、冒険者じゃねぇな。冒険者崩れだろう？」
冒険者証を剥奪された元冒険者の事を、崩れと呼ぶ。

そう言う輩は大概、罪を犯して資格を剥奪されている。
カズヤの指摘に、男達は下卑た笑みを浮かべる。
「へへ……オレらは正規の冒険者だぜ？　冒険者証も真っ白な優良冒険者様だ」
くつくつと笑う声は、カズヤの勘に障る。
「はっ！　どうせ相手を脅すなり売り飛ばすなりして汚い手を使って保ってる、偽の優良だろ？」
カズヤはそう嘲りの笑みを浮かべながら周囲を囲む男達に言い放ち、鼻で笑う。
「分かってんじゃねぇか、小僧」
リーダーらしい男が愉しそうに笑いながら、腰に差している剣を抜く。
冒険者たちの間では最も使い易いと言われている長剣の柄は、黒ずんだ布に覆われている。
「だけどよ、路地に入ってすぐのこんな場所でこんな事やってたら、速攻でばれねぇのか？」
カズヤは言いながら、目で隙が無いかを探っている。
カズヤの後ろに居る女性はカズヤの服を掴み、フルフルと震えているのを感じ、助けてやらねばと尚更思う。
腰に差したショートソードの柄を掴み、誰を最初に倒すかを考えながら身構えた瞬間。
「ぐあぁ！」
「何を遊んでいる」
悲鳴と、淡々とした声音での問いかけが裏路地に響く。
悲鳴を上げたのは、路地の出口に居た男だ。
今は気を失い、地面に倒れている。
その男を気絶させたのは黒い服を着た大柄なアールヴ、仲間のイザークだ。
「困ってる女の子を、助けてたんだよ」
カズヤはぶっきら棒に言いながらも、その表情は安堵している。

「そうか」
無表情で頷いたイザークは、ゆるりと残った男二人を見る。
「おいおい、おれの仲間に暴力振るうなよ。てめぇらの冒険者証が汚れちまうぜ？」
ニヤニヤと笑いながら男は言うが、イザークは気にした様子もなく口を開く。
「だそうだ」
一言、後ろに向かって声をかけるイザーク。
そこには息を切らせた志希と、今日彼女の受け付けを冒険者ギルドでしてくれたミラルダが居た。
「以前から噂にはなっていたんだけど、本当だったのね」
ミラルダは爛々とした瞳で、男達を見る。
彼らはまずいと言った表情を浮かべるが、直ぐニヤリと笑う。
「はっ！　たかがギルドの受け付けがおれ達に敵うと思ってんのかよ！　こいつらなんざ、新人もド新人だろ？　おれら二人に敵う訳ねぇだろ。そこのアールヴだってよ、不意を衝いたからそいつをノせたんだぜ？」
肩を竦めて、馬鹿にしたように笑う男にイザークが僅かに体を揺らす。
それと同時に笑っていた男の長剣は叩き落とされ、イザークが足を払って転ばせその背中に足を乗せる。
カズヤもまた動いて、もう一人の男の足を払って転ばせ、腕を捻り上げて取り押さえる。
「馬鹿なのは貴方達ですよ？　この二人は、今は引退した金の冒険者たちのお弟子さんなんですから。今はまだ銅であろうとも、その腕はもう銀と言っても過言ではありません」
指を振り、ミラルダは腰に手を当てて言う。
「そろそろ警備隊の人達が来ますので、年貢の納め時ですよ」
ミラルダはそう言って、大通りをちらりと見る。
男達は暴れようとするのだが、二人は巧みにそれを取り押さえる。

「こっち、こっちです！」
志希が手を振って大通りの方に声をかけると、ぞろぞろと鉄の鎧を着た男達が到着する。
「如何した？」
隊長らしき男が問いかけると、ミラルダは取り敢えず気絶している男を含めて兵士達に取り抑える様にお願いしてから、隊長らしき男に事情を説明し始める。
イザークは取り敢えず志希に傍に来るように促して、カズヤを見る。
カズヤはカズヤで、庇っていた女性に向き直り宥めていた。
「もう大丈夫だから、安心しろよ」
魔術師の女性はコクコクと頷いているが、その体はまだ震えている。
よほど怖かったのだろうとカズヤは痛ましい気持ちになりながら、女性の背中をポンポンと叩く。
「はっ……はい。本当に、助けてくださってありがとうございます」
女性はそう言いながら、眼鏡を少し上げて目元を拭う。
酷く怖い思いをしたせいで、涙が滲んでいるのだろう。
「いや、無事で良かったよ。まぁ、きちんと助けられなかったのがちょっと申し訳ないけどな」
カズヤは苦笑しながら言うが、女性はフルフルと頭を振る。
「い、いいえ！」
唐突に大きな声を出したので、その場に居る人間は一斉に女性を見る。
女性は顔を真っ赤にして、今度は少し小さな声音でカズヤに告げる。
「きちんと、助けてくれました。だから、本当に嬉しいです」
真っ赤なまま言われたカズヤは何やら気恥しくなり、若干頬を染めて視線を逸らしつつ、ぶっきら棒に頷く。
「そ、それなら良かった」

カズヤのその言葉に女性ははいと頷き、それを見ていたその場の人間は約一名を覗いて温い笑みを浮かべる。
「お二人さん、仲良くすんのは良いが詰所のほうで話を聞かせてもらうぞ。イザークと、そっちの白いチビも」
隊長らしき男の言葉に唯一笑みを浮かべていなかったイザークは頷き、志希は憮然とした表情を浮かべる。
だが、抗議をする様な様子もなく頷き、カズヤを見る。
「取り敢えず、早く終わらせて塔の学院を見に行こうよ」
志希の言葉にそうだな、とカズヤは頷く。
「じゃ……」
名前を呼ぼうとしたカズヤに気が付き、女性は微笑んで口を開く。
「塔の学院で魔術師をしている、アリアです」
自己紹介をした彼女にカズヤも応えようとするが。
「イチャイチャしてねぇで、さっさと行くぞ！」
と、警備隊の隊長らしき男にからかい交じりに呼ばれてしまい、カズヤは舌打ちをしてアリアを促して歩き出した。

第十六話

詰所で色々と聞かれたが、志希はほとんど関与していないので直ぐに帰って良いと言われた。

だがしかし、ミラルダやイザーク、カズヤと彼が庇っていた女性の事情聴取が長引いたため、詰所で彼らが解放されるまで待つはめになってしまった。

その為、塔の学院を見学すると言う目的を果たす事が出来なくなってしまったのであった。

志希は残念だと思いつつも、明日は依頼を探しに行くのだからと諦めその日は夕食を食べてから荷物を片付け、不貞寝をした。

朝になってから下の酒場でイザークとカズヤと合流し、朝食をとってから冒険者ギルドへと依頼を求めて足を運んだ。

依頼内容が書かれた紙を張る専用ボードがギルドの一角にあり、そこでは丁度良い依頼を探す冒険者達が多くたむろしている場所だ。

また、情報交換やパーティメンバーを探す場所でもある。

その場所に、志希が出会った大地母神の聖印を首から下げた女性と、昨日カズヤが助けた魔術師の女性が、並んで依頼専用ボードの前に立っていた。

「あぁ!?」

「あら!」

「!?」

「おお?」

思いがけない再会に思わず声を上げる四人。

イザークはそんな四人の事など気にもとめずに専用ボードの方へと行ってしまったが、志希とカズヤは別の意味でも驚いていた。

何せ、目の前の魔術師と神官の女性はまったく同じ顔をしていたのだ。

二人は志希とカズヤより早く驚きから立ち直ったらしく、改めて

志希を観察する。
「あなた、本当に冒険者だったのねぇ」
神官の言葉に、志希は憮然とした表情を浮かべる。
「姉さんっ」
神官の言葉に、魔術師の女性が慌てて声を上げる。
「あら、知り合い？」
小首を傾げながら神官は魔術師に問いかけ、彼女はコクコクと頷いて口を開く。
「この方達に、昨日助けて頂いたの」
少し小さな声で、魔術師はそう説明する。
このやり取りをしている間、イザークが一枚の羊皮紙を手にして戻ってくる。
「これぐらいが丁度良いだろう」
そう言いながら志希とカズヤに見せると、神官が声を上げる。
「あっ！　それ！」
神官の言葉にイザークは彼女にちらりと視線を流すが、直ぐに志希とカズヤを見る。
だがしかし、神官は柳眉を逆立てイザークの前に立つ。
「それ、わたし達が先に目を付けていたのよ」
「だが、受けていないのなら意味はない」
神官の台詞を切って捨て、イザークは志希に羊皮紙を渡す。
「あ……」
志希は思わず受け取るが、神官の怒った顔に腰が引けてしまう。
「待ちなさい。その依頼は、魔術師と神官が必要だと書かれている筈よ」
神官の言葉に、イザークは頷く。
「ああ。だが、この依頼は遺跡にある泉の水を酌んで欲しいと言う物だ。戦士と盗賊、精霊使いが居れば何ら問題はない」
魔術師と神官が必須なのは、そちらの方が楽に遺跡を歩けるからだ。

「それなら別に、神官戦士と魔術師の二人で行っても問題はないじゃない」
イザークを険しい表情で見ながら、神官が言い募る。
「まぁまぁ、落ち着けって」
カズヤはそう言いながら、二人の間に入る。
時折、依頼の取り合いでこの様な出来事が起こる。
一応ギルドの人間が間に入ったりするのだが、ギルド職員の印象が悪くなる。
なので、カズヤとしては穏便に済ませて欲しいと言う思いで間に入ったのだ。
そのカズヤをきっと睨みつける神官だが、その後ろに居る魔術師が焦った様に口を開く。
「一緒に依頼を受けませんか！？」
魔術師の女性が出した大きな声に、四人は一斉に彼女を見る。
魔術師は我に返った様な表情を浮かべてからを真っ赤にして俯きながら、小さな声でもう一度言う。
「お互い……人が足りてないのですから、ご一緒しても良いと思うんです」
ぼそぼそと言う魔術師の女性に、カズヤはにっと笑う。
「ここで揉めるより、遥かに良い案だな。それ」
カズヤの言葉に魔術師の女性は真っ赤になりながら、はにかんだ様に微笑む。
志希はそんな彼女の姿に生温い笑みを浮かべ、口を開く。
「私も賛成。イザークも、良いでしょう？」
志希の問いかけに、イザークは頷く。
「異論はない。人が足りていないのは事実だしな」
イザークの言葉に神官の女性は憮然とした表情で魔術師の女性を一睨みしてから、苦笑を零す。
「……仕方が無いわねぇ。アリアの言う事も一理あるから、今回は組んであげるわ」

そう言って肩を竦める神官の女性の言葉に、志希は若干気分を害す。

受けていない依頼を占有しようとしたり、高飛車な物言いをしたりと神官への志希の心証は最悪だ。

だがしかし、神官や魔術師が居ないと言うのはパーティとしては結構痛いのだ。

精霊使いでも傷や毒、麻痺、病を癒す事も出来る。

だがしかし、それらの術を使えるのはある程度経験を積んだ精霊使いだけだ。

生命に干渉する精霊は基本的に人に好意的ではあるが、駆け出しの精霊使いには使えるものではない。

無論、これは一般的な話である。

志希はそもそも精霊使いではなく、精霊達は純粋な好意で志希に力を貸しているだけなのだ。

それ故己の魔力を分け与えて精霊を使役する精霊使いとは違い、対価を渡す事無く精霊達は志希の意のまま動く。

なので志希は精霊の力も借りられるのだが、あまり人と違う所を見せると排除される可能性がある為志希はあえて駆け出しの精霊使いとして振舞うのだ。

だから、内心どう思おうと傷を癒す術を持つ神官を受け入れざるを得ないのである。

志希のそんな気持ちを感じ取ったのか、イザークが志希の頭をくしゃりと撫でる。

慰める様なその行動に志希はくすぐったい気持になり、礼を云おうとした瞬間。

「男ばっかりの中に、小さな女の子が混じっているのも不憫だしね」

と、神官の女性は笑顔で志希を見る。

志希はその言葉に、思わず抗議しようとするが。

「シキは既に成人している。それに、精霊使いとしても優秀な人間だ」

イザークが志希の怒気に反応し、嘆息交じりの声音で神官に言う。
神官はその言葉にきょとんとしてから、驚いた表情を浮かべる。
魔術師の女性も驚いた様な表情を浮かべ、マジマジと志希を見ている。
志希はその視線にますます憮然とした表情を浮かべると、魔術師の女性は慌てて小さく頭を下げる。
「ご、ごめんなさい。じゅ、十二歳位だとばかり……」
ちなみに、この世界の成人年齢は十五歳である。
それよりさらに低い年齢を女性が口にした事に、志希の眼が潤みだす。
怒りよりも情けなさが増してきた為、涙が滲んできたのだ。
それを見て慌てる神官と魔術師の二人だが、カズヤは苦笑していた。
「良く思い出せよ、シキ」
笑んだカズヤの声音に志希は思わず小首を傾げ、むぅと唸り呟く。
「日本人は欧州の方で、子供に見られやすい」
カズヤは志希の呟きに頷き、指を一つ立てる。
「その上、今のお前って若返ってんだろ？　それだったら、子供扱いされるのも当たり前だろ」
カズヤが日本語で言い、志希は憮然とした表情のまま頷く。
ちなみに、若返るなどと言う現象は基本的にあり得ない。
その為、カズヤは日本語で言ってくれたのだ。
突然、カズヤが全くわけのわからない言葉を喋った事に、神官と魔術師は驚いている。
「ん……もう良い。でも、一応私が成人している事は覚えていてください」
志希は気にしない事にすると二人に告げつつも、しっかりと要望を口にする。
「え……ええ、分かったけど。今の言葉は何処の言葉？」
神官は何処か警戒した表情で問いかけてくると、カズヤは肩を竦

めて答える。
「オレの故郷の言葉。シキとオレは同郷だからよ、ついこの言葉で話しちまう事があるんだ。気にしないでくれ」
カズヤはそう言ってから、改めて笑みを浮かべる。
「んじゃま、自己紹介するか。オレはカズヤ＝タカハシ、盗賊だ」
カズヤの自己紹介に、イザークが頷く。
「イザーク。見ての通り、戦士だ。此方はシキ＝フジワラ、精霊使いで駆け出しだ」
イザークはついでとばかりに志希の紹介もして、女性二人を見る。
志希はイザークが紹介した事で小さく会釈してから、彼女達が名乗るのを待つ。
「わたしは、ミリア。見ての通り、豊穣の女神エルシルに仕える神官にして戦士よ」
「アリア、です。よろしくお願いします」
ミリアは微妙に警戒した表情と声音で自己紹介し、アリアは人見知りをしているような素振りを見せつつ自己紹介をする。
「こちらこそ、どうぞよろしくお願いします」
日本人の習性で挨拶をされると挨拶し返してしまう志希。習い性とは恐ろしいものである。
もっとも、礼をされたアリアとミリアは志希の丁寧な所作に一瞬息を詰め、目を丸くして彼女を凝視した訳なのだが。
その表情が訝し気と言うか、一瞬疑心に満ちたものだったのをイザークは見逃さなかった。
しかし、下手な事を突っ込んでも面倒事になる予感がしていたので、何も言わずに顔を上げた志希を促して受付へと向かった。

第十六話（後書き）

急遽組まれる五人パーティ。
一時しのぎなわけですが、どうなるか……こうご期待！　って言いたいですけど、どうなるか。
取り敢えず、まったりと続きをお待ちくださいー。

第十七話

この街から二日ほどかかる場所に、遺跡がある。
遺跡は殆ど崩れ、どちらかと言えば廃墟に近い様相を呈している。
その様な状態であるからか、それとも古代文明の何らかの装置があるからか分からないが、広間にある泉から湧く水は不思議な効能を持っている。
飲めば軽い病が治り、皮膚に塗れば火傷を和らげる。
その効能に目を付けた一人の薬師が実験的に火傷などの傷に効果のある薬と混ぜて使用してみた所、その効果を増幅させたのである。
魔法薬においても顕著な効果を見せた為、薬師は泉の水を自分で取りに行こうとその遺跡へと足を運んだのだが、逃げ帰って来た。
遺跡には弱いながらも妖魔や魔獣が入りこみ、棲み処と化していたからだ。
その為、一般人に近い職人たちは足を踏み入れる事を躊躇い、冒険者達に採取を依頼するようになった。
新鮮であればある程、泉水の効能は高い。
その為、鮮度を保つ専用の革袋をパーティ全員に配り、汲んできてもらうのである。
と、依頼の内容が出される経緯までも懇切丁寧に教えてもらった志希は、人数分の革袋を受け取りパーティ全員に配った後、イザークが場を取り仕切り出発は午後一番に徒歩で行く事を提案した。
シキもカズヤも異論はなかったので頷き、アリアとミリアを伺うと二人も賛成してくれた。
待ち合わせ場所は南門の詰所のすぐ近くに指定し、一度解散して全員で旅の支度をした。
僅か二日とは言え、保存食は多めに持って行くのが常識だ。
荷物を纏めている最中、イザークが現れ一応着替えの類を一組持って行くように指示される。

他にも色々と指示されたが、最も難しいと思ったのが荷物の重さだった。

自分が疲れない程度の重さにしろと言われたが、志希は自分の体力でどれくらいの荷物にすればいいのかが分からない。

困り果てた志希を見たイザークは、小さく嘆息をして最低限の荷物を教えてくれた。

往復で四日、遺跡内の探索日程を二日と見た荷物を聞いて、志希は思わずげんなりした表情を浮かべてしまう。

保存食は最低六日分だが、二日分ほどは多く持って行かなくてはならない。

同様に、水も多目にしなくてはならず、必然的にその辺りの荷物で重くなる。

背負い袋があるのでその辺りは何とかなりそうだが、移動中や遺跡内は武装して歩く事になる。

プラス着替えを一着と、下着を数着持って行くのが女の子としての最低限の身嗜みだ。

これは、女性冒険者たちの変わらない鉄則である。

厚い布で出来たズボンを穿き、同じ様に厚い布で出来た服を着てから胸を覆う堅い革で出来たチョッキの様な物を着る。

本当は皮鎧の方が良いかと思ったのだが、イザークの勧めでこちらになった。

基本的に前にでて戦う訳でもないし、何よりも体力が無いのだからと言われてしまえば、従うしかない。

体力をつければ、もう少し保護部分が多くなる鎧を着られる様になるだろう。

皮のチョッキの上から護りの紋様を刺繍されたローブを着て、志希の旅装束は完成である。

ちなみに、このローブはクルトが冒険者祝いと称してプレゼントしてくれた物らしい。

何故らしいと言うのかと言えば、持ってきたのがイザークだから

だ。

しかも、つっ返したくてもクルトは既にこの街に居ないらしく、受け取らざるを得ない。

また、色が若草色で可愛らしかった為、気に入ったのも受け取った理由の一つだったりする。

準備が出来た後は三人で早めに昼食を取り、アリアとミリア南門へと向かい待つ事にした。

だが、途中で彼女達と合流したので、そのまま南門から出て遺跡へと向かう事になった。

舗装されて居ない道を、志希達は歩く。

徒歩二日程の場所にある遺跡なのだが、志希はのっけから躓きそうになっていた。

慣れない道を徒歩で行くのは、やはり辛い。

それと同時に体力も無いので、体力をある程度作ってから依頼を受ければ良かったと後悔していた。

しかし、既に出発している以上言った所で栓の無い話である。

志希は必死で足を動かし、置いていかれない様にと気をつける。

前を歩くカズヤとミリア、その少し後ろを歩くアリアの背中を見ながら息を切らす。

以前はもっと体力があったと思ったのだが、所詮子供の頃の記憶など良い様に覚えていたのかもしれない。

ひいひいと息を切らせそうになるのを必死でこらえつつ、手のひらほどの大きさで切った布を使って汗を拭いてから、ポケットにしまう。

皆息を切らさず、むしろ談笑しながら歩いているのが羨ましい。

しかし、考えて見れば当然であろう。

この世界には自転車や自動車の類が全くなく、庶民の移動手段はもっぱら徒歩だ。

貴族や裕福な人であれば馬や馬車など使えるのであろうが、駆け出し冒険者でそんな良い物は持てるはずもない。

慣れるまでの辛抱だとは思うのだが、それまでの筋肉痛や足の痛さを考えると、どうしても重い溜め息を禁じえない志希。

それ以上に、今回の依頼では役に立てない予感がひしひしとしていて、このままだとおんぶにだっこになってしまうと真面目に焦る。

そんな志希の焦りに呼応して土の精霊達がどうにか助けたそうにしているのだが、如何していいのか分からずおろおろしながら足元にまとわりついている。

土の精霊たちの優しさに思わず涙が出そうになるが、ぐっと堪えて大丈夫だと小さく呟く。

志希の言葉に土の精霊達は少し安堵した様な雰囲気を醸し出すが、それでも足元にまとわりつくのを止めない。

志希が疲労しているのが分かっているから、自分に何かできないかを教えてもらおうとしているからだ。

指示を出してもらえばやれる！　とでも言うかのように、土の精霊達は志希の言葉を待っている。

なんと無く小型犬を思わせる彼らの様子に癒された志希は、今は大丈夫だと再度伝えてから頑張って歩く。

街を出てから既に三時間経過しているのだが、一向に速度が衰えない四人の健脚ぷりに志希は妬ましさよりも感心しかできない。

そこでハタと、志希は気が付いた。

元々運動不足気味であった以前の自分が、こちらの世界に来て若返ったからと言って体が直ぐに出来あがる訳ではない事に。

そもそも足が萎えている状態で体が若返っても、足が萎えたままなのは道理である。

それ以前に、『神無の鳥』に変質した時点で生まれたてと言っても過言ではない状態なのだから、直ぐに体力がついたり健脚になったりする訳ではないのだ。

先行きがますます不安になって来た志希は、歩きながら途方に暮れる。

すると。

「すぐそこに、川がある。そこで少し休むぞ」
イザークがおもむろにそう言い、皆の意見を聞かずに志希を小脇に抱える。
「はえ？」
志希が驚きで変な声を上げるが、イザークは全く構うそぶりも見せずに川へと歩いていく。
「ちょ、ちょっと！」
ミリアの抗議の声が聞こえるが、イザークは無視をして志希を川縁に座らせる。
「靴を脱いで、両足を見せろ」
イザークはきつい声音で言い、志希はビクリと肩を震わせてから言うとおりにする。
露わになった志希の足、踵部分が赤くなっていた。
「軽い靴ずれだな」
イザークはそう言って、眉を顰める。
志希はイザークの言葉に、思わず顔を赤らめる。
戦場から砦へ移動した時も靴ずれで歩けなくて、イザークに抱えられていた事の方が多かった。
今もまた同じ様に靴ずれを起こしてイザークに迷惑をかけている事実を考えれば、自分が全く成長していない事が良く分かる。
その事が恥ずかしくて、泣きたい気持ちになる。
「皮が擦れているが、傷になっていない。取り敢えず、足を川に浸して冷やしておくと良い」
イザークの指示に無言で頷き、志希は川に足を浸す。
すると、カズヤとアリアも川縁に腰を落ち着け始めるが、ミリアは険しい表情でイザークと志希の前に立つ。
「足がやわいのになんで連れて来たのかしら」
ミリアはいきなりイザークに向かって言い放ち、志希を見る。
「ね、姉さん！」
棘のある声音と言葉に、アリアが慌てて腰を浮かせる。

「おいおい、足がやわいと旅をしちゃいけないのか？」
呆れた様に、カズヤが声を上げる。
「そんな事を言っている訳じゃないけれど、ハッキリ言って足手纏いだわ」
ミリアはきっぱりと言い切り、イザークを睨みつける。
「貴方達は結構な腕を持っているんでしょうけど、この子は初心者でしょう？　それなら、最初は一人で街中の小さな依頼でもさせて、足を鍛えたり体力つけさせたりすれば良いじゃない！　最初から甘やかしても、良い事なんて無いのよ！？」
ミリアの強い言葉に志希が思わず反論しようとするが、イザークが志希の頭を押さえて口を開く。
「俺達には、俺達なりのやり方がある。利害が一致しただけの一時凌ぎパーティでしかない以上、口を出さないでいてもらおう」
ぴしゃりと、部外者は黙っていろとイザークは告げる。
「それに、甘やかしていると言うが……どこをだ？」
少し考えるような素振りをしてから、イザークは問いかける。
「急に休憩を取らせたり、足の手当てをしたり……」
「旅慣れぬ仲間が居れば、普通の事だろう」
ミリアの言葉にあっさりと答え、イザークは鞄から手ぬぐいと包帯としての用途もある細い布を取り出し志希に足を上げる様に指示する。
「い、イザーク。私、自分出来るよ？」
志希がそう言うと、イザークは頷き手ぬぐいと包帯を手渡す。
「それに何より、街中だけの仕事をやらせるより旅をさせた方が早く足も鍛えられ、体力もつく。これで甘やかしているとは、あんたはどれくらい厳しい鍛錬をしたのか訊きたい位だ」
イザークはミリアを見て、真剣な表情で言う。
ミリアはその言葉に絶句して、マジマジと彼の顔を見る。
イザークの言っている事は甘やかしではなく、むしろスパルタだ。
それに驚いているミリアに、志希は小さく嘆息してから口を開く。

「私の足がやわで、足手纏いでごめんなさい。それでも、私は頑張って着いて行きますので気になさらないでください」
そう言ってから足を拭って、包帯を靴ずれしている部分を保護する為に巻き始める。
志希にそう言われたミリアは憮然とした表情で頷き、志希を見る。
「分かったわ」
何かを堪える様な声音だが、志希はそれを突っ込むほど気持ちに余裕はない。
それよりも、足に包帯を巻く方が大事なのだ。
包帯を巻くと言う経験はないのだが、魂に浸み込んだ知識が教えてくれたので上手に出来た。
思わず満足げに頷いてから、靴を履く。
これで、靴ずれを少しは防げるだろうと思いつつ、準備が出来た志希は顔を上げる。
「よし、行くか」
カズヤはおどけた様に言いながら、前に出て歩き出す。
その少し後ろにアリアがつき、その隣に不機嫌なミリアが並ぶ。
志希とイザークは最後尾につき、彼ら三人の背中を見ながら歩くのであった。

第十八話

この後数度にわたり休憩を挟みつつ移動をしていたせいか、気が付けば日が傾いていた。
夕焼け色に染め上げられる木々や道がとても美しく映えている訳なのだが、志希はそれを見る余裕もなく息を切らしている。
「この辺で野営しようぜ」
それに気が付いたのかカズヤは足を止め、振り返るなりそう言う。
「えぇ！？」
ミリアは抗議の声を上げるが、その後ろのイザークは頷く。
「そうだな」
志希がそろそろ限界である事もそうだが、日程などに問題が無いからである。
「何もこんなところで……！」
ミリアの抗議に、カズヤが答える。
「この辺りが、一番丁度良いだろ？　これ以上進めば、獣や妖魔が出てくる可能性が高い」
それに、とカズヤは苦笑を浮かべる。
「シキと言うか、アリアさんの方も疲れてぐったりしてるだろ？」
カズヤの指摘に、ミリアは妹を見る。
すると、疲れた表情を浮かべたアリアが小さくごめんなさいと唇を動かす。
アリアは魔術師とはいえ本来は研究者としての側面が強く、基本的には屋内で過ごす事が多かった。
冒険者の割に大半の魔術師という人種の体力がないのは、似たり寄ったりの理由からである。
志希よりも体力があるとはいえ、女性で非力といわれる魔術師故の事だ。
ミリアもそれに思い至り、小さくため息をついてから頷く。

「そう、みたいね」
呆れたような声音で呟くミリアに、カズヤが苦笑する。
「仕方が無いだろ。シキは兎も角、アリアさんは研究する方が主だったみたいだからな。歩き慣れてたら、オレは冒険が好きな魔術師かしょっちゅう金策をする魔術師のどちらかだと思うぜ？」
カズヤの言葉に、ミリアは渋面を浮かべる。
その表情を見たアリアは、慌てて口を開く。
「前回姉さんと二人で遠出した後に古代魔道具の解析のお仕事を頼まれて、しばらく冒険の為の時間が取れなかったんです」
姉を庇おうとしているのか、それとも誤解してほしくないのか分らないが、アリアは大きな声でカズヤに言う。
真っ赤になって言うアリアの姿に、カズヤはまた要らない事を言ってしまったのかと思わず眉をひそめる。
それを見たアリアはとっさに口を閉じて、俯いてしまう。
ミリアはミリアで、何とも言えない表情で妹とカズヤを見ていた。
「ええっと、カズヤ。アリアさんが誤解してるよ？」
やり取りを見ながら足を冷やしていた志希は、カズヤに告げる。
「は？」
カズヤは素っ頓狂な声を上げ、アリアを見る。
少し落ち込んだような表情で俯いているのに気がついたカズヤは、しまったと顔をしかめてから口を開く。
「いや、アリアさんを卑下するつもりとかじゃなくて……オレが聞きかじった事を口にしただけだったんだ。それで不快にしちまったみたいだから、それを反省していただけなんだ。決して、アリアさんのせいじゃないから」
カズヤは若干早口で、アリアに告げる。
「失礼な事を言って、悪かった」
そのうえで、ミリアとアリアにカズヤは頭を下げる。
ミリアはカズヤの言葉に目を丸くし、アリアは大慌てで手を振る。
「い、いえ！　気になさらないでください！　こちらこそ、ご迷惑

をおかけして……」
「いや、それだったらこっちこそ連れが迷惑かけてるし。気にしないでくれ」
アリアとカズヤは互いに謝ったり、気にしないでくれと言い合う。
それをまったりと眺める志希は、ミリアに目を向ける。
「ミリアさん。色々と迷惑をかけるとは思いますが、改めてどうぞよろしくお願いします」
所在なさげにしていたミリアに、志希はそう言って頭を下げる。
ミリアは突然言われた言葉にさらに面食らい、次いで苦笑を浮かべる。
「そうね。でも、辛ければ言ってちょうだいね？　今はパーティだし……何よりイザークって人、かなり厳しい人みたいだし。体を壊したら、何もならないんだから」
そう言って浮かべた微笑は、豊穣の女神に使える神官らしい慈愛の表情だ。
どこか刺々しかったミリアだったが、志希が挨拶をすると毒気を抜かれた様になってしまった。
一体何がと小首を傾げると、ミリアが志希の隣に腰を下ろす。
「正直ね、あなた達があんまりにものんきすぎて苛々したの。これから枯れているとはいえ遺跡に行って、妖魔や住み着いた生き物を殺さないといけないって言うのに」
ミリアはそう言いながら、背中に背負っている豊穣神の神官戦士だけが持つ大きな鎌を下ろす。
遺跡内で振り回すには不便そうな得物故なのか、ミリアはもう一つ武器を持ってきている。
一般の冒険者が使う長剣で、よく手入れされているのが見て取れる。
志希の視線に気がついて、ミリアはくすりと笑いながら続きを話す。
「でも、よくよく観察してみればカズヤさんもイザークさんも、先

を見据えて行動していたわ。さっきの、カズヤさんの言う事ももっともだったし……イザークさんは野営の為にって時々枯れ木や枝を拾って縄でくるんで持って歩いていた。二人は、わたし達なんかよりもずっと旅慣れていた」

だから、とミリアは志希を見る。

「旅にも冒険にも慣れている二人があなたを連れている理由をね、考えてみたの」

志希はミリアの言葉に、キョトンとした表情を浮かべる。

しかし、彼女はそんな様子など見なかったように言葉を続ける。

「実は結構な実力者か……あなたが足手纏いであっても構わないほどの何かを持っているの二択だと思うのだけれど」

ミリアの言葉に、志希は言葉を返せない。

当たっているのかいないのか、自分では全く判断できないからだ。

客観的に見れば足手纏い以外の何物でもない自分を、元金冒険者の弟子二人が面倒を見てくれているとしか言いようがない。

カズヤは同郷のよしみで、イザークは志希を殺した贖罪なのか、責任感なのか少々分らない理由で。

その上、どうやら彼らにとって頭が上がらない存在らしいクルト達に言われた事も大きいのはずだ。

だとすれば、志希は正真正銘役立たずだろう。

そう思った瞬間、自分でも愕然としてしまう。

志希は青褪め、思わず喉を小さく鳴らしてしまう。

ミリアは、志希が突然押し黙ったことに訝しげな表情を浮かべて声をかけようとするが、それより早くイザークが口を開く。

「シキは優秀な精霊使いだと、最初に言ったはずだが？」

ほんの少しだけ刺を潜ませた声で、イザークはミリアに釘を刺す。

「今はまだ駆け出しだが、古株のクルトに保証されている」

イザークの出した名前にミリアは目を丸くして彼を凝視するが、彼は無視をして志希の前に膝をつく。

「要らぬ事で気を揉むな。まずは旅に慣れ、戦闘に慣れろ。自分が

出来る事をすれば良いだけの話だという事を思い出せ。お前はまだ、この世界に現れ冒険者になってからの日が浅い」

イザークの低い声音が、すとんと志希の心に落ちる。

初めての事だらけで足手纏いになるのは当たり前だという言葉は、志希の気持ちを軽くする。

「まぁ、オレも此処までなるのに結構時間かかったんだ。だから、そんなに慌てる必要ねぇよ」

カズヤもまた、志希が落ち込んでいたのに気が付きフォロー入れる。

「うん、わかった」

志希は涙ぐみ、何度も頷く。

志希の様子から二人が慰めたのであろうと言う事は、ミリアとアリアにも分かった。

だがしかし、なぜ警戒するように言葉を変えて話をするのかという疑問を、二人は抱く。

二人の訝しげな表情にイザークはいち早く気が付いたが敢えて何も言わず、涙を拭う志希の頭を一つ撫でてから焚き火の準備を始める。

カズヤはイザークが動き出してから、ようやっと空気が微妙な事に気がつく。

志希とカズヤは同郷だという話はしたが、何処という話もしていない上にイザークまで同じ言葉を操る事ができる。

これで、不審を抱くなと言うのも無理な話だろう。

カズヤは一瞬考えるように視線を泳がせてから、笑顔で口を開く。

「ミリアさんもアリアさんも不愉快かも知れねぇけど、気にしないでくれ。シキを落ち着かせる為に、故郷の言葉で宥めてるだけだからさ」

一時凌ぎのパーティで、詳しい事情を話すほどカズヤはお人よしではない。

しかし、不信感を持たれたままだと戦闘などに入った場合にまず

い事態になりかねない。
その為、何を話していたのかを通訳したのだ。
カズヤのその表情と笑顔からアリアは素直に信じて納得するが、ミリアは胡乱とした眼をカズヤに向ける。
だがしかし、最初に志希をある意味追い詰めたのはミリアだ。
「余計な事を言わなければ、この様な事にならなかったのを肝に銘じておけ。好奇心は、諸刃の剣だ。余計な詮索をそのまま返すぞ？」
イザークの言葉に、ミリアはぐっと息を詰める。
足手纏いをあるがまま受け入れるのは難しい。
特に、己の身に関係する事柄ともなれば気になるのも当たり前のことだろう。
だがしかし、出会って一日で様々な詮索をして問いかけてくるのは無作法で、相手へ無礼を働いても良いと思っていると受け取られかねない。
一時凌ぎで組んでいるパーティであれば、余計な詮索などせず適度な距離を取るのが礼儀なのだ。
それを失念しているかのようなミリアの行動に、イザークが不快感を示すのも当然なのだ。
いくら志希が新米冒険者であろうとも、パーティの仲間なのだ。
イザークの言い方は角が立つものだが、パーティリーダーとしては当然釘を刺さざるを得なかった。
「今のは……わたしも、姉さんが悪いと思う」
唇を噛んで何も言わない姉に、アリアが小さく声をかける。
アリアの言葉にミリアはかっと頬に血を上らせ、乱暴な所作で立ち上がる。
一つ深呼吸をしてから、ようやくといった様子で口を開く。
「ちょっと、頭を冷やしてくるわ」
震えた声音は激情を抑えているのが、よくわかる。
志希はミリアに何かを言おうとするが、言えば更に要らない事になりそうな気がして出来なかった。

「ああ、気をつけて行けよ。あんまり奥に行くと、魔獣とか出るかも知れねぇからな」
カズヤはわざと明るく声をかけ、注意を促す。
ミリアはカズヤに頷き、無言で森へと足を向けて早足で歩いて行く。
アリアは姉を呼び止めようと手を伸ばすが、その手を握ってただ姉の背中を見送る。
志希はどうして良いのか分らない表情を浮かべたまま背中を見送り、イザークとカズヤは淡々と野営の準備をしているのであった。

第十九話

ミリアは一人、深いため息をつく。
「なんだってもう……！」
毒づきながら、その場にしゃがみ込む。
イザークの言う事がいちいちもっともで、反論する事などできなかった。
それ以上に、自分自身にも詮索されたくない事情があるのに、それを忘れて他人の事情を詮索するなど恥ずべき行為だと酷い自己嫌悪に苛まされていた。
今まで、双子の妹であるアリアとしかパーティを組まないで来ていた。
一時凌ぎのパーティですら、今回が初めてだ。
それ故に距離感を測りそこね、今は組んでいるとはいえ他のパーティの方針にまで口を挟んでしまったのだ。
反省する事しきりだが、どうしても謝る事ができなかった。
気位が高いというわけではないのだが、何故か意固地になってしまい謝罪の言葉が出て来てくれない。
誰が相手でもこういう意地を張ってしまい、パーティでは不和の種を蒔きかねないと組むこと自体を自重していたのだ。
「アリアの奴……」
小さく妹の名を呟き、ミリアはその場に腰を降ろして膝を抱える。
そもそも、一時凌ぎのパーティを組むきっかけを作ったのは妹のアリアだ。
昨日、無頼としか言いようが無い冒険者のパーティに拉致されかけたところ、助けられたという話は聞いていた。
だがしかし、ギルドで偶然恩人に再会した時のアリアの表情と眼は、いわゆる恋する乙女だ。
憧れなのか恋なのかは分らないが、下心ありでこの一時パーティ

を組みたいと言ったのは明白だろう。
それを思い出したミリアは苛立ちが増し、自身の欠点を横に置いて思わず妹に対して文句を呟く。
「いつも二人でやってこれたんだから、今回だって大丈夫じゃない……それなのになんだって一時凌ぎのパーティを組んだのよ。わたしとアリアがいれば、戦士だって盗賊だって精霊使いだっていらないわ。なのにあんな軽薄そうな盗賊剣士に色目使って……！」
唇から零れるでた自身の言葉に唇を噛み、ミリアはぎゅっと拳を握る。
理解は、しているのだ。
いつまでも二人だけで居る事は、できないのだ。
そも、アリアはミリアの事情ゆえに付き合ってくれているだけ。
ミリアは本来、一人で己の身を鍛えなくてはならないのだから。
アリアが案じているからこそ、研究の合間を縫って一緒に冒険してくれるのだ。
「わたしはなんて……っ！」
ミリアは拳を握り、叫びたい衝動を咄嗟に堪える。
今ここで何か叫んでも、それは意味不明なものにしかならないし、それ以上に八つ当たりにしかならない。
礼儀を逸した行為をしたのに謝罪一つできない自分。
それをパーティを組んだ妹が悪いと、文句を言った自分。
どれだけ自分は子供なのだと、ミリアの目尻に涙が浮かぶ。
恥ずかしくて、言われた事が悔しくてたまらない。
だからこそ、泣かない様にと膝を抱え込みミリアは必死に息をつめて気持ちを落ち着かせようとしていた。
そこに。
「おい、大丈夫か？」
と、声をかけられる。
咄嗟に腰に刷いた剣の柄を掴み、ミリアは身構える。
「おいおい、オレだって」

ミリアの行動に苦笑交じりに声をかけながら、カンテラを揺らしたカズヤが現れる。
「一人にしてって言ったでしょう」
思わずそう言うと、カズヤが苦笑したまま肩をすくめる。
「でもよ。そろそろ、飯だぜ」
カズヤの言葉に、ミリアはすっかり暗くなっていることに気が付き赤面する。
「先に戻っていてちょうだい、わたしはもう少し一人になりたいの」
突き放したようにミリアは言い、顔を背ける。
泣きそうな表情を見られたくないのだ。
しかし、カズヤは距離を保ったまま立ち去る様子が無い。
気配に苛立ち、ミリアが怒鳴ろうとした瞬間。
「まぁ、悪かったな」
と、カズヤが謝罪する。
ミリアは何を言われたのか理解できず、キョトンとしていると。
「イザークの奴、結構突き放した言い方するからなぁ……傷ついただろ？」
カズヤの言葉に、ミリアの目尻からほろりと涙が零れる。
「あんた……ミリアさんとアリアさん、ずっと二人でやってたんだってな。アリアさんから聞いたよ。だから、距離を測りかねたんだろ？　特に、シキはあの通り庇護欲そそるような容姿してるし、無防備だからよ」
カズヤはそう、苦笑交じりに話す。
「イザークはあの通り、結構きつい事ズバッと言っちまう奴だからなぁ。初めて組んだ女の子は特に、あれにやられて泣いちまう事多いんだ。だから、あそこで冷静になろうとしたミリアさんは立派だよ」
慰めるような言葉は、ミリアの心に染み入るように入り込む。
だからこそ、自然と言葉が唇から零れ出た。
「こちらこそ、ごめんなさい。貴方達にも何か事情があるのは見て

取れたのに、詮索なんかして……」
自身の口から出た言葉に、ミリア自身驚いてしまう。
しかし、カズヤはそんな彼女の様子に気がつかないのか小さく笑みを浮かべる。
「いや、これはお互い様だと思うから気にしないでくれ。それじゃ、オレは戻るけど……すっかり暗くなってるから早めに戻った方がいいぜ。比較的安全ってだけで、絶対じゃないからさ。一人だと危ないぜ」
それだけ告げて、カズヤはカンテラを揺らして背中を向ける。
ミリアはその背中に、思わず声をかける。
「待って」
「ん？」
呼び止められたので、カズヤは足を止めて振り返る。
ミリアは涙を乱暴に手の甲で拭いてから、早足でカズヤの前にいく。
「わたしも、戻るわ。せっかく迎えに来てくれたみたいだし、ね」
「いや、どっちかって言うと様子見なんだけど」
ミリアの言葉にそう答えつつ、カズヤは歩き出す。
彼の隣を歩きながら、ミリアはカズヤが意外に良い人であると印象を改める。
よくよく考えれば、道中でのアリアへの対応は紳士的だ。
無論、それはミリアに対しての対応にも言える。
長く一緒に居るわけではないので深いところまでは見えないが、本当に良い人なのだろうと思う。
そんな事を考えていると、ふわりと良い匂いが鼻腔をくすぐる。
俯いていた視線を前に向けると、焚き火を囲んだイザークと志希、そしてアリアが待っていた。
「お帰りなさい」
「おかえり～」
アリアと志希が二人に声をかけると、隣のカズヤが当然のように。

「おう、ただいま」
と返事をして、イザークの横に腰を下ろす。
ミリアは一瞬動揺したが、すぐにふっと顔を綻ばせ。
「ただいま」
と、返事をした。

第二十話

夕食は干し肉と野菜のスープを作り、焚き火を囲んでそれらを食べた。
その後は見張りの順番を決め、それぞれが外套に包まって寝る事となった。
最初はイザークと志希で、その後はアリアとミリアの姉妹。
カズヤは一人で最後の見張りとなった。
焚き火を囲んで丸くなる三つの外套を眺めながら、志希は目を閉じて風の精霊達に意識を乗せる。
土の精霊達にも獣や魔獣、妖魔の類がこちらに着たら教えて欲しいとお願いしているので問題は無い。
風の精霊達が目的地までの道のりを、空から案内してくれる。
風と一体となり、空を飛ぶのは酷く心地よい。
その感覚に笑みを浮かべていたが、深とした静寂にパチリと火が爆ぜる音が響き、それによって意識が体に戻る。
寝坊をしたかのような頭の重さを感じるが、それらは直ぐに霧散する。
ぱちぱちと薪がなり、火の精霊達が構って欲しいと言うように焚き火の中で乱舞している。
どうやら、風の精霊や土の精霊ばかり構っていて少し拗ねているようだ。
さわりと風もないのに木が揺れるのは、植物の精霊が志希に何かやることはないかと尋ねているからである。
精霊達から寄せられる純粋な好意に、志希は思わず苦笑しまう。
『神無の鳥』であるから、寄せられる好意。
本当の自分であれば、きっとここまで彼らは好意的ではなかっただろう。
そう思うと、少しだけ悲しい。

志希のその気持ちが漏れたのか、風の精霊が頬を撫でてくる。
それは慰撫で、悲しまないで欲しい、疎まないで欲しいと訴えていた。
惜しみない愛おしさと慈しみを、彼ら精霊達は志希に注ぐ。
「うん。君たちのせいじゃないから……」
ぽつり、と志希は呟く。
その呟きに応えるように木々は梢を鳴らし、木を燃やす火はパチリと爆ぜる。
柔らかく吹いた風もまた、志希を慰めるように頬を撫でていく。
精霊達の囁きが聞こえている志希は、再び目を閉じて彼らの声に耳を傾ける。
すると。
「寒くはないか」
と、低い声が問いかけてくる。
「大丈夫」
そう返事をするが、志希はふといつも抱いている疑問を口にする。
「イザークは、どうしてこんなに私に良くしてくれるの？」
問いかけられた言葉に、イザークは一瞬目を見開き、次いで焚き火を見る。
「……分らん」
ただ一言、平坦な声音に困惑を滲ませて答える。
志希はその答えに、キョトンとした表情を浮かべる。
「クルトに言われた、と言う理由は確かにある。だが……ただ、俺はシキが心配なんだろうと思う」
滲ませた困惑を綺麗に消して、イザークは呟く。
まるで幼い子供を心配するようなイザークの言葉に、志希は唖然とした表情を浮かべてしまう。
「私、これでも……一応精神的には二十越えてるんですけど」
志希の憮然とした言葉に、イザークは一つ頷く。
「理解しているのだが、初対面から今まで世話を焼いているからな。

おそらく、その延長の感覚なのだろう。それに……」
「それに？」
イザークが少し言いよどんだ時に、志希は語尾を繰り返すようにして問いかける。
じぃっと志希はイザークを見つめ、イザークは志希の目を見返す。
やや鋭い艶を消した金の瞳と、甘く溶けた金の瞳。それらの視線が絡み合う。
その時、表情のあまりない金の瞳がふと緩む。
「金を貸しているしな」
イザークが楽しげな声音で言い、志希はうっと顔を顰める。
「ソウデシタネ」
何故か片言で志希は答え、イザークはくつくつと喉を鳴らす。
「冗談だ」
そう謝罪したが、志希は憮然とした表情のままイザークではなく焚き火を眺め、返事をしない。
子供のような拗ね方をした志希に、イザークは不意に口を開く。
「人の命は、基本的には金で購えないものだ。蘇生魔法があろうとも、死ぬ時は必ず死ぬ」
酷く静かな声音はどこか厳かで、志希は思わず顔をあげてイザークを見る。
「お前はまだ、地に足を付けているとは言えない。己の基盤も何もなく、『神無の志希』としては始まったばかりだ。それを、早々に終わらせるのは勿体無かろう」
イザークの言葉はやはり、志希の身を案じるものだ。
志希はイザークの言葉に心配し過ぎだと言う若干の疎ましさと、案じてくれていると言う多大な嬉しさが胸にこみ上げる。
本来であれば赤の他人で殺した者と殺された者の関係でしかないはずだが、感情的な蟠りもすでに解消され、志希の彼らへの感情は恩人と言う部分が占めている。
その上イザークは、志希を普通の仲間として接し、扱ってくれる。

人間として扱ってくれる事は、すでに人から外れてしまった志希にとってはとても嬉しく、有難い事なのだ。
イザークにもカズヤにも、『神無の鳥』と言うものが死なないと言う事を告げていない。
知らないが故の心配だとは理解していても、志希は込み上げる嬉しさを抑えられない。
「うん……有り難う」
心からの笑顔を浮かべ、イザークに感謝の言葉を紡ぐ。
イザークは志希の表情を見て一瞬の驚いたように瞠目するが、ゆっくりといつもの無表情を緩め小さな笑みを浮かべる。
「俺が一方的に案じているだけだ、礼を言うほどの事ではない」
言葉は素っ気ないが、その表情も声も瞳も、短い付き合いながらも見た事の無いほど優しいものだ。
怜悧な美貌を持つイザークのその表情に、志希の頬にみるみる熱が上がる。
「で、でも……その心遣いだけでも、嬉しいから」
若干視線を逸らしつつ、どもりながらも志希は言う。
最近、何かにつけずっと行動を共にしていたからこそ忘れていたが、イザークは凄い美形だ。
男性的なその美貌に優しい表情を浮かべられたら、何か色々と勘違いしてしまいそうになる。
正視するのはとても恥ずかしく、居た堪れなくなってしまう。
頬を染めて俯く志希の頭を、イザークはぽんぽんと撫でる。
まるで子供か、妹にするように。
志希はそれこそ子供のような事をしてしまったような気になって、羞恥でますます顔が赤くなる。
「気にするな」
苦笑交じりの言葉に、志希は無言でこくりと頷く。
イザークはもう一度志希の頭をくしゃりと撫でてから、その手を離して静かに焚き火を見る。

元々イザークは口数が少ない。
志希もまた、今下手な事を言えば墓穴を掘るような気がして口を開けない。
だが、彼とこうして並んで座っているのは嫌ではなく、むしろ心地よく思える。
ゆったりと流れるような静かな時間を感じながら、志希は目を閉じて精霊達の囁きと、カズヤ達の寝息を聞きながら過ごす事にする。
イザークはそんな志希に目を和ませてから、焚き火へと視線を移して火の番をするのであった。

第二十一話

見張りの最中や、交代後も特に何事もなく時間が過ぎた。
若干眠そうなカズヤに起こされてから硬いパンと干し肉で朝食を済ませ、焚き火の後始末をして早々に出発した。
特筆すべき事は殆どなく、拍子抜けするくらいあっけなく遺跡に到着した。
目の前には崩れた壁と、扉の無い門。
その向こうには、辛うじて屋敷の形を残した柱と石壁が見える。
「中は殆ど崩れて、屋根が辛うじて残っている状態だ。地震とか来たらあぶねぇが、まぁ大丈夫だろ」
カズヤはそう説明してから、勝手知ったる何とやらと言った様子で中に入っていく。
「それじゃ、わたしも続くけど……殿をよろしくね、イザークさん」
ミリアはそう言って、カズヤの後から中に入る。
「では、行きましょう」
アリアは志希とイザークにそう声をかけて姉の後を追い、イザークは志希の背中を押して中に入っていく。
心の準備と言いたかった志希だが、仲間に置いていかれてはたまらないと慌てて足を動かし中に入る。
屋敷の前庭は雑草や蔦に覆われて、美しかったであろう景観はすっかり荒れ果てていた。
敷かれた石畳もひび割れ、そこから生命力の高い雑草が葉をおい茂らせている。
その草を踏みつけ、かき分けながらカズヤは進んでいく。
屋敷の壁が崩れ、大きな岩石があちこちに転がっている。
しかも苔生した庭にあると言うのに断面に苔一つ見当たらず、周辺の草を押し潰すように横たわっていた。
「なんか、以前来たときと様子が変わってんな」

カズヤがぼそりと呟き、ミリアとアリアは彼を思わず見る。
「来たこと、あるんですか？」
アリアがおずおずと問いかけると、カズヤは頷く。
「ああ。この水汲みの依頼は最初のころ頻繁にやってたからな。水汲みだけで報酬が銀貨五枚だぜ？　戦闘も殆どねぇから、かなりウマいんだ」
カズヤは岩石に近づき、断面を確認しながら指の腹でそっと触れる。
見た限りでは罠の類があるようには見えなく、そもそもこの辺りに罠があるとすれば大分以前に解除されているはずなのだ。
そう理解していても、カズヤは入念に岩石を調べる。
無い筈と思って行動するのは、冒険者として以上に盗賊としては命取りになる可能性が高い。
それを師匠に嫌と言うほど叩きこまれたカズヤは、無意識にそれを行ってしまう。
カズヤが岩石を調べているのを見ていたイザークが、ふと思い出したように口を開く。
「この辺りで地震があったそうだ。一昨日、ミラルダと偶然会った時にそんな話をしていた」
正確には、志希に一方的に喋っていただけだが。
それを聞いたカズヤは若干胡乱とした表情を浮かべつつ、岩石を調べるのをやめる。
「なるほど……って、あの時ミラルダがいたのはそのせいか？」
「いや。丁度交代時間で、帰宅する所だったらしい。偶々シキを見かけて、世間話を聞かされていた」
イザークは思い出したのか、若干ウンザリとした表情を浮かべる。
イザークの言葉を聞いたミリアとアリアも、何故か酷く同情する表情を浮かべて彼をちらりと見る。
志希は志希でミラルダから聞いた話は色々な意味で面白く、知識を引き出すきっかけにもなってくれたので感謝をしていたので、な

ぜ彼らがミラルダをそれほど倦厭するのかがよく分かっていない。
キョトンとした表情の志希をカズヤは若干羨ましそうな表情をして見てから、気持ちを切り替えるように息を吐いて前を見る。
「なにはともあれ、入るぜ。前とは状況が変わってるみたいだからな……気ぃ引き締めろよ」
口調も声音も真剣そのもので、志希は背筋を伸ばして頷く。
「うん、わかった」
志希の緊張で強張った声音に、イザークがポンと彼女の背中を叩く。
励ます様なその行動に志希は思わずイザークを見上げようとするが、それより早くみな歩き出しているので志希は慌てて背中を追う。
「まぁ、シキは初実戦だ。何が出来るかもわかんねぇままと思うし、イザークやオレが出す指示に取り敢えず従っておけ」
カズヤの言葉に、ミリアがちらりと志希を見る。
志希は気まずい表情で彼女を見返すと、くすりとミリアが笑う。
「まぁ、最初から実戦慣れしている人間はまずいないでしょう。見た感じ、シキちゃんは本当に初心者のようだし。実戦の空気に慣れてから、自分なりの立ち回りを探す方が良いわ。それに、今回わたしとアリアもある意味初心者だから……シキちゃんと同じ立場よ」
アリアとミリアは二人きりでやってきたと言うのであれば、多人数対多人数の集団戦は初めてとなる。
「まぁ、わたしは一応神官戦士だからその辺の訓練は受けているけどね」
ミリアはそう注釈を付けると、アリアが小さく頷く。
「わたしもがんばります」
それでもアリアは、少数対多数は経験しているので立ち回りは理解しているだろう。
真実初心者なのは己だけだと、志希の緊張は増す。
その姿を見ているイザークは小さく息を吐き、志希の頭をポンと撫でる。

「今から緊張しすぎれば、後になると息切れを起こす。同様に、気を抜きすぎてもだめだ。どちらも適度にするのが、良い冒険者になる秘訣だ」

イザークの助言に、志希はこくこくと頷くが緊張が取れた様子はない。

すぐすぐ実践できるわけではないのが、人間と言うものだ。

例え知識だけがあろうとも、実践するにはやはり時間がかかるものなのだ。

「頑張るっ」

志希はとりあえず気合を入れて、呟く。

「だから、気ぃ入れ過ぎんなって。まぁ、取り敢えずはこの辺に敵がいないかの索敵は頼んだぞ」

カズヤは一言、志希にお願いをしておく。

「了解！」

志希は元気に返事をして、風の精霊と土の精霊に言葉もなく願う。

風や土の精霊は建物の中にまでその力を及ぼす事は出来ないのだが、志希が居ればそれが可能らしい。

このあたりの事は、昨夜の精霊との交感で教えられていた。

もっとも、精霊使いはそれらの精霊を物品に宿らせ触媒とする事もできるのだが、それには精霊が好む物品が必要だ。

それを持ち歩いている等と言う事は精霊使い達は言わないので、基本的に人工物の中などで精霊を使えるのを知らない冒険者も多い。

志希はその辺りの事をすっかりと失念していた訳なのだが、精霊達は嘘を吐かないので漠然とそうなのだろうと納得したのである。

無論、この辺りの事も考えれば『知識』が教えてくれるのだが、この様なところで物思いに耽るのは危険だ。

感じた疑問などは全て後回しにして、今自身がすべき事柄に集中する。

先頭を歩くカズヤは慎重な足取りで歩き、全員が警戒しながらついていく。

大きな屋敷だけあり、廊下などは人が三人並んで武器を振り回しても大丈夫そうだ。
もっとも、足場は最悪なので気をつけなくてはならないのは変わらないが。
木と石で造られた室内は割れた窓から入る土埃ですっかり汚れ、床はひび割れて所々穴があいている。
上をみれば二階の床にあたる天井の殆どが崩れ、その上にある屋根の梁部分が見えていた。
かなりの歳月を雨風にさらされた無残な廃墟としか言いようのない風景に、志希は時の無情さを感じる。
しかし、それこそが正しい流れなのだ。
形あるものはいつか壊れる。
生き物が死んで、土に還るのと同じ理屈だ。
カズヤの後を追いながら、志希たちは廊下を歩く。
土の精霊も風の精霊も、魔獣どころか獣もいないという事を教えてくれる。
「この先の広間に件の泉がある。生物の気配はないが、気を張っていけ」
イザークが志希が何かを言うより早くカズヤに注意を促し。
「おう、了解」
カズヤは手をひらりとふって返事をする。
長く共に冒険しているのを伺わせる二人の行動に、志希は一瞬自分はいらないのではと思ってしまう。
しかし、落ち込んでも今は何も良い事はないので、志希は引き続き精霊達に策敵をお願いしていたが、土の精霊が触れてきた事で足を止める。
隣にいたイザークは数歩前に行ってから、足を止めて志希を振り返る。
「どうした」
イザークの問いかけに、志希は困惑した表情を浮かべる。

「えと……この屋敷って、地下への道ってあったのかなぁって」
志希の言葉に、イザークは目を細める。
「カズヤ、戻ってくれ」
突然の言葉に、だいぶん前に行っていたカズヤ達は足を止め、引き返してくる。
「どうした？」
不思議そうなカズヤの問いかけに、イザークは問いかける。
「この遺跡には、地下への道などあったか？」
「いんや、無かったぜ。ここを調べた先輩方も、師匠も言ってたじゃねぇか」
何を言っているんだと言わんばかりの表情で、カズヤは答える。
その答えに、志希は右の廊下を指す。
「こっちの、この廊下を言ったつきあたりの部屋、そこの更に奥の部屋から下に降りれるかもって……」
志希の言葉に、半信半疑になるカズヤ。
同じように信じられないといった表情を浮かべるアリアとミリア。
「本当に？」
「本当です」
ミリアが念を押すように問いかけると、志希は頷く。
「……まぁ、ちらっと寄り道してみるか。マジもんだったら、シキの手柄だしな」
枯れた遺跡で新しい階層が見つかるとなると、その中は手付かずの可能性が高い。
そうなればかなり珍しいものや新たな魔道具、貴重な遺失されているとされている呪文なども見つかる可能性が高い。
しかし、アリアとミリアの二人は気が進まない様子を見せる。
いくら精霊使いとはいえ、そこまで詳しく屋内の事がわかるのかという疑問があるのだ。
そもそも、精霊術は精霊との交感で現象を起こす。
しかし、その際には必ず精霊と会話をする特別な言葉を口にする

のだ。
だがしかし、志希はそのような事をしている様子が全く見られない。
それで本当にこの屋内の様子を調べ、彼女の言う地下への道があるのかと疑ってしまうのも致し方無い。
だが、イザークやカズヤが何の躊躇いもなく志希の言う事を信じているのを見ると、真実なのではないだろうかという気持ちが湧いてくる。
基本的に、実績の無い者よりも実績のある者の方を信じるのがごく当たり前の事なのだ。
それゆえ、志希への信頼ではなくイザークとカズヤへの信頼でミリアは口を開く。
「分かったわ」
ミリアの言葉に追従するように、アリアもこくこくと頷く。
「んじゃ、シキ。案内頼んだぜ」
カズヤの言葉にこくりと頷き、志希はカズヤの後ろへと移動する。
それに一瞬表情を揺らすのはアリアだが、ミリアに突かれて慌てて表情を元に戻す。
志希とカズヤはそのような事に気が付きもせず、志希の道案内を聞きながら歩く。
カズヤの身のこなしは軽快だが慎重で、足音も無く歩いており盗賊らしさを醸し出している。
その後ろをついて歩く志希は小さく、まるで親鳥について歩く雛鳥のように見える。
少々場違いな印象を受ける志希なのだが、彼女は全く頓着せずカズヤに道を指示していく。
大きな廊下を塞ぐようながあった痕跡があるが、それら全てが雪崩を起こしたように崩れ去っていた。
そのおかげで道が出来ており、カズヤは慎重に足を踏み入れる。
「こりゃ、この瓦礫で塞がれてて進めなかったところだ。ゴーレム

とか作って先に進もうとした奴もいたけど、あんまりにも危なすぎて手が出なかったって噂もあったな」

カズヤは思い出した事を口にしながら、足場がどうなっているかを調べる。

しかし、特に崩れそうな様子も無かったのでカズヤは振り返って全員を呼ぶ。

「行けるぜ。地震が来て、新しい瓦礫に埋まらねぇ様に祈りながら進もうぜ」

カズヤの言葉に一同は頷き、志希は再びイザークの横に戻って移動を開始する。

この先は未知の領域だ。

素人と言っても差し支えのない志希には、危険すぎる。

あまりにも足場が悪く、志希が転んでも罠感知と前方の警戒をしているカズヤには構っている余裕はない。

ミリアとアリアは互いを助け合っているので、余分に志希に気を割いてもらうのも悪かろうと言う配慮である。

しんがり付近で、余裕のあるイザークに助けてもらう方が一番効率的なのだ。

全員で助け合いながら、なんとか廊下の突き当たりの部屋の前に辿り着く。

木目の美しい扉が部屋への道を塞ぎ、カズヤは小さく舌打ちする。

「こりゃ、あからさまに魔法が掛けてあるな」

今まで見てきた木製の扉は全て朽ちかけたり、粉々に砕けていた。

だと言うのにこの扉は美しい意匠が施され、あせた様な部分が全くない。

それは、魔法をかけて保存されているからなのだろう。

「取り敢えず、罠が無いか見てみるから少し離れていてくれ」

カズヤは一向に少し距離を空けるように指示してから、腰のポーチから折り畳まれた棒が付いた小さな鏡を取り出す。

折り畳まれた棒を直角になるように引っ張り、小さな音が鳴るま

で延ばす。
「悪い、誰か明かりくれ」
天井に空いた穴から光が降り注いでいても、この場所はちょうど暗くなっている。
これでは鍵穴が暗く、罠があるかを調べるのが難しい。
カズヤの指示に、アリアが慌てて小さな光を魔術で生み出す。
光量を調節できる優れた明かりの魔法で、光が強ければそれだけ効果が短くなる。
「これくらいで良いですか？」
アリアの問いにカズヤは頷き、指で招く。
カズヤの意図を汲んだアリアはその明りをカズヤの側に飛ばし、指示を待つ。
「明るさはこれくらいで十分だな。この辺に置いておいてくれ」
カズヤはそう言ってから、手鏡で鍵穴の中を覗き見る。
「なんで、手鏡で見るのかしら……」
小さく疑問を呟くのは、ミリアだ。
「鍵穴の中に罠があったら、オレの目が潰れっだろ」
ミリアの呟きに答えるのは、カズヤだ。
「まぁ、こんな小さい所に仕掛ける奴ってすくねぇけどな。その分、凶悪だぜ」
カズヤの言葉に、志希は若干青ざめた表情で頷く。
「確かにそうだよね。それに腐食毒とか塗られてたら、まず助からないし」
「そういう事だ。まぁ、取り敢えずはそんな罠なさそうだけどな」
鏡の角度を調節しながら、カズヤは目を細める。
鏡を再び折り畳んでポーチにしまい、カズヤは腰に差している小さな投げナイフを一本引き抜き、小さく扉に振動を与えながら調べる。
「なんもなさそうだな。鍵もかかってねぇ所を見ると、魔法じゃねぇかな」

カズヤの言葉に、アリアが頷く。
「では、わたしが鍵開けの魔法をかけてみます」
「ああ、頼んだ。ただ、あぶねぇから開けるのはイザークな」
この中の誰よりも身体能力が高いのは彼だ。
「分かっている」
そう頷き、イザークはアリアに鍵を空けるように目で促す。
アリアは若干怯えたような表情をしつつ頷き、手に持っている杖を揺ら揺らと動かす。
表情を引き締め、集中しているのか目を眇めて扉を見る。
「開け」
たった一言の呪文に応じる様に、木製の扉が一瞬光る。
そして、扉が小さな音を立てて開いた。

第二十二話

最初こそ罠があるかと警戒していたがそのような事は無く、中に入れば埃と蜘蛛の巣にまみれた廃墟の一室があった。
以外に質素な室内を一通り調べると、隠し扉を見つける事が出来た。
無論、罠などが無い事を確認してから一行は隠し扉を開けて中へ入り、地下へと続く道を見つけて降りていく。
それほど長いわけではない階段を下りきると、真っ直ぐの廊下が目の前に広がる。
上の廊下とは違い、並んで歩ける人数は二人が限界だろう。
「長そうだな」
小さく呟き、カズヤはアリアの魔法の明かりを前に出しながら歩きだす。
罠に気をつけながら歩くカズヤの足取りは軽いが、慎重だ。
広い廊下に罠を仕掛けられる事は少ないが、細い通路はその限りではない。
最も多く通る場所に罠を仕掛けた方が、効率的だ。
しかし、カズヤは上の通路でも罠を警戒して歩いていた。
その事に志希は疑問を抱くが、質問はしない。
カズヤの邪魔になってしまうし、何より肌が泡立つような感覚を覚えていて緊張しているからだ。
足が小さく震え、志希は喉を鳴らして唾を飲み込む。
精霊達が騒ぎ、志希に警戒を促す。
「シキ、如何した」
隣を歩くイザークが声をかけてきた事に肩を震わせ、志希は彼を見上げる。
「なんかいる感じと、何ていうか……凄い悪寒がする。寒いって言うか、何ていうか」

戸惑いながら、自分が感じる物を伝えようとする志希。
静かな廊下に響く志希とイザークの話す内容に、ミリアが感心した表情を浮かべてちらりと肩越しに振りかえる。
「良く分かったわね。これ、霊気よ」
ミリアの言葉に、えっと声を上げるのはアリアだ。
その彼女に説明するように、言葉を続ける。
「この地下部分には、凄い霊気が渦巻いているわ。上はさほど感じなかったのに……多分、この場所は相当酷い事をしていたんでしょうね」
ミリアの淡々とした説明に、アリアは成程と頷く。
「姉さんが言う事が確かなら、この場所はもしかしたらゴーストやリビングデッドの類が居るかもしれませんね」
真剣な声音に、志希は思わず顔を顰める。
ゴーストは未練を残して死んだモノや、恨みを残して死んだモノが成りやすい。
特に強い恨みと嘆きが入り混じれば、それはバンシーと言う泣き叫ぶ女の形をした亡霊となる。
ゴーストは強い怨霊や悪霊になるための足掛かりとして、最初に発生する霊の形なのだ。
志希は自然に引き出された解説に嫌な表情をしていたのだが、ミリアはそれを見て勘違いをしたのか優しい表情を浮かべる。
「感受性の強い人は、霊気を感じやすいわ。そして、その分神との交感もしやすいから神官に向いている、と言われているから……案外シキちゃん神官に向いてるのかもね」
ミリアはくすりと笑って言い置いてから、表情を引き締める。
「霊気を感じる神官の中から、更にその感覚を実戦的にまで高める訓練をした者がアンデッドキラーになれる。わたし、実はまだ未熟だけどその資格を持っているわ」
ミリアの言葉に、イザークは感心したような声を上げる。
「アンデッドキラーか、神に愛されているようだな」

「まぁ、ね」

イザークの言葉にミリアは何とも言えない表情で肩をすくめ、自身が背負っている大鎌を見る。

アンデッドキラーは、大地母神と秩序と光の神の神官戦士が不死者達を秩序と循環を破壊する存在であると断定し、裁く為になるものだ。

魔法の殆どを不死者達を滅する浄化の力へと特化し、戦いの業へと昇華した者たち。

しかし、それらの業を使いこなすには法力が高くなくてはならず、アンデッドキラーになる為には司教位と同等の法力が無くてはならない。

アンデッドキラーの資格を持つミリアは破格の法力を持つという事になる。

法力は神からの加護の厚さ故に強くなると言われているので、イザークが口にした言葉は誰もが抱く感想なのである。

志希はアンデッドキラーという単語から自動的に脳裏に浮かんだこの説明に、ほんの少しだけ苦い表情を浮かべる。

志希が一般の人間やアンデッドキラーではない神官よりも霊気に対し遥かに鋭敏なのは、『神無の鳥』であるからだ。

しかし、ミリアに対しそのような事を言うわけにもいかない。

小さく嘆息を零し、志希は再び静かになった一行の後を着いて歩く。

薄ら寒い空気の廊下を足音を響かせて歩いていたが、不意にその足音が止まる。

一行の前に、黒い鉄の扉が立ちはだかったからだ。

「扉はここ一つだけ、か……嫌な感じだな」

苦虫を噛み潰した様な声でカズヤは呟き、扉に触れようと手を伸ばす。

しかし、扉はカズヤの声を聞いたから、それとも人の気配を感じたからか分からないが自動的に開いて道を空けた。

ますます嫌な感じだとカズヤは顔を顰め、後方にいるイザークを振り返る。
「どうする？」
このままの陣形で行くべきか、それともイザークを前に出す陣形で行くべきかを言葉少なく問いかける。
罠が仕掛けられていてもおかしくないほど、細い通路。
しかし、カズヤの勘は罠が無いと囁いていた。
むしろ、通路よりもこの先が危険だと訴えている。
カズヤ言葉を裏付けるように、志希の表情が堅い。
「この先は凄く広い部屋みたいなんだけど……良く、分からない。何かに邪魔されてるような感じで、良く見えないの」
堅い声音が告げた言葉は、物凄く不吉だ。
同時に、遠見をしていたかのような言葉にアリアとミリアは驚きの表情を志希に向ける。
しかし、その二人に対しイザークは少々あきれた表情を浮かべて口を開く。
「詮索よりも、現状をどうにかするかを考えろ。先に進むのか、進まないか」
イザークの低く、艶のある声音での問いかけに、ミリアとアリアははっと表情を引き締めて頷く。
「そ、そうね。わたしは、先に進みたいと思うわ。もし死霊が居るのであれば、弔うのがわたしの役目だから」
大地母神の聖印を揺らし、ミリアは自身の希望を述べる。
「わたしも、先に進みたいと思います。この先にもしかしたら、見た事もない魔道具があるかもしれませんから」
今までよりも少し大きめの声音で、しっかりと己の意見を言うアリア。
しかし、その目はちらりとカズヤを見たりしているあたり、下心もあると言うのが良く分かる。
「怖いけど、私も進みたい。ここまで来たって言うのもあるけど…

…先に何があるのか、見てみたいなって」
志希の好奇心に満ちた言葉に、イザークは頷きカズヤを見る。
「俺も先に行くのは賛成だ。少々危なっかしいかも知れんが、下手な事をしなければまず大丈夫だろう」
淡々と紡ぐ言葉には、彼の自信が窺える。
「まぁ……気はすすまねぇが、行ってみるか。きっちり魔術師と神官、精霊使いが居るからなんとかなるだろうしな」
カズヤはイザークの言葉に勇気付けられたように頷き、カズヤは前を見ながらミリアを指で招く。
「オレの隣、歩いてくれ。イザークでも良いんだが、シキが居るだろ？」
後ろから襲われる恐れはないだろうとは思っていても、頼りない少女一人に後ろを歩かせるのは微妙だと言うカズヤの言葉に、ミリアは素直に頷く。
隣のアリアは若干羨ましそうにミリアを見ているが、彼女は妹の頭を一つ撫でてからカズヤの隣に並ぶ。
「んじゃま、行くぜ」
若干緊張した、堅い声音。
常のカズヤでは聞けないその声に志希は頷き、大剣を抜いて歩くイザークとともに歩きだす。
鉄の扉に誘われるがまま中に入ると、軋んだ音を立てて扉が閉まる。
その事に志希の足が一瞬止まりそうになるが、暗闇に仄かに浮かぶイザークの金の目が止まるなと語りかける。
志希はイザークの視線に頷き、震える足を叱咤して前に前にと足を進める。
一歩歩くごとに、膨れる緊張感。
志希は慣れない緊張に目眩を感じながら、前に進む。
緊張感からか、それとも何かを感じるからか志希は酷い息苦しさも感じており、普通に歩いているのに息が激しく乱れていた。

「シキ」
静寂しかない廊下に、低い声音が響く。
志希はびくりと体を震わせ、声の持ち主を見上げる。
闇に浮かぶ金の目は冷徹な光を帯びていたが、ふっとそれが優しく和む。
同時に、志希の背中を大きな掌が優しく、勇気付けるように軽く叩く。
それだけで強張っていた気持ちが緩み、体の力が抜ける。
志希のその様子にイザークが息だけで小さく笑い、再びポンポンと背中を優しく叩いて促す。
志希はそれに応えるように頷き、気を引き締める。
威圧するような空気に呑まれず、自分を見失わないようにとしっかりと前を見据えながら歩く。
長く感じる廊下の先に、長方形の形をした光が見える。
そこが出口なのだろうと思うと同時に、再び圧迫感が襲ってくる。
同時に志希の側にいる精霊達がざわめき、警戒の色を強くする。
志希は彼らと同調する事で、建物の内部を視る事が出来る。
だがしかし、地下に降りてからは視る事が全くできていなかった。
精霊と同調する事は出来るのだが、阻害されるような感覚があり気配を探る事すら難しい。
おそらく、この建物が健在であった時に精霊や魔術などで建物の中を探られる事など無いように、阻害の魔法をかけてあるのだろうと志希は結論付けていた。
だがしかし、この異様な圧迫感を感じてからは本当にそうなのだろうかと思い始めている。
重苦しい重圧は、この先に来るなと明確に伝えている。
気配に敏いイザークとカズヤも、何か感じているのかもしれない。
志希はそう思いはするが、口を開くのを躊躇してしまう。
アリアとミリアに、自分が何であるかを告げていないのと同時に、信頼して良いのかが分からないからだ。

一時しのぎでしかないパーティである以上、余計な事は言わない方が良い。
自身の力をどこまで見せれば普通なのか、どこまで見せたら異質になるのかの判別が全くついていないのだ。
知識があっても経験がついてこない以上、下手な事をするのはある意味命取りになってしまう。
志希がそうやって迷っている間に、先頭のカズヤは出口へと踏み出していた。
「広いな」
カズヤの呟きで志希はそれに気が付き、何事もない様子に少しだけ安堵する。
すると志希の様子に気が付いたからか、イザークが励ますように背中をポンと叩く。
志希は前を見たままイザークに頷き、しっかりとした足取りでアリアの後を追って出口へと足を踏み入れる。
暗い中から急に明るい所に出たせいで目が慣れず、目を細めて周囲を見回す。
高い天井には物凄く明るい照明が付いており、周囲の壁は白く光を反射し明るく見せている。
がらんとした広いその部屋は、壁が緩やかな弧を描いていた。
見るからに円形に作られているとわかるその形に、カズヤは眉を潜める。
「何だこの部屋……」
カズヤが訝しげな声を上げると同時に、志希達の背後にあった廊下に戻る出口が甲高い金属音を響かせる。
「わぁ！」
志希は背後で響いた音に驚き、声を上げながら前に飛び退き振り返ると絶句する。
出入り口であろうそこには、太くて頑丈な鉄で出来た格子が下りているからだ

錆び一つ浮いていないそれには、恐らく保存の魔法が掛けられているのだろう。
「何事ですか！？」
アリアは志希の悲鳴に驚き、思わずと言ったように問いかけながら振り向き、息を飲む。
「うわ……厄介だな」
カズヤはぼやきながら、鉄格子が下りた出口に向き直る。
「普通の部屋とは思えんな」
イザークはそう言いながら、前に出てぐるりと部屋を見回す。
「同感。なんか、凄く淀んでいて……嫌な場所」
ミリアは顔を顰めてそう言い、アリアは青ざめながら姉の側に立つ。
「取り敢えず、この広場を調べるか。この鉄格子を上げる仕掛けもあるかもしれねぇしな」
カズヤは頭を掻きつつ言いぐるりと部屋を見まわし、ため息をつく。
壁は何の変哲も無い、普通の石壁に見える。
しかし、油断させておいて何があるかが分からないのが古代文明の遺跡である。
まして、鉄格子の降りた入口以外に出口らしきものもみあたらない。
「こりゃ、侵入者専用経路のどん詰まりってやつだろうな。ここ以外の道筋で地下に降りれるところもあっただろうが……まぁ、言っても詮無い事か」
カズヤは嘆息交じりで言いながら、手近な壁に近づき罠の有無を調べるべく短剣を抜く。
ミリアのすぐ隣に立っていたアリアは、カズヤの行動に気が付きほんの少し迷ってから彼の側へと寄って行く。
「あの、わたしにも手伝える事はありませんか？」
アリアの問いに、カズヤはそうだなと呟き一つ頷く。

「あれだ、魔法が掛かった罠とかねぇか調べてくんねぇ？」
魔法が掛かった罠なども見分ける事が出来るのだが、アリアが手持無沙汰なのだろうと思ったカズヤは一つお願いしておく。
「あ、はい！」
アリアは満面の笑顔でカズヤの言葉に頷き、杖を握っていないない方の手を壁にかざしながら呪文の詠唱を始める。
ゆっくりと手を動かしながらアリアが横に一歩移動した瞬間、ガコンと言う音とたたらを踏む彼女。
驚いた表情で転びかけた体勢で堪えようとするアリアの真正面にある壁が小さな音を立てて横にずれ、空洞をあらわにする。
それを見たカズヤは咄嗟にアリアを突き飛ばすと同時に、脇腹に衝撃を感じた。

第二十三話

志希は目の前で起きている出来事に、凍りついたように動く事が出来なかった。

アリアがカズヤの手伝いを始めたのを目の端で見えたので、そちらに視線を動かした瞬間にカズヤがアリアを突き飛ばし、彼女に突き刺さるはずだった罠の矢を受けていた。

青ざめた志希にいち早く気付いたイザークがその視線を追い、一瞬目を見開いた後ミリアの腕を掴んで大股で歩き出す。

同時に、アリアの悲鳴が室内に響き渡る。

「カズヤさん、カズヤさん!!」

アリアの悲鳴と声にミリアは何事かと驚いたが、直ぐに正気に戻り倒れ伏しているカズヤに駆け寄る。

アリアはカズヤの体を掻き抱き、泣きながら必死に名前を叫んでいる。

突然の惨劇に志希の思考は止まっていたが、叩きつけるような精霊達の警告が正気に戻す。

「壁際から離れて!!」

志希の警告の声にイザークが反応した瞬間、周囲の壁に変化が起きる。

まるで幻のように、壁の所々が消えていく。

その壁の向こうには、志希の想像を絶する獣が居た。

一匹は三つの首を持ち、白く濁り毛皮がべろりと剥げた姿を持っている。

一匹はとても大きな体躯を持つ犬のように見えるが、毛皮の一本も無く一歩前に足を進める度にグチュリと不快な音を立てて体のあちこちから黒い液体を滲み出している。

一匹は涎のような腐汁を口の端から垂らし、黒く腐った肉を滴らせ虚ろな眼窩を晒しながらゆっくりと歩いてくる。

全部で三匹ほどのその獣。否、獣と呼ぶ事すらおこがましい物体は、全て腐敗臭を放っていた。

「うぶっ……！」

志希は喉を鳴らし、手で口を押さえて青ざめる。

腐った獣達から漂う臭いとその外見に、志希は吐き気を催してしまったのだ。

イザークは志希のその姿を目の端で確認してから、ざっと周囲を見回す。

壁が消えたのは六か所で、イザーク達の背後にも魔獣の部屋らしきものがある。

そこからは、四匹目の魔獣が這い出てこようとしていた。

足が折れているのか、それとも腐り落ちたのかまともに動く事も出来ない死した獣。

肉が溶け落ち、頭の部分の頭蓋を晒している。

そのあまりにおぞましい姿にアリアは悲鳴を上げ、顔を紫色に染めているカズヤを抱きしめる。

ミリアは死獣達が出てきた時点で大鎌を構えてはいたのだが、カズヤのあまりにも不自然な顔色に気がつき足を止める。

顔色が紫になる等、普通の怪我では考えられない。

カズヤの革鎧を貫通し、脇腹に刺さっている矢尻に何らかの毒物が付着していたのは間違いないだろう。

早く毒を中和し傷を癒さなくてはならないのだが、毒を中和する為には対象に触れなくてはならない。

イザークは素早く思考を巡らせながら、もう一度パーティのメンバーに視線を走らせる。

相棒ともいえるカズヤは現在毒矢を受け、昏倒中。

魔術師であるアリアは酷く取り乱し、冷静さを失っている。

神官戦士であるミリアはアリアよりも遥かに使えるがしかし、敵の数がいかんせん多すぎる。

カズヤの状態が刻一刻と悪い方へと向かっている以上、戦えと指

示を出した場合彼が死んでしまう可能性が高い。
精霊使いと言うくくりにいる志希は、初心者中の初心者だ。
戦闘すら初めてで、初めて目にするアンデットに嘔吐を堪えている最中だ。
しかも、一人パーティから離れている状態で。
「シキ！」
イザークが名を呼ぶと志希は一瞬動きを止めるが、何を言いたいのか分かったのか駆け寄ってくる。
無論、直ぐ近くに獣のなれの果てが居るのだが、一人離れている方がはるかに危険だ。
近くに来た志希は、腐敗臭と濃厚な血の臭いにまた吐き気を刺激されて口を押さえている。
「ミリア、直ぐそこのをやってくれ。早々に倒さねば、落ち着いて魔法も使えまい」
大剣を構え、ゆっくりと囲み始める死した獣を警戒しながら指示を出す。
「分かったわ」
ミリアは頷き、背後の腐肉の塊でしかないモノに向き直ろうとする。
だが。
「姉さん！　カズヤさんの方を先に！　これ、この毒は危険すぎます！」
半泣きのアリアがそう焦って声を上げ、ミリアを引きとめてしまう。
「では、アリアがそれを倒せ。そうすればミリアも精神集中が出来るだろう」
アリアの言葉にそう言い、イザークはどの獣が襲ってくるかを警戒する。
正直、どちらでも良いので行動して欲しいのだ。
「は、はいっ」

震えた声で返事をするアリアだが、腕は震え精神を集中するどころではない状態だ。
半瞑想状態にならなくては魔術師たちの魔法は発動しないため、今のアリアでは下手をしたら魔法を暴走させかねない。
その事にイザークが舌打ちをした瞬間。
「お願い……」
苦しい声音で、志希が呟く。
瞬間、パーティを囲む様に土壁が突然出現した。
突然の事にイザークは瞠目し、志希を振り返る。
志希はなんとか吐き気を堪えながら、イザークに一つ頷く。
ミリアとアリアは突然出来た土壁に驚くがしかし、この土壁があればカズヤを癒すだけの時間を稼げると判断した。
「イザークさん、カズヤさんの矢を抜くの手伝ってください！　鎧まで貫通していると、わたしの腕力じゃ抜けません！」
そもそも、毒物の素が体の中にある状態で毒を中和しても効果がない。
「分かった」
ミリアの言葉に頷き、アリアをカズヤから強引に引き剥がしてイザークは傷口を確認する。
「このまま抜くぞ、すぐに毒の中和と治癒を頼む」
革鎧を切り取る事など出来ないので、このまま矢を抜く事を決めるイザーク。
矢尻には返しがあり、引き抜いた際に更に内臓関係にダメージを与える可能性もある。
だがしかし、それに配慮している暇などない。
矢に手をかけたところで、ゆっくりとミリアは手を祈りの形に組む。
「慈悲深き大地母神、エルシルよ……」
目を閉じ集中しながら、神への祝詞を口にする。
奇跡を起こす為の言葉を聞きながら、イザークは一息に矢を抜く。

その痛みに声を上げ、目を開くカズヤ。
脇腹からは毒を含んだどす黒い血が噴き出し、アリアの悲鳴が響く。
「いてぇ……」
うめき、呟くカズヤの声にイザークが当たり前だと答える。
「今まさに毒矢を抜いたところだ、痛くない訳がなかろう。しかし……お前らしくも無いドジを踏んだものだな」
イザークは意識が戻った事に険しかった表情をやや緩め、そう話しかける。
「仕方、ねぇだろ……」
苦しそうにしながらも、憮然とカズヤは答える。
「まぁ、お前らしいがな」
カズヤの言葉にイザークは肩を竦めながら、ミリアを見る。
ミリアはカズヤの傷口に手を当て、毒を中和する奇跡を発現させていた。
傷口に当てた手は柔らかな光を放ち、カズヤの体から毒素を中和していく。
それを確認してから、ミリアは再び祝詞を唱え始める。
今度は傷を癒す奇跡を願うもので、もう片方の手を傷口に当てて精神を集中させていた。
なんとか吐き気を収めた志希は、青ざめた顔のままカズヤの方を見ようとして、アリアに気がつく。
カズヤの意識が戻ったことで安堵したのか、それとも諸々の感情が溢れだしたのか子供のように泣きじゃくっている。
普段はおとなしく、冷静であろうとするアリアのその姿に志希は思わず安堵してしまう。
何となく、自分一人が気持ち悪いとか怖いという感情を抱いているわけではないと感じられるからだ。
志希は今まさに、他人と自分の命の危機という現場に居合わせていたのだ。

しかも、映画などでしか見られないようなアンデットに襲われかけて。
現実逃避をしそうになった瞬間、引き戻してくれたのはイザークの声だった。
現実味の感じられない状態であるのを、彼に名前を呼ばれただけで正気に戻れたのだ。
イザークの傍で自身の吐き気だけを堪えている最中、カズヤだけではない自分達の命の危機。
だからこそ、土の精霊に願ったのだ。
みんなを護りたいと言う事を。
その形が頑強な土壁で、死にながら動く獣達から身を守ってくれている。
そして今ミリアが、アリアや志希、イザークの目の前でカズヤの命を救っている。
この瞬間、志希は初めてこの力があって良かったと心から思えた。
誰かの役に立つ事、誰かの命を救うきっかけになれた事。
冒険者となって幾ばくかの後悔はあったが、こうして人の助けとなれる事を知ったから志希は初めて『神無の鳥』である事を感謝した。
志希にとって、『神無の鳥』と言うものはある種疎ましい力だと感じられていたのだ。
人ならぬものになったとしても、その精神は人でしかない。
まして、元々は平和に慣れ親しんだ身体共に脆弱な一般的な日本人だ。
突然異世界へ放り出され、剣と魔法の世界に直ぐに慣れろと言われても無理と言うしかないのだ。
だがそれでも、志希は生きて世界を見る事を選択した。
ならば慣れる以外は道も無く、何かを傷つけ殺していく事になるのを覚悟していかねばならない。
本当の意味での覚悟を試されたと志希は思いながら、ゆっくりと

深呼吸をする。
カズヤの血の臭いと、獣達の腐臭。
それらに喉を鳴らすが、嘔吐してはいけないと自分に言い聞かせる。
自分が出来る事で戦い、皆で無事に帰る。
死した獣たちをもう一度殺し、眠らせてこの場所から生きて出る。
そう志希は心を決めて、ゆっくりとイザークを見る。
未だ治療中のミリアと、泣きじゃくるアリアに気がつき慰めるカズヤ。
イザークはそんな彼に呆れたような目を向けていたが、志希の視線に気がつきすっと表情が変わる。
「シキ、行けるか？」
問いかけるイザークの声に、志希は一つ頷く。
「多分、大丈夫」
応える声は震えているが、強い意志を秘めている。
イザークは志希の返答に頷き、立ち上がる。
「こちらは俺と志希でなんとかする。二人はカズヤを見ていてくれ」
イザークはそう言って、カズヤ達より少し離れた所に立つ。
「俺が二人立つほどの大きさで、壁に穴をあけられるか？」
「うん、出来る」
「ならば頼む」
イザークの指示に志希は頷き、イザークの斜め後ろに立って呟く。
「開けて」
志希の言葉に応えるようにイザークが立っているところを中心に口が開くが、同時に志希の背後に土壁が立つ。
それは、志希なりの保険だ。
何かがあった時には、後ろの人間が最も危ない。
イザークが抜かれるような事はないと思うが、それでも志希はこれ以上後ろの三人に怖い事が及んで欲しくなかったのだ。
足が震えて、本当は逃げ出したい気持ちの方が強い。

その志希に背中を見せているイザークは大剣を構え、口を開く。
「援護を頼む。こいつらをお前の元には行かせんから、安心しろ」
低く、艶のある声が静かに言葉を紡ぐ。
それは魔法のように、志希の気持ちを落ち着かせた。
「うん！」
まるで子供のように志希はイザークの言葉を信じ、頷く。
「上等だ」
大きな背中を見せるイザークの声は楽しげに笑い、一歩前に踏み出す。
いつの間にか、彼の前に三頭の死獣が立っていた。
志希は咄嗟に、二頭の足止めをする事を選択する。
「足止めを！」
志希の言葉に、土の精霊が応える。
石畳のはずの床から土が盛り上がり、イザークの左右にいる死獣の足を捕らえる。
死獣は唐突に動けなくなった事に苛立たしげに首を振り、腐汁をまき散らす。
生きていたころの動きそのままの仕草なのだろと思うと、志希はこの死獣に憐みを覚える。
そして憐みを覚えるならばこそ、彼らを速やかに安らかな眠りへとつかせてやらなければならないのだと吐き気とこれから彼らに加える危害への嫌悪を堪える。
それを体現するように、イザークは片手で大剣を横に一閃する。
あまりにも早いその横薙ぎの攻撃は、死獣の腐肉を叩き潰し骨を折る。
しかし、痛みすら感じない死獣にはそれの攻撃に声を上げる事もせず、ゆらりと起き上がる。
潰れ、折れた部位はそのままなのでバランスをとるのが難しく、ふらふらとしてはいるが敵意は薄れない。
むしろ、他の死獣達ともども敵意を募らせている。

獣の体に憑いている怨念が、ますます強く濃厚になる。
それを感じ取る志希は肌を泡立て、逃げ出したい衝動に駆られる。
瞬間、イザークが一歩前に出る。
志希に逃げるなと言うかのように、イザークが小さく気合の声を上げて大剣を上段から振り下ろす。
大きな大剣が空気を切り裂く音を立てながら、死獣を両断する。
腐った血と肉が床に広がり、死獣が声無き断末魔を上げる。
聞こえるはずの無いその声に、志希は思わず両の手を組み目を閉じる。
その間にも土の精霊が捕縛している死獣をイザークが全て屠り、連続でその断末魔を上げさせていく。
志希はその度に、祈るように願う。
命をもてあそばれ、怨念に呑み込まれた悲しい獣達の魂が安らかに眠れるように。
すると。
「我が母なる大地母神よ、我が前にある死にながら生きる者たちに安らぎを」
と、土壁の向こうから朗々としたミリアの声が聞こえてきた。
同時に、土壁の向こうで癒しの法力ではなく浄化の法力が高まっているのを感じる志希。
「シキ、オレはもう大丈夫だから開けてくれ」
ミリアの詠唱の合間に、カズヤの声が聞こえた。
カズヤの言葉に一瞬逡巡したが、志希はカズヤの言う通りに土壁を消す事にする。
何より、最後の立ち上がる事も出来ない死獣をイザークが屠っているのが見えたからだ。
「守ってくれて、ありがとう」
志希の感謝の言葉に、土の精霊達は喜びながら土壁を一瞬にして消す。
突然開けた視界に、無残に叩き潰された死獣が見える。

宿るべき器を潰された怨念が渦を巻いているが、その音無き音をかき消すようにミリアが祈願の言葉を長く、高らかに唱える。
「汝の苦しみは母の腕に、汝の悲しみは母の胸に」
複雑な印を切り、浄化と鎮魂の祝詞は続く。
「呪われしその生を終え、慈母の腕で眠りなさい」
ミリアの祝詞が終わると同時に、彼女から優しい柔らかな光が放たれる。
それを浴びた死獣達の屍が端から塵になり、部屋に充満していた怨霊の気配は緩やかに浄化されていく。
血臭や声無き怨嗟が消えて行き、志希の耳には嬉しげな動物達の鳴き声が聞こえていた。
神に属さねば出来ぬ奇跡の御業に、志希は思わず感嘆の溜息をつきながらゆっくりと瞬きをする。
完全に浄化され、昇華された魂たちは惑う事なく世界樹の泉への流れに乗る。
神官ですら見えぬその魂の流れを、志希はその金の瞳で視る事が出来た。
その美しい光景に感動で目を潤ませているのが恥ずかしくて、志希はそれを誤魔化すように俯く。
そんな志希の心情など全く気にせず、後ろから接近したカズヤが志希の頭をくシャリと撫でる。
「ありがとうな、シキ。マジで助かった」
カズヤの言葉に志希は緩く頭を振り、なんとか笑みを浮かべる。
「何もしてないも同然だよ?」
志希の言葉に、カズヤは肩を竦める。
「お前が壁、作ってくれたんだろ?」
カズヤの言葉に、志希は曖昧に笑みを浮かべる。
すると、落ち着いたらしいアリアが口を開く。
「シキさんは精霊使いと仰いますが、どの様に精霊と交感をなさっているのでしょうか? わたしが知る限り、精霊との交感には独自

の言葉が必要になるはずです。それを使わずに大きな力を行使するなど……信じられません」

アリアの言葉に、志希はどう返事をするかを悩む。

むしろ、この姉妹は何故答え難い事を質問するのかと突っ込みを入れたい衝動に駆られる。

だが、そんな突っ込みを入れるのもまた大人げ無いと思ったのと、そんな事をすればもっと困った事になりそうな気がして自制する。

それに実際、精霊使いと言うものは独自の言語で精霊と交感し、従えるのが本来の姿である。

志希の場合は精霊に願ったり、思考を読み取られる事によりその現象を起こすものだ。精霊使いと言うには異端なのである。

志希は泡沫の様に頭に浮かぶ知識が現状を打破するのに全く役に立たないため、ますます困り果ててしまう。

そこに、小さく嘆息したミリアがつかつかとアリアの前に立ち、その頬を軽く叩く。

「シキちゃんの事を追求する前に自分が冒険者として何もしなかった事を反省なさい」

ミリアの厳しい言葉に、アリアは目を丸くしながら叩かれた頬を押さえる。

「確かに、色々と追及したい事をシキちゃんはしたわ。けれど、冒険者として仲間を助けるための立ち回りをきちんとした。役割を果たしたわ」

姉として、何よりも冒険者としてミリアは妹のアリアに問いかける。

「アリア、貴方は今の戦闘で何をしたのかしら？」

アリアは姉の問いかけに、ひくりと喉を鳴らす。

目を潤ませ、何か言おうとするが言葉は出てこない。

実際に戦闘の補助として大剣に魔力を付与する事や、敵の一体にでも攻撃の魔法を放つ事もできた筈なのである。

姉と二人の時には出来た筈のそれが全くできていなかった事を指

摘され、アリアは何一つ言い返す事が出来なかった。
「これがわたしと二人だったら、今頃さっきの死獣の仲間入りよ。今回はイザークさん達が居たから、なんとかなったようなもの。これからも冒険者を続けて行くなら、今の出来事を踏まえて自分がどう立ち回るべきであったのかを考えなさい」
そこまでミリアが言い切ると、アリアはぽろぽろと涙を零しながらこくこくと頷く。
カズヤはそんなアリアに声をかけようとして、止める。
実際、自分の役割を果たせないのは冒険者としては失格なのだ。
しかし、志希は咄嗟に声を上げる。
「今回は皆何とか生き残ってるんだから、泣かないで。次から気をつけて、頑張ればいいよ！」
出来うる限り明るい声で、志希はアリアに声をかける。
アリアは志希の言葉に頷くが、涙が止まらない。
初心者である志希が頑張ったのに、己が何一つまともに動けなかった情けなさに急に襲われたのだ。
好意を持っているカズヤの大きな怪我に動揺し、魔術師として何もしなかったのは本当に恥ずかしい事だとアリアは自覚したのだ。
「……少し、ここで休憩するか」
ますます泣き出してしまったアリアに志希が困惑していると、イザークが嘆息交じりに提案する。
落ち着くまで待たなくては、また同じ轍を踏ませてしまうと判断したからである。
「んだなぁ」
カズヤも苦笑しながら頷き、イザークと志希の近くに移動して腰を下ろす。
服は血塗れになってしまっているが、着替えずにそのまま探索を続行する気満々である。
何故かと言うと、着替えても肌には血がついている状態である以上、また服を汚してしまう。

それに、戦闘があれば汗をかくし自分の血なり相手の血なりを浴びる可能性もあるのだ。一々汚れ物を量産するよりも、戦闘後に布なりで体を拭いてから着替えた方が良いのだ。

ましてここの本来の目的地は泉である。

水を汲んでそれで体を拭く事も出来るのだから、ここで意地になって着替える必要はないのだ。

志希はまだ困惑した表情でミリアとアリアを見比べているが、イザークが志希の肩を叩いて促し三人は取り敢えず休憩を始めるのであった。

第二十四話

アリアが落ち着き、皆に一言謝罪してから探索を再開した。
現在位置だと行き止まりに思えていたが、死獣達が姿を現した場所には扉があったのでそこから更に奥へと進む事が出来たのである。
その道中、猛省したせいかアリアの口数が少なくなり、ピリピリとした雰囲気を纏う。
そんな何とも言えない雰囲気に志希も気疲れを感じて来たころ、カズヤが口を開く。
「アリアさん、そんな緊張しなくても良いんだぜ？　さっきのはオレも悪かったわけだし、シキの言う通りこれから気をつければ良いだけの事だ。それに、肩に力が入り過ぎるとあとでどっと疲れが来るぜ？」
カズヤの気遣いの言葉に、アリアはでもっと小さく呟く。
「わたし、皆さんにご迷惑をおかけしてるから……」
名誉挽回したいと言う気持ちが、その言葉から読み取れる。
「んー、さっきシキが言ったように同じ事を繰り返さなきゃ良いんだよ。今まで出来てたのに出来なかったっつーのは、いつもと違うってのもあったからだろ？」
カズヤの言葉に、アリアは小さく頷く。
その彼女に、カズヤは優しく笑いポンポンと頭を撫でる。
「いつもと違うって言うのを言い訳にしないで、自分の悪い所を反省した。同じ事や、同じような事を繰り返さないって決めた。そうだって言うんだったら、自然体でいつもどおりに行動すればいい。その中で、ほんの少しだけ気をつければ良い事だろ？」
優しく、言い聞かせるようにアリアにカズヤは語りかける。
「それに、あんまりピリピリすると周りの奴らも疲れるんだ。だから、程よく適度に緊張するのが良い事だ。実際、今までもそうだったろ？」

カズヤに言われ、アリアは小さく頷く。
「じゃ、大丈夫だ」
アリアを宥めるように、励ますように頭を撫でるカズヤ。
アリアは頬を染め、はにかみながら頷く。
それを横で見ていたミリアはほんの少しだけ不機嫌そうに呟く。
「優しいのね」
ミリアの言葉に、カズヤは一瞬虚を突かれたような表情をするが、直ぐににっと笑う。
「ああ、オレは女性には優しい男だぜ？　まぁそれに、これはオレ自身が失敗した時に師匠やイザークに言われた言葉だ。まぁ、枕詞に死にたくなかったらってのがついたけどな」
かんらかんらと笑いつつ、カズヤはミリアに応える。
「……そう」
ミリアは呆れたように、しかしどこか楽しそうに笑いながら返事をする。
このような会話をしていたから、ミリアとアリアのどこか刺々しい雰囲気が消え和やかになる。
これがムードメーカーの力かと、口を一つも挿まず見守って居た志希は感心する。
同時にこれが天然タラシかという、物凄く酷い事を考えているのは内緒である。
それはさておき、志希は風と土の精霊達に引き続き索敵をお願いしていた。
先ほどのような事があるが、精霊達に罠と言う概念が分からない為それらを教えるのも一苦労なので、取り敢えずこの先の部屋数や地形、敵がいないかを問いかけているのだ。
しかし、先ほどの罠の部屋からずっと阻害の魔法をかけられているらしく、精霊達からの映像どころか情報すら届かない。
「索敵とかを阻害する魔法が掛けられているみたいで、何も分からないの。ごめんなさい」

志希はそうイザークに謝ると、頭を撫でられる。
「気にするな」
いつもより若干優しい声音でイザークは言い、志希は小さく頷く。
あまり役に立てない事は悲しいが、それを今どうこう言ったところで仕方がないのだ。
むしろ、イザークが言っていた通りにまずは戦闘や、状況に慣れることが先決なのだろう。
志希はそう自分に言い聞かせながら、歩を進めていく。
それなりに広い廊下を歩いていると、壁際に左右合わせて十程の扉が並んでいる区画に出る。
遺跡探索をするのなら、片っ端から部屋を漁るのが常識だ。
と言うわけで、カズヤが一つ一つ鍵がかかっているか、罠がないかを探っていく。
一通り終わると、罠があった扉や鍵がかかった扉を攻略して全て開ける。
無論、その前に聞き耳を立て中に動く何かが居ないかを探っておくのも忘れない。
それら全ての工程を終え、カズヤはさてと一同を見回す。
どの扉から開けるか、そして扉を開ける際にはどうするかを念の為ジェスチャーで問いかけるカズヤ。
イザークはそのジェスチャーに一番手前の扉を開ける事を提案し、女性陣を見る。
アリアとミリアはしばし考えるようなそぶりを見せるが、最終的には頷く。
志希もまた特に反対する要素はない為頷くと、二人はどうするかを再び身振り手振りで相談を始めた。
敵がいる可能性などを考慮するが、大事な部屋で無い限り致死性の罠などが仕掛けられている場合最初に入った者が最も危険だ。
これが最後の部屋であるとか、見るからに財宝がある部屋であるとかならば普通に突入した。

大事な物を置いた部屋に、部屋が大破するような罠を仕掛けるような者はいない。
毒ガスなどの可能性もあるが、そもそもそんな物を充満させた場所に大事な宝物を置けば持ち主が取りに来る事など出来なくなるのだ。
よほど偏執的な人物でもない限り、その様な事はしないだろう。
という結論により、この辺りの扉から中を調べる事となった。
この際、カズヤが扉を開きイザークが中を明かりで照らすと言う段取りになったのだが、中にカンテラを投げ込むと可燃性の物があった場合とても危険だ。
それ故、アリアが作った明かりの魔法を中に投げ込むと言う事となった。
手筈が決まった時点で、イザークとカズヤは動き出す。
扉が外開きになっているのを利用して、盾とする位置にカズヤは立つ。
イザークは扉の壁際に立ち、手には持続時間を延長した明かりの魔法を持つ。
全員の準備が整ったのを見て取ったカズヤは扉の取っ手を握って頷き、目配せで扉を開ける事を告げる。
イザークが手で了承すると、カズヤは一気に扉を開くと同時に、壁に肩をつけながらイザークは真っ暗な部屋に明かりを投げ込む。
ふよふよと浮遊する明かりの魔法が照らす室内には敵はおらず、ほこりが積もっているだけなのが見て取れた。
「大丈夫そうだな」
イザークの言葉に皆は肩の力を抜き、カズヤを先頭にゆっくりと中に足を踏み入れる。
長い年月を経たが故に室内に積もった埃が舞い、埃とカビの臭いをまき散らす。
その臭いに志希がポケットから小さな布を取り出し、口と鼻をそれで覆いながら室内を見回していると。

「取り敢えず、家捜しするか」
カズヤがうんざりした声音で呟き、部屋をゴソゴソと探り出す。
テーブルとベッドが置かれ、書棚らしきものがある部屋。
仮眠室のようなそれを眺めていると、志希以外の全員が室内を物色していた。
志希も慌てて、取り敢えず何かないかを探し始める。
一人だけぼんやり突っ立っているのは、居心地が悪いからである。
しかし、それほど広くない部屋故に特にこれと言った物が無かった。
この部屋以外の部屋にも入り家捜しをしたのだが、見つける事が出来たのは小さな銀製のイヤリングや、小さな宝石がついた指輪等細々としたものだけである。
年代物であっても薄汚れたそれらは、あまりよい値段では売れないだろう。
今回の遠征費の足しになる程度でしかなかった。
命の危機には見合わぬ報酬しか見つからない事に、この場所を教えた志希は肩を落としていた。
それに気がついたカズヤは肩を竦め、志希の背中を叩く。
「奥の方にも部屋があるかもしれねぇし、もう少し調べたら何か出てくるかもしんねぇぞ？　落ち込むには、まだ早い」
明るく元気づけ、最後に探索した部屋を出る一行。
かなり長い時間歩き続けている上に、部屋の一つ一つを丹念に調べた為全員疲労と空腹に襲われていた。
ぐうと鳴ったのは、誰のお腹か。
この音にぴたりとカズヤが足を止め、釣られるように後方の全員も足を止める。
「んだよなぁ、そろそろ飯時だよな」
がりがりと後頭部を掻きつつ、カズヤが困ったように呟く。
「先ほど休んだ時にでも、食事を採るべきだったな」
イザークが嘆息交じりに呟き、志希は思わず頷く。

食事を採らなくては、いかな凄腕の冒険者であろうとも動きも思考も鈍ると言うものだ。
また、誰かのお腹がぐうとなった瞬間に、アリアの肩が跳ね上がる。
誰がお腹を鳴らしたのか、丸わかりな反応である。
意外に、アリアは子供っぽいなぁとのんきな事を考えた志希のお腹も、ぐうと鳴った。
アリアのお腹の音より大きく聞こえ、志希は思わず俯き赤くなる。
耳まで真っ赤になっている志希を見降ろしたイザークは小さく苦笑を零してから、カズヤに声をかける。
「腹ごしらえが先だ、カズヤ」
「んだなぁ、オレも腹減った。集中力が無くなってる状態で探索続けんのも辛いしよ」
カズヤはイザークに同意してから、後ろの神官と魔術師の双子を見る。
「良いだろ？」
カズヤの問いかけに赤くなりながらアリアはこくりと頷き、ミリアは苦笑を浮かべる。
「もちろん、賛成よ。わたし達は生きている人間なのだから、きちんと食事を採るのは義務だわ」
死者でない限り、食べ物を採る事こそが生きる者の義務。
神の御心で生った物を食べ、その御心を感じ感謝するのが大地母神の教義である。
「んじゃま、このへんの床と壁を調べてから保存食でも食おうぜ」
同意を得られたカズヤは笑みながら提案し、一同を見回し反論が無いかを確かめる。
「異論はない。腹を空かせている奴の方が多いからな」
イザークはさらりと皆の気持ちを代弁し、頷く。
「りょーかい！　んじゃま、さっさと仕事して飯にするか！」
カズヤは先ほどのようなドジを踏まぬとばかりに気合を入れて、

床を調べ始める。
明かりの魔法を使い、彼の手元を照らすアリアは今回ばかりは手伝いをいるかとは問いかけない。
足を引っ張ったのは、どう見ても自分だと分かっているからだ。
アリアの隣にいるミリアは、妹の様子に安堵したような表情を浮かべてから、カズヤを見守っている。
何かあれば、直ぐにでも癒せるようにと言う配慮からだ。
志希は手伝う方が危険なので、じっとカズヤの仕事を見ている。
イザークはその志希の側に立ち、いつでも庇えるように自然体でいる。
下手な緊張をしている方が、反応が遅れるからである。
志希はそんな事とは知らず、カズヤから安全だという合図を貰うまでイザークの隣でぼんやりと待つのであった。

第二十五話

カズヤのおかげでなんとか食事を採り終えてから、カズヤとイザークはこれからの工程に見直しを始めた。
元々予定にない寄り道をしているのだから、もっと早くにするべき作業である。
本来は水を汲んで帰るだけと言う楽な依頼だったのだ。
それが、志希が地下を見つけた事でがらりと変ってしまった。
無論、何があっても良いようにと予定日数よりも多めの保存食を持ち歩くのが冒険者としての常識である。
予定は未定という言葉があるように、道中何があるか分からないからだ。
アリアもミリアもその辺りはぬかりなく準備をしてきてはいたが、ここの広さが分からない以上いつまでも探索などしていられない。
そもそも、優先すべきは水を汲む事なのだから。
依頼の期限と手持ちの食糧を考慮し、今日と明日を使って探索して何もなければ引き返し、依頼を完遂するのと同時に冒険者ギルドに地下が現れた事を報告しに戻るで落ち着いた。
志希としては良かれと思って進言したのだが、結局は良い事ではなかったのかと落ち込みそうになったが、アリアが珍しく声を張って志希を元気づけた。
「ここに入るのを選択したのは皆です！　見つけたのは、とても良い事なのです！　だから、落ち込んではいけません。むしろ、発見を誇るべきです！」
枯れた遺跡に新しい入り口があると知れば、皆喜ぶ。
これがもっと広ければ他の冒険者たちも探索に精を出せるし、何よりも魔術師として新たな発見が出来るかもしれないのだ。
枯れた筈の遺跡にも、まだまだ知るべき謎はある。
それを探索できる事こそが、冒険者をしている魔術師たちにとっ

ては喜ばしい事なのだ。
志希には色々と追求したい事柄が多いが、それをして今のパーティとしての形を壊すのは良くないと理解している。
この先でまた戦闘があるかもしれない以上、お互いに溝を作るわけにはいかないのだ。
アリアはそう割り切ると同時に、志希の起こした出来事を内緒にする事も決めた。
また、クルトと言う精霊使いのパーティには、アリアが尊敬する魔術師のライルが居る。
塔の学院におけるライルの階位は高く、導師の資格すら有しているのだ。
その彼が志希の事を何一つ塔の学院に報告していない以上、秘するべき事なのだろうとアリアは解釈した。
ライルは魔術師としてよりも冒険者としての側面が強いが、それはやはり未知なものに触れる機会が冒険者の方が多いからだ。
一番に触れる事のできる知識の塊は、魔術師としては最も魅力的だ。
まして、報酬としてそれらの物を手にいれる事だって出来るのだ。
腕の良い魔術師の殆どが、冒険者となっている理由はここにあるだろう。
アリアもまた、未熟ながらも彼らと同じ道を目指して冒険者をしているのである。
ぐっと手を握りしめ、アリアは志希を見る。
「新たな知識に触れる事が出来るかもしれない機会を設けてくださり、本当にありがとうございます」
自身の考えで興奮してしまったアリアは、気も早く志希の手を握りお礼を言いだす。
「あ、アリアさんっ！　まだ、まだ何も見つけてないよ！？」
志希は思わずそう突っ込みを入れると、アリアは至極真面目な表情で口を開く。

「分かっています！　でも、もしこの先で新たな魔道具があれば……わたしが一番に触れるんですよ！？　構造を調べられるかもしれないんですよ！？」

真面目な表情で身を乗り出し、アリアは志希に言う。

「それにもしかしたら、ヴァンパイアに対する有効な物もあるかもしれない！　そうなれば……」

「アリア！」

アリアの言葉をミリアが慌てて遮り、グイッと妹の体を引っ張る。

突然の事にアリアが驚き、咄嗟に志希の手を引っ張る。

「うは！？」

志希は反動でアリアの方に倒れかかるが、イザークが志希の肩を掴んで防ぐ。

思ったより勢いよく引っ張ってしまったミリアはアリアごと後ろに転びかけるが、それをカズヤが支えて尻もちをつく。

「急に何やってんだよ……」

カズヤがぼやきつつ、己を見上げる双子を見る。

「取り敢えず、とっとと出発してから休む場所探そうぜ。やる事決まったんだからよ」

カズヤの言葉に、アリアとミリアはこくこくと頷き顔を赤くしながらわたわたと立ち上がる。

「ごめんなさい！」

二人が異口同音に謝罪し、カズヤは思わず苦笑する。

「まぁ、女の子同士親睦を深めんのは、別にかまわねぇンだけど……乱暴な事はすんなよ～」

カズヤはからかうように二人を注意してから、明かりを頭のすぐ上に浮かせる。

カンテラを使っても良いのだが、明かりの魔法の方が様々な面で便利なのである。

形状は白く発光する玉なのだが、宙に浮く事が出来る。

術者や、渡された人間の意思で操れるのだ。

ちなみに、この魔法はスクロールに刻まれて販売されてもいるが、使い捨てなのと少々値が張る為あまり売れていない。

魔術師が居ないパーティや、魔力を温存する傾向にあるパーティは基本的にカンテラを使うのである。

明かりを頭に乗せたカズヤが歩きだし、先ほどと同じ陣形で皆も続く。

しばらく歩くが後ろから何かが追ってくる気配も無く、長い廊下の途中で横道や部屋を見つけたくらいである。

横道の先にあった部屋や、廊下で見つけた部屋なども中に入ったが目ぼしいものは何一つなかった。

枯れた遺跡の地下は、やはり枯れているのかと皆が諦めかけた時に、長い長い廊下の行き止まりが現れる。

今までの部屋にあった扉とは違う重厚な木の板で作られた両開きの扉には、傷も痛みもみあたらない。

一目で保存の魔法が掛けられていると分かる扉を前に、取り敢えずカズヤが罠や鍵の有無と中に何かいないかを探る聞き耳をするとジェスチャーする。

イザークは頷き、カズヤに扉を任せながら大剣を肩に担いで待つ。

その間にカズヤは扉に聞き耳を立て、次いで鍵穴を鏡で少し見た後、己自身の目で鍵穴を覗きこみながらポーチから端が折れ曲がった小さな鉄の棒を取り出し鍵穴に挿し入れる。

その他の小さな鉄の棒を取り出し追加で挿し込み、カチャカチャと鍵穴をいじっていると、不意にかちんっと小さな音が鳴る。

思ったより音が大きく感じた志希は、思わず肩を跳ね上げる。

しかし、カズヤはいつもの事なのか鍵穴から鉄の棒を慎重に抜いて全てをポーチに収めて立ちあがる。

再びカズヤとイザークは身振り手振りでどうするかを相談し始める。

中に物音はしなかったが、盗賊の勘で中に敵がいる可能性が高いとカズヤは説明する。

この屋敷の主にとって大事な物が中にあるのであれば、番人が居るのは当然である。

ならばと声を出さずに身振り手振りで相談した結果、中に敵がいるのであれば先手を取られるのはまずいと言う事で、イザークが一番に突入する事になった。

中にいる敵はアンデッドの可能性もあるとミリアが異を唱えたのだが、傷を癒せる人間にもしもの事があるのは拙いという理由で却下した。

致死性の罠が無いとは言い切れないが、この辺りの扉の並び具合から可能性は低いと判断し、敵がいた場合は奇襲すると言う事で落ち着いた。

イザークは大剣を手にし、カズヤは扉の取っ手を掴みながら全員に見えるように指を三本立ててから拳を握る。

聞き耳をして中を探っても、全て聞き取れるわけではない。

中に何があるのか分からないからこそ、戦闘力と防御力、そして経験が長いイザークが一番に突入するのである。

その合図を、カズヤが取ると言う宣言だ。

カズヤの指が一呼吸置くごとに一本ずつ立てられ、三本目が立った瞬間にカズヤが扉を開きイザークが突撃する。

瞬間、甲高い鉄がぶつかり合う音が響いた。

扉の中の暗闇に浮かんで見えるのは、鉄と鉄がぶつかり合い火花を散らしている様だ。

明かりを持って入らなかったと気がついた志希は、慌てて叫ぶ。

「光りを！」

志希の言葉に反応をしたのは魔法の明かりを持つカズヤでも、アリアでもなく光の精霊だ。

ふわりと志希の額から現れ、暗闇の中で煌々と輝く。

白い光に照らされて浮かびあがったのは、大きな騎士鎧が二体。

ハルバートを持つ鎧と、大盾と幅広剣を持つ鎧。

それらがイザークを殺そうと武器を振るい、イザークは幅広剣を

弾きハルバートの攻撃を避けながら反撃の機会を窺っている。
「行くぜ、ミリア！」
カズヤは腰に差してある小剣を抜き、中に突撃して盾と幅広剣を持つ鎧に攻撃を仕掛ける。
鎧が幅広剣を上段から振り下ろそうとしているその腕に、カズヤは小剣を刺し込み全体重をかけて下に刃を振り切る。
人であれば、腕を切り落とされてもおかしくない攻撃だ。
しかし、鎧と鎧の隙間を覆う鎖帷子が切れただけで騎士鎧は全く痛痒を感じた様子も無く、イザークに向けようとしていた刃をカズヤに振りおろす。
カズヤは咄嗟に地面を蹴って大きく後退し、何とか刃の届かない所に逃げる。
同時に部屋に突入したミリアはカズヤに注意が言ったのを幸いに彼の反対側に回り、大鎌を横薙ぎに振る。
しかし、それを感知した騎士鎧は大盾でその攻撃を防ぎ、更に大盾を押しこみ体勢を崩しにかかる。
ミリアはそれに気がつき、素早くその場を離脱しカズヤと鎧を挟むようにして立つ。
やや遅れて部屋に入ったアリアは、声を張り上げる。
「これは、生ける鎧です。魔法によって命を吹き込まれた、怪力を持つ魔法生物です。気をつけて！」
アリアの言った生ける鎧とは、二種類ある。
一つは鎧に強力な魔法をかけ、命令を出して動かすゴーレムの系統。
一つは鎧に怨念や死霊が憑き、破壊衝動のまま動くアンデットである。
現在、イザーク達相手に戦っている生ける鎧は、魔法で動いている前者のものだ。
アリアの言葉に思わず顔を顰め、ミリアは呟く。
「アンデットなら、祓って終わりなのに」

アンデットキラーと言う特殊な資格を持つミリアは、戦闘しながらでも祝詞を唱えアンデットの力を弱める事が出来る。
「言っても仕方ねぇって、なぁ！」
アリアの呟きに応えながら、カズヤは先ほど攻撃した腕を覆う鎧の隙間に小剣を刺し込もうとする。
しかし、その小剣を盾で防ぎ、鎧は上段から幅広剣を振り下ろす。
カズヤはそれを咄嗟に右に飛ぶことで避け、そのまま間合いを開ける。
その分詰めようと前に踏み出す鎧だが、それを邪魔するように背後からミリアが大鎌で背中の鎖帷子部分を切りつける。
同時に、呟くように魔法を編んでいたアリアが声を張る。
「融かせ、炎よ！」
アリアの声に応じ、魔力が形を得る。
騎士鎧の胸部に炎の塊が現れ、そのまま鎧を巻き込み燃え上る。
だが、無機物である鎧には炎の熱さなど関係ないとばかりに背後のミリアの方を向こうとする。
「させるかよ！」
カズヤは鎧のその動きに合わせて素早く間合いを詰め、再度先ほど切り裂いた部分を狙う。
魔法で作られた生ける鎧であろうとも、切り落とされた部分は体の一部ではなくなるため術式が届かなくなる。
つまり、切り落とされた部分はただの鎧でしかなくなるのだ。
腕を切り落とせば、生ける鎧は攻撃手段を一つ失う事となる。
カズヤはそれを狙って、最初に切り裂いた部分を狙うのだ。
しかし、生ける鎧も頭は空っぽではないのかカズヤの攻撃を回避し、幅広剣を横薙ぎに振るう。
カズヤは咄嗟に頭と一緒に体を伏せ、その攻撃をなんとか避ける。
鎧はそのまま猛攻をかけるべく、幅広剣の軌道を変えて切りおろしてくる。
「くそっ」

カズヤは小さく呟きつつ剣の軌道から体を退けようとするが、無理な姿勢を取っていた為に反応が遅れる。
カズヤが斬られると思った瞬間。
「どこ見てんのよ！」
と、挑発の声を上げながらミリアが持つ大鎌の先端がカズヤのつけた鎖帷子の穴に潜り込む。
薄く細長い為に脆く見えるその刃では折れてもおかしくない筈なのだが、ミリアは躊躇いなく上へと刃を持ち上げる。
板金部分を掠り、金属と金属が擦れる耳障りな音を立てながら、大鎌の先端は刃毀れ一つせず鋭利な刃を鎖帷子の中から現す。
「あぁぁぁぁぁあ！」
雄叫びを上げ、ミリアは渾身の力を込めて刃を振り抜く。
鉄の輪で編まれた帷子を断ち切り、ミリアの大鎌は腕の鎖帷子の欠片をまき散らしながら腕の半ばまでの鎖帷子を破壊する。
断ち切るまでに至る事が出来なかったため、鎧は未だ幅広剣を持ち立っている。
だがしかし、腕を繋いでいる鎖帷子の数が減った事により若干右腕の動きがぎこちなくなっている。
「あの腕、切り落とすぞミリア！」
「了解！」
体勢を立て直したカズヤが叫び、ミリアが応える。
その二人に警戒をしているのか、騎士鎧は大盾を前面に構えて待ちの体勢を取る。
「わたしを、忘れてもらっては困ります！」
アリアが怒鳴りながら杖で鎧を指し、片手で印を切る。
「冷気よ、集いて……貫け！」
魔法を完成させた瞬間に鎧の真上に大きな氷柱が現れ、標的に突進する。
鎧は魔法を感知する事が出来ないのか氷柱をまともに胸に食らい、動きを止める。

氷柱が胸の板金部分を貫き、騎士鎧に多大なダメージを与えていたのだ。

「ナイス、アリア！」

カズヤはアリアの魔法の使い方に思わず歓声を上げるが、直ぐ様足を踏み出し騎士鎧に攻撃を仕掛ける。

前に進もうとする動きが止まってはいるが、騎士鎧はまだ戦意を失っていない。

金属が擦れる耳障りな音を立てながら、ゆっくりと幅広剣を振り上げようとしていたのだ。

殆どの鎖帷子がちぎれ飛び、僅かな繋がりしかない鉄の輪部分にカズヤは小剣を叩きつける。

それだけで、脆くなっていた鎖帷子は千切れ飛び籠手ごと幅広剣は音を立てて床に落ちる。

同時に、ミリアも素早く動き再びカズヤの反対側に回り、ガラ空きの背中に向けて大鎌を振るう。

先ほどの熱に加え、胸の穴から潜り込んだ氷柱が騎士鎧全体を冷やしているが故に、騎士鎧の全身は脆くなっていた。

特に、鎖帷子部分は小さな鉄の輪で連結している状態故に、強度はそれほど高くない。

ミリアの大鎌の一撃で背中部分の鎖帷子は切り裂かれ、鎖帷子の欠片をまき散らす。

攻撃手段を失ってしまった騎士鎧は、それでも大盾でなんとか応戦し様とするがそれより早くアリアの声が響く。

「冷気よ！」

再びアリアは氷柱を撃ち出し、騎士鎧の肩部分を貫通させる。

この攻撃で大盾を取り落し、完全に騎士鎧の武装その物が無くなった。

だがそれでも騎士鎧は体を動かし、侵入者を排除しようと腕を動かし近くにいるミリアに拳を振るう。

ミリアは動きの鈍いその攻撃を余裕で避け、大鎌を構え直して足

を踏み出そうとする。
しかし、それよりも先に動いたのはカズヤだ。
「もう動くんじゃねぇ！」
カズヤは気合の入った声を上げ、なんとか体を動かそうともがく騎士鎧の最も脆くなっている板金の胸当てに思いっきり小剣を突き立てる。
その攻撃がとどめとなったのか、騎士鎧は一瞬震えてから動きを止め、ガラガラと音を立てて崩れさった。

第二十六話

カズヤとミリアが大盾の騎士鎧を引きつけてくれたおかげで、イザークはハルバートを持つ騎士鎧と一対一となった。

大きな得物故に本来ならば動作が遅くなりがちなのだが、騎士鎧とイザークの攻防は早い。

イザークが体重をかけて振り下ろす大剣をハルバートが受け止め、押し返す。

その事によりイザークの体勢を崩そうとする意図があったようだが、イザークはその力に逆らわずむしろ利用して後ろへと飛び退き間合いを取る。

しかし、ハルバートの間合いは長く、騎士鎧は前に出ながら横薙ぎの攻撃を仕掛けてきた。

イザークはその攻撃を慌てずに大剣の刀身で受け流しながら、前に出る。

がりがりと金属と金属が擦れ会う音が響き、火花を散らしながらイザークは間合いを詰めていく。

そのまま騎士鎧の膝を足掛かりに上に飛び、空中から大剣を振り下ろす。

勢いのついたその速い攻撃に騎士鎧はついて行けず、かろうじて体を動かして刃が当たる場所を変える事が出来ただけだった。

本来なら叩き潰すだけのその大剣が、鋭利な刃物の様に肩口から脇までの板金を切り裂く。

身軽に石床に着地したイザークは、振り向く勢いを利用して大剣を横薙ぎに振る。

その攻撃を片腕だけの騎士鎧がハルバートで受け止めるが、力が弱かったのか体勢がかすかに傾ぐ。

その様にイザークは金の目を細め、更に猛攻をかけるべく足を踏み出そうとして止める。

ぎりぎりと音を立てながら、イザークは大剣に体重をかけて鍔迫り合いをする。
その金の目は、鎧の向こうにいる己の物より甘く潤む金の目を見据えていた。
志希はイザークのその目に体を震わせ、次いで頷く。
カズヤ達三人が連携して闘っている以上、志希はイザークの補佐をしなくてはいけない。
何もしないままイザークの戦闘を見ているのも、ある意味勉強にはなるだろう。
だがしかし、ここでぼうっと見る為にこの場にいるわけではない筈なのだ。
先ほどの戦闘の様に自分の頭で考え、自分でどの様に皆と連携していくのか実践していかなくてはならないだろう。
それならばと、志希は口に出して願う。
「お願い！」
志希の言葉に応じ、水の精霊達が集い騎士鎧の脚部に拳大に凝縮した水弾をぶつける。
この攻撃で脚部の板金部分がへこみ、僅かに体勢を崩す。
元々傾いでいた体勢が更に崩れた事により、ハルバートを支える力が弱くなっているのだ。
イザークの並外れた膂力に対し、片手の騎士鎧がひたすらに堪えるという図式が出来ている。
世間一般では生ける鎧とは物凄い力を持っていて、駆け出し冒険者が一対一で戦った場合高確率で死ぬ相手である。
その相手を易々と押しているイザークは、ハッキリ言ってかなりの腕を持つ戦士だ。
何故そんな人が銅冒険者なのかと小一時間ほど問い詰めたい衝動に駆られながら、志希はイザークの動きをじっと見ている。
彼は一旦大剣を押す力を緩め、急に力が抜けたが故にたたらを踏む騎士鎧は完全に体勢を崩す。

その瞬間、イザークは左手でがっちりとハルバートの柄を掴んで脇に挟み、右手で握った大剣を強い力で横薙ぎに振るう。
あまり良い体勢で放たれたその一撃は、信じられない事に騎士鎧の胴半ばまで大剣を食いこませていた。
この一撃に、騎士鎧はぐらぐらと体をよろめかせる。
志希はこの瞬間を好機と思い、もう一度願う。
「もう一度、お願い！」
志希の言葉に応じ、水の精霊が再び水弾を形成し撃ち出す。
その攻撃は、今度はハルバートを持つ手首に命中した。
先ほどよりも大きな音を立てて籠手は大破し、ハルバートの柄が解放される。
イザークはその瞬間にハルバートを離し、大剣の柄を両手で掴み騎士鎧から引き抜いていく。
がりがりと金属と金属が擦れる音を響かせながら大剣を騎士鎧から引き抜くと同時に、イザークは再び、渾身の力を込めて大剣を横に振る。
再度の攻撃に騎士鎧は回避するべく動こうとするが、それよりも早くイザークの大剣が開いた板金の裂け目に食い込み、そのまま両断する方が早かった。
胴と下半身が分かれた瞬間、フッと騎士鎧が纏っていた威圧感が消える。
同時に、少し離れたところで戦っていたカズヤ達の方も終わったらしく金属が床に落ちる甲高い音が聞こえてきた。
志希はその音で緊張と一緒に足の力が抜け、思わずぺたりと床に座り込む。
「おっしゃ、片付いたな」
カズヤの言葉にイザークは無言で頷きながら大剣を一振りし、鞘に納める。
志希が出した光の精霊が煌々と輝き、室内をくまなく照らしているので動きだすような敵がいないのはすでに確認している。

そうでなければ、志希がへたり込んだ時点でイザークが注意を促しているだろう。
志希と同じように緊張から解き放たれたらしいアリアもまた、へたり込んではいないが杖に凭れる様に立っていた。
そんな二人と対照的に、イザーク、カズヤ、ミリアはしゃんと立ち室内を見回している。
「おいおい、だらしねぇなシキ」
へたり込んでいる志希に、カズヤはにやにやと笑いながら言う。
「むぅ、仕方ないじゃない」
志希は唇を尖らせながらそう返事をするが、相変わらず床に座りっぱなしである。
「まぁな」
志希の言葉に苦笑してから、カズヤは手にしている小剣に目を落として渋面を浮かべる。
「くそ、この鎧かてぇんだよ。オレの小剣刃毀れしちまったじゃねぇか」
カズヤの小剣はボロボロに刃が毀れ、殆ど使い物にならない状態になっている。
「今回の報酬で修繕するなり、買い換えるなりすると良い。それこそ、そろそろ小剣から長剣に変えても良いだろうしな」
イザークはそう言いながら、志希の前に膝をつく。
「立てるか？」
静かな問いかけに、志希は顔を上げて困った笑みを浮かべる。
「立てないかも……」
安心して気が抜けたが故に、志希は腰が抜けた状態になっているのである。
そんな彼女の様子にイザークは苦笑し、頭をポンと撫でる。
「良く頑張ったな」
優しい声音で労われ、志希は嬉しそうだが恥ずかしそうな笑みを浮かべる。

イザークは目元を和ませ、志希の頭をもう一度撫でてから口を開く。

「もう少し休ませてやりたいが、まだ罠がある可能性がある。立てんのなら、悪いが抱えるぞ」

そう言ってから、イザークは軽々と志希を小脇に抱える。

志希は突然の事にきょとんとした表情を浮かべ、次いで真っ赤になりながら硬直する。

その姿にイザークはくつくつと喉を震わせて笑い、カズヤはそんな彼に驚愕してしまう。

「イザークが、声を出して笑ってる！？」

長い付き合いの彼でも、滅多に見られない姿らしい。

そんなカズヤの姿にイザークは笑いを収め、いつもの表情に戻る。

「俺の事より、さっさと罠の有無を見ろ」

若干憮然とした声音で言うイザークに、カズヤは肩を竦める。

「へぇへぇ、分かってるよ」

そう返事をして、カズヤは足音も無く罠感知の為部屋の隅や壁を調べ始める。

床に罠が無いのは、生ける鎧が居た事で証明されている。

門番をも攻撃するような罠を仕掛ける者は、まずいないからだ。

と言う事で、部屋の隅や壁が怪しいと言う事で調べ始めているのである。

アリアは姉の肩を借りて呪文を詠唱し、魔力を持つ何かが無いかを探知する魔法を使用している。

一方肩を貸しているミリアは、カズヤとイザーク、そして志希のやり取りを苦笑を浮かべながら眺めていた。

「子供みたいね」

苦笑しながら呟くと、隣のアリアが杖をおろしくすりと笑う。

「長いお付き合いらしいから、仕方ないんだと思います」

アリアの声音には、若干の羨望が含まれている。

それはカズヤと志希、イザークの仲が良いからなのか、それとも

志希の様に自分も接して欲しいと思っているのか。
ミリアは、その両方なのだろうと思いつつ頷く。
「そうね」
言葉短く同意したのは、ミリア自身も彼らに対して羨望の気持ちがあるからである。
長く二人で冒険していたが故に、殆ど他の冒険者とは接触を持っていなかった。
今まではそれで良いと思っていたが、こうして共に過ごしてみるといかに自分達が狭い世界にいたのかを感じられた。
「そろそろ、潮時なのかもね」
ミリアはポツリ、と呟く。
「姉さん……？」
アリアはミリアの言葉に、不安げな声音で呼びかける。
「ああ、大丈夫よ。問題は、何も無いわ。そろそろ二人きりはやめた方が良いのかしらって、事」
ミリアの言葉に、アリアは一つ頷く。
「それは、同意します。わたし達だけでは……」
「冒険者としては、まだまだ未熟だっていうのもわかったしね」
アリアの言葉を遮るように、ミリアはそう言って妹を見る。
「そう、ですね」
アリアは何か言いたげな表情をしていたが、小さく頷いてから姉の肩から手を離し自力で立つ。
「カズヤさん、魔法感知をしました。魔力がこもっている物はそこにある幅広剣とハルバート、そしてそこの壁の向こう側くらいです」
アリアの言葉に、罠を探していたカズヤは頷く。
「んじゃま、そこの武器は持ち帰り決定だな。罠の方も探してみたが、どうにも見当たらない感じだ」
アリアが指した壁の方を見ながら、カズヤはさてと室内を見回す。
「今度は、本格的に部屋ん中を調べるか。皆も、頼んだぜ」
カズヤの言葉に頷き、アリアとミリアは室内を調べ始める。

「イザーク、シキをからかって遊ぶのも良いけど動けよー」
ミリアとアリアが動き出したのを確認してから、イザークに一言釘を刺してカズヤは室内を漁り始める。
「分かっている。立てるか？」
イザークの若干不機嫌そうな問いかけに、志希は困ったように頭をふる。
立ちたいとは思っているのが、下半身に力が入らないのだ。
そんな志希に小さく苦笑して、イザークは志希を抱え直す。
今度は小脇ではなく、片腕で子供の様に抱く形だ。
「わぁ！」
志希は思わず声を上げ、羞恥で更に顔を赤くさせる。
「じゃ、邪魔になるよ！？」
咄嗟にそう突っ込むと、イザークは肩を竦める。
「気にするな。一人で離れている方が危険だ」
さらりとそう宥め、イザークは室内をぐるりと見回す。
実は、この部屋はかなり広い。
何せハルバートを持った騎士鎧と大剣を持ったイザークが戦える上に、少し離れたところで大盾と幅広剣を持った騎士鎧と大鎌を持ったミリアと小剣で相手をしていたカズヤが戦闘していたのだから当たり前だ。
そんな広い部屋の壁の三方には棚が作りつけられているが、アリアが示した壁の方には何もない。
いかにも何かありますと言った雰囲気がある訳なのだが、壁を探ったカズヤは隠し扉が見当たらないと頭を振る。
「仕掛けがあるのかもな」
ぽつりと呟き、カズヤが室内にあるテーブルや本棚を探す。
そんな中、志希はそろそろ腰の方も回復してきたような気がするので、どうにか降ろしてもらおうと考えつつ棚を眺めていると、目の端に鮮やかな青が見えた様な気がした。
思わずそちらに顔を向けると、棚の中に少し変わった形をした置

物が鎮座ましましていた。
「これなんだろう」
小さく呟き、惹かれるように手を伸ばす。
志希の様子に気が付いたイザークが彼女より先にそれを掴んだ瞬間、ごとりと音が響く。
イザークがとっさに身を引き素早く身構えるのと同時に、何も置かれていなかった壁が音も無く消える。
壁の向こう側には長剣や長棍が飾られた棚が置かれ、その横には大きな台が設置されていた。
台の上には金属鎧が二人分放置されており、表面には錆びが浮いてる。
「武器の方は保存の魔法が掛けられてるが、鎧の方はかけられてなかったんだな」
カズヤは台の上の金属鎧と棚に飾られている武器を見て呟く。
「おそらく、そちらの武器をこの二体分の鎧の武器にする予定だったのではないでしょうか」
アリアはカズヤの呟きに推測を交えて答え、部屋をぐるりと見回す。
室内には本棚も並べられているが、それよりももっと目を引く物が部屋の奥にあった。
そこには青白く輝く、大きなガラスの筒状の物が円状にいくつも並べられていた。
円の中には大きな魔法陣が床に書かれており、陣の中央には青く輝く小さな宝珠が嵌めこまれていた。
それを見た志希は、思わず息をのむ。
「これって……」
志希の呟きに、アリアが口を開く。
「この魔法陣はおそらく、合成獣の比重を調節する役目と、生ける鎧を作る魔法陣を兼ねた装置なのだと思います」
アリアは真剣な表情で魔法陣の前に立ち、そっとそれに触れる。

すると魔法陣の線が仄かに光り、まだこの装置が使える事を示している。
「まだ、この装置は生きています」
感嘆の色を滲ませ、アリアは装置を見上げるがすっと眉を潜める。
「ですが、個人的には生命をもてあそぶ研究は好みませんね」
アリアは憮然と言い、ミリアも頷く。
「そのとおりね。神から与えられた物を歪めるのは、どんな人であろうとも赦される事ではないわ」
大地母神の神官戦士であるミリアには、生命を弄ぶような研究を赦す事など出来ないのは当然だろう。
「まぁまぁ、ここの主は何百年も前に死んでんだ。この装置さえ不用意にいじったり、使ったりしなきゃ良いもんだろ？」
カズヤはミリアを宥めるように言いつつ、室内を物色する。
「イザーク、私もう立てるから……降ろしてもらって良い？」
志希の言葉にイザークは無言で頷き、志希を床に降ろす。
少しだけふらついたが志希はきちんと床を踏みしめて立ち、装置を調べているアリアの方へと行く。
志希が息をのんだのは、魔法陣の用途ではない。
魔法陣に組み込まれている、小さな宝珠に驚いたからだ。
見ただけで分かる、『神無の鳥』の力の波動。
これは、この世界で人として生きるために『神無の鳥』の力を封印された品物だ。
志希達『神無の鳥』の力が籠められた品物はかなりの力を持っており、剣や武器に宿って居れば聖剣や魔剣と呼ばれ、それ以外は聖遺物などの呼称を得ている。
無論、これらの物は普通の人間が扱える物ではないため、神無の鳥以外が扱えば命を削る結果となる。
古代の魔術師たちはこの力に注目し、何らかの形で有効利用しようとしたが故にこのような形になっているのだろう。
しかし、志希としては『神無の鳥』の力を命を歪める為に使われ

るのは許容できそうもない。
なので、調べているアリアの横をすり抜け魔法陣の中に足を踏み入れる。
「シキさん！？」
驚く声を上げるアリアに、志希は手を合わせる。
「ごめん、アリアさん。私、これがこんなふうに使われるの嫌なの。だから、外しちゃうね」
志希の突然の言葉に、アリアは小首をかしげる。
「その宝珠が、なんなのですか？」
思わずと言った問いかけに、志希はどう応えるべきか一瞬考える。
しかし、志希の唇は思考とは裏腹に言葉を紡ぐ。
「精霊の揺り籠、なの」
己が紡いだ言葉に志希自身が驚くが、直ぐに間違っていないと確信を抱く。
精霊の揺り籠とは、精霊が何らかの物品に惹かれて集まり、精霊界へと繋がる門が自然に発生した物である。
精霊使いがこれを持てば、どの様な場所であろうと全ての精霊を呼びだし素早く術を行使する事が出来る。
世の精霊使い垂涎の品物である。
『神無の鳥』自体が生きた精霊の揺り籠と言っても過言ではない為、その力が封印された品物が精霊の揺り籠としての機能を得ているのは間違いない。
一方、驚いた声を上げるのはミリアとアリアだ。
「精霊の揺り籠って……！？」
滅多に見る事が出来ない、聖遺物と並ぶ珍しい品物だ。
イザークとカズヤ達もまた、驚きで魔法陣を見ている。
「シキさんが言うのでしたら、まず間違いないのでしょうね……」
アリアは小さく呟き、じっと魔法陣を見ている。
「聖遺物と並ぶほどの品物であれば、わたしもシキちゃんの意見に賛成だわ。神聖なる物をこんな魔法の為に使われるのは許せない」

ミリアは志希の意見に同意し、アリアを見る。
魔法陣の解析をしているアリアに、文句を言わせる気はないとその視線は告げている。
姉のその表情にアリアは微笑み、頷く。
「もちろん、わたしも賛成です」
柔らかい声音でアリアは言い、志希を見る。
「魔法陣は生きていますが、その宝珠を取れば機能は停止します。床を削るか何かして、取り出しちゃってください」
アリアはそう言い、真面目な表情で言葉を紡ぐ。
「だいたいにして、学院からの調査員がこれを見て、変な事を考えないという保証はありません。ですから、この魔法陣は死んでいる方が良いのです」
塔の学院で禁止されていても密やかに研究し、禁忌に手を出す人間はいる。
そんな人間達に見せるのも危険なら、肝の部分を潰しておけばいいのだ。
「俺が取り出そう」
静かに三人の会話を聞いていたイザークが言いだすが。
「いんや、それならオレがやるよ。貴重なもんなら、余計に手先が器用な人間が取った方が良いだろ？」
カズヤがそう言いながら、音も無く魔法陣の中に足を踏み入れる。
その手には刃毀れした小剣を握っており、不安げに見上げる志希ににやりと笑いかける。
「シキはイザークの所に行って、見てろって」
自信たっぷりなカズヤの言葉に、志希は頷いてから魔法陣を出てイザークの横へと戻る。
志希の動きを確認した後にカズヤは刃毀れした小剣を使い青い宝珠を抉り出そうとした瞬間、魔法陣一面に一瞬だけ小さな雷が走る。
「いっち！」
カズヤが小さく悲鳴を上げてから、大丈夫だとひらりと手を振る。

「指先が痺れただけだ」
苦笑しながら言葉をつけたし、カズヤは作業を続行する。
一瞬だけ走る小さな雷は、生きた魔法陣に組み込まれていて魔力を提供している物品を外そうとしているが故に起きる物である。
要するに、魔力が反発しているのだ。
しかし、それとて静電気ほどの痛みしかない為、カズヤの作業を少し邪魔する程度にしかならない。
石床をカリカリとひっかく音と、時折雷がパリっと鳴る音が室内に響く。
その間、他のみんなは急に大きな反発が起きてカズヤが怪我をしないかを見守っていた。
「うっし、取れた」
不意に魔法陣が光を失うと同時に、カズヤが喜びの声を上げた。
「ほら、シキ。これはお前ンだ」
そう言いながら、立ちあがったカズヤは志希に向かって宝珠を投げる。
「あっ、ありがとう！」
志希は宝珠を両手で受け取りながら思わず礼を言う。
「そりゃ、こっちの台詞だろう。こんだけお宝が眠った部屋に案内してくれたのは、シキなんだからよ。だから、それはシキが持つべきもんだと思う」
どうよ、と言わんばかりの表情でカズヤはイザークとミリア、アリアを見る。
「異論はない。拾って帰れるものだけでも、かなりの稼ぎが期待できるからな。シキが一番高価な物を持つのは、発見者として当然だろう」
イザークはカズヤに同意し、神官と魔術師の双子を見る。
「わたしも賛成です」
アリアもまた簡潔に同意し、姉を見上げて返事を待つ。
四人の視線を一斉に受け、ミリアは肩を竦めて笑う。

「反対する気はないわ。だって、ここを見つけたのはシキちゃんだし……精霊の揺り籠だって分かったのもシキちゃんじゃない。当然の事でしょ？」

そう言って、ミリアはカズヤに頷きかける。

「満場一致か」

イザークは満足そうに頷き、志希の手のひらの中にある青い宝珠を見る。

「そんじゃま、室内の物色続けるかぁ」

カズヤの言葉に全員頷き、思い思いに目をつけた場所へと移動していくのだった。

第二十七話

志希達は無事に依頼を果たした上、戦利品を持って街へと帰りついた。
本来の日程よりも三日ほど遅れての帰還に、受付のミラルダはかなりやきもきしていたらしい。
依頼の品を持っていくなり、何故かカズヤが怒られていた。
それを志希は生温い目で眺めてから、イザークについてギルド内を移動する。
ミラルダの説教は長いらしく、付き合ってられないと言う事らしい。
イザークが移動した先は、冒険者ギルド内の奥の方に位置する部屋だった。
「おや、いらっしゃい。久しぶりだね」
おっとりと、その部屋の主らしい初老の男性がカウンターの奥で出迎えてくれる。
「ああ、久しぶりに魔法が掛かった物を拾った。鑑定を頼む」
ああと頷く男性のカウンターに荷物を置きながら、イザークが振り返る。
「シキ」
来いと呼ばれ、入り口にいた志希はおずおずとイザークの横へと移動する。
「おや、新入りかい？」
初老の男性はイザークの置いた荷物を手に、志希を見る。
「ああ、今パーティを組んでいる精霊使いのシキだ。シキ、こいつは冒険者ギルドに出向している塔の学院の魔術師、ベネットだ」
イザークに紹介され、志希は軽く会釈をする。
「よろしくお願いします」
「よろしく、わたしはベネットです。鑑定を生きがいにしている、

冒険者ギルドに飛ばされたうだつの上がらない魔術師もどきだ」
笑顔での自己紹介に、志希は引きつった表情を浮かべてしまう。
それに気が付いたベネットは楽しそうな笑顔で、事情を説明する。
「鑑定専門と言うのは、中々珍しいのですよ。普通は鑑定後に術式を調べ、研究するのだから。けれど、わたしは鑑定だけしかしない。鑑定して満足する、と言う魔術師としてはかなり変人の部類に入るのだよ」
そして、変人故にギルド内の物品鑑定師として出向させられたと言う話らしい。
「そもそも冒険者ギルド内に魔法物品鑑定師が必要になったのは、塔の魔術師たちが持ち込まれた品物を接収する事が多かったからでね。冒険者が持ち帰った品物を勝手に横領されぬよう護る為にと言う事で、塔の学院から魔法物品鑑定用の人材を派遣してもらう仕組みが出来たんだ」
ギルド内に鑑定所がある理由を、ベネットが品物を鑑定しながら滔々と語る。
志希は感心した声で相槌を打ちながら、ベネットの手元を観察する。
「もっとも、ここでは鑑定して証明証を出すだけだ。売る場合は魔法武具を取り扱う店に行くか、塔の学院に持っていくかになるのだよ。これは、どこの冒険者ギルドでも同じだから覚えておくと良い」
ベネットは興味津々で眺めている志希に苦笑しながら、一言注釈を入れる。
「はい」
素直に返事をする志希に、思わず優しい笑みを浮かべるベネット。
「良い返事だ。これから冒険者として様々な経験をするだろうが、命だけは失わないように気をつけるんだよ」
まるで孫に言い聞かせる様な口調なのだが、不思議と志希は嫌な気持ちにならない。
「はい、気をつけます」

思わず敬語で応えると、うんうんと頷きベネットは長剣を分解し剣身や柄の隅々まで調べる。
「これは良い剣だ。三種類の魔法を絶妙な技巧で調和させ、増幅させているみたいだね。剣身に刻まれた古代語で切れ味と対魔力を、柄で隠れる此処に軽量の魔法陣を刻んで軽くしてるのも凄いねぇ」
ベネットは感心した様な声を上げながら、手早く剣身に刻まれている古代語や魔法陣を手早く羊皮紙に書き込んでいく。
「名のある人物なのかな？」
呟きながら、分解した長剣を手早く組み立ててカウンターの上に置く。
さらさらと小さな羊皮紙に羽ペンを走らせ、長剣の鞘の上に置く。
ベネットはそのままハルバートの表面に指を走らせ、表面に刻まれている古代語をなぞり始める。
志希は黙ってその作業を見ていると、イザークが椅子を二脚持ってくる。
「座って見ると良い。ベネットも、構わないだろう？」
イザークの問いかけに、ベネットは無言で頷く。
それを確認したイザークは、カウンターで見上げてくる志希を促す。
「ありがとう」
志希は態々動いてくれたイザークに礼を言い、素直に椅子に座りつつもベネットの作業を観察し始めた。
イザークは特に興味も無い様子なのだが、それでもベネットの手元を見ているのは暇つぶしの為だ。
鑑定品の数が多ければそれなりの時間がかかるので、大抵持ち込んだ人間は手持無沙汰になる事が多く、大概ベネットの仕事を眺める事となる。
静かな空間に三人の息遣いと、ベネットが時折立てるペンを走らせる音ぐらいしか聞こえない。
イザークは涼しい表情を浮かべているが、実は睡魔に襲われてい

る。
　何せ遺跡から帰ってきてから、殆ど休みもせずにギルドに来て鑑定を頼んでいるのだ。
　かなり体力のあるイザークでも、若干の疲労は感じている。
　ベネットが最後の品物を取り出すのを眺めていたイザークだが、ふと志希が気になった。
　志希より遥かに頑強で体力のあるイザークでさえ眠くなるのだ、疲労困憊であるはずの志希が気になるのは当然である。
　志希はやはりカウンターに突っ伏してうたたねしており、イザークは苦笑を浮かべながら自身の外套を脱いで彼女の体にそっとかける。
「しかし、珍しい色彩のお嬢さんだのぉ。人間で金の瞳なぞ、自然に出来る物ではないぞ？」
　明かりの魔法を永続的にかけられたガラスの玉に指輪をかざしながら、ベネットが小さな声で語りかけてくる。
　アルフやアールヴは、その特徴的な耳の形から遠くの音を拾う事も出来る。
　それを知っているが故のベネットの声の大きさにイザークは眉を潜めるだけで、応えない。
　金の目はアルフやアールヴでさえ持っているのが、稀な色だ。
　人間でも現れる事はあるが、突然変異と言われる物でもう少し黄色がかっているのが主だ。
　しかし、志希の目は真実優しく溶けた黄金の色で、亜人の色味に似ている。
　本来は違う色を持っていたと言われても信じられぬほど、志希によく似合っていた。
「まぁ、どこかでアールヴの血を引いているのかも知れんがな……あまり派手な事はさせん様にしておけ。貴族の好事家が、何をしてくるかわからんからの」
　ギルドに所属する冒険者に対し、貴族はあまり良い顔をしない。

ならず者の集まりだと断じ、下手をすると犯罪者扱いまでされてしまうほどである。

無論、その様な事が無いようギルド側でも取り締まっているし、冒険者側に味方する貴族もいる。

だがしかし、横暴な貴族が多いのも事実。

亜人であろうとも見目の麗しい女性や男性を見染め、手を出そうとする輩は多いのだ。

下手に断れば投獄される可能性もあり、アルフやアールヴは基本的に貴族が関係する依頼は受けたがらない。

無論、冒険者ギルドの方でも手を尽くしているが、被害が無くならないのは貴族達の方がより巧妙だからであろう。

被害にあった冒険者は他国のギルドへと拠点を移す事も多く、これがかなり高位の冒険者だと国としても困った事態になりかねない事もある。

妖魔との戦の際の傭兵としての雇い入れ、大型の魔獣が出た際の退治を依頼するのは大概高位の冒険者だ。

これが拠点を移っていたせいで依頼を受ける者がなかなか現れず、被害が拡大すると言う事もありうるのだ。

国でもう少し冒険者を保護してくれたらとギルドの幹部達は働きかけてはいるのだが、中々上手く行かないのが現状なのである。

組織としてはまだ新しい為、大半の貴族はその有用性に気が付かないのだ。

「分かっていると言いたいが……」

苦い声で、イザークはベネットに応える。

「お前さん本人も、貴族に目をつけられやすいからのぉ」

ベネットは小さく笑いながら、指輪をことりとカウンターの前に置く。

「まぁ、お前さんの後ろには千年アルフが居るからの。手を出す輩なぞいないか」

楽しそうなベネットの言葉に、イザークは顔を顰める。

「クルトはただの親類だ。俺の事で、指一本動かすつもりはない。それより、鑑定は終わったのだろう？」
イザークの問いにベネットは頷き、品物に付けた羊皮紙を示す。
「こちらに、品物に掛けられている魔法をわしの知る限り書いてある。見覚えのない古代語も魔法陣も無かったからの、信頼できるぞ」
「そうか」
羊皮紙を一枚一枚手にとり、書かれている内容に目を走らせるイザーク。
「しかし、このお嬢さんは丸腰じゃな。何か、護身用に身につけさせておかねば危ないぞ？」
ベネットの言葉に、イザークは羊皮紙から視線を外して苦笑する。
「珍しいな、ベネットが冒険者の心配をする等ここ二十年は無かったはずだ」
イザークの言葉に、ベネットは小さく笑う。
「わしの孫娘が、これくらいでな。こんなあこぎな商売に手を染めなくてはいけない娘さんを見ていると、こう……何とも言えん気持ちになるのだよ」
心配そうなベネットの言葉に、イザークはそうかと頷く。
「何はともあれ、暫くは俺達が付いている。それに、資質もあるからな……そう心配する必要はないだろう」
イザークがそうベネットに言うと、彼は目を丸くして下から見上げてくる。
「いや、驚いた。君も大概、珍しい事を言っているよ？　いつももっと、女性であろうと入ったばかりの仲間は突き放しているじゃないか」
心底驚いたと言う声音で言われ、イザークは憮然とした表情を浮かべる。
「当たり前だ。仕事を甘く見て、パーティを危ない目にあわせかねない浮かれた人間に優しくしてやる道理はなかろう？」
基本的に低位のイザーク達は、駆け出しの冒険者と組む事もある。

少数パーティ故に来る者拒まず、去る者追わずと言ったスタンスだからだ。
気に入ればそのまま長く組む事もあるが、大概は向こうの方から付いていけないと言われるほど、イザークはそっけないのだ。
長く組んでいるのは、今のところカズヤ一人である。
「その理屈でいくと、この子は合格だったのかね？」
興味津々と言ったように、ベネットがイザークに問いかける。
「ああ」
言葉少なにイザークは頷き、カウンターの上に並べられている品物を見る。
「この長棍、珍しいな」
イザークは羊皮紙に書かれた内容と、長棍を見比べながら呟く。
「ああ、面白い機能だよね。元々軽くて魔法を留め易いミスリル銀を使って作ってあるくせに、更に軽量化をかけつつ殴られた相手を一定の確率で気絶させる効果があるなんて。軽いおかげで振りも早くなるし、生け捕りを目指す分にはかなり良い品物だよ」
ベネットはイザークの呟きに、上機嫌でその効果を滔々と語り始める。
「これを作った魔術師は、生物捕縛専用と考えていたのではないかな？」
「成程、天の采配と言うやつか」
ベネットの説明を聞いたイザークは思わず呟き、長棍をマジマジと見る。
華美な装飾などない実用一点張な外観は、ミスリル銀だと言うのに艶を消した黒一色である。
黒の中に沈み込むように彫られている古代語は、渋い装飾にしか見えない。
「お嬢さんには大きすぎないかね？」
ベネットの問いかけに、イザークはまぁなと頷く。
「シキに武器での攻撃を期待しているわけではない。それこそ、シ

キが歩く時の杖代わりになってくれれば良いだけだ」
武器として全く扱う気の無いイザークの言葉に、ベネットが哀しそうな表情を浮かべる。
「せっかくの武器を……」
「護身用に棍術も教える予定だからな、全く使わないと言うわけではない」
そう言いつつも、イザークは手近な指輪を手に取る。
「形状を変えられる魔法の品でもあればかなり楽なのだが……仕方がないか」
嘆息交じりに呟きながら、イザークは指輪や宝飾品を一つ一つ確認しながら袋に戻していく。
「形状を変える魔法なぞ、高望みも良い所だ。あるとすれば、遺失魔法の類だろうな」
ベネットはイザークの呟きに律義に答えて、ため息をつく。
「まぁ、そんな珍しい物が見つかればまた塔の学院が騒がしくなるな。煩わしい」
新たな遺失魔法が見つかると、その利権をめぐって塔の学院と冒険者間で対立が起こる事がある。
その際、不満のはけ口を探してベネットの所へ来て、態々愚痴や文句を言って行く人間が居るのだ。
ベネットはただの出向魔術師でしかないと言うのに、取り成してくれとまでお願いされる事もある。
「鑑定依頼でなければ、叩き出しているのだろう？」
イザークが小さく笑いながら問いかけると、ベネットはもちろんと頷く。
「わしの楽しいひと時を邪魔する輩に居座られても不愉快だからな」
呵呵と笑い、仄かに光る水晶を一撫でする。
「では、俺達も早々に部屋を出るか。鑑定も終わったからな……カズヤ達を待たせるのも悪かろう」
イザークはそう言って、志希を小さく揺らす。

「んぅ……？」
寝ぼけた声を上げ、カウンターから顔を上げる志希。
「鑑定が終わった。カズヤ達の所へ戻るぞ」
「はぁい」
欠伸交じりに返事をする志希は、どこかあどけない。
ベネットはそんな志希に苦笑を浮かべて、志希の頭を撫でる。
「それじゃ、また生きて会える事を祈っているよ」
「はい……また来れるように、頑張ります」
眠そうに眼を瞬かせながら、志希はベネットの言葉に頷いて椅子から降りる。
「あ、ああ」
肩からずるずると布が落ちる感覚で、志希は声を上げて慌てて布を押さえる。
「忘れていたな」
志希が押さえていた布をイザークが片手で持ちあげ、腕に掛ける。
「あ、イザークの外套だったんだ……ありがとう」
「気にするな」
志希の礼にそっけなく返事をしながら、イザークは椅子を持ちあげ壁際に寄せる。
それを見た志希は慌てて自分の椅子を持ちあげ、イザークの椅子の横に置く。
「シキ、こちらの小さい袋を持って行ってくれ。俺は、こっちの武器を持っていく」
イザークの指示に志希は素直に従い、小さな袋を持ってベネットに頭を下げる。
「お邪魔しました」
「また来る」
二人がそれぞれの退出の挨拶にベネットは手を上げて答え、二人の背中を見送るのであった。

第二十八話

鑑定を終えてギルドの出入り口付近に移動すると、カズヤが一人で待っていた。
ミリアとアリアは荷物を置きにそれぞれ神殿と塔の学院に戻っているらしく、一度自分達も宿に戻ろうと持ち掛けられた。
街に帰りついたのは昼過ぎだったのだが、食事を取っていないので身綺麗にしてから遅い昼食を一緒にとると言う事で話が付いていたらしい。
それならばと三人も荷物を宿に置き、公衆浴場でゆっくりと旅の疲れと垢を落としてから宿の食堂に入り、食事を注文する。
そこに丁度良いタイミングで、ミリアとアリアが姿を現す。
「お疲れさま、先に荷物を置きに行ってしまってごめんなさいね」
ミリアはまず、先に休んでしまったことを詫びる。
「いえ、こちらこそ長引いてすいません」
志希は思わずそう返事をすると、アリアがくすりと笑う。
「鑑定は時間がかかる物ですから、気になさらないでください。それより、お食事の方を先に済ませてしまいませんか？」
アリアの言葉に、カズヤも頷く。
「ああ、そっちの方が良いな。飯食ってからの方が気力もわくしよ」
「そうだね」
カズヤの言葉に、志希は同意する。
何せ、お腹がすいて今にも鳴りそうなのだ。
アリアとミリアも側を通る店員に飲み物と料理を頼み、椅子に座る。
「取り敢えず、俺が預かってた報酬だ」
カズヤはそう言って、懐から小袋を取り出してテーブルの上に置く。
「報酬は元々一人銀貨五枚だけど、枯れた遺跡の新しい入り口を見

つけた報告で少し色をつけてもらえた。と言ってもまぁ、銀貨五枚だけどな」

合計で一人当たり銀貨六枚となったと説明してから、カズヤは小袋の中身をテーブルの上に開けて分配する。

「ありがとう」

志希はカズヤから手渡され、お礼を言いながら受け取りイザークを見上げる。

今現在、志希はイザークから借金をしている状態だ。

銀貨五十枚と言うかなりの大金を返す為には、取り敢えず分割して返すのが一番だろうと頷き口を開こうとするが。

「報酬はこれだけではない。取り敢えず、食事が終ってから俺達の部屋に移動しよう」

イザークが遮るように、これで終わりではないと告げる。

「ああ、そうよね。今回持って帰ってきた戦利品の方も、皆で分配する事になるものね」

依頼の報酬とは別に遺跡探索で手に入れた品物を皆で分けて、更に売り払って分配すると言う作業もあるのだ。

そんな事を考えていると、店員が志希達が先に頼んでいた物を運んでくる。

カズヤとイザークはエール酒を、志希はプルの実のジュースを頼んでいたのでまずそれがテーブルに置かれた。

直ぐにミリアとアリアが頼んだワインが運ばれ、皆それぞれ飲み物に口をつける。

「しかし、今回の報酬は新調する武器で殆ど消えるんだよなぁ……オレ」

カズヤがため息をつきつつ、ぼやく。

「今回拾った長剣でも使えばよかろう。ベネットから良品と言う太鼓判を貰っていたぞ」

「うお、マジ!?　あ、いやでもよ……オレ、長剣使った事ねぇぞ？」

イザークの言葉に顔を輝かせたが、直ぐにカズヤは肩を落とす。
「ならば、手に馴染むまで使うしか無かろう？　手解きなら、俺がしてやる」
落ち込むカズヤにイザークはそう言ってから、志希を見る。
「無論、シキもだ」
「わ、私！？」
突然話を振られ、志希は驚く。
「ああ、うん。シキちゃんも護身用に何か身につけておいたほうが良いと思うわ。アリア見たく、護身術一つも身につけないで出歩いて、変なのに目をつけられたとかあったら困るじゃない？」
「ね、姉さん……！」
恥ずかしそうにアリアは頬を染め、ミリアの肩を叩く。
「ああ、アリアさんと初めて会った時ってそうだったもんな」
うんうん、と頷きながらカズヤは呟く。
アリアはますます赤くなり、ワインを口に含んで誤魔化そうとしている。
「それでだ。今回の戦利品のうち、長剣と長棍はこちらで引き取りたいのだが」
良いか？　と確認するように、イザークはミリアを見る。
「それに関しては良いのだけど、ちょっとその前に話と言うか……お願いがあるのよね」
ミリアは居住まいを正して、イザークだけではなく志希とカズヤを見回す。
真剣なミリアの表情に、志希とカズヤも思わず居住まいを正して話の続きを待つ。
「もし良ければ、わたし達とこのままパーティを組んでもらえないかしら？」
突然の申し出に、志希はきょとんとした表情を浮かべてイザークを見上げる。
カズヤとイザークのパーティに入ったばかりの志希には、ミリア

達の言葉に対する発言権は無い。
そう判断しての行動だ。
カズヤはこの申し出に対し考える様な表情を浮かべ、イザークは目を閉じて無言のままだ。
「今すぐお返事を、と言うわけではありません。持ち帰った書物をわたしが調べ終え、それをどうするかと言う相談もありますし……持ち帰った品物に関する処遇が決まり次第、と言う形でも全く構いません」
アリアがミリアの申し出に補足するように説明し、じっと三人を見つめる。
暫く、奇妙な沈黙がこのテーブルに漂う。
志希は妙な緊張感を持った沈黙に困惑していると、イザークが口を開く。
「ミリアはともかく、アリアは不安要素が大きい」
先の遺跡探索のおり、最も酷い醜態を見せたのはアリアだ。
冷静な判断を下せず、ある意味パーティを危険にさらした。
アリアは肩を揺らしたが、その顔はしっかりとイザークを見ている。
表情は硬いが、次はそのような事などしないと言うように。
人見知りをしていた最初のアリアの表情とは、見違えて強い。
「んでもよ、その後きっちり動いてくれてるからあんま気にしなくても良いんじゃねぇ？」
カズヤはアリアの肩を持つようにイザークに言い添えて、笑う。
「それに、今回シキはうまく動けたけど次はどうなるかわかんねぇ。それなら、一緒に面倒見るでも良いと思うぜ」
カズヤの楽天的な言葉に、イザークは肩を竦めて苦笑する。
「カズヤも手伝ってくれると言うのであれば、吝かではないな」
「げ、オレも！？」
「当たり前だ。俺一人で何もかも出来るほど、優秀ではない。もっとも、今まで二人でやってきたというのだから、彼女達の腕は信頼

できる。優秀な神官と魔術師は、居て困る事はないからな」
パーティとしての有為性を強調しながらも、カズヤの意見を取り入れての言葉である。
「それに、今まで組んだ冒険者の中でもかなりマシな部類だ。二度目の戦闘の時のように動いてくれるのであれば、また声を掛けさせてもらおうと思っていた」
イザークの本音らしき言葉に、カズヤは苦笑する。
「あぁ～……シキにしても、アリアさんとミリアさんにしても比べようもない位優秀だもんなぁ」
「何かあったの？」
何やら含みのあるカズヤの言葉に、志希が問いかける。
「ん～……オレらって結構、低ランクでも有名らしいんだわ。腕が良いとか、そう言うので初心者とか一人でやってる女性冒険者とかが組みたいって申し込んでくる事が多くてよ」
カズヤは言葉を濁すように、選ぶように歯切れ悪く応える。
「要するに腕の良い者によりかかろうとする輩が居た、と言う事だ」
端的な言葉は冷たく、イザークが過去に組んだ者達に良い感情を持っていないのがありありと分かる。
相当嫌な思いをしたのだろうと、アリアとミリアは思わず同情してしまう。
「ダメな冒険者と比べられるのは失礼だって思うけど、まぁ良いわ。わたしも、貴方達の腕を買っての申し出だし。あと、女の子一人なのがちょっとかわいそうなんじゃないかしら？　っていう不純な動機もあるしね」
ミリアは志希に微笑みかけてから、ワインを一口飲む。
志希はミリアの言葉に、なるほどと納得する。
通常、男ばかりのパーティに女性が一人しかいないとなると色々な意味で困った事になる事が多い。
志希の場合女性としての問題はある意味無いも同然なのだが、それでも同性が居た方が気が楽なのも確かだ。

「なるほど。その方面は考えていなかったな」
感心したように言うイザークに、カズヤは苦笑する。
「まぁ、オレらはまともに異性と組んだ事ねぇからな。仕方が無いんじゃねぇ？」
実際にイザークとカズヤの二人は女性冒険者に色々と嫌な思いをしていたようで、そちらの方にまで気を回す様な事をしてこなかったのだろう。
だが、これからは志希だけではなくミリアとアリアと言う女性も一緒に行動する。
基本的にはあまり意識しなくても良いのだろうが、常識の範囲内で互いに気を回さなければいけなくなるのである。
「そうだとしても、これからは男二人じゃないのだから気をつけて頂戴ね？」
二人に釘を刺し、ミリアはにっこりと微笑む。
「ああ、善処するとしか今のところは答えられんがな」
イザークはそう言ってエールを傾け、カズヤもまた苦笑して頷く。
「今まで出来ていなかった物を急に出来る様にしろって言っているわけではないわ。お互い、協力していきましょうって言ってるの」
カズヤの苦笑にミリアはそう言い添えると、丁度店員が料理を運んでくる。
大きなテーブルに五人が頼んだ料理を並べ、店員は颯爽と去っていく。
「丁度良い時に来たな。先に飯にしようぜ」
カズヤの言葉に、志希は頷く。
「うん。お腹がすいていたら、良い話し合いが出来ないしね」
志希の言葉にもっともだと全員が頷き、思い思いに食事を開始するのであった。

第二十九話

遅い昼食を食べ終わってから、持ち帰った戦利品の山分けをした。
カズヤは魔法が掛かった長剣を、志希はイザークに言われ身の丈よりも大きな長棍をもらい受けた。
ミリアは対魔力が上がる指輪を貰い、アリアは魔法の発動体にもなり更に魔力を上げる術式が刻まれた指輪を望んだ。
イザークは特に欲しいと思うものが無かったのだが、一人だけ何も貰わないと言うのも座りが悪かったので体力の回復が早くなる耳飾りを貰った。
他にも魔法が掛かった宝飾品なども二つほどあったのだが、必要無いと言う事で余った武器共々売却する事となった。
パーティ全員で一ずつ魔道具が手に入ったので、売却した分は頭割りをするという事で落ち着いた。
長棍と長剣は魔道具の中でもかなり高価なものではあったのだが、戦力が上がるので気にしない事にしたのだ。
その他にもアリアが持ち帰った研究資料らしきものがあったが、それにはやはり生命を弄ぶ危険な魔法実験が記載されていた。
アリアはそれを塔の学院でも最も常識的な人に引き渡し、禁書として扱ってもらう事にしたそうだ。
その際に、学院として引き取ると言う事になったのでそれにも謝礼が出たとアリアは持ち込んだお金をカズヤに手渡した。
カズヤは何故自分がと言いつつしっかり金額を確かめ、人数分に割って皆に分配してくれた。
皆がそのお金を受け取り思い思いに飲み物を頼んでいる最中に、志希は今回の冒険で入手した金額を計算し始める。
実は今回の冒険で、かなりの大金が手に入っている。
泉の水汲みで銀貨五枚。
枯れた遺跡の中で未探索区域を見つけた事で、プラス銀貨一枚。

そこで手に入れた物を持ちかえり、売り払った事で更に一人頭の銀貨がプラス八十枚。
「うん、これでイザークにお金を返せる！」
志希は喜色満面で言い、銀貨を五十枚数え始めるが。
「一気に返すつもりか？」
と言うイザークの問いかけに、手を止めて顔を上げる。
彼の声に、何かの含みがあるように感じたのだ。
「そのつもりだったけど……ダメなの？」
志希は感じた疑問をそのまま口に出すと、イザークが考えるように顎に手を当てる。
一方、ミリアとアリアは志希がイザークに借金をしていた事に驚愕した表情を浮かべている。
「シキちゃん、何で借金したの？」
「シキさん見かけによらず、お金の使い方が粗いんですか？」
何気に酷い台詞である。
「違う違う。私って、そもそも無一文だったの」
志希は手を振りそう言うと、今度はミリアとアリアの疑問がイザークに向く。
「一体何を狙って……」
「姉さん、それは失礼ですよ。でも……冒険者間で無一文の人にお金を貸すのって、あまり聞きませんよね」
二人の言葉に、カズヤが苦笑する。
「傭兵の仕事してる時に、シキに会ったんだよ。その時オレとイザークはクルトのパーティに参加してて、満場一致で保護したんだ。その時に、優秀な精霊使いだってのも分かってよ」
グイッとエールを一口飲み、カズヤは言葉を続ける。
「クルトのパーティには元々臨時で参加してるようなもんだし、盗賊と戦士二人じゃ不安な部分もあったから、シキも冒険者志望だって言うしそのまま一緒に組む事にしたんだ」
「そうそう、その時にはもう財産の一切合財を失っていたからイザ

ークが立て替えてくれたの」
志希はカズヤの説明に乗って、言葉を重ねる。
事実ではあるが、真実を言っているわけではない事に志希の胸は痛むが、堪える。
志希は自分が『神無の鳥』と言う種族である事を、未だイザークとカズヤ以外には言っていない。
クルト達にも言っても良かったのかもしれないが、どうしても気が進まなかったのだ。
付き合いとしては長い彼等に言っていない以上、知り合った日数も短いアリアとミリアに自分の正体を告白する事など考えられなかった。
それを見透かしたようにカズヤがうまく説明してくれて、志希は助かったと安堵する。
「成程……それで、今回の報酬で返せるのね」
ミリアは納得した表情で頷き、呟く。
「そうなんだけど、報酬の半分以上は消えるの」
かなりの大金を借りているという言葉に、アリアは目を丸くする。
「な、何でそんなに……」
思わず突っ込みを入れてしまったらしいアリアの言葉に、志希は苦笑する。
「着る物も何も本当に無かったからね。その時身に纏ってたのって、ボロボロの布だったもん。だから、服に下着、冒険者として必要な道具とか防具とかその他諸々の諸経費を借りたの」
志希の言葉にそれでも、アリアもミリアも首を傾げる。
今回の報酬は銀貨九十枚にも届きそうなくらい多いものだ、その半分以上渡さなければ返せないほどの金額で身の回りの物を買っても有り余るはずだ。
そう思ったミリアに、カズヤが口を開く。
「身の回りの物だけじゃ、足りねぇだろ。宿をとったり、飯食ったりするとかの金が必要になるのが普通だからな。しょっぱなから、

こんな大金手に入れる方が稀だしよ」
カズヤの言葉に、納得する。
最初に大金を貸して、取り敢えずの生活基盤を整えさせたのだとやっと理解したのだ。
服や道具があっても、食事や寝床が無ければ辛い。
特に、街に住んで冒険者として登録しても、生きる為の食べ物も無い状態であれば仕事も出来ない。
「確かに、そうですよね……」
基本的に、衣食住は保障されている神官や魔術師である二人は、そこに気が付けなかったのである。
「シキ、返済は報酬の一割で回数を分ける形にしろ。少し金を貯めた方が良い」
イザークはミリアとアリアが納得したのを見て、志希に告げる。
「え？　でも、一括で返した方がイザークも助かるでしょ？」
志希の問いかけに、イザークは頷く。
「まぁ、それはそうなのだが……基本的に、冒険者というのは厄介な揉め事も起こりえる」
唐突なイザークの言葉に、志希はきょとんとした表情で彼を見る。
「予期せぬ揉め事により依頼人から違約金を払えと言われた時、手元に纏まった金が無いという事態があり得る」
「そ、そうなの？」
「ああ。その際に再び借金をするよりも、俺に少しずつ返済していく方が気も楽だろう？　それに、見も知らぬ人間に借りを作るのも後々厄介事の種になり易い」
イザークのどこか実感がこもった言葉に、志希はこくりと頷く。
また、イザークの言葉を聞いていたカズヤは何か心当たりがあるのか、渋面を浮かべている。
「そっか……そうだよな」
何かを納得した苦い声音に志希が小首を傾げていると、ミリアがにこっと笑う。

「まぁ、シキちゃんは気にしなくて良いのよ。その辺の苦労をするのはリーダーのイザークさんだしね。それより……遺跡から帰ってきて、お金の分配も済んだ事だしそろそろ次の段階に進まない？」

ミリアが明るい声音で話を変えて来た。

志希としては何故話を変えるのか不思議なのだが。

「そうですね。思ったより手間取って、四日も経っていますし……」

アリアも姉の言葉に同意し、眼鏡を指でずり上げる。

志希はアリアとミリアを見てから、イザークを見ると彼は小さく笑みを浮かべて口を開く。

「確かに、そろそろ骨休めは終わりにしても良さそうだな」

イザークはエールを片手に、静かに呟く。

「え？」

志希は何がどうなっているのか分からず素っ頓狂な声を上げるが、カズヤは物凄く嫌そうな表情を浮かべていたりする。

「四日も遊んでいたのだ、体も鈍る。シキもカズヤも、体の疲れは取れただろう？」

静かに問いかけられ、志希はこくりと頷くが、カズヤはぶんぶんと頭を振る。

「いやいや！　オレはまだ疲れてるぜ、イザーク！」

焦った声音で言うカズヤだが、イザークはにやりと笑うだけで答えない。

「いや、本当だから！　マジだから！」

必死に言い募るカズヤに志希は首を傾げて見ていると、彼は目で訴えてくる。

一緒に止めろと言ってくれと。

しかし。

「それだけまくし立てられるんだ、大丈夫だろう？　カズヤ、この間の長剣を持って来い。志希もだ。長棍を持ってこい」

イザークはそう言って、席を立つ。

「え？　ええ？」

きょとんとした志希は驚いているが、イザークに目で促されて慌てて立ちあがる。
「あら。今日から始めるの？」
ミリアがワインを飲みながら、イザークに問いかける。
「ああ、いつまでも遊んでいては体も鈍る。アリアもミリアに護身術程度は習っておくといい。魔術師だからと言って、体力が必要ないと言う事は無いからな」
イザークの言葉にアリアは若干考えるようなそぶりを見せてから、一つ頷く。
「はい。これでシキさんに追い越されちゃったら、先輩の立つ瀬ないですもんね」
志希の呑み込みの早さはかなりの物で、帰りの道中で疲れない歩き方と言うのを既に身につけていた。
無論、歩く距離は体力で決まる訳なのだが、歩き方一つで消耗度合いも変わるものだ。
その歩き方は普通一年ないし二年は冒険者として過ごさなければ身につけないものなのだが、志希はもう自分のモノにしているのである。
志希の成長の早さは、実は彼女自身が語った知識の泉と言うものが関係しているのではないかとイザークは感じていた。
それならば、実地訓練を積めばいいと考えたのである。
凄腕と呼ばれる必要は、無い。
だが、自身の身を守る為にはどうしても必要な事になると信じて。
「場所は冒険者ギルドの裏にある鍛錬所だ。初心者が何人かいるかも知れんが、気にせずやるぞ」
「うへぇ……勘弁して欲しいぜ」
心底嫌そうにカズヤは言いつつ、渋々席を立つ。
「なんでそんなに嫌がってるのかなぁ」
志希は首をかしげつつ、一度部屋へと行って長棍を持って戻ってくる。

カズヤもまた、嫌そうな表情のまま長剣を持って戻ってくる。
「それじゃ、行くぞ」
イザークの言葉に頷き、四人は食堂を出るのであった。

第三十話

冒険者ギルドの裏手には、鍛錬所がある。
町中で鍛錬をして人に迷惑をかけぬようにと言う配慮で作られ、冒険者たちに変わらず使用されている施設だ。
初心者でパーティを組んでいない冒険者に時折戦闘の講座や、手先が器用な人間には鍵開けの講座などを開いている。
基本的にすべて実戦形式なので、鍛錬所はいつも誰かしら人が居る。
初心者達が集まり、講座を開いているギルド職員等を横目にイザーク達は広い鍛錬所の広場の隅に陣取る。
ちなみに、現役冒険者がここを借りる時は銅貨五枚を支払わなくてはならない。
講座を開いている時は邪魔をしないと言う条件もあるが、町中の空き地などで剣を振り回すよりも遥かに安全なのだ。
「さて、シキにカズヤ。それぞれ持ってきた物をこちらに渡せ」
持ってこいと言ったくせにと憮然とした表情でカズヤがイザークに長剣を渡すと、イザークは代わりの様に普通の長剣を渡す。
志希は素直に言う事を聞き長棍を預けると、志希の身長に丁度良い木で出来た無骨な長棍を渡される。
先ほどまで持っていた長棍はとても軽かったのだが、手渡された方はしっかりとした重さを感じる。
志希は手元の長棍をマジマジと見ていると、イザークが口を開く。
「最初から軽い物で慣れると、折角の効果を生かすのが難しくなる。二人には、まずこの重さに慣れてもらうぞ」
イザークの言葉に、志希はこくこくと頷く。
「カズヤは素振りを始めろ。シキはまず俺の型を見て、真似をしてくれ」
イザークは志希の長棍を使い、一つだけ型を見せてから二人を促

す。
志希とカズヤはイザークの型があまりにも綺麗で見惚れていたのだが、慌てて指示された行動に移る。
カズヤは小剣と長剣の重さの違いに若干戸惑っていたが、直ぐにコツを掴んだのか楽に振り始める。
その事に、カズヤ本人が不思議な顔をしつつ長剣を見ていると。
「カズヤが戦士を目指した時は、体がきちんとでき上っていない時分だ。筋肉もしっかり付いていない状態で、いきなり長剣を振り回せるはずが無かろう」
あっさりと、カズヤの疑問に応える。
「えっ！？　マジ！？」
「ああ。それに、カズヤは思考も体も柔軟だった。それなら、盗賊で業を磨く方が戦士よりもあっていると判断してそちらを勧めたのだが……当たりだったな」
満足げに、イザークは頷く。
「うあ、そんな前からオレは手のひらで転がされてたのか」
嫌そうな表情でカズヤは言うが、イザークはにやりと笑う。
「しなやかな筋肉を、無為に殺す必要はなかろう。俺の様な力一辺倒ではなく、技を磨く方がカズヤには遥かに有意義だ」
イザークの言葉に、カズヤは顔を顰める。
「何言ってやがる、万能戦士が。イザークが武器全般の業に精通してんの、知ってんだぞ」
「当たり前だ。俺はお前よりはるかに年を食っている。その分、学ぶ時間も多かった証しだ」
イザークの言葉に、カズヤは憮然とする。
「ほんと、イザークはアールヴらしくねぇなぁ」
「里で学ばぬ者と比べてくれるな。傭兵をしている人間であれば、基本的に俺くらいの業は身につけているものだしな」
あっさりとカズヤの嫌味に答え、イザークはもう一本持っていた練習用の長剣を手に取る。

「ミリア、悪いがカズヤと打ちあってくれないか？」
志希達の横で、アリアに発動体の杖を使った護身術を教えているミリアに声をかける。
「まぁ、良いけど」
ミリアは頷き、イザークの手から長剣を受け取る。
「ミリアとやんのか……」
複雑そうな表情のカズヤに、ミリアはにこっと笑う。
「ご不満そうだけど、わたしに勝てるかしら？」
自信満々の言葉に、カズヤはむっとする。
「そっちこそ」
「ふふ、やる気になったなら幸いだわ。女だからとなめられてもらっては、困るから」
艶やかに笑うミリアに、カズヤの背筋が慄く。
「カズヤ、アンデットキラーの資格を知っているか？」
イザークが、カズヤに問いかける。
「は？　法力だろ？」
思わずそう応えるカズヤに、にやりとイザークは笑う。
「法力だけでは、半人前だ。アンデットキラーは、単体で複数の敵を倒す事も想定されている。その為、戦闘技術が高いのも条件の一つなのだそうだ」
イザークの解説に、カズヤは顔を引きつらせる。
「そう言う事。わたしはまだまだ未熟だけれど、これでも剣技と大鎌の扱いを認められているの。カズヤが何処まで出来るか、楽しみね」
嫣然と笑うミリアに、カズヤは自分の言葉を後悔するがもう遅い。
挑発してしまう様な事を言ってしまった時点で、こうなるのは決まっていたのだ。
「シキとアリアは、少し手を休めて二人の打ち合いを見ておけ」
息を切らし、ふらふらしている二人にイザークは声をかける。
二人は無言で頷き、並んで座る。

棒術だと軽く見ていたが、意外に体力を使うと二人は思い知らされていた。
上腕部分が発熱し、重だるい。
明日の筋肉痛は確実である事に、二人は同時にため息をつく。
それを合図としたように、長剣を構えたミリアとカズヤは動く。
様子見と言ったカズヤの軽い胴を薙ぐ攻撃を、ミリアが長剣の刀身で受け止める。
刃を潰しているとはいえ刀身は鉄で出来ているので、金属がぶつかり合う音が響く。
素早くカズヤは剣を返すがミリアはそれも剣で受け、弾く。
結構な力ではじかれたカズヤは体のバランスを僅かに崩してしまい、ミリアが好機と足を踏み込んでくる。
その真剣そのものの表情に、カズヤは無理やり体勢を整えながら袈裟がけに降ろされる剣を必死で防ぐ。
火花を散らせ、甲高い音を立てる刀身。
しかし、思ったよりも重い攻撃にカズヤは長剣を取り落してしまう。
「はい、終了」
ミリアは笑顔でカズヤに言い放ち、カズヤは悔しそうにミリアを見る。
「少し、握りが甘いわ。小剣じゃないんだから、もう少ししっかり持った方が良いわよ」
ミリアは苦笑して、そう注意する。
「なんか、すげぇ悔しい」
年下の女性に指導されたのが、どうやらカズヤの矜持に障ったようだ。
こう見えて、カズヤは意外にフェミニストだ。
女性に対してはある程度優しく接し、気に掛ける。
「それじゃ、頑張って腕を上げましょう？　冒険者としての訓練は皆一緒にするものだし……それに、カズヤは元々小剣使いよ？　い

きなり長剣を使って勝たれたら、わたしの立つ瀬が無いじゃない」
ミリアの苦笑した言葉に、カズヤはますます悔しそうな表情を浮かべる。
「それって結局、自分に言い訳してるようでやなんだ。だから、もう一本頼む」
カズヤの言葉にミリアは笑顔で頷き、剣を構える。
すっかり熱くなったカズヤも剣を構え、勢い良く間合いを詰めて切りかかる。
「甘いわ！」
ミリアの気合ののった声と同時に、その刃は彼女の持つ長剣に阻まれていた。
カズヤは舌打ちをし、更に打ち込み始める。
真剣なカズヤと、余裕のミリア。
すっかり周囲の事を忘れ、ひたすら打ち合いをする二人を志希とアリアは見ている。
二人の足運びの違い、動きの違い、体捌きの違いを観察する。
アリアは別の意味合いも込めて食い入るように試合を見ているが、志希は何となくイザークの言いたい事が分かった。
長棍や棒で得物を持つ人間と戦う時は、どうやって戦うのが良いかを見せる事で教えているのだ。
同時に、志希の“知識”が刺激される。
志希がこれから習うはずの棒術の知識が次々に浮かび上がり、カズヤと戦う際、ミリアと戦う際にはどう動けばいいのかシュミレーション出来る。
急速に棒術の業を“識る”訳なのだが、どう考えても志希は自分の体がその動きについていけないと直感していた。
基礎の基礎である型をなぞり、出来るだけ緩急をつけた動きを心掛けていたのだが長棍を支え続ける事が難しいのだ。
長棍を支える腕や手の力のみならず、体の軸を支える腹筋と背筋をある程度鍛えなくてはならないだろう。

志希は自分の体に、あまり筋肉が付いていないのを知っている。
むしろ、この体と同年代の貴族の少年少女よりもついていないと自信を持って言える。
王侯貴族であろうとも、美しい所作やダンスをする為にはある程度の筋肉が必要なのだ。
辛うじてなんとか同じと言えるのは、自分の今の脚力だけである。
それもまた情けない物があるとがっくりと俯き、志希は深いため息をつく。
「さて、そろそろ再開するか」
おもむろに、イザークが二人に告げる。
「あ、はい！」
志希は返事をしつつ練習用の長棍を握って立ち上がる。
アリアは若干腰が重そうだが、志希に続く。
「アリアは先ほどミリアに見せてもらった型をなぞって居れば良い。シキは……」
イザークは、志希への指示に考え込み始める。
何せ、筋力が殆ど無いのだ。
良くこれで、先の遺跡探索の時に歩き切れたと感心するほどだ。
「私も、型をなぞるよ。だって、動かないと筋肉付かないし……筋肉つける鍛錬するにしてもここじゃちょっとやり辛い」
志希の言葉に、成程とイザークは頷く。
「無理をするなよ。体を痛めるだけが、鍛錬ではないからな」
「はい！」
志希はイザークの言葉に元気に返事をして、堅い木で出来た長棍を構えて振り始めるのであった。

第三十一話

鍛錬を始めてから二日目で、カズヤはミリアとそこそこいい勝負が出来るようになった。

志希とアリアは酷い筋肉痛のせいで、二日目はお休みである。

「ううん、だらしないなぁ私」

「わたしも、ちょっと自分が情けないです」

思わずぼやく志希に、アリアも重いため息をつく。

二人は訓練所の椅子に並んで座りカズヤとミリアの勝負を眺めている状態だ。

ちなみに、イザークはその審判をしている。

「元気一杯だなぁ、あっち」

「ですねぇ」

昨日のような元気が無いアリアの声に、志希は思わず隣を見る。

「体力をつけないとやっぱり長旅をする時大変だとは思うのですけど……小さなころから運動が苦手だったんです」

ぽつり、とアリアは呟く。

「ああ、分かるわかる」

志希はこくこくと頷き、苦笑する。

「私も、あんまり得意な方じゃなかったんだけどね……」

今はどうかはわからない、と言いかけて言葉を飲み込む。

自分の体がどれほどのスペックを持っているのか、自分でもわからない等と言うのは普通ないからだ。

普通じゃないとまだアリアに言う気が無い志希は、苦笑を笑顔に変えてアリアを見る。

「それじゃ、一緒に体力づくりしようよ」

「え？」

きょとんとしたアリアに、志希は提案する。

「一応まだ依頼を受けるって言う話が無いみたいだし、毎日街の中

をちょっと早足歩こうよ。それだけでも足とかに筋肉付くし、体力もつくしさ。それで、二日か三日に一度くらいお腹と背中、腕の筋肉をつける鍛錬すれば軽く杖も振れると思うよ？　あと、体型維持にも良いって聞くし！」

最初の方はほんの少し嫌がっているような表情をしていたアリアが、最後の志希の台詞に目を揺らす。

どうやら、思う所があるようだ。

「そ……それなら、やってみようかな」

小さな声でアリアは呟いてから、志希の目を見て頷く。

「はい。一緒に頑張りましょう、シキさん」

「頑張るのは良いけど、これからは同じパーティなんだからもう少し砕けても良いんだよ？」

アリアの言葉に嬉しそうに笑いながら、志希は一言付け加える。

ミリアはある程度距離を近づけようとするように志希にちゃんをつけて呼ぶが、アリアの場合は距離線を引いたままでいようとするかの様に余所余所しく感じていた

同じパーティであるなら、呼び捨てが出来無くてももう少し打ち解けて欲しいと言う志希の気持ちだ。

もちろん、隠し事をしている状態で信頼されるのは難しいとは思う。

だがしかし、それでももう少しコミュニケーションを取って行かなくてはパーティとして成り立たなくなるのではないかという危機感が志希にあった。

それ故の言葉だったのだが。

「で、でも……わたし、ずうっとこの口調だったのでこれ以上砕けるってどうしたらいいか……」

困り果てたアリアの言葉に、志希はきょとんとした表情を浮かべる。

「その、わたしの家は礼儀作法にうるさい所だったので、お師匠様の所に弟子入りした当初は凄く堅苦しいって言われました。今のわ

たしの口調は、お師匠様に言われて頑張って崩した結果なのです」
アリアの意外な話を聞いて、志希は成程と納得すると同時に赤面する。
距離を感じていたのは自分だけだったのかと、恥ずかしくなったのだ。
「これでもまだ硬いって、姉さんには言われますのでシキさんが勘違いするのは当然です」
志希の様子に気が付いたアリアが、慌ててそうフォローする。
「ですので、お気になさらないでください」
アリアの言葉に、志希はこくこくと頷きながら両頬を手のひらで隠す。
恥ずかしくて身悶えする志希に、アリアはくすくすと笑う。
「シキさんも、わたしの事を好きに呼んでくださいね」
「う、うん……アリガト」
恥ずかしさで片言になりながら、志希はお礼を言う。
アリアは微笑んだまま頷くと同時に、甲高い金属音が響く。
「くそ！」
「もう少し、だったわね」
少しだけ息を弾ませたミリアが、無手のカズヤの胸に切っ先を当てていた。
「カズヤは少し、手元に意識が行きすぎだ。小剣の時はもう少し周囲に意識を割いていただろう」
イザークが今回のカズヤの戦い方に一言注意をする。
「分かってんだけどよ……間合いが違うからそっちに意識行っちまう」
「それじゃ、間合いに慣れていつも通りに意識を避けるようにするのが重要ね」
カズヤの言葉に、ミリアは課題を口にする。
「そう言うことだ。俺が相手をすると、カズヤが嫌がるからな。アリアには悪いが、暫くミリアにはカズヤにつきっきりでいてもらう」

イザークはちらりとアリアを見てからカズヤとミリアの二人に告げ、もう一度試合をしろと目で促す。
「うぇ、少しくらい休憩させろよ」
「そうね。少し、喉が渇いたわ」
二人の言葉に、仕方が無いとイザークは頷く。
「では、少し休憩するか。シキ達も退屈だろうしな」
見学している二人をちらりと見た言葉に、ミリアは元気に頷く。
「そうよね。暇よねぇ……筋肉痛でただ見てるだけなんて！」
ミリアの言葉に、カズヤは物凄く羨ましいと眼だけで二人に訴えていた。
カズヤは筋肉痛などには全くなっていない状況なのだが、純粋にゆっくりと座っているだけの二人が物凄く羨ましいのだ。
それはそうだろう。
休みなく動き、ミリアにしごかれ続けているのだ。
それでもミリアは時折休憩を申し出てくれるからありがたいのだが、イザークの場合はカズヤの体力が尽きる寸前までしごくのだ。
「いや、マジ勘弁して欲しい。休憩なしでこれは、きつい」
「イザークの鍛錬って、こんなにきついんだ」
ふらふらとアリアのすぐ横に腰を下ろしたカズヤに、志希が尋ねる。
「これ、ミリアが居る分まだマシだ。オレとイザークの二人だったら、休憩なんか挟んでくんねぇ」
ぐったりとしたカズヤの答えに、志希の頬が小さく引きつる。
今自分の目の前に居るのは、もしかしたら未来の自分の姿なのではないのだろうか？　等と考え、静かに戦慄する。
すると。
「シキは精霊使いだ。棍術に重きを置く戦闘をするわけではないからな、本当に護身用程度になるから安心しろ」
イザークが志希の慄きを感じ取ったのか、補足の説明をしてくれた。

「アリアも同様だ。積極的に前に出るのでなければ、護身術程度に武器を扱えれば御の字と言う所だからな。カズヤは基本は盗賊だが、近接戦闘となれば前衛の一人だ。きちんとした鍛錬をして体を作らなければ、カズヤ本人だけではなく後衛も危険にさらす事になる」

イザークの言葉に成程と納得するアリアだが、くたびれ切ったカズヤを見るとそれでもと言ってしまう。

「でも、あまり体を酷使しすぎるのも良くないと思います。適度な休憩をはさんだ方が、集中力も持続すると思いますし……」

「言われてみれば、そうだな」

アリアに言われ、イザークはしばし考えて頷く。

「まめにとは言わんが、半刻過ぎたら休憩を挟むようにするか。それに、そうだな……カズヤは人間だ。俺の一族でやる鍛錬法はきつすぎるな」

イザークのぼそりと言った言葉に、目を剥くのはカズヤだ。

「ちょっと待て！　お前の一族って、休憩なしにぶっ通しで鍛錬すんのかよ！？」

カズヤの突っ込みに、イザークは頷く。

「元々アールヴの中でも戦闘に特化しているからな、俺の一族は。以前、他のアールヴの友人にこの鍛錬法で剣技を教えた時、カズヤと同じ反応をされたのを今思い出した」

普通のアールヴでさえ驚く鍛錬法でしごかれていたカズヤは、深い溜息を吐く。

「マジかよ～……」

「これでも軽めにはしていたつもりだったのだが……悪かったな、カズヤ」

あんまり悪いとも思っていないイザークの言葉に、カズヤは胡乱とした表情を浮かべる。

「明日からは、もう少し軽くしてくれ」

「分かった」

イザークが頷き約束すると、ミリアが身を乗り出す。

「でも、イザークのおかげでカズヤはあそこまで凄い動きが出来るのね。戦士にしては身軽すぎるし、盗賊にしては鋭いもの。イザークの鍛錬のおかげで、かなり体力が付いているのね」
感心したミリアの言葉に、嬉しいのか嬉しくないのか複雑な表情を浮かべてカズヤは曖昧に笑う。
「何はともあれ、お疲れ様です。カズヤさん、こちら蜂蜜とレモーヌで味付けした良く冷やしたお水です。疲れが取れますよ」
そう言いながら、アリアはカズヤに水筒を差し出す。
こちらの世界では、意外な事に保温の魔法を刻んだ魔法瓶が普及している。
古代文明の技術を応用して、ずいぶん昔に発明されたらしい。
「おお、わりぃな」
そう言って、カズヤは水筒を受け取りゆっくりと飲む。
あんまり急に飲むと体がびっくりするので、それを防ぐための処置である。
「あら、お姉ちゃんには渡してくれないのかしら？」
からかう様なミリアに、アリアはあっと声を上げて顔を赤らめるが。
「はい、ミリアさんお疲れ様。アリアじゃなくて私からだけど、良いかな？」
もう一本の水筒を志希がミリアに差し出す。
「悪いわけ無いわ、ありがとうシキちゃん。嬉しいわ」
笑顔でミリアは受け取り、ふたを開けてゆっくりと味わう様に飲む。
「そう言えば、この間の遺跡で拾ったあれ……どうするの？」
ふと思い出したように、ミリアが問いかけてくる。
「あ、あれはまだ持っているんだけど、どういう形にして持ち歩けばいいのか悩んでいます」
志希は思わず背筋を正し、敬語で話してしまう。
「ふーん……あ、わたしの事呼び捨てで良いわよ。そんなに硬くな

る必要もないから」
　水筒の水を飲みながら、ミリアは装飾品について考えながら話す。
「落さないのを前提だったら、指輪の方が良いわ。貴族や王族が印章を指輪にして持っているのは、落さないからなのよ。首飾りや耳飾りでも良いかもしれないけど、そっちはちょっと落としやすいわ。でも、一番良いのはつけていて楽って言うのかもね」
　ミリアの言葉に、志希は成程と頷く。
「一番無難なのは指輪かぁ」
　嘆息交じりに呟くと、ミリアはでもと言葉を続ける。
「腕の良い彫金師に頼まないと、どんな形にしても宝石が取れたりするのよね。あと、土台にする貴金属に不純物混ぜたりしてお金だけふんだくる職人もいるから、頼むんだったらドワーンのリージアン信者に頼む方が確実よ」
　芸術神を信仰するドワーンであれば、手先も器用な上に詐欺紛いの仕事もしない。
「あれ？　神官じゃダメなの？」
　信者より神官の方がより信頼度が高いはずだと、志希が呟くと。
「あぁ～……信頼度は高いけど、物が物だから止めておいたほうが良いわ」
　聖遺物と並ぶ希少品を神官に預ければ、神の名のもとに接収される可能性があるとミリアは頭を振る。
「あと、芸術神の神官は自分の作った物を手元に置きたがるのよ。出来が良い物を手元に置いて悦に入るっていうやつ？　だから、過剰に装飾されたりするから実用一辺倒な物が欲しいなら信者で職人の人に頼んだ方が遥かに良いのよ」
「なるほどぉ」
　志希は思わず感心していると。
「辛辣だな。まぁ、間違っているとは言わんがそこまで酷い奴はいないだろう」
　イザークがミリアの言葉に水を差す。

「まぁね。でも、用心に越した事は無いわ。特に、物が物だから本当に信頼できる彫金師にお願いする方が良い」
神官のミリアは、真面目な表情で言う。
「……ふむ、そうだな」
イザークは頷き、考えるそぶりを見せる。
「まぁ、いざとなればお守り袋のまま持ち歩くって言うのも手だと思うんだけど……」
志希の言葉に、ミリアとアリアが目を剥く。
「ダメですよ。女の子なんですから、少しはお洒落しないと！」
「そうそう。折角だもの、少しは宝飾品を身に付けた方が良いわよ？　シキちゃんまったくその辺の物持ってないんだから、いざと言うとき困るわよ？」
唐突に力説を始めた双子に挟まれ、志希は引きしながら首を傾げる。
「い、いざってどういう時？」
志希の問いかけに、二人は当然のように言い放つ。
「ほら、好きな人とデートとか！」
「好きな人と過ごす時に、少しでも自分を綺麗に見せてもらいたいじゃないですか！」
息ぴったりに迫ってくる二人に、志希はこくこくと頷く。
納得と言うか、言葉の意味に関して吟味している余裕が無いので頷くしかできないのである。
そんな志希の前で双子は楽しそうに会話をする。
「やっぱり、好きな人と一緒に居るなら少しでも綺麗な自分で居たいじゃない？」
ミリアはねぇ？　と、アリアに同意を求めると、彼女はうんうんと頷く。
「本当は服とかも新調した方が良いとは思うのですが、明確な拠点を持っていないのでしたら荷物になってしまいます。その点、宝飾品でしたら小さい物が多いですしあまり嵩張りませんからね」

アリアはそう言って、微笑む。
「なるほど～」
志希はこくこくと頷き、納得する。
好きな人には綺麗な自分を見せたいと言う、アリアとミリアの言葉には物凄く納得できる。
だがしかし、志希は全くと言って良いほど恋愛などしていなかった為、酷く遠い出来事の話をされている様な気がしていた。
しかし、それを口に出すとアリアとミリアに猛然と何かを言われる様な気がするので、志希は口を閉ざして大人しく話を聞く体勢に入る。
「腕の良い彫金師はだいたいが大きな宝飾店の専門なのよねぇ……」
「そうですよねぇ。お仕事をお願いするんでしたら、コネが無いと難しいとおもいます」
何故か、アリアとミリアは未だ宝飾品の話をしている。
「当てもコネもある」
そんな二人に、さらりとイザークが告げる。
「え？」
異口同音に声を上げ、双子は彼を見上げる。
「ああ、ベレントの伝手か。あの人なら安心だな」
カズヤもだいぶん疲れが取れたのか、落ち着いた表情で水筒に口をつけている。
それを見たイザークは頷きながら、ゆっくりと腰を上げる。
「まぁな。それより、そろそろ休憩は終わりにしようと思うのだが」
イザークの台詞に、カズヤは物凄く嫌そうな表情を浮かべる。
「良いじゃねぇか、もう少し休ませてくれてもよ」
カズヤの文句に、うんうんとミリアとアリアも頷く。
「あまり体を冷やすのも良くない。それに、あまりゆっくりしていると時間が来てしまうからな」
イザークの言葉に、成程と頷くミリア。
鍛錬所を借りられる時間は二刻が限界なので、休憩を取ったのが

一刻ほど経ってからだ。
結構な時間動いていた事になるが、休憩を始めてから既に四半刻経っている。
「まぁ、休憩としては妥当な時間ね。明日からは、半刻ごとに四半刻の休憩でしょう？」
ミリアの問いにイザークは頷くと、カズヤははたと問いかける。
「明日からだから……今日はもしかして、何時もどおりなのか？」
「無論。明日からだと言っただろう？」
あくまで、ミリアの言った日程は明日から。
今日は当てはまらないとイザークは言い放ち、カズヤを見て僅かに口角を上げる。
「後一刻の辛抱だ、我慢しろ」
イザークの一言に、カズヤはがっくりと肩を落とし立ち上がる。
「が、がんばれ～」
「頑張ってください、カズヤさん。姉さん！」
志希とアリアは二人を励まし、練習用の長剣片手に先ほどまで使っていた場所へと戻って行くのを見送るのであった。

第三十二話

イザークの鍛錬によりカズヤと志希がある程度得物の扱いに慣れた頃合いを見計らって、あまり強くない魔獣退治などの小さめ依頼を受けるようになった。

実戦経験のない志希と、得物が変わったばかりのカズヤの為だけではない。

これから長期的に組むのであれば、どの様に動けば最適なのかを五人で探して行かなくてはならない。

同時に、パーティメンバー達の戦闘でもっとも重要な信頼関係も構築していかなくてはならないのだ。

その為に、小さめの依頼でまずは互いの戦闘の癖などに慣れる事にしたのである。

ある程度慣れたと判断した後は、徐々に強めの魔獣退治などへとランクを上げて行った。

そのころには志希の体力もだいぶん付き、一番最初の時の様に頻繁に休憩を取ると言う事も無くなった。

また、長棍の扱いもそれなりに出来るようになり、依頼を受けていない時は毎日一刻は触って手に馴染ませるようにしていた。

これ以外にも体力づくりと言う事でアリアと二人、毎日街の中をウォーキングしていた。

研究等で寝不足をしている時は無理をしないが、それでもほぼ毎日行うのはどうやらミリアのスタイルの良さに触発されているらしい。

目標となる物があれば、人間は頑張れるものなのである。

また、この期間の間にイザークがベレントの伝手を頼り、精霊の揺り籠を首飾りに加工してもらった。

形はチョーカーで、仄かに青く光る小さな宝珠は銀色の台座で留められ、首に接触する部分も銀色の紐の様な物で出来ていた。

宝珠の台座も銀色の紐状の物も全て、ミスリル銀で出来ている。
精霊の揺り籠と言うの希少物を加工するには、普通の貴金属ではダメなのだ。
ミスリル銀は精霊が最も好む金属で、精霊の揺り籠と言う品物の特性を最大限発揮できるのだ。
もっとも志希の持つ小さく青い宝珠は『神無の鳥』の力を封じ込めている物なので、どの様な金属であろうとも関係ない。
だが、それをわざわざ彫金師に伝えるのを志希は嫌ったのである。
未だアリアとミリアの双子やクルト達に自分の正体を教えていないと言うのに、接点の無い人間に『神無の鳥』の話をするのが嫌だったのだ。
これにより、ミスリル銀が入荷するまでかなり待たされた上に、志希が稼いだ金額では貯金を合わせてもまだ足りず、イザークに更なる借金をしてしまったのである。
思わずがっくりと両手両膝をついてしまうのも、仕方が無い事であろう。
この後からは志希はますます気合を入れて、仕事に精を出すべく冒険者ギルドに足を運んでいた。
「どんな依頼があるかなぁ～」
志希は鼻歌を歌いながら、ボードの前に立ち依頼を探す。
「出来れば、魔獣退治の類が良いだろう。依頼料は、そちらの方が良いからな」
イザークの言葉に、志希は頷く。
「私はちょっと苦手なんだけど……そうも言ってられないよね」
そう言いながら、志希は魔獣退治の依頼を探し始める。
魔獣退治の依頼は、生き物を殺すと言う内容だ。
初めてそれを請け負った時、志希は精霊を行使するのを躊躇ってしまいイザークに若干の怪我を負わせてしまった。
ミリアの神聖魔法で治る程度の物だったが、志希はイザークに怪我を負わせてしまった事に驚き、無意識にイザークを傷つけた魔獣

を風の精霊を行使し過剰な力で切り裂いた。
真っ二つに割られた魔獣とイザークの怪我にその場に胃の中の物を吐き出してしまうほどのショックを受けてしまった。
しかし、この先冒険者として生きるのであればそんな事で挫けられては困るとイザークは志希に言い聞かせ、彼女が慣れるまで魔獣退治の依頼を続けて受けていたのである。
志希は自分で選んだ以上、逃げ出す事はしないと必死で歯を食いしばり、間接的にとはいえ生き物を殺す事に慣れようとしている最中なのである。
「何も感じるなとは言わん。何かを殺す事に対する罪悪感は常になければ、人として壊れたモノになるからな。だが、魔獣と人は基本的には殺し合う関係だ。害獣などと言う生易しい物ではない」
イザークの言葉に、志希は頷く。
獣であればある程度飼いならしたり、こちらの恐ろしさを教えて近寄らせないように工夫は出来る。
だがしかし、知恵の無い魔獣は魔道具で作られた首輪をつけない限り飼い馴らす事は人間では不可能で、人間を餌と見做して襲ってくる恐ろしい獣が大半なのである。
それを肝に銘じておかなければならない。
油断は即座に死へと繋がり、自分だけではなくパーティ全員の命を奪う事態を引き起こしかねないのだから。
志希はもう一度頷き、気合を入れて依頼が書かれた用紙を見る。
「まぁ、慣れるのは難しいだろ。オレは未だに魔獣や妖魔退治は気分悪くなるからなぁ……一番気分悪くなるのは、賊退治だけどな」
カズヤはボヤキながら、依頼用紙をめくる。
志希はカズヤの言葉に顔を歪め、何とも言えない表情を浮かべる。
しかし、二人の話を聞いていたイザークは静かに口を開く。
「いずれ受けるかもしれないとは思っておけ。仕事が無かった場合、手を出さざるをえまい」
イザークの言葉に志希はますます嫌そうな表情を浮かべるのだが、

彼は言葉を撤回しない。
志希自身も理解している。
賊退治とは、一般の人間を襲う犯罪者を捕縛ないし処罰する事だ。
それらの人間は基本的に騎士団や、警邏隊が相手をする物だ。
だがしかし、騎士団や警邏隊に届け出しても手が回らず、どうにもならないとなった時にはギルドに討伐依頼が来る。
そうなった時には、傭兵経験のある冒険者が優先で事に当たることが多い。
何故かと言うと、人間や妖魔と戦った経験がある方が対人戦では有利になるからだ。
傭兵経験を買われてイザークとカズヤが招集された場合、必然的に志希達も行く事になる。
「でも、そうそう賊退治の依頼なんて来ないから大丈夫よ」
ミリアはそう言って、志希の肩を叩く。
「あ、うん」
励まされたのだと分かった志希は、一つ頷く。
人間の被害以上に、魔獣や妖魔の被害の方が多いのが現状なのだ。
だがそれでも、人間と争う可能性は依頼によっては高くなる。
何せ、賊の類は多い。
冒険者ギルドで言う盗賊は盗みを行うのではなく、潜入と探索を主としたどちらかと言えば密偵の様な職業だ。
近年スカウトに名前を変えようと言う動きがあるらしいが、長年使われてきた名称の為それが難しいらしい。
基本的に冒険者ギルドに所属する『盗賊』以外の盗賊は、犯罪者である。
冒険者証を持った盗賊が盗みをする為に家に入ると、犯罪行為を行ったとしてかなり厳しい罰則を与えられる。
その為、冒険者の『盗賊』は余程でない限り犯罪に手を染める事がない。
しかし、それ以外の盗賊や賊と名のつく者たちは闇に潜み人を狩

ったり盗みをして生計を立てる。
たまに魔獣と渡り合える冒険者崩れが群れになり、山中で根城を作って人を襲うと言う事もある。
その山中に足を踏み入れれば、必然的に戦う事になる。
だからこそ、戦うかもしれないと言う覚悟は常に持って居なくてはいけないのだ。
志希はそう思いながらも、人と戦うのは嫌だと感じていた。
それはやはり、志希の世界の倫理観を持っているからだ。
基本的に人を傷つける事、動物を傷つける事は悪だとされてきた。
この事を鑑みれば、志希が人や動物を間接的に傷つけてしまう事に忌避感を持つのは当たり前である。
しかし、この世界ではそんな事を言ってはいられない。
死活問題が掛かっている以上、何としてでもある程度は慣れなくてはいけないのだ。
「そう肩に力入れんなって。なぁ？」
「ああ」
カズヤのフリにイザークが頷き、ふっと手を止めて依頼用紙をみる。
「これはどうだ？　ここから七日ほどかかるが、そこそこの強さだ」
イザークはそう言いながら、依頼用紙を示す。
「ん～……何々。アイワナ山の辺りにレッドウルフの群れが住み着いたのか。しかし、珍しいな。レッドウルフとは」
カズヤは示されたその用紙の内容を読み上げつつ、感想を零す。
「レッドウルフはもう少し南の方が生息地ですから、こんな所に来るなんて本当に珍しいです。何かあったのでしょうか」
アリアはカズヤの呟きに同意しながら、考えるようなそぶりを見せる。
「まぁ、何にせよ。わたしはレッドウルフ退治で異議は無いわ」
ミリアは考え込むアリアの隣で賛成の意を示し、皆の動きを見る。
「あ、わたしも異議はありません」

慌ててアリアもミリアの意見に頷き、イザークとカズヤ、志希を見る。

「もちろん、私も無いよ」

志希もまた同意し、イザークは了承したと頷いて依頼用紙を持って受付へと移動する。

その間にと、アリアがこれから退治する魔獣の説明を始める。

「レッドウルフは、結構強めの敵です。炎系の魔法は抵抗されやすいですし、毛皮がかなり厚いですから斬るのも大変です。毛皮の色が赤く、また炎属性の魔法に対する抵抗が高い為レッドウルフと言う名前をつけられたそうですよ」

アリアの説明に、志希はこくこくと頷く。

未だ知識を識っていても直ぐ様引き出す事の出来ない志希は、アリアや受付のミラルダの説明を大人しく聞く癖が付いている。

「あと、レッドウルフの毛皮はかなり良い値で売れるから、倒したら出来るだけ綺麗にはぎとって持ち帰るのが主流なの。防具として加工する事も出来るけど、レッドウルフの鮮やかな赤い色って言うのが貴族とかに凄い人気なのよ」

ミリアはそう言ってから、どこか自嘲気味に笑う。

「どれだけ上等な毛皮を身につけるかって言う事で貴族の令嬢や子息、ご婦人や当主まで躍起になるほどなのよ。バカみたいよね……」

いつにないミリアのその様子に、志希は思わず困惑してしまう。

カズヤも同様に困惑した表情を浮かべ、どう声をかけるかを迷っていると。

「姉さん、話の腰を折らないでください」

アリアは苦笑浮かべながらミリアに呼び掛けると、彼女ははっとした表情をしてから直ぐにいつもの明るい表情に戻る。

「ごめんごめん。それよりシキちゃん、わたし達と今度服を買いに行かない？　女の子なんだから、もう少し可愛らしい服を着ても良いと思うのよ。もちろん、安くてそれなりに良いお店を知っているから、安心して」

ミリアの唐突な誘いに、志希は違和感を覚えて戸惑う。
だがしかし、実際問題志希はそろそろ新しい服が必要かもしれないとは思っていた。
以前イザーク達と買った服だけだと実用一辺倒で、女の子としての華やぎが無いのだ。
無論、冒険者である以上華やかさとは無縁だ。だがしかし、下着が物凄く実用的すぎて何となく悲しいのだ。
服がどうにもならないのなら、見えない所である下着を少しで良いから艶やかに装いたいのである。
また、あまり肌に合わないのかたまに下着でかぶれたりもしていたので、大変ありがたい申し出なのだ。
なので、違和感から目を逸らす事にする。
「う、うん。行きたいかな……」
志希の若干控えめな返事に、ミリアは目を丸くする。
どうやら、乗ってくれるとは思わなかったらしい。
「それじゃ、この依頼が終わってからにする？　それとも、イザークに頼んで少し出発を遅らせてもらう？」
うきうきと嬉しそうに顔を輝かせ、ミリアが言う。
「姉さん……もう受けちゃっているんですから、後回しにするのは良くないですよ？」
呆れたアリアの言葉に、ミリアは残念そうな表情を浮かべる。
「そう、よね。残念だわ」
ほんの少しだけ拗ねたように言うミリアは、先ほどの違和感など無かったようにふるまっている。
それに対して突っ込みたい志希なのだが、自分も色々と抱え込んでいる事を考えれば言いだす事は出来ない。
自分の秘密を言えないのに、相手の秘密を教えてくれと言うのははやり非常識だからだ。
だから、志希は笑顔を浮かべて頷く。
「うん、残念。可愛い服とか見るの好きだしね」

「見るだけなんて、勿体無いですよ。志希さん可愛いんですから、もう少しお洒落しても良いんですよ？」
アリアがそう言って、もうと腰に手を当てる。
志希はうっとつまり、次いで不思議そうに首を傾げる。
「そうかな？」
「そうよ！」
「そうです！」
双子に物凄い勢いで肯定され、志希は気恥ずかしくなりどうにかしてもらおうと思わず周囲を見回す。
そこで初めて気が付いたのは、カズヤの位置だ。
何とも言えない表情で若干距離を取り、三人を眺めている状態だ。
カズヤは志希の視線を感じたのか、視線を逸らせつつ口を開く。
「レッドウルフの話……あれだけで良いのか？」
カズヤの声は、物凄く小さい。
どうやら、女の子三人のかしましい会話に割り込むのが気恥ずかしい様だ。
カズヤのその疑問に対し、はっとした表情を浮かべるのはアリアだ。
「あ、そうですね。カズヤさん、ありがとうございます」
まだレッドウルフに関する話が終わっていなかったらしい事に、二人のやり取りで気が付いた志希。
内心、物凄く助かったと思いながら問いかける。
「レッドウルフはまだ、何かあるの？」
志希の問いかけにアリアは苦笑し、眼鏡を少し指で押し上げる。
「実は、あまり詳しい事は分かっていないんです」
アリアの返事に、志希は拍子抜けした表情を浮かべる。
「そうそう、毛皮の色が鮮やかであれば強い位しか分かっていないの。魔獣の事が書かれているのは、だいたい古代魔術師の研究資料くらいしかないしね」
ミリアの説明に、志希は成程と頷く。

現在の魔術師で、魔獣に関する生態系を研究している物が居ないらしい。
「魔獣の事を調べる為には、巣穴を探したり色々としないといけないから大変なのです」
それ以上に研究費が足りなくて、手を出す人が居ないのが現状なのだろう。
魔獣の生態系を調べる為には、恐らく檻に入れて飼育しなくてはいけない。
その檻だけではなく、飼育や維持費に一体どれだけかかるか分からない。
資金その物を工面するのが難しいのだ。
「説明は終わったか？」
イザークが若干うんざりした表情で声をかけてくる。
どうやら女の子三人で話をしている間に戻ってきたようで、話題の切れ目を狙って声をかけて来たようだ。
「あ、はい」
こくりとアリアは頷き、背筋を正す。
「ごめんなさいね、お話が長くなっちゃって」
ミリアは苦笑しながらイザークに言い、志希の背中を押す。
「わわっ」
驚いた声を上げる志希を無視して、ミリアは彼女をイザークに押しだす。
「それじゃ、支度をしていつもの宿に集合する？　それとも、西外門前？」
ミリアの問いかけに、イザークはやや不機嫌そうに口を開く。
「レッドウルフ退治なのだが、出来れば皮も持ち帰ってこいとの事だ。その分、報酬を上乗せしてくれるらしい。その為、今回は馬車を借りての出発になる」
イザークの言葉に驚くのはカズヤだ。
「マジかよ。群れだったら何頭分あるかもわかんねぇんだぞ……そ

れを出来るだけって冗談じゃねぇ。皮を剥ぐのとかだって、すげぇ重労働じゃねぇか」

カズヤが猛烈に文句を言うが、イザークは緩くかぶりを振る。

「譲歩は無し、だそうだ。どうやら依頼のあった村からの追加注文らしい」

イザークの言葉に、カズヤは思わず顔を顰める。

「依頼用紙に書けよなぁ、そう言うの」

カズヤの嫌そうな言葉に。

「書いたら、誰も受けてくれないからでしょう？」

ミリアはそう言って、肩を竦める。

「何にしても、毛皮の全部を引き渡すわけじゃないなら数枚は別にしても良いかもしれないわね。寒い地方に行けば高く売れるし、何より外套にしたら凄い暖かいし。シキちゃんみたいな色の白い子だったら、凄く似合うだろうし！」

志希の思わず呟く言葉に、ああとカズヤが笑う。

「い、いや……依頼品を着服するのはどうかと思うんだけど」

「出来れば、だから別に良いんだよ。多分、最低何枚って言うのが決められてるはずだからな。それ以上採れたら、採った人間が好きにして良いんだ。そうじゃないと、横暴だって話が出るからな。無論、多く採った分も全部提出する方が、ギルドの評価が高くなるけどな」

「そうそう。まして、外套はともかく防具として加工した場合かなりの良質品になるレッドウルフの皮はかなり貴重なの。だから、少しちょろまかして革鎧を作る冒険者も多いわ」

ミリアはそう言って、いたずらっ子のような表情で笑う。

「冒険者としては、依頼を達成するのも大事だが自身の身を守る物を手に入れるのも大事だ。ギルドもその辺りを理解しているが故に、規定枚数を決めてそれ以上の物は冒険者に扱いを委ねているのだ」

身を守る物が良い物であればある程、生存率が上がるのだから。

イザークの言葉に、志希は頷く。

志希の真剣な表情にイザークは一つ頷き、口を開く。
「今回の依頼の主眼は、レッドウルフの退治だ。全滅させる方が望ましいらしいが、今根城にしている所から追い出すだけでも良いらしい。その際、出来れば綺麗な毛皮を五枚は欲しいらしい」
正式な依頼内容を語るイザークに、全員顔を顰める。
「随分と無茶言うんだね……」
レッドウルフを倒して、なお且つ傷が少ない毛皮を欲しいという言葉には無理難題を押し付けているとしか言いようがない。
毛皮を綺麗な状態で剥ぐためには、やはり出来るだけ傷をつけないようにするのが一番だ。
しかし、この世界には銃などと言う物はない。
剣で斬ったり魔法を使って倒すとなると、綺麗な毛皮を作ること自体が難しいはずだ。
志希はそう思ったが、直ぐにそれを否定する知識が浮く。
そもそも魔獣を倒すこと自体が大変で、傷を最小限に留めたとしても志希の世界ほど美しく採る等と言う事は出来ないのだが、腕の良い魔術師と戦士なり盗賊なりが居れば別だ。
眠らせて、一撃で殺す事が出来れば最小限の傷で済ませる事が出来るのだから。
しかし、そこまでの腕を持たない人間の方が多いので、依頼のついでで頼まれる場合はそこまで気を払わないのが普通だ。
むしろ、気を払っている方が危険である。
「副次的な依頼だからよ、難しく考えんなって。まぁ、馬車の貸し出しがあるって事はたくさん採って来いって言う無言の圧力なんだろうけどな」
カズヤの言葉に、全員何とも言えない表情を浮かべて頷く。
「取り敢えず、最も大事な事は命を落とさず帰ってくると言う事だ。それだけは忘れずにいろ」
イザークはそう言って、立ち上がる。
「手続きは既に終えているが……馬車の準備が明日の朝にならなけ

れば出来ないらしい」
イザークの言葉に、ミリアは頷く。
「分かったわ。それじゃ、シキちゃん一緒に買い物へ行けるわね！」
嬉しそうな表情で、ミリアは志希を見る。
「あ、うん……そうだね」
いきなり振られて一瞬驚くが、直ぐに頷く。
新しい下着が欲しいと言う気持ちがあるので、志希としては嬉しいお誘いである。
「それじゃ、わたし達とシキちゃんはちょっと買い物に行ってくるわ。イザークとカズヤに、後お願いするわね！」
ウキウキとした様子で、ミリアは志希の手を引き歩きだす。
「わわっ、ミリア足速いよ！」
「善は急げよ！」
物凄い嬉しそうな声音のミリアと、引っ張られて慌てている志希の声がギルド内に響く。
その声でアリアは正気に戻り、イザークとカズヤに頭を下げ、姉と志希の後を追って駆け出す。
後に残されたイザークとカズヤは、顔を見合わせてから嘆息を零すのであった。

第三十三話

ミリアに連れられて歩く志希は、思わず唖然とした表情を浮かべてしまう。
現在、ミリアと共に歩いている道は志希がいつも歩いている庶民派の店が並ぶ通りではない。
所謂上流階級、成功した商人や貴族たちが住む住宅街に足を踏み入れているのだ。
「み、ミリア。何でこっちの通り歩いてるの？」
志希の疑問に、ミリアは満面の笑みを浮かべて口を開く。
「それは、この通りにいつも利用している店があるからよ」
ミリアの返事に、志希は困った表情を浮かべる。
「いやでも、私そんなにお金持ってないよ？」
困惑した志希の言葉に、アリアがああと頷く。
「大丈夫ですよ。貴族街にあるお店ですが、凄く良心的なお店なんです」
笑顔で告げられるが、志希は激しく不安である。
一見さんである自分まで、安くしてくれるかもわからない。
それ以上に、手持ちのお金が激しく不安なのだ。
それじゃ無くても受けた依頼の一部は借金の返済としてイザークに渡しているのと、少しお金をためるべきだと思ってお金を手元に置いていないのである。
少し引き落としてから向かうべき場所なのではないかと戦々恐々とする志希を引っ張り、ミリアとアリアは目的の店の前に立つ。
重厚な木製の扉の横には、服屋である事を示す看板が掛けられている。
茶色いレンガと瓦で出来た店は落ち着いた雰囲気で、高級感をひしひしと感じられる。
見るからに立派な店構えの服屋に、志希は声なき悲鳴を上げる。

自分がこの店に入るのは間違っていると断言できるほど、物凄い品位を感じさせるのだ。
「ミリア、アリア。無理、絶対に無理」
志希は焦った声で訴えるが。
「大丈夫、大丈夫。ここの店は本当に物は良いけど、安めだから。それもきちんと理由あるから、変な店じゃないわ」
「そうですよ、シキさん。わたし達はここをよく利用しますけど、そんなに高いわけじゃないですから」
ミリアとアリアが笑顔で志希の手を引き、扉を開いて店内へと足を踏み入れる。
足を踏ん張って嫌がるの子供にしか見えないので、諦めて渋々中に入る。
瞬間、店員が一斉に開いた扉の方を見て丁寧に頭を下げた。
お得意様が来た、と言った彼等の様子に志希はますます体を小さくする。
「これは、お久しぶりでございます」
奥から来た女性店員は、恭しく頭を下げてミリアとアリアに歓迎の意を示す。
「そうね。ここ最近、こちらには寄らなかったから」
ミリアの言葉にアリアも頷き、口を開く。
「今日は、わたし達の分とこちらの方の服を数着と下着を見せてもらいに来ました。一緒に見せていただけますか？」
「はい、お任せくださいませ」
女性店員は笑顔で頷き、優雅に奥へと案内をし始める。
志希は初めて入る店内におどおどしながら、既製品として出来上がっている服や棚に置かれた生地を見て若干血の気が引く。
どれも、見ただけで分かるほど高級品だからだ。
下手に触ると汚れて、弁償しなくてはいけない羽目になりそうで怖い。
そんな志希の気など知らずに、ミリアはウキウキと話しかけてく

る。
「ねね、シキちゃん。その首飾りと合わせて、正装を一着仕立てない？」
「姉さん、正装はまだ早いです。併せて着たのを見てみたい気持ちは分かりますけど、シキさんはまだ成長するんですから、必要になった時に仕立てれば十分です」
ミリアとアリアの言葉に、志希は思わず突っ込みを入れる。
「いや、そもそも正装なんて仕立てても使う場所ないって」
志希の突っ込みに、ミリアが人差し指を左右に振る。
「そんな事はないわ。有名になれば、貴族の舞踏会に招かれたりするのよ？　もしかしたら、王族とも謁見したりするかもしれないし。持っておいて損はないわ」
ミリアの言葉に、志希は胡乱とした表情を浮かべる。
「いや、でもまだ冒険者の初心者だし」
「そうですよ、姉さん。早いったら早いです。それよりもまず普段から着ている服をもう少し女の子らしくするべきです」
志希の言葉に乗り、アリアが力説する。
「……まぁ、そうかもね。シキちゃん実用一辺倒なんですもの。髪も無造作に束ねているだけで、ちょっと勿体無いわ」
アリアの言葉に乗り、ミリアがうんうんと同意する。
そこに、前を歩いていた店員が足を止めて声をかけてくる。
「本日も、こちらの方でよろしかったでしょうか？」
店員が手で促した先は、やはり質の良い上等な生地とそれらで仕立てられた既製品が並ぶ一角であった。
しかし既製品は実用的な物で、ドレス等では無くごく普通のシャツやズボンが並んでいた。
「ええ、ありがとう。下着もいつも通りでお願いね」
ミリアは店員にそう声をかけ、志希の手を引っ張る。
「それじゃ、色々と見立ててあげるわね！」
「いや、自分で出来るって！」

志希は思わず抗う声を上げるが、ミリアは既に構っていない。
ウキウキした足取りで、楽しそうに服を選び始めている。
一方で、アリアは店員を呼びとめ何か交渉をしていた。
「ついでにリボンや髪飾りを何点か持ってきてください」
「かしこまりました」
人見知りをしがちなアリアが、店員にそう注文をつけているのが聞こえたがそちらを見る前にミリアから服を押し付けられる。
「これとこのセット、試着してみてくれるかしら？」
満面の笑顔で言われ、志希は思わず頭を上下に振る。
「あ、ついでに体のサイズを測ってもらいましょうね。綺麗な胸してるんだから、出来るだけ体に合った下着をつけるべきよ」
志希の意を介さず、そんな事を言い出すミリア。
正論と言えば正論なのだが質の良い下着は値段が高い為、志希には到底手が出ない。
「だから、私の手持ちはそんなにないんだよぉ～」
必死に訴える志希に。
「ご安心ください、お客様。こちらも様々な努力をしておりまして、現在こちらの品物を含めて低価格でご提供できるようになっております」
にっこりと笑い、店員が言う。
「あ、そうなんですか」
志希は思わず頷き、おずおずと長袖のシャツを一枚だけ手に取る。
さらりとした良い手触りに、志希は元の世界にあった絹やサテンを思い出すが微妙に違う。
さわさわと手触りを確認しながら、伸縮性を確認するように少しだけ引っ張ってみたりしていると。
「あら、シキちゃん良い物に目をつけたわね」
と、ミリアが笑いながら言う。
その手には色々と見回って帰って来たのか、両手一杯に服を持ちながら志希が持つ服を見て笑みを浮かべる。

「試着するなら、こっちに試着室あるからいきましょう？　あと、悪いけどシキちゃんの体のサイズを測って頂戴ね」
「はい、かしこまりました」
志希に対するよりも若干緊張した仕草で、店員は頭を下げてミリアの手から服を受け取る。
「さ、お嬢様。こちらへどうぞ」
志希が手に持っていた服と、同じ形で色違いの服も手に持ち店員は試着室へと志希を案内する。
特に試着する気も無かったのに、いつの間にか試着する事になっていて志希は驚愕するが直ぐに諦める。
ご機嫌のミリアとアリアの二人は、楽しそうだ。
自分は若干疲れてきてはいるのだが、親睦を深めるのならこれも良いだろうと言う思いもある。
そこでふと、アリアが不思議そうな表情を浮かべて志希の額を見る。
「シキさん、額の布は取らないんですか？」
アリアの問いかけに、志希はぎくりと体を強張らせる。
額にあるのは、『神無の鳥』の証し。
唯一、人と違うモノであると明確に知らしめるものだ。
「うん、まぁ……傷があるから」
志希は取り敢えず、そう誤魔化す。
傷があるから見せられない、晒さない。
女性で、しかも見えやすい位置に傷跡があるのなら普通は無理強いはしない。
「……わたしの力で、癒した方が良いんじゃないかしら」
ミリアの言葉に、志希は頭を振る。
「無理だと思うから、良いよ」
治癒魔法は、万能では無い。
余りにも酷い傷であった場合、跡が残るのも珍しい事ではない。
ただし、高位の治癒魔法にはそれらの跡を消しさる物もある。

その分神殿などに多額の寄付を納めなくてはならなくなる為、顔に傷があっても癒す事は貴族や王族、お金持ち以外には出来ないものだ。

「それに、私の技量が上がれば生命を司る精霊に消してもらう事も出来るから、安心してね」

それを目標としていると言う素振りを見せると、ミリアは渋々頷く。

「分かったけど……どうしても気になるなら言ってね。わたしは無理でも、侍祭様にお願いすれば直ぐにでも癒してくださるから」

ミリアの気遣いに、志希は笑みを浮かべて頷くと。

「それなら、ボトムに合わせた布を額に巻くのも良いとおもいますよ？」

アリアはそう言いながら、店員を促している。

「さ、お嬢様。採寸いたしますのでお召し物を脱いでただけますか？」

店員は笑顔で言い、志希はぶんぶんと頭を振って拒否を示す。

だがしかし。

「あら、ダメよシキちゃん。きちんと採寸しないと、体にぴったりした下着が作れないわ」

ミリアがそう諭し、隣にアリアがうんうんと頷く。

「そうですよ。恥ずかしいと思いますから、わたし達は他にも服を選んで来ますね」

満面の笑みで二人は店内へと去って行き、志希は引きつった表情で店員を見る。

「さ、お召し物を」

店員からの念を押す言葉に、志希は項垂れ諦めて服を脱ぐ。

「下着もお脱ぎください」

「……はい」

恥ずかしい訳なのだが、向こうはお仕事だと自分に言い聞かせて渋々下着も脱ぐと、女性店員は素早く採寸してくれる。

その後は素早く下着をつけ、ミリア達が手渡してくれる服を着る。
伸縮性に富み、素材は分からないが着心地は中々良いものだ。
良い素材の服を着るのは嬉しいが、試着して本当に良いのだろうかと疑問を覚える。
だがしかし、店員自ら持ってきてくれた服やアリアやミリアが持ってきた物もあるのだ。
更に、店員が気を利かせて下着も運んでくるので、早く試着をして買う物を決めなくては更に服を持ってこられ得るような気がしてくる。
「仕方ないかぁ……」
小さくぼやき、手早く服を着て試着室から出る。
「ああ、良いですね！」
「うーん、でも……もう少し明るい色の方が良いんじゃないかしら」
ミリアとアリアの反応の違いに志希は思わず苦笑し、首を傾げる。
「取り敢えず、試着してくるけどあんまり服は持ってこないでね。全部買えるわけじゃないからさ」
志希の言葉に、はっとした表情を浮かべる双子。
「あ、ごめんなさい」
慌てて頭を下げるアリア。
「でも、試着をするのはタダなんだから気にしないで着倒せばいいのよ。だから、似合うと思った服は持ってくるわよ？」
ミリアはにっこりと笑い、そんな事を言い出す。
志希は胡乱とした表情を浮かべるが、ミリアは楽しそうだ。
「……まぁ、そうですよね。ついでに、わたし達の服も選んで来ますから、あまり気にせず服を選んでください」
アリアは一瞬考えるようなそぶりを見せたが、直ぐに姉の意見に賛成して笑顔で志希に告げる。
「う、うん。分かった」
志希は頷き、次の服に着替える為に試着室を仕切るカーテンを閉める。

何着か置かれた服を見て少しだけ嘆息して、志希は着替えを始めるのであった。

第三十四話

翌日の早朝から、志希達のパーティは冒険者ギルドで幌馬車を借りてレッドウルフが根城にしている山へと向かっていた。
御者を務めるのはカズヤで、イザークは馬車の中で腕を組んで目を閉じている。
ミリアとアリアもまた、馬車の中で思い思いの場所に座って本を読んだり祈りを捧げたりしている。
志希はと言うと、幌馬車の端っこに寄り外の風景をぼんやりと眺めながら昨日の事を考えていた。
ミリアとアリアは、普通の女冒険者が足を踏み入れるには二の足を踏みそうな場所にある高級感あふれるお店に堂々と足を踏み入れ、慣れた様子で店員に話しかけていた。
更には気後れする志希を引っ張り、アリアとミリアは楽しそうに服を選んで持ってきたりしてくれた。
そのおかげで手ごろな値段で生地も良い下着と服を数着購入する事が出来たのだが、志希はアリアとミリアに対する店員の態度に疑問を抱いた。
何故かこの二人の接待をする店員は、上流階級の人間に接するような態度をとっていたからだ。
ミリアはともかく、人見知りが激しいアリアもそれを当然としていて、物凄く腑に落ちなかった。
同時にアリアとミリアに対する疑問や、聞いてみたい事が浮かんでくる。
何故、ミリアはアンデットキラーへの道を選んだのか。
何故、アリアはそのミリアを支援するように動いているのか。
そもそも、アンデットキラーであるミリアは冒険者などと言う職に就く必要はないのではないか。
アリアとて、魔道具の研究もあるはずなのになぜ冒険者主体で動

くのか。
志希の疑問は尽きない。
しかし、それを口に出して問う等と言う事は志希には出来なかった。
人間、誰でも隠しておきたい事はある。
特に志希は彼女達に対して秘密にしている事がある為、余計に聞きづらく感じている。
小さく嘆息し、改めて外を眺めていると。
「そういや、アリアは保存の魔法使えるのか？」
と、カズヤが御者席から声をかけてくる。
「あ、はい。大丈夫です！」
アリアが元気に返事をして、笑顔を浮かべる。
一番最初の一件以来、アリアのパーティ内での活躍は目覚ましい。
元々それなりに優秀であろうと言うのは見て取れていたのだが、本格的に組む事になってからは重要な場面でしっかりと前衛をサポートしてくれていた。
それが自信に繋がっているのか、最近の彼女は以前あったおどおどするような雰囲気が鳴りを潜めていた。
そこに、ミリアが自慢げに口を開く。
「アリアの魔法の腕は信用してくれて大丈夫よ。塔の学院の一級特待生だから、知識量も豊富だしね」
「うは、マジか！？」
思わず驚きの声を上げるカズヤ。
志希も目を丸くして、アリアを見る。
特待生とは、学費や研究室の維持費を払わずにいられる魔術師の事である。
なお且つ、一級特待生は将来を有望視されており、一級特待生となった魔術師の殆どは宮廷魔術師や、塔の学院やその分校の長となる者が多いのだ。
「はい」

カズヤの言葉に若干照れながら、アリアは頷く。
「でも、姉さんも凄いんですよ？　未熟って言われてますけどアンデットキラーとしての技量は、姉さんの年齢ではありえないぐらい高いと言われています。何より、姉さんは女神エルシルの……」
「そんなに褒めても、何も出ないわよっ！」
アリアの言葉を遮り、ミリアはふいっと横を向く。
一瞬だけ見えたミリアの眼には、複雑な光がともっていた。
嬉しさと、怒り。
アリアはそれに気が付いたのか、思わず口を押さえてしまう。
これだけで、この二人に何か事情がある事がうかがえる。
そう思うが、志希は口を開く事なくアリアとミリアを見る。
何故か重い沈黙が横たわり、口を開かぬ方が良いと思ってしまうからだ。
しかし、このままなのは余り良くはない。
そう思った瞬間。
「神官戦士にしてアンデットキラーならば、女神の加護が厚いのは当然だろう。しかし、一級特待生で冒険者をする者などそうはいまい。俺達は運が良いな」
イザークがそう言い、ほんの少しだけ重くなった空気を軽くする。
志希はその事にほっと安堵の息を吐き、うんうんと頷く。
「そうだね。二人とも凄いよね」
ミリアの戦闘技術はかなりの物があり、イザークとそれなりに良い試合が出来るほどだ。
女性の身でありながら、ミリアはかなりの修練を積んでいるのが分かる。
「シキちゃんもイザークも、褒めても何も出ないわよ」
今度は本当に照れているのか、恥ずかしそうな声音で言われた。
「それに、アリアの方が絶対に凄いわ。技量の問題があるけれど、知識として既にほとんどの魔法はその頭に入ってるから」
ミリアは話題を変えたいと思っているのか、それとも妹自慢がし

たいのかはわからないがアリアの事を口にする。
言われたアリアは恥ずかしそうな表情を浮かべ、ぶんぶんと頭を振る。
「知識は知識でしかありません！　新しい魔法を編みだしたりもまだできませんし……わたしはまだまだ未熟です」
アリアの言葉に、カズヤが何とも言えない表情で口を開く。
「いや、知識を蓄えられるってのも十分すげぇぞ？　応用するのも出来るみてぇだし、天才って奴なんだろ？」
カズヤの問いかけに、ミリアは頷く。
「ええ、学院では天才って言われているわ」
「ですから、そんなものじゃありません！」
アリアはミリアとカズヤに両手を握り、違うと力説する。
そんなアリアを胡乱とした表情で見ながら、志希は小さく嘆息する。
新魔法構築は一部の上級魔術師達でも難しいと言うのに、まだ出来ないと言う台詞はいずれ作る事が出来ると言っている様な物である。
素直に感心したいが、自分がまだまだ未熟であると分かっている志希は若干の羨ましさと妬ましさを感じる。
一度魔術に関する知識を掘り起こせば、アリアと同じくらいかそれ以上の知識を得られる事は知っている。
だが、一人で何でもできるようになると言うのは、実はとても寂しい事だと志希は思っていた。
一人で何でも出来るなら、パーティを組む意味がなくなる。
同時に、自身の特異性を前面に押し出す事になり、人付き合い自体が難しくなる。
人間とは基本、一人で生きていけるほど強くはない。
志希は既に人と言うには難しい存在になって入るが、その精神は未だ人の範疇に入っている。
だからこそ、自分が人と違う部分を隠して人との繋がりを求める

のだ。
殺されるのも、孤独になるのも嫌だ。
我がままと言われようとも、それが志希の本心なのである。
小さく嘆息し、膝を抱えてぼんやりと流れる景色を見る。
アリアが妬ましく思い、羨ましく見えるなら彼女と同じくらいの努力をするべきだと志希は思う。
そもそも、努力もせずに“力”と“知識”を手に入れている自分には他人を妬む権利は本来ないのだ。
しかしそれでも、きちんとした形で身につけているアリアやミリア、イザークやカズヤが酷く羨ましく感じる。
そうして、そんな事を考えてしまう卑屈な自分に志希の気持ちが落ち込んでいく。
志希のその気持ちを察知した精霊達は、志希の周囲に集い励ます様に慰撫するように触れてくる。
精霊達のその優しさに、志希は思わず涙ぐむ。
鼻を鳴らさないよう、自分が落ち込んでいる事を気付かれないようにしながら志希が息を吐くと。
「馬車から見る景色は、珍しいか？」
と、いつの間にか直ぐ側に移動してきていたイザークが問いかけてくる。
気配も感じ取れなかった志希は物凄く驚き、肩を跳ね上げる。
だが、振り向くのだけは堪える事が出来た。
今振り返ってしまえば、泣きそうになっているのがイザークにばれてしまう。
心配させたいわけではないし、自分が心を弱らせているのは知られたくない。
何より、ミリアとアリアに知られれば余計に自分が惨めになってしまいそうだ。
「う、うん」
なんとか頷き、志希はなんとか平静を装う。

「そうか……余り身を乗り出すな。落ちるぞ」
「うん」
イザークの言葉に頷きながら、志希はなんとか取り繕えた事に安堵をして息を吐く。
すると、彼はそんな志希の頭をポンポンと撫で、それからそのまま腕を組んで目を閉じる。
その仕草だけで、志希の気持ちに気が付いていた事が分かる。
同時に、言葉ではなく側にいる事で慰めてくれている事も、志希は理解した。
思いもよらぬ方法で慰められ、志希の眦から涙が零れる。
何故か胸が詰まり、衝動の様に溢れる涙に戸惑いながらイザークに感謝をする。
言葉にするだけが、慰めではない。
ただその仕草で、思い遣りで示す慰めもあるのだ。
ボロボロと溢れる涙を拭い、志希は気持ちを強く立て直す。
このままイザークやカズヤ、ミリアとアリアによりかかるだけの人間にならないように努力をして行かなくてはダメだと。
努力で手に入れた物ではないから、と言い訳だけするのではダメだ。
少しでも何かを学び、前に進んで行かなくては己が腐ってしまうと志希は直感する。
周りにいる人間は、それぞれの才を花開かせる為に努力をしてきている。
ならば、自分も自分が選んだ道の才能を花開かせて行かなくてはならないのだ。
ギュッと拳を握り、志希は頷く。
気合を入れて、これから自分が皆の役に立てる為に“知識”を少しでも引き出し、なお且つ精霊使いらしく成れるように勉強をしようと決意する。
また、アリアやミリアともっと腹を割って話し合えるくらいの

信頼関係を築けるように、自分からも努力をしようと誓う。
志希の慰めの為に集った精霊達も応援するように声を上げ、賑やかに騒ぎ始める。
彼等の励ましに応えるように、志希は大きく頷き。
「頑張るぞー！」
と、外に向かって大きく叫ぶ。
満足げにうんうんと頷く志希は、気が付かない。
直ぐ側にいたイザークはともかく、アリアとミリア、そしてカズヤが驚いて彼女を見ていた事に。
その後はやたらに微笑ましい物を見たと言う笑顔を向けられ、うんうん頷かれた事も気が付かないまま精霊達と外を眺めているのであった。

第三十五話

街を出発してから四日ほど経ってから、アイワナ山の麓に到着した。

一定の距離での移動が出来る馬車を使っていたからこそ、本来七日の道程を短縮できたのだ。

道中魔獣や獣などに襲われた事もあり、本来の馬車の早さからみれば少々遅いのだが五人は気にしていない。

依頼を受けてから二十日ほどの期限が設けられているので、日程以内に依頼を達成してギルドに帰れば良いだけの話なのである。

麓に到着してからある程度周囲を見て回り、拠点を決めると同時にアリアが懐から袋を取り出す。

それは馬車を置いて移動する際に、馬の世話や馬車の番をするゴーレムを作る触媒である。

「それじゃ、世話ゴーレムと護衛ゴーレム作りますね」

アリアは袋の中から小さな硝子の玉を取り出す。

それを地面に置き、杖で二度地面を叩く。

「土で身を作り、我らの意に従い形を作れ」

アリアの言葉に応じるように硝子玉が地面に沈み、次の瞬間には土で出来た人形が体を起こす。

片方は人間の成人男性ほどの身長の人形で、もう片方は馬車よりも若干大きい位の人形だ。

「それじゃ、帰ってくるまで馬車と馬のお世話を頼むわね」

ミリアの言葉に、二体のゴーレムは頷くようなそぶりを見せる。

簡単な思考能力や必要最低限な知識を刻まれている為、呼び出した人間とその周囲の人間を識別する事が出来る。

同時に、彼等の命じた事を理解しそれに沿った行動が出来るのである。

馬の世話と言われた場合、馬車から外して草を食べさせたり眠る

時の邪魔をさせない為に馬車と繋がっている金具を外したりする。
護衛は、彼女たち以外の動物が寄ってきた場合には追い払うと言う意味がある。
ちなみに人間も動物に含まれるため、志希達のパーティ以外の人間が近寄っても追い払われる結果となる。
また、この護衛ゴーレムにしても世話ゴーレムにしても両方のゴーレムは壊された場合、核を壊されても欠片に至るまで壊した人物の姿を記録するように出来ている。
核の硝子玉を壊しても、自身の姿を記録されないようにするのは不可能なのである。
ちなみに、このゴーレムの核は冒険者ギルドから馬車の貸し出しがあるとセットで借りる事が出来る魔道具である。
なので、馬車とこのゴーレムが一緒にいるのを見た場合、大概の人間は冒険者ギルドの持ち物だと分かるのだ。
同時にギルドから依頼を受けている冒険者がいる事も分かるので、犯罪者たちが即座に逃げ出す代物である。
「所で、退治した死体から皮剥ぐんだよね。それまで、死体はどうするの？」
志希の純粋な疑問に、アリアが笑む。
「わたしがもう一体ゴーレムを作りますので、そこは安心なさってください」
ゴーレムで死体を運ぶと言う言葉に、志希は若干顔色を悪くする。
どれくらいの群れなのかは分からないが、殺したレッドウルフの死体を回収して暫く傍に置いておかなくてはならないからだ。
本当は、死体その物を職人に渡した方が良いのだが、死体をいくつも持っていく方が手間がかかる。
その為、冒険者は皮の剥ぎ方を先輩や職人から習い自分で剥いで持っていくのだ。
また、動物を解体する事が出来れば狩りをした際に綺麗に肉と皮を分けられるので、意外に重要な技術なのである。

「俺がその場で捌いて、皮だけを持って歩かせる。そちらの方が荷物も少なかろう」
さらりとイザークが言い、志希はますます胸が悪くなる。
つまり、倒したら速攻で皮を剥ぎ固定化の魔法をかけて新鮮なままにするというイザークの宣言なのだ。
「ハードだな」
カズヤも若干嫌そうにしながらも、これも仕事だと頷く。
「シキちゃん、頑張りましょう」
顔色が悪い志希に、ミリアが気遣ってくれるのかそう声をかけてくる。
「うん、がんばる」
これもお仕事だと自分に言い聞かせ、平静を保とうと必死になっていると。
「固定化と一緒に消臭の魔法をかけて血の臭いを消しますから、見ないようにしなければ大丈夫ですよ」
アリアがそう言って、笑顔を向けてくる。
「そ、それならなんとかなる」
うん、と頷く志希。
「血の臭いをさせていると、他の動物や魔獣も寄ってくるからな。こういう時には重宝する」
イザークはそう言って、山を見上げる。
「退治と言うが、何匹倒せばいいのか全く分からんな」
嘆息交じりに呟き、イザークはカズヤを見る。
「巣を探しながら遭遇したレッドウルフを退治する、で良いんじゃねぇ？　オレは狩人の訓練も受けてるからよ、足跡を探して辿るのも出来るしな」
カズヤは役に立つのであればと、狩人の技術も身に着けていた。
その為、動物の足跡の種類をある程度見分ける事も出来る上に、それを辿って巣を探す事も出来るのだ。
闇雲に動くよりも、この様なスキルを持つ人間を一人でもパーテ

ィに入れていると魔獣退治などはかなり楽になるのである。
盗賊と言う職に就く冒険者は、大概同時に狩人のスキルもある程度齧っておく者が多いのは、野外の依頼に便利だからである。
「まぁ、オレよりイザークの方がこのへん得意だけどなー」
カズヤはぼやく様に言うと、イザークをちらりと見る。
振られたイザークはいつもより若干呆れたような表情で、ゆっくりと頭を振る。
「探し物はカズヤの方が早い」
イザークも出来ない訳ではないが、得手不得手を考えれば目端の鋭い人間がする方が良いと意見を口にする。
それを聞いたカズヤが若干憮然とするが、仕方がないと諦めた様に笑う。
「まぁ、良いか」
そう言って、カズヤは山を見上げる。
「取り敢えずは、山の中に入るか。俺が先頭で、イザークがしんがりな。んで、シキは索敵忘れんなよ。他になんかあるか？」
カズヤの問いに、イザークが口を開く。
「道中の打ち合わせ通り、戦闘になった際は木を背後にして戦闘だ。それが出来ない時は、アリアとシキを中心に囲んで陣形を作れ。相手は動物だが、囲みこんで背後から襲いかかってくる可能性が高い」
群れで動く動物は、大概集団で襲いかかってくる。
特に大きな獲物に対しては複数で襲いかかり、攪乱して狩るのが普通だ。
複数人いても、だいたいの動物は囲んで四方八方から飛びまわると言う戦法を取るのが多いので一番非力な人間を守るように陣形を作るのは当たり前である。
「そうね。対多数の戦闘は、危険極まりないものね。壁があるなら、それを背に戦うべきと言うのがセオリーだしね」
ミリアはうんうんと頷き、イザークの言葉に同意する。
「守ってもらっている間に魔術や精霊術で迎撃する、ですね」

道中での打ち合わせを確認するアリアに、志希も頷く。
前に出るのは殆ど期待されていない二人は、それぞれが扱える術を使って攻撃を仕掛けるようにと指示を出されていた。
使う魔術や精霊術は志希とアリアの裁量に任されているのではあるが、志希は事前にイザークとカズヤの二人から釘を刺されている。
最初の遺跡探索の際に使った様な“壁”を作り出す様な、大きな精霊術を使わないようにと。
そもそも、精霊術も魔術も法術も全て術者が持つ魔力と呼ばれるモノを消費して発動する。
大きな術を行使する際には、術者の技量と魔力、精神力の全てを必要とする。
その上精霊術や法術の類の場合は神や精霊と言う存在に力を借りて行使するので、かなり精神力だけではなく集中力も必要である。
だがしかし、志希はそれら全ての工程をすっ飛ばして大きな術を行使できるのだ。
普通の人間にはまず出来ないその所業に、イザークとカズヤが危機感を持つのは当然であろう。
志希は『神無の鳥』で、普通ではない。
余りにも異質な存在は、殆どの人は受け付ける事が出来ない。
この世界には異質な存在としてアルフやアールヴ、ドワーンがいるが彼等は元からいる種族だから人に受け入れられているのだ。
しかし、『神無の鳥』は人が死んで成るモノである事と、現れる間隔がとても長い為知っている人間は殆どいない。
いたとしても、伝承の類と思われて信じる者などいないだろう。
もし信じる事が出来るとすれば、余程長生きしているアルフやアールヴくらいである。
しかし、寿命自体が短くなり始めているアルフとアールヴで、知っているとすればかなりの齢を経た者ぐらいである。
そんなある意味伝説ともいえる種族である志希は、ただ旅をしてみたいと言うのだ。

であれば、余計な人間に目をつけられぬよう出来るだけ人外に等しい力を振るわないようにしなくてはいけない。
自分にそう言い聞かせ、志希は深呼吸を繰り返す。
精霊達は志希の感情の強さに反応して術を発動する為、気持を出来るだけ落ち着けておかなくてはいけないのだ。
そう思ってはいるのだが、時折志希の感情に反応して過剰な力を敵に叩きつけてしまう事がある。
その度にミリアやアリアは何か言いたそうな表情を浮かべるのだが、何も言わずにただ受け入れてくれていた。
その内に話をしようと思いつつ、志希は長棍を握りしめる。
これから山に入ってレッドウルフの退治を始めるのに、いつまでも物思いにふけっていても仕方がない。
もう一度深呼吸して気を落ち着けようとしている志希は、不意に肩を叩かれびくりと体を硬直させる。
「どうした、行くぞ」
イザークが静かに語りかけてきて、それで志希は自分の肩を叩いた人物が仲間である事をやっと理解し硬直していた体が弛緩する。
「う、うん。わかった」
金属とは思えないほど軽い長棍を握り、志希は頷いて前を見る。
その志希の背中を促す様に押しながら、イザークが直ぐ後ろにつく。
前にはいつものようにカズヤと、その左右にミリアとアリアが立って志希を待っている。
「それじゃ、頑張ってお仕事しようぜ」
にっと笑いながら、カズヤがさっそうと歩きだす。
「うん、頑張る！」
志希はカズヤの言葉にそう答え、気合を入れて歩きだした。

第三十六話

アイワナ山の麓にキャンプを張って、既に三日を過ぎている。
この間に分かった事は、レッドウルフは基本巣穴を持たない魔獣である事だけだ。
山の中には結構な数の足跡が残っていたが、巣穴らしき場所を発見できなかった。
それ故の判断である。
なので、山の中を歩き回り単独行動をしているレッドウルフやその他魔獣、襲ってきた獣などを倒しながら探索を続けていた。
だが、どうやらレッドウルフの方も自分達が狩られる側に立っているのに気が付いた様で、単独で行動するのではなく、だいたい二匹から三匹ほどの集団になって行動し始めた。
今日だけでも、既に九匹ものレッドウルフを殺してその皮を剥いで持ち歩いている。
血の臭いも何もないが、未だに毛皮を剥ぐ作業だけは慣れる事が出来ない志希は作業中のイザークから目を逸らし、血の気の引いた顔を泣きそうに歪ませている。
ミリアは魔獣ではあるがその魂が安らかに眠れるように、その骸に新たな生命をはぐくむ土となるように祈りを捧げている。
「これで、今の分は終わりだ」
憮然としながら、両手を真っ赤な血に染めたイザークがアリアに声をかける。
「はい、分かりました」
そう言って、アリアが杖を振り小さく固定化の魔法を唱える。
固定化の魔法は、一度かけると三日ほどは解ける事が無いのだ。
同時に消臭の魔法もかけている為、血生臭さはない。
だがしかし、燃えるような赤い毛皮が血の色にも見えて、志希は長く眺めていると気分が悪くなってしまうのだ。

「シキ、水をくれ」
鮮血を洗い流す為に水を欲しがるイザークに、志希は水袋を取り出し口を開けて彼を見る。
イザークは頷き、手を差し出す。
差し出された手に水をかけながら、じっと血を洗い流されていくのを見る。
透明な水が赤に染まり、音を立てて地面に滴り落ちて行く。
ばしゃばしゃと音を立てながら、イザークが手をこすり水を更に赤く染めつつ口を開く。
「幾分か、血には慣れたか？」
静かな問いかけに、志希は困った表情を浮かべる。
「まだ、ちょっと……」
苦手だと言う表情に、そうかとイザークは頷く。
「こちらに来てまだ一月……いや、二月ほどか。それくらいで二十年余り培ったモノを塗り替える事など出来はしまい」
イザークの言葉に、志希は顔を上げる。
「慌てるな。俺は、お前が許す限り傍にいて護る。ゆっくりと、覚えて行けばいい」
イザークの宥めるような優しい声音に、志希は素直に頷く。
実際、イザークは無理強いはしていない。
冒険に出るのはいつぐらいかと言う話は、皆に確認を取って調整している。
ここのところ過密スケジュールだったのは、志希に経験を積ませるという名目もあったのだろうが、実際は志希自身が望んでいたからだ。
早く足手纏いから脱却したい、という気持ちを汲んでくれていたからこその行動であったのだ。
しかし、戦闘後の死骸から毛皮を剥ぐと言う行為は、志希に思ったよりも衝撃を与えていた。
初日は血の気の引いた顔で必死に目を逸らし、その場で嘔吐しな

いように口を押さえ何も出来なかった。
その日は殆ど食事に手をつけられない状態であったが、翌日からは少量の食事をなんとか摂るように努力していた。
そして、必至で血の臭いに慣れて行こうと言う努力を始めていた。
だがしかし、嘔吐を必死でこらえ、水でイザークの手を洗う手伝いをするのが精いっぱいの様子で、とても志希に皮を剥ぐ作業を教える事など出来ない。
しかし、イザークはこれに関しては余り急いだそぶりは見せていなかった。
志希はそれに疑問を抱くが、問いかける事はしない。
正直、この作業を自分が出来るか自信がないからである。
問いかけてやれと言われたら、卒倒してしまいそうになるだろう。
そんな事を考えていると。
「シキ、終わったぞ」
とイザークが声をかけてくる。
「あ、うん」
志希は頷き、手元の水袋の口を閉める。
それを見ていたイザークは懐から取り出した布で手を拭いて、志希の背中を軽く叩く。
志希がまだ沈んでいるのに気が付いているからか、大きな掌から酷く優しく感じられる。
思わず志希は顔を上げてイザークを見上げると、彼は目を優しげに和ませて見降ろしていた。
その目を見た瞬間、志希の胸が一つ大きく跳ねる。
イザークの普段は冷徹な金の目が、優しく和むと酷く艶やかに見えるのだ。
同時に以前、二人で火の番をした時の事を思い出す。
焚き火の光に浮かぶ朱金の瞳と、彫の深い顔。
細い眉とすっと通った鼻梁に、バランス良く配置された薄い唇と切れ長の目。

鋭い氷刃の様な、触れれば切れてしまいそうな冷たい美貌が、優しく表情を緩ませて見つめられた。
あの時と同じく、優しく緩められた瞳に志希は酷く落ち着かない気持ちになる。
胸が早鐘を打ち、何故か頬に血が昇ってくる。
落ち着かないのであれば見なければ良いとは思うが、目を離す事が出来ない。
状況を忘れて志希はイザークをじっと見上げ、イザークは志希の目を覗き込むようにじっと見つめていると。
「おーい、そろそろ移動するぞ」
と、横からカズヤから声を掛けられる。
はっと正気に戻り、志希は赤面する。
先ほどまで気分が悪かった状態で、なお且つ凹んでいたはずなのだ。
だと言うのに、イザークの優しい瞳を見ただけでそれらを忘れてしまった事が酷く恥ずかしいと志希には感じられたのである。
イザークは突然赤面した志希に怪訝そうな表情を浮かべ、次いで苦笑を浮かべる。
「俺は、シキが仲間になってから色々と楽になったと思っている。それは忘れないでくれ」
そう言ってから頭をぽんぽんと撫でて、イザークは志希から視線を外す。
「ああ、今行く」
カズヤにそう応えるイザークに志希は何故か寂しさを感じるが、直ぐに頭を振ってカズヤの方へと早足で歩きだす。
どうやらイザークは志希が赤面した理由を、これからレッドウルフの群れを探して移動を始めると言うのにぼんやりしたからだと判断したらしい。
その事に安堵すると同時に、何故か胸がもやもやしてくる。
しかし、そのもやもやは自身への不甲斐なさで腹立たしく思って

いるからなのだろうと自己完結して、志希は一つ頷く。
「私、頑張るよイザーク！」
志希は隣に並んで歩いているイザークにいきなり宣言し、首に着けているチョーカーの宝珠に触れる。
「今すぐは無理だけど、こういうのもいつかできるようになる」
志希の宣言する言葉に、イザークは小さく息を吐いて彼女の頭をポンと撫でる。
「余り急ぐ必要はない。それに、女で大型の動物を捌ける者は戦士でもない限り無理だ。だから、そんなに気にするな」
イザークの励ましに、そうなのかと志希は目を丸くする。
「凄い力仕事、なんだぁ……」
志希の独白めいた呟きにイザークは苦笑しながら頷き、背中を叩く。
「毛皮の話はもう良いだろう。それより、周辺の策敵を頼むぞ」
イザークの言葉に頷き、志希は小声で精霊達に索敵をお願いする。
未だに普通の精霊使いを知らないのだが、それらしく見えるようにと工夫しているのである。
直ぐ様精霊達が志希の言葉通り、周辺に敵がいないかを探しに行く。
歩きながら精霊達を見送っていると、隣を歩くイザークがぐいっと肩を引っ張る。
「よそ見をしていると転ぶぞ」
イザークの注意に照れ笑いをしながら彼を見上げた瞬間、志希は精霊が伝えてきた言葉に表情を強張らせる。
その表情の変化に、イザークは背中の大剣を抜き放つと同時に志希が叫ぶ。
「直ぐ近くに、レッドウルフの群れと何かが居る！」
志希の警告の言葉に一瞬カズヤ達の動きが止まるが、直ぐにそれぞれ得物を構えて素早く打ち合わせどおりの陣形を作る。
「……来る」

志希の呟きが皆の耳に届いた瞬間、周囲の藪から鮮やかな赤が多数飛び出して来た。
先ほどまでは多くて三匹ほどだったレッドウルフが、群れで目の前に現れたのだ。
見える範囲で数十匹前後だが、その更に後方からゆっくりと二本の足で歩きながら姿を現す者がいた。
燃えるような赤い毛皮を身にまとった、狼その物の顔を持つ二足歩行の生物。
瞳は暗く淀んだ赤で、酸化した血の様な色だ。
「なんだ、アレ……」
思わず、と言った様にカズヤが呟く。
「レッドウルフが何らかの要因により、変異した種だと思います。時折、魔獣や人間が妖魔の様になってしまう事もあると文献に載っていました」
アリアが震えながらも冷静な声音で、動揺するカズヤに応える。
「変異種ってやつね。しかも知能も持っているみたいだから、厄介かも」
ミリアは言いながら、二足歩行のレッドウルフをちらりと見る。
変異種のレッドウルフが唸る度に、他のレッドウルフが襲いかかってくるのではなく囲むように動いている。
「……アリア、眠らせられるか？」
イザークの問いに、アリアは小さく答える。
「全部は無理ですが、少数ならなんとか」
アリアの返事に頷き、イザークは志希をちらりと見る。
「数を少し減らすぞ、出来るか？」
イザークの問いかけに、志希は頷く。
「出来ないと、危険だもん」
志希の返事にイザークは満足げに目を細め、大剣を構えて一歩前に出る。
真ん中が狭いと、アリアが魔法を構築している時に彼女の持つ杖

にぶつかって、集中を乱してしまいかねないのだ。
志希達の準備が終わった瞬間、レッドウルフの群れの敵意が膨れる。
「行くぞ！」
「おう！」
イザークの言葉にカズヤが応じ、襲いかかってくるレッドウルフを刃で迎える。
キャウンというレッドウルフの悲鳴が響くが、そんな物にかまってなどいられない。
志希は口の中で小さく土の精霊に、レッドウルフとその変異体の足を掴んで止めてくれるようにとお願いする。
志希の言葉に土の精霊達は即座に動き、二十匹前後のレッドウルフと変異体の足を土で絡め取る。
しかし、レッドウルフの数体と変異体は土の精霊の戒めを力任せに振りほどき、笑う様に口を歪める。
「霧よ、彼の物たちを眠りへと誘え！」
アリアの魔術が完成し、戒めを逃れたレッドウルフとその周辺に白い霧を発生させる。
その霧に包まれたレッドウルフは眠っているのだが、その中の何頭かはやはり起きたまま威嚇の唸りを上げている。
「寝てくれませんか……」
アリアが悔しそうに呟き、すぐさま次の魔術の詠唱に入る。
ミリアもまた襲いかかってくるレッドウルフに大鎌を振るい、相手の戦力を削ろうと必死になっている。
鎌の一振るいで一匹を殺しても、直ぐさま次のレッドウルフが襲いかかってくる。
アリアと志希のおかげで敵の数が減ったとはいえ、現在の戦力差では厳しい戦いを強いられるのは必至だ。
「本気を出して行かないと、危険だわ！」
ミリアは大声で皆に警告しつつも、目の前のレッドウルフに刃を

横薙ぎに振る。
レッドウルフは刃に前足を斬られ、悲鳴を上げて後退する。
動物としての本能が為す行動なのだが、それを咎める者がいたのがレッドウルフの不運である。
「誰が逃げて良いと言った」
二足歩行の変異種が意外に流暢な言葉遣いで、後退したレッドウルフを恫喝する。
傷を負ったレッドウルフは耳を伏せ、尻尾を足の間に入れて小さくキュウンと鳴きながら前に進み出る。
その光景に、アリアの精神集中が崩れ構築していた魔術が消える。
「……言葉を、喋った」
茫然と言った声音で呟くアリアに、カズヤが声をかける。
「アリア、氷でも何でもいいから攻撃魔術だ！　数減らさねぇと、寝てるのを起こされるぞ！」
カズヤの言葉にはっと正気に戻り、アリアは直ぐに精神を集中させて魔術を構築し始める。
「びっくりするのは良くある事だけど、いまの状況じゃ命取りよね！」
ミリアはまるで自分に言い聞かせるようにしながら、飛びかかってくるレッドウルフを切り捨てる。
「風の精霊、お願い！」
志希の声が響き、その意を酌み取り風の精霊達が奔る。
眠っているレッドウルフや、足を土の精霊に捕らわれているレッドウルフの数匹を風の刃で引き裂く。
鮮血が舞い、血の臭いが濃くなるが志希はしっかりと顔を上げて次にするべき事を探っている。
イザークもまた大剣を振るい、一撃でレッドウルフを無力化しながらどうするかと考えを巡らせていた。
変異種のレッドウルフが言葉を操る事が出来ると言う事は、知能も有しているのはまず間違いない。

いまはただレッドウルフの本能に任せた襲い方をさせているが、統率して一人に襲いかかってきた場合が困る。
イザークが思った瞬間、変異種が短く吠える。
その吠え声に従い、レッドウルフ達の動きが変わる。
いままでばらばらに襲いかかってきていたレッドウルフ達が、一人に複数匹で同時に襲いかかってくるのだ。
「ウソだろおい！？」
カズヤは焦った声を上げつつも、必死で対応する。
ミリアもカズヤと同じ様に焦燥に駆られた表情を浮かべ、大鎌でレッドウルフに傷を負わせるが踏み込みが甘く一撃で倒す事が出来ない。
イザークは至極冷静に大剣を片手で軽々と振るい一匹は葬ると同時に、他のレッドウルフを拳などで撃退する。
「氷よ、集いて氷柱となり降り注げ！」
そこでやっとアリアの魔術が完成し、周囲に展開しているレッドウルフ達に氷柱の雨が降る。
眠っているレッドウルフや負傷しているレッドウルフはこれで止めを刺されたが、拘束されているレッドウルフや怪我をしていなかった個体は警戒した唸り声を上げる。
明らかな劣勢は志希達の方なのだが、呪文使いの二人によりそれを覆している。
しばし状況を見ていたらしい変異種は再び短く吠え、身を低くする。
同時に、動けるレッドウルフの個体は素早く陣形を変える。
怪我をしているのもしていないのも、全てがカズヤとイザークに矛先を変えたのだ。
それに一瞬だけ気を取られたミリアは、前方から叩きつけられる殺気に気が付き慌てて前を見る。
その時にはすでに、変異種はミリアの目の前に移動しておりその腕を振り上げていた。

「風の精霊よ！」
志希はそれを目にした瞬間、叫ぶ。
鍛えられているとはいえ、ミリアより大きな巨体と毛皮の上からでも分かるほどの筋肉を備えている変異種だ。
その一撃を喰らわされただけで、下手をしたら死んでしまうかもしれない。
志希の意図を読んだ風の精霊は紫電を纏った風を作り、変異種の攻撃を防ごうとする。
だがしかし、風の精霊のその防壁を爪で切り裂きながら変異種は腕を振り下ろし、それに反応できずにいたミリアはまともにその攻撃に当たってしまう。
ミリアはその衝撃に悲鳴を上げる事も出来ずに地面に叩きつけられ、一度跳ねた後に止まる。
その際にミリアの法衣と鎖帷子が爪に引き裂かれ、背中の半ばから肩口まで露出させてしまう。
身じろぎ一つしないミリアのその姿に反応したのは志希とアリアだけではなく、変異種も足をとめて彼女の背を凝視する。
ミリアの白く滑らかなはずの肌には、黒い模様の様な物が見えていた。
それは酷く不吉で、神官が持つにはあり得ない程の穢れを内包しているのを志希は肌で感じた。
アリアは青ざめ、詠唱の言葉が途切れている状態だ。
「シキ！」
「アリア、魔術を！」
イザークとカズヤの呼びかけで志希は正気に戻り、長棍を構えて変異種を威嚇する為にミリアの元へと駆け寄る。
ミリアと変異種を隔てる位置に立つ志希に等目もくれず、二足歩行のレッドウルフは喉をゴロゴロと鳴らしながら嗤う。
「何と、何と何と！　我らは随分と運が良い！」
楽しげに、嬉しげに言葉を発する。

「力を下さった主様の探し物を、見つける事が出来たのだからな！」
変異種の言葉に、志希は思わず怪訝な表情を浮かべるが。
「氷よ、炎よ、土よ、風よ！　我が声を聞き、願いを叶えたまえ！」
アリアの高速詠唱の言葉が響き、魔力が変異種の前に凝縮する。
「彼のモノを滅ぼせ！」
悲鳴じみたアリアの詠唱は完成し、凝縮した魔力が強い光を放つ。
目の前で炸裂するそれに志希は咄嗟に目を閉じ、意識を失っているらしいミリアを庇うように体を被せる。
物凄い光と熱量に志希は悲鳴を噛み殺し、とにかくミリアを守る。
精霊達も志希の身を守る為に土の精霊と水の精霊、闇の精霊に植物の精霊が集い魔力と光を遮断する。
志希は火傷した様なじりじりした痛みを知覚しながら、光で潰された目を『神無の鳥』の力で早く癒す。
目が見えなくては、直ぐに対応する事は出来ない。
そう思っていると、精霊達の緊張が解ける。これで志希は魔術の発動が終わったのに気が付き、握っている長棍を確かめてから状況を精霊達に確認しているとアリアの声が聞こえた。
「そ、そんな……！」
驚き、絶望に近い声音。
どうしたのかと志希が怪訝に思った瞬間、激痛が志希の体を駆け抜けた。

第三十七話

イザークとカズヤはミリアの一角が崩れたのに気が付いてはいたが、相手にしているレッドウルフの連携でその場を離れる事が出来なかった。

ここで動けば、レッドウルフ達は直ぐに弱い志希やミリアに襲いかかるのが目に見えていたからだ。

だからこそ、アリアや志希に出来るだけ周囲のレッドウルフの数を減らすようにと指示を出したのだ。

しかし、そこで耳に届いた言葉に事態が急変してしまう。

レッドウルフの変異体が口にした“主の探し物”と言う単語に反応してか、アリアが高速詠唱を始めた。

アリアが天才児であるとは聞いていたが、この若さで高速詠唱が出来る程の技術を持っていた事にイザークは驚く。

高速詠唱は力ある言葉を短縮しながらも、本来の意味を短く凝縮するものだ。

魔術師としての技量が高くなくては到底習得できず、出来たとしても扱うのが難しい。

それを使って放たれた魔術もまた、イザークもカズヤも知らぬものであった。

同時に、寒気がするほどの魔力が凝縮するのを感じた二人はこんな近距離で発動させる魔術では無い事を悟る。

下手をすれば仲間を巻き込みかねない程、危険な物だ。

しかし、日焼け程度の熱さしか感じない事に疑問を感じていると、背後のアリアが警告を発した。

「その場から、動かないでください……！　制御が、利かなくなるから」

一瞬とも永遠とも思える光の爆発の後、イザークは目を開ける。

目の前には目を潰されたらしいレッドウルフが泡を吹き、力無く

吠えていた。
それはカズヤの方も同様で、目を開けた彼と頷きあい無抵抗なレッドウルフを始末していると、杖を落とす音が聞こえた。
「そ、そんな……！」
アリアの声音には、色濃い絶望が含まれている。
イザークが後ろを振り返ると、真紅の毛皮を焼け焦がせた変異種が膝をつきながらも足元を見降ろしていた。
アリアはその光景にへたり込み、体を震わせている。
その彼等の目の前で、変異種は己の足元で動こうとする志希を鋭い爪で掴みあげる。
余りにも無造作にされた行動により、志希の体に爪の先がずぶりと音を立てて突き刺さる。
「あああ！」
志希の悲鳴が響き渡り、イザークは咄嗟に斬りかかろうとするが変異種は志希を盾にする事で行動を防ぐ。
「貴様……！」
志希の足を伝い、鮮血が下のミリアにぼたぼたと降り注いでいく。
「弱いものほど、よく吠える。まぁ、貴様らと遊んでいる暇はない。我が主の探し物が見つかったためでたき日だ、見逃してやるからどこへなりとも逃げるが良い」
変異種はにんまりと笑いながら、爪に力を入れる。
「あぁぁぁ！」
志希は激痛で悲鳴を上げ、体を震わせる。
その悲鳴と血の臭いに愉悦の表情を獣貌に浮かべ、満足そうに笑う
「主を召喚するには、贄が必要だ。この人間の小娘は処女故、主様も大層お悦びになろう」
「んな事させるかよ！」
忍び足で変異種の横手に来ていたカズヤは、志希を持つ腕に長剣を振り下ろす。
だがしかし、強靭な筋肉で受け止められ切り裂く事が出来ない。

「ッ……！？」

思わず驚き、硬直したカズヤは変異種の蹴りをまともに受けて吹き飛ばされ、背中を大木に強打して地面に崩れ落ちる。

「く、糞……」

朦朧とした声音で悪態をつくが、体を動かす事が出来ないでいる。

その時、アリアが再び杖を持ち立ちあがる。

「姉さんを渡しませんし、シキさんも贄になんかさせません！」

体を震わせながら、精いっぱいの虚勢を張ってアリアは怒鳴る。

その姿に変異種は毛皮を再生させながら、目を細める。

「ククク……聖女の妹もまた、特殊なものであるとは聞いていたが本当だな。いまの時代、あの魔術をあそこまで制御できるもの等そうはおるまい。良く姉とこの娘を焼き殺さずにいたと、褒めてやろう。もっとも、魔力の練りが甘いがな」

変異種は嘲笑しながらも、更に志希の体の中へと爪を進ませ出血を促す。

志希の着ている服の全ては鮮血に染まり、かなり危険な状況である事がうかがえる。

志希はもう身動ぎ一つせず、見えている肌の部分は青白く染まっている。

イザークは大剣で斬りかかろうとするのだが、それを志希を盾にする事で牽制されてしまい手も足も出ない。

「姉さん、起きてください姉さん！　良いんですか？　ここでこのまま寝ていて！　このままだと、姉さんの目的が果たせませんよ！」

アリアがミリアに必死の声音で呼びかけると、彼女の体が小さく動く。

それを見た変異種は、ミリアの体をうつ伏せにして軽く足を乗せる。

これだけの事で、ミリアは身動きが取れなくなる。

「主の花嫁ではあるが、暴れられては困る」

「……やって、くれるわね」

小さく、呻くようにミリアが呟く。
アリアの呼びかけと、志希の血をかけられたことで意識を取り戻したのであろう。
「もう一度、先ほどの魔術を使うか？　現代では使い手のいない魔術を、不完全ながら放った魔術師よ。その対価は我の消滅だけではなく、主の花嫁と贄の消滅だぞ？」
楽しげに笑いながら、志希を掴む手をほんの少しだけ動かす。
ほんの少し、体の中を爪でかき混ぜられ志希はびくんっと震える。
「いや……」
志希が力ない声を上げ、手を動かそうとする。
その瞬間、ざわりと空気が変わった。
突然風が吹き荒れ、地鳴りが響き始める。
山の木々がざわざわと梢を鳴らし、光と闇の精霊が実体化して明滅する。
突然の異変に、変異種が驚きミリアを押さえつけている足の力を抜いてしまう。
ミリアはこの隙を見逃さず、体をひねって手を突き出す。
「力よ弾け！」
ミリアの手から純粋な力が撃ち出され、変異種はその攻撃でミリアの上からよろめきながら退いてしまう。
その瞬間を見逃さず、大剣を構えていたイザークは駆け出し大剣を振り被る。
イザークの行動に気が付いた変異種が、志希を持つ手でその刃を受け止めようとした瞬間。
「フの力は光」
と、イザークが呟いた瞬間に地鳴りが止まり、吹き荒れていた風がまるで大剣に吸い込まれるようにまとわりつく。
ざわめく木々は静まり、光と闇の精霊達もまた姿を消しさる。
まるで、イザークの言葉が引き金になったように異変が収まる。
それと同時に、その剣身が柔らかな光を纏う。

「イザークさん！？」
驚くアリアの声。
イザークが志希ごと変異種を斬り捨てるとばかりに上段から大剣を振り降ろそうとするのが、彼女の眼には映っていたのだ。
しかし、それを間近で見ていた志希は何故か酷く安らかな気持ちになる。
イザークの大剣が纏う光のせいなのかとも思ったが、それ以上にイザークの黄金の目が語っているのだ。
『信じろ』と、ただそれだけを訴えている。
志希はその目に、小さく頷く。
大量出血で意識も朦朧としているが、イザークのその目は間違いないと志希は感じたままに笑みを浮かべる。
志希のその表情を見つめたまま、イザークは光を纏う大剣を振り下ろす。
光を纏う剣身は変異種の体を縦に割るが、不思議な事に志希の体には傷一つつけていない。
その一撃で絶命した変異種の表情は、先ほどまで浮かべていた嘲笑のままだ。
恐らく、自分がどうなっているのかも知覚出来ないまま死んだのだろう。
変異種の爪が体に突き刺さったまま落下する志希を、イザークが受け止める。
死人と見紛う程の土気色の肌と、低い体温。
「シキ！」
思わず、と言ったようにイザークが声を荒げる。
ぼんやりとした表情で志希はイザークを見上げていたが、ふっと苦笑を浮かべる。
「だい、じょうぶ……ちょっと、寒くて、眠いだけ」
掠れた声で志希はそう返事をするが、イザークは険しい表情を浮かべる。

ぐっしょりと自身の血に濡れ、蒼白な志希の姿は死ぬのを待つだけの様にしか見えない。

「ミリア！」

声を荒げ、体を起こしているミリアの元へとイザークが志希を運ぶ。

痛みすら感じないのは、人体の構造としては大変危険な状態である事は経験上知っている。

それ故、イザークは慌てているのだ。

ミリアもまた、イザークが慌てた様子で志希を抱えて来るのを目にして顔色を変える。

「アリア、わたしは今動くの無理だから、悪いけどカズヤをつれて来て！　イザークは、シキちゃんの体に刺さっている爪を抜いて！」

ミリアはアリアだけではなくイザークにも指示を出し、痛みに顔を顰めながら体を起こす。

その間にイザークは志希の体に突き刺さっている爪を外し、変異種の爪が折れて中に残っていないかを確認する為に血塗れのローブと革のベストを脱がせる。

元々白い肌が土気色になり、胸が辛うじて上下している状態だ。

ミリアは志希の状態を診て、思わず呟く。

「良く生きて……」

胸から腹にかけて、四つの穴が体に空いている状態だ。

しかもその穴からはなおも血が溢れ、ミリアの鼻には血だけでは無い異臭が混じっているのを嗅ぎわける。

「爪が体の中に残っている様子はないけど、内臓がやられているわ。わたしが使えるのは血を止めて、傷口を取り敢えずふさぐだけよ。出来るだけ死なせないようにする、それ以外ないわ。早急に戻って、神殿に運んで内臓を再生させる神聖魔法をかけるまでの時間稼ぎにしかならない」

ミリアの言葉に、イザークは頷く。

「死ななければ、どうとでもなる」

イザークの答えにミリアは一つ頷き、手を祈りの形に組んで祈りを捧げ始める。

「豊穣の女神エルシルよ……」

ミリアの祝詞と同時に、ふわりと彼女の体から柔らかい光が溢れる。

一瞬、ミリアの祝詞が途切れるが直ぐに詠唱を続ける。

祈りの形に組んでいた手を解き、志希に触れる。

「慈しみ深きその御心の欠片を、この者に与え給え」

祝詞を唱え終えると同時に、ミリアの体から溢れる光が志希の体を包み込み、傷口の肉を盛り上げ塞いでいく。

同時に志希の顔は若干血の気が戻り、苦しそうな表情が僅かに楽になっている。

イザークはその様に、思わず眉を潜める。

ミリアの祝詞は傷を負った時によく聞く小治癒の物だ。

しかし、光の強さや傷の治りの早さだけを見ると中治癒にしか見えない。

そう思っていると、ミリアが酷く腑に落ちない表情を浮かべて口を開く。

「わたしは、まだ中治癒の奇跡は使えない。なのにどうして……まるで、エルシル神が力を貸してくれたみたい」

ミリアの言葉にイザークは眉を潜めていると、アリアがふらふらとよろめきながらカズヤを支えて歩いているのが目に入る。

志希は取り敢えずは大丈夫だろうと判断し、そちらへ行こうと腰を浮かせ様とするがミリアが制止する。

「ああ、良いわ。わたしの方も、だいぶん楽になってるから」

そう言って、ミリアはややぎこちなくだが立ち上がりアリアの方へと足を踏み出す。

イザークはミリアのその姿に、一瞬目を瞠る。

変異種の叩きつけるような攻撃を受けたと言うのに、僅かな時間でもう立って歩けるのだ。

しかも、治癒の奇跡を自分に使った形跡もないままで。
ミリアが崩された瞬間に聞こえた音から、少なくとも五か所は骨折している筈だとイザークは確信している。
だと言うのに、痛むそぶりすら見せていないミリアはおかしい、とイザークは感じる。
強い精神の持ち主だとしても、痛みでその動きはもっと鈍ってもおかしくはないはずなのだ。
同時に、変異種がミリアに言っていた言葉を思い出す。
「……主の花嫁、聖女か」
小さく呟き、息を吐いて志希の服を整えようとして動きが止まる。
イザークの目の前で、大雑把に塞がっただけの傷口が滑らかな皮膚に覆われ痕跡一つなく綺麗に完治してしまう。
異常な自己治癒能力に驚き、確認するように指で触れるが傷口があったとは思えないほど滑らかな皮膚の感触しかしない。
イザークはしばし目を閉じ、深呼吸をしてから志希の服を整える。
目の前で起こった事に対する驚愕と、酷い疲労を感じながら立ちあがる。
「カズヤを癒したら、毛皮を剥いで戻るぞ」
疲労が滲んだイザークの言葉にカズヤが胡乱とした表情を浮かべるが、直ぐに頷く。
「分かった。毛皮剥ぎも仕事のうち、だからなぁ」
嫌そうな声音でカズヤは同意し、周辺を見回して深いため息をつく。
「ミリアは志希を診ながらで良いから、自分の傷を癒せ。アリアはゴーレムの追加を作って、毛皮を運ばせろ」
イザークは淡々と指示を出しながら、比較的傷の少ないレッドウルフを探してのろのろと仕事に取り掛かるのであった。

第三十八話

志希は余りに酷い胸やけに、思わず目を開ける。
「……気持ち悪い」
小さく呟き、体を起こそうとするが更に酷い吐き気に襲われ動きを止める。
「うう……何これ」
口の中が何やら生臭く、喉の奥から昇ってくる物も同じような感じで身動きすれば更に胸やけが酷くなる。
涙目で硬直していると、小さなため息が聞こえた。
「目覚めたか。体のどこかに痛みはないか？」
囁きの様な問いかけに、志希は視線だけを動かし声の主を探す。
声の主は直ぐ隣に座り、大剣を鞘ごと抱えていた。
金の瞳に黒い髪、黒い鎧と黒い服を着たアールヴの男性。
その姿を見て安堵してから、志希は自分がいったいどうなっているのかと疑問を抱く。
「イザーク……私、どうなったの？」
志希の問いかけに、イザークはゆっくりと瞬きをする。
「アレから二刻ほど経っている。シキはミリアの小治癒でとりあえず傷を塞いだだけの状態の筈だが……今は不思議な事に完治している」
イザークの答えに、志希はそうと頷いてから深いため息をつく。
変異種に捕まった状況から考えて、通常死んでいてもおかしくはない傷を負っていたはずだ。
だと言うのにこうして生きている事、そしてそれを説明されていると言う事はイザークにもカズヤにも不信感を持たれているのだろう。
無論、傷を診るミリアにも知られている筈だ。
「きちんと、説明するべきだよね」

独り言の様に、志希は呟く。
イザークはその言葉に少し沈黙し、そうだなと頷く。
「カズヤも色々と不審がっている。無論、シキだけでは無くアリアとミリアも。同じパーティであれば、重大な隠し事は無しの方向で頼む」
いつになく真剣な声音で言われ、志希は小さく頷く。
「分かってる」
答える声は震えており、まるで怯えているかのようだ。
そこに、水を持ったカズヤが幌を開けて入ってくる。
この時漸く、志希は今自分が寝転がっているのが馬車の中である事に気が付いた。
「向こうも、話しつける気になった見てぇだけどよ……シキは大丈夫か？」
カズヤが真剣な声音でイザークに問いかけると、彼は頷く。
「丁度、目が覚めたみたいだからな。シキ、水を飲めるか？」
イザークの問いかけに頷き、小さくえづきながら体を起こす志希。
「うう……なんか、凄い口ゆすぎたい」
涙目になりながら志希が呟くと、イザークは何とも言えない表情を浮かべる。
「んじゃ、取り敢えずゆすいどけ。腹に穴空いてたんだ、そりゃ気持ちわりぃだろ」
カズヤはそう言って、持っている水を志希に手渡す。
「イザーク、志希の方頼んだぜ。オレ飯作るから」
それだけ告げて、カズヤは早々に馬車から出て行く。
簡単に状況を投げて行ったカズヤにイザークは嘆息を零しつつ、志希を見る。
「口をゆすぐのは良いが、立てるか？」
イザークの言葉に志希は頷き、立ち上がろうとするがぐらぐらと周囲が歪み体に力が入らない。
水が入った器を握り、必死に足を踏ん張るが体が傾きかけてしま

う。
それを見ていたイザークは志希の腰に腕を回し、体を支えて小さく嘆息する。
「無理をするな」
イザークはそう言ってから、いつもより精彩の欠いた動きで志希を抱き上げる。
具合の悪い志希はしかし、それに気が付く事なく必死に気持ち悪いのを堪えている。
それを見て、イザークは出来るだけ志希を揺らさないように気をつけて馬車から下り他の皆に見えない位置で下してやる。
「あ、りがと……」
ぐったりとしながらも礼を言い、志希は器の水を使って口を濯ぎうがいをする。
それで気分は多少なりともすっきりしたのだが、何故か体に力を入れるのが出来ない。
直ぐ側にある木を支えに立ちあがろうとするのだが、それすらできない状態で志希は思わず半泣きになる。
「無理をするなと言っている」
志希の様子を見ていた嘆息交じりにイザークが言い、彼女を抱き上げてカズヤ達が居る方へと戻る。
志希は志希で、恥ずかしそうな表情を浮かべて唇を尖らせて呟く。
「だって、なんかだらしないじゃない」
「仕方なかろう。死にかけていたのだからな」
その一言に志希は言葉を詰まらせ、押し黙る。
以前は生き返ってすぐに体を動かしても特に問題が無かったのだが、今回は瀕死からの蘇生である。
生きて体の中を再生させたが為に、体調が悪いのかもしれないと志希は考えつく。
「座るぞ」
考え事をしている志希に一言告げ、イザークは彼女を抱えたまま

腰をおろして膝に座らせる。
「ちょっ」
自分の状態に気が付いた志希が異論を唱えようとするのだが、イザークが嘆息交じりに口を開く。
「まだ本調子ではないようだからな、俺によりかかって座れば楽だろう」
志希が本調子でないのは、先ほどまでの様子を見ていれば誰でも分かる事だ。
本来なら馬車の中で寝かせておくべきではあるのだが、志希が起き上がれる状態になったので食事も摂らせる為に連れて来たのだ。
だがしかし、志希としては膝に座って体を寄りかからせながら食事を取ると言うのはとても恥ずかしい気がするのだ。
「い、いやそれはどうかと思うんだけど！」
志希はそう反論するが、カズヤは胡乱とした表情で口を開く。
「まぁ、さっきの様子だと座ってるのも辛いだろうからイザークを椅子にしとけ。それに、これからお互いに長話するんだから下手な遠慮する必要ねぇぞ」
カズヤの言葉に志希は言葉に詰まり、最終的に小さく頷く事で同意する。
「んじゃま、取り敢えずは飯食おうぜ。消化に良いスープで統一したからな」
そう言いながらアリアが差し出す器を受け取り、焚き火にかけている鍋の中身をお玉でよそって行く。
アリアは無言でスープを入れた器を受け取り、ミリア、志希、イザークの順番で手渡してから自分の分を手に取る。
カズヤは自分の器に入っているスープを木で出来たスプーンでかき混ぜ、顔を上げる。
「んじゃま、いただきます」
いつも通りそう言ってから、カズヤはスープをすすり始める。
志希も小さな声でいただきますと呟き、少なめに入れられたスー

プを木のスプーンですくって飲む。
いきなり器から飲もうとすると気分が悪くなるような気がして、回数を分けてゆっくりと食べる事にしたのである。
イザークはスプーンでスープの具を掬って食べてから、器に口をつけて汁を飲んでいる。
カズヤとアリアもイザークと同じ様な飲み方をしているが、ミリアは志希と同じ様にゆっくりと飲んでいる。
「そう言えば、ミリアとカズヤの怪我は？」
志希は食事の手を止めて、問いかける。
「ん？　ミリアに治癒魔法をかけてもらったら直ぐ良くなったぜ。ミリアもそうだと思うんだが……？」
カズヤは志希の質問に返事をしつつ、ミリアを見る。
彼女はカズヤと志希、イザークの視線に小さく嘆息をして口を開く。
「わたしも、自分に治癒魔法をかけたから大丈夫よ。それに、元々回復力が強いのよ……わたし」
重い息を吐きながらミリアはそう答え、隣で困った表情を浮かべているアリアに苦笑する。
「丁度良いから、食べながらお話ししちゃうわね。依頼は終わったけど、個人的に街でするようなお話じゃないからここで済ませてしまいたいわ」
ミリアはそう言って、器の中の物を食べきってしまう。
志希はそれを見て、長い話になるのだろうと悟り器に口をつけようとするが、イザークの大きな掌が志希の器を塞ぐようにしてそれを阻む。
「急ぐ必要はない。ミリアも話があるのは分かっているが、皆の食事が終わるまで待て」
イザークが淡々と諭すように言うと、カズヤも頷く。
「んだな。もう少しきちんと食って、腹を満たしておけば苛立つのは少ねぇはずだしよ」

二人にそう言われたミリアは、しばし考えてから頷く。
お腹が減っていると感情の起伏が大きくなりやすいが、満たされている状態であれば比較的落ち着いた状態になる。
無用な言い争いをするつもりがないのであれば、食事をして落ち着いてからするのが一番である。
と言う事で、ミリアはカズヤに器を差し出し。
「くださる？」
若干恥ずかしそうな表情で、お代りをねだる。
「ん？　ああ。アリアもお代りいるか？」
「いえ、わたしはこの一杯で十分です」
カズヤはミリアの器を受け取りつつそうかと答え、スープをよそって返す。
「シキは、大丈夫か？」
ついでに問うてくるカズヤに志希は頷き、ちびちびとスープを食べる。
お腹がすいている状態ではあるが、大量に食べるのは到底できないほど気持ちが悪いのだ。
器に盛られた少なめのスープを平らげて、丁度良いくらいなのだ。
しばし、皆が食事をする音だけが響く。
珍しく誰もが無言で、酷く重苦しい空気に包まれている。
それは既に日が暮れ、焚き火の周辺以外は深い闇に包まれているからかもしれない。
志希はそんな事を思いつつ、食べ終わった器を持ったままぽつりと呟く。
「……まだ二月だなんて、全然思えないね。なんか、もう随分と昔の事のように思える」
「そうだな」
イザークは志希が何を言っているのかを理解し、スープを飲み切った器を地面に置きながら頷く。
「オレらはあれだ、あの時はクルトにベレント、ライルと一緒だっ

たよな」

カズヤはそう言いながら、イザークと志希から器を回収して水を入れた袋に突っ込んでいく。

近場に川などがない場合、水を余分に持ちより汚れを洗うのに使う。

精霊使いが居る場合、汚れた水を水の精霊にお願いして綺麗にしてもらえるのでこの様なやり方でも十分なのである。

「へぇ、金に最も近いって言われている人たちじゃない。どういう経緯で？」

ミリアが興味津々、と言った表情を浮かべながら食べ終わった器をカズヤに差し出す。

アリアも慌ててスープを飲みきり、器をカズヤに渡す。

「オレはイザークの伝手で、パーティに参加させてもらったんだよな」

「クルトが俺と親戚関係にある。そのころからカズヤと組んでいた、と言うのも縁の一つだ」

イザークの返事に、なるほどとミリアは頷く。

ここで話が途切れてしまい、再び重苦しい様な沈黙が落ちてしまう。

アリアとミリアとは別口で、カズヤとイザークは志希に聞くべき事がある。

それをいつも通り日本語で聞くべきか、それともアリアとミリアの前できちんと説明してから話を聞くべきなのかと悩んでいるのもあるのだ。

志希とは違い、イザークとカズヤは冒険者としての生活が長い。

下手な事を言って秘密を共有してしまえば、要らぬ厄介事に巻きこんでしまう恐れもあるのだ。

それ故、二人は互いにどうするかを目で問い考えている。

志希もまた、どの様なタイミングで話すべきかに悩み口を開きかねていると。

「まず、謝罪させてください」
アリアがまっすぐにカズヤとイザーク、そして志希を見て言う。
「わたしが力量以上の魔法を使い、貴方達を危険にさらしてしまいました」
アリアは杖を手に持ち、凛とした表情で立ち上がる。
「わたし、アリセリア・イェル・ミシェイレイラの名に懸けて謝罪いたします」
アリアはローブの裾をドレスでするように摘み、優雅に膝を折る。
突然の行動に目を丸くする志希とカズヤだが、イザークは一瞬だけ目を瞠るが直ぐにいつもの表情になる。
ミリアもまた、驚愕の表情で妹を見上げている。
「ミシェイレイラ……神聖国ミシェイレイラの王族しか名乗れん筈だが？」
イザークは確認するように問いかけると、アリアは頷く。
「はい。継承権は最低位の方ですが、継承権を持つ神聖大公の娘です」
はっきりとアリアは己が貴族である事を認め、懐から小袋を取り出し指にはめる。
焚き火の明かりから見えるそれは、黄金で出来た物だ。
しかも、通常宝石が付いていあるだろう部分は平たく潰され何かの家紋が付いている。
「しかし、ミシェイレイラの神聖大公は五年ほど前に潰された筈だ」
「何でお前、そんなこと知ってるんだよ！？」
イザークの言葉に、思わず突っ込みを入れるカズヤ。
「向こうの方に知り合いがいる。そちらから、色々と情報を貰っているからな……まて、そうなるとミリアもか？」
カズヤの突っ込みに答えている途中で、イザークはミリアを見る。
ミリアはイザークの言葉に深いため息をつき、重そうに口を開く。
「……ええ、そう。わたしはミリエリア・アシェル・ミシェイレイラ。王位継承権を持っているけれど、決して王位につけない大公姫

よ」

そう言って、苦笑する。

「ちょっと待てよ。何で王位につけねぇンだ？」

カズヤの素朴な疑問に答えるのは、イザークだ。

「ミリアは、あの変異種に主の花嫁、聖女と呼ばれていた。その辺りが原因なのだろうな。だからこそ、花嫁と聖女の単語を出した変異種を消し去る為に危険な魔法を使用した。間違いないな？」

イザークはアリアにそう確認を取ると、彼女は頷く。

「はい。そもそも、わたし達は現在王位継承権その物を消されている状態です。存在すら、認められていない」

アリアはそう言って、ミリアを見る。

「姉さん。わたしはカズヤさん達に、全部話します」

「アリア！？」

突然の宣言に、ミリアは驚いた声を上げる。

「そんな事をして、どうするの！　わたし達がパーティを離脱すれば、迷惑はかけないでしょう！？」

「それじゃ、どうするんですか！？」

普段おとなしいアリアが声を荒げ、ミリアに食ってかかる。

「わたし達二人じゃ絶対に無理なのは分かっているじゃないですか！　神聖大公だった父様も、枢機卿だった母様も敵わなかった！」

涙さえ浮かべ、アリアはミリアに怒鳴る。

「聖女である姉様だって、今はまだ未熟だから私と二人で修行しているんじゃありませんか。それなのに、あいつの使い魔だったらしい変異種に殆ど敵わない！　このままじゃ姉様はあのヴァンパイアに奪われるだけじゃないですか！　絶対に、協力者が必要です。これは、譲りません！」

肩を上下させながら、アリアはボロボロと涙を零し始める。

「わたしの家族は、姉様一人なんです。姉様まで居なくなったらわたし……わたし、どうしたら良いんですか？」

嗚咽を堪えるようなかすれた声でアリアは訴え、ミリアは唇を震

わせて妹を抱きしめる。
「ごめん……アリア」
ミリアの小さな謝罪に、アリアは大きな声を上げて号泣を始める。
興奮してしまったアリアの様子に、色々と聞きたい事があったカズヤとイザークは肩を竦めて二人が落ち着くのを待つ体勢に入る。
それを見ていた志希は、ゆっくりと口を開く。
[二人が全部話すなら、私もきちんと全部話さないとダメだよね]
二人の邪魔をしないように、小さな声で呟かれた言葉。
[その辺りは、志希の好きにして良いぜ]
[俺達には、口を挟む権利はなかろう]
何をどう話すのかは志希次第だが、下手な隠し事をすればカズヤとイザークの信頼を失う。
カズヤとイザークの返事にそう判断した志希は、一つ頷いた。

第三十九話

この大陸には、大小様々な国がある。
イザーク達が拠点としている国は大陸でも端の方にある、フェイリアスと言う小国だ。
大陸の中央付近にあるフェイルシアと言う大国の属国であり、妖魔達との戦線に最も近い国である。
そして、ミシェイレイラ神聖国はこのフェイルシア国よりも少々東にあり、気候も人も穏やかな国と言われている。
ミシェイレイラ神聖国の初代国王は、エルシルの高位の司祭であった。
エルシルからの神託を受け、建国したのが始まりとされている。
この国の王は神官を兼任していたのだが、ある時期から王と神官が分離しそれぞれがそれぞれの役割を果たす事となった。
政治は王が、神への祈りや儀式は神官が。
役割分担がされるようになった時期から、この国の神官の最高位は必ず王の血が入っている物でなくてはならないと定められた。
これによりミシェイレイラ神聖国の最高神官は神聖大公と称され、二代毎に王家の姫か王子が下賜されて正統の血筋を保っていた。
この様な経緯がある為、神聖大公はエルシルの神官でありながら、王族としての地位も併せ持っているのである。
連盟と続く神聖大公家に、ある日奇跡のような出来事が起こる。
神聖大公妃が、双子の女児を産んだ。
その片方が、女神エルシルの加護が厚い聖女であったのだ。
生まれつきの聖女はとても希少で、聖女の顕す奇跡は普通の神官や司祭よりも容易く行われる。
また、怪我をしても直ぐに癒えてしまう程の回復力を持ち、神官戦士としても大成出来る程の素養を兼ね備えていた。
神聖大公は直ぐに聖女である姉の方を跡取りと定め、ミリエリア

と言う名を与え妹にはアリセリアと名付けた。
これから数年間、双子の姉妹は分け隔てなく暮らしていたが、アリセリアは魔術師の素養があった為に塔の学院へ入学してしまう。
ミリエリアはとても寂しいと思っていたが、神官としての修行や次期当主としての勉強もあった為それを口に出さずにいた。
アリセリアが塔の学院へ行ってから一年、ミリエリアが十二歳の時に事件が起きた。
その日は物凄い雨が降り、雷が鳴っていた。
ミリエリアはそろそろ社交界にデビューすると言う事で、父からダンスを教わっていた。
毎日の日課なので、父親が帰ってくるのを楽しみに待っているとにわかに胸騒ぎがしてきた。
ヒタヒタと這い寄るような、恐ろしい程の不安感。
屋敷内の空気が酷く濁り、気持ちが悪いような気さえしてくる。
ミリエリアはそう思い、窓を開けようとするがそれより早く扉が乱暴に開かれる。
「お母様……！」
いつもならばノックをして、優雅に入室してくる母が乱暴にドレスの裾を払い足早にミリエリアの腕を掴む。
「ミリエリア、直ぐにこの屋敷を出ます。コートを着なさい」
化粧をしていると言うのに青ざめた顔で、母はミリエリアに告げる。
「え？　でも……」
「大丈夫、お父様も直ぐに来てくださるそうよ。だから、早くコートを着て頂戴」
いつもはもっと優しく促す母が、追い立てるようにミリエリアに指示を出す。
「はい」
腑に落ちないと思いながらも、ミリエリアは何か急を要するような事態があったのだろうと予想してクローゼットへと向かう。

いつもは召使が準備をしてくれるのだが、何故か今は誰一人としてミリエリアの部屋に入ってくる様子がない。
王族でもあるミリエリアは、最低二人は召使を従えて着替えなどをしていた。
その召使は大抵隣室の召使が待つ部屋にいるはずなのだが、その気配を感じる事が出来ないでいた。
まるで、この屋敷内には自分と母の二人しかいない様な錯覚に襲われる。
クローゼットの中からいつも身につけているコートを取り出し、四苦八苦しながら自分で袖を通して母の元へと急いで戻る。
「お母様、着てまいりました」
ミリエリアは室内で待っていた母に声をかけながら駆け寄ると、彼女はほっと安堵した表情を浮かべて頷く。
「良い子ね、ミリエリア。それでは、行きましょう」
母はそう言ってミリエリアの手を引こうとするが、その前にと少女は慌てて自分の机に向かう。
机の上に置いてある小さな化粧箱を開け、中に入っているエルシルの聖印を取り出す。
初めて一人で神殿に行き、入信した際に司祭から頂いた聖印だ。
これは、ミリエリアが神官見習いである証しである。
大切に聖印を持つミリエリアに母は表情を緩ませ、声をかける。
「さ、行きましょう？　お父様の方が先に来てしまいますよ」
「はい、お母様！」
ミリエリアは母の呼びかけに頷き、手を繋いで部屋を出て廊下を歩く。
いつもはもう少し明るく感じるはずの廊下は薄暗く、窓の外から見える稲光が余計強く感じてしまう。
窓を叩く雨の音も嫌に響き、ミリエリアは母親の手をきつく握る。
怯えたその仕草に母親はミリエリアの手をきつく握り返しながら、ほんの少しだけ歩く速度を早くする。

母もまた、屋敷内の異常に怯えているようだ。
いつもであれば、この時間は沢山の召使が屋敷内を歩き回っている筈なのだ。
筆頭執事や、その下に着いている執事達も屋敷内を歩きまわり、召使たちの仕事を見て回ったり、夕食の準備をしている筈だ。
だと言うのに、屋敷内には母とミリエリアの足音しかしない。
「お母様……」
震える声で問いかけを発しようとするミリエリアに、母は前を向いたまま告げる。
「今は、お屋敷を出る事だけを考えなさい」
ぴしゃりとした言葉は、ミリエリアの不安を否応なく掻きたてる。
母の手をきつく握り、小さく体を震わせながらミリエリアは歩く。
歩かなくては、母に置いて行かれる。
歩かなくては、後ろから来る何かに捕らえられて、殺されるような気がするから。
ミリエリアは泣きそうになりながら母の手を握り、必死で歩いていると明かりが見えた。
明かりは玄関ホールにつけられているシャンデリアが発している光だろうと気が付き、ミリエリアは思わず顔を輝かせる。
薄暗い廊下の向こうに見える明るい光は、大丈夫だと語りかけてきているかのようだ。
ミリエリアは思わず安堵し、思わず母の手を離して駆け出す。
「ミリエリア！」
母の咎める様な声が聞こえるが、ミリエリアはわき目もふらずに明かりを目指していく。
「待ちなさい、ミリエリア！」
必死の声音で呼び止める母の声に疑問を抱きながら、ミリエリアは玄関ホールを見降ろすテラスに出る。
人を安心させるかのような明るさを湛えるシャンデリアの下には、真紅の液体がぶちまけられていた。

液体の中で浮かぶように、白い腕や足、体の一部が浮いている。
苦悶を浮かべた沢山の顔が、液体の中を浮き沈みして声の様な物を発していた。
ミリエリアは自分が見ている物がなんなのか理解できず、その場に立ちすくんで階下を眺める。
その彼女の眼には、もう一つ奇異なモノが映った。
真紅の液体の中心辺りに、金の色を持つモノがいた。
美しく波打つ長い金の髪を首のあたりのリボンで一つまとめ、病的なまでに白い肌を引き立たせるように黒い貴族服を着た男。
その男が片手で持ち上げているのは、白と緑で彩られた神聖大公の儀礼服を着た栗色の髪の男性だった。
男は顔を上げて、ミリエリアを見上げて微笑む。
その顔を見て、ミリエリアは全身に鳥肌を立てる。
髪と同じ眉は細く優美な弧を描き、切れ長の目は涼やかだ。
額から顎にかける線は綺麗な卵型で、女性とも男性とも思えるような中性的な顔立ちをしている。
恐ろしいほどの美しさを持つ男に、ミリエリアは人では無いと直感したのだ。
まさしく人外の美貌と言えるそのかんばせに、ミリエリアは思わず体を引く。
「逃げ……逃げなさい、ミリエリア！　母様と一緒に、早く！」
男に掴まれている男性は、ミリエリアに気が付くと叫ぶ。
「貴様に指示を出す権利等与えておらんぞ？」
男性、ミリエリアの父の言葉に男は不愉快気に眉を潜め、手に力を入れ始める。
父はその力に苦しげに呻くが、男の手を首から外そうとしていたのを止めて叫ぶ。
「逃れ！」
この叫びと同時に、父を中心に爆風の様な力が放たれる。
ミリエリアは追いついた母に庇われて手すりの下に押し倒される

が、男は至近距離でまともに食らう。
「ぬぅ！」
驚いた様なうめき声と同時に、父は男の腕から解放される。
下に落ちると同時に、転がるように男の間合いから離れる父。
床は元の色が分からない程の血液と人体のパーツらしきモノが占めている状態なので服が血塗れになるが、父には構っている余裕がないらしい。
血に塗れた状態で立ち上がり、肩で息をしながら口を開く。
「不死者が何の用だ」
低い声音で問いかけるが、男は乱れてしまった服を整えるだけで答えない。
その姿に父が再度問いかけようとするが、男が手を上げてそれを制す。
「ここ数百年見ていたのだが……神聖国の王家も神聖大公家も、貴族達ですら皆俗物となり果てているとは思わんか？」
楽しげに嗤いながら、美貌の男は問いかけてくる。
「何を……」
「何を言いたいかは、気が付いているのだろう？　この国の神殿の主である神聖大公を差し置き、神官長が神殿内の事すべてを取り仕切っている状態なのだからな」
クツクツと喉を鳴らし、男は続ける。
「まぁ、おかげでこの国におけるエルシルの加護は随分と衰えた……筈だったのだがなぁ。神聖大公、貴様はなかなかの傑物よ。貴様が神殿内の腐敗を粛清し、真摯に祈ったのが効きエルシルがこの国に対する加護を厚くし始めた。その証として、貴様の娘が生まれながらの聖女となった」
参ったと言いながらも、その目も表情も楽しげに歪んでいる。
「いや、本当に感心するべき事柄だ。貴様の祈りは素晴らしい！　だからこそ、捨て置けんのよ！」
男の言葉に父の目は見開かれ、母は震えながらミリエリアを抱き

上げる。
「ミリエリア、目を瞑っていなさい。母様が良いと言うまで、決して開けてはいけませんよ？」
母親の強い声音に、ミリエリアは何とか一つ頷き目を瞑る。
「神よ、その御光を我に！」
母親の祈りと同時に、玄関ホールを眩いばかりの光が照らす。
そしてそれと同時に、ミリエリアを抱えた母が走り出す。
高いヒールの靴を履いているとは思えないほどの早さで、母はそのまま玄関ホールを駆け抜けようとした。
しかし、玄関扉を目前にしながら、母が転んでしまう。
投げ出してしまわないようにとしっかりミリエリアを抱きしめながら、真紅の液体の中に倒れ込む母。
「なに……ひっ！？」
突然の衝撃に、思わず目を開けたミリエリアが見たのは、ただのパーツとなっていた腕が母の足をがっしりと掴んでいる様であった。
「この屋敷の者は全て、我の下僕だ」
ニタリと嗤いながら、男は手を振る。
それを合図に、真紅の液体の中に浮かんでいた手や足、体、顔が一斉にミリエリアたち三人に向かって這いずりだす。
「奥様……痛いです、奥様……」
「旦那さま、救ってください……旦那様ぁ」
年若い執事が、召使の老婆が、使用人であった老若男女が救いを求めてくる。
体の一部が這うその様は余りにも異様で、ミリエリアは恐怖で発狂しかける。
しかし、そのミリエリアの直ぐ側まで来ていた顔が口を開く。
「お嬢様、逃げてください。わたし達もう人じゃないんです。もう、お仕え出来ないんです」
その顔は、昔からいる召使夫婦の子で仲良く遊ぶ事が多かった少女の物であった。

最近、ミリエリアの三人目の召使として教育を受ける為、余り一緒に遊ぶ事が出来なかった少女。
彼女のその悲しげな表情と凛とした声音に、ミリエリアは目を見開く。
縋ってくる沢山の死体としか言いようのない物体。
しかし、元々はこの屋敷の使用人達で、彼等のおかげで屋敷内で心地良く住まわせてもらっていたのだ。
感謝の気持ちを忘れてはいけないと、父親が言っていた。
ミリエリアは凛と顔を上げ、悲鳴を上げている母親の腕の中で手を祈りの形に組む。
「エルシル様、お願いします。彼等をお救いください。平穏を、与えてください。こんな姿にされるのは、かわいそうです。彼らには何の罪もありません。お願いします、エルシル様」
真摯に、真剣にミリエリアは祈る。
すると、ふわりと柔らかな緑の光がミリエリアを包む。
ミリエリアの気持ちを表すかのような優しい光が玄関ホールを覆う真紅の液体を蒸発させ、死体としか言いようの無かった使用人たちの姿を解けさせて行く。
「お嬢様、ありがとうございます」
光に触れた使用人達は安らいだ声で礼を言って、召されて行った。
ミリエリアは祈りの形にしていた手を解き、凛とした表情のまま母親の腕から抜け出し己の足でしっかりと立つ。
「エルシル様の御心により、わたしは貴方に救いを与えます」
武器一つない状態だと言うのに、しっかりと貴族服の男を見てミリエリアは告げる。
ミリエリアの言葉に男は一瞬目を見開き、次いでクツクツと嗤いだす。
「くっ……幼い聖女如きが、我に救いだと？　余り笑わせるな」
優雅な所作で男は嗤いながら、ゆっくりとミリエリアの方へと足を踏み出す。

茫然とした表情でミリエリアが起こした奇跡を見ていた父と母ははっと正気に戻り、咄嗟に動く。

「力よ弾け！」

手を突き出し、力強く奇跡の言霊を紡ぐ父。

突き出した手から純粋な力が迸り、貴族服の男に命中する。

男は僅かに歩調を乱すが、それだけである。

「エルシルよ、命の摂理を乱す者に女神のお力を示しください」

母が言霊を紡ぎ、両手で何かを握り構える。

瞬間、緑の光がエルシルの象徴である武器の形を取り、母の手に握られる。

いつもは淑女と言った佇まいの母は、ドレスとヒールと言う姿でありながら凛とした母親の表情を浮かべてミリエリアの前に立っていた。

「既に命を失い、生命の摂理から外れた者よ。全ての命を司る大地母神エルシルの慈悲に触れ、赦しを受けるが良い」

父は厳かに男に向けて言葉を放つ。

彼もまた、その手に母と同じ光の武器を作り出し構えている。

「ふむ……子を守る為に戦うか」

貴族服の男は愉悦に唇を歪ませ、目を細める。

「それもまた、面白い。いつまでその姿を貫けるか試してやろう」

音もなく、貴族服の男の爪が鋭く伸びる。

その姿を見て、ミリエリアはやっと気が付く。

目の前にいる男こそ、不死者でも高位に位置する吸血鬼である事に。

歪んだ唇から覗く犬歯は鋭く、ぬらりとした光沢を持っている。

「貴様らが聖職者としての仮面を脱ぎ捨て、命乞いをする様を娘に見せるが良い」

言葉と同時に、嘲りの笑みを浮かべていた男は母親の前に移動していた。

余りにも早いその動きに母は驚愕するが、光の大鎌が母の体を操

るように動き、突き出された手を防ぐ。
大鎌に触れた男の手は炎に焙られた様な音が鳴り、病的に白い肌に火ぶくれが出来る。
通常であれば激痛に悲鳴を上げる程の火傷なのだが、男は眉を少し動かすだけだ。
しかも、光の大鎌の柄に押し付ける様に、じりじりと力を入れていく。
「くっ」
小さく母は呻き、男の力に押されていく。
吸血鬼は、人の何倍もの力の強さを持つ。
母は元々神官で、戦士としての技量等無い。
それでも何とか吸血鬼の攻撃を防げたのは、現在行使している奇跡のおかげだ。
奇跡を行使して作られた武器は、使い手に危機が迫った時には体を操り攻撃を防ぐ効果がある。
だが、防ぐだけではらちが明かない。
「はぁ！」
母が押されているのを見て、父が気合を入れて光の大鎌を振る。
しかし、男はもう片方の手を使ってそれを止め、楽しげに笑うだけだ。
「武器を殆ど握った事もない神聖大公が攻撃を仕掛けてくるとはな」
嘲りの声を上げ、二人に向けた指を僅かに動かそうとした瞬間。
「力よ弾け！」
母の背後からミリエリアが姿を現し、自身が出来る最大の攻撃を仕掛ける。
幼い子供が放つ攻撃魔法は、本来なら彼に何の痛痒も与えない筈であった。
しかしミリエリアが渾身の力で放ったそれは男の胸に命中し、僅かに男の動きを鈍らせ感嘆の声を上げさせる。
「素晴らしい、ただ殺すのは惜しい娘だ」

そう言いながら、男は父と母の武器を握る。
ジュウっと言う音が鳴り、煙と肉が焼ける臭いが漂う。
その臭いに思わず顔を顰める母だったが、武器が音もなく砕け散った事に目を丸くする。
同時に、男の赤い爪が母の胸に突き刺さる。
驚いた顔で己の胸を見る母は、不意に震えて弛緩する。
「貴様！」
父は怒鳴り、武器に体重を乗せて男に少しでも傷を与えようとするが、その腕はびくとも動かない。
「安心しろ、まだ殺してはいない。体が麻痺して、動かぬだけだ」
そう言いながら、母の腕から爪を引き抜き男は嗤う。
支えを失った母は人形の様に床に倒れ、目だけがぎょろぎょろと動く。
「お母様！」
物凄い音を立てて倒れた母の体に触れ、エルシルに治癒の祈りを捧げるが麻痺を治す事が出来ない。
神官としてはまだ低位なミリエリアは、麻痺や毒を癒す奇跡は使えないのだ。
ミリエリアはそうと分かっていても、母を助ける為に必死になる。
その姿を目の端に止めた父は、娘と妻の為にと口を開く。
「ちかっ……！？」
力を叩きつける言霊を唱えようとしたが、腹に加えられた衝撃に言葉に詰まる。
その上、体が痺れたように力が抜け、自由が効かなくなった事に愕然とする。
「さて、こうして遊んでいたいのは山々だが……貴様の口を割らせるのは骨が折れそうだ。貴様の死体から直接、アレの場所を聞きだす事にしよう」
父の腹に爪を突き刺した男は嘲笑を浮かべながら、父の手が離れた光の鎌を床に落とし、足で踏み砕く。

音もなく砕け、緑の残光を残して鎌が消えさるのを父と母は絶望した目で見る。
「だがその前に、貴様らに面白い余興を見せてやろう」
父の腹から爪を抜き、男はその頸部を掴んで歩きだす。
ずるずると法衣が床とこすれ合う音が聞こえ、ミリエリアは顔を上げて立ち上がる。
己のの方へと歩み寄ってくる、底知れぬ闇を秘めた吸血鬼を強く睨みつけ手を突き出す。
「お父様を離せ！　力よ弾け！」
ミリエリアは自身が出来る最大の攻撃を放つが、男はそれを片手で弾くだけで止める。
男のその行動にミリエリアは一瞬動きが止まるが、諦めずに何度も純粋な力を撃ち出し攻撃を繰り返す。
「無駄な事をする、と言っても……止めぬか。諦めが悪い」
クツクツと嗤いながら、男はミリエリアにゆっくりと近づく。
この純粋な力を撃ちだす魔法は、未熟な子供のミリエリアには負担が大きい。
法力と精神力を削られ、顔色がどんどんと悪くなっている。
しかし、それでも父と母を助けようと無謀だと分かっても攻撃を繰り返す。
男はそんなミリエリアの姿に悦楽を覚えているかのように笑い、ふらふらになっている彼女の前に立つ。
「良いぞ、小娘。気に入った」
赤い目を細め、男は美しい貌に傲慢な笑みを浮かべる。
真紅の目は得体のしれない光に濡れ、傲慢な笑みが毒々しい程に蠱惑的になる。
その表情にミリエリアは知らず小さな悲鳴を上げ、思わず一歩下がってしまう。
「逃げるな、聖女」
そう言って父をその場に捨て、ミリエリアの腕を掴み引き寄せる

男。
本能的な恐怖に声を出す事も出来ず、ミリエリアは男を見上げると。彼は愉しげに笑う。
片腕でミリエリアを引き寄せ、捕まえた男はもう片方の手でミリエリアの襟元を摘む。
そして、物凄い音を立ててドレスの背面部分を引き裂き白く滑らかな背中を露出させた。
「何……何を!?」
ミリエリアは男の腕で暴れようとするが、片腕で男はそれを押さえつけ愉悦の表情を浮かべたまま床に転がる夫妻を見る。
口元がだらしなく開き、涎を垂らしながらもその目だけは射殺さんばかりに男を睨みつけている。
「さぁ、婚約だ聖女。今はまだ幼く、若すぎるからな。優しく、花嫁の証しをこの白く美しい背中に刻んでやろう」
睨みつける夫妻を嗤いながら、男はそう言って優しくミリエリアの背中を指先で撫でる。
その瞬間、背筋を走る不快な感覚にミリエリアは体を震わせ、次いで目を見開く。
男が撫でた場所から、ジワリとした冷たさを感じた。
だがそれは直ぐに激痛となり、背中に広がって行く。
「いあああ!!?」
背を弓なりに反らせ、ミリエリアは悲鳴を上げる。
床に倒れている夫妻に見せつける様に、男は長い指を愛おしげに背中に這わせながら己の赤い唇を舌で舐める。
その間にも、ミリエリアの悲痛な悲鳴は響く。
目を閉じる事も出来ない夫妻は、自分達の目の前で娘の背中に刻まれるヴァンパイアの花嫁の証しに絶望の色を濃くする。
「聖女、お前が十七になったら迎えに来よう。エルシルの加護の厚いお前を闇に貶め、我の与える快楽に酔わせてやろう」
クツクツと嗤い、悲鳴を上げ続けるミリエリアを床に降ろし夫妻

の前に立つ。
「安心するが良い。貴様らの愛おしい娘は、我の永遠の花嫁にしてやろう。これほどの力に溢れているのだ、我との間に出来る子はさぞ強かろう」
夫妻の絶望を深くしながら、男は父を持ちあげその首に齧りつく。
肉と骨を噛み砕きながら血を啜り、空いた手で母を持ちあげる。
その瞬間、男の体がほんの僅か揺らぐ。
誰かに押されたかのような動きだったのだが、男にはそれをなしたのが誰なのか分かっていた。
血塗れになりながら、男は振り返る。
「やぁ……めぇ……」
床にうつ伏せになり、ミリエリアが腕を突き出し悲鳴を噛み殺しながら言葉を紡ぐ。
十二歳という年齢でありながら、強靭な精神力を持っている少女に吸血鬼の唇がきゅっとつり上がる。
しかし、ミリエリアはこれが限界だったのかパタリと腕を落とし、気を失ってしまった。

第四十話

「これが、その時につけられたヴァンパイアの花嫁の証し」
そう言いながらミリアは法衣もろとも下着をはだけ、背中を見せる。
戦士とは思えないほど女性らしく優美な線を露わにした美しい背中には、白と黒で構成された紋様が刻まれていた。
黒く塗りつぶされた円を覆うかのような白い円。
白い円の周囲には黒と白が混じり合い、残光の様に見えた。
ミリアの白い背中を見て思わず顔を赤らめたカズヤだが、呪いの様なその模様に息をのみ食い入るように見ている。
「なんかを象徴している模様なのか？　なんかに似てる気もするんだけどよ……」
カズヤの疑問に、ミリアの隣にいるアリアは頷く。
「はい。吸血鬼達はそれぞれ自分達を象徴する模様を持っています。それは、自然物に負の現象を足して描かれると言われているので、何かに似ていたりどこかで見た事があるモノなのです」
「通常、花嫁と呼ぶ存在を作る吸血鬼は不死者としてもかなり高位だ。話を聞いた限り、かなりの高位……貴族の位だろう」
イザークはそう呟き、アリアは感心した表情を浮かべて同意する。
「わたしも、そう思います。ですが文献を調べる限り、姉さんに刻まれた花嫁の証しを持つ貴族の吸血鬼が見つかりません。恐らく、まだ知られていない新興のヴァンパイアではないかと思うのですが……」
「違うよ」
アリアの言葉に、志希は青ざめた表情で口を挿む。
「ミリアに刻まれたその証しは、花嫁を娶らないから知られていないだけ。むしろ、知っている方が遥かに危険だ」
志希はそう言って、ミリアの背中の模様を指で示す。

「その模様は……中天に座して地上に威光を落とす、世界の象徴。時に実りを促す為に優しく、時に人を罰する為に苛烈に大地を照らす太陽。そして、その太陽を喰らい世界を闇へと染め上げる月を表したモノ」

確信を持って言葉を紡ぐ志希に、アリアは眉を潜める。

「しかし、そんな模様は今まで見た事も聞いた事もありません」

「当たり前だよ。その証の持ち主は、本来花嫁なんか娶らない」

志希はきっぱりと、アリアを見て断言する。

「花嫁を作り、己の勢力を盛り上げるのは貴族だけ。そしてミリアの背中に刻まれた証しは、その必要もない貴族の頂点に立つモノが持つ」

志希はゆっくりと、言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「ミリエリア・アシェル・ミシェイレイラ。この名を持つ聖女を花嫁と定めたのは、太古の昔から存在するヴァンパイアロード。魔神と呼ばれる存在に最も近い、恐るべき魔物だ」

確信を持って告げた言葉に、反応するのはカズヤとアリアだ。

「何でお前がそんなこと知ってんだ？」

「そうです！　旧い魔物だと言うのであれば、シキさんが知っているのはおかしいじゃないですか！」

アリアの取り乱した言葉に、志希は深く息を吐き苦笑を浮かべる。

「その事を話す為に、私もここにいるんだ。取り敢えず、ミリアは身支度をしながらで良いから聞いてね」

静かにそう言うと、ミリアは慌てて服を整え始める。

アリアもそれを手伝いながら、嘘を許さない目で志希を見る。

不信感もあらわなそのアリアに小さく笑うと、イザークが嘆息を零す。

「何から話すつもりだ」

問いかける言葉に、志希はイザークが彼なりに心配しているのだと感じた。

「取り敢えず、最初から最近の事まで全部。カズヤにもイザークに

も、言っていない事も全部話そうと思うんだ」
「そうか」
イザークの静かな首肯に、志希は気持ちが軽くなるのを感じる。
イザークはただ、あるがままに受け入れてくれるような気がして、それが嬉しいと志希は感じ、祈る。
せめてイザークだけは、自分を嫌わないで欲しいと。
そう思っていると、ミリアの身支度が終わり先ほどの場所に腰を下ろす。
アリアはその姉を守るように座り、その手には杖を持って志希を警戒する。
志希の得体の知れなさに、警戒心を呼び起こされたのだろう。
カズヤは何とも言えない表情でそれを見てから、志希を促すように頷く。
空気が緊迫する中、志希は一つ深呼吸をしてからゆっくりと口を開く。
「私、種族で言ったら元人間なんだ」
唐突な言葉に、アリアやミリアはきょとんとした表情を浮かべる。
しかし、志希はその二人にかまわず言葉を紡ぐ。
「人は死ぬと、魂だけになって世界の流れに乗る。その流れは大河で、終着点は世界を支える大樹の側にある泉。この泉は魂の自我と知識を洗い流し、まっさらにしてしまうんだ。でも、この泉で自我を洗い流されないモノがいる。それが世界を支える大樹にも吸収されずに目を覚ましたら、ある種族へと変質する資格を持つんだ」
志希の語る言葉に、カズヤは理解不能と言った表情だがミリアとアリアは真剣に聞いている。
死後の世界の話は、神官にとってはタブーも同然だが魔術師であるアリアには興味深い物なのだ。
「その種族は、銀の髪に金の瞳を持ち、額に証しと呼ばれる物を持っているの」
そこまで言ってから、志希は自身の額を覆う布を取り去る。

暗闇の中でも煌めき、存在を主張する『神無の鳥』の証し。
アリアとミリアは志希自身が、彼女の語る容姿その物を持つのを確認して考えるように眉を潜めている。
そんな二人に苦笑を浮かべ、言葉を続ける。
「種族の名は、『神無の鳥』と呼ばれているの。人以上の力を持ちながら、神になる事も出来ない狭間の存在。神と世界の庇護がなければ、生きていけない半端なものなの」
そう言いながら、志希は手を伸ばす。
指先に現れるのは光の精霊で、光を零しながら志希の爪先に唇をよせて笑う。
風の精霊がそよ風を起こし、火の精霊が焚き火の中で乱舞する。
この世のすべてに宿る精霊達が、志希の存在を歓迎しているのだと証明するように小さな現象を起こす。
「世界の根底で『神無の鳥』になったモノは、行き先を決める。大概の『神無の鳥』は神界に行って、神の先兵になるけれど……私は人界を希望したの」
「何故？」
神界に行けるのなら、人界で苦労する必要はないだろうとミリアは問いかける。
「私、出だしが異世界人だから」
にっこりと笑い、志希は言う。
「何も分からないままこの世界に来て、速攻で殺されて『神無の鳥』になったの。この世界の事が全く分からない、どんな人が生きているのか、どんな生活様式なのか全然知らない。だから、この世界を知りたくてこの世界に来たの」
志希の言葉に、ミリアは呆れた表情を浮かべる。
「そ、そんな事で……？」
思わず、と言ったような呟きに志希は笑顔で頷く。
「そう。些細な事でも、良いじゃない。それで、これ重要と言えば重要なんだけど……」

志希はほんの少し、躊躇ってから口を開く。
「私、死なないんだ」
出来るだけあっさりと、何でもない事のように志希は口にする。
「は？」
「え？」
「……ああ、なるほど」
アリアとミリアのぽかんとした声に対し、カズヤは何か納得した表情で手を打つ。
「そもそも、死んでから誰の手も借りねぇで生き返ったって志希は言ってたんだ。それ考えたら、死なねぇってのも納得できるな」
カズヤはうんうんと頷き、納得する。
「ちょ、ちょっと待ってください！　普通、蘇生するなんてかなり高位の司教にお願いしなくてはいけないんですよ！？」
アリアは思わずそう突っ込むと、イザークとカズヤは苦笑する。
「その話は、クルト達と散々したからなぁ。で、議論を止めたのがベレントからのワキュリーの神託だ。シキなる娘、害する事ならずってな」
ミリアよりも高位に位置するベレントの言葉を聞いた瞬間、ミリアは慌てて聖印を握って瞳を閉じる。
恐らく、エルシル神からの神託が下っているのだろう。
「賜り……ました」
ミリアの口からこぼれた声は、何とも言えない感情を伴っている。
「それでは質問を変えますけど、シキさんはどうして殺されてしまったのですか？」
アリアは冷静であるようにと深呼吸をしてから、もう一つの疑問点を口にする。
志希の様子から一般人であった事は見て取れる。
そもそも異世界人で元から戦士であったと言う事は、殆ど無い。
時折異世界人が現れるとは書物で書かれているが、アリアの主観では見た事がないのである。

「そんとき、妖魔と戦争やってたんだよ。ほら、二月前に撤退してきたって言うの聞かなかったか？」
カズヤの言葉に、そう言えばとアリアは頷く。
冒険者や傭兵を連れて辺境伯が妖魔の軍隊に突っ込み、何とか引き分けて撤退してきたのは記憶に新しい。
「敵陣で、変な動きがあると言う事で俺が単身で潜入し、術者と召喚されたと思しき黒髪の女を切り捨てた」
イザークが淡々と、その時あった事を口にする。
「え……」
驚きの声は、やはりアリアとミリアからだ。
「私、イザークに殺されたの」
苦笑しながら、志希は二人に告げる。
「あの時は、きちんとした成人女性としての私だったのよ？　カズヤと同い年で、お化粧もしてお仕事に出掛ける途中だった。それが、気が付けば全く知らない場所で後ろから胸を一突きされたわ」
何でもない事のように語る志希に、困惑するのはアリアとミリアである。
普通、自分を殺した人物になつくなどあり得ないと思うからだ。
しかし、今それを議論する気はないので黙っていると、カズヤが話を引き継ぐ。
「で、生き返った後のシキを発見したのもオレ達のパーティだったんだ。それで、そのままオレ達が保護してたんだ。その途中で精霊使いっぽい能力を持ってるっつーことで、冒険者志望だったのも踏まえてパーティを組んだんだ」
カズヤの説明に、ぽかんとする表情しかできない二人。
「し、シキさん……本当にそれでよかったんですか？」
思わず問いかけてくるアリアに、志希は頷く。
「だって、誰かれ構わず殺す人じゃないって分かったから。それに、銀貨五十枚もお金貸してくれて色々と面倒見てくれるのを見たら……うん、信じられるって思ったの」

志希は大人びた表情で微笑み、一つ息を吐く。
「今回、瀕死から再生した状態だから体が慣れてなくて気持ち悪くて体に力が入らない感じみたい。あと、死んでから流れついた泉に浸かっていたから魂に知識を蓄えてはいるけど、実際に知っている状態じゃないから思いだすのに時間がかかるの。実際に見たり、何かのきっかけがないとそれが奥から浮かんで来ないからね」
「その知識から、姉さんの証しが吸血鬼の王の物だと分かったのですか？」
アリアは真剣な表情で、志希に問いかける。
「うん、そう」
志希もまた、真剣な表情でアリアを見返して頷く。
嘘を吐くつもりも何も無い志希は、ただ真剣に二人を見据える。
その志希をしばし見つめていた双子だが、ミリアはふっと息を吐く。
「信じられるわ。エルシル様に言われたからだけじゃなく、ね。出会った時から、シキちゃん……いえ、シキは素直な人だったもの」
ミリアはそう言って、肩を竦める。
実際、志希の異常さを二人は感じていた。
それでも良いとパーティを組もうと言いだしたのは、ミリアとアリアの二人だ。
「……そうですね。お互い、隠し事をしたままパーティを組んでいたんです。それを一方的に責めるのは間違ってますよね」
そう言って、アリアは肩から力を抜いて微笑む。
「んで、これからどうすんだ？」
カズヤは話がひと段落したと見て、問いかける。
「私は、最初に言った通りだよ。冒険者をしながら、世界を見て回りたい」
志希は間髪いれずに答え、双子を見る。
「わたし達には、目的があります」
アリアはそう言って、申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「一つは花嫁の証しを刻んだ吸血鬼を退治する事だろうが、もう一つはなんだ？」

イザークの問いに、ミリアは答えようとして躊躇する。

話をして良い物かどうかと考えているのであろうその姿に、アリアが口を開く。

「協力をお願いするのであれば、全部話すべきです。姉さん」

アリアの言葉にミリアは一つ頷き、躊躇いを振り切るように深呼吸してから顔を上げる。

「神聖大公は、もう一つ重要な役割があったの」

真剣な表情で、ミリアは三人に告げる。

「ミシェイレイラ神聖国の初代国王は、エルシル神から建国するようにと言う御神託と同時に聖遺物を与えられたと言われているわ。その聖遺物を守る為に、何代か前の王とその兄弟が神聖大公家を起こしたの」

そこまで言ってから、ミリアは息を吐く。

「それなら、ミリア達は国を出ねぇ方が良いんじゃねぇの？　多分、その聖遺物ってやつは国宝なんだろ？」

カズヤの純粋な問いかけに、ミリアもアリアも表情を強張らせて口を引き結ぶ。

「カズヤ。彼女達は、もう一つの目的と関係あるからこそ神聖大公家の役割を俺達に話をした。その上で、現在継承権を持たないと言う言葉を考えれば分かるだろ」

イザークの言葉に、志希が息を飲む。

「まさか、国宝が盗み出された？」

志希の呟きに、アリアは深い息を吐いて頷く。

「はい。だからこそ、神聖大公家を襲ったのだと思います」

肯定するアリアに、カズヤは青ざめる。

「吸血鬼の花嫁にされたが故に姉さんの聖女認定は外され、国宝であるエルシル様の聖遺物を盗まれたが故にわたし達の継承権は抹消されたと言う事です」

「王族として、聖女として復権する為にわたし達は冒険者になったのよ」

アリアとミリアの言葉に、カズヤは絶句してしまう。

七年もの月日をこの世界で過ごしたカズヤには、双子の言っている事がどれだけ難しいか知っている。

何より、証しを刻んだ吸血鬼が貴族では無く王と言う地位にいる以上、勝ち目は殆ど無い状態だ。

「どんだけ無理難題か、分かってんだろ？」

カズヤは震える声で、二人に問いかける。

「ただの吸血鬼じゃねぇ、王とか言うとんでもない化けもんだぞ？　そいつ相手に、お前ら二人で勝てると思ってんのかよ！」

「出来るわけないじゃないですか。わたし達二人では貴族ですら、手に余ります」

「だったら……」

「でも、諦める訳にはいかないんです！　わたしはまだ、学者として魔術師として立って行ける。でも、姉さんは違う。生まれた時から聖女で、神に仕える為に生きてきた。それを目の前で父と母を殺され、穢されたと言って勝手に何もかもを奪われてしまった。わたしはそれを、赦す事なんて出来ないんです！」

今まで堪えて来た物を吐き出す様に、内向的なアリアが声を荒げる。

「ミシェイレイラと言う国がどうなろうとも、わたしには関係ありません。ですが、姉様の名誉だけは……見過ごす事が出来ないんです！」

肩で息をして、アリアは涙を浮かべながらカズヤを見る。

「良いのよ、アリア。わたしの事なんて気にしなくて」

ミリアはアリアの言葉に驚くと同時に、胸が熱くなっていた。

アリアが塔の学院に入学してから再会するまでの５年間、殆ど顔を合わせていなかったと言うのにこれほど思っていてくれた、それが嬉しくてたまらない。

しかし、そのミリアの感激に水を差すようにイザークが冷静な声音で問いかけてくる。
「……さて、それでどうするつもりだ？　花嫁の証しから発せられる瘴気を何かで抑え、力をつけてから奴と対峙する予定だったようだが」
イザークの問いに、アリアが震える声で答える。
「出来れば、皆さんに手伝っていただきたいのです。わたし達二人でダメなら、協力者を募るしかできません」
「なるほど」
アリアの答えに頷くが、イザークは返事をしない。
考えるようなそぶりを見せていると、カズヤがため息をつく。
「正直、命あっての物だねだと思うんだがなぁ……」
「賢明な冒険者であれば、そう言うだろう」
イザークがそう頷くと、アリアが低い声音で問いかける。
「では、パーティはこれで解散と言う事ですか？」
「はやまんなって」
アリアの言葉に、カズヤがそう言って苦笑する。
「本来、この話を持って行くのは金か白金の冒険者だと思うんだけどよ……まぁ、知っちまったわけだし。何より、オレ達は仲間だろ？」
なぁ？　と、カズヤはイザークを見る。
「俺もカズヤと同意見だが……吸血鬼の王とは面白い相手だ。復讐と言うのが気に入らんと言えば気に入らんが、まぁ良いだろう」
イザークはそう言いつつ、自身の大剣を見る。
「私も、協力するのは吝かじゃないよ」
志希はそう言って、二人に微笑む。
「皆で経験を積んで、強くなれば必ず倒せる筈だしね。それと、吸血鬼の王がミリアを花嫁にしたいって言うんだったら、聖女としての力は最上級だと思うんだ。だから、きちんとその力を引き出せるようにすれば絶対勝てると思う」

「最上級……？」
ミリアはきょとんとした表情で、志希を見る。
「そう、最上級。ミリアの体はかなりの回復能力を持っているんでしょう？」
志希の確認の為の問いかけに、ミリアは頷く。
「回復能力が高い聖女は、加護を与えている神が失いたくないと思う聖女なんだよ。力の強い聖女や聖人は、吸血鬼達にとっては天敵とも言えるのと同時に魅力的な力の源だ。厚い加護を持つ人間を堕落させれば、その力は堕落させた吸血鬼のモノになる。だから、聖女や聖人は大切に育てられるんだよ」
ミリアは志希の説明に何とも言えない表情を浮かべ、頷く。
説明が本当であれば、両親と神殿からの過保護とも言えたほどの干渉に納得がいくのだ。
「でも、神殿は何でミリアを保護しないの？　聖女認定が外れてるとか言っても、それは人が定めた物であってミリア自身は変わらずに聖女として在る。エルシル神だって、指をくわえて見ている筈ないと思うけど」
志希のその言葉に、カズヤが肩を竦める。
「神殿も、何かあるんじゃねぇの？　神に仕えるって言ったって、結局人間だしよ。神の声が聞こえない紛い物の神官だって、世の中には居るしな」
カズヤの言葉に、ミリアは頭を振る。
「それもあるけれど、もう一つ理由があるの」
そう言いながら、ミリアは法衣の下から聖印を取り出す。
それはかなり古びているが、神々しい何かを感じさせる聖印だ。
以前、街中で見た物とはまるで印象が違うそれを見た瞬間、志希は思わず声を上げる。
「う……わぁ」
感嘆とも呆れともとれる声音は、志希の目には何かが見えていると言う事を物語っている。

「シキには分かるのね、やっぱり」
ミリアはそう言いながら、普段胸元に飾ってある聖印も引っ張りだす。
これから分かるのは、ミリアが常に二つの聖印を身につけている事だ。
「この聖印は父である神聖大公が、わたしの為にと新調した聖印で。こちらの古い方は、国を出る際に父と懇意にしていた司祭様から証しの瘴気を封じ込めるようにと頂いた物なの」
ミリアの説明に志希は頷き、深く息を吐く。
そもそも、ミリアが所属する神殿自体が彼女を保護する気が無いのだろう。
力の強い不死者退治は難しい。
アンデッドキラーを擁する神殿であろうとも、資格をはく奪された聖女を守るのはマイナスだと言う意識が働いているのかもしれない。
そんな損得勘定で動いている人間ならば、彼女を保護せよと言う神の声は聞こえないだろう。
それでも、瘴気を抑え最強の吸血鬼からすら隠しおおせるような聖印を与えているのは最後の良心なのか。
それとも、冒険者として動いている最中に死んでほしいと思っているのか。
志希はそこまで考えて、ゆるく頭を振る。
ミリアの属する神殿がどの様な思惑があるのか全く分からないし、それを知った所で自分達がする事は変わらないのだ。
改めてそう確認してため息をつくと、イザークが志希を横抱きにして立ち上がる。
「話し合いは、これくらいで良かろう？　シキもまだ本調子ではない。まだ何かあるのかも知れんが、移動は馬車だ。打ち合わせにしろ話足りない部分は帰路でした方が効率も良い」
そう言って、イザークは志希に有無を言わさずに馬車へと体を向

ける。
「そうだな。一先ず、体を休ませる方が先だよな」
カズヤの同意する言葉を背に、イザークは志希を抱えたまま馬車の中へと入るのであった。

第四十一話

ふっと、志希は目を覚ます。
暗闇に包まれている馬車内は、志希の首元やそのほか様々な精霊達の姿で明るく照らされている状態だ。
それ故、この幌馬車の中には人が居ないのが見て取れた。
どうやら、他の皆は外で眠っているらしい。
そろそろと寝がえりを打ち、気持ち悪さがだいぶん消えているのを確認する。
小さく息を吐き、音を立てないようにゆっくりと体を起こして自分の体を見下ろす。
自身の生命力が明かりの代わりをしており、今自分がどんな服を着ているのかがよく見える。
そこで、ようやく志希は違和感に気が付いた。
変異種と戦っていた時は若草色のローブを着ていて、その下には革のチョッキを身につけていた筈だ。
更にその下に少し薄手の麻のシャツを着ていた筈なのだが、今はそれらとは全く違う麻のシャツを着ていた。
そもそも、体に穴が空いたと言う事は服どころか下着まで血塗れになって酷い事になっている筈である。
志希は掛けられていた毛布を捲り、自分の姿を確認して首を傾げる。
血塗れの痕跡が全く見えないので、着替えさせられたのだろうとは想像が付く。
下着の方も確認してから、深いため息をつく。
十中八九、着替えさせてくれたのはアリアとミリアであろう。
だとしても、二人に自分の貧相としか言いようの無い体を見られるのは正直勘弁願いたい。
「せめて胸がもう少し……いや、体型的にこれでいいのかな？」

思わず呟きつつ、自分の胸を見下ろす。
だが、やはり小さいと言わざるを得ないので、志希としては何やら物悲しさを感じる。
「いや、言っても仕方がないよね」
うん、と一つ頷いてからゴソゴソと移動して、馬車の後ろに移動して布をめくると。
「如何した？」
と、低い声音に問いかけられる。
そちらの方に視線を向けると、焚き火の前に座り番をしているイザークが見えた。
「ん、起きちゃったから水でも飲もうかなって思って」
焚き火から少し離れた場所で眠っている三人を起こさぬようにと志希は密やかな声で返事をすると、イザークはそうかと頷く。
志希は出来るだけ音を立てないようにしながら馬車から降り、イザークの直ぐ横へと移動する。
イザークの隣に座る志希に、彼は水袋を手渡す。
「ありがとう」
水袋を受け取り、礼を言ってから志希は水袋に口をつけて一口だけ水を飲む。
特に欲しいとは思っていなかったのだが、改めて水を口にした事で自分が酷く乾いていた事に志希は気が付く。
水が体に染み渡る様な感覚を覚えながら、志希はイザークに水袋を返す。
「美味しかった」
志希の感想に小さく笑い、イザークはゆっくりと口を開く。
「体調はどうだ」
「ん。さっきみたいな気持ち悪さは、もうないよ。多分、きちんと治ったんだと思う」
「そうか」
短い会話。

いつも通りの筈なのに、志希はほんの少しだけ違和感を感じる。
イザークの声に、いつもの覇気がないように聞こえるのだ。
そう思った瞬間、イザークが己を助ける為に振るった剣の事を思い出す。
霞がかかったような意識の中でも、はっきりと覚えている。
イザークの大剣が光を纏い、自分に向かって振り降ろしていた光景を。
もっとも、その直後から意識は途切れ、気が付いた時には全て終わっていた。
「イザーク……ちょっと聞きたい事あるんだけど、良いかな？」
先ほどよりもなお小さく潜められた声で、志希は問いかける。
「何だ？」
志希と同じ様に潜めた声で、イザークは促す。
「あのね。イザークの大剣って、凄い聖剣の類？」
一瞬、イザークが息を詰める。
ほんの少しだけ沈黙してから、イザークは息を吐きながら頷く。
「アレは俺の家系に伝わる魔剣だ」
淡々とした声音に、志希は顔を上げてイザークを見る。
聖剣と魔剣は似て非なる物である。
聖剣は担い手を庇護し、何一つ損なう事なく振るえる剣だ。
だがしかし、魔剣は担い手の何かを消費してこそ力を発揮する剣。
必ず代償を求め、担い手を破滅させることが多いからこそ“魔剣”と称されるのである。
「そんな……」
志希は思わず絶句し、イザークを見上げる。
いつもより疲れた様なその表情は、恐らく魔剣の力を使ったからなのだろうと志希は直ぐに悟る。
「俺はどうやら、この大剣と相性が良いらしい。ほんの僅かな疲労を感じるだけで、済んでいるからな。俺以外の者がこの大剣の力を解放すれば短くて半日、多くて七日は寝込む事になる」

そう言ってから、ほんの少しだけ苦笑を浮かべイザークは志希の頭を撫でる。

「相性が良いと言っただろう。それほど、心配するようなことでは無い」

優しく諭されるが、志希はまだ納得できないのかその表情は曇ったままである。

「でも……魔剣だよ？　本当に大丈夫なの？」

志希の心底からの心配そうな声音に、イザークは優しく目を細める。

「大丈夫だ。この魔剣は、普段から力を使えぬようにと封印されている。使い手が合言葉を唱えない限り、俺が疲れる事や寝込むような事はない」

そう説明されて、志希はやっと安堵した表情を浮かべて微笑む。

「それなら、良かった」

「持つだけで疲労する様な剣は使えんからな。この魔剣を作った人間は、いざという時に使える様なモノにしたかったのだろうな」

横に置いた大剣を見ながら、イザークは呟く。

「そうだろうね……きっと」

志希は頷きながら、目を閉じる。

魔剣と聖剣の違いは、その剣に籠められた思いである。

聖剣は正の思いや聖遺物を封じ、作られた物だ。

だが、魔剣は聖剣の対極にある。

負の思想を封じ、邪神や魔神の力を封じて作られた物なのだ。

作られた形として、人には過ぎた力を与えて担い手を壊す。

壊れるのが魂なのか、精神なのか、肉体なのかの違いだ。

それ故、魔の剣と冠されているのである。

通常、魔剣の類を代々伝えているような家系は過去に多大な功績を残し、それを封じる役目を負う筈だ。

だがしかし、イザークは不老不死とも言われているアールヴの一族で、更にその魔剣の担い手だ。

しかも、魔剣に関する文献が日本語で記されていると言う話を以前に聞いた覚えもある。

それを考えれば、イザークの家系その物か、伝えているという大剣が随分と特殊なモノであるのが窺える。

そう思い至った志希は、イザークを見る。

この事を、長くパーティを組んでいるカズヤに話しているのかが気になったのだ。

「カズヤには、だいぶん以前に話してある。何せ、この大剣を使ったのはあいつを助けるためと言うのが最初だったからな」

イザークは志希の問いかけたかった事を、先に口にする。

「そもそも、カズヤの師匠は俺の知り合いだ。あいつが独り立ちする際、不安だからと俺に預けられたのが組むきっかけだったな」

苦笑しながら、イザークがカズヤとの出会いを語る。

「あいつは最初、酷くやる気がなく投げやりだった。そんな相手といつまでも組むのは御免だったと言うのが、最初の印象だったな」

くすりと笑い、イザークは目を細める。

彼のその表情はとても懐かしそうで、志希はイザークを見上げたまま耳を傾ける。

「その後、一度だけ俺はこの大剣の力を使った。俺達二人の命が危ういと、まさしく絶体絶命だった。その時、カズヤが奮起したんだ。死にたくないと言う事を言っていたが……どうやら、俺を巻き込んだと思っていたらしい。大剣の力を使いどうにか窮地を脱出し、街に戻ってからあいつは変わった」

そこまで話し、小さく喉を鳴らしてイザークは笑う。

「俺の疲れが取れたころに来て、剣での戦い方を教えて欲しいと来た。どこか投げやりだった表情はなりを潜め、良い顔をしていたのが印象的だったな」

イザークはそう言ってから、志希の頭を撫でる。

「さ、もう良いだろう。明日は早い、馬車に戻って寝た方が良い」

志希はイザークに促されるが、じっと彼を見上げて動かない。

最後に一言、どうしても聞きたい事があったのだ。
決して死なない人間ですらない生き物である事を、イザークがどう感じたのか。
それを知りたい。
カズヤはあるがままに受け入れ、ミリアとアリアもまたエルシル神と言うクッションを得て受け止めてくれた。
しかし、イザークは志希の告白に何一つ反応を返さなかった。
それが、どうしても気になるのだ。
だがそれを問うたところでイザークが答えてくれる保証もなく、それ以上に嫌がられるのではないかと言う恐れに口を開く事が出来ない。
揺ら揺らと気持ちが揺らぎ、どうして良いかが分からなくなった瞬間。
イザークが僅かに息を吐く。
それが嘆息に聞こえ、志希はびくりと体を震わせる。
「何がそんなに悲しいんだ？」
囁く様に言われ、志希は小さく首を傾げる。
「泣きそうな表情をしているぞ」
「何でも、ないよ」
イザークの言葉に、志希は思わず顔を伏せ小さく返すが、声は震えている。
すると、イザークが小さく嘆息を零し志希の頭をポンポンと撫でる。
「ため込まれると、困る不満や不安もある。話すだけ話して、すっきりしておけ」
イザークはそう言って、志希を促す。
志希は口を開こうとするが、どう話していいのかが分からなくて結局言葉にならない。
それでも、これは自分が聞かなくてはいけない事だと志希は言葉を絞り出す。

「私が……死なない、人でも亜人でもないモノなの。気持ち悪い、かな」

震える声音での問いかけに、イザークは深く息を吐く。

「気持ち悪い、と言うのは感じなかったな。ただ、全ての感覚をきちんと受けているのであれば、精神には相当な負担がかかるだろうとは思った」

イザークはそう、志希に答える。

志希は思わず顔を上げ、イザークを見る。

痛みや全ての感覚を受けるとは、一言も語った覚えがないからだ。

志希のその驚く表情を見たイザークは苦笑し、志希の頭をポンっと撫でる。

「志希の今の様子を見れば、分かる。死に繋がる傷を受け、悲鳴を上げていたのも見ているからな。お前はまぎれもなく“人間”である事も、きちんと知っている。だから、あまり自分を卑下するな」

イザークの真摯な声音と目に、志希は目の奥が熱くなる。

そして心の底から、イザークとカズヤに拾ってもらって良かったと思う。

「うん……うん！」

志希は頷き、顔を伏せる。

人と違う事は基本的に隠さなくてはいけないが、そんな事をせずとも良いと言ってくれる信頼できる人間に出会えたことが嬉しい。

そして、それがイザークであった事が何よりも嬉しい。

そう思った瞬間、志希の目から涙が零れる。

「ありがとう、イザーク。ありがとう」

嗚咽を零しながら、何度もお礼を言う。

その志希をイザークはそっと抱き寄せ、優しく背中をさする。

「気が済むまで泣いておくと良い」

イザークの優しい声音に、志希は小さく頷きながら泣き疲れて眠るまで、そのままの体勢で涙を零すのであった。

幕間（前書き）

カズヤがこちらの世界に来てからの経緯と、現状に対する心境を語ってもらいました。
なんか、急に一人称ッぽい何かになってますが箸休め程度と言う事で読んでくださると大変嬉しいです。
また、文章が短くてすいません。

幕間

気が付くと、学生服を着たままで草原に立っていた。
それが、この世界での始まりの記憶だった。
来年から受験だと言う事で勉強漬けの毎日だったのに、ある日突然言葉も通じない世界に放り出されたのだ。
最初こそ、映画やアニメ、小説とかで見た異世界に召喚された勇者や王様と言う設定が浮かびはしゃいでいた。
だが、いつまで経っても誰一人迎えに来なかった。
草原の真ん中で、食べ物も飲み物も持っていない状態。
直ぐに死んでしまうと悟り、迎えが来たら文句を言ってやろうと思い移動を始めた。
しかし、いくら歩いても人っ子ひとりいなかった。
遠くに見えるのは森の木で、反対側には果ての無い草原。
食べ物を求めて森に入り、そこで初めて命の危機に出くわした。
沢山の狼に囲まれ、足が委縮して動けなくなる。
それが普通の人間だ。
しかし、この時運よく魔法使いの爺さんに助けられた。
それが、オレがこの世界の言葉を知るようになったきっかけだった。
そして運が良いっていうのは、この時だけのことじゃないのも爺さんの所にいて知った。
異世界人が時折この世界に現れるらしい。
そして、大半の異世界人は言葉が分からないまま魔物や獣に襲われて殺されるか、奴隷商人に捕まって売り飛ばされるらしい。
翻訳の魔法をかけてもらい、話をした際にそう聞かされた。
夢見がちだったオレは愕然として、そして現実を突き付けられて暫く腐っていたんだ。
だけど、そんなオレを見かねた爺さんがまず言葉を教えようとし

てくれた。
翻訳の魔法って、結構疲れるらしいからな。
それで、渋々言葉を習い、字を習い、ついでに共通語だけじゃなく各国の言葉を習って行った。
何せ、自称目が悪い魔法使いの爺さんだ、手紙を俺に読ませて手伝わせるとか言い出すんだもんな。
まぁ、あの時は多分、爺さんなりの優しさだったんだろう。
今はそう思う。
外の人間に触れて、立ち直って欲しかったんだろうな。
爺さんはオレが狼に襲われた森の近くにある村の先生をやっていたらしく、文字の読み書きや簡単な計算とかを教えていたらしい。
素質のある子を見つけたら魔法の基礎を教え、推薦状を持たせて塔の学院に行かせていたらしい。
その時に、オレには魔法の才能がないとはっきり言われたのが結構きつかったな。
戦士の素養を見るとか言うので練習用の剣も振って見たけど、その時は全然ダメで、持ち上げて二回か三回振るだけで精いっぱいだった。
そりゃそうだよな、甘やかされた十五のガキが直ぐ振れる訳ねぇっての。
爺さんの友人の精霊使いとかにも会って、ちょっと瞑想とかその辺をしたけど全然だめだった。
まぁ、そもそも魔力が殆ど感じられなかったらしいけどな。
だから、オレが盗賊になったのは必然だったんだ。
この時は魔法使いの爺さんから読み書きや計算の方は合格を貰っていたからよ、きちんと書物を読んで役人になるのも道だと言われていた。
でもなぁ、オレはそう言うのはなんか違うって思っちまったんだ。
まぁ、相変わらず夢見がちだけどよ。
だからまぁ、オレは冒険者を目指しちまった。

爺さんが昔、金の冒険者だって聞いてたのも利いたな。
この事を爺さんに言ったら、爺さんから師匠を紹介された。
辛かったら何時でも帰って来いって、まるで孫に言うかのような事言ってくれたのは正直嬉しかったのを覚えてるな。
でも、オレも意地になってたからよ……絶対に帰らないって返しちまった。
あの時の爺さんの顔、今でも忘れらんねぇなぁ……一回、暇見て顔見せに行こうと思う。
うるせぇ、笑うな！　続きはなさねぇぞ！
……うし、それなら話してやる。
んでまぁ、師匠の所で一年盗賊として修業した。
爺さんの所で一年過ごして、師匠の所で三年。
まぁ、師匠にはすげぇしごかれてよぉ……何とか独り立ちの許可を貰ったら、今度はイザークと暫く組めって言われて正直腐った。
オレはそんなに頼りないのか！？　ってな。
まぁ、この通り童顔だし、あん時もまだあんまり筋肉付いて無くて師匠も不安だったんだろうなぁ。
爺さんからよろしく言われてるのも、多分あったんだろうな。
それ以上に、オレが人や動物を傷つけるのに躊躇いがあったのが原因だったんだと思う。
今考えれば、だけどな。
その時の俺は分かんなくて、だから腐ってやる気があんまりなかったんだよなぁ。
イザークもそれが分かっていたからか、最初すげぇ扱いがぞんざいだった。
ああ、当たり前だよなぁ。
イザークってよ、やる気無い奴に対して徹底的に冷たいからな。
んで、オレはオレで甘えた奴だったから、師匠に頼まれたくせになんも教えねぇ！　って思って、話もしなかった。
んで、その転機があれだ。イザークと二人で受けた、魔物討伐。

オレ、正直言って自信無かったんだよ。
さっき言ったけど、人や動物に傷を負わせるとか言うのに躊躇ってたからな。
だが、そのせいでイザークが大きな怪我をして、オレがどうにかしなくちゃって思ったんだよ。
どんなに嫌な奴だって思っても、オレを守ろうとして怪我を負ったのを見ちまったから……見捨てて逃げろって言われても、聞かなかったんだ。
今思えば、すんげぇ無謀だよな。
まぁ、この時にやっとオレはオレを庇護していた世界に決別できたんだけどな。
元の世界に戻るのはもう無理だ、動物を殺せるようなオレはいつか人をも殺すってな。
極論だけどよ。
んで、この時点でオレはずーっと昔からあった世界を救う勇者とか、そう言う夢見がちなモノも捨てられた。
自分の命の危機にならないと出来ないっつーのがまた、オレも悟るの遅いとしか思えないけどな。
その時にイザークがまぁ、家宝の大剣を使ってオレを助けてくれたわけなんだけどよ……その後、ぶっ倒れちまったんだ。
必死こいてイザークとその大剣を背負って、街に逃げ帰ったな。
その後、目覚めたイザークに懇願して戦闘訓練を受けさせてもらって、気が付いたらこんなに長く組んでいたっつー話。
まぁ、端的に言えば今のオレが居るのは、イザークのおかげだな。
だからよ、シキも色々と不安かもしんねぇけど心配すんな。
イザークほどじゃねぇけど、オレもお前の事守ってやっから。
あぁ？　何でそこで、アリアとミリアが出るんだよ。
いや、もちろんあの二人も守るぞ？　オレ達、仲間じゃねぇか。
まぁ……シキの言うのが本当だったら、ヴァンパイアロードと戦う事になるんだろうけどよ、何とかなるんじゃねぇ？

まぁ、確実に言えるのはオレが一番役立たず……。
嫌だって、そうだろ？
イザークはあの家宝の大剣があるし、それ以上にアレだけの戦闘技術がある。
シキ、お前はまぁ『神無の鳥』っつー種族で、すげぇ力がある。
ミリアは聖女で、アリアは天才児。
このへんどう見ても、オレだけが平凡で役立たずだろ？
まぁ、その分戦闘技術に磨きをかけて足手纏いにはならねぇ様にはするつもりだけどな。
オレが崩されて、全滅とかになったら目も当てらんねぇ。
その上で、知らないふりをして普通に戻るのは無理だっつーの。
ん？　……ばっか！　オレが今さらこのパーティから離脱する訳ねぇだろ！
アリアとミリアの話もそうだけどよ、お前の秘密も知っちまった。
まぁ……今だオレが夢見がち、ってやつなんだろうけどな。
でもよ、あんな苦しそうな表情をするミリアやアリアを見捨てるのは、オレには無理だ。
命あっての物だねだからこそ、オレ達も色々と鍛えて行くしかねぇだろ。
それこそ、遺跡とかですげぇお宝発掘して武器とか防具を手に入れるとか、そう言う事もしていかねぇとダメだろ？
それ考えたら、盗賊技能のねぇお前らについて行って、これで貢献する以外ねぇじゃねぇ？
まぁ、今までみたいにちんたらした鍛錬じゃなくて、前のスパルタ方式に戻してイザークと訓練もしないとな。
騎士って柄じゃねぇけど、本当にアリアとミリアを守ってやんなきゃいけねぇとおもう。
うっせ、笑うな！
くそ……前言撤回だ、シキは守ってやんねぇ！
イザーク、御者変われ！

第四十二話

くすくすと笑い、志希は御者台に行ってしまったカズヤの背中を見送る。

先ほどまでの会話は、二人だけでしていた物だ。

アリアとミリアには聞こえないように風の精霊にお願いをして、音が伝わるのを遮断していたから出来た会話である。

イザークから聞いた、カズヤとの出会いの話。

それをカズヤの視点から聞いてみたかったので、二人に聞こえないようにして問うたのである。

カズヤは志希のお願いに快く応じ、話をしてくれた。

もっとも、その間アリアが物凄くこちらを窺っていたが、全て無視してカズヤと話に興じていたのだ。

そこでふと、アリアが異世界人を見た事がないと言っていたのを思い出す。

「ねぇ、アリアとミリアって異世界人の事をどう思う？」

志希自身も異世界人なわけなのだが、それを差し置いて問いかけてみる。

アリアとミリアもきちんと彼女の身の上を聞いているので異世界人であると言うのは知っているのだが、どうにも実感が持てないでいた。

それ故、唐突な問いに戸惑った表情を浮かべて直ぐには返事を返せない。

「ああ、難しく考えないでいいよ」

志希の言葉に、それならとミリアは口を開く。

「言葉が通じないし、野蛮だっていうのを聞いていたけど……シキを見てそれは偏見だと思ったわね」

「そうですね。シキさんはとても理性的です」

アリアはミリアに同意して頷くが、どちらも志希の事を言ってい

るだけなので思わず本人は苦笑する。
「いや、私じゃなくて異世界人の事なんだけど」
そう言われた双子は、難しい表情を浮かべて考える。
「言葉が通じない。変わった髪色や、目の色をしているくらいでしょうか？　あと、ひ弱と言うのもあります。文献などで見た限り、技術士もいるようですけど……その大半は、奴隷にしても長く持たないほど弱いと書かれてありました」
アリアの言葉に、志希は苦笑する。
「そりゃそうだよ。基本的に鍛えている人とか、武術の心得がある人とかは殆どいないからね。あと、向こうの人で黒目黒髪の人は割と計算に強いよ。何せ六歳から教育を必ず受けているから」
志希の言葉に、アリアはえっと声を上げる。
「私が居た世界には、基本的に身分の差別ってなかったの。皆が庶民で、政は国民が投票して頭を選ぶのが主流だった。その中で、子供は六歳から十五歳まで必ず教育をうけるようにと言う決まりがあって、その教育には文字の読み書き、自国の歴史や古い言葉を習ったり計算の勉強をするのよ」
「え、庶民がですか？」
思わずと言った様にアリアが問いかけ、志希は頷く。
「うん、そう。基本的に向こうで……特に、私が生まれ育った国は教育とかに力を入れてたから。六歳から十五歳までは国で義務として教育を施し、その上の学校は任意で進学するようになっているんだ。まぁ、今は十六から十八までの学校はほぼ義務になっているけどね」
「国で教育を施すって、豊かなのね」
「豊かだけど、その分人の心が荒んでたと思うなぁ」
そう言って、小さく溜息を吐く志希。
「こっちみたく妖魔とか亜人達や神様はいなくて、人と人が争う事が多い世界。私の国は六十五年前に戦争に負けてから色々あって、経済的にも成長したりした分……人と人の繋がりが薄くなってね。

今、私の国は自殺をする人とか、働かずに家に引きこもる人とかが多いの」

志希の言葉に、アリアは眉を潜める。

「豊かになった分、失われたものが多かったのですね」

「多分、そうなんだと思う。だから、みんな少しづつだけど人と人との繋がりや精神的な豊かさを取り戻したいって行動し始めてはいたんだよね」

「うん、そう言うのって大事だと思います」

アリアは志希の言葉に笑顔を浮かべ、うんうんと頷いていると御者台に座っているカズヤが顔をのぞかせてくる。

「そういや、シキ。ノストラダムスの大予言ってどうなった？　シキが元気でいるのを見る限り、当たらなかったと思うんだけどよ」

唐突な問いかけに、志希はきょとんとした表情を浮かべてから首を傾げる。

「ちっちゃい頃にそんな話を聞いた覚えはあるけど……」

「ちっちゃい頃！？」

志希の返事にカズヤが驚き、大きな声を上げる。

「う、うん。だってその話、世紀末に恐怖の大王が降ってくるってやつでしょ？」

「ああ、それそれ」

「それだったら、多分もう十年以上前の話だからあんまり記憶にない。って言うか、世紀末は普通に家族で過ごしていたけど、全然何もなかったよ？」

志希がそう言うと、カズヤが変な表情を浮かべて馬車内に戻ってくる。

「なぁ、シキはいま何歳だ？」

「だから、二十一歳だって言ったよ？」

「オレも二十二歳だ」

「うん」

「……オレは一九七八年の生まれだ」

「はぁ！？」
志希は思わず素っ頓狂な声を上げ、カズヤを凝視する。
「ちょっ！？　さ、三十二ぃ！？」
志希の言葉に、カズヤが大慌てで頭を振る。
「いや、待て待て！　オレはこう見えても正真正銘二十二歳だ！　こっちに来たのは十五、七年過ごしているのは間違いない！」
カズヤの言葉に志希は目を丸くし、喉を鳴らしてから言葉を絞り出す。
「私は、一九八九年の生まれなんだけど……」
志希の言葉にカズヤは頭を抱え、唸り始める。
「マジかよぉ……なんだその、一〇年くらいの違いは」
ぼやくカズヤに、アリアが恐る恐る彼に声をかける。
「ええっと、あの……カズヤさんはもしかして……？」
「ん？　ああ、言ってなかったな。オレも異世界人。言っとくけど、ただの異世界人だからな」
カズヤは念を押す様にしつつ答え、苦笑を浮かべる。
「オレも結構苦労したけど、アリア達も随分と苦労してるんだな」
「そ！？　そんな事……！」
アリアが慌てて手を振ると、志希は緩く頭を振る。
「苦労してるでしょ。元々は王族だったんだから」
志希の指摘に、ミリアは苦笑する。
「そうね、苦労したわ……知らない事が多かったし、わたし達の常識が通用しない部分も多かった」
「世間知らず、だったんです」
アリアが自嘲する様に苦い笑みを浮かべ、嘆息する。
「それは仕方がねぇだろ。箱入りのお嬢様がいきなり荒っぽい奴らが多い世界に入るんだからよ」
カズヤはアリアとミリアを元気づけるように声をかけ、笑みを浮かべる。
「んで、世間知らずだって事を知ってきちんと色々な事を勉強した

のはすげぇって素直に思うぜ」
屈託の無いカズヤの言葉に、アリアとミリアは思わず頬を染める。
「そ、そんな事言われたの、初めてだわ」
ミリアは気恥ずかしそうに視線を逸らし、アリアは真っ赤になりながらはにかんでいる。
志希はきょとんとした表情を浮かべているカズヤをちらりと見て、天然タラシめと胸中で嘯き小さく息を吐く。
何か突っ込みを入れたい気もするのだが、ここで下手な事を言うとアリアに要らぬ誤解を受けるような気がして止めておく志希。
カズヤは呆れ顔の志希に気が付かず話題を変える。
「それで、レッドウルフの毛皮がかなり手に入ったけどどうする？」
「どうするも何も、依頼人に納めるんでしょ？」
志希がそう問いかけると、いやっと御者席のイザークが口を挿む。
「頼まれていた枚数だけ納め、それ以外は売るなり何なりする予定だ。シキの皮のベストとローブがもう使い物にならん事を考えれば、少しでも分け前を多くし互いに強化していかねばならんだろう」
イザークの言葉に、志希はがっくりと肩を落とす。
「あのローブ、気に入ってたのになぁ」
深いため息を零す志希にミリアが小さく笑い、その背中をポンポンと励ますように叩く。
カズヤは励まされている志希とミリアを見て小さく笑ってから、表情を改める。
「まぁ、今回の事でオレ達はまだまだだってのも分かった。ミリアの問題を片づける為にも河岸を変えた方が良いかもしれないな」
「え？」
「この辺は妖魔との前線が近いとはいえ、今は安定しているからよ。それに、今度国営騎士団も派遣されてくるらしい。そうなったら、ますます俺達の出番が少なくなる」
アリアの疑問の声にカズヤはそう答え、腕を組む。
「それに、騎士団の連中が来るとなるとトラブルも多くなりそうで

嫌なんだよ。特に、ああ言う変な気位が高い奴らはイザークに難癖つけてくる事が多いんだ。シキの変わった容姿が目に留まれば、一晩貸せとか言いかねないバカな坊ちゃんとかも居るしよ」

「え？　そうなの？」

思わず志希が突っ込むと、カズヤが神妙な表情を浮かべて頷く。

「ああ。まぁ、上がまともだったらしっかりと取り締まってくれるはずなんだが……」

「辺境に派遣される騎士の頭が、まともとは思えない。と言うやつだ」

「なるほど」

志希はうんうんと頷いて納得をしていると、アリアとミリアは何とも言えない表情を浮かべている。

「なんだか、ごめんなさいね」

「物凄く、申し訳ない気持ちになります」

「おいおい、気にすんなって。オレらは騎士団が気にいらねぇって話してるんだからよ。で、オレの意見はどうよ？」

カズヤはイザークを含めて全員に問いかけると、志希が手を上げる。

「私はまだ分からない事が多いけど、強くなる為に場所を変えるには賛成。私の精神修行の為にも、色々な経験は積まないといけないと思うから」

「俺も、河岸を変えるのに異論はない。シキが知識を“知る”為に中央のフェイルシアか、その隣国の魔術王国と言われるミールに行く事を考えていた。ミールの大図書館には、様々な知識が眠ると言われているからな」

大陸中央付近にある大国フェイルシアは、貿易で栄える国だ。

そして、魔術王国と呼ばれているミールは魔術師と知識神クミルを信奉する神官が多く住み、日々魔道具の研究に明け暮れている。

ミールにある塔の学院は、世界で初めて作られた魔術師の学院なのだ。

各国にある塔の学院はミールの魔術師が派遣され、冒険者ギルドとは違う形態で作られたのである。

その為、各国の塔の学院に所属する魔術師が見つけ出した魔道具や遺失呪文などは全てミールにある塔の学院に行ったん納められる事習わしがある。

イザークのお勧めの国は、確かに志希が様々な知識に触れ“知る”事が出来るだろう。

同時に、辺境の国に居るアリア自身もまだ知らぬ知識に触れる事が出来るかもしれないとミリアが思った瞬間、アリアは一つ頷く。

「確かに、良い事だと思います。あちらの蔵書はかなりありますから、わたしの復習にももってこいです」

アリアの言葉に、ミリアが目を丸くする。

それに気が付いたアリアは、苦笑を浮かべて姉を見る。

「姉さんったら、忘れてしまったの？　わたしが最初に入った場所はミールの塔の学院ですよ？　でも、神聖大公家が潰れたからとこちらの方に移動させられたのですよ。でも、それが姉さんと再会できるきっかけだったので、とても良かったと思います」

満面の笑顔でアリアはミリアに言い、カズヤを見る。

「わたしも、移動するのは賛成です」

「んじゃ、ミリアはどうする？」

一番重要なのは、聖女であり花嫁であるミリアだ。

「……反対する訳無いじゃない。わたしの為だけじゃないし、ね」

肩を竦め、ミリアはそう微笑む。

「じゃ、これで決まりだな」

カズヤはにやりと笑い、全員を見回す。

このパーティのリーダーはイザークだが、彼は依頼や戦闘などの基本方針を決める方が主なので、この様な仕切りの殆どはカズヤに任せているきらいがある。

カズヤとイザークの二人はこうやって、互いに得意な分野を分担しているのがよく分かるやり取りだ。

志希は小さく嘆息して、何やら胸のあたりがもやっとしてしまう。
このもやっとした物はなんだろうと首を傾げてから、気にしない事にする。
「取り敢えず、街を離れるのは私が防具を揃えてから？」
「ああ。道中、何が起こるか分からないからな」
イザークが答え、志希はそうかと頷く。
そこに、ミリアがポンと手を打ち笑顔でいう。
「レッドウルフの毛皮を何枚か使って、ちょっと早いけどシキの外套を作ったら？」
笑顔のミリアの提案に、志希はうっと声を詰まらせる。
流石に、自分が殺した魔獣の毛皮を纏うのはどうかと言う気持ちがあるからだ。
それを察したのか、それとも天然でなのかカズヤがいやいやと頭を振る。
「その辺りは、道々ゆっくりと相談しようぜ」
「そうね、もしかしたら移動費に消えるかもしれないものね」
カズヤの言葉にミリアは肩を竦めて頷き、志希は思わず安堵の息を吐く。
その間にも話題は変わり、志希はそれを右から左に聞き流しながら風の精霊に頼み周囲を警戒してもらいながら目を閉じる。
体の内側が治り、吐き気の類はすっかりおさまったのだが、体力が戻っていないのか眠気が襲って来たのだ。
志希は眠気に抗わず、そのまますとんと眠りに落ちるのであった。

幕間

深夜の静寂が支配するその場は、濃厚な血臭と甘くすえた腐敗臭に支配されていた。

森の中で比較的広い場所には大量の血痕と、夥しい死骸が地面や草の上に転がっていた。

ここは、イザーク達がレッドウルフの変異種達と戦った場所であった。

これだけ生臭さを発していれば森の肉食動物などが現れてもおかしくは無いのだが、何故かこの場所には魔獣や野獣の類が全くいない。

それはこの空間に漂い始めた、不吉なほど冷たい冷気のせいである。

月明かり一つないこの場所に、ふわりと金の髪が舞う。

音も無く闇と同じ色のマントが翻り、その場に黒い貴族服を着た金の髪を持つ青年が現れた。

中性的な美貌を僅かに不快そうに歪め、青年は優雅に歩を進める。

皮が剥がされた凄惨なレッドウルフの死骸の中を真っ直ぐに突っ切り、大きな体躯の死骸の前に立つ。

唐竹割りにされたその死骸の前に立った青年は、小さく嘆息を零す。

「我が呼んでいるのに来ぬと思えば、この様な所で果てているとは情けない」

困ったものだ、とでも言う様な声音で青年は足先で大きな死骸を転がす。

断面からどろりと内臓が毀れ、更なる異臭を周囲に振りまく。

「それなりに力を与えたのだが、これほど見事に斬られているのは驚きだな」

断面をまじまじと観察しながら大した感慨を抱かずに呟き、ゆっ

くりと頭を振る。
「知能もつき言葉も話せるのは中々出来なかった故、気に入っていたのだがなぁ」
残念と言う呟きはしかし、全く何の感情も抱いていないのが聞いて取れる。
そのまま変異種であったモノの頭に向け、人差し指を向ける。
「まったく……使い魔にこの様な手間をかけさせられるのも、考え物だな」
青年が呟いた瞬間、その人差し指の爪が一瞬で伸び、変異種の眼球に突き刺さりその奥にある脳にまで達する。
目を閉じて何かを考えるそぶりを見せていた青年は、不意に口角を釣り上げる。
「いや、使い物にならんと思っていたが意外だな」
嬉しげに、楽しげに青年は呟く。
「死してなお我の役に立ったこと、褒めてやろう」
既に死しているその亡骸に、青年は囁く。
ゆっくりと爪を引き抜き、爪に付着しているどろりとした体液を払いながら青年は嗤う。
「まったく、我が花嫁殿は中々に小賢しいが……美しく育った」
喉を慣らし、青年はかつて使い魔であったモノに背を向ける。
ゆっくりと歩を進めながら、青年は様々な考えを巡らせる。
歩いているのは、その考えを纏めるためだ。
とても愉快そうな表情を浮かべた青年は、ゆっくりと口を開く。
「取り敢えず、我を倒す等と言う思い上がりを叩き潰すのが楽しそうだな。その為には、ある程度の経験を積ませねばなるまい。そう思わんか？」
不意に、青年は直ぐ側の茂みに問いかける。
「経験を積ませ、能力が上がったと錯覚させ、その錯覚を打ち砕く。確かに楽しそうではありますね」
青年よりも幾分か低い声音が、茂みの闇から同意を示す。

「ああ。我の証しを無粋なエルシルの印で封じている罰も兼ね、アレの妹や仲間達を贄として宴を開くのが良かろうと思うてな。その為に、少々世間を騒がせてやるのも面白かろう？」

ゆっくりと、青年は笑う。

「では、その役目を私にと言う事でしょうか？」

幾分か低い声音の問いかけに、青年はああと頷く。

「お前が一番、動き易かろう。我は城で知らせを待つ故、お前は好きなように世間を騒がせよ。ただし、我が花嫁とその贄を殺すのは許さん」

「花嫁殿以外の贄で、私が下賜を願えば頂けますかな？」

間髪いれずの問いかけで、青年は僅かに片眉を上げる。

何かを考えるようなそぶりを見せてから、一つ頷く。

「良かろう、許す。余興として十分であろう」

愉悦に顔を歪ませ、青年は許可を出す。

「は、ありがたき幸せ」

暗闇の中で人影が姿を現し、優雅な所作でお辞儀をする。

「心にもない事を……しかし、貴様のその闇は心地よい」

真紅の瞳を細め、青年は三日月の様な笑みを浮かべる。

ばさりと漆黒のマントを翻した瞬間、青年の姿がその場から掻き消える。

「我の楽しみの為、貴様の望みの為にしっかりと働くのだぞ」

「は、仰せのままに。我らが王よ」

姿を見せないままその場に声を響かせ、青年は命令を残す。

命じられた方は、ゆっくりと闇の中からその姿を見せた。

青年とは違う薄い金の髪を持ち、吸血鬼の証しである赤い目を持っていた。

「さて、ではどうするか……」

やや厳つさを見せる男は小さく呟きながら、腰に下げた小さな杖を手に取る。

「王と仰いだ時から思うのだが、あの方はいつも気まぐれが過ぎる。

私の立場と言う物も少々考えていただきたいな」
愚痴のような呟きを残して、男は小さな杖を一振りする。
その瞬間には、男の姿はその場に無かった。
主である青年と同じ様に、男はどこかへと立ち去ったのだろう。
この場には森の静寂と、動物の死体が放つ腐敗臭だけが取り残される。
だが直ぐに、茂みを鳴らして魔獣や野生の動物が姿を現す。
まるで、青年と男が立ち去るのを待っていたかのようだ。
臭いにつられて姿を現した肉食獣達は、最も強い魔獣の食べ残しや離れた場所にある死体を喰らう為に争いを始めるのであった。

第四十三話

街に到着してから、一行は真っ直ぐに冒険者ギルドへと向かう事にした。

何せ馬車はギルドからの貸し出し品であるし、依頼品としてレッドウルフの毛皮も必要なのだ。

それならば、真っ直ぐにギルドに行って依頼完遂の報告と毛皮の引き渡しをした方が早いと言う事で決まったのだ。

ちなみに、レッドウルフの毛皮は規定枚数を納めた後は全て革防具職人の所へ持ち込み、カズヤの革鎧と余った分で志希とアリアの防具を作る事にした。

無論、取らぬ狸の皮算用と言う話もあるので、一応方針としての話だ。

最優先はカズヤで、その次で志希とアリアと言う話である。

毛皮の外套を作ると言うのも魅力的だが、普段から使わない物を荷物として持ち歩くのはあまり好ましくないと言う事で見送られた。

レッドウルフの毛皮を規定枚数納めれば報酬にいくらか上乗せされるので、御者台でイザークの隣に座っていた志希はひそかに楽しみにしている。

何せイザークに借金をしている身だ、返済分と貯金分を差し引いてお小遣いが残るかどうかが切実だ。

今回のレッドウルフを退治した事で、一人当たり銀貨十枚の配当になる。

それに、レッドウルフの毛皮の状態によって上乗せされるお金が変わるのだ。

レッドウルフの毛皮の相場は、場所によるが平均銀貨二十枚。

状態が悪ければ銀貨五枚くらい少なくなるが、状態が良ければ二十枚以上になる。

しかし、今回の依頼は副次的な部分がある為相場の平均くらいも

らえれば上々だろうとイザークが言っていたので、そう考えてもかなりの稼ぎとなる。
　これこそ取らぬなんとかという話なのだが、志希は本当に切実にお小遣いが欲しいので計算に余念がないのである。
　特に、今回は出費が嵩む。
　お小遣いに回せるだけのお金がなければ、また預けているお金に手をつけなければならなくなるのだ。
　そのことを思い返してため息をつくと、イザークが小さく笑い志希の頭を撫でる。
「思い悩むな」
「でも……ねぇ？」
　志希の憮然とした声音にイザークは再び小さく笑い、ポンポンと頭を叩く。
「考えすぎてもどうにもならんだろう。それより、そろそろギルドだ。後ろの奴らに声をかけてくれ」
「はーい。そろそろギルドだよー！」
　志希の言葉におうとカズヤが答え、荷台から御者台に顔を出す。
「今回はどうなるかと思ったが、いや無事に終わって良かった」
「正直、変異種などと言うのに鉢合わせた分の追加報酬くらいは欲しいものだ」
　イザークはカズヤの言葉に冗談とも本気とも取れない呟きを零し、カズヤは苦笑を浮かべる。
「まぁなー。こっちは服から鎧をダメにされてるのもいるからなぁ……報酬はもらえねぇかもしれねぇけど、変異種の方は報告しておくべきだと思うぜ。ここから各国のギルドに通達してもらえば、変異種が他にもいた時に情報を貰えるだろうしよ」
　今回の変異種がヴァンパイアロードの使い魔であった事を考えれば、この先もこのような変異種が現れて暴れる可能性もある。
　流石にヴァンパイアロードの存在を口にするわけにはいかないが、今回遭遇した変異種の強さ等をしっかりと伝えれば皆気を引き締め

て依頼に当たってくれるはずである。
　また遭遇した際に下手に挑まないようにと警告をしておかねば、腕に覚えのある者が無謀を犯す危険性も高いのだ。
「こういうのに遭遇したって言う話をすれば、下手な事は突っ込まれないと思うから大丈夫でしょう」
　いつの間にか後ろに来ていたミリアもカズヤと同じ様に首を出して、賛成の意を表明する。
「それより、珍しいですね。ギルド前に立派な馬車が止まっていますよ」
　ミリアの隣にアリアも顔と腕を出して指し示す。
「あ、本当だ」
　言われて気が付いた志希は思わず声を上げ、まじまじと黒塗りの馬車を見る。
　栗毛の馬が繋がれ、身なりの良い人がその馬の世話をしている。
「しかし、あそこに停められると邪魔だな」
　イザークが憮然と呟き、ちらりとカズヤを見る。
「退けてもらうか」
　イザークの視線の意味を間違えずに読んだカズヤは頷き、荷台の後ろから降りて馬の世話をしている人間の方へと行く。
　馬車は普段、冒険者ギルドの横にある厩舎にしまっている。
　そこに入る為の道を半分ほど、黒い馬車が塞いでいるのだ。
　身なりの良い男性は御者だったらしく、カズヤの言葉に頷いて素直に開けてくれた。
　礼を言ってカズヤは厩舎の方へと駆けて行き、馬車を置く場所を確認に行く。
　程なくしてカズヤが戻ってきて、馬車を誘導し始める。
　その指示に従い馬車を止め、イザークと志希は降りる。
「そんじゃ、中に入るか」
　状態維持の魔法をかけられたレッドウルフの毛皮はかなりの枚数あり、全て持って入るのは通常困難である。

だが、アリアが作ったゴーレムが毛皮の入れられた袋を持つので全員自分の荷物を持つだけで良いのである。

ちなみに、このゴーレムが持つ袋は元々アリアが所有していた魔道具である。

この袋は見かけ以上に大量の荷物を入れられるのだが、重さまで軽くなる訳では無い。

詰め込み過ぎると人が持てる重さでは無くなるが、ゴーレムに持たせる分には便利な魔道具なのである。

一行が厩舎から出て、黒塗りの馬車の御者に会釈をしてから冒険者ギルドに入ると。

「ふざけるな！　あの依頼は取り消しだと言っているだろう！？」

と言う怒声がギルド内に響き渡った。

「いくら言われても、この依頼は既に冒険者が受けてしまっています。取り消す際には違約金としてギルドに金貨十枚納めていただく事になっております」

完璧な営業スマイルを浮かべたミラルダが、怒鳴り散らしている男に対してそう告げる。

「その法外な値段はなんだ！？　たかだか魔獣退治の依頼を取り消すだけではないか！」

「何度も言っておりますが、この依頼は既に冒険者が受注しております。これを取り消すには違約金が必要なのです」

「ふざけるなと言っている！　たかが冒険者ギルドの癖に、何様のつもりだ！？」

「貴族のお方であろうとも、冒険者ギルドは態度を変える事は御座いません。貴族であろうと、王族であろうと違約金は必要です」

怒声に対し、冷静な声音で受付をしているミラルダが笑顔で跳ねのける。

一体何事だと首を傾げながら、言葉が途切れた瞬間をねらって志希は恐る恐る声をかける。

「あのぉ、ミラルダさん。依頼終わったんだけど……」

志希の言葉にミラルダはにっこりと笑い、頷く。
「分かりました、確かシキさんのパーティはアイワナ山のレッドウルフ退治でしたね。毛皮の方も、お持ちでしょうか？」
「はい、こっちに……」
「まて！」
志希とミラルダが話を始めたが、怒声を上げていた貴族らしい男が口を挿んでくる。
「貴様らのその依頼は無効だ。村の人間が勝手に出したものであり、領主の私には何の知らせもなかった。故に貴様らが持ち帰った毛皮も全て私の物である」
突然の言葉に、志希は思わずぽかんと男を見上げる。
神経質そうな顔をしている栗色の髪と口ひげを持つ男が、志希を蔑むように見ている。
「ええっと、私達は正式な手順にのっとって依頼を受けたので無効と言う事は無いと思うのですけど？」
思わず志希はそうミラルダに問いかけると、彼女は頷く。
「はい。シキさん達は我がギルドに出された依頼を正式な手順で受け、依頼を完遂していらしたのでしょう。こちらの貴族様の言う事は気になさる事なく、退治した証拠品を五枚提出なさってください」
「アレは無効だ。私の採決を待たず、村人が勝手に出したものだと言っておろう」
貴族はミラルダの言葉を否定し、志希に向って怒鳴ってくる。
恐らく、志希の容姿で組みしやすそうだと判断したのだろう。
居丈高に見降ろし、接してくる。
だがしかし、志希はここで引くわけにはいかない。
何よりも、こんな傲慢な理論で命をかけて戦い、持ち帰った戦利品をかすめ取られるのが許せない。
「ふざけないで！　私達は正式な手順を踏んでいるし、命がけで依頼を完遂した！　それを、全部なかった事だからって横から人の物かすめ取って行くの！？」

志希は貴族の男を睨みつけ、怒鳴る。
「貴様……下賤なハーフアルフの癖に貴族に逆らうと言うのか！？」
「そんな物知らない！　貴族だろうとなんだろうと、人の物を横から取っちゃいけないってお母さんから教わらなかったの！？」
志希がかみつく様に言うと、貴族は顔を真っ赤にして腰に差している剣の柄に手をかける。
志希はそれに気が付かず更に怒鳴ろうとするが、その志希を庇うようにイザークが体を割り込ませる。
身長の高いイザークが割り込んだ事に寄って、貴族の男は咄嗟に一歩引く。
イザークは今、貴族に対して威圧をする様に見降ろし、剣を抜かせないようにしているのだ。
「何人であろうとも、冒険者ギルドは公平に扱う事を王が認めているのは周知の事実。そこに出された依頼もまた、冒険者ギルドが受注した時点で貴族であろうと安易に取り下げる事が出来ない。その様に決まっているのを、貴族である者が知らぬ筈あるまい」
イザークの静かで低い声音は、男に反論を許さない。
「故に、我々が受けた依頼は正当なものであり、報酬も含め我々が勝ち得て来た全ての物は我々の物だ。まして、我々は命をかけて依頼を完遂したのだ。それを横から無効だと接収するのが栄えある貴族の所業とは思えんな」
イザークの言葉に貴族は更に顔を真っ赤にして怒鳴ろうとした瞬間。
「そこまでだ。全く、この様な所で要らぬ揉め事を起こしてもらっては困るぞ」
と、柔らかな声音が掛けられた。
奥のギルド職員が良く出入りする扉から、綺麗な金茶色の髪をした青年が現れる。
志希はその青年が、地味ながらも良い仕立ての服を着ているのに気が付く。

同時に、アリアとミリアは素早く壁際に避けてゴーレムを盾にする。
カズヤはさり気無くそのゴーレムの隣に立ち、密かに志希とイザークから距離を取る。
「何だと貴様！」
貴族は青年に対し怒鳴りつけるが、志希は何とも言えない表情を浮かべる。
イザークは志希を背中に庇ったまま壁際へと移動し、成り行きを見る体勢に入る。
志希は志希で、貴族の男と青年を見比べて小さく頭を振る。
貴族は青年に対して色々と怒鳴っているが、青年は笑って受け流している。
しかし、志希には笑っている青年の背後に物凄くどす黒い何かが立ち上ってきているのが見える気がした。
見ただけで分かる気品と、所作の優雅さ。
人を引き付けるカリスマとでも言うべき物を、目の前の青年は持っている。
しかも、腹黒そうで死ぬほど怖い。
志希は思わずイザークの服の袖を握り、その背中に隠れて青年を視界から隠す。
貴族の男が一通り怒鳴り終えたのを見計らって、青年は口を開く。
「君が無効だと言うのは勝手だが、ギルドは既にその依頼を受け入れ冒険者に発注している。この時点で、君の言い分は通らない。先ほど受付のお嬢さんが言っていたように、国王が認めている事だよ。それが、たかが貴族風情が覆せると思っているのかい？」
青年はあくまで柔らかく問いかけ、貴族の男は目を剥く。
「君の言っている事は全て君にしか利がない、勝手な言い分だ。しかも、君のその領民は君に相談したけれどどうにもならなかったから冒険者ギルドに依頼を出したんだ。その辺りは、理解しているのかい？」

「な、んだと！？」
「さらに言えば、君は領民を守る為に居る筈なのに無駄に重い税を課しているそうじゃないか。国庫に納める分以外は、全て横領しているのだと言うのも調べが付いている。全く、貴族ならば領民を蔑にして良いというその思考が信じられない。まぁ、今回で君の人となりも分かった。これはこれで、よしとしよう」
にっこりと青年は笑い、うんと一つ頷く。
笑顔だが、その威圧感は半端なものではない。
実は物凄く怒っているのではないかと志希は戦々恐々としながら、イザークの背中に隠れ続ける。
「貴様、何者だ……」
思わず問いかける貴族に、青年はにっこりと笑い手の甲を見せる様に手を上げる。
「僕はこの冒険者ギルドに所属する、第五王子だよ」
貴族は青年の指にはめられた指輪を凝視し、一瞬で青ざめる。
「僕は昔から冒険者ギルドに所属して放浪しているんだよ、知らなかったのかい？」
人の悪い笑顔を見せ、第五王子と名乗った青年はミラルダに頷く。
ミラルダは了承する様に立ち上がり、奥の部屋に声をかける。
すると騎士鎧を着た男性二人が奥から現れ、貴族を左右から捕らえて青年に礼をする。
青年はそれに答えるように手を振ると貴族を引きずり男性達は外へと出て行く。
それを見送った青年は、ゆっくりとイザークの方へと顔を向ける。
「さて、聞くに堪えない罵声が聞こえたからお邪魔だと思ったけど口を挿ませてもらったよ。それじゃ、僕はこれで。後ろに隠れている勇気ある小さなご婦人やゴーレムの陰に隠れているご婦人にもよろしく言っておいてください」
にこやかに笑い、第五王子らしい青年は再び奥の部屋へと去って行った。

酷く緊張した空気が抜け、志希は大きく息を吐くとイザークがポンっとその頭を撫でる。
励ますような、元気づける様なその手のひらに志希は思わず笑みを浮かべイザークの背中から出る。
アリアとミリアもゴーレムの後ろから出て、安堵した表情を浮かべてる。
この二人、曲がりなりにも王族なので恐らく先ほどの第五王子の顔を知っていたのだろう。
「さて、シキさん達の依頼完了の手続きをいたしましょうか」
そう言って、いつものように人好きのする笑顔でミラルダが声をかけてくる。
「ああ、はい……」
志希は頷き、ふらふらとミラルダの前に行こうとするがイザークが止める。
「俺がやる。アリア、毛皮を」
「あ、はい」
慌ててアリアはゴーレムに指示を出し、ミラルダの前に袋を持って行かせる。
イザークはその隣に立ち、ミラルダの差し出す書類に何かを記入していく。
「まったく、災難でしたね。殿下が居らっしゃらなければ、まだ怒鳴り散らされていたかもしれませんね」
ミラルダはそう言いながら、袋の口を開けて中から毛皮を五枚取り出す。
結構な大きさと量なはずなのだが、彼女は難なくそれらの作業をやり遂げる。
思わず感心する志希に、ミラルダはまだ話しかけてくる。
「殿下はこのギルドの最高ランク、金を所有していらっしゃるんですよ。成人なされてからご友人二人と一緒に冒険者登録をされ、いまでもお三方で依頼をこなしていらっしゃいます。今日は年に一度

の帰国期間の為にこちらに顔をお出しになられていたんですよ」
「へぇ、そうなんだ」
志希は何も知らないので、こくこくと頷いている。
「まぁ、あの方が第五王子と知っているのは余り居らっしゃいませんし、いつもはもっと冒険者らしい姿をしているのでもしかしたら普段お会いしても気が付かなかったかも知れませんね」
ミラルダは志希の様子にくすくすと笑いながら説明し、取りだした枚数の状態を確認する。
「これは、良い毛皮ですね。他の毛皮は、どうなさいますか？」
「いや、今回納めるのはこれだけで頼む。こちらも少々余裕がなくてな」
「あら、珍しいですね。いつもは適当に処分してくれと仰るのに」
イザークの返事にミラルダはそんな事を言いながら、奥の部屋に毛皮を運び戻ってくる。
「もう少ししましたら、奥から報酬を持ってきますので少々お待ちくださいね」
ミラルダは笑顔で言い、全員頷き雑談に興じ始める。
「さて、いつもの所に持ち込むのは良いけどよ……アリアと志希の採寸が大変だな。後、ミリアも鎧を新調し直しだろ？」
「わたしの方は修繕すれば良いと思うのだけれど……」
「いや、あの壊れ方で修繕するくらいなら買った方が早いって。絶対」
「そ、そうかしら……？」
ミリアはカズヤの言葉に首を傾げると、アリアがほんの少しだけ拗ねた様な声音で言う。
「お店に行ってから、聞いてみた方が早いと思います」
「まぁ、専門の人に聞いた方が良いもんね」
志希は一般的な意見として頷いて、ふうと息を吐く。
長旅をして帰って来たばかりだと言うのに変な人間に絡まれ、更にこの国の第五王子と会う等と物凄いイベントに見舞われ流石に疲

れてしまった。
この後は報酬を受け取り、防具屋に行って採寸しなくてはいけない事を考えると更に疲れを感じてくる。
思わずため息をつくと、イザークが苦笑を浮かべて志希の背中を励ます様にポンっと一つたたく。
それと同時に奥の部屋から少し大きめの袋を持った男性職員が現れ、ミラルダの所へ置いていく。
「カズヤ、頼む」
「おう、任せろ」
カズヤはイザークの言葉に頷き、ミラルダの所へと報酬を受け取りに行くのであった。

第四十四話

報酬は一人当たり銀貨三十枚と言うかなりの高額になり、全員の懐はそれなりに温かくなった。

レッドウルフの毛皮は当初の予定通りの用途に使用する事となったのだが、カズヤは成長が終わっているのでかなりかっちりとした形で作る事になる。

革のブーツも作る余裕もあるらしく、どうやらカズヤは全身赤い色の革製品で身を固める事になるようだ。

その為に、カズヤはいつもの革鎧を脱いで全身を採寸されている。

「まるで、全身鎧を作るみたいだね」

志希の呟きに、イザークが小さく笑う。

「そこまでかっちりとした物を作れば、盗賊としての動きを阻害されてしまう。まぁ、今作っているのはある程度体に合わせた物を、鎧下で調節する形だな」

イザークの説明に、なるほどと志希は頷きながらカズヤを見ている。

すると、採寸を羊皮紙に記入していた男性がおもむろに口を挿んでくる。

「俺としては硬革鎧にするつもりなんだが、予算は大丈夫か？」

いかにも職人と行った壮年の男性の問いに、イザークは頷く。

「カズヤには悪いが、今まで同様前衛として扱う予定だからな。それでいて、盗賊としての指の感覚を損なわずに養っていてもらわねばならん」

「まったく、無茶言うよなぁ。その分期待されてると思って、頑張るつもりではあるけどな」

イザークの返答にカズヤはぼやきつつも、にやりと笑う。

「まったく、この筋肉のつき方で盗賊が出来るカズ坊の方がどうかしている。その才能は、天性のもんだな」

採寸をしている男性が呆れた様な声音でカズヤの返答に茶々を入れ、笑う。
その言葉にイザークは低く笑い、そうだなと同意する。
「盗賊の才能ねぇ……まぁ、素直に喜んでおくか」
カズヤは苦笑しながら言うと、奥から法衣を着たミリアが部屋に入ってくる。
その手には先日まで身につけていた鎖帷子を持っているが、表情は暗い。
「やっぱり、ダメみたい」
「当たり前だ。金具自体が歪み、いくつか部品がなくなっている。良い品である事は確かだが、これでは修繕するよりも新しいものに買い換えた方が早かろう」
ミリアの後ろから部屋に入ってきたドワーンの職人が憮然と言い、鎖帷子をミリアから受け取る。
「品物としては良いからな、かなり安くなるが下取りしてやる。これと同じぐらいの鎖帷子と、その他の鎧を持ってきてやるから選んでくれ」
職人の言葉にミリアはおとなしく頷き、深いため息をついてしまう。
そこに、今までカズヤの姿を見ていたアリアが口を開く。
「姉さん、鎖帷子じゃなくもう少し硬い鎧を購入した方が良いと思います」
唐突なアリアの提案に、ミリアがむっと唸る。
「こちらで取り扱っている防具はかなり質が良い物が多いようですし、気に入ったモノがないのでしたらわたしの鎧に使用する予定の毛皮を使えばいいと思います。前に立って戦う訳ではないわたしより、姉さんがしっかりと防具を着こまなければいけないと思いますし……」
「まぁ、確かになぁ。ただ、どこまで重くして良いかって言うのが問題じゃねぇ？」

採寸が終わり、鎧下姿のカズヤが言う。
「そうだなぁ……カズ坊もだいぶん筋力が付いてるからな、どこまで無理できるかを少し調べるか」
職人たちが頷きあい、数人がミリアが出てきた扉とは違う扉へと入って行く。
「そこのお嬢ちゃん二人の筋力も図って、どれくらいの鎧を着れるか調べるぞ。良いな？」
どうやらこの工房の頭らしい壮年の男性がイザークに問いかける。
「ああ、構わん。ただ、シキとアリアの二人はギリギリより軽めにしてくれ。その上からローブを着る事になっているからな」
「ああ、それは分かってるよ」
男性が頷くと、奥からぞろぞろと沢山のポケットが付いた革のベストと、チェインメイルの材料らしき小さな鉄の輪を持って帰ってきた。
それを見たアリアとミリアはきょとんとした表情を浮かべるが、志希とカズヤは若干嫌そうな表情を浮かべている。
「こりゃ、長期戦になるな」
「だね」
志希とカズヤの二人が分かり合っているのを見て、アリアが問いかけてくる。
「何の事ですか？」
純粋に分からないのであろう問いかけに、志希は引きつった表情で笑う。
「この革のベストを皆さんに着てもらい、ポケットに重りを入れて少し走ってもらうのですよ」
にこやかな顔で壮年の男性は言い、さぁさぁと急かし始める。
何か言いかけたミリアも、急かされて慌てて革のベストを着る。
全員が革のベストを身につけた時点で、志希とカズヤの二人は以前と同じだけの重りを入れられる。
ミリアとアリアの二人は、以前着ていた鎧と同じだけの重さを入

れられる。
　そのまま店の裏側へと連れて行かれ、ドワーンの男性にこの辺りを一周してくるように指示を出される。
「疲れてるのにぃ」
　志希が思わずぼやく訳だが、ドワーンの男性はかんらかんらと笑うだけで取り合わない。
「さぁさぁ、良い防具を手に入れる為には苦労が必要。頑張って行って来い」
「わぁーん！」
　志希は声を上げながら、走り始める。
　カズヤは素早くその後を追うように走り始め、戸惑う双子はドワーンにせっつかれて駆け出す。
　以前の志希であれば直ぐに息が上がっていたのだが、戻ってきた時点でそれほど息も上がらず疲れていない。
「おお……私、体力付いたんだぁ！」
　今さらの様に実感し、密かに喜ぶ志希。
「そのようだな。じゃ、あと二つ……三つほど入れても良い位だな」
　そう言って、ドワーンが重り代わりの鉄の輪を志希に手渡す。
「重くなる……」
「それが鎧の重さだ。カズヤは四つ、そっちの眼鏡の嬢ちゃんは三つで神官の嬢ちゃんは四つ足してまた走ってこい」
「はーい」
　志希は憮然と頷き、それぞれのポケットに一つずつ輪を足しボタンで中身が零れないようにする。
　全員が作業を終わらせてから、一斉に走り出す。
　それぞれのペースで走る為、戻ってくる時間はバラバラになるがそれなりに早い。
　特に志希の成長が顕著で、ドワーンが見積もっていたよりも早く帰ってきた上にまだ余裕があった。
「カズ坊も白い嬢ちゃんも、随分と体力つけたなぁ」

戻ってきた四人を見て、ドワーンが感心したように言う。
ちなみに、アリアは既に息を切らして辛そうである。
「眼鏡の嬢ちゃんは、そのベストから輪を一個取って走ってこい。神官の姉ちゃんは一個足して同様だ。白い嬢ちゃんとカズ坊はあと二つ」
「す……少し、休ませてください」
アリアは息も絶え絶えに申し出る。
「ん？　ああ、そうだな。じゃ、一旦全員で休憩してくれ。ただし、さっき言った重り分は足してからな」
そう言って、ドワーンが中に引っ込む。
「これ、結構きついわね」
ミリアはアリアのベストから重りを一つ取り、自分のベストに入れながら言う。
「だよなぁ。オレ達、仕事して帰って来たばっかりだぜ？　それでこんなハードな事させられるんだから、きついよなぁ」
カズヤは深いため息をつき、志希は苦笑する。
「まぁでも、自分の体もそうだけど体力とか考えて作らないと大変じゃない。重い鎧着て、戦闘早々へばっちゃうのとか危険だし」
志希の言葉に、そうねっとミリアは頷く。
「そこまで考えた鎧を作るなんて、ここは凄いのね」
「ああ。まぁ、親方の師匠が考えた方法なんだってよ。使用者の体力を考慮して鎧を作るっていうのは、その師匠の人が初めてなんだって。で、それに共感した弟子達が師匠に真似をして良いかの許可を貰って、やり方を真似てるんだそうだ」
カズヤはそう言って、深呼吸を繰り返している。
「個人的には、ミスリル銀かオリハルコンで編んだ服が欲しいんだよなぁ。アレ軽いし、半端ねぇ防御力だし、魔法で更に硬くなるしで良い事ずくめなんだよ」
深い溜息を吐いて、カズヤは今最も欲しい防具を口にする。
「アレは、中々出回らないですよ」

アリアは苦笑しながら頭を振り、無理だと言う。
ミスリル銀やオリハルコンは、かなり貴重な金属だ。
それらを糸状にして織り、布にして服を仕立てるのはドワーンではなくアルフが得意としている。
ミスリル銀やオリハルコンは鉱山から産出されるが、見つけるにはそれなりの技術が居る。
鉱脈を傷つけず取り出す技術に長けているのはドワーンだが、繊維状にする技術をアルフは持っていた。
これらは秘伝で、なお且つ熟練の腕を持つ者でなくては出来ない。
「だよなぁ。よっぽどじゃない限り、アルフは市場に流さねぇよなぁ」
カズヤは重いため息をつき、頭を振る。
「まぁ、ない物ねだりしたって仕方ないよ。取り敢えず、現状のこの重りマラソン大会が早く終わらせる事に従事した方が良いと思う」
志希の言葉に、カズヤはだなぁと頷く。
「この後は、シキのローブを見る予定だものね。休む間もなく動きまわるなんて、イザークは本当に体力が有り余っているのね」
ミリアは肩を竦めて言い、ため息をつく。
「まぁ、あいつは鎧の新調もねぇからな。その分、オレ達より楽な筈だぜ」
「あ、確かに」
志希はうんと頷くと、カズヤが苦笑する。
「つーかあいつも硬革鎧なんだけどよ、尋常じゃねぇ堅さと重さなんだ。何の皮で出来てるのかしらねぇが、ありゃ相等だぜ。服も滅多に破れねぇし……まぁ、長生きしてる分そっち系の装備は充実してるんだろうな」
「わたし、あの鎧は金属系の物だと思っていました。とても硬革鎧の光沢に見えませんでしたし……不思議ですね、ちょっと材質を聞いてみたいです」
息が整ったアリアがカズヤの言葉に思わず呟き、好奇心で目を輝

かせている。
志希もまた材質は気になるのだが、それよりも今は別の事の方が気になっている。
「まぁ、その前にマラソンが待ってるわけで……」
思わずうんざりと言った表情浮かべて志希が呟くと、ドワーンが中から出てくる。
「よし、大分休めた様だな。親方に聞いたら、今の重りで走ったら中に戻って来いとよ。今日の所はこれで終わりだと思って、頑張って走ってこい」
とてもいい笑顔のドワーンがさっさと行けと合図を出し、四人は深いため息をついてから走り出す。
近所を何周もしているのだが、周辺の人は慣れているのか特に変な顔をする事もなく子供に至ってはがんばれーと声をかけてくる。
志希は本当にマラソン大会に出場しているのではないかと一瞬錯覚してしまいそうになるが、違う違うと頭を振って走る。
今まで普通に走れていたのだが、ここに着て重さがやたらに感じられる。
先ほどよりも早く息が切れ、足が重くなってきた所で防具屋の裏に帰りつく。
「あぁー……苦しかった」
息を切らしながら呟きつつ、ドワーンの指示で防具屋の中に入る。
部屋の中で出迎えてくれた親方らしい男性は志希をまじまじと見て、一つ頷く。
「ギリギリより軽くって言うんだったら、重り二つ分軽くするか」
その後にカズヤ、ミリア、アリアの順番に帰りつきそれぞれ息を切らしている。
「こいつらは重り一個分軽く作るの方がよさそうだな。良いか？」
「ああ、任せる」
イザークは頷き、ふらふらになりながら革のベストを脱ぐ四人を見る。

「んじゃま、眼鏡と白の嬢ちゃんの採寸するぜ。そっちの神官のねぇちゃんは、取り敢えず鎖帷子にするのか何にするのか、決めてくれ」
「はい」
親方の指示に息を切らせながらもミリアは立ち上がり、少しふらつきながらドワーンの後をついていく。
アリアよりも比較的息も整ってきている志希は、先に採寸するべく先ほどカズヤが採寸していた所に進み出る。
「嬢ちゃんは、これから成長があるからな。こんな良い皮で鎧作っちまったら、後から着れなくなるぞ」
親方の言葉に、志希ははっとした表情を浮かべる。
実は、志希はこの姿から全く変わらない。
身長が伸びる事も、体型が変わる事もないのだ。
「ふむ……」
イザークが考えるようなそぶりで頷くと、志希は慌てて口を開く。
「前みたいに、ベストみたいな形にしてくれればいいと思うんだけど。大きくなった時の為に少し大きめに作って、革紐で調節できる感じ。余る部分は服とかで如何にかすれば良いと思うし……ダメかな？」
だがしかし、もしかしたら胸ぐらいは大きくなるかもしれない。
むしろ大きくなって欲しいと言う願望があるのだ。
志希の言葉に、なるほどと頷くのは親方だ。
「そうだな。首はその首飾りがある事を考えれば十分補えるだろうしな。どうだ？」
「ああ、それで良い」
イザークは頷き、同意する。
ほっと安堵する志希は、ふっと自分が年を取らない事を皆に話をしたか考える。
死なないと言う話はしたが、自分が年を取らないや月経などがこない等の話をした覚えがない。

全部話したつもりになっていたのに、すっかり忘れていたこの話題に志希は愕然としてしまう。

恥ずかしいが、後できちんと話そうと志希は一人でうんうんと頷きながら採寸が終わるのを辛抱強く待つのであった。

第四十五話

採寸が終わった後、一度荷物を置きに行く為に解散した。
報酬の分配は夕食後にカズヤがするので、それまで公衆浴場へ行って旅や諸々の疲れを落としてからいつもの宿に集合した。
その後は久方ぶりの普通の料理に舌鼓を打ち、報酬の分配をしてからどうするかを相談していた。
今回は四人の人間が鎧を新調する事となった為、短くとも一月はこの街に足止めされる事となった。
鎧が仕上がり次第街を出る訳なのだが、徒歩の旅にするか乗合馬車を利用するか、キャラバンの護衛を受けて依頼ついでに移動するか候補は三つあがった。
だがしかし、どの結果に落ち着くにしても、志希は鎧が出来るまで近所の採集依頼や街中で出来る依頼をこなして行く事で暫く日銭を稼ぐ事になる。
イザークやカズヤは基本貯金があるのでゆっくりとしているわけだが、志希はそんな訳にはいかない。
と言う事で、翌日から志希は一人でギルドにある街中の依頼が張られた板を凝視していた。
「うーん……この、ペット探しっていつも見る気がするんだけどどうなんだろう」
腕を組みつつ、呟く。
他の依頼用紙を見ながら、自分に出来そうなものを探す。
「庭の石を退かして欲しいって、無理無理。力無いし。んー……」
外に出る依頼で、採集系が集まっている物も物色し始める。
街から余り遠くに離れると、野生の動物だけじゃなく魔獣も出る。
防具が無い状態で、出来るだけ遠出する様な依頼は受けたくない志希。
しかし、早々良い条件の依頼など無い。

もう一度街中の依頼を見ると、端っこの方にちまっとした紙が張られているのに気が付く。
志希はそれを手に取り内容を確認して、眉根を寄せる。
依頼内容は、下水に落としてしまった指輪を探して欲しいと言う物であった。
たとえ下水の水が死んでいても、志希には好きな精霊を召喚する事が出来るので特に関係ない。
関係ないがしかし。
「臭そう」
嫌そうに呟き、小さく嘆息してから受付の所へと行く。
「シキさん、お一人ですか？」
ミラルダが笑顔で問いかけてきたので、志希は頷く。
「うん。イザーク達はイザーク達でやる事あるし、私は日銭でも良いから稼いでおかないとって思ってさ」
「そうですか。でも、良い事ですよ？　シキさんとイザークさん達のランクが違いますから、少しでも依頼を受けて評価を稼がなくてはいけませんからね」
ミラルダは笑顔で言いながら、受注の手続きをする。
「イザークさん達は、シキさんが一人で依頼を受けるのを知っていらっしゃるのですか？」
「あ、うん。一応街中のを受けるって言ってきてる」
「それは良い事ですよ。あ、下水に入るには衛兵の詰所からお願いしますね。あちらの方は、下に降りる階段などがありますから。それと、アリアさんとミリアさんに伝言をお願いします」
「あ、はい。何でしょう？」
「お二人の評価が基準に達しましたので、ランクアップの試練を受けてくださいと。シキさんもかなりの評価を受けていらっしゃいますから、殿下の最速記録を抜いてしまうかもしれませんね」
ミラルダはにこにこしながら言い、志希ははぁとしか返事が出来ない。

「殿下は冒険者登録をしてから半年で銅に上がったのです。シキさんは最初の依頼から始まって、先日のレッドウルフの変異種と戦った事に寄り大分評価が貯まっているのですよ。このままいけば、一月か二月で銅に上がれますよ」
「そ、そうなんですか」
「はい、そうなんです」
ミラルダの言葉に何とも言えない表情を浮かべて頷き、受付から離れてギルドを出る。
志希はそのまま真っ直ぐに詰所に行こうかとも思ったが、止める。
今着ている服が汚れるのは、ちょっと嫌だと思ったからだ。
「新しい服を汚すのは、流石に避けたいよねー」
思わず独り言をつぶやき、志希は一人でうんうんと頷いて宿に戻る。
こういう時の為に、以前から着ている飾り気の無い服があるのだ。
汚れて帰って来た時の為に、志希は着替えの服と下着も用意しておくべきだと頷く。
防水用の袋に入れて持って行けば、真っ直ぐ公衆浴場へ行ってお風呂に入って帰れるだろうと言う算段もある。
足早に宿の自分の部屋に戻り、服を着替えてから変えの服と下着を防水用の袋に入れて背負う。
手にはいつもの長棍を持ち、その他何かあった時様に手拭いその他を懐や袋に入れて準備を終わらせる。
「シキ一人で依頼か？」
宿の主人が顔を出し、訪ねてくる。
「はい。下水の落とし物探しをしてくるので、着替え持って行く所です」
「ああ、下水かぁ」
何とも言えない表情をして見てくる主人に、志希は苦笑する。
「はい。帰りに公衆浴場に寄ってくるので、遅かったらイザーク達に下水に潜ってくるって事を言っておいてください」

「はいよ。あいつらが帰ってきたら、そう伝えておく」
「ありがとう」
志希は笑顔で礼を言い、張りきって出て行く。
初めての一人依頼で、密かに興奮しているのだ。
足早に衛兵の詰所へ行き、依頼を受けていると証明書を出して下水へと降りる。
下に着くまで衛兵の一人が付き添ってくれたが、降りた時点で注意事項を述べられる。
「たまにここに棲み着いたネズミが巨大化して襲ってくる事があるから、気をつけろよ。ネズミ以外の魔獣とか野獣が居たら、数を確認して後で報告してくれ。そのまま倒せるようだったら倒しても良いけど、無理だけはするなよ。水中にも何か棲んでるって話も聞くから、よっぽどじゃない限り中に入るな」
「はい」
志希は素直に返事をして、光の精霊を呼び出す。
「じゃ、気をつけてな」
「はい、ありがとうございます」
志希は笑顔で返事をして、奥へと歩き出す。
衛兵は少しの間志希を見送ってから、階段を上って戻って行く。
その気配を風の精霊が伝え、うんと志希は頷いて更に周囲を索敵する。
今回は、風の精霊と水の精霊に協力してもらっていた。
下水を流れる水は汚いが、水の精霊が辛うじて居るのが見て取れた。
更に水と風の精霊を召喚して、敵の居場所や下水路の形、更に水中にあるであろう指輪の探索をしてもらっているのだ。
「なんか、悪いなぁ」
精霊ばかりに働かせているので、志希は何となく何かをした方がいいのではないかと思ってしまう。
今も、臭いが余りにも酷いので風の精霊が志希の周囲だけ空気を

浄化し臭いを寄せ付けないのだ。
しかし、ここで思い悩んでも仕方がないのでてくてくと歩く。
水の精霊が示す、金属反応はかなり多い。
意外に下水道には沢山の金属製の物が落ちていると、これで分かってしまう。
「水洗トイレがあるし、途中で止まってる気もするんだけどねぇ」
独り言を言いつつ、案内されるまま歩いていると。
水の精霊の警告と同時に、ざばっと音を立てて水路から何かが通路に這い出てくる。
「……どこの都市伝説だよぉ」
思わず志希は突っ込みを入れつつ、両手で長棍を構える。
大きな口を持つ、白いワニである。
「ネズミだけじゃ無いじゃん！　あの衛兵さんのウソつき！」
ぶうぶうと文句を言いつつ、志希はどうするかと考えを巡らせる。
長棍の特殊能力をあてにして殴るか、精霊に攻撃させるか。
その逡巡を油断と思ったのか、白いワニが飛びかかってくる。
志希は咄嗟に風の精霊を行使し、ワニを真っ二つに割ってしまう。
どうっと音を立て、ワニが二つに割れて通路と水路に落ちる。
ふうと安堵の息を吐いてから、風の精霊に礼を言う。
「ありがとう」
すると、もっと褒めて！　というかのように風の精霊達は志希の周囲をぐるぐると飛びまる。
最近、余りお礼を言っていなかったのかと志希は悩みつつ、もう一度礼を言って歩き出す。
水の精霊が案内するポイントまで行き、棲みついた魔獣や野獣が襲ってこないように見張ってもらいつつさてどうするかと腕を組む。
「うーん、水中で呼吸が出来るようにしてもらうのはありだろうけど……」
じっと流れる水を見て、顔を顰める。
今は分からないが、この水は悪臭を放つ汚水だ。

水中で呼吸を確保できたとしても、確実にこの汚水のせいで髪や体に臭いが付く。
それに、汚水の中で目を開けるとなると、後できちんと洗わなければ眼病になってしまう気もする。
だがしかし、汚く濁った水の中にある物を取る為には、潜る以外にすべはない。
そう思って唸ると、唐突に水の精霊達が張り切り出す。
何事？　と志希が顔を上げると、水路の水が志希に道を空けるように割れる。
「……わぁ、モーゼの十戒だぁ」
少々現実逃避ぎみに、虚ろな声で呟いてしまう。
誰もいないから良い物の、志希の事を知っている人間以外がこれを見たら大騒ぎだったであろう。
水の精霊達はこれで良い？　と言いたげに志希を見上げ、褒めて欲しそうにしている。
「あ、うん。ありがとう、凄く助かる」
気持ち的にはどん引きなのだが、助かった事は助かった。
意外に深い水路に飛び降り、何かの残骸やらゴミやらを踏みながら探す。
目の端に光の精霊の光を反射する物を見つけ、それをぼろ布を使って拾い上げまじまじと見る。
それは指輪で、堆積した泥の様な物が付いているのでぼろ布で拭い観察する。
「うーん……指輪は指輪なんだけど、違うなぁ」
味もそっけもない、金で出来た指輪だ。
ギルドの依頼にあった指輪は、大きなサファイアが付いた白金の指輪だ。
これではない。
「まぁ、拾って衛兵の詰所に落とし物で置いて来よう」
そう言いつつ、通路に戻ろうとしてむっと唸る。

降りる為の梯子などついていないので、上れない。
「しまったなぁ……」
とぼやくと、水の精霊達が器用に汚水で階段を作る。
これで上れば大丈夫と胸を張り、嬉しそうにしている。
志希の役に立てることが本当にうれしいとその表情に書いてあり、志希は若干の申し訳なさを感じながら感謝する。
「ありがとう。これじゃなかったから、まだ探す事になるけど皆つきあってくれる？」
志希の問いかけに、精霊達はもちろんと頷き、楽しそうにまとわりついてくる。
その間に汚水の階段に足をかけると、精霊が体を支えて持ち上げてくれているらしく中に沈まない。
世話になりっぱなしだと思いつつ、志希は通路まで上がり水路を元に戻すようにお願いする。
「さて、他のポイントを回りますかぁ」
自分に気合を入れるように志希は大きな声で言い、水の精霊に案内してもらいながら近くの金属が落ちているらしい所へと歩き出すのであった。

第四十六話

志希は、汚い水路の底で大喜びをする。
やっと目当ての物を見つけたのだ。
「やった、やったー！　やっと見つけたー！」
子供のように大喜びをして、足取りも軽く通路の上に戻る。
何せ、この指輪を探してあちこち探し歩いたのだから、嬉しくない筈がない。
時間感覚が無いのだが、それでも一日で見つけられたのは僥倖だ。
この指輪を見つけるまで、白いワニや大きなネズミの襲撃を何度か受けていた。
その中には黒光りする巨大なアレもいて、志希は大泣きしながらそいつらを焼いたり真っ二つにしたり溺死させたりして撃退した。
「やっと下水から抜けられるー！」
白いワニや大きなネズミも嫌だが、泣くほど気持ち悪かった巨大なアレから逃れられる事に志希は心底喜ぶ。
「ああもう、嬉しい！　早く帰って終了手続きして、お風呂入りたーい！」
汗をかいたのと、下水にいたと言う事で自分が汚いのではないかと志希は思う。
早く戻ろうと通路を歩きだそうとして、足を止める。
「……なんだろう」
通路の空気が、変わったような気がしたのだ。
水路に水が流れる音が聞こえているのは変わらないのだが、ピリピリとした緊張感が感じられる。
志希は咄嗟に風と光の精霊に頼み姿隠しをかけてもらう。
同時に、光の精霊は姿を消し周囲を暗闇に包む。
精霊達は、この場所から移動した方が良いと警告するので移動しようかと思うのだが、足が床にへばりついたかのように動かない。

なので、必死に自分を押し殺す。
すると、通路の奥の方から仄かな光が見えた。
足音が聞こえないのだが、それは気にしてはいけない。
イザークやカズヤも、足音を立てずに歩く事が出来るからだ。
それに、志希の目には相手が生きている者だと証明する生命力が見える。
明かりが、だんだんと近づいてくる。
遠目から見えたのは炎の精霊だったので、相手の明かりがランタンやそれに属するものである事は予想できた。
しかし、そのランタンを持っているであろう人物は上から下まで黒ずくめである。
イザークも上から下まで黒なのだが、この人物ほど怖いという印象は受けない。
カズヤよりも若干身長が高いであろう相手は、志希より若干離れた場所で不意に足を止める。
何かを探すかのようにぐるりと視線を巡らせ、口を開く。
「誰だか知らんが、足の裏の汚れを綺麗にしてから隠れた方が良いぞ」
その一言に、志希は自分の足元を見て思わずがっくりと床に膝をついてしまう。
いくら姿隠しをしても、足の裏にある汚れを誤魔化せないのであれば丸わかりである。
自分の余りにも情けない状況に半泣きになりながら、こくこくと頷く。
「そんな事より、こんな所で何をしている」
問いかける声音は剣呑で、志希は深いため息をついて口を開く。
「ギルドの依頼で、下水の指輪探しです」
姿を隠したまま答えると、相手はそうかと頷く。
「俺は丁度詰所までいくところだったのだが、一緒に来るか？」
「え？」

「俺も冒険者ギルドに所属している。銀の昇級試験で、この水路に居る生物の調査を依頼されてな……まぁ、それでこうして潜っているわけだ」

上から下まで黒ずくめの相手は肩を竦め、口元を覆う黒い布を下げる。

ランタンのほのかな明かりと彼自身の生命力で見えた顔は、やけに渋い印象を受ける壮年の男性だ。

「あ、はい。それじゃ、失礼してご一緒させていただきます」

志希はそう言って、姿隠しを解いて姿を現す。

男は志希の姿をまじまじと見て、ほぅと小さく声を零す。

「ハーフアルフか？」

「あ、いえ。一応人間です」

そう答え、頭を下げる。

「最近冒険者になったばかりのシキです」

「ああ、俺はバランだ」

男性は名乗り、志希を促す。

志希はありがたく隣に並び、先ほど感じた感覚をバランに問いかける。

「さっきまで、凄い殺気か何か出してませんでした？」

「ん？　ああ。まぁ、威圧だな。ああしておけば、弱い動物なら寄ってこない。寄ってきたとしても、怖気づいていればあっさり殺せる」

何でもない事のように言うバランに、志希は感心した表情を浮かべる。

「それで、調査は進むんですか？」

「潜った当初は威圧せんで歩いていたからな、続々と姿を現したぞ」

「……それ全部、倒したんですか？」

「ああ。それも、二日前の話だからな。殺した奴の死骸は大概食べられて、水路の底に沈んでるだろ」

「ああ、だから見かけなかったんですね」

なるほど、なるほどっと志希は頷く。
「さて、それはそれとして……シキだったな。君は、ネズミの他に何か見なかったかね？」
「へ？」
バランの問いかけに、志希は思わず素っ頓狂な声を上げる。
「どうにも、丸二日かけて歩いたのだが大きなネズミしか見なくてな。衛兵の言った通りなのかと思い始めているのだが……」
真剣なバランの説明に、志希は困惑してしまう。
「私、真っ白いワニとか巨大で黒光りしたアレ……虫を見ましたよ」
「何！？」
志希の答えに、バランが目を剥く。
「俺の時はさっぱりでなかったのだが……」
「いやいや、本当ですって。今日だけでかなり襲われましたし」
志希の言葉に、バランはふむと唸り首を傾げる。
そこでふと、志希は気が付く。
ランタンの明かりと、先ほどまで志希が使っていた光の精霊。
明かりに差がある訳なのだが、それがもしかしたら目印になっているのかもしれないと気が付いたのだ。
「ちょっと待ってくださいね。光の精霊よ」
初対面の人の前なので、精霊使いらしく光の精霊を呼び出す。
「明かりを少し先行させて、囮にしてみましょう」
「ほぉ、明かりの差があるのかもしれないと言う事か」
バランは頷き、志希の案に乗る。
暫く光の精霊を先行させて歩いていると、水音を立てて白いワニが水路から姿を現す。
それに釣られるように虫の羽音が響き、詰所の通路がある方から光の精霊の明かりを反射する、黒光りした昆虫が三匹ほど姿を現す。
「うわぁ……」
志希は鳥肌を立てて呻き、バランは絶句する。
「こ、これは確かに……俺の調査不足か」

「いや、純粋に仕方がないんじゃ……」
バランに突っ込みを入れつつ、志希は彼を見る。
「……調査したと言う証明で、部位が必要になる。アレを倒してくるので、君はここで待っていてくれ」
そう言うなり、バランは背に背負っている剣を抜く。
不思議な光沢のあるそれは、剣に見えて違った。
僅かに反りがあり、日本の太刀や青龍刀等の趣がある。
それを両手で構え、バランはまずは白いワニに飛びかかる。
ここにきてまさかの戦闘に志希はあっけに取られ、次いで動く。
流石に、彼一人に戦闘させるのは無茶だと思ったのだ。
ここで選択するのは数匹の動きを止める土の精霊だと思うのだが、自分が希少価値の高い物を持っていると知られるのは余り良くない。
と言う事で、ランタンに居る火の精霊を使う事にする。
「火の精霊よ、あの虫を燃やせ！」
志希の言葉に嬉々として火の精霊は従い、バランに襲いかかろうとした虫に火弾を叩きつける。
志希の気合を受け取っているので、火の精霊はその一撃で虫を燃やしつくす。
バランは一撃で白いワニの頭を綺麗に斬ったので、直ぐに虫の方に向き直る。
志希のアシストのおかげで数が減っているので、かなり楽に戦っている。
虫を二匹相手にしても気にすることなく、攻撃を上手く回避して切って捨てていた。
数分も経たずにワニと虫を退治してしまう腕は確かで、これが銀の実力なのかと感心した表情を浮かべる。
ちなみに、志希の中でイザークは別格だと言う意識がある為比べる対象にはならない。
「助かった。新人冒険者だと言っていたからな、慣れていないと思っていた」

「いやあ、慣れてなかったらこの道中で死んでますよー」
志希は苦笑しながら言い、バランも然りと頷く。
「さて、もう少々待っていてくれ」
そう言って、バランは太刀を懐から出した布で拭いてから鞘にしまい、腰に差している小刀で部位証明になりそうな部分を切り出している。
昆虫は触覚と翅を、ワニは頭の皮部分を取ってきた。
志希は何とも微妙な顔をして、バランから若干距離を取る。
その事にバランは若干不思議そうな表情を浮かべ、志希を見る。
「ごめんなさい、私その虫ダメなんです」
「ああ、それは悪かった。しかし、あまり好き嫌いをしていると大変だぞ」
「分かってますけど、こればっかりはどうも……」
志希はそう返事をして、光の精霊に先導させながら帰り道を歩きだす。
「ああ、道は分かっているのか？」
「はい。私、今日潜ったばっかりでしたから」
「ほう！？　それで、指輪は見つかったのか？」
「水の精霊に手伝ってもらったので」
志希の返事に、バランは成程と頷く。
「俺の知っている精霊使いは、余りこの手の事に精霊を使わなかったからな……新鮮な返答だ」
この言葉に、志希はひやりとする。
基本的に、志希がお願いした事は精霊達は叶えてくれる。
この手の探し物や索敵、下手をしたら鉱脈まで見つけてくれそうなほどだ。
だがしかし、精霊使いがこのような用途で精霊を使役した例は知らないので何処まで出来るのかが全く分からない。
なので、誤魔化す事にした。
「まぁ、機嫌が良かったから協力してくれたんだと思うんですけど

ね。所で、バランさんはいつもお一人なんですか？」
「いや、俺は二人パーティだな。シキはどうなんだ？」
「私は、五人パーティです。私と神官、魔術師の二人が鉄なんですけど……どうやら、この二人は昇格するらしくて、私以外の皆が銅になる予定です」
「ああ、なるほど。銅の人間に色々と教わっているのか」
バランは納得したように頷き、微笑む。
「さっきのアシストは、見事だった。本当に助かった、ありがとう」
いきなり褒められて、志希は何やらむずかゆい気持ちになる。
「いえいえ、こちらこそ前に立ってくださりありがとうございました」
志希はそうお礼を返すと、バランが苦笑する。
「俺は前に立つのが仕事だからな、礼を言われると思わなかった」
「いやでも、助かったのは本当ですから」
「そうか」
和やかに会話をし、二人はそのままてくてくと歩く。
今のバランは敵に対して威圧をかけ、格下の敵を退けながら歩いているため平和である。
志希は若干息苦しく感じる訳なのだが、黒光りした巨大なアレに遭遇しないのであればその辺に文句を言うつもりはない。
それなりに会話をしている内に詰所に繋がる階段を見つけ、二人は上にあがって行く。
「お、バランじゃねぇか。どうだった？」
詰所で一番に出迎えた男が笑顔でバランに声をかけ、後ろに志希が居るのに気が付く。
「お嬢ちゃん、今日はもう上がりか？」
「はい、と言うより見つけたので今日で終わりです」
志希の言葉に、衛兵の男は驚いた表情を浮かべる。
「おいおい、マジかよ！？　普通、その手の依頼は一週間から半月はかかるぜ！？」

衛兵の言葉に、志希はきょとんとした表情を浮かべてから俯く。
もしかしてやらかしてしまったのかもしれないと、心配になる。
「まぁ、それだけ優秀だったと言う事で良いじゃないか。それじゃ、ギルドに行くからまた後でな」
「あ、私もギルドに行きますので。お疲れ様でした」
衛兵の男に声をかけ、志希は早々に詰所を出る。
バランも同じように詰所を出て、志希に並んでギルドへと向かう道を歩く。
向かう場所が一緒だと言う事で、二人は雑談をしながら歩いて行くのであった。

第四十七話

志希はこの世界に来てから、余りにも知人が少ない。
イザークとカズヤ、アリアとミリア以外には最初に拾ってくれたクルト、ライル、ベレント。他には受付のミラルダもいるが、あまり話をした事すらない。
なので、新鮮な気持ちでバランと会話をしていた。
それもギルドで依頼完了の手続きを取ってから終わり、どこかでまた会った時に話をしようという程度で別れた。
思ったよりも遅い時間ではなかったので、公衆浴場でささっと汚れを落としてから宿に帰った。
洗濯物は明日の朝から洗い、干す算段をつけつつ先ほどの依頼の報酬を数える。
銀貨一枚と銅貨五十枚の報酬なので、さてと腕を組んで考える。
報酬の一割から返すと言う事になっているが、現在の借金は金貨二枚程である。
最初の銀貨五十枚の方は、先日のレッドウルフ退治で何とか返す事が出来たのだ。
後は、精霊の揺り籠を首飾りにした時の借金だけである。
「うーん、明日また新しい依頼を受けて頑張ろうかな」
報酬の一割を渡すと言う物凄く割安で返している状態なのだが、イザークが受け取るのは銀貨だけなのである。
端数は面倒くさいという理由を言われたので端数切り上げて渡すと、これもまた受け取らない。
流石にそれはまずいと思い、端数分や銅貨しか渡せない時は貯め込んで銀貨一枚分になった時に渡していた。
イザークはお金を持っているからか分からないが、意外にお金に無頓着の様に志希には感じられた。
志希は知らないが、イザークは決してお金に無頓着と言う訳では

ない。
カズヤに交渉やお金に関する事を任せているのは、ただ単に彼の方が上手くやるからである。
志希は取り敢えず、今回の報酬から銅貨十五枚を抜きイザークへの返済専用の小袋に入れる。
受け取ってくれない端数を貯め込み、銀貨一枚分になった時に宿で両替してもらいイザークに返す様にしていた。
「ん、明日洗濯が終わったらギルド行って、良い依頼があったら受けようっと！」
体を伸ばし、気合を入れる。
返済用小袋はいつもの荷物袋に突っ込み、財布を懐にしまって志希は下の食堂へと降りて行く。
そこに丁度、よろよろしたカズヤとミリア、付き添いのアリア、そしてその二人を鍛えているイザークが入ってくる。
「おかえりなさーい！」
志希は明るく声をかけ、四人に駆け寄る。
その姿を見たカズヤは小さな声を上げ、アリアとミリアは嬉しげに笑って頷く。
イザークはほんの少しだけ目を瞠り、次いで目を和ませる。
志希の今の格好はいつもよりほんの少しだけ、女の子らしい格好をしている。
やや裾が長めの服がスカートの代わりとなっている状態で、下はズボンに見えるが実は微妙に違う。
服と色を合わせたズボンは途中で細くなり、短パンとズボンの間にある太腿を見せている。
細くなった布部分は短パンと一つになっているベルトに留められ、釣られている状態だ。
「えへへ、可愛いでしょ？」
志希は満面の笑みを浮かべて、くるりと回って見せる。
ふわりと翻る服の下に見える太腿と、素肌の背中がチラリと見え

た。
「シキ、その服で回らない方が良いぞ」
カズヤが注意しつつ、椅子に座ってぐったりとする。
「可愛い、シキ可愛いわ！」
ミリアが疲れている状態だと言うのに、物凄く嬉しそうな表情を浮かべて志希の手を取る。
「動きやすくて、可愛いのってこれだと思ったんだ。こういう裾の長い服にも合うけど、裾が短いのでも全然いけると思うの」
「ああ、良いですね。街中で着る分には、十分可愛らしいです」
アリアも頷き、キャッキャと楽しそうに声を上げ女三人で盛り上がる。
その間にイザークは椅子に座り、苦笑を浮かべながら口を開く。
「席について、さっさと注文しろ。この後、公衆浴場へ行くのだろう？」
イザークの言葉にアリアとミリアは大慌てで席に着くが、志希はゆっくりとイザークの隣に座る。
「私、今日はもうお風呂入ったからお留守番するね」
笑顔で言う志希に、首を傾げるのはアリアだ。
「もう、依頼は終わったのですか？」
「うん。今日は早く終わったから、明日は朝から洗濯してまた何か依頼を受けて来ようと思ってるんだ」
アリアの問いかけに返事をして、志希は注文を取りに来た女子店員にいつものメニューを頼む。
「随分とハイペースだな」
「あんまり無理しなくても、ゆっくりと返して行けばいいんじゃない？」
カズヤとミリアの言葉に、志希は苦笑する。
「いや、なんかイザークに悪い気がするからさ」
「気にしなくて良いとは言っているのだがな」
志希の言葉にイザークは呟き、運ばれてきたエールを口に運ぶ。

「でもさ、一応成人しているんだから金銭関係はしっかりしておかないとダメだと思うんだよね」
真面目な表情で言う志希に、カズヤが苦笑する。
「まぁ、その辺シキはしっかりしてるから分かるけどなぁ……当分組んだままになるんだから、あんまり気にすんなよ」
「えぇ～……お金にだらしないのは、ちょっと」
志希が顔を顰めて言うと、イザークは小さく息を吐く。
「だらしなく、と言うわけではない」
「え？」
「無理しない程度に返してくれれば良い、と言っている。毎日何かしらの依頼を受ければ、疲れもたまる。程々にして、しっかりと体を休める事も重要だ」
イザークが志希を窘めるように言うと、とたん彼女はしゅんと肩を落とす。
その姿にくすりと笑うミリアだが、隣に座るアリアは少し思案する様な表情を浮かべている。
ミリアが声をかけようとするが、それより早く店員が夕食を運んで来た。
テーブルの上に所狭しと並べられるそれぞれの食事を置いてから、店員が立ち去って行く。
それを見送る志希に、アリアが問いかける。
「お食事しながらお話をしたいんですけど、声が漏れたりしないように出来ます？」
「ん？　まぁ、良いけど」
真剣な声音から重要な話があると解釈した志希は、風の精霊に意思を伝えて音漏れをしないようにする。
夕食時なので、今の食堂にはかなりの人が居るのだ。
「ええっとですね、シキさんはありとあらゆる知識を持っているとおっしゃってましたよね」
「うん」

いただきますと手を合わせてから、志希は食事を口に運びつつ頷く。
「ただし、持っているだけで使えるわけじゃない状態だから切っ掛けがないと浮かんで来ないよ」
「では、きっかけがあれば思い出しやすいんですよね？」
「うん」
志希が頷くと、アリアがほっと表情を緩める。
「でしたら、魔法を習ってみませんか？」
「は？」
アリアの唐突な言葉に、志希がきょとんとした表情を浮かべて箸を止める。
「切っ掛けがあれば思い出せる。それなら、魔術を習ってみればいいと思うんです。思い出せたのが遺失魔法であれば、わたし達の強化につながると思うのです。もちろん、それを使いこなす為にわたし達自身の技量を上げる必要もあります。それに……運が良ければ、遺跡となった建物の位置を思い出す事も出来るのではないでしょうか」
アリアの言葉に、カズヤが成程と手を叩く。
「強力な武具が眠る遺跡の位置を知っているとなれば、オレらが修行しながら向かう事も出来るよな」
「でも、危険ではないかしら」
ミリアがほんの少し、暗い表情を浮かべて口を挿む。
「いや、中に入るのは自信がついてからだろ」
「そうじゃなくて……誰も知らない遺失魔法を、シキが知っていると言う事を知られかねないと思うの。安易に思い出し、それを知られたりしたら……」
ミリアの心配する言葉に、アリアがはっとした表情を浮かべて肩を落とす。
「そう、ですよね。シキさんの事を考えれば、危険ですよね」
しょんぼりとした表情を浮かべるアリアの言葉に、しかし志希は

頭を振る。
「ううん。魔術を習うっていうのは、良いアイデアだと思う。実際、日常に役に立つ魔法とかあるかもしれないし。何より、後の事を考えればパーティの強化は必要だと思う」
志希の真剣な表情と声音に、イザークが小さくため息をつく。
「敵が敵だ、打てる手はすべて打つべきだろう」
賛成する声音は、若干棘を含んでいる。
「そう……ね、なんだかごめんなさい」
ミリアは自分が厄介事を背負っていると自覚している分、他の人間に危険を冒させる事に罪悪感を覚えてしまう。
「謝る事じゃないし、何よりミリアは自分の資質にきちんと気が付かないとダメだよ。ミリアは本当なら、もっと強い。戦士としてじゃなく、神官としてね」
志希はそう言って、スープを一口啜る。
「“聖女”なんだから、本当ならもっと癒しとかアンデットに対する浄化能力が強い筈なんだ。でも、今は普通の神官より少しだけ力が強い状態なだけだ」
志希の言葉に、ミリアは絶句する。
聖女と言うのはとても強いと知ってはいたが、そこまで具体的なものは知らなかったのだ。
実際、他国には聖女は数人いる。
しかし、彼女達は浄化か癒しの能力のどちらかにしか特化していなかった。
だが、志希はミリアには両方の能力が備えられている上に、強いと断言している。
「聖女は、どちらか片方だけではないの？」
ミリアが震える声音で問いかけると、志希は少しの間目を閉じてから口を開く。
「ミリアは生まれながらの生粋の聖女で、その上エルシル神から厚い加護がある。ぶっちゃけ、お気に入り状態だよ。だから、ミリア

は癒しと浄化能力が高い上に、凄い回復能力を与えられてるの。でも、何か……ミリアの気持か何かの問題でそれが発揮されてない」

志希の言葉に、アリアとミリアは表情を強張らせる。

心当たりがあるからなのか、ないからなのかは分からない。

しかし、志希はその事を言及するつもりはない。

「まぁ、何はともあれ私はアリアに手が空いている時にでもちょっと教えてもらおうと思う」

話題を変える為に、志希は笑顔でそう告げる。

「あ、そうですね」

志希の気遣いに気がついたのか、アリアは頷く。

「まぁ、何にしてもこっちはこっちで鍛錬をするのは変わらねぇよ……な？」

「ああ」

カズヤがイザークに問いかけると、彼は頷く。

「シキも棍を振るのは忘れるな。特に、お前には業が眠っている。それを体に馴染ませておく方が、万が一の際には役に立つ」

むしろ、万が一の時でなければ役に立たないのが正解である。

しかし、今日の様に一人で行動する際に不測の事態があった場合、己の肉体を行使して戦う事もあり得る。

それを考えれば、イザークの言っている事は間違っていないのだ。

「うん、分かった」

志希は頷き、明日からの予定を頭の中で組み立てる。

アリアに魔術を教えてもらってから、棍を振り鍛錬をする日を一週間のうち三日ほどを当て、四日のうち二日は依頼を受け残り二日を休日とする事にする。

「取り敢えず一週間の予定として、鍛錬と魔術の日を三日とって二日を簡単な依頼を受けて残りを休日にする感じかな」

口の中の物を飲み込んだ志希は呟き、うんと頷く。

そんな志希を、アリアとミリアは呆れたような表情を浮かべ見ている。

カズヤは若干何とも言えない表情を浮かべ、目の前の料理にフォークを突き刺す。
そんな三人とは違い、イザークは志希の予定に一つ頷く。
「そんな所だろう。ただし、拘束期間が長い依頼だけは受けないようにな」
「うん、それは分かってるよ」
イザークの注意に志希は苦笑して頷き、大皿に盛られているパスタを自分の皿に取り分ける。
「まぁ……無理だけはすんなよ」
カズヤはため息交じりにそう言って、大きな鶏肉を口に運ぶ。
「？　うん」
志希は不思議そうな表情を浮かべて頷き、食事に戻る。
ミリアとアリアは顔を見合わせ、肩を竦めてからそれぞれ食べかけの物を口に運び始める。
なにせ、志希の口にした予定はミリアやアリア達にとっては物凄く大変な日程だからだ。
普通、もう少し休日が多いものだ。
だと言うのに休日がたった二日しかなく、それ以外は鍛錬と魔術の勉強、依頼を受けるという詰め詰めの予定。
呆れた表情を浮かべるなと言う方が無理なのだが、カズヤは何も言わずイザークは志希の立てた予定が普通だと言う素振りを見せる。
それを見た時点で、突っ込みを入れても仕方がないのだろうと感じて何も言わない事にしたのである。
こうして誰も何も突っ込まないまま夕食は終わり、志希は自分が立てた予定は実はとても大変だと言う事を知らないままになるのであった。

第四十八話

志希は呆然と馬車の椅子に座りながら、硬直していた。
その向かい側には、とても爽やかな笑顔を浮かべている青年が座っている。
「今日一日で終わる依頼だから、そんなに硬くならなくて良いよ」
青年の言葉にしかし、志希は頷く事は出来ない。
「し、しかしですね……金の冒険者で、しかもこの国の第五王子様の前で緊張するなと言うのは、無理なお話なのでして……」
緊張のあまり、志希の言葉遣いはおかしい。
それが面白いのか、青年はくすくすと笑う。
「オーランド、と呼んでくれないかな」
にっこりと笑う青年、オーランドの言葉に志希は困惑するしかない。
何故こんな事になったと志希は深い溜息を吐き、ついオーランドと会った時の事を思い返してしまう。

ある程度の予定を消化し、あと数日で頼んだ鎧が完成する所であった。
志希はこの間にアリアから魔術の基礎を習っていた。
また、アリアは元々指輪と杖の発動体を二つ持つ癖があったらしく、最初に組んだ冒険で手に入れた指輪がある為元々持っていた指輪の発動体が余っていた。
そこで志希の基礎が十分と判断された為、アリアがその発動体を譲ってくれたのである。
志希が普段長棍を持って歩く事を考えれば、指輪の発動体と言うのはとてもありがたい。
取り敢えず右手の人差し指にはめ、予定通り依頼を受ける為に志希は冒険者ギルドに足を運んだのだ。

週に二回小さな依頼を志希が受けまくっていた為、街中での依頼はだいぶん減っていた。

流石に、これ以上街中の依頼を減らすのも悪いと思い、最近は城壁の外に出る採集系の依頼を受けていた。

一日くらいで終わらせられるような依頼があれば、志希は優先的にそちらを受けている。

先日、アリアとミリアも銅の冒険者へと上がった事を考えれば、志希もサクサクと評価を稼ぎ銅冒険者へと上がるべきだと思っているからだ。

もっとも、一日で終わる様な依頼では余り評価は得られない訳なのだが、志希は塵も積もれば何とやらの精神で頑張っている。

それに、どんなに小さな依頼であろうとも依頼人が喜んでくれれば嬉しいのだ。

ミラルダは志希のそんな姿勢に好感を持っているのか、いつも親切にしてくれていた。

それが思わぬ方向に転んだのは、志希がこの日に選んだ薬草採集の依頼をミラルダが見たからだ。

依頼の羊皮紙を見たミラルダは顔を曇らせ、最近この薬草が採集出来ていないと教えてくれた。

以前の場所の物は取りつくされたのか、一日で行き来が出来る場所には無いと言うのだ。

それならば違う依頼を受けようとミラルダに取りやめる様に伝え、他の依頼用紙を見に行こうとした時にオーランドが現れた。

優雅な所作をしつつも、どこか焦った雰囲気を持った彼はミラルダの前に足早に歩いて立ち、教養があり礼儀作法がしっかりしている女性冒険者が居ないかを聞いてきた。

無論、余程の教養を持つ女性冒険者などそうはいない。

この街でそれに該当するのはアリアとミリア、その他高位の冒険者ぐらいである。

だがしかし、ここでミラルダに好印象をもたれていた志希が居た。

教養はどうかは知らないが礼儀作法がしっかりしていると思われる志希が居ると紹介され、オーランドは速攻で志希に決めたのだ。
何が何やらわからないまま志希はオーランドに連れられて馬車に乗せられ、ミラルダはしっかりとオーランドからの依頼書を作り志希がそれを受諾したと言う手続きをしていた。
要するに、二人にはめられたのである。
「その、きちんと依頼を見ていなかったのですが……」
「ああ、話すのも忘れていたからね。申し訳ない」
殆ど人の意見を無視して強行された為、志希にとってはとても大変な依頼である。
にこやかな顔で、オーランドは依頼内容を話し始める。
「とても簡単な仕事だよ。今日の夜、王妃主催の夜会がある。それに、私のパートナーとして出席してもらうだけだ」
「……は？」
思わず、志希は聞き返してしまう。
「夜会のパートナーをしてくれ、と言う話だよ。本来は婚約者に頼むのが筋なのだが、あいにく解消されてしまってね。手近な貴族の娘に頼むのもありだったんだが、ここはひとつ教養のある女性冒険者を連れて行って驚かせてやろうと思ってギルドに頼みに行ったんだ」
笑顔のオーランドの台詞に、志希は絶句してしまう。
何処の世界に庶民どころかごろつきに近い女性冒険者を連れて王妃主催の夜会に出る人間が居るのか、突っ込みどころが満載である。
ぽかんとした表情を浮かべる志希に、オーランドはくすくすと笑う。
「なに、君が金や白金の冒険者になった時の練習だと思えばいい。高位の冒険者は、王族からの招待で夜会や舞踏会に招待される事もあるからね」
「い、いえいえ。私にはまだ先と言うか遥か遠くと言うか凄く早いと言うか、無理と言うか……」

手を振り、志希が必死で断りたいと言うオーラを放つ。
だがしかし、にっこりと笑うオーランドから放たれる黒いオーラに圧倒され、思わず口どころか息を止めてしまう志希。
「きちんと君のパーティの人に連絡を入れる様にミラルダに言いつけてあるから、安心して欲しい。お礼も少ないけれど出すからね」
だから断るなんて言うなよ、と言われた気がする志希。
「は……はい」
泣く泣く頷き、ぐったりと馬車の背もたれに体を預ける志希。
心の中でこの場に居ないイザークに助けを求めるが、来る筈もない。
「それじゃ、今日一日の予定を教えるから頭に叩き込んでくれるかい？」
優しげな声音で確認するかのような問いかけはしかし、命令している。
むしろ、それが出来なければどうなるか分かっているかと脅されている様な心持になってしまうほどだ。
志希はこくこくと頷き、居住まいを正してオーランドを見る。
その志希の姿に満足げにオーランドは頷き、口を開く。
「まず、城に入ってすぐドレスの試着をしてもらう。その後でダンスの練習だ。もちろん、練習用のドレスと靴でね。君と私では少々身長差があり過ぎるが、まぁなんとかなるだろう」
うん、とオーランドは頷き質問は無いかと志希を見る。
「ええっと、ご飯は食べさせていただけるんでしょうか？」
志希の素朴な疑問に、ああと笑顔になる。
「もちろんだ。合間の休憩で、軽食や菓子を摘む事になると思ってくれ」
オーランドの返事に、志希はほっと安堵した表情を浮かべる。
基本的に、志希は三食食べたい人間なのである。
そんな子供の様な仕草をした志希に小さく笑ってから、オーランドはふっと気がついたように口を開く。

「君のその額の布は、何か意味があるのかい？」
オーランドの問いかけに、志希ははたっと気がつく。
額には『神無の鳥』の証しがある。
この布を取った場合、気味悪がられたり異端視される事があるのだ。
「ええっと、ここにはちょっと酷い傷がありまして。前髪とかで隠れていても、見られたら嫌なので隠しているんです」
志希の言葉に、なるほどとオーランドは頷く。
「冒険者には傷がつき物、とはいえ女性だからな。特に、そんな目立つ所にあれば気にもなる人間はいる。良ければ、エルシルの司教に癒してもらってはどうだ？」
オーランドの親切心からの言葉に、志希はしかし大慌てで頭を振る。
「い、いえ！　これは自分が精霊使いとして腕を上げた時に治すと心を決めているので！」
エルシルの司教で神の奇跡が使えると言う事は、確実に神の声が聞ける人間である。
そんな人間に見られて変な具合に目をつけられてはかなわないと、志希はいつも口にして居る方便を言う。
「そ、そうか」
強く言った事で驚いた表情を浮かべたオーランドは、次いでくすりと笑う。
「腕を上げた時に治す、という目標があるか。中々面白い」
興味津々と言った表情を浮かべ、オーランドは志希を見る。
志希はそんなオーランドに戦々恐々と言った表情を浮かべ、口を開く。
「ですから、その……私では無くて別の女性をですね、お誘いくださるのが一番いいと思うのですけど」
「いや、心配する事は無い。それならば、任意の所に幻覚を張りつける事が出来る魔道具がある。それを貸すから安心してくれ」

要りません。
志希は心の中でそう反論するが、オーランドはにっこりと笑って志希を見ている。
実際口に出して言っても、オーランドは華麗に無視をするのだろう。
なぜ、どうしてこうなった。
志希は心からそう思い、深いため息をつくのであった。

第四十九話

冒険者ギルドの裏手にある鍛錬所で一休みをしていたカズヤ、イザーク、ミリア、アリアの四人はミラルダが持ってきた書簡に首を傾げる。

カズヤはそれなりに立派そうな封書に眉を潜めつつ、封を切って中に入っている紙を取り出し文字を読み上げる。

「げ」

思わずと言った様に、カズヤが声を上げる。

その隣に立ち、カズヤの持つ羊皮紙を覗き込んだミリアも嫌そうな表情を浮かべている。

「……どうした？」

イザークはその二人に問いかけると、カズヤが手紙をひらひらと振りながら口を開く。

「シキが、本来なら銀の依頼を受けたらしい。つーか、強制連行されたらしいぜ」

「え！？」

カズヤの説明に、驚いた声を上げるのはアリアである。

「鉄のシキさんが、銀の依頼を受けるには何らかの伝手やパーティの誰かが銀でなくてはいけない筈です。それなのに……」

「いや、受けさせられたっつーのが正しいらしいぜ。何せ、依頼人がオーランド王子らしいからな」

「ええ！？」

アリアはまたも大きな声を上げ、目を丸くしている。

「……今回の犠牲者は、シキだったつーアレだな」

カズヤは嘆息交じりに言い、紙を封筒に戻す。

「傍迷惑な」

イザークが淡々とした口調で言うが、その声は冷たい。

「オーランド王子のアレって、噂のアレの事？」

ミリアの問いかけに、カズヤは頷く。
「ああ、噂のアレ」
カズヤの答えにミリアは顔を顰めるが、アリアは首を傾げている。
その様子に気がついたカズヤは苦笑し、説明をする。
「王妃主催の夜会に、女冒険者を連れて行くってやつ。婚約者が居ねぇだろ、あの王子。で、連れて行った女冒険者が王妃のお眼鏡にかなったら、冒険者を続けられるって言う恒例行事だな」
「そ、そんな理不尽な……！」
思わずアリアが声を上げると、ミリアが肩を竦める。
「王族が冒険者をする、って言うのも大変らしいのよ。それを認めさせるための条件の一つ、らしいわ。それで、毎回同じ女性を連れて行くのは禁止だそうで、中々大変見たいよ」
「そうそう。んで、毎回及第点ギリギリの女冒険者しかいねぇから、毎年テストさせられてるんだとよ」
カズヤはそう言いながら、体をほぐす運動をしている。
「王妃が認める程の教養を持つ女冒険者が居れば、このテストも終わりだそうだ。毎年一回帰国し、顔を見せるだけで終了する事が出来ると言う事になっている」
イザークはカズヤの説明に補足しつつ、大剣を背負う。
「今日の日に合わせて、確かクルト達が帰ってきている筈だ。あいつは、毎年この時期に王子のテストを見学するからな」
イザークの突然の言葉に、カズヤが動きを止める。
「お、おい……」
「悪いが、今日はこれで終わるぞ。俺はクルトに用事が出来た」
イザークはそう言い、ギルドに向けて足早に歩き出す。
「い、イザーク？」
きょとんとした表情を浮かべ、ミリアがその背中を見送っているとカズヤが立ち上がる。
「まぁ、心配なのは分かるな」
うん、と頷きつつカズヤも身支度を始める。

「え？　ええ？」
アリアはきょときょととイザークとカズヤを見ていると、ミリアが手をポンと叩く。
「なるほど、そのクルトさんと言う方に同行させてもらって城に入るのね」
「そう言う事だな。つーわけで、オレも同行させてもらおうと思う」
「えええ！？　そ、そんないきなり……」
アリアの驚愕の声に、カズヤは笑顔で大丈夫だと手を振る。
「クルトの伝手なら、それなりの人数が入れるんだ。まぁ、アリアとミリアはどうする？」
不意に問いかけられ、ミリアは逡巡する。
追放されたとはいえ元は王族、己の顔を知っている人もいる筈だと言う恐れがある。
「わたしは、行きます」
しかし、アリアは行きたいと手を上げた。
「それに、夜会と言う事はパートナーが必要ですから！」
「いや、それ貴族の話だろ？」
アリアの言葉にカズヤが思わず突っ込みを入れるが、アリアは気にしていない。
「はい、そうですけど。やっぱり、パートナーはいた方が良いと思いますから！」
満面の笑顔の言葉にカズヤはそう言う物なのか？　と首を傾げる。
その二人のやり取りを見て、ミリアは小さく笑い口を開く。
「取り敢えず、ねじ込んでもらうんだったらイザークの後を追いかけた方がいいと思うわよ。それと、乗りかかった船だしわたしも行くわ」
そう言って、ミリアも手早く身支度をする。
「そ、そうか。取り敢えず、ギルドに顔を出してからオレ達が取ってる宿に行こうぜ。あそこが、クルト達がこの街に来た時の拠点になっているんだ」

カズヤはそう話をして、足早にギルドへと歩き出す。
「あ、はい！」
アリアは元気に返事をして、カズヤの後を追いかけて行く。
そんな妹の姿にミリアは苦笑を零しながら歩き出す。
今回の依頼は、王妃がどうあってもオーランド王子に冒険者をやめさせたいと言う意図が丸見えなものである。
教養の深い女性と言うが、貴族社会の仕組みを理解し裏の意図をも読んで貴族や王族の女性として相応しい振る舞いを強要されるのだろう。
そして、教養の一端としてダンスも踊らされる事は目に見える。
庶民が知るダンスよりも洗礼されていて、なお且つ難しい物を要求されるだろう。
王族の女性でも踊るのが難しい曲も用意されているのではないかと邪推してしまうのも、仕方がないのではないだろうか。
小さく嘆息して、ミリアはアリアが開けて待ってるギルドの中に足を踏み入れると、そこにはちょうどイザークと見知らぬ冒険者が数人話をしているのが見えた。
ドワーンと人間、それにアルフの五人パーティだ。
アルフの青年は美しい金の髪にエメラルドの瞳で、一見女性にも見える中性的な美しさを持っている。
イザークと並ぶと、物凄く絵になるとミリアは思わず見惚れる。
「クルト、もう帰ってきてたのか？」
そう言いながら、カズヤがアルフに近寄って行く。
「うん、今日はオーランドの目利きの日だろう？　ボク、わりと楽しみにしてきてるんだよね」
笑顔で酷い事をのたまうクルト。
「まぁ、私もオーランド王子の我儘がいつまで続くか、楽しみにしていますしね」
クルトと並んで立っている魔術師の青年が、眼鏡を人差し指で押し上げながら笑う。

「この二人、良い趣味してると思わない？」
そう言いながら手を振るのは、カズヤと同じ様に腰に沢山のポーチが付いた女性だ。
小剣を腰に二本差している様子から、盗賊なのだろうと分かる。
「まぁ、こいつらの悪趣味はいつもの事だろ？」
笑いながら言う男性は、盗賊風の女性と同じか少し上ぐらいの人間だ。
見るからに戦士と行った風体で、大きなバスタードソードを腰に差し、チェインメイルを身に纏っている。
「オーランド王子はワキュリーが認めなさる勇猛な戦士じゃ、常に戦場とも言える冒険者におる方が性に合っていなさるのだろう」
ドワーンが大きなハルバードを手に、可可と笑う。
そんな彼らを前に、イザークが若干深いため息をつく。
「今年の生贄は、シキだ」
イザークの言葉に目を丸くするのはクルトと魔術師、そしてドワーンだ。
「ちょっと待って、それおかしいだろう？　アレは最低でも銀でなきゃいけない依頼だ。それこそ、依頼人が指名でもしない限り無理なはずだよ」
クルトが焦ってそう言うと、イザークがミラルダを見る。
ミラルダはその視線に気が付き、にっこりと笑う。
「オーランド王子がじかにお見えになられ、シキさんをお連れになられましたので受理いたしましたが何か？」
ミラルダの言葉に、クルトが頭を抱える。
「うあぁ！　あのバカ王子！　失敗したら、シキに傷が付くじゃないか！」
クルトの言葉に、魔術師の男が頷く。
「……その場合は、彼女は河岸を変えなくてはいけませんね。全く、要らない事ばかりをする王子です」
顔を顰めて二人で暴言放ちまくるのを、ミリアとアリアは面食ら

った表情を浮かべてみてしまう。
その二人に気が付き、カズヤが肩を竦めて苦笑する。
「まぁ、元々河岸は変えるつもりだったんだよ。それより、あれだ。ギルドで話をしていても仕方ないだろ？　宿に移って、話をしようぜ。イザークも、一先ずはそれでいいだろ？」
カズヤが場を取り仕切り、全員を促す。
何やらある意味混沌としてきた状態で、まともな会話など出来ないのとの判断だ。
それに同意し、話が見えていない戦士と盗賊の男女とどうでもよさそうなドワーンが仲間を促しギルドを出る。
彼等に続いてイザークもカズヤ達と共にギルドを出て、クルト達と連れ立って歩き出す。
「君達、期待の新人って事でこのギルドで目をつけられているのは知っていたけど……シキが巻き込まれるなんてどんな災難だよ」
クルトが憮然とした声音で言うと、イザークが肩を竦める。
「半月以上前の依頼で、シキが防具一式をダメにしてしまったのでな。ついでに俺以外の全員の鎧を作り直す事になった」
「ど、どれだけ危険な依頼を受けたの！？　特に、シキは初心者中の初心者だろう？　イザークがしっかりと面倒を見ないと、大きな怪我をしかねないんだよ！？」
イザークの言葉に、クルトが目を剥き怒鳴る。
「い、嫌まぁ……アレは相手が悪かったんだよ。でもまぁ、新しく仲間になったエルシルの神官、ミリアが志希の事をしっかりと直してくれたから今はピンピンしているんだ」
カズヤが慌ててイザークとクルトの間に入り、嘘を交えた説明をする。
それを聞いたクルトはむっと唸り、カズヤとイザークから視線を外してやや後ろを歩くアリアとミリアを見る。
そして、驚いたように目を丸くする。
「……うわぁ」

この声音には、色々な意味合いが含まれているのをクルトのパーティメンバーと、イザークとカズヤは気が付いている。
そんな事は分からないアリアとミリアはきょとんとした表情を浮かべていると、クルトがベレントを見る。
ベレントはクルトの意を汲んで二人を見て、ほぉと声を上げる。
「これは驚きじゃ。いや、これだけ近づかねば分からんと言うのがまた凄い。相当強い何かで分からぬよう阻害されているのか、いや……封印に近いものがあるのぉ」
感心したようにベレントはミリアをまじまじと見ていると、ライルがあっと声を上げる。
「魔術師の君、確か……ミシェイレイラ神聖国から来た神聖た……」
「うあああ！　往来でする話じゃねぇだろ！　取り敢えず、さっさと宿行こうぜ宿！」
カズヤが大慌てでライルの言葉を遮り、アリアとミリアの腕を引っ張る。
「宿の方で、話ししようぜ！　な！　それじゃ、先行ってるぜ！」
カズヤに腕を掴まれて顔を赤くしているアリアと、状況が分からないミリアの二人はそのまま引っ張って行かれる。
それを見送るクルトはくすくすと笑ってから、イザークを見上げる。
「カズヤもイザークも、良い方向に変化しているみたいだね」
まるで兄の様な表情を浮かべ、クルトはイザークに呟く。
「俺は変わっていない」
「人は気が付かないうちに、変わるものだよ」
人を食った様な笑みを浮かべ、クルトはそう告げてイザークの背中を叩く。
「さ、さっさと宿に行ってお話をしないとね。夜会に行きたいんだろう？」
美しい微笑を浮かべクルトはイザークに告げ、彼は若干重たい溜息を吐く。

クルトは千年生きていると揶揄される程旧いアルフだが、同時に人の世界で長く活動している変わり者だ。
その長い活動で、人族の権力者にありとあらゆる伝手がある。
故に、クルトにはアリアとミリアの正体が一目でわかったのだろう。
しかし、彼女達の事情など気にも留めずにまず志希に大怪我をさせた説教から始まるのは、想像に難くない。
再び重いため息を吐いて、イザークはクルト達と共に歩くのであった。

第五十話

夜の帳が下り、煌々と明かりが照らされた廊下を志希は手を取られて歩く。

隣に立つのは柔らかな笑みを浮かべているが、腹に一物も二物も持つオーランド王子だ。

美形でさわやかな笑顔が似合うが、彼から押し付けられた依頼はとんでもない物で志希はいま直ぐ逃げ出したい衝動に駆られている。

しかし、履きなれない靴を履いてのダンス練習や朝から怒涛のごとく着せかえられた事に精神力を削られ、それを実行に移す元気はない。

体力はまだある方なのだが、今は気疲れの部分が勝ってしまい何をしても億劫だとしか感じられないのだ。

そんな志希の様子に笑みを浮かべながら、オーランドは大きな扉の前に立つ。

「さて、そろそろ本番ですよ。シキ」

「……はい」

いつまでも後ろ向きな思考をしていても仕方ないと、志希は背筋を伸ばす。

ぎちぎちに締め上げたコルセットには侍女たちの殺意が垣間見えた気がしたが、彼女達も役目があるから仕方がないのだろう。

むしろ、こんなものつけて良く動けると志希はしきりに感心していた。

ふんわりとしたドレスの裾を捌き、ダンスの練習もコルセットをつけたままましたので最初は死ぬかと思った程だ。

しかし、直ぐに苦しさになれた。

それどころか、数曲踊っているうちに“知識”の奥から浮かんできたのか体が自然と動くようになり、練習時間が終わる頃には足捌きも体捌きも完璧だとダンスの教師に褒められたほどだ。

そのまま調子に乗ったダンス教師に超難易度のダンスを踊らされたのには閉口したが、これはこれで得難い経験だったと志希は思い返す。

「現実逃避は早いですよ」

隣のオーランドがそう声をかけてくるので、志希は正気づく。

「はい、分かってます」

なぜ分かったと突っ込みを入れたい気持ちを抑え、深呼吸をする。

慣れない格好で怖かったのも、最初だけ。

“知識”のおかげでドレスを着た動き方や歩き方が分かり、密かに感謝する。

同時に普段からこれくらい出てきてくれればいいのにと多少恨みがましい気持ちにもなるのだが、今は素直に“知識”に従い顎を引く。

だらしない立ち方も、歩き方もオーランド王子の品位を下げてしまう。

女冒険者だからと舐められているのであれば、彼等の度肝を抜く淑女っぷりを見せてやる。

半ばやけくそで志希はそう腹をくくり、もう片方の手に持つ扇子を握る。

話をする時は、扇子を使い口元を隠すのが貴族のお嬢様の常識だ。

この扇子の使い方など、持たせた侍女は一言も言わなかった。

どこか蔑んだ目をしていた彼女達は、ただオーランド王子の品位に関わる部分だけを繰り返し言って聞かせるだけだった。

それ以外の、志希と言う冒険者に関わる評判などどうでもいいのだろう。

だからこそ、自分の身を守る為に完璧に淑女を演じなくてはいけないのだ。

「いけます、オーランド様」

腹を据え、志希は前を見たままオーランドに告げる。

その言葉に、オーランドは扉脇にいる侍従長に合図を出す。

「第五王子、オーランド・フィドル・フェイリアス様とシキ・フジワラ様ご入場～！」

侍従長の声と同時に両開きの巨大な扉が開き、その向こうに色とりどりのドレスを身にまとった女性達と、軍服や正装した男性達が一斉にオーランドと志希の方を向く。

一瞬足が竦みそうになるが、直ぐに自分を立て直す。

行けると言った以上、後戻りなど出来ないのだから。

オーランド王子と共に足を踏み出し、優雅であろうと意識してドレスの裾を捌きながら背筋を伸ばして歩く。

うつ向いたり、背中を丸めてはダメだと自分に言い聞かせる。

堂々と歩く志希の姿に、一瞬隣のオーランドが戸惑ったような素振りを見せるが直ぐにエスコートをしてくれる。

王妃主催の夜会と言えど、基本は舞踏会と同じだ。

王妃だけでは無く王や他の王子たちもいる。

凛と顔を上げ、仄かに微笑みを浮かべてオーランド王子に手を引かれるまま王族の前に出て女子の礼を取る。

「オーランド、よくぞ参りました」

上段にある椅子に座り、扇子で口元を隠しながら目を細める女性が言う。

隣に座っている壮年の男性は、まじまじと志希を見ている。

「母上からのご招待です。このオーランド、参らぬ筈はありません」

「嬉しい事を言ってくれる」

そんな親子の会話を聞いている志希は、正直早く終わって欲しいと思っている。

何せ、中腰でドレスの裾を両手でつまんでいる状態だ。

この体勢は、正直つらい。

むしろ、自分の根性を試されているのかと小一時間ほど問い詰めたい衝動に駆られている。

その志希の耳に、王から声がかかる。

「ふむ、二人とも楽にせよ」

この言葉に志希は安堵するが、表情や態度には出さない。
まずオーランドが姿勢を正してから、志希が姿勢を正すが顔を上げない。
許されていないからだ。
「良い、娘。顔を上げよ」
ようやく許されたと志希は顔を上げると同時に、オーランドが志希の手を取る。
「今宵、私のパートナーを務めますシキ・フジワラです」
「シキ・フジワラと申します」
もう一度礼をすると、王妃は僅かに目を瞠っている。
王は目を細め、幾度か頷き笑みを浮かべる。
「中々器量の良い娘だが、冒険者と言うのは本当か？」
問いかける声音は確認の物で、志希は何故聞くのかと若干疑問に思いながらはいと頷く。
「いまだ若輩の身ですが、冒険者ギルドにて働いております」
志希の返答にほぉっと声を上げ、王はまた志希をまじまじと見る。
「冒険者ギルドは、成人してからでなくては所属出来ぬ筈だが……シキと言うたな、本当に成人しておるのか？」
どうやら、志希の体格や童顔で冒険者であると言うのが疑われているようだ。
志希は内心またかとうんざりしつつも、笑顔を何とか保ち頷く。
「はい」
「ふうむ……」
まだ疑わしいのか、王がじろじろと見る。
これはさすがに、どうすればいいかと悩むと。
「どうやら、遠い先祖にアルフが居る様子。その為、成長が少々遅いのではないのでしょうか？　また見事な銀髪と金の目が、何よりの証拠でしょう」
そう、オーランド王子が志希の代わりに応える。
正直でっち上げ以外の何物でもないのだが、王は成程と頷いてい

る。
　騙されるなよ！　と思わず突っ込みたい衝動に駆られるが、突っ込んだら依頼が失敗する様な気がするので黙っている。
「なるほど、中々面白い娘を見つけてきたな。オーランド」
　王の言葉に笑みを浮かべるオーランドに、志希は一抹の不安を覚える。
　もしかして、この依頼は別の裏があったのではないのかと思い始めたのだ。
　しかし、深く考える暇などない。
「さて、では娘。今宵は存分に楽しんでいくが良い」
　王妃は扇で口元を隠し、何故か敵意すら感じられる目で告げられる。
「はい、ありがたく存じます」
　そう返事をすると、王妃は目を眇めて頷く。
　志希としては出来るだけ丁寧に話をしているつもりなのだが、何か気に入らないのだろうかと内心大焦りである。
　しかし、そんな志希を無視して王妃は口を開く。
「では皆の者、存分に楽しむが良い」
　王妃は扇を一度振り、傍にいる楽団がそれを見て音楽を奏で始める。
　それに合わせて周囲の男女が大きく空いたフロアへと手を取り合い、入って行く。
　オーランドもそれに合わせる様に志希の手を取り、エスコートしてフロアの真ん中へと入って行く。
　志希の腰を抱き、そのままリードして踊り始める。
　リードに体を合わせ微笑みを浮かべながら、志希は目の前で爽やかに笑む腹黒王子に問いかける。
「これ、ただの依頼じゃないですよね？」
「まぁ、君と私の今後に響く依頼である事は確かだよ。最低ランクで銀の位が必要なんだけど、君なら大丈夫かなっと思ってね」

笑顔を全く崩さず、オーランドは言う。
志希は一瞬表情を引きつらせるが、直ぐにそれを取りつくろう。
「笑顔で、このまま頑張ってくれると嬉しいな。この後、母上が怒涛の勢いで躍らせるしね」
「何でそんな……」
「これはね、私がいつまでも冒険者をしているのが気に入らない母上の妨害工作なんだ。年に一度国に帰ってから、母上が開く夜会に礼儀と教養がある女冒険者を連れてこいって言うね」
オーランドの語る言葉に、志希は動揺の余り表情が崩れそうになるが彼の笑顔で何とか立て直す。
相手が笑顔で話をしているのに、自分が動揺で表情を変えるのはなんだから悔しいのだ。
「連れてこられた女冒険者は、母上の目で礼儀と教養を計られる。その教養の中にダンスも含まれているんだ。それで満点を取る女冒険者が居たら、来年からはこのテストが無くなる。だが、母上の定めた合格点を下回ったら、即座に私の冒険者資格を剥奪させるというものだよ。これを条件として冒険者になった訳なのだけど、母上の点数は辛くてね。金で貴族の教養のある女性を連れて来た事もあったんだけど、凄く難しいのを踊らされてねぇ。全く、母上には困ったものだよ」
「そんな怖い世界に、強制的に連れてこないで下さいよ」
「良いじゃないか。点数次第では君を銅に上げるようにギルドと交渉しても良い」
「なんか、それはズルしている様な気がするんですけど……」
声音は憮然と、顔は艶やかに笑いながら志希は言う。
「ズルではないよ。依頼人の私が、君の教養に高評価をつけるだけなんだから。教養がある、と言うだけで貴族関係の依頼を受けやすくもなる。君にとって、良い事だと思うけど？」
「いえ、私貴族関係には触るつもりは全くないんですよ。この通り、変わった容姿してますから」

「それは勿体無い。これだけ大きな夜会に堂々と背筋を伸ばして歩く女冒険者は、貴族出身以外では余り居ない。君だったら、夜会のパートナーを務めながら貴族の護衛をすると言う依頼もいけると思うよ？」

それに、とオーランドはちらりと志希の首元を見る。

志希は今も、チョーカーをしっかりと身につけている。

この様な場につけても違和感がない程、このチョーカーのデザインは良いものなのである。

たまたまこのチョーカーに合うドレスもあったので、オーランドが選んで身に着けさせたのである。

そして彼は、このチョーカーが精霊の揺り籠だと見抜いているのだ。

「面倒くさいので、嫌です」

にっこり笑顔で志希は斬って捨てると、オーランドはくすりと笑う。

「欲が無いね」

「私はまず、実力をつけたいので」

「良い経験になると思うんだけどな」

オーランドの惜しいという言葉を聞き流していると、一曲目が終わる。

そのまま次の曲が始まり、それが今踊ったモノよりも二段階ほど難易度が上がっているのに気が付き、志希は小さく嘆息を零す。

「さぁ、頑張ろう」

「……はい」

嫌々と分かる声音で返事をして、志希はオーランドの腕に再び体を委ねた。

第五十一話

志希はオーランドにエスコートされ、連続で五曲を踊らされた。
付け焼刃と言って差し支えない状態だったのだが、超難易度の曲も何とか踊れたのは正直奇跡だと言う気がする。
だが、流石に今日初めて履く踵の高い靴でのダンスに足が悲鳴を上げている。
その上靴ずれもしてしまい、物凄く足が痛い状態だ。
それに気が付いたのか、最後の曲が終わると同時にオーランドが志希を連れて大きな布がかけられた壁際へと連れて来てくれた。
実はこの布の裏側に、小さな部屋がある。
酒に酔った者や具合が悪くなったものが使用する場所で、似たような部屋がいくつもある。
もちろんそれ以外の用途もあるのだが、基本的にこの部屋は小休止の場所である。
「良く、あの曲を踊れたね」
オーランドは感心した表情で言うが、志希は人目が無くなった時点で顔に張り付けていた笑顔が剥がれおちている。
「もう、無我夢中ですよ。オーランド様、途中でステップ間違えるし」
痛みで顔を歪めながら、志希は指摘しつつオーランドに支えてもらいながら室内の長椅子に腰を下ろす。
「その割に、堂々と踊っていたよ。母上もこの曲を最後まで、しかもエスコートする男の間違いを誤魔化しながら踊れる女冒険者が居るとは思わなかっただろうね」
楽しげに笑いながらオーランドは志希にドレスの裾を上げるように指示を出し、志希の前に膝をつく。
志希は嫌そうな表情を浮かべるが、彼は苦笑する。
「上手に誤魔化してたけど、足が痛いんだろう?」

「はぁ、まぁ」
志希は憮然と頷きつつ、仕方が為しにドレスの裾を上げようとすると。
「はい、そこまで。手当てはこちらでするから、バカ王子は離れて見ていてくれるかな？」
と、入り口から声が掛けられた。
志希とオーランドがそちらを見ると、クルトが満面の笑みを浮かべて立っている。
志希が驚いた表情を浮かべ、何かを言おうとするが言葉にならない。
そんな志希にほんの少し苦笑してから、クルトは口を開く。
「あと、シキを心配してイザーク達も来てるから、ここで顔を合わせておくといいよ。もちろん、神官も連れてきているから安心していいよ」
そう言って後ろにいる者達に合図を出した後、クルトは膝をついたままのオーランドにすたすたと近づき彼の耳を掴む。
「く、クルト！？」
驚いた声を上げるオーランドに、物凄く良い笑顔を見せながらクルトは容赦なく引っ張る。
「はいはい、この場所は彼女達に空けて上げてね」
「痛い、痛い！」
何やら仲の良さそうなやり取りをするクルトとオーランドが退けると、素早い身のこなしでミリアとアリアが入ってくる。
その後から、おっとりとカズヤとイザークが入室してきて、志希はきょとんとした表情を浮かべる。
「え？　何で……？」
状況がつかめていない志希に苦笑しながら、ミリアが志希の前に膝をついてドレスの裾をめくる。
「クルトさんが、今日の夜会にいらっしゃる予定があったそうなので便乗したのです。姉さん、そのめくり方はどうかと思いますよ？」

アリアは笑顔で言いながら、ドレスが必要以上乱れないようにドレスの裾を上げる。
「あ、そうね。失礼したわね、シキ」
「あ、いえいえ」
思わず首を振ると、くすりと二人が笑う。
「良くあの曲を踊れたわね。アレ、王族でも完璧に踊れる人はまずいないくらい難しいのよ？」
「そうです。わたしと姉さんでも、辛うじてと言ったところですよ」
アリアとミリアの双子に褒められ、志希は若干頬を赤くする。
「そ、そうなんだ……」
照れて顔を赤くする志希にくすくすと笑ってから、ミリアは志希の足を取る。
「それじゃ、靴を脱がすわね」
「あ、私自分で……」
「いいから、楽にしていてちょうだい」
ミリアはそう言って、手早く靴を脱がす。
志希は痛みで体を揺らすが、直ぐに楽にする。
ミリアは両足の踵のあたりを見て眉を潜め、唸る。
「これ、薬を塗っても良いけど……まだ夜会に参加するんだったら魔法で癒した方がよさそうね」
「こんなに酷いのに、良くあれだけ踊れましたね」
アリアは感心した声音を上げつつ、志希の酷い靴ずれに眉を潜める。
「いやなんか、失敗しちゃいけないなーって思って気を張ってたんだと思う」
志希の返事に苦笑して、ミリアがそっと手を組む。
「豊穣の女神エルシルよ。その御力をお貸しください」
ミリアの言葉に応え、志希の両足の踵に柔らかな緑の光が集う。
志希は靴ずれと疲労による足の痛みが徐々に消え、あまりの気持良さに体の力がくったりと抜ける。

「ううん、ありがとう～」
少々緩んだ表情を浮かべ、志希はミリアに礼を言う。
「良いのよ、気にしないで」
笑顔でミリアは答え、ドレスの裾を戻してくれる。
一方で、部屋の隅の方でクルトがオーランドを椅子に座らせてその前に仁王立ちしていた。
クルトは物凄い勢いで何事かを捲し立て、オーランドに説教をしているようだ。
後ろ姿からでも物凄い迫力を醸し出しているので、そちらを見るのは正直怖いのである。
だが、何故クルトが皆を連れてこの夜会に参加できるのかという疑問が解消されない。
どうやって話しかけるべきかと考えていると、目の前が暗くなる。
ミリアが立ったのかと志希が顔を上げると、目の前にはイザークが立っていた。
下から見上げているからか、少々彼の雰囲気が怖い気がする志希。
口を開くのを躊躇っていると、イザークが思ったよりも優しい声音で問いかけてくる。
「具合が悪いのか？」
「あ、ううん。どうしてクルトが皆を連れてこれたのかなって……思って」
志希の返事にイザークは、苦笑する様にほんの少しだけ目を細める。
「クルトはこの国の王と知り合いだ。第五王子が冒険者になった原因の一端だとも言われている」
イザークの言葉に、志希は目を丸くする。
「え、でも……」
「ボク、この国の三代前の国王と知り合いだったんだよ」
志希の疑問の声に、肩越しに振り返りながらクルトが答える。
「は？」

ぽかんとした表情を浮かべ、素っ頓狂な声を上げる志希。
「あれだ、三代前の国王様も若い頃に冒険者をやっていたんだと。オーランドと違って次男だったらしいんだけどな」
「そうそう。王太子が暗殺されたから国を継ぐ事になったって、泣く泣く戻って王位継いだんだよ。で、そこからの付き合いなんだ」
クルトはカズヤの説明にうんうんと頷き、オーランドの耳を掴んで戻ってくる。
「クルト、いい加減この扱いはやめてくれないか？」
若干砕けた様な口調で言うオーランドに、クルトがぎろりと睨みつける。
「バカ王子のせいで、目立たないように頑張っているシキの努力がパアだと思わない？」
クルトの憤慨した声音に、オーランドはうっと息を詰める。
どうやら、先ほどまでクルトが説教していた内容は、志希の容姿に関してだったらしい。
実際、容姿のせいで悪目立ちをする可能性があるのだから、権力者たちの目につかないように気をつけていたのだ。
オーランドがそこにしゃしゃり出て、志希のその努力を全てダメにしてしまったのは事実である。
「取り敢えず、もう始まっちゃったものは仕方がないから……シキは頑張る事。話は聞いているけど、お仕事なんだから力を尽くすのは当然だからね」
クルトはそう言いつつ、オーランドを見る。
「で、オーランドはさっきみたくシキに負担をかけない事。あの曲は難しかったけど、見る人が見ればシキが誤魔化したの分かるんだからね？」
クルトの指摘にオーランドはうっと唸り、志希は良く見ていると彼を感心する。
その彼女にクルトは頷き、オーランドの耳から手を離す。
「さて、それじゃ……シキはもう少し休んでいくと言い。オーラン

ド、ボクと一緒に戻るよ」
「それなら、オレも広間に戻って飯を食うかな。アリアとミリアはどうする？」
「あ、わたしも戻ります」
「わたしも戻るわ。折角だから、美味しいワインを味わいたいしね」
と、口々に言いながら志希に手を振って皆出て行く。
残ったのは志希と、イザークだ。
若干不機嫌そうな雰囲気を感じ取るので、志希としては声をかけづらい。
どうしようかとそわそわしていると、イザークが口を開く。
「額は、どうした？」
いつもと同じ声音での問いかけに、志希はほっと安堵する。
「オーランド様が額に幻術を張る魔道具を貸してくれたから、それで隠してるの」
「そうか」
イザークは一つ頷き、志希の前に膝をついて顔を覗き込んでくる。
今いる部屋の明かりは蝋燭のみで暗いが、アルフやアールヴであれば見えないと言う事は無い。
だと言うのに顔を間近に寄せ、確認してきた事に志希は物凄く動揺する。
胸が早鐘を打ち、顔に血が上る。
体を硬直させながら、間近にあるイザークの顔を凝視する。
切れ長の目と、すっと通った鼻梁。
やや目を伏せているからか、彼の睫毛が頬に影を落としている様な気がする。
すると、イザークが志希の頤を優しく持つ。
無意識に顔を伏せがちにしていたのか、イザークに上を向かされた志希は赤面する。
目の前に、イザークの顔がある。
動揺の余り志希は思わずぎゅっと目を閉じると、イザークの動き

が止まる。
志希はこの瞬間、気が付く。
今この体勢で目を瞑ると、まるで口吻をねだっているように見えると。
それに焦るが、目を開けるとイザークの顔がある。
いつもは普通に話しかけたり、見る事が出来る筈だと言うのに、何故か今日に限ってそれが酷く恥ずかしく感じる自分にも動揺して、志希はどうして良いのかが分からなくなる。
その時、イザークの手が離れ、ポンポンと頭を撫でて体を離す気配がした。
「かなり上等な魔道具を使っているようだ、綺麗に隠れているな」
先ほどの不機嫌そうな雰囲気はなりを潜め、いつもと同じ様に話しかけられる。
「そ、そっか。うん……凄いよね」
志希はほっと安堵しながら目を開き頷くが、若干の落胆を覚える。
それに自分で首を傾げると、イザークが手を差し伸べてくる。
「そろそろ時間だろう」
「あ、うん」
志希は慌ててイザークの手を取り立ちあがると、イザークが小さく笑う。
如何したのかと志希が見上げると、イザークが優しく微笑んでいた。
思わず目を丸くする志希に、イザークはいつもの表情に戻り手を引く。
「あの王妃、シキの立ち居振る舞いとダンスに目を丸くしていた。この調子で、頑張ってこい」
「ッ……うん、頑張る」
動揺しながらも志希は頷き、深呼吸をする。
同時に、入り口の布が少し捲られオーランドが覗き込んでくる。
「シキ、調子はどうかな？」

安堵したオーランドの表情に志希は頷き、真剣な表情を浮かべて目を閉じる。
背筋を伸ばし、美しい立ち居振る舞いを意識したものへと所作を切り替えたのだ。
「行けます、オーランド様」
目を開け、凛とオーランドを見て告げる志希に、彼は笑む。
「切り替えが早いのは、良い事だ」
そう言って、オーランドは優雅に手を差し伸べる。
「では、またシキをお借りしますよ」
オーランドは微笑みながらイザークに告げ、志希を見る。
その視線に応えて頷くが、志希は不意にイザークに振り返り、いつもの笑顔で告げる。
「それじゃ、行って来ますイザーク。恥を掻かないように頑張るから、しっかりと見ていてね！」
イザークは若干不機嫌そうな表情を浮かべていたが、志希の言葉に目元を和ませ頷く。
「ああ、頑張ってこい」
励まされた志希は笑顔で頷き、前を見る。
淑女の仮面を被り、オーランドの望む女性を演じる為に志希は彼の手を取る。
「では」
オーランドは声をかけ、志希をエスコートしながら広間に歩き出す。
志希は表情を作り、彼と共に歩く。
これから後何時間この依頼が続くのかはわからないが、イザーク達が見ていてくれるなら志希は頑張れると気合を入れる。
一人で受けさせられた依頼ではあるが、仲間達が居る事で酷く安心できたのである。
先ほどよりも柔らかく笑み、志希はオーランドと共に貴族や王族が待つ広間に出るのであった。

第五十二話

カズヤは、ここ数日魂が抜けたようになっている志希を少し遠くから眺めていた。

押し付けられたと言っても過言ではない依頼を必死で完遂し、驚くべき事にオーランドが感謝する様な結果を残したのだ。

どうやら王妃が悔し涙を流しながら、志希の立ち居振る舞いやダンスの採点に満点をつけたらしい。

これで志希の評価が上がったのだが、志希はまだ鉄のまま修練を積みたいと言う事で銅への昇格は見送られた。

志希は人間にしては珍しい色彩を持っているので、このまま悪目立ちする様な事は勘弁して欲しいと言ったのでこうなったのである。

だが、この国の王妃が認めた教養の高さから、貴族から声を掛けられる事が多くなったらしい。

普通は羨ましいと言うのであろうが、カズヤはどうしてもそう思えなかった。

直ぐに引き下がってくれる様な人格者であれば良いが、選民思考の貴族であれば権力をかさにきて強要してくる事の方が多いだろう。

実際、何度かそう言う事が起きていたらしい。

だがしかし、それらは全て本格的な面倒事になる前に話し自体が立ち消える。

それを見るに、恐らくクルトかオーランド王子が圧力をかけたのではないかと推測できる。

ほぼ初心者の人間だと言うのに依頼を強要した償いなのだろうかとも思うが、本人でなくては分からない事の方が多いので無駄に考えないカズヤ。

むしろ、夜会直後から魂が抜けた状態の志希に困っていたりする。

「……相当気疲れしていたんでしょうねぇ」

アリアはカズヤの隣に座ったまま、彼と同じ様に志希を見ている。

「まぁ、それは分かる。分かるが……明日には鎧を取りに行く予定なんだからよぉ」
「あんまり、惚けたままだと困るって事？」
二人の向かい側に座り、水を飲んでいたミリアが問いかける。
「ああ。そろそろ移動もするわけだろ？　その為に、荷物だってまとめねぇとダメだろ」
カズヤの言葉に、確かにと二人は頷く。
いつまでも気が抜けた状態なのは、気持ちの切り替えが出来ていない証拠だ。
無論、疲労が蓄積していると言うのもあるのであろうが、いつまでも志希一人を特別扱いするのはよろしくない。
「取り敢えず、わたし達もそろそろ荷物を纏めないとね。荷物、かなりあるし」
ふうと嘆息を零し、ミリアは呟く。
「わたしも少しずつ荷物は整理したんですけど、取っておきたい物や持って行きたい物が多くて……」
アリアが嘆息しながら言い、ミリアも頷く。
「あぁー……二人は部屋を借りてたんだっけか？」
「いえ、寮に入っていたのです」
「神官は、基本的に教会で寝泊まりするから……」
双子の返事にへぇっと声を上げつつ、カズヤはそう言えばと周囲を見回す。
「イザークが見えねぇな」
「あ、本当ですね」
今気が付いたとアリアが頷くと、ミリアがため息を吐く。
「イザークなら用事があるって出かけてるじゃない？」
ミリアの言葉に、アリアとカズヤの二人はポンと手を打つ。
「ああ、そうだったそうだった！」
「そうでしたね！」
二人同時に頷く姿にミリアが苦笑を浮かべると、イザークが扉を

開けて中に入ってきた。
そのまま真っ直ぐ志希の方へと歩み寄り、未だ惚けている志希の頭をポンポンと叩く。
「あ、イザーク。どうしたの？」
我を取り戻したらしい志希が、若干緩んだ声音で問いかける。
「明後日に鎧が出来る。その時にこの街を出る事になるが……荷物の整理は出来ているか？」
イザークの問いかけに、志希の表情がみるみる変わる。
その変化を見るに、どうやら全くしていなかったようだ。
「に、荷物整理！　そうだ、どうしよう！」
オーランドからの依頼を受ける前のしっかりとした志希に戻り、彼女はあたふたとし始める。
明後日には出発すると言うのだから、焦るのも当たり前だ。
そして、同じ事は双子にも言えた。
「嘘！？　明後日、真っ直ぐ出るんですか！？」
「ちょっ、わたし荷物整理まだ終わってない！」
おろおろし始める双子の様子に、カズヤとイザークは眉間を押さえる。
「アレだ、出来るだけ大きいもんは置いていった方がいいぞ？　あと、あんまり着ないような服もな」
「でも、どうしても捨てたりしたくないのはどうしたらいいかしら？」
ミリアが困った表情で思わずカズヤに問いかけると、イザークが嘆息しつつ口を開く。
「それほど大きなものでないのならギルドの預り所にでも預けておけばいい」
イザークの言葉に、ああっと声を上げて手を叩くのはミリアとアリアだ。
「そっか、預り所があったわね！」
「そうでした！　そちらにお願いするのも良いですよね！」

双子はそう言いながら慌ただしく席を立ち、三人に告げる。
「ごめんなさい。これから荷物を整理したり預り所に預ける物を考えますので今日はこれで失礼します！」
「わたしも、明後日に出るなら今日はもう司祭様の方にお話ししておかないといけないから帰るわ。シキも荷物纏めるの、頑張ってね！」
せわしなく二人は出て行き、志希とカズヤは呆然と見送る。
イザークは彼女達の準備も出来ていないと言う言葉に嘆息しつつ、口を開く。
「カズヤはいつでも出れるよう準備をしているんだろうな？」
「ん？　ああ。今これからでもいけるぞ」
カズヤはあっさりとそう答え、志希は血の気が引く。
「え、ええ～……」
思わず抗議に似た声を上げるのは、仕方がない事なのだろう。
しかし、カズヤはイザークと組んで長い上、冒険者としてもこの世界に来た異世界人としても先輩なのだ。
常に身軽でいつでも動けるようにするのが、冒険者の常識である。
「荷物の取捨選択は大事だが……俺達の様に服を少なめにすると言う事は難しいだろうな」
イザークは嘆息しつつ、志希の頭をポンと撫でる。
双子と組んでから、志希の荷物は服を中心に少しだけ増えた。
普通の女性から比べたら服は少なめなのだが、初期に最低限の服を購入したのと街で着るようなちょっとしたお洒落着を合わせると、結構な量になっている筈なのである。
冒険者であると言っても、女性は女性なのだ。
「でも、荷物が多いのは問題だよね……」
志希はそう言いつつ、むぅと唸る。
「いや、仕方がねぇだろ。実はオレらも、荷物が多めなんだぜ？」
カズヤが苦笑しながら言い、イザークも頷く。
「俺達は預り所を利用している。その分、持ち歩く荷物が少なめに

なる」
「そう言えば、さっきも言ってたよね……」
志希の呟きに、ああと頷くのはカズヤだ。
「ああ。ギルドの方で、荷物の預り所とか色々とやってるんだ。何処の街のギルドや認定宿屋とかで預けても、頼んだ荷物は送ってもらえるんだ。急ぎだったら、ちょっと金かかるけどな」
カズヤの説明に、志希は成程と頷く。
「それだったら、私もちょっと暫く着ないような服とか色々と考えて預けた方がいいのかなぁ」
うーんと唸る志希に、イザークは小さく嘆息して口を開く。
「取り敢えず、明後日の乗合馬車での出立を予定している。それなりの料金を払う事になるが、多少荷物が多くても大丈夫だ」
「あ、そうなんだ。それじゃ、ちょっと荷物を纏めてくるね」
志希はイザークの言葉に顔を輝かせ、立ち上がる。
「自分で持てる分だけ作るんだぞ～」
カズヤの言葉に頷いてから、志希は大慌てで自分の部屋へと駆けて戻っていく。
イザークはそんな志希を見送ってから、カズヤの前に座る。
「んで、結局乗合にしたのは護衛依頼が無かったっつー事か？」
そのイザークに、カズヤは問いかける。
「いや、あるにはあったのだが……どうにも胡散臭い。少々どころではなくかなり裏の在りそうな商隊だったからな」
「イザークのこういう時の勘は、すげぇからなぁ」
カズヤは特に非難する事も無く頷き、水を一口飲む。
「まぁ、あと言うべき事は……クルトにシキの事を隠す必要がないと言う事辺りか」
何気なく語ったイザークの言葉に気の無い返事をしてから、カズヤが目を丸くする。
「ちょっ、どういう事だよ！」
思わず突っ込みを入れるカズヤに、イザークが小さく笑う。

［なに、クルトがシキと同じ種族の知り合いがいたと言うだけの話だ。シキが何者かは直ぐに気が付いたそうなのだが、それを教えるのが憚られると言う事で黙っていたらしい」
［ま、まぁなぁ。志希の種族の事を知っている人間がいるなら、その特異性とか色々と分かるもんなぁ。しかし、クルトは本当に何歳だよ」
思わずぼやくカズヤに、イザークも緩く頭を振る。
［さてな。千を越えているのは知っているが、正確な年齢までは知らん」
［うへぇ、どんだけ長生きなんだよ」
言葉を変えてクルトの事を語る二人は多少げんなりした表情を浮かべてから、水を飲んで気を落ち着ける。
［んで、これから行くのはフェイルシアなんだよな？」
［ああ。魔術王国でも良いかと思ったのだが、あそこには変人や常識を弁えない魔術師もいる。シキが目をつけられれば、面倒な事になりそうだからな」
［確かに、そうだよな。全く、あいつも難儀な奴だよ」
カズヤが納得をしつつぼやき、イザークはそれに応えず水を飲む。
「で、今日の予定はどうすんだ」
人に聞かれて困る内容ではないと判断したカズヤは、言葉を戻して問いかける。
「休養日でも良いと思ったが、カズヤ次第だ」
イザークは淡々と、いつも通りに応える。
「んじゃ、わりぃけどつきあってもらうぜ」
「問題は無い、が……随分と性急だな」
静かなイザークの言葉に、カズヤが苦笑する。
「オレ一人、凡人だろ？　お前らみたいに凄い才能とか、特別な何かがねぇ。それだったら盗賊の技術と剣術、両方を鍛えていかねぇとついていけねぇ」
カズヤの言葉に、イザークはほんの少しだけ驚いた表情を浮かべ

る。
「オレ一人が、足を引っ張るのだけは御免だ」
真剣な表情で言うカズヤに、イザークは目を和ませて笑う。
「わかった。なら、遠慮せず鍛えてやろう」
静かなイザークの言葉にああと頷き、カズヤは立ち上がる。
「んじゃ、先に訓練所の方行って鍵開けと罠解除の練習してるわ。来たら、声かけてくれ」
「分かった」
カズヤはやる気に満ち溢れながら宿を出て、訓練所の方へと歩き出す。
イザーク達のパーティはある意味注目の的なのだが、カズヤはそれはイザークや志希、アリアとミリアの存在があるからだと思っている。
だがしかし、カズヤ自身もしっかりと注目されているのだ。
何せ、盗賊でありながら戦士並みの訓練をして、なお且つ繊細な指先の感覚を失わずにいられると言う稀有な存在だ。
通常、戦士と同じ訓練を普通の盗賊がすると指先が鈍ってしまう。
しかし、カズヤは訓練前も訓練後もその感覚を失う事も無く養い、更に腕を上げて行く。
いったいどんな訓練をすれば彼の様な盗賊になれるのかと、ギルド内で言われるほどなのである。
カズヤはそんな事など露ほども気が付かないまま、今日も盗賊技術と戦闘技術を磨くのであった。

第五十三話

志希は二日かけて何とか荷物をまとめる事が出来た。
大きめの背負い袋には効率よく服と靴を詰めてあるが、志希が持って運ぶには少々重めである。
もっとも、この辺りは馬車での移動だと聞いているので大した苦にならない筈だと頷き、防具屋へと移動する。
カズヤとイザークがいつも通りの軽装であるのがちょっと羨ましいと思うわけなのだが、少し重いが持って歩けると判断して荷物を纏めた以上はぐちぐち考えても仕方がない。
それに、預り所に持って行って荷物を預かってもらうにはある程度の量がないと受け付けてくれないので、志希の今の荷物の量だと拒否されてしまうのだ。
軽装のイザークは志希の分の保存食を持ち、荷物を軽くしてくれているのがまた情けないと志希は凹んでしまう。
「そう、不景気な面すんなって。向こうでもう少し荷物を増やしてから、預り所に持ってきゃ良いんだからよ」
「うん……」
カズヤが励ましてくれるが、それでもやっぱり凹むものは凹むのである。
そこに。
「遅れてごめんなさい！」
と、ミリアとアリアが息を切らせながら入ってくる。
ミリアは若干志希より大きめの荷物を持ち、アリアはいつもより少し多めの荷物を持っている程度だ。
「いや、今来たところだ」
イザークはそう言って、奥にいる店員に声をかける。
「約束の物を取りに来たのだが……」
「あ、はい。奥の方へどうぞ」

店員はそう言って、奥へ続く扉を開ける。
五人は案内されるまま奥へと入ると、親方が四体の木製のマネキンに着せられた鎧を見ていた。
「おう、来たか」
親方は五人に気が付き、振り返って笑う。
イザークはああと頷くが、それ以外の四人はマネキンに着せられている鎧を見て目を丸くしていた。
一体は柔らかな緑色のクロースアーマーと、磨き上げられた鋼のチェインメイルを着ている。
このチェインメイルには金属の胸当てをつけられており、かなり防御力が高いものとなっている。
金属鎧なのはこの一体だけで、後の三体は革鎧だ。
色は赤なのだが、明るさや鮮やかさが違う。
鎧と手袋、ブーツの一式は赤色の鮮やかさと色が抑えられ、ボルドーの様な色合いだ。
落ち着いた渋い色は、どう見てもカズヤ用である。
黒髪に焦げ茶の目色のカズヤには少し落ち着き過ぎかもしれないが、盗賊である事と年を重ねれば気にならなくなる筈だ。
アリア用だろうと分かる鎧は、カズヤの物よりも柔らかい革鎧だ。
しかし、何故かカズヤと同じ様な色合いである。
志希は何故同じ色なのだろうかと思ったのだが、アリアが普段身に着けているローブを思い出して納得する。
アリアは基本的に紺色のローブを身に着けるので、赤い色だと浮き過ぎてしまうのだ。
その為に同じ様な色合いにしたのだろうと納得してから、志希は残る自分の鎧を見る。
ベストの様な形で作られたその鎧は、アリアと同じ柔らかい革鎧である。
何せ体型に合わせて使える様に革紐で調節できるようにしてあるので、硬革鎧だとそれが難しくなってしまう。

体型が変わらないのだから硬革鎧にしてもらえば良かったとは思うが、費用もかかるし何より、体型が変わらない事を仲間以外の人に漏らすのは気持ち的に嫌だったのでまぁ良いと納得する。
しかし、何故自分のだけ他の二人と違い若干明るめの赤い色なのだろうと首を傾げるが、まぁ良いかと直ぐに頭を切り替える。
色が違っていようとも、性能には変わりがないのだから。
「んじゃま、さっそく着てみるか」
カズヤがそう言いながら親方の隣に並び、鎧に手を伸ばす。
「まぁ、少し待て」
親方がカズヤを止め、直ぐ横にある椅子に座る様に手で促す。
何事かと首を傾げつつ、カズヤ、志希、アリア、ミリアの四人は従う。
「イザーク、てめぇもだ」
まじまじと鎧を見ているイザークにも声をかけ、椅子に座る様に指示を出して彼等の真正面に親方が座る。
イザークがいつも通り無言で座ると、親方が足を組んでキセルに火をつける。
一口味わってから、親方は五人を見回す。
「お前ら河岸を変えるっつー話だったがよ、何処行くんだ？」
「フェイルシアだ」
イザークが言うと、そうかと頷き後ろに顔を向け怒鳴る。
「おい！　俺の作業台、下から二番目の引き出しからアレ持って来い！」
「へい！」
親方の命令に即座に返事をして、弟子の一人が奥の作業場から小箱を持って現れる。
それを親方に渡してから、弟子はそそくさと作業場に戻っていく。
志希は親方が何をするのか興味津々で見ていると、彼は小箱の封を確認してから五人を見る。
「これは、俺からの個人的なお願いだ」

おもむろに、親方が口を開く。
「フェイルシアに俺の弟子が防具屋を開いている。そこにこいつを運んで欲しいんだ」
突然の依頼に、イザークが眉を潜める。
ギルドを通さない依頼を受ける、受けないは当人の好きにしてもよい。
だがしかし、この依頼によって犯罪などに巻き込まれてもギルドは助けてくれないというリスクがある。
「個人的なお願いだって言ってんだろ？　てめぇらが行くついでに、持って行ってくれって言ってんだ」
親方はにやりと笑い、小箱を差し出す。
「……まぁ、良いだろう」
イザークはそう言って、ちらりとパーティの面々を見る。
「んだな。報酬があるとも言われてねぇし、ただ届けて欲しいだからな」
厳密には依頼なのだろうが、犯罪の種やトラブルになりそうな要素は無い。
だから、イザークとカズヤは良いと言ったのだろう。
それに何より、この二人はここの防具屋に長く世話になっている。
親方の人となりもよく知っており、むやみにこの様なお願いをしてくる人物でない事も理解しているのだ。
「んじゃ、これはオレが預かっておくな。で、弟子って人はフェイルシアの何処にいるんだ？」
カズヤの問いに、親方はああと頷く。
「城下町のちいとばかり治安の悪い所に店を構えてるが、腕は一級だ。武器屋を営んでる兄弟と一緒らしくてな、一つの店に武器と防具の看板が並んでるのが目印だ」
親方の言葉に、志希は珍しいと思わず目を丸くする。
武具と言うくらいなのだから、武器と防具は一緒に売られていると思われがちだが実は違う。

基本的に武器屋の店内は、仕入れた品物を展示している。
しかし、武器と一括りにされているがその種類は豊富だ。
商品として展示する物、十把一絡げにする物と選ぶにしろ場所を取る事は間違いない。
防具の方は武器よりも更に場所を取って展示しなくてはならない為、この両方を同時にやると言う店は相当大きな店舗が必要になるのだ。
「了解した」
イザークは頷き、カズヤは受け取った小箱を自身の背負い袋にしまう。
「さて、それじゃ着てみろ」
親方の言葉に頷き、各々動きだす。
何処からともなく弟子が現れ、マネキンから鎧を剥ぎ取り手渡してくれる。
この鎧は基本、一人で着られなければいけない。
誰かの手を借りるような鎧は、冒険者には不向きだ。
何かが起きた時に手早く着れる事こそが、重要なのである。
と言う事で、志希はベスト型の革鎧を素早く身に着ける。
以前よりも段違いに硬い訳なのだが、思ったよりも軽めだ。
この上に、新調した薄紅のローブを着てから少し柔軟体操をする。
動きが妨げられる感覚も無く、柔軟に体が動かせるのに志希は感心した表情を浮かべる。
「凄い、着やすい、動きやすい！」
志希の歓声に、親方は笑いながら頷く。
「あたりめぇだ。その為に、こちとら色々と工夫してるんだからよ」
親方の言葉に確かに当たり前のことだと頷きつつ、改めて自分の鎧とローブ、そして服を見る。
真新しい装備品に、志希は心が浮き立つ。
新しい服を買ってもらった子供と同じ様な反応なわけなのだが、志希はそんな事は気にせず笑顔を浮かべて背面を見ようと体をねじ

ったりしていた。
「外見通りの反応してんなよ」
カズヤが志希に突っ込みを入れつつ、鎧に慣れようと体を動かしている。
「前の鎧よりちっと硬いが、大丈夫そうだな」
イザークがカズヤの動きを見ながら声をかけると、ああと彼は頷く。
「本当に、良い職人さんです。今回で終わりなのが残念な程です」
アリアはそう言い、肩を落とす。
「なら、こっちに来た時はまた贔屓にしてくれ。弟弟子の方も俺が保証するから、安心して良いぜ」
「ええ、それは疑っていないわ」
ミリアは親方に笑顔でいい、しゃらしゃらと鳴る鎖帷子の上から法衣を着る。
カズヤも装備一式を身に着けてから外套を羽織り、親方を見る。
「親方、長い事世話になったな」
イザークの言葉に、親方は笑う。
「おう、気にすんなひよっこども。またこっちに帰ってきたら、顔見せに来いよ。それと、仕事は無理せず堅実にこなせよ。命あっての物種だからな」
親方はそう言って頷き、餞別の言葉を贈る。
「はい、その時はまたお願いします！」
志希はそう返事をして、深々と頭を下げる。
「おう、待ってるぞ」
親方は笑顔で応じ、キセルをまた吹かす。
その彼に志希達はもう一度礼と別れを言い、お金を払って店を出る。
荷物を背負い、乗合馬車が来る待合所へと向かいながら志希は口を開く。
「これから、フェイルシアの城下町に行くの？」

「ああ。王城が近い所を拠点として動く予定だ」
志希の問いにイザークが答えると、アリアが首を傾げる。
「ですが、国の端の方の依頼などの時は大変ではありませんか？」
「そうよね。乗合馬車の駅も無いだろうし、徒歩で行くとなると時間もかかる事にならない？」
ミリアがアリアの疑問に乗り、大丈夫なのかと問いかける。
「ああ、それは大丈夫だぜ。この間みたいに馬車とか、馬貸してもらえるからよ」
カズヤの言葉に、女三人は成程と頷く。
「アリアとミリアは、基本的に近場が多かったようだな」
イザークが苦笑気味に呟くと、ミリアがうっと言葉に詰まる。
「大体、乗合馬車で近くまでいくとかそういう事はしてましたよ」
アリアが若干気まずげに言うが、実際遠くの方まで足を延ばす事は少なかったのだ。
「まぁ、銅に上がったばっかりだもんな。馬を借りるとか馬車を借りるとかは知らなかっただろうしよ。何せ、二人だけだったからな」
事情が事情な為に、アリアとミリアは下手な人間と深く付き合う事が出来なかった。
それ故ずうっと二人きりで依頼をこなしていたのだから、知らない事も多いのだ。
「これからは、シキと一緒に色々と学ばせてもらうわね」
ミリアは笑顔でイザークとカズヤに言い、カズヤは任せとけと笑う。
イザークは特に返事はしないが、否定的な態度ではない。
それに安堵する双子を見ながら、志希は苦笑しながら呟く。
「私はそもそも、二人よりもっと物知らないからより頑張らないとなぁ」
「でも、識ってはいる状態だから直ぐに身につくんじゃない？」
「いや、そうかもしれないけど……身に着ける為に頑張るのは識っていても識らなくても一緒じゃないかな」

志希の言葉に、ミリアはそう言う物なのかと小首を傾げてからしばし思考し、うんと頷く。
「そうね」
どうやら納得したようだ。
「何はともあれ、そろそろ駅に着くぞ。馬車内で、そう言う話はすんなよー」
カズヤが一言釘を刺し、志希とミリアははっとした表情を浮かべてからこくこくと頷く。
乗合馬車での移動は、基本的に一般の旅人や他の冒険者も居る。
その彼等に聞かれて困る様な会話はしてはいけない。
ミリアは意外としっかりしているようでその辺りが抜けているので、気をつけなくてはいけないと気を引き締める志希。
実はミリアも志希と同じ様な事を思っている上に、他の三人がミリアと志希が抜けているのでしっかりと見ていなければいけないと思っている事を、彼女達は気が付かないのであった。

第五十四話

フェイリアスを出て、フェイルシアの首都を目指す志希達一行。
乗合馬車なので決められた道を通り各町にある駅に止まるのだが、それでも徒歩よりも遥かに早い。
徒歩で一月半から二ヶ月かかる道のりを、一ヶ月で移動できるからだ。
ちなみに、この世界の暦は志希が居た世界とは異なっている。
一年十二ヶ月の太陽暦であるのは同じだが、一年を合計した日数は三百六十六日で、一ヶ月三十一日ないし三十日で閏年がない。
また、神が見守っていると感じられる世界で在るが故に、一年の春夏秋冬を六柱の神々が守護を与えていると人々は考えていた。
それ故、一年の始まりの最初と次の月は光と秩序の神の名を冠しており、大の月小の月と呼ばれている。
前の世界で言う一月はヴァルディル大の月と呼ばれ、大がつく月は三十一日。
二月はヴァルディル小の月で、三十日となっている。
この様に以前の月の形に神々の名をあてはめて行くのだが、ここで違うのは神々の順番である。
現在最も信徒が多い神々の順番ではなく、神が生まれたとされる順番でそれぞれの月を守護していると言う事になっているのだ。
三月と四月はエルシル。
五月と六月はマービス。
七月と八月がリージアン。
九月と十月がクミル。
十一月と十二月がワキュリー。
このような順番で神々が生まれ、それぞれ季節と月を守護しているのである。
ちなみに、遥か昔は太陰暦で暦を作っていたらしいのだが、とあ

るクミル信者とその奴隷の二人が天体を観測し、太陽暦の基礎を作ったのだ。

壮大な話である。

志希達がフェイリアスの首都を出た月はエルシル小の月半ばだったので、道中の風景は春爛漫と言った物であった。

首都を出て暫くは草原や森の美しい草花を目で楽しむ事が出来たが、似たような風景が続くと流石に辛くなる物だ。

だが、暇になってくると今度は精霊達が志希の側に来て色々と誘いをかけて来た。

風の精霊は意識を風に乗せて遠くへ行こうと言い出したり、土の精霊達は地中に流れる炎の河を見に行こうと誘う。

植物の精霊達は最近森の中で見かける魔獣や妖魔達の事を話したり、森の奥に実る美味しい果実はいらないかと問いかける。

要するに、物凄い勢いで精霊達が構ってくるのだ。

提案に乗って精霊達と精神体だけで遊んでいると、ちょっとした問題がある事をミリアから教えられた。

精神体で遊びに出かけると、生身の体は死んだように眠る。

昼間に食事をしたり水を飲んだりもしない為、具合が悪いのかと他の乗客から心配されるのだ。

それを聞いた志希は、流石にまずいと思い出来るだけ遠出をしたり精神体だけで出かけるのはやめるようにした。

食事も水も摂らず、死んだように眠るのは病人とか体が不調な人くらいだ。

しかも、旅をしているのにそんな事をしていて弱るそぶりも見せないのは不気味以外の何物でもない。

と言う事で、志希は自重したのである。

この後はそれなりに平和に、街道をゆっくりと進んで行った。

途中幾度か魔獣に襲われる事はあったが、それ以外は概ね順調であった。

何せ、乗合馬車を襲う様な盗賊や山賊はいないからだ。

これには、きちんとした理由もある。
乗合馬車は毎日決められた時間に馬車駅に到着するように定められており、半刻過ぎても到着しない場合は直ぐに乗合馬車の組合に報告する事になっている。
また、この馬車には特殊な魔道具が積んであり、それを目印に乗合馬車組合と提携している冒険者ギルドから冒険者が派遣され、馬車を探すと言う仕組みになっていた。
この魔道具の効果なのかは分からないが、乗合馬車を襲った賊はほぼ必ず掴まっているので山賊や盗賊にとってはリスクしかない。
その上、乗合馬車を利用するのは基本的に一般人か冒険者だ。
一般人しかいない場合はうまみ自体が少ないし、冒険者が乗っていた場合はリスクが高い。
つまり、ハイリスクローリターンの状態なのだ。
危険を冒してまで小さなうまみを求めるような山賊や盗賊は、殆どいない。
と言う事で、乗合馬車の道を阻むのはもっぱら魔獣や妖魔の類だけなのだ。
それとて、定期的に国や冒険者達が街道沿いの掃除をするのでこれらの者達と行きあう事など殆ど無いのだ。
おおむね順調に、志希達の旅は続いていた。
それがほんの少しだけ変わったのは、フェイリアスとフェイルシアの国境沿いの町での事だ。
フェイルシアに入る為、馬車の乗り換えをしなくてはならない。
駅馬車で自分の荷物を馬車から下ろし一息ついていた志希は、ざわざわとざわめく精霊達に怪訝な表情を浮かべていた。
「なんか、変」
小さく呟くと、怪訝そうな表情を浮かべて同じく荷物を降ろしていたアリアが手を止める。
「どうしました？」
アリアの問いかけに応えるのは、志希では無くミリアだ。

「何処からか霊気が流れている……」
荷物を背負ったミリアの呟きに、カズヤとイザークの二人は女性陣を見る。
国境の町中であろうとも、普通は霊気を感じる事など無い。
だと言うのに、志希とミリアの二人は異変があると告げて来た。
「霊気、か……ギルドに寄ってみるか？」
イザークは志希とミリアの感覚は見過ごせないと、皆に問いかける。
「オレは賛成」
「わたしも、賛成です」
カズヤとアリアは頷き、ミリアと志希を見る。
「この霊気は、あまり良いものではないわ。わたし個人としては、祓うか浄化してから旅立ちたい」
「私も、イザークに賛成」
ミリアはアンデットキラーとしての使命で、志希はこのまま素通りしてはいけないと言う勘を信じて告げる。
二人の返事を聞いたイザークは頷き、直ぐ近くで営業している店に入る。
「店主、すまんが冒険者ギルドの場所を教えてくれ」
食堂らしく、給仕をしていた女性はイザークに突然声をかけられ驚いた表情を浮かべ、次いでああと笑う。
「ギルドなら、この道を南に歩いて行けばいい。まぁ、こんな町だからね。大した依頼はないと思うよ」
「なるほど、参考になった」
礼を言い、イザークは一行に振り返り手でついてこいと合図する。
それに従い、全員でイザークの後について歩きだす。
志希とミリアは、その間もしきりに周囲を見渡す。
ほぼ同じ方向に視線を向ける為、霊気の流れを見ているのだと分かる動きだ。
明確に流れが分かる程の濃い霊気に、顔を顰めるのはイザークだ。

「これは、かなりまずいかもしれん」
「へ？」
イザークの呟きに、カズヤが思わず声を上げる。
「リビングデッドが村の近くにいるのかもしれないわ。だんだん、霊気が濃くなってきているわ」
ミリアがそう、イザークの言葉を補足するように呟く。
それを聞きながら、志希は小さな声で精霊達に町の周辺を探査するように指示を出す。
霊気だけではなく、何か嫌な気配も感じるのだ。
精霊達は志希の指示に従い、直ぐ様行動に移す。
それを見送りながら、志希は鳥肌が立っている腕をさすりイザークを見る。
「取り敢えず、一泊か二泊はこの町で宿を取るんだよね？」
「ああ、長くかかるかも知れんからな」
ギルド指定宿もあるので、荷物を預けるのにも丁度良い。
言外の言葉を読みとったカズヤは、納得しつつ口を開く。
「そんじゃ、二手に分かれようぜ。ギルドに行く奴と、宿を取るやつ。このまま全員でギルド行って宿を取るのは二度手間だしよ」
カズヤの提案になるほど、と足を止めてイザークが振り返る。
「俺とカズヤがギルドに……」
「いや、オレが宿の方行く。値引き交渉して人数分の部屋があるか確認しておかないと、あとが面倒だろ？」
苦笑しながら言うカズヤに、イザークは頷きながら女性三人を見る。
すると、アリアが真っ先に口を開く。
「あの、わたしはカズヤさんと一緒に行きます！」
何時でもカズヤの側を離れないアリアの言葉に志希とミリアは苦笑し、肩を竦めつつ頷く。
「わたしも、カズヤとアリアと一緒に行くわ。本当はギルドに行きたいけど……霊気が感じられる二人が固まるのもちょっと良くない

と思うから」
霊気に対する感知度は、志希もミリアも同じくらいだ。
どちらがイザークについて行ってもかまわないのだが、ギルドに行く人間の荷物を預かる事を考えればそれなりに力強い方が良いだろうとミリアは考えたのだ。
「町中で何かあるとは思えねぇけど、念には念をって事だな」
カズヤは笑いながらミリアの意図を呟き、うんと頷く。
アリアはほんの少しだけ不満そうだが、文句は言わない。
言ったところで結果は覆らないし、何よりパーティの為だからである。
「では、荷物を頼む」
「おう。シキも、荷物をこっちに寄こせよ」
「あ、うん。ありがとう、お願いね」
なし崩し的にイザークに同行する事になった志希は、若干戸惑いながらもカズヤの言う通りに荷物を渡す。
それを持ったカズヤは、その重さにむっと僅かに眉を潜めてしまう。
それを見たアリアは流石にカズヤ一人では荷物が重いのだろうと手を出し、志希の荷物を持つがその重さに小さく呻く。
「無理すんな」
カズヤは苦笑しつつ言い、アリアから荷物を受け取ろうと手を伸ばす。
だが、ミリアが先んじて志希の荷物を持ち微笑む。
「カズヤもイザークの荷物を持つのだから、わたしが持つわ。アリアより力もあるしね」
ミリアはそう言って志希の荷物を持ち、特に重そうな素振りも無く頷く。
「ちょっと重いけど、大丈夫。それじゃ、宿を探しに行きましょう」
ミリアの言葉にカズヤは頷き、二人を見る。
「では、荷物は頼んだ」

イザークはそう声をかけて、軽い手荷物を持つ志希を促し歩き出す。

それを見たカズヤ達も宿を求めて移動を始めるのであった。

第五十五話

ギルドの場所はかなり分かりやすく直ぐに見つける事が出来たので、イザークと志希の二人はそのまま中に入る。

余り大きくはない町な筈なのだが、冒険者が随分と多く中にいた。しかも、何やら雰囲気が違う。

酷くピリピリとした空気が醸し出され、何故か殆どの者は受け付けで待つ為に置かれている椅子に座っていたのである。

普通ならば依頼が張り出されている板を見ている筈なのだが、そちらに行っている人はまばらだ。

「何で、依頼を見てないのかな……」

志希が呟くと、イザークは無言で掲示板に移動する。

慌ててイザークの後を追いながら、志希は受付を窺う。

受付の方は忙しいのか、それとも何かあったのか皆手元の書類を見直している。

首を傾げつつ、掲示板の前に辿り着くと直ぐ近くにいた新人らしき冒険者がこちらに気が付き声をかけてくる。

「お兄さん達、外の依頼は今ないよ」

カズヤと同い年か、少し上に見える青年の言葉に志希は首を傾げる。

「どうして？」

志希が思わず問いかけると、青年は一瞬戸惑ったような表情を浮かべてから微笑みを浮かべる。

「今、外の依頼は受け付けの方で調べ直されているんだ。どうやら、色々と手違いがあったらしくてね」

青年が子供に言い聞かせるような声音で、ゆっくりと語ってくれる。

どうやら子供と思われているらしいと気が付き、志希は思わず憮然としてしまう。

だがしかし、手違いがあると言うのが気になる。
「どんな手違いがあったの？」
志希の問いかけに、青年は目を泳がせてから口を開く。
「この近辺に出る筈の無い、リビングデッドが居たんだ。だから、町の外の森には立ち入らない方が良い」
青年は真剣な表情をして、そう志希に忠告してくる。
志希はこの台詞に、思わず問いかける。
「リビングデッドが出来るような要因って、この付近にないの？」
「ああ。大きな戦争跡とかはなかった筈だし、余程の怨みを呑んで死んだ人間と言うのも聞かない。山賊とか盗賊とか退治されたりはしているが、後で必ず神官が来て浄化しているからな」
親切な青年はそう言って、むっと首を傾げて志希を見る。
「……それじゃ、リビングデッドが出始めたのっていつくらいから？」
しかし、志希は青年の不思議そうなその視線に気が付かないまま再び問いかける。
見た目よりも大人びた言葉と表情に、青年は少々気圧されながら答える。
「二日前くらいから、らしい。森の中にいたグレイベア退治を依頼されて行ってみたら、六体のリビングデッドに襲われたんだそうだ。不意を打たれた上に、グレイベアにも襲われてほうほうの体で逃げ出して帰って来たそうだ」
青年の返事に成程、と頷き志希はイザークを見上げる。
「受付に行って、ちょっと話を聞いてくる。お兄さん、ありがとう」
青年に礼を言ってから、受付に声をかける。
「すいません、森に関する依頼はありませんか？」
声をかけられた受付の男性は手を止めて、顔を上げる。
「申し訳ありません。今、町の外の依頼は……」
「いえ、ギルドの方で森の調査などはなさらないのですか？」
志希の問いかけに、受付の男性は困った表情を浮かべる。

「調査をしたいところなのですが、現在この街に腰を据えている銅以上の冒険者がおりません。新人の鉄では不安が残りますので、今近隣のギルドに連絡を入れて調査をしてくれる冒険者を探しているところです」

男性の答えに、志希は頷きイザークを見る。

掲示板にいたイザークは志希の視線に気が付き、直ぐに受付の前に立つ。

長身で威圧感のあるイザークに男性の頬に、一筋の汗が流れる。

「森の調査依頼があるなら、俺のパーティが引き受けよう」

怯え気味の受付の男性に、イザークが静かに告げる。

「えっ！？」

思わず声を上げた男性は、直ぐに気を取り直し表情を改めて問いかける。

「申し訳ありません、ギルド証の提示とパーティメンバーのお名前をお願いします」

受付の要請にイザークは懐からギルド証を取り出し、それを提示しながらパーティメンバーの名前を告げる。

受付の男性はイザークの告げる名前を聞きながら、直ぐ横にある魔道具を操作して顔を輝かせる。

「少々お待ちください、当ギルドのマスターにお話しを通させてください」

受付の男性は喜色の滲んだ声音でお願いし、バタバタと奥へと駆けて行く。

物凄く急いだその様子に、余程切羽詰まっていたのかと志希は思わず首を傾げる。

「俺達もだが、基本的に高位のパーティは国境沿いの町を通り過ぎる傾向にある。俺達はたまたま、ミリアとお前の鋭敏さで足を止めただけだ」

イザークの言葉に、確かにと頷く。

乗り換えの為に降りただけのこの町で、ミリアと志希だけが霊気

を感じたのだから。
　すると、奥から受付の男性が焦りながら出てくる。
「マスターが話しをさせて欲しいとの事なので、奥の部屋に足を運んでくださいますか？」
「分かった」
　イザークが若干面倒くさそうにしつつも頷き、志希を促す。
　一人で受付前に待っていても仕方ないので、ついてこいと言う事なのだろう。
　志希は頷き、イザークと共に受付の後をついて行く。
　中に入ると、真正面の机の前に座っている人物が顔を上げる。
　見るからに壮年の男性だが、その耳は木の葉のように細く尖っている。
　その上、その肌はイザークの物よりも随分と黒い。
　瞳はアイスブルーで、整った顔をしていた。
　彼はイザークを見てから志希を見て、僅かに目を瞠る。
「これは驚いた。噂の冒険者がわざわざ足を運んでくださるとは」
　ギルドマスターの言葉に、志希が思わず首を傾げると彼はくすりと笑う。
「いや、不躾ですまない。君はシキ・フジワラだろう？」
　マスターの問いかけに志希は戸惑いながら頷くと、彼は微笑ましい子供を見るまなざしで彼女に告げる。
「フェイリアスの第五王子が、何時王妃の嫌がらせに屈するのか皆で見守っていたからね。この嫌がらせを終わらせたのが、アルフの様な色彩の幼い人間の少女だと王都から噂が流れているのだよ。無論、その名前と共にね」
　ギルドマスターの言葉に、志希は思わず顔を顰める。
　目立つのが嫌だと常々言っていたのを考えれば、当然の反応だ。
　イザークは志希の頭をポンと撫で、口を開く。
「俺達は依頼の話をしに来たのだが？」
　これ以上余計な話題は要らないとばかりに、イザークが問いかけ

る。
「ああ、これは申し訳ない。銅が四人に鉄が一人のパーティだと聞いているが、間違いないかな？」
ギルドマスターはそう言いながら立ち上がり、横にある対面ソファーに座る様に二人を促す。
その後、後ろに立つ受付の男性にお茶を持ってくるように指示を出してから、二人が腰を下ろしたソファーの前にある一人掛けのソファーに腰を下ろす。
「間違いない」
イザークはマスターの問いにそう答え、他にあるかと問うように彼を見る。
「では、詳しい話をしよう。これを聞いてから、受注するかしないかを決めてくれ」
マスターの言葉に、イザークは緩く頭を振る。
「詳しい話は聞くが、受けるのは決定事項だ。こちらの神官は、アンデッドキラーの資格を有しているからな」
イザークの言葉に目を丸くし、次いでそうかとギルドマスターは頷く。
「アンデッドキラーの修業の一環か。そうであれば、受けてもらうのは吝かではないな」
ギルドマスターはそう呟いてから、リビングデッドらしきものが目撃された所から話を始める。
志希達がこの街に来る五日前から、森に狩りをしに行った猟師が帰宅しないと言う話しがちらほらと聞こえ始めていたと言う。
それと同時期に、その猟師の妻が森に探しに入って欲しいと依頼を出して来ていた。
また、同じ様に薬師が森の中に薬草を探しに行ったっきり戻ってこないと言う話と共に、家族からの捜索依頼が入っていた。
どちらも魔獣に襲われたのかもしれないと言う事で、鉄のシングルの何人かに話をして即席でパーティを組んでもらい、捜索をして

もらった。
この辺りの森の中には強い魔獣が住み着いていないのだが、もしかしたら流れて来たかかもしれないと言う用心でパーティを組んでもらったのだが、それ以上の事態だったのだ。
リビングデッドの一体や二体なら、鉄のパーティでも良い。
だがしかし、六体から七体の集団のリビングデッドに襲われたのだ。
しかも、狡猾な事に探していた猟師と薬師を囮にした様な布陣だった為、鉄の何人かは重体になる程酷い怪我を負った。
それでも何とか町に逃げ帰り、既に猟師と薬師はリビングデッドとなっていたと言う報告をしたのが二日前の話だったそうだ。
慌ててギルドは早朝から森へ行く依頼は全て差し止め、町の人間にも森の中へ行かないようにと警告を出した。
そして、ギルド職員総出で書類の調べなおしをしていたのは、書類に森の中への行方不明者探索の依頼書が埋もれていないかを探していたそうだ。
「グレイベアの討伐依頼じゃないの？」
志希の問いかけに、ギルドマスターは頷く。
「そちらの方からも報告が上がっているのは、聞いている。グレイベアとリビングデッドを同時に相手をしたせいで、討伐依頼を受けた者達の数人も酷い怪我をしたと言うのもな」
そこまで言ってから、深いため息を吐くギルドマスター。
居ない筈のモノがいたせいで、戦士は大きな怪我を負ったと言う。
何とか依頼は完遂したが、破損した装備の買い替えや戦士の怪我の治療費などでほとんど手元には残らないだろう。
哀れに思うが、これが冒険者と言うものなのだ。
自分で選んだ道だからこそ、文句を言うのはお門違いなのである。
「さて、少し話がそれたな。取り敢えず、君達にはリビングデッドがなぜ発生しているのかを調べて欲しい。現在、リビングデッドが目撃されているのはこの町を出て右手にある森の中だ。この森は町

に近い事もあり、定期的に軍が見回りに来ていたのだが……今回は、軍を待つのは無理だ」

きっぱりとギルドマスターは言い、いつの間にか運ばれていたお茶に口をつける。

喋り通しで喉が渇いたのだろう。

唇を湿らせたマスターは、重い息を吐く。

「軍は腰が重い。来てもらうのを待っている間に犠牲者が増える可能性もある。だから、君達が偶々ギルドに立ち寄ってくれて本当に助かる」

「パーティの神官と精霊使いが、町に異変が起きている事を察知した。だから来ただけの事だ。それよりも、地図は？」

ギルドマスターにイザークが問いかけると、彼は壁際にいた案内の男性に指示を出して地図を持ってこさせる。

対面ソファーの間に置いてあるテーブルの上にそれを広げ、グレイベアの討伐に行った冒険者と捜索隊がリビングデッドと遭遇した場所を示す。

やや大雑把な地図だが、分かりやすい物だ。

この近辺の実の物であれば、十分である。

ギルドマスターが示した場所は、大体の位置だ。

しかしそれでも、森の入口からは十分離れている。

「深いな……暫く森の中で野宿になるかもしれんか」

ふむ、とイザークは頷き呟く。

「神官が邪気を寄せ付けぬ結界を張れるなら、不死者は怖くはないだろう。もし不安であれば、この町のヴァルデル神殿へ行き聖水を購入して行けばいい。聖水があれば、不死者どもが寄って来る事はあるまい」

ギルドマスターの言葉に分かっているとイザークは頷き、さてと口を開く。

「所でギルドマスター、この依頼の報酬はどうなっている？」

いままで一言も報酬に関して言われていないのだから、気になる

のは当然だ。
冒険者という職業だからこそ、報酬はしっかりと確認しなくてはならない。
報酬を貰わなければ生活するのが困難な職業なのだ、冒険者とは。
それを理解しているギルドマスターはああと苦笑し、口を開く。
「諸経費込みで、金貨一枚。前金は無いが、ギルドマスターの名に掛けて必ず支払おう」
ギルドマスターの言葉に、イザークは考えるような素振りをしてから頷く。
「了解した」
報酬にも特に不満は無く、入念な下調べをされている。
流石冒険者ギルドとしか言いようがない志希は感心しながら、イザークの隣で口を挿まずただ聞いていた。
交渉事はイザークかカズヤがやっているのを傍で見て、志希は勉強をしているのだ。
一人立ちをした時、一人に成らざるを得なくなった時に少しでも役に立つ様に様々な事を学んでいるのだ。
知識を身の内に潜ませていても、切っ掛けがなければ浮かんで来ない。
その切っ掛けを掴む為に、イザークはもしかしたら連れて歩いてるのかもしれないと志希はふっと思う。
自身の思考は都合のいいものだろうと思いつつ、志希はイザークに感謝をする。
意図があろうとなかろうと、志希にとってはとても助かる事である事は確かなのだ。
志希のそんな考えをよそに、イザークとギルドマスターは森の中に生息する魔獣や動物、妖魔の種類や話をしている。
それに気がついた志希は慌てて二人の話に意識を集中し、これからやる事を頭に叩き込むのであった。

第五十六話

ギルドで依頼を受けてから準備と体を休める為に宿を取り、翌日に荷物を宿に預けて森へと入った。

何せ早く調査をしなければ、この町のギルドは商売あがったりになってしまう。

依頼を受ける事が出来ないのはギルドとして致命的で、急かされるのは当り前だろう。

それに、早目に調査をして行かねば近隣住民に更なる被害が出るかもしれない。

行方不明だった猟師と薬師がリビングデッドになっていたと言う話や、リビングデッド達が布陣を敷いていたと言う不自然さも見逃せない。

リビングデッドに殺された者が、リビングデッドになる事はない。

犠牲者が同族になってしまう様な不死者は、グールやグワルと呼ばれる存在だ。

グールはリビングデッドよりも長く怨念を抱え込み、生きている者に対し多大なる恨みと食欲を示す不死者である。

動き自体がリビングデッドよりも機敏で素早く、見た目がリビングデッドとあまり変わらない為油断していると痛い目にあう事が多い。

グワルはグールよりも多い怨念に浸され続けた事により、生前の知識を取り戻した個体である。

だがしかし、理性その物は怨みにより喰い尽されている為、相手を攻撃する手段としてしか活用されない。

リビングデッドよりも段違いに強く、グワルになると生前の職業によって魔法まで使ってくる恐ろしい不死者だ。

そんな強い不死者がいるのであれば鉄の即席パーティや、グレイベアと戦いながら相手をするなど不可能だ。

そのような事態になっている場合、そもそも生きて帰って来れないだろう。
それらを踏まえると、最後に浮かんでくる可能性はただ一つだ。
「人為的な物だな」
先頭を歩くカズヤが呟く。
「それ以外考えられないわ。霊気はあるけれどグールやグワルが生まれる程、怨念を含んでいないしね」
ミリアはそう言いながら、森の中を警戒している。
「死霊術師か、闇の小神の神官か……」
イザークの呟きに、アリアが深いため息を吐く。
「基本、死霊術師はエルシル神やヴァルディル神には毛嫌いされていますけれど魔術師の系統としてはしっかりあるのですよね」
己自身が魔術師であるアリアは、苦笑しながら言う。
「死者を召喚し、話をしてその知識を得ると言う手段にもなります。わたしはエルシル様を信仰していますけれど、知識の徒でもありますから否定しません」
アリアの言葉に、ミリアが顔を顰める。
それはそうだ、彼女はエルシルの聖女だ。
しかし、アリアはしっかりと自分の考えも持っている。
「死霊術師になると、実は死霊と話をしてその無念を聞き少しでもその怨念を薄くする事が出来るんです。もちろん、浄化は神官のお役目ですけどね。でも、その死霊と話をして被害を抑える事が出来る役目の一端にも、なるんですよ。あと、特殊な例ですけど……引き裂かれて死んでしまった恋人達の霊を引き合わせ、浄化するっていう事をした死霊術師も居たんですよ」
字面が悪いだけで、死霊術師全てが悪い人間ではないとアリアは訴えているのだ。
同じ学問の徒で、彼らだけが悪者扱いされるのはどうか、と言うのがアリアの気持なのだろう。
「まぁ、その通りだよね。わりと死霊術師になる人は霊に対しても

優しい人多いし。魔術師で悪い人が居るとか、盗賊や戦士、冒険者で悪い人が居るとか言うのとおんなじでしょ？」

志希はごくあっさりとアリアに同意し、ミリアがむぅッと唸る。

「力とは、使う人間の心次第という事だ」

イザークが結論を言うと、ミリアは深いため息をつく。

「分かってるけれど、わたしは教義としてそれを許すわけにはいかないのよ」

神官とは、融通が効かない物なのだ。

「ええ、姉さんはそれでいいと思います」

理解はしていると言う言葉とともにアリアは微笑み、頷く。

ヴァルディルほど苛烈ではなくとも、エルシルは不死者達には厳しい。

死霊もまた不死者の種別に入る物なのだから、ミリアが許容しないのは当然なのだ。

アリアはただ知っていてもらいたかった様で、それ以上特に言う事も無いらしい。

志希はそんな姉妹に苦笑をしていると、風の精霊が現れ触れてくる。

目を閉じ、風の精霊と意識を同調させて志希は口を開く。

「北西の方角に、リビングデッドの群れを見つけたよ。十体ぐらいいる」

「距離は？」

間髪入れず、イザークが問いかける。

「……結構奥の方だから、今日一日でそっちに行くのは無理だと思う。ただ、じっと待機してるみたい」

志希は冷静に精霊からの映像を言葉にして纏めて伝えると、一同が深いため息を吐く。

自然発生で生まれたリビングデッドは周囲をウロウロして、生者を探す。それを死霊術や、闇の小神などの奇跡で命令を与え、意のままに操る事が出来るのだ。

造られたにしろ自然発生したにしろ、リビングデッドが待機をするという事は人間なり知能を持つ妖魔なりが関わっている以外考えられない。

「何の為にそのような事をしたのかが問題だ。この町に怨みがあるのか、気まぐれか……」

「何にしても、止めさせる事は変わらないわ。奇跡や術で作られた不死者の魂が、歪んでしまう前に浄化しなくちゃいけない」

ミリアの強い言葉の裏には、彼等に対する怒りの様な、憎しみの様な物が垣間見える。

志希は思わず、ミリアの背中をじっと見る。

アリアはいつもの事だと言うように普通にしているが、志希にはミリアの不死者に対する感情が引っ掛かるのだ。

何が引っ掛かるのか首を傾げるが、ミリア本人に問いかける事はしない。

してはならないと、直感が働いたからだ。

何よりもまず、志希は神官では無いしそちらの道に進むつもりもない。

であれば、志希は聖女たるミリアに対する言葉を持ってはいけないのだ。

ゆっくりと志希は頭を振り、息を吐く。

「疲れたか？」

イザークの問いに、志希は緩く頭を振る。

「疲れたって言うか、意外にこの森は広いみたいで……木々の精霊達が一杯話しかけてくるの」

取り敢えず、志希は思っていた事を誤魔化す為に精霊達を引き合いに出す。

実際、植物の精霊達が一生懸命話しかけて来て、大変なのだ。

ここから右の方に美味しいプルの実が生る木があるとか、この季節はイーロが美味しいから摘んで行くと良いとか勧めてくる。

他には最近人間が森に入ってこないから何かあったのかとか、リ

ビングデッドが森の東側から大量に来たとか色々と複数で語りかけて来ているのだ。
「いっぺんに話しかけられるから……って、え!?」
思わず志希は足を止め、聞き流していた話題に反応する。
「お、どうした?」
先頭のカズヤが問いかけてくるが、志希はきょろきょろと森の中を見回して口を開く。
「今、リビングデッドの事を教えてくれたの誰かな?」
志希の台詞に、森に居る精霊達がリビングデッドの事を教えてくれたらしいと悟り全員で足を止める。
その間にも、志希は耳を澄ませて目を閉じる。
精霊達は志希の言葉に口を閉ざし、リビングデッドの話をした木の精霊との会話が終わるのを待つ。
志希は二度三度深呼吸をしてから目を開き、ありがとうと小さく精霊達に礼を言う。
「物凄く申し訳ないんだけど、少し休憩して良いかな?」
先ほどよりも若干顔色が悪くなっている志希がそう申し出ると、イザークが頷き三人を見る。
「ええ、わたしは良いと思うわ。顔色が悪いのが気になるしね」
「んじゃ、少しその辺に座ろうぜ」
ミリアの返事にカズヤは頷き、アリアも当然と言うように休憩する為に荷物に引っかけてある水筒を手に取る。
志希は若干ふらつきながら腰を下ろすと、ミリアが直ぐ隣に腰をおろして手招きをする。
「少し、横になった方が良いんじゃない? 本当に顔色が悪いわ」
ミリアの言葉にありがたく頷き、志希は荷物を枕に横になる。
「ごめん、ちょっと何時にない感じで視たから目眩がしちゃって」
常日頃、風の精霊達と意識を重ねて遠距離を見ている志希だが、植物の精霊との意識の同調が上手に出来ず酔ってしまった状態だ。
その彼女に、精霊達が群がり心配そうにしている。

頭の中で大丈夫だと精霊達を宥めながら、志希は口を開く。
「どうやら、リビングデッドは全部で三十体から四十体いるみたい。それが、森の東側から入って来たんだって」
志希の唐突の言葉に、むっとイザークが唸る。
「それは何時の事だ？」
「四日くらい前かなぁ……逆十字に骸骨があしらわれた聖印を黒いローブに縫い付けた男性が引きつれて歩いてた」
志希の一言に、ミリアの瞳が丸くなる。
「闇の小神、不死者に恩寵を与える者だわ」
神の名は伝わっていないが、邪神としての銘はある。
小さいとはいえ神は神だ。
また、ヴァンデル神の配下の神とも言われているので、そこそこの力を持つとされている。
「何のためにここに拠点を構えたのかが気になるが、話を聞くのは本人からだな。取り敢えず、シキには悪いが他にリビングデッドが配置されていないかとか、何処にその神官が居るのか精霊に聞いてみてくれ」
カズヤはそう言って、背中に背負っている弓の弦を弾き始める。
遠距離から攻撃を仕掛ける為に、カズヤは長弓を持ってきていた。
初めて会った時、ゴブリンの首を射抜いたのはカズヤ。
その腕前は、かなりの物であろう。
だが今回の相手はリビングデッドなため、あまり弓を使うつもりはないと言っていた。
どうやら狩りをして新鮮な肉を手に入れるつもりで持ってきたようだ。
干し肉ばかりの食事は、流石に飽きが来るのだ。
このちょっとした休憩を利用して、付近の偵察と言う名目で小さな動物を狩って来るつもりなのだろう。
イザークは弦の具合を見ているカズヤに頷き、特に止める素振りも無い。

志希もまた、この近辺にはリビングデッドが居ないのが分かっているので口を挿まずに目眩が治るまで目を閉じる事にする。
美味しい食事が出来て嬉しいのは、皆なのである。
動物などの居場所については風の精霊や植物の精霊に聞けばわかるが、カズヤには経験があるので助言は必要ない。
ただ、注意すべき言葉は一つ。
「霊気が漂ってるから、出来るだけ一撃で仕留めてね」
直ぐにリビングデッド化する訳ではないが、あまり手間取ると変な影響を受けるかもしれない。
その心配があるので、志希は一言告げた。
「分かってる。んじゃ、ちょいとばかり行ってくる。休憩がてら、野営の為の薪とか拾っといてくれよ」
まだ早い時間ではあるが、野営の時間に薪が拾えるかは疑問だ。
少しずつ皆で拾っておけば、後が楽になるのだ。
カズヤは足音も無く森の中に消え、アリアはあっと声を上げるが直ぐに腰を上げて薪を拾い始める。
「シキはそのまま横になっていろ」
イザークは一言告げ、立ち上がるなり薪を拾い始める。
ミリアも立とうととするが、それを手で制してアリアと二人周囲の薪になりそうな木の枝を拾う。
ミリアはイザークの意図を読んでそのまま志希の側に座り、様子を見ている。
「はぁ、なんかごめんねぇ」
志希は何となく居た堪れない気持ちになり、小さく謝る。
ミリアはそんな志希の言葉にくすくすと笑い、頭を振る。
「何言ってるのよ。シキのお陰で、わりと早くお仕事が終わりそうなのよ?」
そう言って、ミリアは志希の額を撫でる。
「シキの休憩が終わったら、移動しながら今度は小神の神官が拠点にしてるであろう所を探してもらうんだから。謝る必要もへこむ必

要も無いのよ」
あっさりと言われた志希は、なるほどと頷く。
きちんと志希は志希の役割を果たしているともミリアは示していて、志希はふっと安堵の息を吐く。
「自分の為すべき事を為せるのであれば、誰も不満を言わないわ。きちんとお手柄立ててるんだから、胸を張って良いのよ。むしろ、わたしとアリアの方が色々と不安だわ」
肩を竦め、ミリアは苦笑しながら言う。
志希はその言葉に目を丸くすると、ミリアは内緒だと人差し指を口に立てる。
「最初のころから、わたし達の印象は悪いでしょう？　だから、その分きちんとお仕事をしなくちゃって思うの。それに、わたし達の事情に巻き込んでいるのもあるから……尚更しっかりしなくっちゃってね」
「でも、ミリアもアリアもしっかりと役割を果たしてると思うよ？」
志希は思わず、ミリアにそう告げる。
「イザークだってカズヤだって、きっとそう思ってる。だから、あんまり気を張らなくて良いと思うよ？」
言葉がきちんと伝わっているかが不安で、志希は言葉を重ねる。
ミリアは志希の言葉に驚き、若干目を見開いてから微笑む。
「そうだったら、嬉しいわ」
アリアよりも若干きつめな顔立ちのミリアが、ふわりと花が綻ぶ様な微笑みを浮かべる。
思わず目が奪われる程その微笑みが綺麗で、志希は言葉を無くして彼女に魅入る。
それに気がついたミリアはどうしたの？　と問いかけるように小首を傾げて志希を見る。
志希ははっと正気に戻り、次いで恥ずかしさで頬を赤くしながら口を開く。
「ミリアって美人だなって、改めて思ったの」

「あら、ありがとう。シキに言ってもらえるのは嬉しいわ」
にこりとまた笑い、ミリアは志希の頭を撫でる。
ほんの少しだけ子供扱いされた様な気持ちになるが、ひんやりとしたミリアの手のひらは気持ちが良い。
まるで姉か母親に撫でられている様だと思いながら、志希はゆっくりと目を閉じた。

第五十七話

カズヤが帰ってきてから色々と相談し、移動を再開した。
その時から志希はカズヤが戻ってからされた相談内容によって強制的にイザークに子供の様に抱きあげられていた。
「恥ずかしいなぁ、もう」
ぼやく志希に、イザークが何でもない様に告げる。
「気にするな。それより、頼んだぞ」
「はぁい」
志希は渋々頷き、イザークの肩口に頭を置いて目を閉じる。
志希の意識を精霊達と完全に同調させ、小神の神官を探し出す方針を取った。
しかし、それをすると志希が死んだように眠る為移動する事が出来なくなってしまう。
それを解決するため、イザークが志希を片手で抱き歩く方法だ。
本当はアリアがゴーレムを作り、それに志希が抱えられる方針で行こうとしていたのだが、拾った薪の多さとカズヤが獲ってきた動物を運ばせるとそれが難しい。
二体作っても良いが、それだとアリアの負担が大きい。
その様な理由で、志希の荷物を更にゴーレムに持たせてイザークが志希を抱えると言う事になったのだ。
しかし、戦闘となると困ると思いがちだが、イザークはいつも大剣の他に予備の武器を腰に差している。
大剣が使えなければこちらの予備の武器を使えば良いと言う事で、この様な形になったのだ。
「まぁ、この森の魔獣や動物の分布を考えたらオレ達だけでもいけるしな」
カズヤはあっさりと言って、イザークの意見に賛成したのである。
この辺りに出没する魔獣はグレイベアや角兎と言った、野獣から

魔獣になったと言われている動物のみだ。
その中で一番強いと言われているのはグレイベアなのだが、鉄の中でも経験を積んだ者ならばパーティで討伐する事も出来る程度だ。
ちなみに、リビングデッドはグレイベアよりも弱い。
だがしかし、数を頼りに押し切られてしまう事もある為要警戒対象なのだ。
自然発生する際も、大概はその周辺にあった死体が動き出すので数が多い。
人為的だと自然発生した際よりも更に数が多いので、リビングデッドを一体見つけた場合その三倍はいると思うのが冒険者たちの常識だ。
そんな会話をしている仲間達の声を聞きながら、志希はゆっくりと体から精神を剥離させる。
馬車旅の際にも用いた技で、ほぼ幽体離脱に近いものだ。
通常の幽体離脱と違う点は、自分の意思で移動できる事と悪い意図を持っている輩は側に近寄ってこられないと言う事だ。
志希の様な『神無の鳥』は、精神体だけでも力を持っている。
また、精神体を守る為に精霊達が傍に居るのでそうそう傷つけられる事も無い。
これらの理由から、かなり志希の精神体は安全なのだ。
危ないのは生身の方である。
しかし、それもイザークが抱えて移動してくれるという点と仲間達が守ってくれるという安心感があるので抵抗感はない。
あるとすれば、抱えられている状況を体から出て直ぐ客観的に見る羽目になっていると言う事だけだ。
あまりの恥ずかしさに身悶えしつつ、志希は風と土、植物の精霊達の導きに従い森の中へと意識を移す。
本来であれば野営地でやる様な事を今やっている理由は、何も知らない一般人や近隣の村の人間が森に入ったら危険だからだ。
この森はかなり広大で豊かなので、国境沿いの町だけではなく村

も隣接している。
冒険者ギルドの方で連絡を回していたりはしても、それが間に合わずに森に入り魔獣やリビングデッドに殺されてしまう可能性がある。
それを排除する為に、志希はこの森に住まう植物の精霊や、土や風の精霊達にお願いして人が立ち入らぬように指示し、小神の神官を探しているのだ。
本当はいけない事なのだが、それくらいしなければ小神の神官を探すのが難しくなってしまう。
それでなくとも森の中に居る動く物に気が取られるので、これ以上人間等が増えて意識が割かれるのを防ぎたい。
森の中に意識を広げる自分と、風や土に意識を乗せる自分。
沢山の意識を作り、それを広げている状態で森の中の出来事一つ一つに目を向けて行かねばならない。
体に精神体を残したままこの様な事をすれば、熱を出して倒れる可能性が高い。
それ故、負担の少ない精神体で行っているのである。
体の方にも一部の意識を割きつつ探索をしていると、気がつく。
霊気とリビングデッドがある地点を中心にして、円形に配置されている事に。
余りにも分かりやすい配置に一瞬罠なのかと思うが、直ぐに集中してそちらを調べに精神を一部割く。
リビングデッド達が居るのは五か所で、それを繋ぐと綺麗な円形になるその中心へとたどり着き、志希は何とも言えない気持ちになる。
ちょっとした丘の様になっているそこの一部が崩れ、ぽっかりとした口を開いている。
それと同時に、そこから濃厚な霊気が漂い出ていた。
この中心点に来なくては感じられなかったのが不思議な程強い霊気に、志希は首を傾げつつ一度上空へと意識を上らせ全体を見る。

そこでリビングデッドが居る地点それぞれに目を凝らせば、リビングデッド達が何かを護るように円陣を組んでいる姿。
中心には、細い柱の様な物が立っている。
気が付けば日は大分落ち、薄暗くなっているが精神体の志希には目をこらさなくともその存在を確認出来ていた。
志希はマジマジと、その細い棒を見る。
細い棒は地面に突き立てられ、倒れないようにと支えられている状態だ。
周りにリビングデッドがいなければ、看板か何かを立てようとしていたのかと勘違いしそうになる。
だがしかし、細い棒とそれを支える木板の全てにびっしりと何かの文字が刻みこまれていた。
志希は最初、その文字の意味が分からず首を傾げていたが、不意に脳裏に浮かんだ知識に思わず顔を顰めてしまう。
木の棒に刻まれている文字は、神へ祈りを捧げる為に使われる神聖文字と呼ばれるモノだ。
だがしかし、これを作った者はその神聖文字を使って穢れた文言を綴っている。
その様な事をするのは闇に属する神々の神官で、この棒の役割はこの周辺に立ちこめる筈である霊気を抑える為であったようだ。
だがしかし、術者が未熟だったからか、それとも容量を超えてしまったからか分からないが、霊気はすっかりこの森を覆っている状態だ。
術者の意図を越えた霊気は町にまで流れて来た訳なのだが、神官がそれに気がついているかは甚だ疑問である。
何せ、リビングデッドが全く動いていないのだから。
もしかしたら、リビングデッドが居れば勝てるなどと思っているのかもしれないと志希は考えつつ、中心点に意識を戻す。
志希は取り敢えず洞窟の前に戻り、土の精霊にお願いをして霊気の濃い洞窟の中を調べて来てもらう事にする。

土の精霊は嬉々として中に入ろうとするが、濃い霊気が突如人型の霧の様な姿を取り土の精霊を阻む。
人型の霧の様な物は徐々に鮮明な人の姿を取り始め、志希は思わず息を呑む。
現れたのは、ぼさぼさの髪に白い肌、白いワンピースを身にまとった女性だった。
眼球全体が黒く染まり、そこから黒い溝の様な物が頬へと掘られている。
否、頬にある溝は涙だ。
黒い目に黒い涙を流す女。
白く、唸り声の様な物を上げるその存在に志希は思わず悲鳴を上げかける。
それと同時に、女が息を吸い込むような動作をする。
咄嗟に志希は周辺の精霊達に撤退を指示して体に逃げ込む。
その直前、女の甲高い悲鳴とも鳴き声とも聞こえる声が精神体の耳に響いた。

「あああぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
志希は悲鳴を上げ、涙を流す。
そのまま逃げようとするが、まるで拘束されているかのように体が動かない。
「いや、いやいや！」
怯えた声を上げ、遮二無二暴れていると更にきつく拘束される。
「大丈夫だ、落ち着け」
そう耳元で囁かれ、志希はひくりと喉を鳴らす。
顔を上げた間近に、困惑したイザークの顔があった。
それを見た瞬間、志希は安堵の表情を浮かべたかと思うと、顔を歪めて号泣する。
「怖かった、怖かったよぉ！」
イザークに抱きつき、おいおいと子供の様に声を上げて泣く志希。

それに困惑しているのは、イザークだけではない。
「何があったんだ?」
カズヤの問いかけに志希は頭を振るばかりで答えず、相当な事が起きたのではないかとミリアは顔を歪める。
「奇跡で落ち着かせる事も出来るけれど、余り良い事じゃないから自然に落ち着くのを待ちましょう。それに結構暗くなってるし、野営の準備をするべきだわ」
志希が精神体だけで活動していた時間は四刻ほどと、結構経っていた。
その間魔獣や野獣に襲われる事も無く過ごせたのは僥倖で、かなりの距離を稼げていたのだ。
ミリアの提案に誰も反対せず、野宿の準備を始める一行。
しかし、志希はイザークに抱きついて離れず、ずうっと泣いているので彼は仕方がなく志希を抱いてあやしながら座っていた。
困惑しつつぎこちなく子供をあやしている様なその姿に、カズヤは笑っていいのか困って良いのか分からない複雑な表情を浮かべながら野営の準備を手早く片付ける。
ミリアもアリアもイザークの困惑している姿を見ていながら手を差し伸べず、それぞれやるべき事を終わらせる為に動いている。
何せ志希自身がイザークから離れず、しがみ付いているような状況だ。
下手に引き剥がせば暴れてしまいそうな雰囲気もあるので、イザークに志希を任せてしまったのである。
そんな状態で野営の準備ができる頃には、志希の泣き声は止みすうすうと寝息を立てていた。
それに安堵したイザークが志希を普通に寝かせようと体を離すが、眠っている彼女の手はしっかりと彼の服を握っていた。
何とも言えない表情を浮かべるイザークにカズヤは苦笑しつつ口を開く。
「飯の準備するからよ、シキのお守頼んだぜ」

その言葉にイザークは若干憮然としたが、特に何も言わずに頷き志希を抱え直す。

いつもは無言で、あまり表情が動かないイザークが困惑しながらも志希を抱き座っている姿は妙にほのぼのとしている。

正直イザークには似合わな過ぎて笑えるのだがそれを表面に出すのは流石に彼に悪いと思い、三人は出来るだけ彼等の姿を目に入れないように黙々と野営の準備をするのであった。

第五十八話

志希は物凄く深い溜息をつきながら、気まずい表情で木で出来た器の中に入っているスープを啜る。
具材はカズヤが獲ってきた小動物の肉と日持ちするように加工された野菜が入っており、味は塩と森で拾ったハーブで纏められていた。
カズヤは基本、美味しい物を食べたいらしい。
イザークと一緒に居た時から色々な食べ物を食べて味を研究し、野営などでも美味しい物を食べられるように努力を重ねて来たそうだ。
そんな彼の努力の結晶を食べても、今の志希には味が分からないくらい動揺していた。
何せ目覚めた時の状況が状況で、志希としては身悶えしたいくらい恥ずかしい事だったのだ。
ふうと思わずため息をつくと、ミリアが口を開く。
「取り敢えず、シキが落ち着いたみたいだから聞くけど……何があったの？」
このままだと際限なく志希が落ち込むと気がついたミリアが、助け舟として質問したのだ。
志希はその問いかけに動きを止め、深呼吸を数度繰り返す。
恥ずかしい事に、先程の恐怖がまだ身の裡に燻っているのだ。
その恐怖で怯えそうになる自分を必死で落ち着けてから、口を開く。
「多分、小神の神官の居場所を見つけたんだと思う」
志希の言葉に、ミリアが弾かれた様に彼女を見る。
その動きにカズヤが何かを言おうとするがやめて、志希に続きを促すように頷く。
「ここからちょっと西の方にリビングデッドが沢山いて、待機して

いるって言ってたでしょ？　同じ様に、リビングデッドが待機している場所があったの。丁度丘みたいな所を中心にして、円を描くようにしてね」

志希はゆっくりと、細かく自分の見た物を説明して行く。

それを聞いていたミリアとアリアは険しい表情を浮かべ頷き、立ち上がる。

「霊気が漏れない様に結界を敷いていた、と言う事でしょうね」

「他にも、その陣の中に入り込んだ人を感知する役割もあったと思います。感知すると同時にリビングデッド達が襲いに行く、と言う形を取っていたんでしょうね」

双子の険しい声音に志希は頷き、小さく息を吐く。

「多分、小神の神官は丘の所に空いていた洞窟の様な所の中に居ると思うんだけど……入り口をバンシーが守っていたんだ。黒い眼と黒い涙を流す姿から、多分相当な恨みを呑んでる。使役されてるから、神官が殺した女性の霊体かもしれない」

「なんですって……」

ミリアが怒りで声を震わせ、ぎりっと歯を食いしばる。

バンシーと言う亡霊は必ず女性で、常に泣いている。

だが、無差別に人を襲う事は無く基本的には恨みや心残りを晴らして欲しいとお願いする程の理性と知性を残している。

だがしかし、志希が遭遇したバンシーは理性がすり切れ、黒い眼に黒い涙を流すほぼ怨霊と化していた物だ。

その悲鳴は精神を侵し、聞いた者に恐怖を与える。

精神体で居た志希にとっては、もっとも辛い攻撃となる手段を持っていたのだ。

精霊達にとってはそれほどの脅威ではないが、彼等の守護を容易く突破出来る程の叫びを一瞬でも耳にしてしまい、志希は恐怖に駆られて混乱してしまったのである。

これが生身であれば、志希はあれほど酷い混乱の仕方はしない。

再び息を吐き、志希はスープを食べるのを再開すると。

「どちらを先にするかが問題だな」
と、イザークが呟く。
「んだなぁ……」
食事を取りながら、カズヤも頷く。
「どちらも、と言いたいところですが……二手に分かれるのは辛いですね」
アリアは嘆息交じりに言い、全員で険しい表情を浮かべる。
「先にリビングデッドを片づければ小神の神官が逃げるかもしれない。小神の神官を先にやれば、リビングデッドが命令から解放される」
「悩ましいよねぇ」
ふうと嘆息しつつ、志希は頷く。
放置するにはリビングデッドがいすぎるし、先にそちらに手をつければ逃げられる可能性が高くなる。
何ともやり辛い状況に困った表情を浮かべていると、イザークは四人に告げる。
「厄介な状況ではあるが、仕方あるまい。先に元凶を叩き、安全を確保してリビングデッドを退治しよう」
イザークの決定にミリアが口を開こうとするが、止めて頷く。
ここで小神の神官を逃がせば、他の場所でまた同じことをする確率が高いからだ。
リビングデッドが森の中に散らばるのは正直、かなりまずい。
だが、自分達だけではなく他のパーティなりギルド側に協力を要請するなり、やりようはいくらでもある。
と言う事で、先に元凶をやるべきだと判断したのだ。
「そうですね……仕方ありません。これなら、伝令用の鳥を借りてくれば良かったですね」
戦地などで使用される伝令用の鳥がいて、ギルドでも使用されている事がある。
ギルド同士の連絡や、王宮からの連絡は全て専用の魔道具がある。

だがしかし、製作するのに必要な術式がかなり難しく魔力を必要とする為、作れる人間自体が非常に少ない。
それ故冒険者や戦地での連絡用に使用する事など考えられない程高価で、貴重な物なのだ。
そんな高価な品物を戦などに持って行って壊されてはたまらないと言う事で、基本的に伝令用の鳥が使われているのが現状なのである。
「ねぇ、状況が分かってるんだったらさ……一回引き返してギルドに報告するのもありなんじゃないかな？」
おもむろに、志希が言い出す。
「は？」
思わず素っ頓狂な声を上げるカズヤ、アリア、ミリア。
「この森を何時までも閉鎖するのは出来ないけど、一日私がここに居れば何とかなるし。人を呼んで帰って来るのでも、何とかなると思うの」
志希の唐突な提案に、皆思案する表情を浮かべる。
その中で、イザークは小さく息を吐いて頭を振る。
「却下だ。確かに、人を呼べばよいのかも知れんが……この森で生活の糧を得ている者達を何時までも締めだす訳にはいくまい。小神の神官を先に倒し、恐らく彷徨うであろうリビングデッドはギルド側に回す方が良かろう」
イザークの言葉に不愉快な表情を浮かべるのは、ミリアだ。
アンデッドキラーにしてエルシルの聖女であるミリアにとって、アンデッドの存在をそのままにして置くのは許せない。
だからこそ、霊気が感じられたこの場所に立ち寄りたいと言い出したのだから。
「そもそも俺達が依頼されたのは調査だ、討伐では無い。リビングデッドの数を減らすと言うのには賛成ではあるが、小神の神官を捕らえた後にリビングデッドの掃除は俺達だけでは不可能だ」
イザークの言い分にミリアは拳を震わせ、深呼吸をする。

アンデッドに対する酷い敵愾心に、アリアが不安げな表情を浮かべてミリアを見上げる。

ピリピリとした雰囲気に志希が困惑した表情を浮かべ、口を開こうとするとカズヤが先に口を挿んだ。

「ミリア。オレ達は万能じゃねぇんだぞ。シキだって、イザークだってアリアだってそうだ。それに、言葉は悪いかもしれねぇけど…あの町のギルドの冒険者たちの仕事になるかもしれねぇ。オレ達が何でもかんでもやっちまったら、他の冒険者達だって困るだろ？」

「っそんな……！！」

ミリアが抗議の声を上げるのは、当たり前である。

リビングデッドの掃討を、仕事としてギルドに回すべきだと言われたのだから。

「そもそも、一度に全てを片づける事など無理なんです。姉さん」

仕事が無くては生きていけないのは、冒険者に限らずみんなそうだ。

そして、この森の治安をある程度守っているのは近隣のギルドである。

彼らとて依頼がなくては組織として維持していく事が難しく、生きる為の術としてある程度の事には目をつぶらざるを得ないのだ。

「無論、俺達の目に留まった範囲のリビングデッドは倒す予定だ。だがしかし……この森に留まり続けてリビングデッドを全てと言うのは無理だ。それに、ギルドがあった町にはヴァルディル神殿がある。あちらの方にも要請して、アンデッドキラーを出してもらい森を浄化してもらうのが筋だろう」

イザークの言葉は正論で、ミリアは俯くしか出来ない。

アンデッドキラーとしての仕事、矜持と言ったところで無理をして死んでは何もならないのだ。

そして何より、ミリア自身にもやるべき事がある。

「……分かったわ。ヴァルディル神殿の方にアンデッドキラー見習いがいたら、修行の邪魔にもなってしまうでしょうしね」

何とか納得したミリアは頷き、しかしそれでも不機嫌そうな表情を浮かべて食事を再開する。
今度は何やら良くない雰囲気になってしまい、志希は困った表情を浮かべながらパンをもぐもぐと噛む。
まさかこんなに空気が悪くなってしまうとは思いもよらなかった志希は、責任を感じてしまう。
不意に、アリアが息を吐き出し口を開く。
「姉さん、拗ねないでください」
アリアの言葉にミリアは憮然とした表情で答える。
「別に、拗ねてなんかいないわ」
その声音と表情は、どう見ても拗ねている。
「子供ではないんですから、そんな言い方も顔もやめてください」
「元々こんな顔しているんだもの、仕方がないでしょう？」
「その返し方も子供みたいですよ」
「うるさいわね」
「だったら、素直に謝ったらどうです？　自分でも、分かっているんでしょう？」
「……何がよ」
目前で繰り広げられる姉妹のやり取りに、志希は何となく二人の力関係を知った気持ちになる。
最初はミリアが強いと思っていたのだが、最近はミリアよりもアリアの方が強い気がする。
こうやって姉に気持ちを認めさせようとしている所や、猪突猛進系のミリアの手綱を上手く採っている所を見るとそれが顕著だ。
いや、最初のアリアは色々と甘えていたが、パーティを組んでから精神的に強くなってきているのだ。
ミリアの後ろに隠れている事が多かったアリアは、しっかりとミリアやカズヤの横に並んで見知らぬ人とも会話を成立する事が出来ている。
イザークに鍛えられたからなのか、それとも自分で変わろうと努

力をしているからなのだろうか。
　そんな事を感慨深く考えていたら、ミリアが深い溜息を吐いて三人に顔を向ける。
「ごめんなさい。理屈は分かっていたんだけど、感情が制御できなかったの。冒険者としてはイザークの言っている事は納得できるけど、アンデッドキラーである部分が拒絶をしていたって感じね。為政者としての教育も受けていたのに、だらしないわ……わたし」
「まぁ、気にすんなって」
「事情は分かっているからな」
「うんうん、納得できてるなら特に言う事も無いよ」
　それぞれにミリアに返事をしてから、食事に意識を戻す。
　先ほどよりも遥かに良い空気で食事を出来る事に志希は安堵しながら食事をおえる。
「取り敢えず、いつも通りの人員と順番で見張りをしてから朝に飯食って出発しようぜ。こっからまっ直ぐシキが見た洞窟へ行くってのは、決定だろ？」
　カズヤも食事を終え、器を洗う革袋の中に放り込みながら皆に問いかける。
「ああ、その通りだ」
　簡潔なイザークの答えにカズヤはやはりと頷き、それじゃと腰を上げる。
「んじゃ、飯食い終わったらこれんなかに入れてくれよ。少し腹ごなしをしたら、オレは寝るからな」
　カズヤの宣言に一同は頷き、それぞれ使用済みの食器を革袋に入れて夜の見張りに向けて準備を始める。
　志希とイザークはいつも通り最初の見張りなので、武器を傍に置いて焚き火の側に陣取る。
　ミリア、アリア、カズヤはそれぞれ自身が寝る場所を決め、そこに荷物を置いて寝床を作っている状態だ。
　志希とイザークの二人が見張りを交代する時は、今いる位置より

少し焚き火から離れた所で寝るのである。
基本、寝床の直ぐ近くで焚き火を見ながら見張りをするのが彼等の常なのだ。
それぞれがそれぞれのやる事を終えたころには、森の中は夜の帳に包まれていた。

第五十九話

イザーク達一行が森の中に入って三日目、ようやっと志希が精神体で視た丘の近くにまで到着した。

この間、リビングデッド達が襲ってくる事はなかったがグレイベアやグレイウルフに襲われたりしていた。

小神の神官に気が付かれていないと思いたいが、あまりにも音沙汰がない。

また、神官が逃げ出したとしてもその旨を必ず精霊達は志希に知らせる。

なので、最初から居なかったという事態以外、小神の神官が丘の洞窟に居る事は確定なのだ。

「広範囲に結界を張っているみたいだから、侵入者を感知する様な何かもあると思ったんだけど……無かったね」

志希の呟きに、同意するのはアリアだ。

「ええ、不思議です。神官が何か切り札的な物を持っているのか、それとも自信過剰なのか判断付きません」

あまりにも無防備が過ぎる為、色々な可能性が脳裏をよぎる。

「考えていても仕方あるまい」

「だな。ここで難しく考えていても、分かる事じゃねぇし」

カズヤとイザークの二人はそう言って、全員を促し歩き出す。

ミリアはピリピリとした空気を発しながら、カズヤの後ろを着いて行く。

アリアは姉のそんな姿に何とも言えない表情を浮かべつつ隣に並び、志希とイザークの二人がその後ろにつく。

周囲を警戒しながら暫く歩くと、先頭のカズヤが志希に声をかける。

「方向はこっちであってんのか？」

「うん、大丈夫。目印が必要なら、光の精霊を出すよ？」

志希の問いかけに、カズヤはしばし考えてから頷く。
「頼む」
「了解」
志希は無言で首元のチョーカーを撫でると、そこから蛍の様な淡い光を放つ実体を持った光の精霊が現れる。
「道案内、お願いね」
志希の言葉に光を瞬かせ、カズヤの前にすいっと出る。
そのまま行き先を示す様に、カズヤ達の足に合わせた速度で進み始めた。
カズヤはその後を着いて行きながら、話し始める。
「取り敢えず、戦術はどうする？」
「一体しかいないならわたしが浄化できるかもしれないけれど……中に気が付かれないで倒す事は不可能だと思うわ」
「まぁ、気が付かれても出入り口はあそこしかないから大丈夫だと思う。むしろ、奥の方から援軍が来るかもしれないって事を考えた方がいい」
洞窟の中を偵察するべく土の精霊や風の精霊にお願いしたのだが、特殊な結界を張っている為なのか中の様子が分からなかった。
しかしそれでも諦めず、野営中にこの洞窟と繋がっているような洞窟がないかを精霊達と共に探し、無い事は確認している。
なので、奥から援軍が来るかもしれないという推測を志希は立てたのだ。
洞窟内の様子が分からない以上、リビングデッドが大量に呼び寄せられるか中から現れるかの可能性があると考えておかねばならないのだ。
「……洞窟がどれくらいの広さを持っているのか分からない以上、あまり手間をかけてはいられないのね」
怨霊化しているバンシーを浄化させるには、結構な時間がかかる可能性がある。
むしろ浄化を拒み、襲いかかってくるだろう。

そうであるなら、一度バンシーを倒し弱らせてから浄化した方が早くなる。
神官であるミリアには力でごり押しとしか言いようのない手段に嫌悪を覚えてしまうが、仕方のない方法だと心得ている。
倒した後にしっかりと浄化し、再度邪な術に捕まらないようにと祈ってやる事しか出来ないのだ。
「此処か？」
カズヤの声に、ミリアは顔を上げる。
光の関係上、普通であれば中の方がほんの少しでも見える筈だと言うのに、塗り潰された様に真黒な洞窟の入り口が開いていた。
まるで、魔界へ通じているかのようだ。
その真黒な闇の中、ちらちらっと白い影が揺らめく。
「バンシーね……人の気配を察して、脅しているのね」
ミリアは一人ごちる様に呟き、背負っている大鎌を手に取る。
各々が武器を手に、入り口から出てくるであろうバンシーを警戒していると志希が口を開く。
「入り口をふさいでるのは怨霊の塊だね……アレ、下手したらバンシー一体じゃないかも」
「かもしれないわね。視覚化される程、怨念に染められた霊気なんて初めて」
志希の指摘に、ミリアは思わずうめく。
志希の方が早く気がついた事に、自身の未熟を示されたからだ。
種族の差であると言う仕方のない事情があるとしても、ミリアの矜持を傷つけるのに十分なのである。
志希はその事に気が付き、やってしまったと思うが口に出た物は仕方がない。
それに何より、今は眼前の敵に集中する方が先決なのだ。
「シキ、その光の精霊を近づけてみてくれ」
「分かった」
イザークの言葉に頷き、前衛を担う三人が前に出て武器を構える

のを確認してから光の精霊を霊気の壁に近づける。
すると、青白く枯れ木のような細い腕がぬるりと黒い壁から生える様に現れる。
光の精霊を掴もうとするかのようなその動きに、咄嗟に志希は離れるように指示を出す。
それを追いかけて、ずるずると腕から肩、胴体、足と顔が黒い壁から現れた。
黒く染まった目と、黒い涙を流すやせ細った女の霊。
怨霊化したバンシーだと一目でわかるその姿。
植えつけられた怨念に、呑みこんだ恨みに悶え苦しむように唸りながらよろよろとミリア達の方へと歩みよって来る。
そのバンシーの後を追うように、黒い壁から更なるバンシーが現れる。
「うっそぉ！」
その光景に、志希は思わず抗議する様な声を上げてしまう。
しかし、イザークは落ち着いた表情で口を開く。
「一度バンシーと精霊が接触しているのだ、敵も警戒するのは当たり前だ」
この言葉は当然なので、志希は小さく頷く事しか出来ない。
そうこうしている内に、黒い壁から出てくるバンシーの数が増え、何と四体に増えていた。
「大気に満ちるマナよ」
アリアは小さく呪を唱え、バンシーに対する精神防御の魔術を発動させる。
「大地母神エルシルよ」
ミリアが己の大鎌に刻まれている祝福を発動させ、優しい緑の光を刃に纏わせる。
霊体を斬る事が出来るのは、魔力を纏っている刃か祝福された武器だけである。
カズヤの長剣は魔力を付与されているので問題はないし、イザー

クの大剣は魔剣だと言うのだから恐らく大丈夫だろう。
そうでない場合はアリアが剣に魔力を付与するか、ミリアが祝福を一時的に与える奇跡を使えばいいだけの話なのである。
そう考えを巡らせていると、イザークが呼びかけてくる。
「シキ、アリアと協力して精霊と魔術の併用で一体倒せ」
「了解」
前衛として前に立つ三人よりも敵が多い場合、一体でも多く倒さなくてはならない。
まして怨霊と化しているバンシーの強さはかなりの物で、銀くらいの実力がなくては一対一の戦闘は出来ないとも言われている
そんな恐ろしいバンシーが複数体いるのはとても恐ろしい事なはずなのに、前に立つ三人はいつも通り武器を構えている。
その三人に、ゆらゆらと揺れながらバンシー達が襲いかかる。
「光の精霊よ、お願い！」
イザークが一番強いと見たのか、それとも最も生命力が高いと言う事なのか三体のバンシーが彼に群がる。
それに気がついた志希は咄嗟に光の精霊に指示を出して、先頭のバンシーに体当たりをさせる。
その攻撃にバンシーは悲鳴を上げ、光の精霊が当たった場所を掻き毟る。
同時に光の精霊の実体化が解け、消える。
最初に攻撃を喰らったバンシーに、アリアが次いで呪文を唱える。
「小さき雷よ！」
アリアの指先から迸る雷光は前衛を避けてバンシーに当たるが、大した威力がなかったからか呻いただけだ。
それに舌打ちをしつつ、イザークとカズヤ、ミリアは攻撃を受けたバンシーへと攻撃を仕掛ける。
二人で倒しきれないのであれば、早々に数を減らした方が有利になるからだ。
無論、その間にバンシーから攻撃を受けるのは必至だ。

しかし、攻撃される事を恐れていては何も出来ない。
そんな気迫を感じさせながら、イザークがダメージを負っているバンシーに大剣を突き刺す。
それだけでバンシーは声なき断末魔を上げ、霧散して行く。
カズヤとミリアは霧散したバンシーを通り過ぎて、そのすぐ後ろに居るバンシーに同時に攻撃を仕掛ける。
カズヤの長剣はバンシーの胴を深々と切り裂き、ミリアの大鎌はその首を薙ぐ。
胴と首を斬られたバンシーは、黒い涙を散らしながら霧散して行く。
だがその後ろに居たバンシーはカズヤとミリアをすり抜け、真っ直ぐにイザークへと手を伸ばす。
冷たく枯れたその手は生命を寄こせと言わんばかりに大きく開き、咄嗟によけようとしたイザークの腕をがっしりと掴む。
「っ！」
小さく呻きながら顔を歪め、イザークはその手を振りほどく。
見た限り外傷も無く、服も破れていないのだがほんの僅かだけ彼の腕が震えている。
そして最後の一体は大きく腕を広げ、大気の霊気を吸い込む様な仕草をする。
それを見ていた志希は思わず大きな声で叫ぶ。
「気をつけて！」
志希の警告と同時に、この世の者ではない叫びが周囲に響き渡る。
びりびりと鼓膜ではなく魂を震わせ、恐怖心を呼び起こし増大させる。
志希は青ざめ、震えながら必死で恐怖に耐える。
精神体でこの叫びを聞いた時、恐怖を堪えることなど出来なかった。
精霊達には効果がなくとも、精神体の志希には絶大な効果がある攻撃だったのだ。

あの時の様な恐慌が身の裡で鎌首をもたげ、暴れ始めようとする。
だが、今は精神だけではなく肉を身に纏っている。
それが志希の精神を護り、恐慌を抑え悲鳴に耐えさせているのだ。
しかしそれでも、志希の呼気は恐怖で荒くなる。
それに呼応して風の精霊が叫び続けるバンシーに真空刃をぶつけ、悲鳴を止ませる。
志希は脂汗を掻きながら、思考で風の精霊に礼を言って動く。
「魔力よ集え、我らを護る強固なる鎧となり凝れ！」
バンシーを倒すのではなく、アリアが張った精神を防御する魔術より強力な魔術を織り上げ発動する。
この土壇場に来て、志希の知識から精神と体を守る上位魔術が浮かんで来ていたのだ。
魔力が集い、虹色の光を放ち全員の体に一瞬まとわりつく。
ただそれだけの様に見えるが、この魔術の効果は魔力により魔法や精神、そして物理的な攻撃の威力を削ぐ事が出来るものだ。
この魔術を見たアリアは一瞬動揺するが、直ぐに気持ちを立て直し続けて詠唱する。
「集え魔力よ、炎の裁きを我が敵に与えよ！」
叫びを上げたバンシーに魔力が凝縮し、炎となって炸裂する。
バンシーは苦痛の悲鳴を上げて身悶えしているが、炎はしつこくバンシーに纏わりつき離れない。
その間にイザークは、無傷のバンシーに向け両の手で大剣を振りおろす。
袈裟がけに斬られたバンシーは恨みの声を上げるが、直後にカズヤに攻撃されて霧散し、炎を纏うバンシーは駆け寄ってきたミリアの大鎌の一薙ぎで姿を維持できずに、消滅する。
バンシー達は全て霧散し、霊気として周囲に漂っている。
それを見ていた志希は、何とか呼吸を整えようと深呼吸をする。
「イザーク、手当てをしましょう。バンシーの攻撃は生命力を直接奪うから、今体がだるい筈よ。叫びも聞いているから、精神的にも

辛いでしょう？」
ミリアは終わるなりイザークに問いかけ、近づいて行く。
イザークは若干顔色が悪く、ミリアの提案に無言で頷く。
志希もまたイザークの側へ行こうとするが、アリアがそれを止める。
「シキさん、先ほどの魔術は何ですか？　わたしの知らない物です！」
目をきらきらと輝かせ、アリアは志希に詰め寄る。
「え……っと？　補助の魔術で、魔法や精神、物理的な攻撃の威力を軽減してくれる物なんだよね」
志希の説明に、アリアはますます目を輝かせ声を上げる。
「凄い！　是非教えてください！」
アリアの喜びようから、この魔術は失われたモノであるのが容易に分かる。
腰が引けた状態で頷き、アリアに魔術構成と呪文を教えようと口を空けた瞬間。
「気を抜くな、皆構えておけ！」
と、カズヤの鋭い警告が響いた。

第六十話

カズヤの声に思わず顔を上げた志希は、ざっと自分の血の気が引く音が聞こえた気がした。

霊気が凝る真っ暗な闇の中から、音も無く闇と同じ色の金属が見えたからだ。

ぬらりと粘着質な光を放つ金属の形は、手。

そして手から腕、肩、体と闇の中から姿を現す。

霊体ではなく実体を持つその姿は、全身を闇色の鎧を纏った騎士であった。

だが、普通の騎士と違うのは肩から上がない事と、本来そこにあるべきものが左手で小脇に抱えられている事だ。

ゆっくりと右手を下ろし、左手の腰に差してある漆黒の鞘に差してある漆黒の柄を掴む。

そのまま金属同士がこすれ合う音を立てて、すらりと剣が抜かれた。

柄から投信まで漆黒に染まり、滑っているような光沢を持つバスタードソードだ。

物凄い威圧感に志希が喘ぐように息をすると、首のない騎士の横にもう一体首のない騎士が現れた。

どちらも濡れた様な光沢を持つ漆黒の鎧と、漆黒の剣を持っている。

小脇に抱えられた首は憤怒の表情を浮かべ、五人を睥睨している。

アリアは杖を翳し、何時でも呪文を構築できるように精神を集中させる。

イザークは素早く立ち上がって大剣を構えており、ミリアはその隣で大鎌を握りながらイザークを癒している。

イザークよりも前に立つカズヤは長剣を構え、油断なく首のない騎士を警戒しながらほんの少しだけ後ろに下がる。

一人突出していると、危ないからだ。
同時に、イザークとミリアを護る立ち位置でもある。
癒している最中に、攻撃を喰らってはたまらない。
じりじりと、緊張感が増して行く。
その最中、イザークがミリアにもう大丈夫だと手だけで示し、立ち上がってカズヤに声をかける。
「もう大丈夫だ」
この言葉に、前方を警戒しながらカズヤは立ち位置を変える。
イザークの邪魔にならない様に、離れる。
ミリアもイザークも獲物が大きい為、近くに居ると斬られる可能性があるからだ。
横目でそれを確認したイザークは、洞窟の奥に向けて声をかける。
「出て来い」
端的な命令に、志希は思わず怪訝そうな表情を浮かべる。
その彼女に、ミリアが説明する。
「そこの霊気の壁の向こうに、人の気配がするわ。生きているか死んでいるかはちょっと分からないけれど……十中八九、原因である神官だと思うわ」
ミリアの言葉に、くっくと笑う声が響く。
「エルシルの神官戦士がご一緒とはまた、面白い組み合わせですね」
そう言いながら現れたのは、不死者に恩寵を与える者の聖印を縫い込んだ真黒い法衣を着た人物だった。
さらさらと流れる、美しい金の髪。
綺麗な卵型の小さな顔と、優しげな面差しが美しい女性だ。
志希が見た時は全身ローブで覆い、顔立ちも体型も見えなかった。
なので、今目の前で貴族然とした美しい女性が、不死者達を作り出した小神の神官に見えず戸惑ってしまう。
「アンデッドキラーならば、神殿と定めたこの場所の霊気が濃い事がお分かりになりますでしょうに」
優雅に口角を上げ、嫣然と微笑む神官。

サファイアによく似た青い瞳が、ゆっくりと細められる。
「それで、わたくしの可愛いバンシー達を霧散させた貴方方は何のご用ですか？」
そう、まるでお茶に誘う様に軽く問いかけてくる。
「言わずとも分かっている筈だ」
イザークが切り返すと、神官はおっとりと首を傾げ苦笑を零す。
「申し訳ありませんが、本当に分からないのです。一応、人目に付かぬよう配慮して神殿を築き結界を張ったのですが、それが悪いと言う事でしょうか？」
何でもない様に問いかけてから、ああと手を打つ。
「こちらに来る途中、結界を作る為に必要であったリビングデッドが何体か潰れましたので、こちらの森で補充させていただいたのですがそれがいけない事でしたか？　他には、バンシーを作る為に森近くに住んでいた女性がちょうどよく悲しみに暮れていたので殺しましたし、あと他にも……」
さらりと、天気の話をするように人を殺し穢した事を話す美しい神官。
志希は神官のその姿に背筋を慄かせ、吐き気を覚える。
言葉が通じていても、意味が通じていない。
人間と話をしている筈なのに、目の前の美しい女性がどうしても人間に思えない。
そんな気持ち悪さに襲われているのは、志希だけではない。
カズヤは顔を顰め、ミリアは憤怒で大鎌を持つ手が震えている。
イザークはただ静かに神官を見ていて、アリアは志希と同じ様に血の気が引いている。
「それだけの事をしたんだったら、オレらが此処に来たのは何故か分かってんだろう？」
カズヤの問いかけに、おっとりと神官は微笑む。
「言われてみれば、そうですわね。わたくしを捕らえるのが、目的ですか？」

「ええ、大人しくお縄についてちょうだい」
ミリアの言葉にころころと神官は笑い、優雅に一歩前に踏み出す。
その姿に、こちらの要望を聞いたのかと志希が思った瞬間。
「申し訳ありませんが、お断りさせていただきますわ。わたくし、どうしてもやりたい事がございますので……皆さまには、その為の礎になっていただきます」
にっこりと微笑み、腰に下げていた白い枝の様な物で装飾された杖を振りかざす。
「さぁ出番ですわ、わたくしの騎士たち！　こちらの哀れな冒険者さん達を、あなた達の仲間にして差し上げましょう！」
高らかに宣言する様に首なしの騎士たちに命じ、次いで小さく呪文を唱え始める。
命じられた二体の首なし騎士は剣を構えて駆けだす。
「魔力よ集え、我らを護る強固なる鎧となり凝れ！」
先ほどと同じ魔術を起動し掛け直す。
かけてから少々時間が立っている為、魔術が切れている可能性があったからだ。
同時に、アリアも呪文を唱え始めている。
「集え集え、炎の力、風の力、雷の力。我が敵を撃ち果たせ！」
豪っと炎が逆巻き、二体の首なし騎士を燃え上がらせる。
炎は風に煽られ、パチパチと発光している。
しかし、その炎を先頭に居た首なし騎士が剣で断ち割り、残り火を纏いながら真っ直ぐにイザークへと突っ込んでくる。
もう一体はミリアの方へと駆け、その剣を振り上げる。
ミリアは剣の軌道を読んで二歩ほど後ろに下がるが、剣圧で法衣が切れる。
イザークは真っ直ぐに刃先を向けて突撃してくる姿をみて、冷静に大剣で下から弾き体勢を崩させる。
此処で横に避ければ、志希達の方へと向かって行くのが目に見えていたからだ。

体勢が崩れた首なし騎士へ、イザークは追撃する。
剣を弾いた大剣を、そのまま勢いよく胴へと振りぬく。
物凄い金属音を響かせ僅かに鎧をへこませるが、それだけだ。
イザークは直ぐにその場を離脱し、頭上から振り下ろされる剣を避ける。
その事に怒っているのか左手に抱えられている首は雄叫びを上げ、更にイザークへと攻撃を仕掛ける。
その間にカズヤは素早く移動し、ミリアを敵視している騎士へと切りかかる。
だが甲高い金属音を響かせ、長剣は弾かれてしまう。
「かってぇ！」
思わず文句を叫ぶが、直ぐさま間合いを取って鎧から離れる。
丁度カズヤが切りつけた部分に、ミリアが大鎌を振りおろしているからだ。
「せい！」
気合も体重も乗った一撃だが、やはり鎧に弾かれてしまう。
その事に顔を歪め、間合いを取りながら呻く。
カズヤとミリア、それぞれが一撃を入れているのに全く効果がある様には見えない事にいら立っているのだ。
「ミリア、もう一度武器の祝福をし直した方がいい。相手はアンデッドなんだから、効果が無い筈ない！」
志希の言葉に、ミリアは頷き小さく祝福を再度起動させる合言葉を呟く。
それと同時にアリアが呪文を唱え、魔術を編む。
「雷よ、天より下りし大いなる力を我が敵に示せ！」
魔術が完成すると同時に、物凄い轟音を響かせて雷が二体の首なし騎士に当たる。
雷によって鎧の中の肉体と、左手に抱えられている首から煙が吹きあがる。
それなりのダメージは与えられたようだが、二体の騎士の動きは

変わらない。
痛みさえ感じないアンデッドなのだから、動きが鈍る事がないのだ。
イザークは風を切りながら振り下ろされる剣を受け流し、反撃をするが強固な鎧はへこむだけだ。
ミリアとカズヤの方は、表面に傷をつけているだけの様な状態で、中々決定打を与えられずにいた。
「さすがわたくしの騎士、時間を見事稼いでくれましたね」
長く詠唱していた神官はおっとりと微笑み、手にしている白い枝の様な物を束ねた杖を振る。
「我が祝福を受けし悲嘆に暮れし女よ、我が命令に従いここに参じよ」
神官の詠唱が終わると、嘆きの声を上げながら先ほど倒したバンシーの一体が現れる。
霧散し、浄化を待つ魂を再び使役したのだ。
志希は彼女を止めなくては、倒したバンシーを全て復活される事に気がついた。
それを皆に言おうとして、止まる。
言った所であの神官の元へと移動すれば、志希もアリアも無防備になる。
イザークは現在一人で首なし騎士を足止めしているが、ミリアの方はカズヤと二人でなくては辛そうだ。
ならば、後衛がするしかないとは思うが、前衛のフォローをしつつ奇跡を邪魔するのは難しいだろう。
再びバンシーを使役する為の呪文を唱え始めた神官を見ていた志希は、手にしている長棍をきつく握りミリアに声をかける。
「ミリア、動きながら場の浄化は出来る!?」
唐突な問いかけに、ミリアは首なし騎士の攻撃を避けながら無理だと返す。
「全身全霊でエルシル様に祈らなくては無理！」

ミリアの言葉にかぶさるように、バンシーの精神を削る叫びが響く。
志希は一瞬で全身に冷や汗をかき、湧き上がる恐怖に耐えながら命じる。
「風の精霊、火の精霊、お願いだからバンシーをどうにかして！」
悲鳴を聞きながらでは、魔術を使う為の瞑想に志希は入れない。
なので、精霊達にバンシーの排除を頼む。
その願いを受け取った風と火の精霊が嬉々として、その願いを叶えるべく動く。
バンシーの胸に炎がともり、逆巻く風が一瞬にしてそれを劫火へと煽りたてる。
炎の竜巻が天へと昇り、一瞬にしてバンシーを焼きつくした。
それに驚き、神官の詠唱が止まる。
この隙を見てとったアリアは、高速詠唱を始める。
「魔力よ、冷たき刃で彼の者を穿て」
短い呪文に凝縮したその魔術は、薄い氷の刃を幾つも作り、攻撃するものだ。
薄い氷の刃はキラキラと光を反射しながら、神官へと飛来する。
それを見た神官は咄嗟に短い言葉を放つ。
「力よ！」
ミリアが以前使った、一音で発動する奇跡だ。
それが飛来する氷の刃をいくつか壊すが、それだけだ。
残った氷の刃が神官の腕を、体を、顔を傷つける。
宙に舞う金の絹糸のような髪と、血。
それを目にした美貌の神官は、ゆっくりと切られた頬に指を這わせる。
そしてその指を見て、うっとりと口角が上がる。
「あぁ……わたくしの血は美しいですわ。美しい顔に美しい血が流れるのは……とても美しいとは思いません事？」
夢を見るように神官は呟き、ゆらりとアリアを見る。

美しい顔に狂気じみた笑みを浮かべ、己の血を付けた指を彼女に指す神官。

「けれど、傷を付けた贖いはしていただきますわ。我が神よ、彼の者に傷を。我には治癒を」

神官の言霊と同時に、アリアの全身に鋭い痛みが走る。

痛みに慣れていないアリアは小さく呻き、体をよろめかせる。

一方神官は、アリアの氷刃によってつけられた傷が見る見るうちに癒えて行く。

邪悪なる奇跡により、神官の傷がアリアに擦りつけられたのだ。

志希は咄嗟にアリアに声をかけようとするが、それよりも早く首なし騎士と戦っているイザークが指示を出す。

「シキ、バンシーが来たら真っ先に焼き払え。それ以外は、アリアと共にこちらの援護をしろ」

「っ、はい！」

志希は大きく返事をして、それぞれの戦況を見る。

イザークはひたすら、首なし騎士の鎧の同じ部分に大剣を叩きつけるのを繰り返している。

ミリアの方は大鎌に付与されている祝福の力で攻撃を繰り出せば、鎧に遮断されながらも中の体の方にダメージを与えていた。

イザークが相手をしている騎士よりも動きが悪くなり、小脇に抱えている首が苦悶に歪んでいる。

その間も、カズヤが牽制してミリアが攻撃をするというコンビネーションで攻撃して行く。

だがそれを見ていた神官は、楽しげに笑う。

「ふふ、わたくしの騎士たちはとても強くてよ？　エルシルの神官が居る事で辛うじてダメージを与えられているだけですし、時間の問題ですわね」

そう言いながら、手にしている杖を振りかざす。

「さぁ、我が神よ御照覧あれ！　我が神を虐げし豊穣神の信者を叩きつぶし、我が下僕にして見せましょう！」

高らかに勝利を宣言するが、その瞬間。
イザークが思いっきり横薙ぎに大剣を振り、先ほどから繰り返し攻撃を仕掛けている場所へと叩きつける。
耳障りな音を立て、金属が金属を切り裂く音が響く。
「ぬぅぁぁあ！」
イザークが気合の声を上げ、鎧と中の体を断ちながら大剣を振りぬく。
強靭な鎧の断面から腐った血を捲き散らし、首なし騎士の上半身と下半身が別れて行く。
驚愕に目を見開く首にイザークは大剣を付きたて、断ち割りながら驚愕している神官をみる。
「アリア、そっちを援護しろ。シキは俺の援護だ」
ゆっくりと腐り崩れゆく首なし騎士に目もくれず、イザークは神官目がけて駆けだす。
志希は精霊に呼びかけ、願う。
「闇の精霊、闇に潜む恐怖を彼の者に与えよ！」
志希の呼びかけに闇の精霊が神官を包み込むが、直ぐに振り払われる。
そこにイザークが大剣を袈裟がけに振り下ろすが、神官はそれを必死の形相で避ける。
「デュラハンを一人で両断するアールヴなど、聞いた事ございませんわ！」
必死で間合いを取りながら、神官は思わずと言った様に叫ぶ。
しかし、イザークはそれを許さず大股で間合いを詰め、大剣を振るおうとする。
「障壁よ在れ！」
手を前に突き出し、叫ぶ神官。
イザークはその神官に大剣を横凪ぎに振るが、何も無い空間で甲高い金属音を立てて止まってしまう。
イザークは片眉を上げるが、神官は早口に呪文を唱える。

「力よ！」
間合いを取る為に目に見えぬ衝撃を与える奇跡でイザークに攻撃を仕掛け、後ろに下がる。
イザークは一瞬ぐらつくが、それだけだ。
ほんの少しの隙を作る事しか出来ない。
それに気が付いている神官はじりじりと後ろに下がり、洞窟の入り口近くへと移動していた。
志希はそれに気が付き、はっとした表情を浮かべる。
洞窟の中に入らせてしまえば、そこはもう神官の領土だろう。
何が仕掛けられているか分からないし、下手をすれば大きな怪我を負うかもしれない。
そう思った瞬間、志希は願う。
「土の精霊達よ、お願い！」
願いと言葉に呼応し、土の精霊達は神官の背後にある洞窟の入り口を一瞬で頑強な土で出来た壁を作り上げ、中に入れない様にしてしまう。
神官はその事に驚き、次いで美しい顔を歪める。
「中々、やりますわね……」
呪詛を吐くかのような低い声音で呟き、神官はじりじりと周囲を見渡す。
逃げ道を探しているのか、それとも状況を打破すべき手段を探しているのか。
むしろ、両方であろう。
神官にとって頼みの綱である首なし騎士の一体はイザークに破れ、一体はミリアとカズヤ、アリアの三人に足止めされている。
退路は断たれ、目の前には首なし騎士を倒したイザークと志希が居る状態だ。
まさに進退窮まれりと言った状態の神官は、口を開く。
「見逃してくださいません事？」

第六十一話（前書き）

グロテスク注意

第六十一話

神官の突然の言葉に、志希は思わずきょとんとしてしまう。
しかしイザークは油断なく大剣を構えながら問いかける。
「ここの調査をギルドマスターから受けている。大人しく捕まるのであればこれ以上の戦闘はせんが……」
「嫌ですわ。わたくし、この美しさを永遠にとどめる為の研究をしている最中なのですから。捕らえられてしまえば、研究を続けることはできませんでしょう？」
イザークの提案に、神官が即答する。
そしてゆっくりと、花の様に美しいかんばせに妖艶な笑みを浮かべてイザークを見つめる。
「わたくし、あなたの様に逞しく美しい殿方を欲しておりましたの。わたくしの研究が完成すれば、今以上の力を手に入れる事も夢ではございません。ですから、わたくしの配下に加わってくださらないかしら？」
己の美しさを知っている神官はそう、艶やかに笑う。
清楚なその笑みは、男であれば誰でも見惚れるほど美しい。
それを見た志希は、胸が掻き毟られるような痛みを感じた。
可憐な花の様に美しい女性からあのように微笑まれれば、心が動くかもしれないと思った瞬間、思わず叫ぶ。
「イザーク！」
迸る様に志希の唇から出た声は酷く切羽詰まっていて、まるで子供が親に縋っているかのようだ。
イザークは志希の声が聞こえているが、顔を見る事なく口を開く。
「どの様な研究だ？」
平素と変わらない声音での問いに、志希の気持は焦る。
彼が自分達を裏切る筈がないと分かっていても、じりじりと焦げ付くような痛みを胸に感じる。

神官はイザークの返答に微笑み、答える。
「上位の不死者となる研究ですわ」
ゆったりとした動作で姿勢を正し、構えを解く。
「上位と言えばヴァンパイアを思い浮かべましょうが、そうではございませんの。ヴァンパイアさえ従える事が出来ると言う、幻の不死者がいると伝承には書かれております。その幻の不死者となる為に、数多の人間の魂を使い研究を重ねる必要があるのですわ。この研究を完成させた際、わたくし一人だけではなく美しい殿方が並べば更に完成されたモノになると思いますの」
優雅な動作でさぁと、一歩前に出る神官。
「わたくしと、ご一緒してくださいますでしょう?」
謳う様に誘いかける声に、志希はイザークの名前を呼ぼうとするが出来ない。
言葉が喉の奥に引っ掛かっているかのようで、出てこないのだ。
精霊達に指示を出そうにも、何をして良いのかも全く分からない。
その時。
「馬鹿じゃねぇ? イザークがそんなもん欲しがるタマかよ」
と言う、心底相手を侮蔑したカズヤの声音が割り込んでくる。
気が付けばもう一体の首なし騎士は倒れ、カズヤが志希の隣に並んでいた。
「んでもって、シキも変な心配すんな。オレ達があいつ倒すまでの時間稼ぎだったんだからよ」
そう言いながら、カズヤはポンっと志希の頭を撫でる。
「イザークが女の色香に惑うなんて、想像できないわ」
「同じくです。それに、イザークさんは自分で手に入れた力じゃないと信用しなさそうですし」
後ろからミリアとアリアが追い付き、独り言とも付かない言葉を呟きながら神官を見ている。
イザークは三人が合流したのを気配で分かったのか、肩越しに振り返り小さく笑う。

まるで、志希を安心させようとしているかのようだ。
その事に酷く安堵して、志希はほっと肩の力を抜く。
カズヤはその志希の背中を一つ叩いて気を抜くなと無言で告げ、イザークよりやや離れた所に立つ。
逃がさない様に、逃げ道を塞ぐためだ。
ミリアも素早くカズヤの反対側に立ち、全ての退路を塞ぐ。
神官は顔を歪め、まんまと時間稼ぎにはまった事に悔しげな表情を浮かべている。
「なぜ、分かってくださいませんの？　あなたはアールヴであるから？　それでも、重傷を負えば死ぬのですのよ！　上位の不死者となれば、下手な傷などでは死ななくなりますわ。本当の永遠を、美しいまま生きる事が出来るというのに！」
イザークだけではなく、この場にいる全員を詰るように神官は怒鳴る。
「わたくしの研究は、美しいもの全てにとって必要な研究ですわ！　ですから、そこを退くのです！」
美しいかんばせに狂気を乗せながら、神官は命じる。
しかし、誰一人として道を空ける素振りも見せずに身構えている。
「貴様の勝手な妄想には飽き飽きだ、大人しく縄につけ」
淡々と神官に向けてイザークは告げ、ミリアとカズヤは油断なく構えている。
変な素振りを一瞬でも見せればすぐに取り押さえるか、切り捨てられるようにという配慮だ。
神官は現状に怒りに顔を歪めていたが、ふっとその表情が変わる。
柔らかく、儚げな微笑みを浮かべゆっくりと背中を土壁に預ける。
「こうなっては、仕方がありませんわね……」
「やっと諦めてくれたのかしら？」
神官の言葉にミリアが問いかけると、彼女はゆっくりと頷く。
「ええ、諦めましたの」
そう言いながら、手にしている白い杖を地面へと落とす。

乾いた音を立て、転がった白い杖。
神官はそれを見降ろしながら、言葉を紡ぐ。
「わたくしの崇高なる想いを分かっていただくのを」
同時に、白い杖を神官は踏み砕く。
枯れ木が折れる様な音を立て、砕け散る白い杖。
すると、そこから白い靄の様な物が立ち上り神官の体にまとわりつく。
神官はその白い靄の様な物を愛おしげな表情で受け入れながら、熱に浮かされているような表情で高笑いを始める。
「十分な魂は手に入れられませんでしたが、仕方がありませんわ。今ここで、わたくしの研究は実を結ぶのです！」
神官の宣言と同時に、白い靄が彼女の体に吸い込まれるようにして消える。
「何て事を！」
ミリアが怒鳴り、大鎌を構える。
志希もまた、あまりのおぞましさに体を震わせていた。
先ほどの白い靄は、大量の人の魂だったのだ。
恐らく、儀式であの白い杖に大量の人の魂を蓄え圧縮していたのだろう。
そして神官は、その魂を自分の中へと取り込んだのだ。
人の身で在りながら、魂を喰らうと言うおぞましい所業を平気でやってのけた事に志希も身震いをしてしまう。
そんな志希とミリアを嘲笑うように、神官はうっとりと笑う。
「わたくしの美しさの為ですもの、皆さん喜んでその魂を差し出してくださいましたわ……さぁ、あなた達の魂もわたくしの為に差し出していただきましょう！」
そう言うや否や、神官は身を低くしてイザークに飛びかかる。
イザークは冷静に神官に向けて大剣を突き出すが、彼女はあろう事かその大剣を片手で受け流しもう片方の手でイザークの喉へと掴みかかってきた。

素手で在りながらその様な事をするとは思わず、イザークは虚を衝かれるが体の方は反応していた。
腕から逃れるために腰を落とし、足払いをかける。
神官は避ける為に跳躍すると、ミリアがそのガラ空きの胴を大鎌で薙ぐ。
かなりの力で振りぬかれた大鎌の刃に当たり、神官が吹き飛ばされて木に背中から叩きつけられる。
すかさずカズヤが追撃に行くが、人間とも思えぬ動きで神官は素早く立ち直り間合いを取る。
大鎌に斬られた胴部分のローブは切れているが、その下の傷は見る見るうちに癒えて行く。
「くふふふ……どうですか？　わたくしの研究成果は。あなた達など今のわたくしの足元にも及ばぬ虫けら同然」
陶酔した表情で笑い、神官は五人を見回す。
「さぁ、わたくしを倒して御覧なさい！　出来なければ、あなた達がわたくしの糧となるだけですわ！」
叫ぶや否や、カズヤに飛びかかる神官。
先ほどまでとは全く違うその動きに、彼女がもう人を止めているのが分かる。
志希は喉を競り上がって来る吐き気と嫌悪に青ざめながら、神官を睨みつける。
今まで人間である彼女を害する様な術は、無意識に使っていなかった。
いや、人型である時点で大きな怪我を負わせるようなことはしたくなかったのだ。
だがしかし、手を拱いていては皆が傷つけられる。
そう、ようやく悟ったのだ。
先ほどの闇の精霊にしても、恐怖を与えるだけの術を行使した所で狂人であろう神官には効果がない。
なれば、心に湧く嫌悪感、忌避感を制してでも相手を害さなくて

はいけないのだ。
志希の脳裏には、初めての魔獣討伐の際に己を護って大きな怪我を負ったイザークの姿が浮かんでいる。
また同じ過ちを犯さぬ為に、志希は腹をくくった。
「風の精霊よ！」
志希は叫び、神官を傷つける為に願う。
志希の決意を表す様に、風の精霊達は鋭い風の刃を作り出し神官の膝下を斬りつける。
余りにも鮮やかで、獰猛なその刃は斬りつけたその場所から足を断ちきっていた。
「ぐあぁ！」
断ちきられた痛みに悲鳴を上げ、神官はその場にどうと倒れる。
だが直ぐに体を起こし、神官はにたりと笑う。
「痛みがあるのは、嫌な事ですわね。ですが、わたくしはもう人じゃございませんのよ！」
丁度志希が断ったその場所からみるみる骨と筋肉が伸び、足を再生させて行く。
しかし、それを待つ程呑気な人間はこの場に居ない。
「誰が待つかよ！」
カズヤは駆け寄りながら長剣を振りかぶり、神官の肩口へと斬りかかる。
神官はその攻撃をまともに受け、痛みに顔を歪める。
切れ味が上がる魔術を付与されている長剣だと言うのに、与えた傷はほんの僅かなモノだった。
カズヤはそれに舌打ちをしつつ間合いを取ると、入れ替わるようにイザークが神官へと大剣を繰り出す。
先程よりも更に速く、鋭く剣先を真っ直ぐに突き出す。
懲りもせずに繰り出された同じ攻撃を嘲るように嗤いながら、神官は真っ直ぐにイザークに駆け寄る。
「わたくしを馬鹿にした罪を、贖っていただきますわ！」

叫びながら、神官はイザークの大剣にを避ける様子も無く腕を伸ばす。

相討ちか玉砕覚悟と言ったその行動はしかし、今の神官にとってはある意味有益だ。

怪我をしても瞬く間に癒え、痛みはあってもそれを我慢できる程の精神状態だからだ。

普通は我慢できる筈は無いのだが、人以外のモノに変質してしまっている神官には常識が通用しないのであろう。

イザークの大剣の先が吸い込まれるように神官の胸へと刺さり、彼女の伸ばした手は本来なら届かない。

しかし、神官は愉悦に歪んだ表情を浮かべ、肉と筋が千切れる音を立てながら真っ直ぐにイザークの喉を目指す。

おぞましい特攻をかける神官に志希は咄嗟に叫ぶ。

「土の精霊よ！」

土の精霊は地面から土で出来た手を伸ばし、がっしりと神官の足を掴み止めようとする。

だが。

「邪魔ですわ！」

怒声だけで、神官は精霊の拘束を振りきってしまう。

しかしイザークには一瞬の拘束だけでも十分だったようで、驚きからすぐに立ち直り大剣を地面に叩きつける動きに変える。

ごりごりと骨を断ち肉を千切れさせる音を立てる大剣を忌々しげに見つめながら、神官はそれを掴む。

「流石、アールヴの戦士ですわ。この強靭な肉体を少しずつ砕き、斬り裂き、この大剣を自由になさろうとするのですもの。でも、わたくしの方があなたよりもずうっと強いのですのよ！」

哄笑を上げ、神官は大剣の動きをやすやすと止める。

イザークはこの事に小さく舌打ちをして、どうするかを逡巡した瞬間。

「炎よ在れ！」

と言うアリアの声と同時に、大剣が炎を纏う。
アリアが大剣の刀身に炎を付与し、威力を増す魔術を使ったのだ。
同時に神官の肉と臓器が焼かれ、彼女は思いもよらぬ激痛に顔を歪める。
神官の大剣を握る力が緩んだ瞬間。
「はぁ！！」
ミリアの掛け声が迸ると同時に、鋭い大鎌の刃が神官に向かって振り下ろされる。
エルシル神の加護を纏う大鎌の刃はやすやすと神官の肉と骨を断ち、腕の片方を肩口から斬り落とした。
余りにも鮮やかな斬り口に志希は思わず悲鳴を上げそうになるのを手で押さえていると、ミリアが険しい表情で口を開く。
「その体は、殆ど不死者になっているのね。エルシル様の加護では人の体をこんなに綺麗に斬る事は出来ないもの」
ミリアの言葉に、神官は忌々しげに顔を歪める。
肩口から血が噴き出し、物凄い血の臭いをまき散らしながら神官は口を開こうとする。
しかし、ミリアが切断した腕の反対側に回ったカズヤが長剣を振りかぶり、未だ大剣を持ったままの腕に刀身を叩きつける。
先程の様に浅く斬りつけるだけだと思われていたその刃は、ミリアの大鎌の刃と同じ様にその腕を鮮やかに斬り落とす。
「なっ！？」
思わず驚き、声を上げた神官。
カズヤの長剣は、いつの間にかミリアの大鎌と同じエルシルの加護の証しである緑の燐光を纏っていた。
それ故、ミリアの大鎌と同じく綺麗に彼女の腕を切り落とす事が出来たのだ。
神官の腕が無くなった事で解放された大剣をイザークは一息で引き抜き、最小の動きで神官の首を薙ぐ。
虚を衝いたからか、それとも他の理由があったのか。

イザークの一太刀は見事に神官の首を跳ね飛ばした。

第六十二話（前書き）

引き続き、グロ注意だと思います。

第六十二話

後に残されたのは、両方の断面から血飛沫を上げぐらぐらと揺れている人間の体。

そこから少し離れた所に、首の上にあった頭が落ちている。

あまりにも衝撃的なその光景に喉の奥からせり上がる物があり、志希はそれを必死でこらえながら神官の死に体となったそれを見ている。

仲間がやった事は間違っていないと理解しているが、酷い忌避感に苛まされ始めた瞬間。

「あはははははははは!!　わたくしはこれぐらいで死にはいたしませんわ、伝説の不死者となるのですから。たとえ、エルシルの加護があろうともわたくしを止められませんのよ!」

と、頭だけになった神官が笑う。

余りにもおぞましいその光景に、志希は今度こそ堪え切れずにその場に蹲り胃の中の物を吐き出す。

アリアがふらつきながら志希の背中をさすり、無言で気遣っていると更に神官の頭が笑う。

「あら、そこのお嬢さんは人が殺される所を見るのは初めてだったのですか？　随分と箱入りの様ですわね。貴族の娘か何かですか？　まぁ、何にせよ皆さんにはわたくしの下僕になっていただきますのでどうでもよい事ですわね」

神官の首はけたたましく哄笑を上げ、首と両腕の無い神官の体は血をまき散らす音を立てながら動きだす。

胴と首が別れている状態だと言うのに、彼女の意思で動かす事が出来るらしい。

「気持ち悪い……」

志希は思わず呟くと、神官が哄笑を止めぎろりと志希を睨む。

「わたくしの素晴らしいこの体の事を、気持ち悪いですって!?」

ヒステリックな声を上げる首と、物凄い早さで移動を始める胴体。
イザークは胴体の移動を阻止しようと足を狙って大剣を振るい、カズヤとミリアが胴体の前に立つ。
胴体は予備動作一つなく跳躍し、首の側に降り立つ。
「さぁ、元の美しいわたくしに戻るのを見ていなさい！」
神官がそう言うと同時に、胴体部分の両腕が物凄い勢いで生えてくる。
断たれた断面から骨が伸び、筋と腱、肉が骨を覆い最後に皮が被さる。
出来立ての両手はそのまま首を掴みあげると、断面と断面を合わせてつける。
それだけで、神官は先程と同じ人の形へと戻った。
「何ておぞましい……完全な不死者に成っていれば、加護の力で再生を阻害出来る筈なのに」
ミリアは嫌悪と悔しさをあらわにし、大鎌を握りしめて駆けだす。
「気持ち悪いのは同意だな！」
誰にともなく言いながら、カズヤはミリアの後に続く。
イザークもまた追撃をしようとするが、足を止めて志希を見る。
志希はイザークの視線に気がついて顔を上げ、必死の表情で頷く。
「分かってる、大丈夫。頑張れるから」
そう言って、志希はアリアを制して立ち上がる。
ここで蹲って吐いているのは簡単だが、冒険者である事を選んだのだからそれだけではいけない。
いつかは人間や人の形をした怪物たちと戦わなくてはならないのだ。
「……援護を頼む」
志希の意を汲み、イザークはそれだけを告げて神官へと切りかかる。
「アリア、迷惑掛けてごめんね」
「いいえ、わたしも迷惑をかけていますから」

志希の言葉にアリアは微笑み、促す。
「さぁ、人の形をした怪物ですがカズヤさんや姉さん、イザークさんが居るんだから絶対倒せます。頑張りましょう！」
ミリアとよく似た優しげなその笑みに励まされ、志希も思わず笑みを浮かべて頷く。
しっかりと両足を地面に着け、深呼吸をして志希は神官を見る。
支えようとしていたミリアは志希の様子に頷き、少し距離を取った位置に移動し杖を掲げる。
「アリア、今なら強力な魔術を使ってもいけると思う」
カズヤやアリアの刃をくぐり、イザークの大剣を受け流しつつ素手で反撃を繰り返す神官。
自分の身体能力に酔い、本来の戦い方であろう邪悪なる奇跡を使わない今が大きなチャンスだろうと志希は読んだのだ。
アリアは無言で志希の言葉に頷き、杖をゆらゆらと揺らす。
しかし呪文は唱えず、集中しながら大きな魔術を構成して行く。
志希は風の精霊達を使役し、真空の刃を神官へと放つ。
真空の刃はやすやすと神官の体を斜めに断つが、直ぐに傷口がくっつき塞がれる。
「あはははは！　どんな存在も、わたくしを殺すことなんてできないのですわ！　さぁ、大人しくわたくしに喰らわれてくださいな！」
そう言いながら神官はイザークの方へと足を踏み出して、横にいるカズヤへと飛ぶ。
「こなくそ！」
カズヤは突然方向転換した上、一瞬で目の前に現れた神官に驚きながらも長剣を振るう。
しかし神官は身をかがめてそれを避け、カズヤの胴へと手刀を叩きつける。
「ぐはぁ！」
思わず声を上げ、カズヤはたたらを踏む。

そこに神官が下からカズヤの顎先目がけて掌底打ちを繰り出す。
カズヤはそれを何とか避けるが、体勢を崩してしまう。
ミリアはそれをフォローする為大鎌を背中に向けて振るうが横に避けられ、イザークも斬りかかったが受け止められてしまう。
「ああ、折角美味しそうな魂を頂けるはずでしたのに邪魔をするなんて、無粋な方たちですわね！」
神官がそう笑いながらイザーク達を詰ると。
「油断大敵ですよ」
と言うアリアの剣呑な声音と同時に、神官の足元から火柱が立つ。
無言で魔術を構成し、発動させたアリアは脂汗を額に浮かべながら笑う。
「それに何より、多情な女性は嫌われるんですよ？」
イザークを狙っていたと言うのに、カズヤに急に方向転換した事にミリアはどうやら怒りを覚えた様だ。
構築した魔術を極限まで圧縮し、威力を高めた火柱の魔術は神官の体を焼きつくす。
火柱の中から神官の悲鳴が響き、人が焼ける嫌な臭いが立ち込める。
嘔吐を催す臭いに志希は喉を鳴らしつつ、油断なく構える。
上半身を斜めに断ちきられても再生する様な怪物なのだから、油断していては危ない。
ミリアは警戒しながらもカズヤの側に移動し、治癒の奇跡で傷を癒す。
イザークはイザークで、火柱が目の前に炸裂した事に驚きもせず大剣を素早く引いて間合いを取って構えている。
突然立った火柱は、同じ様に突然消える。
中には小さく縮み、炭化した人型が立っているだけだった。
しかし、変化は直ぐに起きる。
ふるりと揺れた人型が膨張し、黒い炭部分が剥がれおち白い素肌を見せる。

焼け落ちた髪は見る間に生え揃い、裸体となった神官の体を彩る。
「酷いですわ、わたくしの大事な神官衣と鎧を焼きつくしてしまうなんて」
嫣然と笑い、神官はミリアを見る。
豊満な体を余すところ無く晒しながら、神官は羞恥する様子も無く構える。
「まぁ、良いですわ。服はあなた達からいただきますので……っ！？」
楽しげに笑いながら強奪すると宣言した瞬間、神官の表情が変わる。
余裕のあった態度と、見下した表情が驚愕に染まっているのだ。
「な、何ですの……？」
神官の呟きと同時に、彼女の腹がぼこりと膨らむ。
「あっ、あああ！？」
驚きに声を上げる彼女の体が、ぼこぼこと蠕動し始める。
まるで、体の中で巨大な何かが暴れまわっているかのようだ。
大きく口を開け、悲鳴を上げる神官。
その間にも神官の股間から腹に掛けて朱色の線が走り、びちゃびちゃとはしたない音を立てながら薄紅色の触手の様な物が飛びだしてくる。
先程見た光景など比ではない程のおぞましさに、ミリアが喉を鳴らす。
「グロいなぁ、おい！」
カズヤはそう叫びながら、自失しかけているミリアの腕を引っ掴み神官から離れる。
イザークもまた、予想できない方向への変化に距離を取り警戒する。
近くに居れば、肉の触手の様な物に絡め取られそうだったからだ。
その間にも神官の体は蠕動し、人の形から離れて行く。
喘ぎ声にも悲鳴のもとれる声はくぐもり、自我がある様には聞こ

えない。
薄紅色をした大量の触手は蠢き、まるで縋る物を探しているかのように木々を薙ぎ倒す。
「一体何が」
アリアは呟き、すっかり薄紅色をした塊になった生き物らしきそれを見る。
「人の身で、人以上のモノになろうとしたからだろう。半ば不死者であったとはいえ、な」
人の身でありながら人の魂を喰らったと言う禁忌を犯したのだから、何があってもおかしくはない。
蠢き、膨張する触手の塊はぞろりと伸びて生きている物を求める。
イザークは伸びて来た肉の触手を切り捨て、アリアとカズヤは避ける。
アリアもまたその場から離れ、肉の触手から逃れている。
しかし、志希は一人その場に立っていた。
目前に迫る肉の触手等見えない様に、じっと金の瞳をその根元部分に向けている。
おぞましい光景の筈なのに、志希の瞳には全く違うモノが見えていた。
苦しみ、悶え、泣き叫ぶ無数の何か。
それは蓄えられ、圧縮された故に人の形を忘れてしまった魂達だ。
同時に、志希はそれを救わねばならないと感じた。
「シキ！」
イザークの声が聞こえるが、志希は返事をしない。
ただゆっくりと手を持ち上げ、首に着けているチョーカーの宝珠部分を指先で撫でる。
「お願い、力を貸して……あの人が行ったのは魂喰らい。世界を循環する流れを吸収し、歪める行い。私達がそれを正しい形に導き、戻すべきだと思うの」
志希の囁きに、宝珠部分が淡く光を発する。

普段は精霊の揺り籠としてしか機能していない宝珠が、志希の『神無の鳥』としての言葉に反応したのだ。
『神無の鳥』は世界の愛し子。
世界は親であるも同然で、世界を巡回する流れは人の血液に相当するものだ。
世界は全てを受け入れるが、世界を枯らす様な存在を『神無の鳥』は赦しておけない。
ふわりと、志希の髪が風も無いのになびく。
同時に志希は己の額が熱を持っているのを感じ、目を閉じる。
志希の熱に反応したのか、触手が一斉に志希へと延びる。
間合いを取っていたイザークは目を剥き、駆け出す。
しかし、距離がある為に間に合わない。
「シキ！」
カズヤの呼びかけと、アリアの悲鳴。
ミリアもイザークに続き、大鎌を手に駆けだしている。
志希はその彼等を一瞬だけ振り返り、微笑む。
閉じていた目は開かれ、甘くとろけた金の瞳を柔らかく和ませる。
同時に触手が志希を覆い隠し、ぐちゃぐちゃと蠢く。
「いやぁぁぁぁ！！」
アリアが悲鳴を上げる中、ミリアが大鎌で触手を切りつける。
イザークもまた大剣を上段から振り下ろして切り裂くが、ぐずぐずと傷口が塞がり全く痛痒を与えていない。
それでもとイザークが大剣を振り被った瞬間、薄紅色の肉の塊の動きが止まり、端から白い光となって分解されて行く。
光は歓喜する様に舞い上がり、空へと昇っていく。
そして、光が消えた後には仄かに白い光を纏う志希が片手を空に伸ばして立っていた。
まるで白い光を送る様に空を見上げ、微動だにしない。
尊く厳かな空気を纏い、まるで言葉をかけられるのを拒絶しているかのようだ。

しかし、それでは何が起こったのか分からないままだ。
「シキ」
イザークが静かに声をかけると、志希は腕をゆっくりと降ろして大きく息を吐く。
それだけで、体に纏っていた白い光は消えいつもと同じ様な雰囲気へと戻る。
「ええっと、事情説明とかは全部後にして今は後始末をしようよ。この奥の神殿にしてるって言う場所も浄化したりとか、色々としないといけないし」
志希は若干気まずそうな表情を浮かべ、振り返りながら提案する。
その言葉にアリアが声を上げようとするが、ミリアがそれを遮るように手を上げる。
「賛成ね。この場所にはまだ、バンシーや先程の首なし騎士の穢された魂の気配がするもの。神殿もろともこの辺りを浄化して、野営の準備をするべきだわ」
ミリアはきっぱりと神官として、また冒険者としてやるべき事だと同意する。
その言葉にアリアが抗議をするように声を上げるが、カズヤもまたミリアに同意する。
「んだな。ここでグダグダ言っても始まらねぇし、さっさとやるべき事をやる方が建設的だろ？　それに……」
「シキ自身、何をどう話すのか考えが纏まっていないのだろうな。それならば、ここで詰問するのではなく野営の時にした方が良かろう」
イザークはそう溜息交じりに言い、不満げなアリアを見る。
「はぁ……わかりました。ではここで少し休ませてください。初めて無詠唱で圧縮魔術を使ったので疲れました」
三対一では勝ち目がないとアリアは渋々と頷き、その場に腰を下ろす。
いつもであればカズヤの側に行くのだが、今日はそれが出来ない

程疲れているのであろう。
志希はいつもと同じで、ほんの少しだけ違う光景を見ながら深呼吸をする。
その間に、ミリアがこの場に留まり続けるバンシーや首なし騎士たちの魂を浄化する為エルシル神への祈祷を始める。
ミリアの良く通る声が酷く心地よく、志希は目を閉じる。
穢れを払われた魂達がもう二度と、利用される事が無いようにと祈りを捧げるのであった。

第六十三話

神官が築いた神殿は、街にあったヴァルディル神殿に処遇を任せる事にした。
その為ミリアは、一先ず場を浄化してから結界を張り、軽く封じるだけの処理を行った。
崩すにしても、ミリア一人では数日かかってしまうからである。
この作業が終わった後は街へと戻る為に元来た道を戻り、昨夜野営をした場所に日が暮れてから到着した。
この場所で再び野営の準備をして食事を取り、食器を片付けて一息つく。
「んで、シキ。あの神官がどうしてああなったのか、説明できんのか？」
不意討ちの様に、カズヤが問いかけてくる。
いつもであればミリアなりアリアが聞いてくるのだが、今日は珍しくカズヤが口火を切った事に志希はほんの少しだけ驚いた表情を浮かべる。
だが直ぐに苦笑を浮かべ、一つ頷く。
カズヤもよほど気になっていたのだろうと分かったからだ。
「まぁ、うん。分かりやすいかは自信ないけど……いい？」
志希の問いかけにカズヤだけではなく、ミリアやアリアも頷く。
イザークは何も言わないが既に聞く体制で、話を始めるのを待っている状態だ。
普段とは少し違う態度の三人と、いつも通りのイザークを見て志希はほんの少しだけ気持ちが落ち着く。
「ええっと、まず……あの神官の人がどうなったかの説明で良い？」
「ええ、お願いするわ」
ミリアの言葉に頷き、志希は言葉を選びながら説明を始める。
「小神の神官さんが何故、あんな姿になったのかって言うと……イ

ザークが言った通り、人の身でありながら沢山の人間の魂を喰らったからなの。しかも、人の形を忘れさせるほど圧縮された魂をね。それは擬似的に魂の力を上げる事になって、魂の器以上の力を与えてくれるんだ」

そこまで話をしてから、志希は一つ息を吐く。

憂鬱そうな表情を浮かべている姿から、あの神官の行いは余程志希にとっては気持ちの良くないものであったのだろうと分かるほどだ。

「だけど、溢れ出る力を制御でき無くなった時点で魂だけじゃなく肉体と自我が崩壊し、人の形を保って居られなくなったの。そして、押し込めていた器が壊れた事で圧縮されていた魂が自由を取り戻し、救いを求めて生きている者に縋りつくこうとしてあの肉の塊が出来たの」

この言葉に、アリアが手を上げる。

「何故、魂の器とか力とかが分かるのですか？」

アリアの素朴な疑問に、志希はうんと頷く。

「私が『神無の鳥』だから、かな」

「種族特性ってやつか？」

「多分それ。それでもって、あの神官さんが目指したのは人工的な『神無の鳥』じゃないかなって思う」

志希の言葉にきょとんとする三人。

イザークは無言でいたのだが、思う所があったのか口を開く。

「魂の器と力、と言う所か？」

志希は余りにも的確な問いかけに思わず目を丸くして、こくりと頷く。

「うん、そう。『神無の鳥』は、魂の器と力が大きく強い人間や亜人が死んで成る種族。神官さんは、生きているうちに魂の器を無理やり広げて力を覚醒させるというやり方で、擬似的に『神無の鳥』になったんだよ」

「それなら、どうしてその力を制御できなくなったのでしょう？」

アリアの突っ込んだ質問に、志希は困った表情を浮かべる。
「私の推測にしかならないよ。それで良いかな？」
「はい」
間髪いれずにアリアは頷き、志希は小さく嘆息を零す。
「死んだりしている筈なのに生き返ったり、何度も体の部位を再生させたりしたからだと思う」
志希の言葉に、きょとんとした表情でアリアが首を傾げる。
「でも、不死者やシキさんの様に『神無の鳥』になった人には普通の事ではないのですか？」
「普通の事と言うには語弊があるけど、まぁ出来る事ではある。でも、元々人間にはそんな事出来ない訳じゃない？　殆ど不死者になっていたり、擬似的な『神無の鳥』になっているのだってかなり無理をしていた筈だよ。水袋に限界以上の水を入れてパンパンにしちゃった所に、針を刺すと破裂する。それと同じ現象が、神官さんに起こったんだよ」
志希の説明に、アリアは何となく納得する。
つまり、刺激を散々与えられたからこそ神官はあのような最後になったのだ。
「それで、私は神官さんを内側から崩壊させた魂を、世界樹の流れに導いただけ。あの触手みたいなのに捕らえられても、私は殺されないって分かってたしね」
『神無の鳥』は、迷子になってしまった魂を世界の根底に流れる河に導く事が出来る。
小神の神官によって歪まされた魂もまた、見方によっては迷子となる。
なので、志希は『神無の鳥』の力を使って道を指し示したのだ。
「そんな事が出来るのなら、何故首なし騎士やバンシーの魂を導かなかったの？」
ミリアの素朴な疑問。
歪まされた魂を導いた後でも、バンシーや首なし騎士の穢れた魂

はその場に残っていたのだ。
「いやだって、私は魂の浄化とか基本的に出来ないもん。歪まされていたり、迷子っだったりすれば導く事は出来るけど、穢れを払う事は出来ないの。それが出来るのは神々か、神官だけだよ」
志希の言葉に、ミリアは納得のいかない表情を浮かべている。
その表情に志希は嘆息し、口を開く。
「基本的に、『神無の鳥』は半端ものなの。浄化とかは神々の力が必要で、神にもなれない私がそんな事出来ないのは当たり前でしょ？」
胸を張った志希の言葉に、ミリアは思わず苦笑を零す。
志希が己の事を話した時に、確かに半端な存在だと言っていた。
志希は飄々とした姿で万能的な働きをするので、『神無の鳥』とは万能なのだと言う思い込みをしていたのだ。
しかし、志希はきっぱりと違うと示し、出来る事と出来ない事がある事を明確に口にした。
ミリアはそれに、安堵したのである。
「ふふ、そうね。人以上でも、神様じゃない。シキはここにいて、人間として一緒に旅をしている仲間だものね」
ミリアの嬉しげな呟きに、カズヤは頷く。
「まぁ、そう言うもんだよな。オレもなんつーか、今回の事で危うくシキを見る目が変わっちまうところだったぜ」
「うわ、酷い」
志希がカズヤの言葉に抗議すると、彼はにやりと笑う。
「冗談だよ、ジョーダン。んじゃま、他になんか聞く事はあるか？」
カズヤは場を和ませつつ、皆の顔を見まわし問いかけるとアリアが挙手をする。
「危うく忘れるところでしたが、あの魔術は何ですか？　わたしの知らない魔術でしたよ」
バンシーとの戦闘の時と、首なし騎士との戦闘の時に志希が発動した魔術。

それを目にしたアリアは内心で物凄く驚いていたのだが、面に出さず冷静なまま戦闘を続行していたのだ。
「あっ、えーっと……精神的な攻撃や魔術、奇跡だけじゃなく物理的な攻撃とかの威力を削ぐ魔力の膜を張る魔術なんだよね。確か魔術名は、虹の……」
「もしかして、虹の煌光（イーリス）ですか！？」
「そ、そう。それ」
驚いた声を上げるアリアに腰を引きながら志希が頷くと、彼女はわなわなと体を震わせる。
「遺失魔術の中でも有名な防御魔術ですよ、それ！」
目の色を変えて興奮するアリアは、がしっと志希の手を掴む。
「古代の魔術師たちが上級魔術師となる時に必須技能とされていた、伝説の防御魔術！　失われて久しい虹の煌光（イーリス）が蘇るなんて……！」
喜びと興奮ではしゃぐアリアの姿は傍から見れば可愛らしいが、目の前にしている志希には正直怖い。
特に乱暴な事をされる訳でもなく、ただ手を握ってぶんぶん振り回されているだけなのだが何となく怖いのだ。
一緒になって喜べるほど志希は魔術には夢中になっていないし、思い入れもあまりない。
ただ、強力な魔術を思い出した際に使えれば便利だというとても適当な理由で習っただけ。
だというのに、アリアには同士と思われているのだろうか？　と素朴な疑問まで浮かんでくる。
「アリア、嬉しいのは分かるけれどシキが困っているわ。すこーし、落ち着いたらどうかしら」
見かねたミリアが苦笑しながらアリアに声をかけ、彼女ははっとした表情を浮かべる。
「ごめんなさい！　わたしったら、はしたなかったですね」
恥ずかしそうに頬を染め、志希の手をそっと離す。
本来この位置にいるのはカズヤなのでは、などと思いつつ志希は

頭を振る。
「い、いや。本当にびっくりしただけなんだよね。アリアがそんなに喜んでくれるとは、ちょっと思わなくて」
「それはもう、喜びますよ！　どんな魔術師も、虹の煌光（イーリス）の魔術構成が分かるかもしれないとなると、目の色を変えますよ！」
この世の魔術師全てがアリアの様に目の色を変えるのであれば、志希としてはこの魔術は使わない方が良いのだろうかとちょっと頭の片隅で考える。
だがしかし、アリアが知らないのであれば教えておかなくては、ヴァンパイアロードとの戦闘の際に困るかもしれない。
万全を期すのであれば、アリアに対して何となく腰が引けていてもしっかりと教えなくてはいけないのだ。
「う、うん。分かったよ。それじゃ、帰ってから魔術構成とか色々と紙に書くね」
「いえ、今ここでどの様な構成をしているのか見せてください！　わたしは魔力が見える魔術を自分に使いますので！」
最早周りが見えていない状態のアリアは、志希にそう言って詰め寄る。
目の色を変え過ぎなアリアのその姿に、志希の腰は更に引ける。
そこで、溜息交じりにミリアが声をかける。
「ごめんなさいね、シキ。幼い頃はこうではなかったのだけれど、魔術バカと言うか……周囲の魔術師たちに感化されたみたいなの」
「そ……そうなんだ」
ミリアの言葉に頷きつつ、志希は顔を引きつらせながらアリアを見る。
「それじゃ、今からやって見せるから準備は？」
この状態のアリアから逃れるには、気が済むようにした方が早いだろうと気が付いた志希はそう問いかける。
「す、少し待ってください！」
アリアは大慌てで呪文を唱え、自身に魔力が見える魔術をかける。

「はい、大丈夫ですよ！」
そう言って、目をきらきらと輝かせるアリア。
以前の引っ込み思案な彼女はどこへ行ったと思いつつ、志希は呪文を唱えながら魔術をゆっくりと編み上げる。
志希の魔術師としての熟練度は非常に低いのだが、“知識”のお陰でそれらをある程度補う事が出来る。
そのおかげで、本来なら使えない筈の高位の魔術をも使う事が出来るのだ。
アリアは食い入るように志希を見つめ、その魔術構成を目に焼き付けている。
魔術を構成し、発動したのを見てからアリアは感嘆のため息を吐く。
「凄く、美しい魔術構成ですね……わたし、頑張ってこれを使えるようになります！」
そう言って、アリアは気合を入れる。
だが。
「気合を入れた所悪いのだけれど、わたし達はもう寝る時間よ。次の見張りの時に練習なさい」
ミリアがそう口を挟む。
「え、えぇ！？」
抗議する様な声を和えるアリアに頭を振り、ミリアはほらっと手招きをする。
この二人はいつも、並んで眠っているのだ。
「見張りはいつも通りの順番だって、決まってるでしょう？　それに、昼間の戦闘でまだ疲れている筈なのだから、しっかりと体を休めなさい」
「……はい」
ミリアに諭されたアリアは渋々と頷き、彼女の隣に外套にくるまって寝転がる。
「それじゃ、一足お先におやすみなさい」

「みなさん、おやすみなさい」
双子の挨拶に三人がそれぞれ返事をすると、カズヤも体を伸ばしてから毛布を片手に少し離れた所に移動する。
「んじゃ、オレも寝る。最後の見張りだからな……出来るだけ寝とかねぇとつれぇ」
「ん、おやすみなさいカズヤ」
「そうか、ゆっくりできるように祈っておけ」
何かあれば起こすとイザークが返事をすると、カズヤは手をひらりと振って毛布にくるまる。
意地悪な言葉の様だが、野生動物や魔獣に襲撃されて睡眠を邪魔される事は往々にしてある事だ。
もっとも、志希が常に精霊で周辺を索敵し、可能であれば精霊にお願いをして動物を他の場所に誘導してもらっているので滅多な事はない。
イザークがいつも通り火の番をしながら周囲に気を配り始めた所で、志希ははたと思いだす。
昼間の戦闘で小神の神官が死んだ事で、リビングデッドがどうなったのかを。
小さく唸ってから、志希はイザークの隣に腰を下ろす。
「あのね、ちょっとリビングデッドがどうなったのか探しに行きたいんだけど、良いかな？」
「……ああ、行って来い」
「ありがとう」
志希の意図を汲んだイザークの返事に、志希は思わず笑顔でお礼を言う。
そのままイザークの隣で意識を風の精霊に重ね、精神が体から抜け出て空を飛翔する。
風の精霊に案内されるままリビングデッドが居る場所へ行くと、固まっていた筈の不死者たちはバラバラに森の中を徘徊し始めていた。

小神の神官が居なくなったため、彼らを縛っていた命令が消えてしまったのだ。
それを見て、排除をするべきかと悩む志希。
しかし、昨夜でリビングデッド達は近くのギルドに任せるという結論が出ていたのを思い出し、取り敢えず彼等が森から出ない様に土の精霊や植物の精霊にお願いをする。
無論、細かく条件を付けるのを忘れない。
リビングデッドに対する敵意を持つ者は阻まない事。
猟師たちは惑わさない事。
魔獣退治で来た者達も惑わさない事。
リビングデッドが全て排除された時点で、これらのお願いは効力を無くす事。
精霊使いには、自分の事を教えない事。
精霊達は、喜色満面で志希のお願いを聞き入れる。
いつもながら無条件で色々なお願いを聞き入れてくれる精霊達に、志希は申し訳ない気持ちになる。
精霊達は、志希に対価を求めない。
だからこそ、申し訳ない気持ちになるのだ。
精霊使いではなく、『神無の鳥』であるからこその優遇。
元々は普通の一般人であった志希には、それが引っ掛かっているのだ。
それ故、どうやってお礼をしようかと悩んでいると精霊達がさわさわと寄ってくる。
ただこうやって志希と遊んだり、触れたりお願いを聞くのが嬉しいと意思を伝えてくる。
『神無の鳥』は世界の子供。
その力に触れるのは心地よく、意識を交わすのは喜びなのだ。
だからこそ、もっと自分達を頼ったり遊んでくれれば、それだけでお礼になるのだから気にしないで欲しい。
純粋な意思に志希は微笑み、頷く。

精霊達の望みを叶えて、自分のお願いを聞いてもらう。
それも立派な対価だと教えてもらったのだ。
ならば、あまり無碍にせずに行こうと志希は心に決める。
精霊達は志希のその思惟に大喜びで、さっそく遊ぼうと誘いかけてくる。
しかし、このまま遊びに出かけるのは流石に人としてどうかと思うので、見張りが交代になったらと約束をして体に戻る。
目を開けて、志希は固まる。
体に戻った瞬間から、がっしりとした腕に支えられているとは思っていた。
だがしかし、まさか抱えられているとは思っていなかったのだ。
「戻ったか」
静かにイザークが声をかけて来たので、志希はこくこくと頷く。
間近にある秀麗な顔に、志希の顔に熱が上がる。
美形は三日で見慣れるとはよく言うが、イザークにはそれが当てはまらないのではないかと志希は思う。
時折表情を変えるのもまた、綺麗で格好いいと思うからだ。
しかし、至近距離でこうして顔を合わせるのは志希にとっては恥ずかしく、まして抱えられている状況などと言うのに免疫は殆ど無い。
ここ最近イザークに抱えられている事が多くても、慣れる事はまず無いと断言できるほどだ。
同時に、こうしていると護られていると何故か実感できる。
イザークは自分達を決して裏切らないし、何があっても大丈夫だという安心感がある。
志希は頬を染めつつそんな事を考えていると、イザークがほんの少しだけ訝しげに眼を細める。
いつもであれば、志希は早々に離れて行くからだ。
それに気が付いた志希ははっと息を呑み、慌てて口を開く。
「……ありがとう」

「いや、気にするな」
志希のお礼にイザークがそう返事をして、そっと彼女の体を抱えていた腕を緩める。
そこから抜け出した志希は、若干の名残り惜しさを感じてますます顔を赤くする。
一体何を考えているんだ、自分！　そう叫んで悶えたい衝動にかられながら、いつもよりも若干離れた場所に腰を下ろす。
イザークは志希のそんな姿に苦笑する様に目を細め、声をかける。
「あまり離れすぎるな」
「うっ……うん」
志希は激しく動揺して頷きつつ、少しだけ距離を戻していつもと同じ場所に座りなおす。
変な意識をしてしまった自分が恥ずかしくてたまらない志希は、現実逃避ぎみに精霊達と交信しながら見張りをするのであった。

第六十四話

行きと同じだけの時間をかけて街に戻り、ギルドマスターに状況を報告した。

話しを聞いたギルドマスターはさっそくヴァルディル神殿に要請をして、神殿の浄化へと向かう事になった。

無論、場所を知っているという事でパーティー内の誰かが道案内をする事になったのは仕方のない事であろう。

ヴァルディル神殿のアンデッドキラー見習いや、鉄の冒険者数名とギルド職員を連れて再び森を往復してきた。

ちなみに、依頼されたのは道案内だけなので大人数で行く必要はない。

戦闘自体はアンデッドキラー見習いの神官や、鉄の冒険者達やギルド職員がするからだ。

ミリアは一緒に行って浄化の手伝いをしたいと言い出し、レンジャーでもあるカズヤは道案内に向いているという事で同行する事となった。

するとアリアも共に行きたいと言い出した事で、結局三人で道案内をする事になった。

結構な大所帯なので志希が同行するのはイザークが許さなかったというのもあり、二人は街で三人が帰って来るのを待つという事にした。

数日後、無事道案内を終えた三人と合流し、一日休養してからフェイルシアの王都を目指して再び出発した。

その後は特に何事もなく、目的地に到着したのは約半月後のエルシル小の月の半ばであった。

本来であればエルシル小の月の頭には到着する筈であったのだが、小神の神官が起こした事件により半月ほど遅れたのだ。

フェイルシアの王都の手前で馬車の駅がある為、そこで降りて志希は口を開けて目の前の城壁を見上げる。
大きな石を積み上げ造られた城壁は、かなりの高さを誇っている。
この城壁はでこぼこした所が見受けられず、表面は平らだ。
長方形になっている石を積み上げて造られたこの城壁は、かなり緻密な計算をされて作られているだろう。
この城壁を見るだけで、フェイリアスとフェイルシアの国力の違いが見えた気がする志希。
「シキ、いつまで見ていても仕方ないでしょ？　行きましょう」
ミリアの言葉に正気づいた志希は頷き、待っている四人と共に歩きだす。
それなりに舗装された道はかなり広く、大きい。
志希は現代以外で見た事のない規模の道路にきょろきょろしていると、カズヤが呆れた声を上げる。
「あんまりキョロキョロすんな。大きい都市にはスリもいるんだから、気をつけろよ」
「あ、はぁい」
カズヤの言葉に頷き、志希はきょろきょろするのを極力我慢しながら歩く。
志希としては、初めての大都市だ。
無論、フェイリアスも大都市と言える程の大きさを誇っていた筈だが、このフェイルシアの王都程の規模は無かったような気がする。
巨大な門から中に入れば、真正面に王城が見える。
遠目でも分かる程大きく、どこか古めかしい印象を与える城。
感心している志希を見て、アリアが口を開く。
「このフェイルシアの王都は、王城を中心にして街ができています。そして、大きな通りは基本的に家具や道具、武具を売る店が並んでいます」
「そうそう、服屋もあるけれど……古着屋の方が多いわ。新品の既製品や仕立てをする店はどちらかと言うと王城の周りにある、貴族

区の方にあるの。この辺りに住む人達には、ちょっとお高いから」
ミリアはアリアの説明に補足を着けてくれる。
ふうんと頷いていると、カズヤが更に補足の説明を着けてくれる。
「ちなみに、冒険者ギルドは貴族区と一般区の中間にある。貴族の依頼を受けやすく、庶民の依頼も受けやすくってやつだ」
完全な庶民区にあると貴族がやたらに居丈高になり、面倒事を引き起こしてくれるらしい。
その為、貴族区の近くに移転したそうだ。
貴族区は王に許された者達が住む場所で、名前にある通り主に貴族が居を構えている。
だがしかし、金の冒険者等で功績を残した者等がそこに屋敷を賜り、住まう事もあるのだ。
それ故、貴族たちは文句は言っても排除をしようとはしなかったらしい。
「取り敢えず、宿を借りる方を先にしようぜ。荷物をとっとと置いて、親方に頼まれた手紙を届けないといけないしよ」
「そうだな、いつもの所にするか」
「おう、了解」
カズヤとイザークの二人で、宿をあっさりと決めてしまう。
「え!?」
女性三人が思わず声を上げると、カズヤがにっと笑う。
「俺とイザークは、フェイリアスに行く前こっちで仕事をしていたんだ。馴染みにしていた宿は安くて、鍵もしっかりしてる良い所だぜ。飯も旨いしな」
「ギルド認定宿としては、かなり良いと評判だ」
イザークの言葉に、感心した表情を浮かべる面々。
「おいおい、ミリアもアリアも来た事ないのか?」
思わずカズヤが突っ込むと、二人は若干気まずげな表情を浮かべる。
「ええ、まぁ……」

「こうなる前には幾度か来た事がありましたけど……」
口ごもりながら言う二人に、カズヤは跋の悪い表情を浮かべる。
冒険者となる前は準王族と言った地位にいた二人だ。
フェイルシアに来た事があるとは言っても、こんな下町の宿など泊まった事は無いだろう。
「それじゃ、私と一緒で初めてかぁ……街の中で道に迷わない様に、気を付けようね」
志希は笑顔で二人に言うと、ミリアは頷く。
「そうね。土地勘がないと迷いやすそうな街に見えるし、気を付けましょうね」
「あとまぁ、変に裏通り行かない様にしろよ。スラムとか治安悪いからな」
ミリアの言葉にかぶせるように、カズヤが真剣な声音で注意する。
志希はきょとんとした表情を浮かべ思わず首を傾げる。
冒険者は基本的に身分を保障されているので、売られて奴隷などにされる事は無い。
何よりそのような事をするのは、リスクが高すぎる。
だが。
「冒険者を見染めた貴族が命じて、奴隷として浚う事もありうる」
と言うイザークの言葉に、志希は思わず顔を歪める。
この場合は、冒険者だけではなくアルフやアールヴも当てはまる。
美しい容姿や、少々変わった能力などを持つ亜人や人間を浚って飼う人間がいるのだ。
「そうなった場合、届け出のされない奴隷と言う事になりますね。奴隷の保有数は決まっていますから、それ以上は取り締まりの対象になりますもの」
アリアが眉を潜めて言う。
「でも、どうやって捕まえておくの？　冒険者であれば鍵開けとか、魔術とか精霊術とかの心得がある人だっていると思うんだけど」
「魔術や精霊術は、それを封じる魔道具があるからそれを着けられ

る。もし魔術師が協力していれば、制約の魔術を刻んだ物を着けられる」

イザークのあまりにも詳しい言葉に思わず彼を見る志希。

カズヤは肩を竦め、苦笑しながら口を開く。

「オレらがここを出るちょっと前に、クルトと一緒にそう言うバカの根城を強襲した事があったんだよ。理由はまぁ、クルトの身内が街にいる筈なのにいないって言うのが発端だったな」

「あの時の貴族は無事に裁かれ、今は奴隷として鉱山で強制労働に服しているはずだ」

カズヤの言葉に補足を入れるイザーク。

だから、奴隷として扱われる冒険者や術者達にどんな事が施されていたのかを知っていたのだ。

これを聞いて柳眉を逆立てたのは、ミリアだ。

「何それ、とんでもないわね！」

鼻息も荒く怒るのは、神官としても人としても許せないからだ。

王侯貴族の出身ではあるが、そもそも慈悲深き大地母神の神官であるミリアは奴隷を好いていない。

奴隷となるのは大体は犯罪者なのだが、赤貧に喘ぎ身売りせざるを得ない貧しい村の人間も多い。

村が貧しくなるのは農作物が上手く育たないという事の他に、飢饉が起きたりする場合だ。

それらを改善したり、飢饉を未然に防ぐように領主や役人が手を打っておけば、身売りをしなくても暮らして行く事は可能な筈なのだ。

だが、上役が無能であったり腐っていた場合は、負担は全て村人へとのしかかる。

その為奴隷が増え、奴隷を売り買いする商人が出来たのである。

これに伴い、国策で奴隷は財産だとするように定められた。

だが、奴隷が増えれば農村部での人口が減少してしまう。

それに歯止めをかける為、奴隷に制度がもうけられたのだ。

奴隷の衣食住を保証し、むやみに傷つけたり殺したりはしない事。
奴隷の保有人数が決められ、奴隷も財産の一つとして数えられる事。
奴隷を解放できる事。
身分が保障されている者を勝手に奴隷にしてはならない事等など、様々な取り決めがされている。
冒険者は身分が保障されているので、奴隷にしてはいけない存在だ。
また亜人達も勝手に奴隷にしてしまえば、それぞれの種族の上層部からその国の上層部が物凄い抗議をされる為、自ら望まない者を奴隷にしてはいけないと言う取り決めをされている。
しかし、裏社会の者たちにとって亜人は良い奴隷らしく、隙あらば捕まえて非認可の奴隷としようとする。
「まぁ、怒るのは分かるが気をつけろよ。ミリアもアリアも美人だし、シキに至ってはアレだからよ……下手に目を着けられたら厄介な事になるからな」
「はぁい。でも、フェイリアスでは何も言わなかったよね？」
志希はカズヤの忠告に頷きつつ、首を傾げる。
その疑問に口を開いたのは、イザークだ。
「フェイリアスはフェイルシアの盾だ。いわば、妖魔との最前線国。その国で、足元をすくうような組織に暗躍されてはたまった物ではなかろう。裏で王家と様々な協定を結んでいたようだが、オーランド王子が冒険者になると同時に全て摘発し、再起不能なまでに叩きつぶした」
それ故志希はフェイリアスで割とのんきに過ごす事が出来たのである。
志希は思わずぽかんと口を開け、オーランド王子の顔を思い浮かべる。
爽やかで美形な王子だったが、やはり腹黒かったのかと一人納得する。

「フェイルシアは歴史も古く、大きな国だ。だがその分、裏に対しての動きは愚鈍だ。先頃言ったクルトの事例の時、奴が強行に動かなければあの娘を見つけるのは困難だっただろう」
イザークの淡々とした言葉に、志希の背筋が慄く。
フェイリアスで王族と知り合いであったクルトが、強硬手段に取らなくてはならなかったというのは余程だ。
あちこちに個人的な伝手があるクルトだからこそ、出来た芸当。
一冒険者である志希達がもし浚われたとしても、見つけ出す事は困難なのだとイザークは言外に告げたのだ。
「まぁ、下手な奴らに目をつけられたりとか、スラムの奥に行くとかがない限りそんな事はそうそうないけどな！　クルトの身内っていう女の子は、超が付くくらいの美人だったしよ」
カズヤはそう言って、大丈夫だろうと笑う。
志希もミリアもアリアもこくこくと頷き、大丈夫だろうと思う事にする。
「でも、イザークも随分フェイリアスやフェイルシアの内情を知っているのね。どうしてなのかしら？」
ふと、ミリアがそんな疑問の声を上げる。
「摘発する際、俺もクルトも参加したからな」
さらりと言うイザークの言葉に、四人は絶句する。
「おま……そんな前から、冒険者やってたんだろ？　それでどうして、今銅なんだよ」
思わずと言った様に突っ込むカズヤに、イザークは苦笑する。
「さぁ、な」
故意に階級を上げていないのは、この言葉から分かる。
だが理由を語るつもりがないのは、その表情から読み取ることができた。
その彼にカズヤはため息をついて頭を振ってから、気持ちを切り替えるように前を見る。
「まぁ、イザークがどうして階級上げないのは置いておくか。それ

より切実に、オレ達は宿に入る方が先決だしょ。往来でグダグダ話してても、始まらないしな！」

うん、と自分に頷いてからカズヤは足を速める。

「んじゃま、さっさと行こうぜー！」

「うぇ！？　いきなり早歩きしないでよ！」

「うるせー、オレは風呂に入りたいんだぁ！」

「良いわねお風呂、わたしも入りに行きたいわ」

「わたしもです！」

ワイワイと楽しそうにしながら足を速める四人に、イザークは呆れた様に小さく笑い、目を和ませて歩くのであった。

第六十五話

イザーク達が昔馴染みにしていた宿は古びた外観をしていたが、中は清潔でかなり手入れが行き届いている印象を受けた。

中に入り、イザークとカズヤが宿の主人と再会の言葉を交わしてから部屋を借りて上にあがった。

一階が酒場兼食堂で、上の階が宿泊の為の部屋になっているのだ。

丁度一人部屋が一つと二人部屋二つが空いていたのでイザークとカズヤ、ミリアとアリアがそれぞれ二人部屋に入り、志希が一人部屋に入る事になった。

角の方の部屋で、隣がイザーク達で、向かいがミリアとアリアの部屋だ。

今回、ミリアが神殿ではなくパーティーの面々と共に宿に入る事を選んだのは、この広い街で一々宿にまで来るのが大変そうだからだ。

神殿と塔の学院は、かなり貴族区に近い場所にある。

対してこの宿は一般区の中心にあるので、神殿や学院からこの宿に来るのは一刻以上の時間がかかるのだ。

ちなみに、この話は宿の主人が教えてくれた。

商売の為に言っているのかとも思ったが、本当であった場合とても面倒なので双子は部屋を借りたのだ。

その後はギルドや防具屋、それに街の中で安い店や好みの店があるかを探す事になったので、全員で連れ立って宿を出た。

「ギルドを通した依頼じゃねぇから、そっち先に済ませた方が良いな」

そう言いながら、カズヤが歩き出す。

少々治安が悪い、と言う事はスラム寄りの所に店が開かれていると言う事だ。

その為この街の事をある程度知っているイザークとカズヤが先頭

に立っているのだ。
志希はその二人について行こうとするのだが、フェイリアスの王都よりも人通りが多く、店も多いのでついきょろきょろとしてしまう。
「シキ、あんまりキョロキョロしない方が良いわ。転んじゃうわよ？」
ミリアが見かねたのかそう声をかけて来て、志希はうんと頷く。
「まぁ、確かにそうだね。歩くのに集中しないと、転んじゃいそう」
道は舗装されているが、人通りは多い。
下手に人にぶつかれば嫌な思いをさせてしまうだろうし、相手が変な人間であれば難癖をつけられてしまうだろう。
志希は取り敢えず好奇心を抑え、イザーク達に着いて行くのに集中する。
整備された街並みは、少し裏路地に入ってもそれほど雰囲気は変わらない。
だが、どんどんと奥に行くにつれて静かになり、そしてやや汚れた印象を感じさせる。
建物が古いからか、それとも手入れを怠っているのかは不明だ。
志希は思わず、イザークの外套を掴む。
イザークは一瞬志希を見るが、それだけで何も言わずに進む。
「本当に、このへんなのかしら？」
思わずと言った様にミリアが問いかけると、カズヤが唸る。
「たぶん、だけどな。もしかしたら、もう少し表側かもしれねぇけど」
「それにしても、随分と雰囲気が変わりますね……」
アリアはカズヤの言葉を聞きつつ、感想を漏らす。
表通りやそちらに近い方の道や家は、手入れをされた様子だった。
だがしかし、そこよりやや離れただけで表通りの喧騒が聞こえなくなり、家や道が幾分寂れた印象を覗かせる。
全く違う街にいるのではないかと錯覚する様な雰囲気に、裏側に

足を運んだ事がなかった女三人は戸惑う。
「まあ、この辺はまだマシだぜ。もう少し奥の方……北東外壁に近い地区はもっと寂れてるぞ」
カズヤの言葉に目を丸くするミリアとアリア。
しかし、志希は成程と頷く。
「そっちがスラム、なんだ」
「ああ。犯罪者が潜伏する可能性が高い場所だ」
イザークはそう言いつつ、ふっと足を止める。
突然の事にどうしたのかと皆が彼を見ると、イザークはすっと指をさす。
「あそこではないか？　武具の看板が二つ並んでいるぞ」
イザークの言葉に釣られてみてみれば、やや古い建物の上に看板が二つ並んでいる。
「あ、かもしれないね」
武器屋と防具屋の二つを同時にする店は珍しいだけで、ない訳ではない。
もっとも、その様な店は大概もっと大通りに面した場所に店を開いている事の方が多い筈である。
このように少しでも治安の悪い所に店があると、強盗などが押し入る可能性が高いからだ。
しかし、よくよく見てみると店の看板には印が入っているのに気が付いた。
それはギルドから貰える、推薦印だ。
冒険者達の間で最も利用する人数が多いか、金や銀の冒険者の推薦を受けてギルドマスターが認めれば推薦の印を貰えるという仕組みだ。
少々の値は張ろうとも、良い武具を作る職人は貴重だ。
実際、フェイリアスでひいきにしていた親方はギルド推薦の店だ。
その性格ゆえに気に入った仕事以外は弟子に任せてしまっていたが、その腕が確かなのはカズヤの鎧を見ればわかる。

「へぇ、こりゃマジで親方の弟子かもしれないな」
カズヤの呟きに頷きつつ、普通よりも大きめの店舗に向かって歩き出す一行。
店の前にカズヤが立とうとして、足を止める。
その瞬間、扉が内側から壊される。
扉を壊したと思しき人物は殴られたのかあちこちに痣を作り、小さく呻く。
「だ、大丈夫ですか！？」
ミリアが思わず声をかけ、怪我をしている人物に駆け寄る。
人物は茶色い髪をした青年で、気を失っているようで返事をしない。
志希は彼よりも、店内の方を気にする。
彼に乱暴を働いた人物がいる筈だからだ。
同じ事を考えたからか、カズヤはミリアの反対側に立ち入り口を警戒する。
その気配を感じたのか、店内から声をかけられる。
「お、客か？　だとしたら、他へ行け。この店は今取り込み中だ」
野卑な声と言葉は聞こえるが、その姿は店の入り口からは見えない。
見えるのは、滅茶苦茶に荒らされている店内だけだ。
更に、鈍い打撃音と複数の子供が必死で怒鳴ったり泣いたりしている声が聞こえてくる。
それを聞いた瞬間、志希は思わず店内に駆け込む。
ならず者と言った姿をした男達はカウンターの奥で何かをしていて、終始鈍い音を作り出している。
「やめて！」
怒声を上げると同時に、破壊されたカウンターの奥の方に見えるならず者達へと棍を投げる。
彼等の直ぐ横に棍が音を立てた事で、ならず者達の動きが止まる。
ならず者達の足元には、体を丸めた茶髪の男性が見えた。

どうやら、奴らに蹴られるなどの暴行を受けていたようだ。
そして、暴行に参加しなかったならず者たちは少年と言っても良いくらいの子供たちを掴んでいた。
どの子供も顔を腫らし、ならず者に暴行されていた男性を心配している。
「この通り、この店は営業してねぇんだからよぉ？　とっとと他の店に行って、買い物して来いよお嬢ちゃん」
「そうそう、ガキがこんな所来て、粋がってんじゃねぇよ」
嘲笑するならず者たちに志希はカチンとしてしまう。
「ガキですってぇ！？」
思わず抗議の声を上げると、ならず者たちはニヤニヤ笑う。
「何処からどう見ても、ガキだろ？」
「違うってんだったら、俺達に証拠見せてみろよ」
力無い子供だと思ってなのか、ならず者たちは志希を値踏みする様に上から下まで見る。
いやらしいとしか言いようのないその視線に、志希は物凄く不快になる。
「俺達が、大人の女にしてやっても良いんだぜ？」
そう言いながら、ならず者たちのリーダーらしい男が前に出てくると。
「すまんが、ここの店主は何処だ？　俺達は用事があって来ている」
そう、静かな声が割り込んでくる。
イザークがゆっくりと店内に踏み込みながら、冷徹な目で男たちを見る。
いつもと違い、威圧する様な雰囲気を纏いゆっくりと店内を歩き志希の隣に立つ。
「な、何だてめぇ……」
「店主に用事がある、と言っている」
リーダーの言葉を遮り、じろりとイザークは相手をねめつける。
静かな声音と威圧に、リーダーは舌打ちをする。

「仕方ねぇな、今日はここまでにしておいてやるよ。おい、いい加減この店畳んで街を出ていけ。じゃねぇと……次はこんなもんじゃすまねぇぞ」

そう蹲っている男に向けて吐き捨て、ならず者たちは早足で裏口からぞろぞろと出て行こうとする。

だが。

「貴様ら、この店にあった武器を持って出て行くのか？」

静かに、イザークが言う。

男達の幾人かの手には長剣や小剣が握られており、ちゃっかり志希の長棍も持って行かれる所であった。

「あ、私の棍！」

声を上げると、ならず者達は再び舌打ちをして武器を投げ捨てて出て行く。

志希は慌てて長棍を取り戻し、ふうと安堵の息を吐くと入り口からミリアが入って来る。

「外の人の治療、終わったわ。それほど酷い怪我がなかったのは、幸いだったわね。で、こっちにも怪我人がいるってカズヤから聞かされたんだけど」

優しい緑色の法衣を翻して入って来るミリアに、志希が奥で蹲っている男性を示す。

「あの人。あと、子供達もなんか顔腫らしてる」

そう言いながら、志希は取り敢えずポケットからハンカチを取り出し、水の精霊にお願いして濡らす。

数人の子供のうち、一番ひどく顔を腫らしている少年の顔を冷やそうと思ったのだ。

しかし、まるで猫が威嚇する様に少年達が蹲って気絶しているらしい男を庇う。

「来るな！　お前ら、あいつらと繋がってないって証拠はないだろ！」

敵愾心を露わに、少年達は此方を威嚇する。

志希が思わず困惑すると、ミリアは優しい表情を浮かべる。
「エルシル様に誓って、貴方達に危害を加えないわ。酷い怪我をしているのなら、治療をしなくてはいけない。お願いだから、その人と貴方達の治療をさせてくれないかしら？」
エルシル神の聖印を見せながら、ミリアは膝をついて子供たちを見る。
視線を同じくらいにまで落とし、真摯な声音でミリアは少年達にお願いをする。
ミリアの言葉と表情に子供達は困惑していると、入り口の方からカズヤとアリアの助けを借りながら青年が入って来る。
「カイ、大丈夫だから」
中に入り、何があったのかを悟ったらしい青年は威嚇する少年の名を呼び、促す。
その言葉に渋々と言った様に、場所をミリアに譲る。
「あんたも、無理すんなよ。取り敢えず、その辺座って少し休んだ方が良いぜ。店内は取り敢えず、オレ達が片付けるからよ」
カズヤは青年に声をかけつつ、手が空いている志希やイザーク、アリアを見る。
「ん、分かった」
志希は頷き、取り敢えずカイと呼ばれた少年にぬれた手拭いを押し付ける。
「それで顔、冷やした方が良いよ。凄く腫れてるから」
そう言って、取り敢えず足跡が付けられた革鎧を持ち上げ、少しよろけながら端っこに置く。
店内を元に戻す事など出来ないので、取り敢えずスペースを確保する方が先決と思ったのだ。
同じ様にイザークとカズヤ、アリアも店内を片付け始めるのと、少年達も動きだす。
先程警戒していた様子から、盗まれたりしないように見張ると言う意図があるようだ。

少年達は荷物を片付けながら警戒して、イザーク達を見ている。
その事に志希は小さく息を吐きつつ、早く色々と話を聞かせてもらいたいと思うのであった。

第六十六話

怪我が酷くない少年達のお陰で早く店内が片付き、四人は今上の階にある店主や少年達の居住スペースにお邪魔していた。
お茶を出してくれているのは最初に扉を壊しながら出て来た青年で、男性の方は奥でミリアが看病している。
口の悪い少年達は現在下に残り、扉の修繕を行っている。
「本当に、どうもすいません。現在この通り荒らされてまして……」
青年の困った表情に、イザークは緩く頭を振る。
「オレ達、こちらのお店で防具を作っている人にちょっと聞きたい事があったんですよ」
カズヤはそう言って、懐から手紙を取り出す。
「防具を作っているのは兄ですから……気が付くまで、待ってもらう事になると思います」
青年はそう言って、椅子に座る。
大きなテーブルの上に置かれたお茶を、頂きますと声をかけつつ志希は一口飲む。
ふわりと香るお茶の匂いに、志希は思わず顔をほころばせる。
「見た所冒険者の方々の様ですが、こちらに来たばかりですか？」
青年の問いかけに、カズヤが頷く。
「ああ、フェイリアスから来たんだ。こっちの方が、あちこち行くのに便利だからな」
「確かに、そうですね」
青年は成程と頷きつつお茶を飲みながら、ちらりちらりとパーティーの面々を見ている。
柔らかい表情を浮かべてはいるが、その目に浮かぶのは警戒だ。
それに気が付いた志希は小さく首を傾げるが、直ぐに何故なのかを理解する。
ならず者達から助けてくれたとしても、実はグルかもしれないと

言う疑いもあるのだ。
警戒しつつも招き入れているのは、情報が欲しくてそのような事をしているのだと分かる。
だが、こちらには彼の欲する情報は持っていないし、何よりお節介だとは思うが事情を知りたい。
と言う事で、カズヤが口を開く。
「取り敢えず、一体あいつら何なんだ？」
カズヤの問いかけに、青年は目を泳がせ俯く。
何をどう話すかの整理しているのか、それとも情報を渡すのに躊躇っているのか沈黙する。
そのまま、彼が口を開くのを辛抱強く待つ状態になってしまい、志希や他の面々は出されたお茶を啜るしかやる事が無くなる。
「あら、随分静かね」
と言いつつ、ミリアが重い沈黙を破りながら奥の部屋から出てくる。
「あ、あの……兄は？」
「怪我は治癒の奇跡を使ったから、もう心配はいらないわ。目も覚めて、今こちらに出て来てくださるそうよ」
ミリアは笑顔で青年に告げ、良い仕事をしたと満足そうな表情で皆の傍に来る。
アリアは用意されていた椅子にミリアを促し、彼女は頷いてそこに座る。
それを待っていたかのようにミリアが出て来た部屋の扉が開き、幾分かすっきりした表情を浮かべた男性が出てくる。
「助けてくださり、ありがとうございます。しかし、今うちの店は開けられるような状態ではないんです。どうか、別のお店の方をご利用ください」
いきなりそう言って頭を下げる男性に、志希はきょとんとした表情を浮かべる。
「いやいや、違う違う。オレ達はまぁ……フェイリアスから来たん

だ。そっちの防具屋のオヤジから、弟子宛って言う手紙を持ってきただけなんだよ」

そう言いつつ、カズヤは手紙を入れている箱を鞄から取り出す。

「店は少しばかりスラムに近い場所にあって、目印は武器と防具屋の看板を下げてるってところしか教えられてねぇンだ。だから、ここが丁度聞いてたのと同じだから聞いてみようと思った所で……」

「あ、俺が転がり出て来たんですか」

青年がはっとした表情で、カズヤの言葉を引き継ぐ。

「そそ、で……この箱に見覚えはあるか？」

カズヤは頷きつつ、箱を男性に差し出す。

箱の上に当たる面には特徴的な紋様が描かれており、男性はそれを見て目を丸くする。

「師匠が連絡を取る時に使う箱です！」

驚く男性にカズヤは箱を差しだし、男性はそれを受け取り蓋を開ける。

中に入っていた手紙を取り出し、男性は箱を横に置いてさっと目を通し始める。

その間、青年は手早くミリアと男性の分のお茶を淹れそれぞれの前に置く。

「……本当に、通りがかりだったんですね」

ポツリ、と青年が呟く。

「疑われていたんですね、わたし達」

アリアは小さく息を吐き、憮然とした声音で零す。

この言葉に青年が顔を上げるが、直ぐに俯く。

「見た所、何度かこの手の嫌がらせをされているのだろう。だが、この様な嫌がらせは本来であれば街を見回る衛士達に訴えれば良いだけの筈だ」

「けど、それをしても一向に良くならなかったか……なんかあったかのどっちかだな。通りすがりの人間を疑うって事はよ」

イザークとカズヤがそう推測を口にすると、青年は驚いた表情を

浮かべてマジマジと二人を見ている。
「そうね。衛士が本来見回って犯人を捕らえる筈よ、こういうのって。例えスラムに近い場所の店だって言っても、ね。街の治安を守るのが、衛士の仕事だもの」
ミリアは二人の意見にうんうんと頷き、お茶を一口飲む。
志希はそれを見ながら、首を傾げる。
「もしかして、衛士がお仕事してないって事？」
「そうよ。カズヤ達が言っている事が本当なら、衛士が動かなくてはおかしい。でも、衛士が何かあったか様子を見に来る気配も無い」
「それじゃ、職務放棄してるの？」
「そうです。何度か子供達に衛士を呼びに行かせたのですが、全く取り合ってくれなかったそうです。近隣の人間も呼びに行ってくれたりはするのですが……なんだかんだと言われて全く来てくれる様子はありません」
志希がミリアに問いかけると、青年が口を挿むようにして衛士達が来ないと零す。
「それは……おかしいです。衛士は本来治安を守るのが仕事なのですから、現場があるのに来ないと言うのは仕事を投げてるとしか思えません」
アリアが衛士達の行動に思わず怒るが、直ぐに恥ずかしげに口を閉じる。
ここで怒った所で衛士達に届く訳でもなく、それどころか被害にあっている青年たちを詰る様な事をしてしまったのが恥ずかしかったのだ。
そんなアリアの行動に青年は目を丸くし、次いで苦笑する。
「俺達も、そう思っています。でも、何処に何を訴えて良いのか分からなくて困っているんです。嫌がらせは続く上に、何故か俺達の店にだけ鎧や武器の材料になる鉱石や革なんかが全く入らなくなってしまいましたし……」
青年は困ったと深いため息を吐き、お茶を入れているコップを見

る。

「何が起きているのかもう、本当にわけがわからない……」

途方に暮れたように、青年が呟くと男性が手紙から顔を上げる。

「うちの内情を話した所でどうにかなる訳ではないよ、ヨルン。それに、やはり貴方達はお客様だ。この手紙の内容は、師匠から貴方達の鎧などを作ったり手入れをする際に手を貸してやって欲しいと言う紹介状でした」

男性はそう言いつつ、手紙を畳み元の様に箱に入れる。

「ですが、弟のヨルンが言った様に今うちの店には鎧や武器の材料になる物が全く入ってこない状況ですので……こちらの方で他のお店を紹介させてください」

男性は疲れた様な表情で笑みを浮かべ、そう言う。

この言葉にイザークとカズヤは顔を見合わせ、次いで志希やミリア、アリアの方を見る。

「だってよ、どうする？　オレとしては、親方が褒めていた人の店を使いたいんだけどよ」

カズヤの言葉に、アリアがこくこくと頷く。

「わたしも、そう思います！　作ってくださった皮鎧、かなり動きやすくてわたしは凄く気に入っていますから。お弟子さんと言う方の方が、わたしは信頼できます」

「同じく、わたしも出来ればここにお願いしたいわ」

アリアに続いてミリアも同意し、男性は困惑した表情を浮かべる。

「しかし……」

「私も、ここが良いな。だって、家の精霊が店舗部分の汚れた所、一生懸命綺麗にしようとしていたもん。家の精霊が住んでいるお店なら、そっちの方がずうっと私は信頼できる」

志希はそう言って、にこっと笑う。

大事にされた家には精霊が住み着き、家主に小さな助力を与える事がある。

家の中を掃除したり、請われた個所を修理したり、時に仕事を手

伝うなどの助力を与える。
また、健やかな眠りを約束し疲れを綺麗に落としてくれたりもする。
家の精霊は、大事にされていてなお且つ自分が気に入らないと住みつかない。
なので、滅多に家の精霊は見る事は無いのだ。
「貴方、精霊使いだったんですか」
男性は言われた言葉に驚き、呟く。
「はい」
志希は笑顔で頷き、お茶を呑む。
「でも、おかしな話よね。店に材料が入ってこないなんて、契約している商人がいるのでしょう？」
ミリアはそう、男性に問いかける。
「はい……ですが先日、こちらの店にはもう卸せないと酷く困惑した表情で言われたのです。理由を聞いても答えてくれず、全くわけがわからない状態です」
「きな臭ぇな」
カズヤはむっと唸る。
イザークはカズヤの言葉に頷き、口を開く。
「おかしな話だな、それは。契約を反故するのは商人自身の信用を落とす事になりかねん。そもそも、ギルドの推薦店と契約している商人である以上、何よりも契約を重視する筈だ。だが今回、契約を反故にしてきた。いや、反故せざるを得ない様な状況にあったのかもしれんな」
「だとしたら、役人が絡んでいますね」
アリアの呟きに、イザークは更に補足する。
「もしくは貴族。王都で営業している商人となれば、その辺りと繋がりが出来ていてもおかしくはあるまい。癒着をしているか何らかの圧力をかけられているか……か。まぁ、何にしても推測の域は出まい」

「でも、衛士が取り合わないって事はお役人や貴族が手を回しているからかもしれないよね。だって、治安を守るって言っても結局は衛士の人達もお役人だし」
「だとしたら、どうしてこのお店を狙うのかしら？」
ミリアがそう、イザークと志希の推測にそう問いかける。
流石にそこまでは分からず、小さく唸り一同は首を傾げる。
「……本当にお役人や貴族の方々がこの店を排除したいのであれば、抗う事はできませんね」
そう、男性は肩を落として呟く。
「兄さん……！」
「そうでしょう？　この国に、私達は要らないと言われているも同然です」
絶望した様に男性が呟き、ヨルンは顔を歪め俯く。
「でも、そうとは限らないわよ？　だって、ここの王族は代々剣術を修めるのが習わし。主神ヴァルディルと戦女神ワキュリーを国宗としてるんですもの。そんな国が、腕の良い武具の職人を要らないなんて言う筈ないわ」
ミリアは絶望している兄弟にそう声をかけ、励ます。
「ですが……」
「それに、こんなふうに店を荒らさせたり材料を卸させない様に手を回すのはおかしいわ。イザークの言う事が本当だとしたら、これは貴族や役人の専横になる。それに何より、国民がこんな仕打ちを受けているとフェイルシア王族が知れば絶対に救ってくれるわ」
ミリアは強い口調で断言すると、兄弟は不思議そうな表情を浮かべる。
「何故、そこまで言いきれるのですか？」
男性の問いかけに、ミリアははっとした表情を浮かべる。
流石に、言い過ぎているからだ。
それを誤魔化す為に、アリアが慌てて口を開く。
「以前、こちらの王族とお会いして言葉を交わす機会があったので

すよ。わたしは塔の学院で成績が優秀だったので」
「わ、わたしもエルシル神の神官と言う事でお会いした事があるの。ほら、エルシル神はヴァルディル神の妻だし、豊穣の女神様だから」
フェイルシアでは戦女神や主神の信仰が多いが、エルシル神は大地の女神であるが故に各国では必ず神殿を作り、王族も豊穣を願って神殿に足を運ぶ事がある。
それほど重要視されている女神なのだ。
ミリアは嘘をついた事を内心で必死にエルシル神に謝りながら、愛想笑いを浮かべながらお茶を飲む。
「そうだったのですか……」
庶民と王族はまず顔を合わす事が無いので、双子の言い分を素直に受け取る男性。
イザークはそれを見ながらぽつりと呟く。
「少し、調べても良いかもしれんな」
「んだな」
カズヤも頷き、ちらりと他のメンバーを見る。
「私は賛成だよ」
「おなじく、賛成です」
「言わなくても、分かるでしょう？　これは調べなくちゃダメな事だわ」
全員の賛成を受けたイザークは頷くが、男性やヨルンは慌てる。
「し、しかし」
「君達を巻き込む訳には……」
この言葉に、彼等は大分人が好いのだろうと分かるほどだ。
「巻き込むも何も、オレ達が自分で巻き込まれるぜって言っているんだから気にすんなって。どうしても気になるって言うんだったら、あれだ。これを依頼としてギルドの方に出してくれりゃあ良いよ。店の護衛、お願いしますってな」
カズヤはおどけた様に言い、笑う。
「護衛ついでに調べりゃいいし、店がならず者に荒らされてるのに

衛士が動いて無い理由とかさ」
「ギルドも無能ではないからな。そのような依頼が出た時点で、役所に何が起きているのかを問い合わせる筈だ」
そうすれば、少しでも手がかりが入る筈だとイザークは頷く。
あれよあれよと言う間に話が決まり、ヨルンと男性は嬉しいが困るという複雑な表情を浮かべてパーティーの面々を見ているのであった。

第六十七話

志希はマジマジと、目の前にいる冒険者ギルドの受付嬢を見る。
現在、志希は依頼を出すと言う武具店の店主である男性、マティアスについてきていた。
そして今、受付嬢が物凄く申し訳ない表情を浮かべてマティアスに告げている言葉を聞いていた。
「本当に申し訳ございませんが、こちらのご依頼は受理できませんでした」
この言葉にマティアスは唖然とした表情を浮かべ、次いで大きな声を上げる。
「何故ですか！？」
「申し訳ございません」
「理由を教えてください！」
マティアスが受付嬢に必死に問いかけているが、ただただ申し訳ないと言った表情を浮かべて彼女は謝る事しかしない。
志希はマティアスを落ち着けさせようと声をかけようとするが、それより早く少し離れた場所で待っていたイザークが後ろから声をかけてくる。
「どうした？」
落ち着いた静かな声音に、マティアスが振り返る。
「依頼を、受理できないと言われました……！」
ギルドに依頼を出すようにと勧めたのは志希たちなので、苛立ちをぶつけるように言われる。
イザークはその事に眉を潜め、マティアスの手元の依頼書を見る。
ざっと目を通したイザークは、改めて受付嬢を見る。
「書類に不備は見られない。この手の依頼は必ず受理されると思ったのだが、俺の覚え間違いか？」
イザークの問いかけに、受付嬢は困り果てた表情を浮かべる。

「いいえ、わたしもそう記憶をしております。ですが、受け付けないと……」
受付嬢の言葉にイザークは成程、と小さく呟く。
「分かった」
そう言って、イザークはマティアスが記入した依頼願書を手に取る。
「ここで言い合っても仕方がない。取り敢えず、移動しよう」
イザークの言葉にマティアスが抗議しようと口を開きかけるが、志希が彼の袖を引いて止める。
「取り敢えず、行こうよ。受付の女の人に当たっても、今は仕方がないから」
志希の言葉にマティアスは唇を噛み、頷いて受付から離れる。
そのままマティアスはギルドを出ようとするが、イザークがその腕を掴んで止める。
「こちらだ」
言われた意味が分からないという表情を浮かべるマティアスだが、イザークに促され着いて行く。
志希もどこへ行くのかと、怪訝な表情を浮かべながら着いて行く。
二階に上り、一番奥の扉に入る。
ノックをせずに中に入ってしまうイザークに困惑する志希とマティアスの二人。
だが、イザークは構わず二人を目で促す。
勝手に入って良いのかとおずおずと入ると、若干広めの部屋の奥にカウンターが置かれているのに気が付く。
そこには若干暇そうな表情を浮かべた中年の男性が座っており、入ってきた志希達を気にせず手元の書物を読んでいる。
ローブを纏い杖を直ぐ近くに立てかけている男性の姿から、彼が魔術師である事は直ぐに分かった。
「鑑定なら、カウンターに置いてくれる？」
男性の言葉にイザークは無言でカウンターに進み出て、口を開く。

「青の封筒と、赤の蝋をくれ」
この言葉に、男性は書物をめくる手を止める。
「……印は？」
「鷹と矢だ」
男性はイザークの返答に書物を閉じ、顔を上げる。
イザークを見て一瞬驚きに目を瞠り、次いで懐かしげに笑う。
「久しぶりだな。河岸を変えたって聞いていたんだが……」
「戻ってきた。あちらでは少々都合が悪くなったからな」
「そうか。それで、戻って早々厄介事か？」
男性は笑いながら問いかけつつ、ゴソゴソとカウンターの下を探っている。
「俺達から顔を突っ込んだような物だがな」
「へぇ。まだあの盗賊剣士と組んでるのか」
「他にも仲間ができたな」
「イザークにか！　それは、随分と奇特だなぁ！」
男性は楽しそうに笑い、カウンターの上にイザークが望んだ物を取り出す。
「ついでに、その手のモンを見せてくれると俺としてはありがたいなぁー」
イザークは軽く言ってくる青年に、手にしていたマティアスの依頼書をあっさりと彼に手渡す。
男性はそれをまじまじと見てから、目を細める。
「なるほど、書類に不備はないね。なのに突っ返された……か」
そう言いつつ、男性は羊皮紙を丁寧に折り畳む。
「取り敢えず、鷹じゃなくて竜の方が良さそうだとおもうよ」
「……そうか、ではそれで頼む」
「はいはい、ちょっと待っていてくれ」
男性は再びカウンターの下を探り、小さな金属を取り出す。
「入れる羊皮紙は、こっちを使った方が良いぞ」
「……随分と大盤振る舞いだな」

「まぁ、な。それより、この話を調べる予定なんだろう？」
男性の問いかけに、イザークは答えない。
しかし、沈黙を肯定と受け取り男性は頷く。
「そうか、気をつけろよ。最近、小さめのギルド推薦武具店がやたらに荒らされる事件が起きている。大概衛士が来てどうにかしてくれているらしいが……きな臭い感じがするからな」
この言葉に反応するのは、マティアスだ。
「そ、その話は本当ですか！？」
思わず口を挟んでしまったマティアスに、男性は驚きながら彼を見る。
必死のその表情に、男性はしまったと言う表情を浮かべる。
しかし、直ぐに平常心を取り戻したのか営業用の表情を浮かべて頷く。
「ええ、本当です」
「な……ならなぜ、私の店だけに衛士の方が来てくれないのでしょう！？」
本心からの疑問をマティアスは、男性にぶつける。
男性はこの言葉に片眉を上げるが、直ぐに苦笑を浮かべて口を開く。
「申し訳ありませんが、私は塔の学院から派遣されている鑑定士なのでそこのところは良く分からないのですよ」
そう言いつつ、男性はちらりとイザークを見る。
イザークは頷き、懐から財布を取り出し銀貨を数枚出して男性に渡す。
「取り敢えず、ここでの用事は済んだ。一度店の方に戻る」
そう言うイザークの言葉にマティアスはえっと声を上げるが、彼は何も言わずに目で促す。
マティアスは憮然とした表情を浮かべながらも、会釈をして部屋を出て行く。
志希は慌てて彼に着いていき、イザークは鑑定士に一度会釈をし

て二人の後を追う。
マティアスは憤懣やるかたないと言った表情を浮かべ、荒々しい足音を立てながら歩く。
志希はその後ろを付いて行きながら、マティアスの店と他の店の扱いの違いについて小首を傾げる。
基本的に衛士達は庶民と貴族を区別する事はあっても、差別する事は無いとされている。
差別をすると、後々大変であると言うのもあるが、衛士達の大半は貴族ではなく庶民の人間が試験を受けてなっているのだ。
だからこそ、そんな衛士達が何故マティアスの店だけを助けようとしないのかが疑問であった。
そんな事を考えて歩いていると、いつの間にかマティアスとの距離がすっかり離れていた。
志希はその事に慌てて足を速め、ギルドから出て行こうとする彼を追いかける。
ならず者に店を狙われている以上、マティアス自身が外を出歩けば襲われるかもしれない。
それを防ぐために、志希とイザークが護衛として着いているのだ。
丁度ギルドから出て、精霊達が教えてくれた方向を見るとまるでマティアスを狙っていたかのようにガラの悪い男達がぶつかっていく。
咄嗟にイザークが割って入ると思ったのだが、マティアスの側には彼の姿が無い。
この事に志希が疑問を思う間もなく、ぶつかられたマティアスは転びかけるがそれを如何にか堪える。
「おおっと、何しやがる！」
ガラの悪い男の一人が、マティアスに怒鳴りつける。
「何をと言われましても……」
マティアスは怒鳴られた事に困惑した表情を浮かべ、男たちを見る。

しかし男たちはマティアスに、畳みかけるように怒鳴る。
「いてぇじゃねぇか。俺達は、これから仕事に行くところだったんだぜ？　こんな所で怪我させやがって！」
「いてぇいてぇ！　肩の骨が折れたかもしれねぇ！」
ぶつかって行った男が、物凄くわざとらしく痛がる。
志希は思わずどこかで見た古い手順でのいちゃもんに唖然としてしまったが、直ぐに気を取り直しマティアスの隣に立つ。
「マティアスさん、大丈夫でした？」
そう声をかけながら、手に握っている長棍をわざと男達とマティアスの前に挟む。
「なんだぁ？　餓鬼がしゃしゃり出てくるんじゃねぇ」
ガラの悪い男が凄むが、志希は気にしない。
この男たちよりも何倍も怖い魔獣や死霊達と戦ってきたのだ、肝が据わるのは当然である。
「シキさん……」
マティアスは困惑した表情で志希を呼ぶと、男たちはじろじろと彼女を見る。
「マティアスさん、遅れてすいません。それと、この人達からぶつかってきたので気にしなくて良いですよ」
志希はにっこりと笑い、男達に向き直る。
「さっき見たんだけど、貴方達わざとぶつかって行ったよね？」
「あぁ？　餓鬼が何言ってやがる。こいつからぶつかって来たんだぜ」
リーダーらしい男の言葉に、周りの男たちは頷く。
「おれは怪我だってしてるんだ！　どうしてくれるんだよ、これから仕事なんだぞ！」
怪我をしたと主張する男の言葉に同調する、ガラの悪い男達。
志希は思わず失笑し、口を開く。
「嘘をついても、無駄だよ。私は精霊使いだから、その人の生命の精霊の動きが見えるんだ。怪我をしていたら、生命の精霊は怪我の

部分に集中する。でも、さっきから怪我したって喚いている人の精霊は全然動いていない」

志希の言葉に軽く目を瞠り、男たちは志希を上から下まで舐めるように見る。

旅装を解いていないが、革鎧などは全て脱いできている。

だがしかし、志希は今回護衛としてマティアスに着いてきているので武器だけは持って歩いているのだ。

志希の武器は長棍なので、見た目的に殺傷力が無い様に見える。

だからこそ、男たちは志希をただの子供だと見ていたのだ。

「てめぇ、冒険者か」

「それが何か、あなた達に関係あるかな?」

志希はにっこりと笑い告げると、男たちは目配せをしあい始める。

そこに。

「如何した?」

と、耳に心地よい低い声音が後ろから問いかける。

男たちよりも若干細いが、身長の高いイザークがマティアスと志希に追いついたのだ。

いつも着ている鎧は脱いでいるが、黒い服は着たままだ。

その上背中に大剣を背負っているので、見た目だけでイザークが冒険者である事が分かる。

「なんか、ぶつかって来て置いて難癖つけてきたの」

「そうか」

イザークはそう言ってゆっくりとガラの悪い男たちを見る。

冷徹な金の瞳に見られた瞬間、男たちはそそくさと背中を向けて立ち去っていく。

志希はその事に深い息を吐いて、マティアスに向き直る。

「護衛なのに、遅れてごめんなさい。本当だったら、私が隣にいてマティアスさんを護らないとだめだったのに」

志希はそう言って、マティアスに頭を下げる。

「え!?　い、いえ……こちらこそ申し訳ありません。貴方達をす

っかり置いて歩いていましたから」
マティアスは慌てて志希に頭を上げてもらおうとするが。
「いや、シキの言う事はもっともだ。何より、俺が遅れなければ依頼人の身を危険にさらす事はなかった筈だ。申し訳ない」
イザークの言葉に、マティアスは手を振る。
「いえ、私も悪かったと思います。あのような事があるのは店だけだと、思っていましたから」
すっかり油断していたと、マティアスは項垂れる。
「……これ以上、互いに謝罪し合うのも不毛だ。マティアスには悪いが、一度俺達の宿まで来てもらうが良いか？」
唐突なイザークの言葉に、マティアスはえっと声を上げる。
「本来であればマティアスを店まで送ってからと思ったのだが、これは少し急いだ方が良い。申し訳ないが、付き合ってくれ」
「は……はぁ」
イザークの何時にない饒舌な言葉に志希は驚きながら、事態についていけないマティアスの隣に並び長棍を杖の様にして持つ。
「行くぞ」
一言告げ、イザークは歩き出す。
志希は戸惑うマティアスを護衛しながら、イザークが何故遅れたのだろうと首を傾げ、あとで聞いてみようと思うのであった。

第六十八話

「ただいま～」
志希はそう声をかけながら、マティアスの店に入る。
昼間に壊された扉は既に修復されており、これをした少年たちはかなり手慣れている事がうかがえる。
それ程までならず者が店を荒らしに来ているのかと思うと、流石におかしいと志希は感じる。
いや、そもそもこの店の環境がおかしいのだ。
衛士が様子を見に来ない上に、ギルドで依頼を断られる。
何故、どうしてと言う疑問を抱くが、今のところその辺りが全く分からない。
ならば、調べるしか手はない。
志希がひとり頷くと、奥からカイと呼ばれていた少年が出てくる。
カイは志希を一瞥してから、後に続いて入って来るマティアスに駆け寄る。
「親方、お帰りなさい。どうでした？」
「ダメでしたよ。一体何が悪いのか……全く分からないです」
疲れたように笑うマティアスに、カイは表情を曇らせ志希とイザークをほんの少しだけ睨む。
ギルドに依頼を出した方が良いと言い出したのは、イザークだったからだ。
ダメでした、と言う話を聞けば睨まれるのは当り前だろう。
だが、カイは文句を言う事なく直ぐにマティアスを気遣う。
「取り敢えず、上でヨルンさんが待ってますので上がりましょう」
この言葉にマティアスは頷き、疲れた表情で二階へ上がりヨルンと仲間が待つ部屋に入る。
志希とイザークも後に続いて入り、深く息を吐く。
「で、マティアスさんの表情を見て思うんだが……ダメだったのか

？」
カズヤがそう、単刀直入にイザークに問う。
「ああ」
「その割に遅かったけどよ……アレ使ったのか？」
「その通りだ」
カズヤの問いにイザークが頷くと、そうかと彼は嘆息を零す。
一体何の事かと不思議そうな表情を浮かべ、二人を見る志希達。
カイがお茶を淹れながら訝しげに二人を見て、マティアスと志希、イザークの前にカップを置く。
それに目礼をしてから、イザークは椅子に座りカップを手に取る。
「いただきます」
志希は椅子に座ってから、カップをとり一口飲む。
イザークもカップのお茶で喉を湿らせてから、口を開く。
「今回のこの店を取り巻く事件には、ギルド内の人間が関わっている可能性がある」
突然のこの言葉に、皆驚いたようにカズヤ以外の人間がイザークを見る。
「依頼の受理に口を出せる様な地位に居るのは、間違いないだろう。受付した者が、何故この依頼が受けられないのか腑に落ちないと言う表情だったからな。また、他にもギルドの推薦印を貰っている武具店が荒らされていると言う話もあるが……」
「そっちは、衛士が来てお仕事しているんだって。どう考えても、おかしいよね」
イザークの言葉を引き継ぎ、志希は肩を竦める。
その言葉に頷きながら、イザークは言葉を続ける。
「衛士の管轄は、国だ。その行動に干渉できるのは、王族や貴族である事は間違いないだろう」
「それじゃあ、ギルドの方は？」
ミリアの疑問に、イザークは一口茶を飲み喉を潤す。
「ギルドは、国の管轄外だ。だが、不正があればまずギルドマスタ

ーに一報入れる事になっている。ギルドマスターが腐っていなければ、必ず調査をする筈だ」
「確かに、そうね……でも、どうやって知らせるの？」
続けられたミリアの問いに、イザークは頭を振る。
「手段は知らない方が良いと、俺は言っておく」
イザークの言葉にミリアは不満そうな表情を浮かべるが、直ぐに頭を振る。
「そうね。知った所で、どうしようも無いでしょうしね」
「それじゃ、この先どうするの？」
志希は取り敢えず、話題を修正する為に問いかける。
このままミリアが突っ込んで質問するとは思えないが、アリアの方が色々と問いたそうにしているのが見えたからだ。
アリアは若干恨めしそうな表情を志希に向けるが、直ぐにイザークを見る。
あとでいくらでも話しを聞けると判断したからだ。
「取り敢えずは、店に来るであろうならず者対策でオレ達が交代でこの店に詰めた方が良いだろうな」
カズヤはそう言いながら、マティアスとヨルンを見る。
二人は驚いた表情を浮かべ、カズヤを見ている。
「依頼としてギルドを通す事は出来なかったと兄が言っているのだから、これ以上ボク達に関わるのは危険ではありませんか？」
ヨルンが困惑した表情で、カズヤに問いかける。
カズヤはヨルンとマティアスの表情に苦笑し、肩を竦める。
「まぁ、確かに危険かもしれねぇが……ほうっておくのも後味が悪いだろう。それに何より、親方推薦の腕のいい職人を見捨てる方が俺達にとっては不利益だって思えば良い」
な？　と、カズヤは笑いながら言う。
この言葉に納得できないと言う表情を浮かべる兄弟に、イザークが口を開く。
「何よりギルドが不正にかかわっている等と言う事が知られれば、

この国で活動している他のギルドにも飛び火してしまう。冒険者としては、それを避けたい」

「そうそう、オレ達の仕事に影響が出る訳なんだよ。今回の事件の様に貴族が関わっているのが分かっても、ギルドに責任を押し付けてくるとかあるからな。それをさせない為に、関わった冒険者は調査に動いたりもするんだわ」

カズヤとイザークの言葉に、マティアスとヨルンは何とも言えない表情を浮かべる。

それはそうだろう。何せ、二人が言っているのは国とギルドが対立しているというふうに聞こえるからだ。

その疑問を抱いた志希は、二人に問いかける。

「国とギルドって、仲悪かったっけ？」

志希の素朴な疑問に、カズヤが苦笑する。

「そんなには悪くない、筈だ。だが、国って言う組織に冒険者ギルドって言うよその組織が絡んでくるのは、元々ある組織には面白くねぇだろ？　最初、それでごたごたしたみたいだしな」

「無論、そのごたごたの後は住み分けが出来ている状態だ。冒険者ギルドは何でも屋、国の衛士は治安部隊と言う様にな」

「なるほどぉ」

カズヤとイザークの説明に志希はこくこくと頷き、納得する。

しかし、責任問題を押し付け合う可能性があると言うのは、何とも言えない気持ちになってしまう。

志希はそう思い、口をへの字型に曲げていると。

ミリアが苦笑しながら、確認をする。

「取り敢えず、今日から交代って事なのよね？」

イザークはミリアの問いに頷き、兄弟を見る。

この二人が要らないと言えば、イザーク達がやる気になっても手を引かざるを得ないからだ。

「……それでは、お願いします。私としても、この店を閉める気はありません。ご迷惑をおかけしますが、この店と私達を護ってくだ

さい。そして、何らかの解決をお願いいたします」
マティアスは腹をくくったのか、そう言って頭を下げる。
この言葉に全員で頷き、マティアスの依頼を受理する。
ヨルンはマティアスの言葉に驚くが、直ぐに表情を改め兄に倣って頭を下げる。
「ボクも、この店を護りたいのです。ここで頑張ってきたから、ここでこれからも頑張っていきたいんです！」
真剣なヨルンの言葉にカズヤは立ち上がり、仲間の顔を見ながら言う。
「オレ達も事件解決の為に頑張るぜ！　な！？」
カズヤの気合の入った言葉と声に、志希は思わず笑みを浮かべて頷く。
「もちろんです！　わたしも、精一杯お力になります！」
「わたしも、出来る限りの事をさせてもらうわ」
イザークは双子の言葉を聞いてから、お茶を飲み干し口を開く。
「では、今日からこちらに詰める事になるが……色々と調べるにしても店に人を残しておいたほうが良いだろう」
「んだな。店には二人か三人置いておいた方が良いと思うぜ。あと、情報収集は慣れている人間がした方が良いだろう」
カズヤとイザークはそう話しをしながら、女三人を見る。
情報収集が慣れていると言えば、イザークとカズヤの二人だ。
だがしかし、相手がならず者である事を考えれば、男が一緒に居た方が良いであろう事は明白だ。
志希の容姿は可愛らしすぎて迫力が乏しく、ミリアとアリアの二人は美人であるが故に侮られやすい。
むしろ、変な方向に発展するかもしれない。
「わたしとアリア、そして志希が留守番で良いわ。相手がイザークやカズヤ程の腕じゃなければ、武器が無くてもどうにでもなるから。それに、シキの長棍があれば相手を生捕りにも出来るでしょうしね」
ミリアはそう、雰囲気を読んで発言する。

「そうですよ。それに、身を守る為になら魔術を使って眠らせても麻痺をさせても良いんですから」
アリアも胸を張り、心配しなくて良いと笑う。
「だけどよ……」
カズヤが微妙な表情を浮かべて何かを言おうとすると、こんこんとノックが響く。
店舗に続く扉を一斉に見ると、扉が開いてカイが顔を出す。
いつの間にか、彼は部屋から出ていたようだ。
困惑した表情を浮かべたカイが、口を開く。
「あの……あんたらを訪ねて人が来てるんだけど」
カイの言葉にイザークは瞬きをしてから、頷く。
「俺が顔を合わせる、少し待っていてくれ」
それだけ告げて、イザークが扉を閉じて行ってしまう。
一体誰が来たのかと志希は扉を眺めていたが、カズヤが小さく咳払いをする。
志希は思わずカズヤを見ると、柔らかい笑みを浮かべてマティアスとヨルンに話しかける。
「取り敢えずマティアスさんとヨルンさん、椅子に座って待ってましょう。オレ達は貴方達の依頼を受ける事にしたんですから、もう依頼人ですよ」
カズヤの場を和ませる様な言葉に、二人は小さく微笑み椅子に座る。
二人は皆にお願いをする為に立ちっぱなしだったのを思い出し、志希は座る事を促しもせず放置していた事を恥じる。
依頼人にとんだ失礼をしてしまったと反省をしていると、イザークが戻ってきた。
しかも、後ろに人を連れて。
温和そうな表情を浮かべ、若干くたびれた感じのする服を着ている男性だ。
「うわ」

彼を見たカズヤが、小さく声を上げる。
それに気がついた男性は小さく会釈をして、マティアスとヨルンに顔を向ける。
「僕はギルド職員のデヴィと言います。今回、お話しをお聞きしたくて足を運ばせて頂きました」
人の良さそうな雰囲気がある男性は簡単に自己紹介し、マティアスとヨルンに用件を告げた。
この言葉に、ヨルンもマティアスも不快気な表情を浮かべる。
同じ様にアリアやミリアも不愉快な表情を浮かべ、口を開こうとするがカズヤが先んじる。
「二人とも気分が悪いだろうけど、いつからこんな事をされているのか話してやってくれないかな。あと、その前後にならず者ではない客とか商売人とか……とにかく、訪ねて来た人の話しも」
カズヤの突然の言葉に兄弟は怪訝そうな表情を浮かべるが、頷く。
「分かりました」
協力してくれると確約してくれたカズヤの言葉だからこそ、二人は不承不承ながら引き受ける。
この事に、デヴィと名乗ったギルド職員の男性は安堵した表情で頭を下げる。
「ありがとうございます。それではさっそくですが……」
と、志希の目から見て事情聴取としか思えない様なやり取りが始まった。

第六十九話

デヴィの質問攻めが終わった頃には、マティアスとヨルンの二人は大分疲れ果てていた。

その一方で、カズヤとイザークは思考を巡らせているのか腕を組んでいたり、目を閉じていたりする。

「分かりました、ありがとうございます。大分深くまで思い出していただきましたのでお疲れでしょうから、少々ご休憩なされると良いですよ」

デヴィのにこやかな言葉に、マティアスとヨルンは頷き立ち上がる。

「申し訳ありませんが、私達は部屋で少し休んでいます。みなさんは、お好きにくつろいでいてください」

マティアスはそう告げて、ヨルンを促して部屋を出て行く。

それを見送ってから、志希は口を開く。

「ええっと、話しを纏めると。最近ここと同じ様に武器と防具を取り扱う店が出来て、その店主がマティアスさんとヨルンさんを雇おうと交渉して来ていた。これは間違いないんだよね？」

志希の問いかけに、頷くイザーク。

「でも、それは半年以上も前の話でしょう？　今の事件と、何の関係が？」

アリアの疑問に、小さく息を吐いてデヴィが口を開く。

「恐らく、この店だけではなく他の店にも色々と何かちょっかいをかけていたのでしょうね。色々と試した結果、こちらのお店の立地条件等に目をつけたと言ったところですね」

断言する様な言葉に、志月は思わずデヴィを見る。

彼は先程までひどく印象の薄い、人の良さそうな表情であった。

だがしかし、今はその印象をがらりと違えていた。

まるで抜き身の刃の様な、鋭い眼差しと皮肉気に釣り上がった口

元が酷く印象的だ。
　先程と百八十度違うその表情に志希が思わず二度見している間に、カズヤが口を開く。
「その微妙なですます調はやめろよ。すげぇ違和感で気持ちが悪いんだよ」
　カズヤの親しげな言葉に、志希と双子は彼を見る。
　三人のその態度にデヴィはふっと笑い、イザークとカズヤをちらりと見て肩を竦める。
「なんだ、全く話をしていないのか」
　口調まで変わったデヴィに志希は思わずまじまじと彼を見る。
「当たり前だ。まさか、お前が来るとは思わなかったからな」
「それはそうか。まぁ……アレを見せられたら、おれが来るのは当然だろうと予想もできそうだがな」
　デヴィはイザークの言葉にそう答え、志希に視線を移す。
「お嬢ちゃんの言う通り、雇うつもりでいた事は間違いなかろう。そして、ギルド推薦印を持つ店に節操無く雇用の話しを持って行ったのも間違いなさそうだな」
「んだなぁ……どこも応じなかったからこそ、立地的に一番潰しやすそうなこの店に目をつけたって感じだろうな」
　カズヤの言葉にデヴィが頷きつつ、しかしと言葉を続ける。
「その店を調べるのと同時に、絡んでいるであろうギルド職員と貴族の洗い出しをしないといけないな。ギルド職員はもちろん、貴族のやっている事はあからさまな不正だ。衛士の活動に干渉し、あまつさえ材料となる鉱石などの卸を一店だけ規制するとは馬鹿な事をする物だ」
　嘲笑するように鼻で笑い、デヴィはすっかり温くなったお茶に手を着ける。
「こちらでも動くつもりだが……」
「ああ、たのむ。おれのやる事が多すぎて、手が回らねぇかもしれんからな。定期的に分かった情報を交換していこうぜ」

すっかりガラの悪くなったデヴィはそう言って、にやりとイザークに笑いかける。
イザークはいつも通りの表情で頷き、カズヤを見る。
「情報交換は何処でする？　この店にまた足を運ぶのか、それとも……」
「外で頼むぜ。お前らの取ってる宿でも良いし、ギルドの鑑定所でも良い」
「了解。流石に、何度もここに足を運んだら目立つからな」
被害店にギルド職員が何度も足を運ぶのは、何か調べているからと宣伝している様な物だ。
それくらいなら、外で少し会った方が相手の目を誤魔化しやすいという選択だった。
「さて、今回は比較的楽そうな仕事になりそうだ。イザークとカズヤが帰って来て早々、別嬪さんを引きつれていたのにはびっくりしたけどな」
デヴィはにやにやと笑いながら、カズヤとイザークにそんな事を告げて立ち上がる。
「良いじゃねぇか、気があって仲間になったんだからよ」
「カズヤは分かるが、イザークが珍しいって言ってんだよ。こいつ女でも男でも、よっぽど気に入らないと長く組まねぇからよ」
デヴィの言葉に、イザークは少しだけ眉を潜める。
「寄り掛かる事を前提として近づいた訳ではないからな、この三人は」
イザークの言葉に、へぇっと声を上げてデヴィはミリア、アリア、志希を見回す。
「双子の嬢ちゃんが訳有りなのは、おれも知ってるが……この白い嬢ちゃんは何でだ？　見るからに冒険者になってから年季が浅いのが分かる。やる気があるにしても、初心者を手元に置いて育てるなんざカズヤ以来じゃねぇか」
デヴィの突っ込んだ言葉に、ミリアとアリアは見るからに硬直し

てしまう。
しかし、イザークは関係ないとばかりに手を振る。
「お前も随分と、好奇心が旺盛になったものだな」
答える気はないと言外に告げ、イザークはやや剣呑な光を帯びた目でデヴィを見る。
それを見た彼はおお怖い、と笑い持ってきていた鞄を手に取る。
「まぁ、確かに俺には関係ねぇが……お偉方が興味持ってんだよ。その嬢ちゃんだろ？　初心者でフェイリアスの無理難題を解決したのは」
デヴィの言葉に、志希は思わずうんざりとした表情を浮かべる。
一月以上前の事が、まだ言われるのか。
そんな内心を露わした表情にデヴィはくつくつと笑っていたが、表情を真剣なものに改める。
「こっちのお偉いさん方が、手元に置いて密偵として育てたいから来たら教えろってうるせぇンだよ。まぁ、冒険者ギルドがそうそう冒険者を売るって事はしねぇけどな。だけど、用心だけはしておけ。白いのもそうだが、双子の方もだ。事情を知っている一部が暗殺を一時計画していた事もある」
デヴィの言葉に驚愕を露わにするのは、ミリアとアリアだ。
「ど、どういう事ですか！？」
アリアが喰ってかかると、デヴィは真剣な表情で口を開く。
「元公爵姫の双子が、冒険者をやっているっていうのはギルドマスターたちは知っている。無論、エルシル神殿の上層部もな。その上で、元聖女の方は偉いのに印をつけられているんだ……闇に堕ちる前に処分をした方が良いと言う意見もあったんだよ」
「バカじゃねぇのか！」
カズヤが思わず、デヴィに怒鳴ってしまう。
デヴィはその言葉に顔を顰め、手を振る。
「おれじゃねぇって。お偉方の話だ。まぁ、それにしても短絡的だけどな。だがまぁ、エルシル神殿が元聖女の処分を拒否した上に、

公表するぞとギルド幹部を脅したもんだから無かった事になった。
だが、どのギルドも元聖女の動向には気を張っている」
「わたしは、決して堕ちません。打ち勝つ為に、わたしは……！」
声を荒げかけ、ミリアは拳を握って自制する。
デヴィに何を言った所で、彼の言うお偉方には伝わらないからだ。
そんな中、志希がしみじみと呟く。
「ミリアは聖女なんだから、殺したら暫く凶作が続いたよ。エルシル神の嘆きで」
この言葉に、デヴィはぎょっとした表情を浮かべて志希を見る。
「聖女の有無は、神に寵愛されているかどうかって言う物だよ。人がどうこう言っても、ミリアに何か印があっても聖女である事は変わらない。人が神の意思を無視して聖女を害すれば、必ず天罰が下る。そのギルドの人達は、エルシル神殿のおかげで命拾いしたね」
真剣な志希の言葉に、デヴィが何かを言おうとするが言葉が出ない。
何らかの圧迫を感じているかのような表情を浮かべ、志希を見ている。
それはそうである。
志希は、少々腹を立てているのだ。
自分の事を胡散臭く言われるのは良いのだが、ミリアを辱める様な事を平気で言われるのは頭に来る。
仲間であるし、何よりも彼女は今努力をして闇に抗っている最中だ。
それを踏みにじる様な事を言うギルド上層部と、それをミリアの気持を考えずに言うデヴィに対して怒りを覚えていたのである。
それに呼応して、精霊達もまたデヴィに対して敵意を向け始めていた。
イザークはそれに気がついたのか、嘆息を零す。
「シキ」
低い声音が名前を呼び、落ち着けと窘める。

これに気がついた志希はあっと口元を押さえ、怒られるのを待つ子供の様な表情を浮かべる。

「……まぁ、お前らの連れが一癖も二癖あるのは良く分かった」

圧迫感から解放されたデヴィは疲れた様な表情を浮かべ、再び椅子に腰を下ろす。

「デヴィはギルドマスター直属の密偵だからな、事情がある人間の事を知っているのは当たり前だ。それを知らないミリアやシキ、アリアは不快な思いをしただろうけど勘弁してやってくれ。これも、こいつの仕事の内だからよ」

カズヤの取りなす様な言葉に、デヴィは肩を竦める。

「如何感じるかは人それぞれ。それに、おれは基本的に公爵姫の聖女がこの国で闇に堕ちさえしなけりゃいいだけだしな。闇に堕ちた時には、おれらが刈り取る役目を命じられるんでね」

そう言いながら、デヴィは椅子から立ち上がりイザークとカズヤを見る。

「そんじゃ、少しばかり長居しちまったな。余計な事も喋っちまった気がするが……まぁいいか。取り敢えず明日までに何か分かる様に調べておくからよ、お前らも頼んだぜ」

ひらりと手を振り、デヴィは部屋を出て行く。

いつまでもここで雑談をしていても、埒が明かないと判断したのだろう。

その通りではあるが、志希は何となく面白くないといった感情を持ってしまう。

「あいつ、相変わらずだなぁ」

苦笑交じりの声音は、若干呆れを含んでいる。

志希は思わずカズヤをじろりと見ると、彼の表情が複雑そうな笑みに変わる。

「口は悪いが、あいつは良い奴なんだ。何せ、ミリアとアリアがどう思われているかなんて本当は教える必要なんかないからよ」

この言葉に、志希とミリアは目を瞠る。

密偵であると言うのであれば、いつか殺すかもしれない相手に自分が殺しに行くなどとは言わない。
「あいつなりの忠告だ。あまり、嫌ってやるな」
イザークの言葉に志希は頷き、深く息を吐く。
「でも、何であんな言い方なのかな」
「殺すかもしれない人に、良い人ぶりたいと思わないのではないかしら」
志希の呟きに、ミリアが答える。
「誠実であろうとしている、と言う事ですね。姉さん」
アリアは納得したように頷き、志希は何とも言えない表情を浮かべる。
ミリアの言う通りであればひねくれた人だと言う事しか言えないし、違った場合どういう目的があるのか分からない。
だが、少なくともイザークやカズヤとは面識があり、友人の様に軽口を叩きあえる仲である事を考えれば、嫌な人ではないのだろう。
だがそれでも、志希は思ってしまう。
「複雑な人だなぁ」
思った事がつい口から零れ落ちた事に気が付き、志希は慌てて口を閉じる。
「その通りだな」
ほんの少しだけ、イザークが柔らかな声で同意する。
志希は思わず赤くなり、俯いて既にからの湯呑を手にしていじくりまわす。
正直、恥ずかしい。
志希のそんな姿にアリアとミリアが優しく微笑みながら見つめているのがまた、志希の羞恥心を煽る。
この状態を抜け出す為、志希は真っ赤な顔をしながら口を開く。
「取り敢えずさ、デヴィさんが来る前まで話していた形でお店でお留守番する組と情報収集する組に分かれて行動した方が良いと思うの！」

正論を言って、取り敢えずこの場を乗り切ろうと言う魂胆である志希。
「然りだな」
イザークは頷き、立ち上がる。
部屋に立てかけて置いた大剣を背負い、身支度を始める。
カズヤは志希の魂胆に気が付いてはいるが、肩を竦めるだけで突っ込まず椅子から立ち上がる。
「それじゃ、オレら行ってくるわ。多分嫌がらせする奴らが来ると思うが、油断しないようにな。本当は男が居た方が良いと思うんだが……仕方ねぇよなぁ」
はぁ、とカズヤはため息をつきつつミリア、志希、アリアを見回して注意を促す。
「分かっています。危害を加えられる前に、眠らせてしまいます」
アリアは胸を張って言い、ミリアが苦笑しながら頷く。
「カズヤとイザークの方も、気をつけてね」
「分かってるさ」
カズヤは頷き、手早く身支度を終える。
既に身支度を終えていたイザークと顔を合わせて頷き、二人は外へと出て行った。

第七十話

情報収集を終えて帰ってきたカズヤとイザークを交えて改めて話をした結果、志希達はそのままマティアスの護衛を継続する事になった。

何せ情報収集が得意なのはカズヤとイザークで、志希やアリア、ミリアの女性組三人はその辺りに疎かったのだ。

さらに、志希は見た目が幼くて相手になめられる。

そしてミリアとアリアは美人で、なおかつ公爵姫であった事に由来する気品を持っているが為、情報収集には不向きなのだ。

この事から、交代しての護衛ではなく完全な役割分担をした方が良いとなったのであった。

「んじゃま、今日もオレらが行ってくるけどよ……本当に女ばっかりで大丈夫か？」

と、カズヤが物凄く心配そうに問いかける。

「大丈夫よ。わたしの剣の腕は良く分かっているでしょう？」

「そうですよ、カズヤさん。それに、姉さんが気を引いている間に魔術で寝かせる事も出来るのですから、安心して行ってください」

笑顔のミリアとアリアの言葉に、それでもカズヤは心配そうだ。

玄関先でのこのやり取りは、志希達が護衛だけをすると決まってから何度かされている物だ。

カズヤが心配性だと思いつつ、美人姉妹に囲まれているカズヤの姿に微妙な表情を浮かべる志希。

ちなみに、一緒に玄関先に居る子供たちは胡乱とした目でカズヤを見ている。

この子供たちはマティアスの所で作業を手伝ったり、弟子入りしている子供たちだ。

彼等は元々は孤児で、カイを頭に集団でスリや窃盗をしていたそうだ。

こちらの世界には、孤児院は驚くほど少ない。
また、何故か孤児院に入れるのは顔の良い子供か頭の良い子供だけらしいので、それ以外の子供はみな捨て置かれているのだ。
ご飯を食べれないが為に盗みをしていたのを、マティアスとヨルンが声をかけて仕事を与え、自身の技術を教えて更生させているのだ。
職人になればある程度の仕事には困らないし、冒険者になるのであれば武具の目利きや手入れが重要になる。
武器や包丁など刃物を研ぐ技術があれば、田舎であれば重宝されてそのまま住みつくことも可能なのだ。
手に職を付ける、と言う事は生きて行く上で重要な物なのである。
今回、カイを筆頭に子供達がマティアスやヨルンの役に立ちたいと言う事で、子供達も情報収集に出かける事になったのだ。
もちろん、危ない事はしないと約束させている。
元々は裏の道を生きていた子供達だけに、その辺りは強かだろう。
「カズヤさん、良いから行こうぜ。あんまり遅くなると、あいつら今日の仕事に行っちまう」
カイがそうカズヤに声をかけ、イザークを見上げる。
子供達の中でも、イザークが一番だと言う認識があるのだろう。
カズヤよりイザークに従っている子供が多い。
「ああ……じゃ、留守番頼んだぜ」
「うん、イザークとカズヤも気をつけてね」
志希はそう声をかけ、手を振る。
心配そうな表情を浮かべて出て行くカズヤを見送りつつ、ミリアが息を吐く。
「カズヤが心配するのは、分かるのよね。ここ数日、全く来る様子が無いんですもの」
ミリアの言葉に、こくりと志希は頷く。
マティアス達の話によれば、日を開けずにならず者達が来ていた。
だと言うのに、志希達が店を訪ねて来た日からぱたりと音沙汰が

途絶えたのだ。
「不気味ですよね。音沙汰がない……何か、良からぬ事をしでかしそうです」
アリアの呟きに志希は同意しつつ、風の精霊達からの声に耳を傾けている。
店の護衛をするようになってから、志希は精霊達にお願いして周辺の警戒をしていた。
この店に敵意を向ける人間が居れば、教えて欲しいと条件付けをしているので人が通りかかるたびに精霊が騒ぐと言う事は無い。
「まぁ、大丈夫だよ。一応いつものお願いしてるし」
志希はそう二人に告げ、からりと笑う。
「……まぁ、よっぽどの事はしてこないわよね。王都の中だし」
ミリアもそう笑い、まだ心配そうな表情を浮かべているアリアの背中をポンと叩く。
「もう、能天気ですね」
嘆息交じりにアリアは言いながら、玄関にカギをかけて部屋へと上がる。
女性三人の寝泊まり用にと一部屋を開けてくれたヨルンは、現在マティアスと一緒に寝起きしている。
二人は早朝から起きて、それぞれ作業をしていた。
マティアスは仕入れてとり置きをしていた布で、クロースアーマーの製作をしている。
ヨルンは鍛冶場の掃除をしたり、道具の手入れをしている。
女性三人は特に気にしていなかったが、マティアスとヨルンは女性が長期で滞在するのが初めてなので、身の置き所が無いので仕事場に籠っているのだ。
そんな事とは露知らず、志希達は仕事熱心な人達だと感心している。
彼等が仕事場から出てくるのは、食事やお手洗いなどの書用事がある時くらいである。

護衛する方としては、ある意味楽だ。
そんな事を思いつつ、食事に使った食器を洗う志希。
詰めている間は共同生活なので、家事等の分担をしているのである。
買い出し等はイザーク達がして来てくれるので、特に心配はない。
一日中家の中に籠っている様な物なので、かなり運動不足になりそうなのが気になる所ではある。
思わずため息を吐くと、志希はパッと顔を上げる。
手早く腕に着いた泡を洗い流し、手拭いで拭いてから寛いだ様子を見せているミリアとアリアに声をかける。
「来たよ。なんか、前より人数増えてるっぽい」
「分かった。わたし、二人に部屋から出てこないで鍵をかけて置いてもらうように指示しておくわね」
「わたしも、知らせてきます！」
ミリアとアリアも立ち上がり、それぞれ作業場の方へと向かう。
志希は長棍を持って店に降り、念の為に裏口に上位魔術の鍵をかけて置く。
上位魔術の鍵をかけられた扉は術者か、解呪の魔術や設定されたキーワードを唱えなければ開く事は無い。
魔術により強化された扉はかなりの硬度を持つので、そこいらの武器で壊す事も難しくなる。
それを狙って、後ろからの奇襲を防ぐのだ。
店の表、本来であれば客が入って来る入り口を前にして志希は長棍を片手に立つ。
その時、再び精霊達が志希にならず者たちの行動を教えに来てくれた。
「な……バカなの！？」
思わず声を荒げ、次いで精霊達に謝罪する。
声を荒げた事で怒られたと思った精霊達が、一斉に泣きながら謝ってきたからだ。

必死でそれを宥め、志希は指示を出す。
外に布陣したならず者たちは、驚くべき事に放火しようとしていたらしい
城下町と言うだけあって、この街の建物は結構密集している。
武具店であるこの店はそれでも他の建物と距離をとる様にして立っているが、風が吹けば火が隣家に燃え移る可能性もある。
また、放火はどこの国でも重罪だ。
下手をすれば死罪を言い渡される可能性だってあると言うのに、外の者たちはそんな事も考えていないのだろう。
志希は取り敢えず、奥に怒鳴る。
「外に出るから、中お願い！」
驚く双子の声が聞こえるが、構ってなどいられない。
志希は外に飛び出て、精霊達が導く裏路地に飛び込む。
やや小汚い格好をした男達が一か所にたまり、店の壁面の前に立っている。
志希が飛び込んできた事に驚いた表情を浮かべ、手にしている武器を構える事もしていなかった。
好機と取って見た志希は長棍の端を、男の胴に叩きつける。
「ぐあ！」
悲鳴を上げた男は崩れ落ち、びくびくと体を震わせている。
志希はそれに目もくれず、襲撃だと気が付いた男達に奇襲をかけて行く。
「なんだ？」
「おいっ！」
「うわぁ！」
男達の混乱した声を聞きながら、志希は長棍を着実に相手に叩きつけ無力化していく。
長棍の持つ、相手を痺れさせると言う効果に感謝をしつつ男達の壁の向こうに積み上げられた藁を目視する。
それはもう火が付いたのか、赤い炎を立ち上げていた。

「おい、撤退……」
「火の精霊よ、炎を消して！」
男達の撤退の合図の前に、志希の言葉が響く。
火の精霊は志希に従い、藁についていた炎が一瞬にして消える。
志希を止めようとする男の腹を長棍で殴りつけ、志希は次いで精霊に指示を出す。
「水の精霊よ、藁を濡らして！」
志希の言葉に応え、水の精霊がとぷんと音を立てて水を生みだし藁にかける。
これで、壁面に詰まれた藁は使い物にならなくなった。
ほんの少しだけ安堵して、長棍を構えて志希はならず者たちを睨みつける。
男たちは志希が精霊使いである事に青ざめ、しかしにやりと笑う。
「くそ、反対側にもおれたちの仲間がいる。これで終わったと……」
「終わったに決まっているでしょう？」
勝利宣言をしようとしていたらしい男の声を遮って、彼等の背後からミリアが現れる。
その手には長剣が握られており、白い法衣に血痕が付着している。
「向こうはもう、制圧したわよ？　後、中に入れない様に鍵も掛けたし」
ミリアはそう言いながら、志希に目配せをする。
志希はそのミリアの言葉にほっと安堵の表情を見せ、少しだけ距離を開ける。
ミリアもまた、男たちの退路を断ちながら若干の距離を置いて立っている。
「何だ、偉そうなことを言いながらかかってこないのか、えぇ？」
「所詮女と子供だからな、奇襲でもかけなきゃオレらに勝てねぇって分かってんだろ？」
ニヤニヤと笑いながら、男たちは言う。
「謝れば、許してやるぜお嬢ちゃん達？　もちろん、そっちの色っ

ぽい姉ちゃんには俺達に色々と付き合ってもらうけどなぁ」
下品な笑い声を上げながら、男たちは舐めるようにミリアを見る。
法衣を着ていても、ミリアが女性として魅力的な肢体をしているのは分かる。
しかし、志希としては物凄く面白くない。
体の育ち方がミリアに負けているのは理解しているし、こんな奴らに好意を持たれたいとも思わない。
だがしかし、それをわざわざ目の前で態度に出す男たちは気に入らない。
思わず額に青筋を浮かべ、志希は長棍の先を地面に叩きつけて口を開く。
「油断大敵って言葉、知ってる？」
志希の言葉と同時に地面から土で出来た手が伸び、男たちの足を拘束する。
「うわ、何だこれ！？」
「こいつ、精霊使いか！？」
驚いた声の主は、今さら志希が精霊使いだと気が付いたようだ。
「気が付くの、遅い！」
そう怒鳴りつけて、長棍を構えて唇の端を釣り上げる。
可愛らしい顔なのに、般若もかくやと言う表情を浮かべて志希は男たちを睥睨する。
「誰から気絶させようかな……」
うふふと笑いながら志希が呟く。
男達は変な迫力を醸し出す志希の姿に若干腰が引けたのか、後ずさろうとして足が動かず、転んでしまう。
そこに、追い打ちをかけるように。
「安らかなる眠りを誘う霧よ」
と言う、アリアの声が響く。
男たちにまとわりつく様に、突然現れた霧。
彼等はそれを目にすると同時に意識を失い、地面に倒れこんでし

まう。
　それを見て志希は不満そうに眉を潜めると、ミリアが苦笑を浮かべる。
「シキ、そんな表情をしないの」
「シキさん、腹を立てる気持ちはよく分かります。ですから、そんなに不満そうにしないでください」
　ミリアの後ろからアリアが現れ、宥めながら手に持っている大量の縄を示す。
「……分かってるよぅ」
　志希は唇をとがらせながら答え、アリアから縄を数本受け取りならず者達の手と足を拘束していく。
　意識を失っているならず者達をアリアと二人で浮遊の魔術をかけて店内に運び入れ、どうするかと三人で顔を合わせる。
　今だ意識を失っているので、店内は静かだ。
「……取り敢えず、衛士の人を呼ぶ方が良いよね」
「だけど、来てくれるかしら？」
　志希の提案に、アリアが懸念を示す。
「この区画じゃなく、隣かその向こうの区画の衛士を呼びましょう。もしかしたら、そちらまで手が回っていないかもしれないし」
　ミリアの言葉に、アリアは難しい表情を浮かべる。
「ですが……もし手が回っていたら？」
「心配は分かるけれど、いつまでも転がしてなんて置けないわ」
　ミリアがそう言うと、志希が手を上げる。
「事情を話すのは連れて来てから、にしたら？　幸い外の藁とかはそのまんまだし、証拠として保全しておけばいいよ。さっきのあいつらとのやり取りは、近所の人が見てた筈だし」
　志希のこの言葉に、風の精霊達は確かに目撃していた人がいると教えてくれる。
「保全、と言っても……」
「知らせてみないと分からない訳なんだし、動かないとだめだよ。

受け身でいると、付け入られるかもしれないしさ」
言い募る志希の言葉に二人は眉根を寄せて考えるように目を伏せるが、ミリアが頷く。
「そうね。不確定な事をいつまでもグダグダ言っていてもはじまらないし、物事も進まないわ。思い切って、シキの案で行ってみましょう」
「……そうですね」
嘆息を零し、手詰まりだとアリアも同意する。
「それじゃ、私がひとっ走り行ってくるね。また襲撃があったらアレだから、風の精霊が室内で風を吹かせたら合図だと思って」
志希はそう二人に言ってから、長棍を手にして店から駆け出て行く。
どれ位離れた所から区画が変わっているのか全く分からない訳だが、適当に離れた所の衛士なら良いだろうと楽観的に考えている。
すると。
「おい、嬢ちゃん。あんた、仕事中じゃなかったのか？」
と、道の途中でデヴィと行きあった。
「あ、丁度良かった！　ええっと、区画が変わったら衛士の人の命令とかもちょっとは変わりますよね？」
志希はデヴィに前置き無しで問いかけると、彼は若干面食らった表情を浮かべるが、直ぐににやりと笑って頷く。
「ああ、そうだな。ちなみに、あの店は割と区画の境目くらいだからもう一つ、隣の区画に行って衛士を呼んだ方が良い」
「了解です！　と言いたいんですけど、区画がちょっと分からなくて……」
苦笑しながら志希が言うと、デヴィはむっと小さく唸る。
志希はその表情を見て、どうしようと困り果てた表情を浮かべる。
デヴィはギルドマスターの密偵である以上、あまり正体を知られる訳にはいかないだろう。
それに何より、今回の事件はギルド職員が不正を働いている可能

性があるのだ。
もしその人物に繋がる様な人にこの現場を見られれば、デヴィが色々と疑われてしまいかねない。
そうなった場合、彼の仕事は物凄くやり辛くなる事は想像に難くない。
「あの、すいません……頑張って探します」
志希が肩を落として言うと、デヴィは困った表情を浮かべて頷く。
「すまんな。案内までは、流石に無理だからよ」
「分かってます」
志希は悄然と頷き、彼に背中を向けようとすると。
「ちょっと待て。区画の目印は分からんだろうけど、衛士隊長が今日見回りをしている筈だ。しかも、物凄いやる気に溢れたやつでな。こいつなら、例え区画が違うと言われても絶対にお前の助けになってくれる。目印は、鎧の左胸に刻印されている王国印章だ」
そう言って、デヴィは詳しくその特徴を教えてくれた。
一般衛士の場合、印章には線が入っていない。
しかし、衛士班長には紋章の下に線が一つ、衛士隊長には線が二つ入っているのだそうだ。
それを目当てに探せばいいと言われ、志希は頷く。
「分かりました、ありがとうございます！」
志希は頭をぺこりと下げ、デヴィに手を振って駆け出す。
その間に、志希は思考だけで精霊達に教えてもらった王国印章をつけた鎧の人物、しかも町中を歩いている人を探してもらっていた。
すると、速攻で風の精霊が教えてくれた。
走りながら風の精霊が示す道を走り、志希は衛士隊長と言う人物を探す。
間近になった瞬間、志希は石に躓いて思いっきり体勢を崩す。
「わわわ！」
転ぶのを避ける為に必死で足を前に出していると、硬い金属に顔から突っ込んでしまった。

あまりの痛さに顔を押さえ、声にならない悲鳴を上げる志希。
「だ、大丈夫か？」
金属の持ち主らしき男性が声をかけて来て、志希はやっと前を見る。
痛みで気が付かなかったが、転ばない様に体を支えてくれている男性は鎧を着ていた。
そして、その男性の左胸の辺りにはデヴィから教えてもらった王国印章と、その下に二本の線が刻まれていた。

第七十一話

志希は引きつった表情を浮かべつつ、目の前で物凄く気合を入れて衛士達の指揮をとる男性を眺める。
デヴィの言う通り、やる気に溢れている。
物凄く溢れすぎて、暑苦しく感じる志希。
しかし、今まさにマティアスの店からならず者達を引き取ってくれているので、文句は言えない。
衛士が来てくれたと言う事でマティアスとヨルンが店の中から顔を出すと、それに気が付いたらしい隊長は兜を脱ぎ二人の前に駆け寄る。
「ここの店主であられるか？」
やけに丁寧な物腰で、男性が声をかける。
金髪に碧眼で、若干彫の深い深い顔立ちの男性はどこか気品がある。
「は、はい」
突然声をかけられたので動揺しつつマティアスが頷くと、男性は頭を下げる。
「同じ衛士として、あなた方に謝罪いたします。本当に申し訳ない」
「え、いえ……こうして動いてくだされば、私達からは何も」
マティアスは思わずそう答え、ヨルンが若干胡乱とした目で兄を見る。
「いえ、そう言う訳には参りません。このたびの事は私から大隊長の方へと報告いたしますので、二度と同じ事が起きないと約束いたします」
マティアスの甘い言葉にきっぱりと隊長は言い切り、顔を上げて兄弟を見る。
兄弟よりも背が高い隊長は優しげな笑みを浮かべ、口を開く。
「今回の事だけではなく、このならず者達から背後関係をしっかり

と洗いだしますのでご安心ください。私、エリック・アルフォードの名前で誓います」

この言葉にマティアスは目を丸くし、ヨルンは口を開けてしまう。

「い、いえそんな……！」

慌てたヨルンの声は裏返っていて、志希は何事かと彼等を思わず見てしまう。

焦った表情を浮かべるヨルンと、呆然とした表情を浮かべるマティアス。

志希は首を傾げて眺めていると、エリックと名乗った衛士隊長がマティアスに語りかける。

「こちらの店はかなり腕が良いと評判を聞いています。そのようなお店がいわれの無い暴力を受けている等、見過ごす事はできません」

そう言ってから、彼はちらりと志希とミリア、アリアを見る。

何か用事があるのかと志希は首を傾げて見ていると、やおら眦を釣り上げてエリックは言う。

「それに、幼い子供や女性を危険な目に合わせる等私にはできません」

どこか批難を含む言葉に、志希は思わず手を振る。

「いえいえ！　私、冒険者で成人してますから！」

志希の言葉にエリックは驚きに目を瞠り、志希をまじまじと見る。

「驚きの所悪いけど、シキは成人済みよ。ちょっと亜人の血を引いているみたいで成長が遅かったり目色が変わっているだけよ」

ミリアもそうフォローしながら苦笑する。

「わたしはエルシル神の神官戦士のミリア」

「わたしは、塔の学院に所属する魔術師のアリアです」

双子はそう言って、志希の隣に並ぶ。

「シキは精霊使いだし、護身用に長棍も扱えるわ」

「わたし達は、シキさんに助けられたことたくさんあるんですから。見た目で判断するのはやめてください」

ミリアとアリアの反論に、エリックはむっと唸る。

志希はミリアとアリアの言葉に感激しつつ、エリックに胸を張る。
「冒険者だから、護衛をさせて欲しいってこちらから言い出したんです。最初、マティアスさん達は乗り気じゃなかったんですから」
だから、マティアス達を責めるなと言外に告げる志希。
エリックはその意味を読みとったのか、そうかと険しい表情を緩める。
「そもそも、この様な事になったのは衛士達が働かなかったのが原因でしたね。それなのに、この様な事言うとは私もまだまだ未熟」
うむ、とエリックは頷きマティアス達にもう一度頭を下げる。
「貴方達を侮辱する様な事を言って申し訳ない」
「い、いえ……」
マティアス達は力なく苦笑し、頭を振る。
実は、マティアスやヨルンは女性陣をあまりあてにしていなかった。
警護出来る、とは言うがどう見ても一番強そうなのはイザークで、その彼が情報収集に出て行っている。
カズヤは盗賊だが、かなりの腕を持っている様に見える。
一方で女性達の方は、戦えるとはあまり思えなかったのだ。
ミリアはエルシルの神官戦士だとは言うが、神官としての位の方が高く見えるのと気品が滲み出ているので戦士には見えなかった。
志希は見た目と言動が幼く感じるし、他のみなよりも華奢である為どうして連れているのかが分からない程であった。
女性達の中で、唯一当てにできるとしたら塔の学院に所属している魔術師であるアリアだけだろうと思っていたのである。
ところが、蓋を開けてみれば誰よりも早くならず者達の気配を察知し、志希は外へと飛び出て行った上に一人でならず者達の半分近くを倒して気絶させてしまった。
アリアは姉のミリアを囮に使って壁の反対側に居たならず者達を魔術で寝かせ、その後拘束した。
ミリアは囮となった際に、鞘をつけた長剣でならず者達をいなし

ていたのだ。
見た目で判断すると、痛い目にあうと言う見本の様であった。
マティアスとヨルンも彼女達を見た目で判断していたので、エリックの謝罪を素直に受け取るのは流石に難しいのである。
だが、エリックはそんなマティアス達の内心など全く頓着せず、直ぐにミリア、アリア、志希の三人の前へと足を運び頭を下げる。
「侮辱してしまい、申し訳ない」
暑苦しい性格をしているが誠実なのであろう行動に、ミリアはにこりと笑う。
「いいえ、分かってくれればいいんです」
ミリアはそう言って、志希をちらりと見る。
志希はミリアに頷き、感謝の笑みを浮かべる。
見た目が幼いのは、相手に侮りを抱かせる。
それ故、志希が何を言っても相手は無意識で見下したり、本当の事だと聞きいれたりしづらくなってしまうのだ。
なので、見た目から大人であるミリアとアリアが色々とフォローしてくれたのである。
「取り敢えず、彼らの取り調べをしっかりとしてくださいね」
志希はそう言って、顔を上げたエリックに言う。
「もちろんです。それが私達衛士の仕事ですから」
己の仕事を誇っているのか、胸を張り自信満々にエリックが応える。
見た限り貴族と言った物腰をしているのに、庶民の相手が多いこの仕事を誇っている事に志希は感心する。
貴族は基本、騎士等を目指す。
それからはぐれてしまった者は、あまり真面目に働かず腐るのが多いという印象があった。
しかし、エリックのやる気と熱さは衛士と言う仕事が好きなのだろうと感じさせる。
暑苦しさはマイナスだが、その仕事への情熱は好感を抱かせた。

「隊長、準備できました！」
部下の一人らしき衛士が敬礼しながら、エリックに報告する。
「そうか、ご苦労。手伝わなくてすまんな」
「いえいえ、気にしないで良いっすよ。それじゃ、連れて行きます」
「ああ、私も直ぐに後を追う」
部下の衛士が軽口をたたきつつ会釈し、縄で繋がれたならず者達を連行しに行く。
やけに軽いやり取りに目を白黒させるミリアとアリアにエリックは生真面目な表情を浮かべて会釈をして、マティアスとヨルンにここを巡回すると言うむねを告げて足早に去っていった。
「はぁ～……良い人なんだろうけど、暑苦しい人だったねぇ」
志希は思わず呟く。
「本当ねぇ」
「でも、間違いなく貴族の方ですよね。アルフォードって家名でしょうし」
エリックとその部下達が立ち去った方向を見ながら、ミリアとアリアは頷く。
それを聞きつけたヨルンは苦笑する。
「ああ、皆さんはこちらに来たばっかりでしたね。あの方、エリック・アルフォード様は衛士の隊長をやっていますが伯爵家の三番目にお生まれになった男子です」
「へぇ。でも、何で衛士？」
志希は思わずヨルン問いかけるが、彼も分からないのでさぁと肩を竦める。
「珍しいわね。貴族の三男と言えば騎士や文官を目指す事の方が多いのに、衛士なんて」
ミリアはそう言いつつ、店の方を向いて歩きだす。
「確かに、そうですね。貴族の方で、衛士関係のお仕事につくのってかなり珍しいですよね」
ミリアの後に続きながら、アリアも頷く。

「たまに、こういうのはあるんですよ。でも、大概衛士の仕事をそれほど真面目にしてくれないと評判がたっちゃうんですけどね」
「へぇ。それじゃ、エリックさんは好きでこの仕事に就いたのかな？　凄く真面目な勤務態度みたいだし」
「多分、そうだと思いますよ。エリックさんが来てから、だらしない衛士達がしゃきっとして働くようになったと評判ですし」
「あら、それじゃ隊長としてかなり優秀なのかもしれないわね」
ヨルンの言葉に、志希やミリアは感心しながら店の中へと入る。
「隊の方も動きが機敏でしたから、部下を良く育てていらっしゃるのでしょうね」
アリアもまた、先程見たエリックの部下達を思い出しながら言う。
軽口は叩くが、仕事ぶりは隙など無くきびきびとした動きであった。
よく訓練されているからこその動きなのだろうと志希もうんうんと頷き、扉を閉めた。

第七十二話

三人がならず者達を叩きのめした日、経緯を聞いたカズヤは表情を引きつらせながらも今後の心配はいらないことを理解した。
その後数日間はならず者達が全く来なかった為、マティアスの店は平和そのものであった。
ある一点を除いて。
それは、今日も昼食後のお茶の時間に訪れた。
志希が精霊達に教えられて皆と雑談していた席を立つと、マティアスが苦笑しながら問いかける。
「また、いらっしゃったのかい？」
「みたいです」
志希は疲れた笑顔を浮かべ、店の表口へと向かう。
「イザーク達に言った方が、良いかしらね」
ミリアも若干疲れた表情を浮かべ、志希の後ろをついてくる。
「でも、イザーク達も疲れてるだろうし、手を煩わせるのもちょっと……」
「分からなくはないけど、流石に毎日は……」
二人で溜息を吐き、店の表玄関前に立って扉を開く。
そこには、部下を数人連れたエリックが立っていた。
「いつも扉に触る前に開くから、びっくりしてしまうよ」
そう言いながら、エリックは苦笑を浮かべる。
「あ……えーっと。それより、今日も様子を見にいらっしゃったんですか？」
志希は誤魔化すよう愛想笑いを浮かべ、話しを逸らす。
エリックは志希の問いかけに苦笑を消し、若干憂いた表情を浮かべる。
「その事で、話があるのだが……」
「それじゃ、ちょっと待っていてください。ミリア、ここお願い」

「分かったわ」
ミリアの返事に頷き、志希は踵を返して店の奥へと戻っていく。
誰かを中に上げるのは良いが、基本この家はマティアスとヨルンの物だ。
であれば、家主に了解を得るのが普通である。
それに、外ではしづらい話と言うことは、マティアス達に何らかの話しをしたいと言う可能性もあるのだ。
「マティアスさん、ヨルンさん。エリックさんが何か話があるそうなのですが……」
志希の言葉にマティアスとヨルンは驚いた表情を浮かべ、腰を浮かせる。
「わ、わかりました」
「僕達が下に降りれば良いでしょうか？」
そう問いかける二人に、志希は頭を振る。
「玄関先でする話では無い様子なので、上がってもらって良いです？」
「あ、ああ。もちろんだ」
「兄さん、僕は急いでお茶の用意をするから……」
にわかに慌て始める二人に、アリアが声をかける。
「お茶でしたら、わたしが淹れますのでお二人は此方で待っていてください。家主なんですから」
アリアの言葉に落ち着かない表情を浮かべ、二人は仕方がなさそうに椅子に座る。
その間に志希は踵を返し、急いで店の表口へと戻る。
表口にはミリアとエリック、そしてその部下達が雑談をしながら待っていた。
「エリックさん、上がってください」
「おお、ありがたい。お前達はここで待っていてくれ」
「は！」
「早めに帰ってきてくださいよ、隊長！」

「分かっている」
部下達の言葉に苦笑しながら頷き、エリックが志希に促されるまま中に入る。
ミリアと志希は部下達に会釈をしてから扉を閉め、エリックを奥へと案内した。
マティアスとヨルンは、エリックが部屋に入ってきたのに慌てて立ち上がる。
「いつも御苦労さまです、アルフォード隊長」
マティアスの言葉と同時に、ヨルンも頭を下げる。
「いや、気にしないで座ってください。それに、毎日こちらに足を運ぶのは当然のことですから」
エリックの言葉に、はぁとヨルンもマティアスも頷き椅子に座る。
志希はエリックが座る場所としてマティアスの真正面の椅子を引くと、彼は一瞬複雑な表情を浮かべてから礼を言う。
「ありがとう。では、失礼して座らせていただくよ」
そう言ってエリックが椅子に座り、マティアスとヨルンを見る。
志希は取り敢えず護衛らしくとマティアスとヨルンの斜め後ろに立つと、ミリアも隣に並ぶ。
アリアはマティアスとヨルン、そしてエリックの分のお茶を運んでからミリアの隣に立ちエリックが話し始めるのを待つ。
それを見たエリックは眉根を寄せ、渋い表情を浮かべて口を開く。
「君達は現在護衛をしていると言うのは分かるが、申し訳ないが椅子に座ってくれないか？　女性を立たせたままなのは、正直心苦しい」
唐突な言葉に、思わずきょとんとする女性陣。
何かあった時にはすぐにでも動けるようにするのが護衛のやるべき事だと、志希だけでは無くミリアやアリアもイザークに言われていた。
言われた事はもっともなので、志希達は己で考え行動していたのだ。

しかし、それをまさか女性と言う事で否定されるとは思わなかった志希。

ミリアとアリアは何やら苦笑し、ゆるく頭を振る。

「申し訳ありませんが、わたし達は冒険者です」

「平時であれば有り難く甘えますが、今はご容赦ください」

二人の淡々とした言葉に、エリックはやや困った表情を浮かべてなお言い募る。

「いや、今は私の部下達が外を護衛している。だから、君達は少し休憩をするといい」

この提案はどうか？　と、エリックは志希達の方では無くマティアスとヨルンを見る。

雇い主はこの二人なので、彼女達に言うよりも効果的であろうと思ったのであろう。

言われたマティアスとヨルンは成程、と頷き志希達を見る。

「アルフォード隊長の言う事ももっともですから、お三方も座りませんか？」

邪気のない笑顔に、三人は思わず何とも言えない表情を浮かべてしまう。

衛士隊長で、かなりマティアス達によくしてくれている事を考えれば従ってもデメリットがあるように思えない。

しかし、仕事をしている最中なのだからという気持ちもある。

「仕事中であるとは思うけれど、今は衛士の人達がいてくれるんだ。少し、休憩をしてくれないか？」

ヨルンの言葉にむぅッと志希は唇を尖らせ、志希は悩む。

すると、アリアが息を深く吐いて口を開く。

「ここでごねてもお話しが始まらないようですし、勧めに従いませんか？」

「……そうね」

溜息交じりにミリアはアリアに同意し、志希の背中をポンっと押す。

座るように促された志希はむぅッと小さく唸り、諦めた様に頷く。
何せエリックの表情が、目が、志希達が椅子に座らないと話をしないと語っていたからだ。
正直屈するのは嫌なのだが、依頼人からも勧められてしまえば固辞してしまうのも角が立つ。
ミリアとアリアに続き志希も渋々椅子に座ろうとして、自分達のお茶が無い事に気が付く。
どうせ座るのであれば、自分達もお茶を飲ませてもらおうと一つ頷く。
「すいません、ついでに私達の分のお茶も淹れてきます」
志希の言葉にヨルンがああと頷いてくれたので、志希はささっと台所へ行き残っていたお湯を使い手早く三人分のお茶を淹れる。
木製のトレイにカップを乗せ、志希はテーブルに戻りアリアとミリアの前にカップを置いて椅子に腰を下ろす。
それを見ていたエリックがお茶を一口飲み、一瞬驚いたような表情を浮かべてから目を細める。
その表情の変わり方からお茶に満足したのが伺え、アリアがほっとした表情を浮かべる。
エリックのお茶を入れたのはアリアなのだ。
マティアスとヨルンもお茶を飲み、緊張をほぐしてからエリックを見る。
「それで、アルフォード隊長。どの様なご用件で、当店に？」
マティアスがそう問いかけると、エリックはお茶の入ったカップをテーブルに置き真剣な表情へと変わる。
「実は、先日捕らえた者たちが言うにはこちらの店に嫌がらせをしたのは依頼を受けての事だったそうだ。依頼人の居場所等も白状したのだが……一足遅く、既に姿をくらませていた」
呻くようにエリックが言い、頭を下げる。
「あれだけ豪語したにもかかわらず、申し訳ない」
「い、いえいえ！　それで、毎日こちらに顔を出してくださると言

う事は、その依頼人がこちらに顔を出すのを考えての事でしょうか？」

マティアスの問いかけに、エリックは頷く。

「その通りです。先日の一件で衛士隊の内部でも様々な事柄が洗い出され、現在私がここと隣、先隣の区画の隊長を任されている状態になっております。一応目を光らせている状態ではありますが、何があるか分かりません」

エリックの言葉に、志希は上げそうになった声を飲み込む。

何せ、基本的に一区画一隊長が普通だ。

それが兼任する事になっている状態だと言う事は、エリックの本来の受け持ち以外の二区画の隊長がクビになったということだ。

今回の事があったにせよ、随分と大がかりな事になっているのは想像に難くない。

同じ様な事を思ったらしいミリアとアリアも、若干顔色が悪い。

そんな女性陣の事など気が付かず、エリックとマティアスは話しを続けている。

「それに、他にも様々なおかしな自体がこちらのお店には続いている様子。武具の材料である鉄や革、布が全く納品されていない。しかも、商人達のこちらの店の評価を聞いても特に悪い所は無い。だと言うのに、卸の商人達が寄りつかないのが何よりも不自然だ」

「そ、それは私も思っていました」

「理由が無いのに卸さない、等と通常ありえない。では、どうなっているかを調べるのが普通である筈なのにそれが全く調査された気配が無い。それでますますおかしいと、私は思っているのです」

エリックの言葉に、志希は思わず目を丸くする。

いっかいの衛士隊長が、どうしてそこまでの情報を得ているのか。

アルフォード伯爵家と言うのは、余程の力を持っている貴族なのか？　と志希は思わずまじまじとエリックを見る。

「そ、そんな所まで……」

マティアスはエリックが真剣に調べて来てくれている事に思わず

感動し、声を震わせ目に涙を溜めている。
志希達が来る前は孤立無援で、周囲が全く当てにならずどうして良いか分からない状態であった。
それが嘘の様に事態は動き、良い方向へと向かい始めている。
マティアスはその事に感激し、幸運の神マービスに思わず感謝の言葉を口にする。
志希もまた衛士の方向から情報が入って来るとは思わず驚いていたが、はっと顔を上げる。
精霊達がイザーク達が帰宅したが、店の前で衛士達に止められているのを教えてくれたのだ。
「ちょっと、失礼します」
志希はそう声をかけて、走って店の表口へと行く。
扉の向こうから、衛士と口論するカズヤの声が聞こえてくる。
「オレ達は、この店の人間に依頼されてるんだって！」
「だが、その風体は怪しい。入れる訳にはいかん」
「冒険者なんて、こんなもんだろう！？」
かなりイラついているらしいカズヤの声に、志希は慌てて店の扉を開く。
「待て、出るな！」
「シキ！　こいつら何とかしてくれ！」
扉を開けるなり衛士からの警告と、カズヤの困り果てた声音が響く。
疲れた表情を浮かべるカズヤと無表情だがどこか不機嫌そうなイザーク、その二人を体を張って止める衛士二人が志希を見る。
「すいません、私の仲間なんですが……何かしました？」
志希は一応、そう衛士に声をかける。
言われた衛士はカズヤの言っていた事は本当なのかと軽く目を瞠り、次いで頭を振る。
「いえ、これは失礼しました。どうぞ」
衛士が改まった態度で頭を下げ、道を空ける。

憮然とした表情のカズヤと、目を細めて警戒しているイザークがそこを通って店の中へと入る。
無表情だがピリピリとした空気を纏うイザークに、志希は内心悲鳴を上げつつ声をかける。
「随分と早かったね……」
「目処が付いたからな。それより、何かあったのか？」
やけに厳重な警備をしている事に不審そうに問いかけてくるイザークに、志希は思わず視線を彷徨わせる。
それを見たイザークの片眉が跳ね上がり、威圧感の様な物が増す。
志希は慌てて手を振り、何も無いとジェスチャーしながら言う。
「ええっと、先日ならず者達を連行してくれた衛士隊長さんが来てくれてるだけなんだよ。なんか、話しがあるけど玄関先でするような話じゃないって言うからさ……中に上げてるの」
「ふうん……そんじゃ、オレらも話を聞くべきだな」
志希の言葉にカズヤは目を細め、にやりと笑いながら言う。
「わ、わかった。それじゃ、先に戻って……」
「良い、俺達も行くぞ」
「おうよ」
そう言って、カズヤとイザークが先に立って奥へとすたすたと向かってしまう。
「あっ、待って！」
志希は二人の後を追って行く。
先頭のカズヤが扉を開くと同時に、複数の椅子が動く音が聞こえた。
「カズヤさん、イザークさんお帰りなさい！　今、お茶を淹れてきますね！」
「お帰りなさい。今丁度、衛士隊長さんのお話しを聞いてたところなの」
アリアとミリアが柔らかく声をかけるのが聞こえて来たので、志希はほっと安堵の息を吐く。

このまま何事も無くカズヤとイザークはエリックと顔を合わせ、話しが進むのだろうと思えたからだ。

だが、それは志希の早とちりでしかなかった。

部屋に入ったイザークは足を止め、エリックを見る。

エリックは何やら警戒した表情を浮かべ、イザークを睨みつけるようにして見ている。

その二人の目があった瞬間、空気がびりっと音を立てた気がした志希であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7729l/

神無の鳥

2011年11月6日12時04分発行